書類從

第拾八輯

東京

續群書類從完成會

群書類從第拾八輯目次

日記部

卷第三百二十
和泉式部日記……一
卷第三百二十一
紫式部日記上……三二
同　下……五八
卷第三百二十二
讃岐典侍日記上……八四
同　下……一〇二
卷第三百二十三
辨内侍日記上……一二七
同　下……一六一
卷第三百二十四
中務内侍日記……一八九
卷第三百二十五
堯孝法印日記……二三二
玄與日記……二四五
卷第三百三十六
宗長手記上……二五六
同　下……二九三

紀行部

卷第三卷二十七
土左日記……貫之　三二八
卷第三百二十八
いほぬし……增基　三四八
さらしな日記……孝標女　三六一
卷第三百二十九
高倉院嚴嶋御幸記……通親　四〇四
卷第三百三十
後鳥羽院熊野御幸記……定家　四一九

海道記……光行　四三一
南海流浪記……道範　四六八
卷第三百三十一
東關紀行……親行　四七七
うたゝねの記……阿佛　四九四
卷第三百三十二
いさよひの日記……阿佛　五一〇
都のつと……宗久　五二九
卷第三百三十三
小島のくちすさみ……良基　五四一
住吉詣……義詮　五五四
道ゆきぶり……貞世　五五六
鹿苑殿嚴嶋詣記……同　五七三
卷第三百三十四卷
なくさめ草……正徹　五八三
伊勢紀行……堯孝　五九五
第三百三十五
富士紀行……雅世　六〇一
覽富士記……堯孝　六〇八
富士御覽日記……　六一八
富士歷覽記……雅康　六二一
卷第三百三十六
善光寺紀行……堯惠　六二七
ふち河の記……兼良　六三一
正廣日記……　六四二
平安紀行……持資　六四七
筑紫道記……宗祇　六五一
卷第三百三十七
北國紀行……堯惠　六六九
廻國雜記……道興　六七八
卷第三百三十八
高野參詣日記……實隆　七一六
吉野詣記……公條　七二三
九州道の記……玄旨　七三八
九州のみちの記……勝俊　七五〇
卷第三百三十九

あつまの道の記……堯海　七五八

むさし野の記行……氏康　七六三

東國陣道記……玄旨　七六五

蒲生氏郷紀行……七六一

東路の津登……宗長　七七〇

紹巴富士見道記……七八三

卷第四百四十

東國紀行……宗牧　八〇二

群書類從第拾八輯目次終

群書類従巻第三百二十

撿挍保己一集

日記部一

和泉式部日記

夢よりもはかなき世中を歎きつゝ。明し暮す程に。はかなくて（長保二）四月十日あまりにもなりぬれは。このしたくらかりもていく。はしのかたを眺むれは。ついひちのうへの草のあをやかなるも。ことに人はめとゝめぬを。あはれに眺むる程に。ちかきすいかいのもとに。人のけはひのすれは。誰にかと思ふほとに。さし出たるをみれは。故宮に（爲尊）さふらひしことねりわらはなりけり。あはれに物を思ふほとにきたれは。なとかいと久しう見えさりつる。とをさかる昔のなこりにはと思ふをなといはすれは。そのことゝさふらはては。なれ〳〵しきやうにやとつゝましうさふらふうちに。日比山寺にまかりありき侍るになむ。いとたよりなくつれつれに候へしかは。御かはりに見まいらせむとて。帥の宮に（敦道）なむ參りて侍しと語れは。いとよき事にこそあなれ。其宮はいとあてにけちかうおはしますなるは。昔のやうにはえしもあらしなといへは。しかおはしませと。いとけちかうおはしましてまいるやとゝはせ給ふ。參りはへりと申侍つれは。これまいらせよ。いかゝ見給ふとて橘をとりいてたれは。昔の人のといはれて見るまいりなむ。いかゝきこえ

させんといへは。こと葉にきこえさせんもかたはらいたうて。なにかは。あた〳〵しくも聞えさせ給はさるを。はかなきこともと思ひて。

かほる香によそふるよりは郭公きかはや同し聲やまさると

さしいてたり。またはしにおはしましけるほとに。かのわらは。かくれのかたにけしきはみありけは。かくれのかたにて御覽しつけて。いかにそとゝはせたまふに。御文をさし出たれは。御覽して。

同しえになきつゝをりし郭公聲はかはらぬものとしらなん

とかゝせ給て。わらはに給はすとて。かゝる事人にいふな。すきかましきことのやうなりとて。いらせ給ひぬ。持てゆきたれは。おかしと見れと。つねにはとて御ふみはきこえす。たまはせそめて。またの日。

うちいてゝもありにし物を中々に苦しきまても歎くけふ哉

との給はせたり。もとの心ふかゝらぬ人の。ならはぬつれ〳〵のわりなくおもほゆるに。はかなきことなれと。めとまることなれは。御かへしきこゆ。

けふのまの心にかへて思ひやれ詠めつゝのみすくす月日を

かくしは〳〵のたまはするに。御返もときときこゆ。又つれ〳〵もすこしなくさむ心ちしてあるほとに。又御ふみあり。ことはなとこまやかにて。

語らはは慰む方もありやせんいふかひなくは思はさらなむ

あはれなる御ものかたりも聞えはや。しのひてくれにはいかゝとのたまはせたれは。

慰むときけは語らまほしけれとみの憂事にいふかひそなき

おひたる足にては。かひなくやと聞えつくれは。思ひかけぬに。忍ひていかんとおほして。晝よりさる御こゝちして。日比も御文とりつきてたてまつる。右近のさうなる人しつめて忍ひてめして。ものへいかんとのたまはすれ

は。さなめりとおもひてさふらふ。あやしき車にて。かくなんといはせ給へれは。女いとびなき心ちすれと。なしと聞ゆへきにもあらす。ひるも御返きこえさせつれは。ありなからは。さなからかへし奉らんもなさけなし。物はかりはきこえさせむとおもひて。にしのつまとにわらうた(圓座)さし出て入たてまつるに。世の人のいへはおほゆるにやあらむ。まことになへての御さまにはあらす。いとなまめかし。これも心つかひせられて。ものなと聞ゆるほとに。月さし出ぬ。いとあかし。ふるめかしうおくまりたるみなれは。かゝるところなとには居ならはぬを。いとはしたなきこゝちもするかな。そのおはする所にすへ給へ。よもさき〳〵見給ふらん人のやうにはあらしとの たまへは。あやし。こよひのみこそきこえさすなとおもひ侍れ。さき〳〵はいかてかはとはかなきことききこゆるほとに。夜もやう〳〵ふけぬ。かくてあかしつへきにやとて。

はかもなき夢をたにみて明しては何をか夏の夜語りにせむ

とのたまへは。かくなむ。

よと共にぬるとは袖を思ふみものとかに夢を見る宵そなき

まいてときこゆ。かろ〳〵しきありきなとすへきにもあらす。なさけなきやうに おほすとも。まことにものおそろしきまてこそおほゆなとのたまひて。やをらすへりいり給ひぬ。いとわりなきこゝちすれと。いふかひなきに。事ともをいひちきりて。あけぬれはかへり給ぬ。いまのまはいかゝとあやしくこそとて。

戀といへはよの常のとや思ふ覽今朝の心はたくひたになし

御返し。

よの常の事ともさらにおもほえす初て物をおもふみなれは

ときこえても。なをあやしかりける身かな。こはいかなる事そとあはれに。古宮のさはかり

のたまひしものをとかなしう思ひみたるゝほとに。れいのわらはきたり。御文あらむとおもふほとに。さもあらねは。心うしとおもふほとも。すき〳〵しや。かへりまいるに聞ゆ。

またましもかはかり社は有まし〔か〕思もかけぬけふの夕暮

宮御らんして。けにいとおしうもあるかなとおほせと。かゝる御ありきさらにせさせ給はす。北の方と。れいの人の中のやうにこそおはしまさねと。よことにいてんはあやしとおほしぬへし。故宮の（六月十三日）御はてまてはいたうそしられしとつゝむも。いとねんころにおほさぬにそ。くらき程にそ御返しありける。

ひたすらにまつ共いはゝ休らはて行へきものを妹か家路に

をろかにやおほしめすらんとおもふこそくるしけれとあれは。たゝなにかこゝにはとて。

かゝれとも覺束なくも思はへて是も昔のえにこそあるらめ

とおもひ給ふれは。なくさめすはたへんやは。

つゆをときこえたり。おはしまさんとおほしめせと。ひころに成ぬ。つこもりの日。女。

郭公よに隱れたる忍ひねをいつかはきかんけふしすきなは

ときこえさせたれと。人々あまたさふらふほとなれは。御らんせさせて（五月一日）つとめてもてまいりたるを見たまひて。

忍ひねはくるしきものを郭公こたかき聲をけふよりはきけ

とて。二三日ありてしのひてわたらせ給たり。女はものへまいらむとて。（精進）さうしなとしたるうちに。いとまとをなる御心さしのなきなめりかしと。なさけなからしとはかりにこそと見れは。ことに物なともきこえて。佛にことつけ奉りてあかしつ。つとめていとめつらかにあかしつるなとの給はせて。

いさやまたかゝる思を知ぬ哉あひてもあはて明るものとは

あさましとあり。さそあさましきさまにおほしつらんといとおしくて。

よと共に物思ふ人は夜とてもうちとけてめのあふ時もなし

めつらかにも覺え侍らすときこえつ。又の日けふやものに出給ふ。いつか歸り給へからん。いかにましておほつかなからんとあれは。

おりすきはさても社やめ五月雨の今宵菖蒲のねをやかけまし

とこそ思給へ。かへりぬへけれと聞えて。まうて〻。二三日はかりありてかへりたれは。宮よりいとおほつかなく成にけれは。まいりてとおもふを。いとこ〻ろうかりしにこそ。ものうくはつかしう覺えて。いとおろかに こそはおほされぬへけれ。日ころは。

つらけれと忘れやはする程ふれはいと戀しきにけふはまけ南

淺からぬ心のほとをさりともとあれは。

まくるともみえぬ物から玉葛とふ人すらもたえまかちにて

と聞えたり。宮れいの忍ひておはしましたり。をんなさしもやはと おもふうちに。日ころのをとなひにくるしうて。うちまとろ みたるほとに。かとた〻くをき〻とかむる人もなし。きこしめす事もあれは。人なとのあるにやとおほしめして。やをらかへらせ給ぬ。つとめて。

あけさりし槇の戸口に立なからつらき心のためしとそ見し

うきはこれにやと思にも。哀になんとあり。よへおはしましたりける なめりかし。心もなくね入にける哉と思ひて。

いかてかは槇の板戸もさし乍らつらき心のありなしをみん

をしはからせ 給ふへかめるこそ。みせたらはとあり。こよひもおはしまさまほしけれと。かかる御ありきを。人々もせいし聞ゆるを。内の[公季]大臣東宮[三條]なとのきこしめさん ことも。かたかろしきやうなりなと おほしつ〻むほとに。いとはるかなり。雨うちふりていとつれ〳〵なるころ。女はいと〻雲間なきなかめに。世中はいかに成ぬるならん とつきせすのみ なかめて。すき事する人々はあまたあめれと。た〻い

まもともかくも思はぬを。よの人は樣々いふへかめれと。身のあらはこそとのみ思ひてすくす。宮より。雨のつれ〳〵はいかゝとて。

おほかたにさみたるゝとや思ふらん君戀渡るけふの詠めを

とあれは。おりすぐい給はぬをおかしと見る。あはれなるおりしもとおもひて。

忍ふらん物ともしらてをのかたゝみをしる雨と思ひける哉

とかきて。かみのひとへをひき返して。

ふれはよのいとゝ憂身のしらるゝを今日の詠めに水増ら南

待遠にやと書すさひたるを御覽して。立返り。

何せんにみをさへ捨てんと思らん天か下には君のみやふる

たれもうきよをとあり。五月六日になりぬ。雨猶やます。ひとひの御返の。つねよりも物おもひたりしさまなりしをあはれとおほし出て。いたくふりあかしゝつとめて。こよひの雨のをとは。いとおとろ〳〵しかりつるをなと。まめやかにの給はせたるを。

よもすから何事をかはおもひつる窓うつ雨の音をきゝつゝ

かけも居(にイ)なからあやしきまてなむときこえさせたれは。なをいふかひなくはあらすかしとおほして。御かへし。

我もさそ思やりつる雨の音をさせるつまなき宿はいかにと

ひるつかた。水まさりたりときゝて。人々見るに。宮も御覽して。いまのほといかゝ。水みになんいてはへりつる。

大水のきしつきたるにくらふれと深き心はなをそまされる

さはしり給へりやとある。御返し。

今はよもきしもせしかし大水の深きこゝろは川と見せつゝ

かひなしやと聞えさせたり。おはしまさむとおほして。御火取なとめすほとに。侍從のめのとまうのほりて。出させおはしますはいつちそ。このこといみしう人々申すなるは。なにのやむことなき人にもあらす。めしつかはせおは(なイ)しまさんとおほしめさはかきりは。めしてこ

そ使はせおはしまさめ。輕々しき御みありき〔イナシ〕は猶いとみくるしき事。そか中にも。人々あまたいみしく通ふ所也。びなき事も いてまうてきなん。すへて〳〵よからぬとは。この右近のそうなにかしか初むるなり。故宮もこれこそはゐてありき奉りしか。よる夜中とありかせ給ふては。よき事やはある。かゝる御ありきの御供にありかん人々は。大殿〔道長〕に申さむ。世中はけふあすともしらすかはりぬへかめり。殿のおほしをきてし事ともある物を。よのありさま御覽しはつるまては。かゝる御ありきなくてこそおはしまさめなと聞え給へは。いつちかいかむ。つれ〳〵なれは。はかなきすさひ事なむとするにこそあれ。こと〳〵しう人のいふへきにもあらすとはかりの給はせむには。あやしくすけなき物にこそあれ。さるはいと口おしからぬ物にこそあめれ。よひてやをきたらましと思せと。さてもまして聞にくき事そあらんなと思し亂るゝほとに。おほつかなく成ぬ。辛うしておはして。あさましう心より外に覺束なくなるを。をろかになおほしそ。御あやまりとなん思ふ。かく參りくるをびなしと思ふ人々數多あるやうにきけは。いとおしくなん。おほかたもつゝましきうちにいとゝ程へぬると。まめやかに御物語し給ひて。いさ給へ。今宵はかり人もみぬ所あり。心のとかに物も聞えんとて。車をさしよせ給ひて。たゝのせにのせ給へは。われにもあらすのりても。人もこそきけと思ふ〳〵いけは。いたう夜ふけにけれは。しる人もなし。やをら人もなきらうのあるにさしよせて。おりさせ給ひぬ。月もいと明けれは。おりねと忍ひての給へは。さまあ〔あさまイ〕しきやうなれはおりぬ。さりや〔イニトシ〕人もみぬ所そかし。今よりもかやうに聞えさせむ。人なとも

あるおりにやと思へは。つゝましうてなむなと。物語あはれにし給ひ。明ぬれはくるまよせ給てのせ給て。御をくりにもまいるへけれと。あかう成ぬへけれは。ほかに有けると人のみむもあひなしとて。とまらせ給ぬ。女かへる道すから。あやしのありきや。いかに人思ふらんとおもへと。明ほのゝ御すかたの。なへてにはあらさりつる御さまもおもひいてられて。

よひことに返しはすれといかて猶曉おきは君になさせし

くるしかりけりとあれは。

朝露におくる思ひにくらふれはたゝに歸らん宵はまされり

さら〳〵にかゝる事きかし。夜さりは方ふたかりなり。御迎へに参らむとあれは。あなくるし。常にはなと思へと。れいの車にて おはしたり。さしよせて。はやはやとあれは。 さも見くるしき事かなと おもふ〳〵。ゐさり出てのりぬれは。よへのところにて 物かたりなとし給うへは。院の御方にわたらせ給ふとおほす。あけぬれは鳥のねつらきとの給はせて。やをらうちのせて おはしましぬれは。道すから。かやうならんおりはかならす〳〵との給はすれは。常にはいかてかときこゆ。おはしまして歸らせ給ぬ。しはしありて御ふみあり。けさはうかりつる鳥の音におとろかされてつらかりつれはころしつ。み給へとて鳥のはねにかきて。

ころしても猶あかぬ哉れぬ鳥の折ふししらぬ今朝の初聲

御返し。

いかゝとは我こそ思へ朝な〳〵なきゝかせつる鳥を殺せは

とおもひ たまふるを。とりのとかならぬにやとあり。二三日ほとありて 月いみしうあかき夜。はしに出ゐて見るほとに。 いかにそや。月は見たまふやとて。

我ことくおもひはいつや山のはの月にかけつゝなけく心を

れいのおりよりは おかしきうちにも。宮にて

月のあかゝりしに。ひとやみるらむとしのひたりし。おもひいたら〔てイ〕るゝほとに。ふと。

一夜見し月そと思へと詠れは心もゆかすめはそらにして

と聞えても。なを獨なかめゐたるほとに。はかなくてあけぬ。又の夜おはしましたりける。こなたにはきかす。かた〳〵に人のすむ所なりけれは。そなたに人の來りたる車を御覽して。人の侍にこそ。車侍りと聞ゆれは。よし歸りなんとておはしましぬ。人のいふは まことにこそとおほすもむつかしけれと。さすかにたえはてん物とはおほさゝりけれは文遣〔すイ〕せ。よへ參りたりとはかりは聞給けんや。それもえしり給はさりしにやとおもふこそいみしけれ。

松山に波高しとは見てしかと今日の詠めはたゝならぬかな

とあり。雨うちふる程也。あやしかりける事かな。人のそらことを聞えたりけるにやと思ひて。

君をこそ末の松とは思ひつれひとしなみには誰かこゆへき

ときこえつ。宮は一夜のことをなま心うくおほして。久しうの給はせて。かく。

つらしとも又戀しとも樣々に思ふ事こそたえせさりけり

御返はきこゆへき事なきにしもあらねと。わさとおほされんもはつかしくて。かくそ。

あふ事はとまれかくまれ歎かしを恨絶えせぬ中となりせは

と聞えさする。さてのちもまとをになん。月のあかき夜。うちふして。うら山しくもなとなかめらるれは。宮にかうそきこえける。

月をみてあれたる宿に詠むとは見にこぬ迄も誰につけよと

ひすまし童して。右近のそうにさしとらせて。きねとてやる。宮はお前に人々して 物語しておはしますほとなりけり。人まかて なとしていらせ給に。右近のそうさし出たれは。例の車にさうそくせさせよとて。おはします。女はしになかめて居たるほとに。人のいりくれは。すたれうち おろしてゐたれは。まことにめなれ

たる御様にはあらて。御なをしなとのいたうなれたるしもそおかしうみゆ。物もの給はて。たゝ御扇に文をさしいれさせ給て。御つかひのとくまかりにけれはとて。さしいれさせ給て。物聞えんにほと遠くてびなけれは。女あふきをさしいたしてとりつ。宮ものほりなんとおほしたり。せんさいのおかしきなかをありかせ給て。人は草葉の露なれやなとの給はす。いとなまめかし。ちかうよらせ給て。よひはまかり出なんとよ。誰に忍ひつるも見あらはしになん。あすは物忌といふなりつるに。なくはあやしとおもひなんとて。かへらせ給へは。

こゝろみに雨もふらなん宿過て浦行月の影やとまると

人のいふほとよりもこめきてあはれにおほさる。あかきみやとて。しはしのほらせたまひて。出給ふとて。

あちきなく雲井の月にさそはれて影こそいつれ心やはゆく

とておはしましぬる後すたれをあけて。有つる御文見れは。

我ゆへに月を詠むとつけつれはまことかと見に出てきにけり

とそあるを。うれしくおはしますかな。いかにいとあやしき物に。きこしめしたるへかめるに。きこしめしなをされにしかなと思ふ。宮もいふかひなからす。つれ〳〵の慰にはとおほさるゝ程に。ある人々の聞ゆるやう。この比は源少将なといますなり。昼ものし給なりといへは。或人ありて。兵部卿もおはすなるはなと口々に聞ゆるに。いとあは〳〵しうおほされて久しう御文もなし。ことねりわらはきたり。ひすましわらはは例に語へは。物なといひて。御文やあるといへは。さもあらす。一日おはしましたりしかと。みかとに車のありしを御覧して。御せうそこもなきにこそあめれ。人おはしましかよふやうにそきこしめしたりけれなと

いひていぬ。かくなんいふときゝて。いと〳〵おしく。なにやかやとわさと聞えさせ。わさとたのみきこえさする事こそなけれと。時々もかうおほしいてんほとはきこえさせかよはしてあらんとこそおもひつれ。事しもこそあれ。けしからぬことにつけても。かうおほされぬるとおもふも。いと心うくて。なそもかくとなけくほとに。御文あり。日比はあやしう亂り心地のなやましさになん。いつそやも參りて侍りしかと。折ふしあしうてのみかへれは。いと人けなきこゝちしてなむとて。

よしやよし今はうらみし礒に出てこき離れ行海人の小舟を

とあれと。あさましき事をきこしめしたなれは。はつかしけれは。きこえさせんもつれなけれと。此たひはかりはとて。

袖の浦にたゝわかやくとしほたれて船流したる蜑と社なれ

と聞えさせつ。さいふほとに七月にもなりぬ。七日に。すき事ともする人々のもとより。たなはたひこほしなといふことゝもあまたみゆれとめもたゝす。かゝるおりなと。宮のすくさすの給はせし物を。むけにわすれさせ給にけるかなとおもふほとにそ御文ある。みれはたゝ。

思ひきや七夕つめにみをなして天の河原をなかむへしとは

とあれは。さはいへと。なをえすくし給はさめりとおもふもおかしうて。

詠むらん空をたにみす棚機にいまるはかりの我みと思へは

とあるを御覽しても。猶えおほしすつましとおほすへし。つこもりかたになりて。いとおほつかなく成にけるを。なとか時々は人數に思しめされぬなめりかしとの給はせたれは。女。

ね覺ねはきかぬ成らん荻風はふかさらめやは秋のよな〳〵

と聞えたれは。たちかへり。あかきみやねさめねはな。物思ふときはこゝそ。をろかにもとて。

荻風はふかはいもねて今よりそ驚すかときくへかりける

かくて二三日有て。夕まくれに。思もかけぬに。にはかに御車をひきいれておりさせ給。ひるはまた見えまいらせねは。いとはつかしうおもへと。せむかたなうなるをなとの給はせて帰らせ給ぬ。そののち日比に成ぬるに。いとおほつかなきまてをともし給はねは。をんな。

徒然と秋の日比のふるまゝに思ひしらせぬあやしかりしも

むへ人はと聞えたりけれは。このほとに おほつかなく成にけれと。されと。

人はいさわれはわすれす日をふれと秋の夕暮ありしあふを

との給はせたり。あはれにはかなく。頼む人もあらす。かやうのはかなしことにて。世中を慰めてあるも。うちおもへはあさましう。かゝる程に八月にも成ぬれは。つれ／＼慰めんとて。いし山に詣てゝ。七日計あらんと思ひてまうてぬ。宮久しうも成ぬるかなとおほして。御文つかはすに。童一日まかりてさふらひしかと。石山になむ。此比はおはしますなると申さすれは。さはけふは暮ぬ。つとめてまかれとて。御文かゝせ給たまはりて石山にきたり。佛の御前にはあらて。故郷のみ戀しくて。かゝるありきもひきかへたるみの有様と思ふにいとものの悲しうてまめやかに佛を念し奉りてゐる程に。かうら（高欄）のしもの方に人のけはひのすれは。あやしうて見おろしたれは。この童なりけり。あはれに思ひかけぬ所にきたれは。なそとゝはすれは。御文をさし出たるも。例よりもふとひきあけられて見れはいと心深く入給ふにけるをなん。なとかかくともの給はさらん。絆まてこそ思されさらめ。をくらし給に心うきとて。

關越てけふそとふとや人はしる思ひたえせぬこゝろ遣ひを

いつか出給はんとするとあり。ちかうてたにおほつかなくものし給ふに。かくわさとたつね給つらんよとおかしうおほへて。

あふみちはわすれぬめりとみし程に關打越てとふ人はたれ

いつかはとの給はせたるは。おほろけに思たまへていりしかはとて。

山なからうみはこくとも都へはなにか打出の濱をみるへき

と聞えたる。御覽して。くるしうともまたいけとて給はせたり。とふ人とかあれは。あさましの御ものいひやとて。

尋ゆく逢坂山のかひもなくおほめくはかりわするへしやは

まことや。

うきによりひたやこもりと思ふとも近江の海は打出て見よ

うきたひことにとこそいふなれとの給はせたれは。たゝかく。

關山のせきとあられぬなみたこそ近江の海と流いつらめ

とて。はしに。

心みにをのか心もこゝろみむいさ都へときてさそひ見ん

とあり。思ひもかけぬに。いくものにもかなとおほせといかゝは。かゝるほとに出にけり。さそひ見よとありしかと。いそき出給にけれはなんとて。

あさましやのりの山ちに入そめて都へいさと誰さそひけん

御返にはたゝ。

山をいてゝくらき道にそたとりにし今一度のあふことにより

つこもりかたに。風いたう吹て野分たちて。雨なとふるに。つねよりも物こゝろほそうなかむるに。れいの御文あり。折しりかほにの給はせたるに。日ころのつみもゆるし聞えつへし。

なけきつゝ秋のみ空を詠れは雲うちさはき風そはけしき

かへり事。

秋風はけしきふくたに戀しきにかき曇る日はいふ方そなき

けにさそあらんかしと思せと。れいのほとへぬ。九月十よ日はかりの有明の月に御目さまして。いみしくひさしうも成にけるかな。あはれこの月はみるらんかしと思せは。例のわらは計を御ともにておはしまして。かとをたゝ

かせ給ふに目をさましてよろつをおもひつゝけふしたるほと也けり。すへて此比は折からにや。物心ほそう哀れに常よりもおほえてそなかめける。あやし。たれならむとおもひて。まへなる人を引おこしてことゝはせんとすれともとみにもおきす。からうしておきても。爰かしこ物にあたりさはく程に。たゝきやみぬ。歸りぬるにやあらん。いきたなしと思しぬらんこそ。物思はぬさまなれは。同し心にまたねさりけるかな。誰ならんと思ふ。からうしていてゝ。人はなかりけれは。そらみゝきゝおはさうして。夜のほとたになにとかまとはさるゝ。さはかしのとのゝおもとたちやと腹たちてまたねぬ。女はやかておきて。いみしうきりたる空を詠つゝ。あかく成ぬれは。此曉おきのほとの心におほゆる事ともを。はかなきものにかきつくるほとにそ。れいの御文ある。たゝ。

秋の夜の有明の月の入までにやすらひかねて歸りにし哉

いてやけに。いかに口おしきものに思されつらんと思ふよりも。なをおりふしすくし給はすかしと。誠に哀なる空のけしきを見たまひけると思ふに。いとおかしうて。この手習のやうにかきたるものをそ。御返のやうに曳結ひてたてまつる。風の音木のはの殘りあるましけに吹亂る。常よりも物あはれに覺ゆる。ことことしうかきくもる物から。たゝけしきはかり雨うちふるは。せむかたなく哀におほへて。

秋のうちに朽はてぬへくことはりの時雨に誰か袖をからまし

となけかしう思へと。しる人もなし。草木のいろさへ見しまゝにもあらす成もてゆく。しくれん程の久しさも。またきに覺ゆるに。風に心苦しけにうちなひきたるには。たゝ今もきえぬへきつゆの我みそあやしう。草葉につけてかなしきまゝに。奥にもいらて。やかてはしに

ふしたれは。つゆ年ふるへくもあらす。人のみなうちとけてねたるに。その事と思ひわくへくもあらねは。つくつくと目をのみさまして。なに心なう恨めしうのみ思ひふしたるほとに。鳫のはつかにうち啼たる。人はかうしも思はすやあらん。いみしうたへかたき心ちして。

まとろまてあはれ幾夜に成ぬらん只鳫金を聞わさにして

かくてのみあかさむよりはとて。つま戸をしあけたれは。おほそらににしにかたふきたる月の影。とをくすみ渡りてみゆるに。きりわたりたる空のけしき。かねのをと鳥の聲。ひとつにひゝきあひて。さらに過にしかたいまゆくするのことも。かゝるおりはあらしと袖のいろさへあはれにめつらかなり。

我ならぬ人もさそみん長月の晨明の月にしかしあはれは

たゝ今このことをうちたゝかする人のあらんに。いかにおほえん。いてやたれかかくてあかす人はあらむ。

よそにても同し心に在明の月をみるやと誰にとはまし

宮わたりにやきこえさせましとおもふに。おはしましたりけるよと思ふまゝにたてまつりたれは。うち見給ひて。かひなくはおはされねと。詠めゐたらんに。ふとやらむと思してつかはすに。女やかて眺め出してゐたるに。もてきたれはあへなき心ちして。ひきあけてみれは。

秋のうちはくちける物を人もさは我袖とのみ思ひける哉

消ぬへき露の命とおもはすは久しききくにかゝりやはせむ

まとろまて雲井の鳫の音を聞は心つからの業にそありける

我ならぬ人も有明の空をのみおなし心になかめけるかな

よそにても君計こそ月はみめと思てゆきしけさそくるしき

いとあけかたかりつるかとをこそとあるも。物きこえさせたるかひもあるこゝちすかし。かくてつこもりかたにそ御文ある。日比のおほつかなさなといひて。あやしき事なれと。忍ひて物いひつる人なむとをくいくなるを。哀

れといひつへからん事ひとついはむとなん思ふ。それよりの給事のみなん。さはおほ[ゆ]るを。ひとつとの給へり。あなしたりかほと思へと。さはえきこえしと申さむも。いとさかしけれは。のたまはせむ事はいかてかと計にて。

おしまるゝ涙にかけはとまらなん心もしらす秋はゆくとも

まめやかには。かたはらいたきことになむ侍るとてはしに。さても。

君をおきていつち行らん我たにも浮世中にしゐてこそふれ

とあれは。いとおもふやうなりと聞えさせむも。見しりかほなり。あまりそをしはかり給へるよのと侍めるは。

打すてゝ旅行人はさもあらはあれ又なきものに君し思はは

ありぬへくなんとの給はせたり。かくいふほとに。十月にも成ぬ。十よ日のほとにおはしましたり。おくはくらうておそろしけれは。はしちかううちふさせたまひて。あはれなる事のかきりをの給はするに。かひなくはあらす。見れは月のくもりてしくるゝほとなり。わさとあはれなるさまをつくり出たるやうなり。思みたるゝ程の心ちは。いとそゝろさむきや。宮御覧して。人のびなきにのみいふめる。あやしきわさかな。こゝにかくてあるよとあはれにおほされて。女のねたるやうにて。おもひみたれふしたるを。やゝおとろかし給ひて。

時雨にも露にもあらてぬたる夜はあやしくぬるゝ手枕の袖

との給はすれと。よろつに物のみわりなく覚ゆるに。御いらへ聞ゆへき心ちもせねは。物も聞えさせて。たゝ月の影に涙のおつるを哀と御覧して。なといらへはし給はぬ。はかなき事申侍るも。心つきなしと思しけるにこそとあれは。いかに侍るにか。心地のかき亂るやうにし侍る。耳にはとまらぬにも侍らすとて。よし心みさせ給へ。手枕の袖と云事忘るゝ折や侍

けると。たはふれことにいひなして。哀なりつるよのけしきも　かくのみいふ程に。ことにたのもしき人なともなきなめりかしと心くるしうおほえて。今のまいかゝとの給はせたる返事。

今朝のまは今はひぬらんゆめ計ぬると見えつる手枕の袖

と聞えたり。わすれしといひつるに。事をもいひたれは。おかしうおほして。

夢計なみたにぬると見つらめとほしそかねつる手枕のそて

よへの空のけしきのあはれにみえしは。所からにや。それより後心苦しうおほされて。しはしはおはしまして。有さまなと御覧しもていくに。よになれたる人にもあらす。只いと物はかなけにみゆるも。いと心苦しうおほされて。あはれに語らはせ給ふに。いとかくつれ／＼になかめさせ給ふらんを思をこたる事なけれと。只おはせかし。世中の人もいとひなけにいふ也。時々参り／＼れはにや。見ぬる事もなけれと。それも人のいときゝにくゝいふに。又たひたひ帰る程の心ちのわりなかりしも。人けなう覺えなとせしかは。いかにせましなと思ひなるおり／＼もあれと。ふるめかしき心なれはにや。聞えたらん事のいと哀に覺えてなむ。さりとて　かくの　みえ　参り　くましきを。誠にきく事有て。せいする事なとあらは。そらゆく月にもあらん。もしの給やうなるつれ／＼ならは。かしこにもおはしなんや。人はあれとひなかるへきにもあらす。もとよりかゝる筋につきたよりなき身なれはにや。人けなき所につゐゐなともせす。行ひなとする事たに。只獨りあれは。同し心に物語りなとも聞えてあらは。慰む事もや有と思ふ也との給へ思ふにも。けに今更にさやうにひなき有さまは。いかゝはせむと思ひて。一の宮の事も聞えきかてあるを。さりとて山のあなたにしるへする人も

なき程に。かくてすくすは明ぬよの心ちのみすれは。はかなきたはふれこともいふ人あまた有しかは。あやしきさまにのみそいふかめる。さりとてことさまのたのもしきかたもなし。なにかはさても心見ん。よし北方は（濟時卿女）おはすれと。たゝこと御かたにて。御めのとこそは萬の事すなれ。またけさうに色めかはこそあらめ。さるへきかくれなとにあらんには。なてう事かはあらんなと思て。此ぬれきぬは。さりともきやみなんをと思て。なに事も只我より外のとのみそ思給へつゝ。すくし侍る程のまきらはしには。かやうなるおり。たまさかにも。まちつけ聞えさするより外のこともなけれは。たゝいかにも侍れ。の給はせんまゝにと思給へれは。よそにても見苦しきものに聞えさすらむ。ましてまことなりと見侍らむそ。かたはらいたう侍らんと聞ゆれとそれは。こゝにこそ。とてもかくてもいはれめ。見くるしうはたれかみん。いとようかくれたる所つくりいてゝ。いまきこえんなとたのもしうの給はせて。夜ふかう出給ぬ。かうしもあけなからあり。よのつねはたゝひとりふしにていかゝせまし。さても人わらはれなる事やあらんと。さき〳〵におもひみたれて。ふしたる程に。御ふみあり。

露むすふ道のまに〳〵朝ほらけぬれてそきつる手枕のそて

このそての事をはかなき事なれと。おほしわすれてのたまはせたる。おかしうおほゆ。

道芝の露とおきぬる人よりも我手枕のそてはかはかす

其夜の月も。いみしうあかうすみて見ゆるを。爰よりもかしこにてもなかめ明して。またつとめて御ふみたまはせむとて。れいのわらは參りたりやととはせ給ふほとに。女もしものいと白きにおとろかされてにや。

手枕の袖にも霜は置けるをけさうちみれは白妙にして

ゝ聞えさせたり。ねたうせんせられぬるかな
とおほして。
つまこふとおきあかしつる霜なれは
とそうちの給はせたる。たゝ今そ人まいりた
れは。うたてあへきものかな。とくと思ひつる
にとて。御けしきあしうて給はせたれは。もて
いきて。またこれよりきこえさせ給はさりけ
る時よりめし侍けるを。今まで参らすとてさ
いなむなりとて。御文をとり出たり。よへの月
はいみしうあかゝりしものかなとて。
れぬるよの月はみるやとけさはしも起ゐてまてと問人もなし
けにかれよりの給はせけるとみゆるも。同し
心におかしうて。
まとろまて一夜詠し月みれとおきながらしも明し顔なる
ときこえさせ。このわらはのいかにさいなむ
らむとおくれは。おかしうて。はしに。
霜の上に朝日さすめり今は早打とけにけるけしき見せなん

いたうわひはへめりとあり。見給ひて。けさし
たりかほにおほしたりつるもいとにくし。此
わらはころしてはやとまてなんとて。
朝日さし今はきゆへき霜なれと打とけかたき空のけしきそ
とあれは。ころさせ給へるなることそとて。
君はこす偶々みゆる童をはいけともいはしとおもふか
と聞えさせ給へれは。うちわらはせ給ひて。
ことはりや今はころさしこの童忍ひのつまのいふ事により
まことか。手まくらの袖はわすれ給にけると
あれは。
人しれぬ心にかけてしのふをはわするとや思ふ手枕のそて
と聞えたれは。
物もいはてやみなましかは懸てたに思ひ出ましや手枕の袖
猶かくはおほしつとそある。かくて二三日を
ともせさせたまはす。たのもしけにの給はせ
しことゝもゝ。いかになりぬるにかと思ひつ
つくるに。いもねられす。めをさましてふした

るに。やう／＼あけぬらんかしとおもふに。門をうちたゝく。あなおほえなと思へと。とはすれは。宮の御文なりけり。おもひかけぬ程なるを。こゝろやゆきてとあはれにおほえて。妻戸をおしあけて見れは。

見るや君さようちふけて山端にくまなくすめる秋夜の月

かけはしうちなかめられて。常よりもあはれにおほゆ。かとをあけねはおほつかなう。つかひまちとをに覺ゆらんとて。

更ぬらんと思ふ物からねられねと中々なれは月はしも見す

とあるを。をしたかへたるくちつきをかくにしもあらすかしとおほす。いかてか近うて。かかるはかなしこともいはせてきかむと思したつ。二日はかりありて。女車のやうにて。やをらおはしましぬ。晝なとはまた御覽せられねは。恥かしけれと。様あしうはひかくるへきにもあらす。又の給はするやうもあらす。はち聞えさせてやあらんするとて。ゐさり出たり。日比のおほつかなさなとかたらはせ給て。しはしうちふさせ給て。このきこえさせしやうにはやおほしたて。かゝるありきのつねにうゐうゐしくおほゆるを。さりとてまいりこぬはいとおほつかなけれは。はかなき世中にくるしうとの給はすれは。ともかくもの給はせむにと思ひ給ふるに。見てもなけくといふことにこそ思給へ。わつらひぬれと聞ゆれは。よし心み給へ。しほやき衣にそあらんとの給ひて。出させ給ふ。まへちかきすいかいのもとに。おかしけなる まゆみのあるか。すこしもみちたるを御覽して。かうら（高欄）にをしかゝらせ給ひて。

ことのはふかくなりにけるかな

との給はすれは。

しら露のはかなくをくと見し程に

と聞えさするほと。なをなさけなからすとお

かしうおほさる。宮の御さまなといとめてたし。御なをしにて。えならすめてたき御ぞ。いたしうちきもし給へる。いとあらまほしけにみゆる。目さへあた〳〵しきにやとまて覺ゆ。又の日きのふの御氣しきのいとあさましとおほいたりしこそ。いと心うき物のあはれなりしかとのたまはせたれは。

葛城の神もさこそは思ひけめくめちにわたすはしたなき迄

わりなくこそはおもひたまへしかときこえさせたれは。たちかへり。

行のしるしもあらは葛城のはしたなしとてさてややみなん

なといひて。ありしよりはとき〳〵おはしましなとすれは。こよなくつれ〳〵もなくさむこゝちす。かくてある程に。よからぬ人々の文なとをこする。又身つからもたちさまよふにつけても。よしなきことのいてくるに。とく參りやしなましと思へと。猶つゝましくて。すかすかしうも思ひたゝす。霜のいと白きつとめて。

我うへは千鳥もつけしおほ鳥の羽にも霜はさやはたきける

ときこえさせたれは。

月も見てれにきといひし人の上にをきしもせしを大鳥のと

とのたまはせて。やかてくれにおはしましたり。この比の山の紅葉いかにおかしからん。いさゝせ給へ。見むとのたまはすれは。いとよく侍なりときこえて。その日になりて。けふは物忌にとちこめられてあれはなむ。いとくちおしう。これすくしてはかならすとの給はせたるに。その夜しくれ常よりも木々のこのは殘ありけもなくきこゆるに。めをさまして。風のまへなるとひとりごちて。みなちりぬらんかし。昨日みてとくちおしうおもひあかしたるつとめて。かれより。

神無月よにふりにたる時雨とやけふの詠めをあかす見る覽

扨はくちおしうこそとのたまはせたれは。

しくれかもなにゝぬれたる袂そと定めかれてそ我も詠むる
とて。まことや。
紅葉はゝ夜はの時雨にあらしかし昨日山へをみたらましかは
と有けるを御覧して。
そよやそよなとて山へをみさり劔けさは悔れと何のかひなし
とて。はしに。
あらしとは思ふ物から紅葉はのちりや殘れるいさ尋れ見ん
とのたまはせたれは。
移はぬ常盤の山も紅葉せはいさかしゆきてのと〳〵とみむ
をこならんかたにそ侍らむとて。ひとひおはしましたりしに。さはることありて。聞えさせぬそと申しをおほしいてゝ。
高瀬舟はや漕出よさはることさし歸りにしあしまわけたり
と聞えさせたるを。おほしわすれたるにや。
山へには車にのりて行へきをたかせの舟はいかゝよるへき
とあれは。
紅葉はのみにくる迄もちらさらは高瀬の舟のいかゝ焦れん
とて。その日も暮ぬ。おはしましたるに。こなたのふたかりたれは。れいのいとしのひてゐておはします。此ころは四十五日の御方たかへさせ給とて。御いとこの三位中將の家におはします。れいならぬ所にさへあれは。みくるしと聞ゆれと。しゐておはしまして。御車なから人もみぬくるまやとりに曳たてゝ入せ給ぬれは。おそろしう思ふに。人しつめてそおはしまして。御くるまにたてまつりて。よろつの事をのたまはせける。心えぬとのゐ人のおのこともそめくりありく。れいの右近のせうこのわらはなとそちかくさふらふ。あはれに物のおほさるゝまゝに。をろかなるさまは。過にし方さへくやしうおほしめさるゝもあなかちなり。あけぬれは。やかてゐておはしまして。人のおきぬさきにと急きかへらせ給。つとめて。
れぬるよのね覺の夢にならひてそ伏見の里をけさは起つる
御返し。

北夜より我身の上は知れねはすゝろにあらぬ旅寝をそする
なと聞ゆる。なにかはかくねんころにかたし
けなき御心さしを見しらす。心こはきさまに
もてなすへき事はさしもあらてなと思へは參
りなんと思たつ。まめやかなる事とて。いふ人
あれと耳にもたゝす。心うき身なれは。すくせ
にまかせてあらんと思にも。その宮仕よ。今更
にほいにもあらす。いはほの中こそすまゝほ
しけれ。又うき事もあらはいかゝせむ。いと心
なきさまにこそ思ひいはめ。なをかくてやす
きなまし。ちかくてたに親はらからの御あり
さまもみ聞えん。又ほたしのやう成人々の上
もみ定めむと思ひたちにたれは。あいなし。參
らん程までたに。ひなひにいらへ聞しめされ
し。ちかくてはさりとも御覽してんと思ひて。
すき事せし人々の文もなしとのみいはせて。
更に返事もせすのみあるほとに。御文あり。見
れは。さりともと頼みけるかをこなり。なと多
くの事の給はせて。よしたゝいはみかたとは
かりあるに。むねうちつふれてあさましう覺
ゆ。めつらかなるそら事とも。なといと多く出
てくれと。さはれなからん事はいかゝせむな
と覺えて。過しきぬるを。これはまめやかにの
給はせたれは。思ひたちける事ほの聞ける人
もあへかめるに。をこなるめをも見るへかめ
るかなと思ふに。かなしくて。御返聞ゆへきこと
も覺えす。又いか成事をきこしめしたるにか
と思ふに。はつかしうて御返事も聞えねは。有
つる事をはつかしと思ふなめりとおほして。
なとか御返も侍らぬ。されはよとこそおもほ
ゆれ。いとゝしくもかはる御心かな。人のいふ
事ありしかは。よもと思ひなから。思はましか
はとはかり聞えしそとあるに。むねすこしあ
きて。御氣色もゆかしくて。何事にかときかま

ほしくて。まことにかくもおほされはとて。

今の間に君きまさなん戀し迹なもあるものを我ゆかんやは

と聞えたれは。

君いまは名のたつことをおもひける人からかゝる心とそみる

これにさへ はらさへたちぬれとそある。かくわふるけしきを御覽して。たはふれせさせ給ふとはみれと。なをくるしうて。なをいとあやしうこそ侍れ。いかにもありて。御覽せさせまほしうこそと聞えさせたれは。

うたかはゝ又うらみしと思えとも心に心かなはさりけり

御返し。

うらむらん心はたゆるかきりなくたのむ君をそ我も疑ふ

なと聞えてあるほとに。暮ぬれは おはしましたり。なを人のいふ事あれは。よもとは思ひなから。聞えしに。かゝる事いはれしとおもひ給はゝ。いさときこゆるに。いさ給へかしなとのたまはせて。明ぬれは出させ給ぬ。かくのみたえすの給はすれと。おはします事はかたし。雨風なといたうふりふく日しも。をとつれさせ給はねは。人すくなゝる所の風の音おほしやらぬなめりかしと思ひて。くれつかたきこゆ。

霜かれはわひしかりけり秋風のふくには荻の音つれもしき

と聞えたれは。かれよりの たまはせたりける御文をみれは。いとおそろしけなる 風をいかかとなんあはれに。

かれはてゝ我よりほかにとふ人も嵐の風をいかゝきくらん

とおもひやりきこへることそいみしけれとそある。のたまはせけるを見るもおかしうて。所たかへたる御物いみにて。しのひたる 所におはしますとて。れいの御車あれは。いまはたゝともかくものたまはんにしたかひてとおもへは參りぬ。心のとかに御ものかたりおきふしきこえて。つれ〳〵もまきるれはそ。ましてまいりなまほしきに。御物忌すきぬれは。れいの所

に歸りて。けふはつねよりもなごり戀しうおもひ出られ。わりなう覺ゆれは。きこゆ。

つれ〳〵とけふかぞふれは年月に昨日そ物は思はさりける

御覽して。あはれとおほして。こゝにも。

思ふ事なくて過しゝおとゝひを昨日とけふになすよしも哉

とおもへと。かひなくなん。なをおほしたてとあれと。いとつゝましくて。する〳〵ともおもひたゝぬほとは。たゝうちなかめてのみあかしくらす。いろ〳〵見えし木のはものこりなく。空もあかうはれたるに。やう〳〵いりはつる日の影こゝろほそうみゆれは。れいのきこえ侍り。

なぐさむる君もありとはおもへとも猶夕くれは物そ悲しき

とあれは。

夕暮は誰もさのみそおもほゆるまちわふ君そ人にまされる

とおもふこそあはれなれ。たゝ今まいりこはやとあり。又の日のまたつとめて。霜のいとしろきに。さていまのまはいかゝとあれは。

おきながら明せる霜の朝こそまされる物はよになかりけれ

なときこえかはす。例のあはれなることなとかゝせ給ひて。

われひとりおもふは思ひかひもなしおなし心に君もあらなん

御返。

君は君我は我ともへたてねはこゝろこゝろにあらん物かは

かくて女。かぜにや。おどろ〳〵しうはあらねと。なやましうすれは。いかに〳〵とはせ給ふ。よろしう成てあるほとに。いかにそとゝはせ給たれは。すこしよろしうなりにて侍は。しはしいきて侍らはやと思給へつるにそ。つみふかう。さるは。

たえし比たえねと思ひし玉の緒を君により又おしまるゝ哉

とあれは。いと〳〵うれしき事かなとて。

玉の緒はたえんものかは契りてしなかき心に結ひこめてき

かくいふほとに。としも殘りなけれは。春たつ

かたとおもふ十一月ついたち比。雪のうちふるつとめて。
神代よりふりはてにける雪なれとけふはことにも珍しき哉
御返し。
初雪といつれの冬もみしまゝに珍しけなきみのみふりつゝ
なとゝ。かゝるよしなしことにあかしくらす。御文あり。おほつかなく成にけれは。まいりてとおもひつるを。人々ふみつくるめれはとなんの給はせたれは。
暇なみ君きまさすは我ゆかんふみつくるらん道をしらはや
おかしうおほして。
我宿に尋れてきませふみつくる道も教へんあひもみるへく
又常よりも霜のいとしろきに。いかゝ見るとの給はせたれは。
さゆるよの數かく鳴は我なれやいく朝霜を置てみつらん
その比雨なとのはけしけれは。
雪もふり雨も降ぬるこの比を朝しもとのみおきゐてはみる

その夜おはしまいて。れいの物はかなき御物かたりせさせ給て。もしかしこにゐてたてまつりて後。まろかほかにもゆき。法師にもなりなとして見えたてまつらすは。本意なきやうにやおほされすると心ほそうの給はするに又いかにおほし成ぬるにかあらん。またさやうなる事のいてきぬへきにやあらむと思ふに。いと哀にてうちなかれぬ。みそれたちたる雨[と欤]ののやかにふるほとになり。いさゝかまとろまて哀なる事ともを。此よのみならすの給はせける。思ひかけぬすちのましらひなりとあはれになに事もきこしめしうとまぬ御心さまなれは。心のほとも御覧せられんとておもひたつ。たゝかくてはほいのさまにも成ぬはかりそかしとおもふ。いとかなしうて。物もきこえてつくつくとなけくけしきを御覧して。
なをさりのあらましことに夜もすから

との給はせたれは。

おつるなみたは雨とこそふれ

御氣しきのれいよりもうかひたる事ともをの給はせて。明ぬれはおはしましぬ。なにのたのもしけなき事なれと。つれ〳〵もなくさめにおもひたちつることを。さらはいかにせましなとおもひみたれて聞ゆ。

現にて思へはいはんかたもなし今宵のことを夢になさはや

と思たまふれと。いかてかはとて。はしに。

しかはかり契りし物を定なきさはよの常におもひなせとや

くちおしくもやとあれは。御覧して。これよりこそまつとおもひつれと。

現とは思はさらなんねぬるよの夢に見えつるうき事ともを

思ひなさなん。あな心みしかや。

ほとしらぬ命計そさためなき契しことは住の江のまつ

あかきみや。さらにあらまし事にきこえし。人やりならぬ物わひしとてある。女はそのゝちもあはれにおほえて。なけきのみせらる。とく〳〵とていそきたちたゝましかはとおもふひるつかた。ある御文をみれは。

古今 あな戀しいまも見てしか山賤の垣ほにおふるやまと撫子

とそある。あな物くるしとうちいはれて御返。

伊勢物語 戀しくはきてもみよかし千早振神のいさむる道ならなくに

と申たれは。うちほゝゑませ給て御らんす。この比は御經ならはせ給けれは。

あふみちは神の諫にあられとも法の蓮にたれはたゝぬそ

御返し。

一之巻二 われさらは進みてゆかん君はたゝ法の蓮をひろむはかりそ

なと聞にさせつゝすくす。雪いたうふる日。ものゝ枝にふりかゝりたるにつけて。

雪ふれは木々の木のはも春ならておしなへ梅の花そ咲ける

なとの給はせたるに。おとろきなから。

梅は早咲にけりとておれはちる花とそ雪のふるは見えける

又の日。またつとめて。

冬のよはこひしきことに目もあはて衣かたしき明そしにける

御返事いてや。

冬のよはめさへ氷にとちられて明しかたきを明しけるかな

なといふほとにれいのつれ〳〵なくさめてくらすそはかなきや。いかにおほしめさるゝにかあらん。心細き事ともをの給はせて。なを世中にありはつましきにやとの給はせたれは。

くれ竹のよゝのふる事おもほゆる昔かたりは我のみそせんと聞えたれは。

呉竹のうきふししけき世中にあらしとそ思ふ暫しはかりもなとの給はせて。人しれすすへさせ給ふへき所なとも。をきてならはぬ人なれは。はしたなく思ふなめり。こゝにもたゝきゝにくゝそいはむ。たゝ我いきてゐてこむと思して。十二月十八日の月のよきほとに成にたるほとに。おはしましたり。例のいてさせたまへとの給はすれは。今宵はかりにこそあめとて。ひとりのれは。人ゐておはせかし。さりぬへくは。あすあさてものとやかに物語りきこえんとあれは。れいはかくもの給はせぬを。もしやかくとおほすへきにやとて。さりぬへき人一人ゐていく。例の所にはあらて。忍ひて。人とも具してゐよとせられたり。されはよと思ひて。なに事かはわさとしたてん。いかてかはまいらまし。いつ参りしそと中々人も思へかしと思ひて。明ぬれは。櫛の筥なととりにやる。宮参らせ給ふとて。しはしこなたのかうしなとあけす。おそろしき事にはあらねとむつかし。今かの北の方に渡しまいらせむ。こゝにはちかけれは。ゆるしけなしなとの給はすれは。おろしこめてみそかにきけは。ひるは人々院の殿上人なと参りあつまりて。いかにそかくては有ぬへしや。ちかおとりいかにせむと思ふこそ苦しけれとの給はすれは。それ

をなん思給へるときこゆる。笑はせ給て。まめやかにはよなと。あなたにあらん折は用意し給へ。けしからぬ者ともはのそきもそする。今しはしに成なは。晝なとはあのせしのあるかたにおはしておはせ。丸かひるある方は。人もよらすそなとの給はせて。二三日ありて。北の方のたいに渡らせ給へりけれは。人々驚きて。うへに申まいらすれは。かゝる事なくてたにあやしかりつるを。なにの高き人にもあらす。かくなとの給はせて。わさとおほせはこそ。忍ひてゐておはしたらめとおほすに。いと心つきなうておはすれは。例よりも物むつかしけに思ひておはすれは。いとおしうおほした。しはしは内にいらせ給ひて。人のいふ事もきゝにくし。人の御けしきもいとおしうて。こなたにおはします。しか〳〵の事あなるは。なとかの給はせぬ。せいし聞ゆへきにもあらす。いとかう身の人けなく。人笑はれに恥かしかるへき事となく〳〵聞え給ふれは。人使はむからに御覺えのなかるへき事かは。御氣色に從ひて中將なともにくけに思ひたるかむつかしきに。かしらなともけつらせんとてよひたるなり。こなたなとにもめし使はせ給へかしとあれは。いと心つきなくあれと物もの給はせす。かくて日比ふれは。やう〳〵さふらひつきて。晝も上に侍らひ御くしなと參り萬につかはせ給ふ。更に御まへもさけさせ給はぬ程に。うへなとも御方に渡らせ給ふ事も。たまさかに成もていく。おほし歎く事限りなし。としかへりて。正月一日に。院のはいらいに。おのこはら數をつくしてまいり給へるに。宮もおはしますを見れは。いと若ううつくしけにて。多くの人に勝れ給へり。これにつけても。我身はつかしう覺ゆるに。うへの御まへにも。女房たち出

ゐてものみるに。まつそれをは見て。此人をみむみむと穴をあけてみさはくそいとさまあしきや。暮ぬれは事はてゝ。宮も入せ給ぬ。御送りにかんたちへかすをつくして御遊ひなとあり。いとおかしきにも。つれ〳〵なりしふるさとまつ思ひ出らる。かくて侍ふほとに。けすなとの中にもむつかしき事をいふへかめるをきこしめして。かく人のおほしの給ふへきにも侍らす。うたてもあるかなと心つきなけれは。内にいらせ給ふ事いとゝまとをなり。かかるもいとかたはらいたう覚ゆれと。いかゝはせん。たゝともかくもしらて。もてなさせおはしまさんまゝに従ひてとてさふらふ。御北の方の御姉は。東宮（三條）の女御（娍子）にてさふらひ給か。更に物し給ふほとにて。御文あり。いかにぞ此此人のいふとあり。まことか我さへなん人けなう覚ゆる。夜のまにも渡り給へかしとあるに。かゝらぬ事をたに人はいふをましてとおほすに。いと心うくて。御返うけ給はりぬ。いつも思ふさまならぬ世中の。此比は見苦しきことさへ侍りてなん。あからさまに参り侍て。宮たちをも見参らせて。心も慰め侍らんとなん思ひ給ふるを。迎へに給はせよ。これよりはよも耳にもきゝいれ侍らしと思給へてなんと聞え給て。さるへき物なととりしたゝめ給て。むつかしき所なととり払はせ給ふ。しはしかこにあらん。かくてあれは。あちきなく此方にもえさし出給はぬも。苦しう覚え給ふらんにとの給に。人々いてあさましき世中の人のあさみ聞えさする事よ。参りけるも。おはしましてこそは迎へさせおはしましけれ。すへていと目もあやにこそ侍るなる。かのつほねに侍るなるへし。ひるも三度四度おはします也。いとよし。しはしこらしきこえ給へ。餘り物聞え

させおはしまさすなとにくみあへるに。御心にもいとむつかしう思召す。さはれ。苦しうもなし。ちかうたにもみきこえしとて。御迎へにと聞え給へれは。御せうとの君たち。女御殿の御迎へにまいらせたれは。さおほしたり。御めのとのさうしなるものとも。むつかしき物ともなと拂はするはときゝて。せんしかう／＼して渡らせおはしますなり。春宮のきかせおはしまさん事も侍り。おはしまいて。申慰めまいらせおはしませとさはくを見るも。いといとおしうくるしけれとも。ともかくもいふへき事にしあらねは。たゝきゝゐたり。かくきゝにくき所しはしまかてはやと思へと。それもうたてあるへけれは。たゝさふらふも。猶物思ひたゆましき身かなと思ふ。宮おはしませは。さりけなくておはす。まことにや。女御殿に渡り給ふときくは。なと車の事もの給はせぬとの給へは。なにかあれよりとあれはとて。ものもの給はす。宮のうへ御文かき。女御殿の御言葉さしも。あら／＼かきなしなめり。

右和泉式部日記以扶桑拾葉集挍合了

群書類従巻第三百二十一

日記部二

紫式部日記上

（寛弘五）秋のけはひの立まゝに。土御門殿の有さまいはんかたなくおかし。池のわたりの梢とも。遣水の邊の草村。をのかしゝ色つき渡つゝ。大方の空もえんなるにもてはやされて。不斷の御讀經の聲々。哀まさりけり。やう／＼涼しき風のけしきにも。例の絶せぬ水の音なん。夜もすから聞まかはさる。御前にも近ふさふらふ人人。はかなき物語するをきこしめしつゝ。なやましうおはしますへかめるを。さりけなくもてかくさせ給へり。御有さまなとのいとさらなることなれと。浮世のなくさめには。かゝるおまへをこそ。たつねまいるへかりけれと。うつし心をは引たかへ。たとしへなくよろつわするゝにも。かつはあやしき。また夜深きほとの月さし曇木の下をくらきに御かうしまいりなはや。女官はいまたさふらはし。くら人まいれなといひしらふほとに。後夜の鐘うちおとろかし。五たんの御すほう時はしめつ。我も我もとうちあけたる伴僧の聲々。遠くちかくきき渡されたるほとゝおとろ／＼しくたうとし。觀音院の僧正。ひんかしのたいより。廿人の伴僧をひきゐて御かち參り給ふ。あし音。渡殿のはしのとゝろ／＼とふみならさるゝさへそ

ことことのけはひにはにぬ。法住寺の座主(院源)は。
馬場のおとゝ。へんちしの僧都は。ふどのなと
に。うちつれたる淨衣姿ま〻。ゆへ〳〵しきか
らはしともを渡りつゝ。木のまをわけてかへ
りいるほとも。はるかにみやらるゝ心地して
あはれ也。さいさ(清壽イ云)あさりも。大いとくをうやま
ひてこしをかゝめたり。人々參りつれは。夜も
あけぬ。わた殿の戶くちのつほねにみいたせ
は。ほのうちきりたるあしたの露もまたおち
ぬに。殿(道長)ありかせ給てみすいしんめして。やり
水はらはせ給ふ。はしのみなみなるをみなへ
しの。いみしうさかりなるを。一技おらせ給ひ
て。木丁のかみよりさしのそかせ給へり。御さ
まのいとはつかしけなるに。我朝かほの思ひ
しらるれは。これをそくてはわろからんとの
給はするに。とつけてすゝりのもとによりぬ。

女郎花盛の色をみるからに露のわきけるみこそしらるれ

あなとゝほゝゑみて。すゝりめしいつ。

白露はわきてもたかしなみなへし心からにや色のそむらん

しめやかなる夕暮に。宰相のきみとふたり。も
のかたりしてゐたるに。とのゝ三位の君(頼通)。すた
れのつま引あけてゐ給ふ。としのほとよりは。
いとおとなしく。心にくきさまして。人は猶心
はへこそかたきものなめれなと世の物かたり
しめ〳〵としておはするけはひ。おさなしと
人のあなつり聞ゆるこそあしけれと。はつか
しけにみゆ。うちとけぬほとにて。おほかるの
へにと。うちすんしてたち給にしさまこそ。物
かたりにほめたるおとこの心ちし侍りしか。
かはかりのとの。うちおもひ出らるゝもあり。
そのおりはおかしきとの。すきぬれはわする
るも有はいかなるそ。はりまのかみ(行成荖)。このまけ
わさしける日。あからさまにまかてゝ後にそ。
ごばんのさまなとみ給へしかは。けそく(華足)なと

ゆへ〴〵しくして。すはまのほとりの水に。かきませたり。

紀の國のしらゝの濱に拾ふてふこの石こそは巖ともなれ

あふきとものおかしきを。その比は人々もたり。

八月廿日あまりのほとよりは。上達部。殿上人とも。さるべきはみなとのゐがちにて。はしのうへ。たいのすのこなとに。みなうたゝねをしつゝ。はかなうあそひあかす。ことふえの音なとには。たと〴〵しきわか人たちの。とねあらそひ。いまやう歌ともゝ。所につけてはおかしかりけり。宮大夫なりのふ（齊信）。左宰相中將經房。兵衛督。みのゝ少將なりまさ（濟政）なとして。あそひ給ふ夜もあり。わさとの御遊ひは。殿おほすやうやあらん。せさせ給はす。とし比さとゐしたる人々の。なかたえをおもひおこしつゝ。まいりつとふけはひさはかしうて。其ころは。しめやかなることなし。廿六日。御たきものあはせはてゝ。人々にもくはらせ給ふ。まろかしゐたる人々。あまたつとひゐたり。うへよりおるゝみちに。辨宰相のきみの戶くちを。さしのそきたれは。ひるねし給へるほとなりけり。はき。しをん。いろ〳〵のきぬに。こきかうちめ心ことなるをうへにきて。かほはひきいれて。すゝりのはこにまくらしてふし給へるひたいつき。いとらうたけになまめかし。繪にかきたる物の姬君の心ちすれは。くちおほひを引やりて。ものかたりの女のこゝちもし給へるかなといふに。見あけて。物くるをしの御さまや。ねたる人を。こゝろなくおとろかすものかとて。すこしおきあかり給へるかほの。うちあかみ給へるなと。こまかにおかしうこそ侍しか。おほかたもよき人の折からに。またこよなくまさるわさなりけり。九日。きくの綿を。〔御〕兵部のおも

とのもてきて。これとのゝうへの。とりわきて
いとようおいのこひすて給へとの給はせつ
る。とあれは。
菊の露わかゆはかりに袖ぬれて花のあるしにちよは譲らん
とてかへし奉らんとするほとに。あなたにか
へりわたらせ給ひぬとあれは。ようなさにと
とめつ。そのよさり。御まへにまいりたれは。
月おかしきほとにて。はしにみすのしたより。
裳のすそなと。ほころひ出るほと／＼に。こ少
將の君。大納言のきみなとさふらひ給ふ。御ひ
とりに。ひとひのたきものとうてゝ。こゝろみ
させ給ふ。御まへの有さまのおかしさ。つたの
いろの心もとなきなと。くち／＼きこえさす
るに。れいよりもなやましき御けしきにおは
しませは。御かちともゝまいるかたなり。さは
かしきこゝちしていりぬ。人のよへは。つほね
におりて。しはしとおもひしかとねにけり。夜
中はかりより。さはきたちてのゝしる。十日の
またほの／＼とするに。御しつらひかはる。
白き御丁にうつらせ給。殿よりはしめ奉りて。
きんたち。四位。五位ともおほくさはきて。御
丁のかたひらかけ。御ましともゝてちかふほ
と。いとさはかし。ひひとひ。いとこゝろもと
なけに。おきふしくらさせ給ひつ。御ものゝけ
ともかりうつし。かきりなくさはきのゝしる。
月ころそこらさふらひつるとのゝうちのそ
うをは。さらにもいはす。山々寺々を尋て。け
んさといふかきりは。のこるなくまいりつと
ひ。三よの佛も。いかにかきゝ給ふらんとおも
ひやらる。おんやうしとて。世にあるかきりめ
しあつめて。やをよろつの神も。みゝふりたて
ぬはあらしとみえきこゆ。みすきやうのつか
ひたちさはきくらし。その夜もあけぬ。御丁の
ひんかしおもては。うちの女房まいりつとひ

てさふらふ。にしには御ものゝけうつりたる人々。御ひやうふ一よろひをひき。つほねくくちには。木丁をたてつゝ。けんさあつかりあつかりのゝしりゐたり。みなみには。やんことなき僧正僧都かさなりゐて。ふとうそんのいき給へるかたちをも。よひいてあらはしつへうたのみゝうらみゝ。聲みなかれわたりにたる。いといみしうきこゆ。北の御さうしと御丁とのはさま。いとせはきほとに四十よ人そ。後にかそふれはゐたりける。いさゝかみしろきもせられす。氣あかりて物そおほえぬや。いまさとよりまいる人々は。〔ついイ〕中々ゐこめられす。裳のすそ。きぬの袖。ゆくらんかたもしらす。さるへきおとなゝとは。しのひてなきまとふ。十一日の曉に。北の御さうし二まはなちて。ひさしにうつらせ給ふ。みすなともえかけあへねは。御木丁をおしかさねておはします。僧正きやうてふ。そうつ。ほうむそうつなとさふらひて加持まいり。院源そうつきのふかゝせ給し御願書に。いみしきことゝもかき加へて。よみあけつゝけたることの葉の。あはれにたうとく。たのもしけなること限りなきに。とのゝうちそへて。佛ねんし聞え給ふほとのたのもしく。さりともとは思ひなから。いみしうかなしきに。人々なみたをえほしあへす。ゆゝしうかうなと。かたみにいひなからそ。えせきあへさりける。人氣おほくこみては。いとゝ御心ちもくるしうおはしますらんとて。南東おもてにいたさせ給ふて。さるへきかきり。この二まのもとにはさふらふ。とのゝうへ。さぬきと。宰相君。くらのみやうふ。御木丁のうちに。仁和寺のそうつの君。三井寺の内供のきみも。めしいれたり。とのゝよろつにのゝしらせ給ふ御こゑに。そうもけたれて音せぬやうなり。いま一さに

ゐたる人々。大納言の君。こ少將の君。宮のないし。辨の內侍。中務の君。たいふの命婦。大式部のおもと。殿のせんじよ。いと年へたる人々の。かきりにて。心をまとはしたるけしきともの。いとことはりなるに。また見奉りなるゝほとなけれと。たくひなくいみしと。心ひとつに覺ゆ。またこのうしろのきはにたてたるきちやうのとに內侍のかみ（妍子〔中務のイ〕）の・めのと。姬君（威子）の少納言のめのと。いとひめ君（姬子）のこしきふのめのとなと。をしいりきて。みちやうふたつかうしろのほそみちを。え人もとをらす。行ちかひみしろく人々は。そのかほなとも見わかれす。殿の公達。宰相中將。かれたか。四位の少將。まさ道。なとをはさらにもいはす。左宰相中將。經房。宮の大夫（齊信）なと。れいはけとをき人々さへ。御木丁のかみより。ともすれはのそきつゝ。はれたるめともを見ゆるも。よろつはちわすれたり。いたたきには。うちまきの雪のやうにふりかゝり。をししほみたるきぬの。いかに見くるしかりけんと。のちにそおかしき。御いたゝきの御くしおろし奉り。御いむ（戒）とうけさせ奉り給ふほと。くれまとひたるこゝちに。こは如何なるとと。あさましうかなしきに。たいらかにせさせ給て。のちのことまたしきほと。さはかり廣きもや（〔のイ〕）。南のひさしかうらんのほとまて。たちこみたる僧も俗も。今一よりとよみてぬかをつく。ひんかしおもてなる人々は。殿上人にましりたるやうにて。こ中將の君の。左頭中將（顯定）に見あはせて。あきれたりしさまを。後にそ人々いひ出てわらふ。けさう（化粧）なとのたゆみなく。なまめかしき人にて。曉にかほつくりしたりけるを。なきはれ。涙に所々ぬれそこなはれて。あさましうその人となんみえさりし。宰相の君のかほかはりし給へるさまなとこそ。いとめ

つらかに侍しか。ましていかなりけん。されとそのきはにみし人の有さまの。かたみにおほえさりしなん。かしこかりし。いまとせさせ給ふほと。御もの丶けのねたみの丶しるこゑなとのむくつけさよ。けんの藏人には。しんよ（心譽）あさり。兵衛藏人には。そうそといふ人。右近藏人には。ほうふうしのりし。宮の內侍のつほねには。ちそうあさりをあつけたれは。もの丶けにひきたをされて。いと／＼をしかりけれは。ねんかくあさりを。めしくはへてその丶しる。あさりのけんのうすきにあらす。御もの丶けのいみしうこはきなりけり。宰相のきみ。をき人にゑいかうをそへたるに。夜一よの丶しりあかして聲もかれにたり。御もの丶けうつれと。めしいてたる人々もみなうつらてさはかれけり。午の時に。空はれてあさ日さし出たる心地す。たいらかにおはします。うれしさ

のたくひもなきに。おとこ（後一條）にさへおはしましけるよろこひいか丶はなのめならん。昨日しほれくらし。けさのほと。朝霧におほ丶れつる女房なと。みなたちあかれつ丶やすむ。御まへにはうちねひたる人々の。か丶るおりふしつきつきしきさふらふ。殿もうへも。あなたにわたらせ給ふて。月ころみすほう讀經にさふらひ。昨日けふ。めしにてまいりつとひつる僧のふせ給ひ。くすしおんやうしなと。みち／＼のしるしあらはれたるろく給はせ。うちには御ゆ殿のきしきなと。かねてまうけさせ給へし。人のつほね／＼には。おほきやかなるふくろつ丶みともてちかひ。からきぬのぬひものもひきむすひ。らてむぬひ物。けしからぬまてしてひきかくし。あふきもてこぬかな丶といひかはしつ丶。けさうしつくろふ。れいのわた殿より。みやれは。つまとのまへに。宮の大

夫。春宮の大夫など。さらぬ上達部もさふらひたまふ。殿出させ給て。日比うつもれつるやり水つくろはせ給ひ。人々の御けしきとも心ちよけなり。心のうちに思ふことあらん人も。たゝ今はまきれぬへき世のけはひなるうちにも。宮大夫ことさらにもゑみほこり給はねと。人よりまさるうれしさの。をのつからいろにいつるそことはりなる。右宰相中將は。權中納言とたはふれして。たいのすのこにゐ給へり。内より御はかしもてまいれり。頭中將よりさた。けふいせのみてくらつかひかへるほと。のほるましければ。たちなからぞ。たいらかにおはします御ありさまそうせさせ給ふ。ろくなとも給ひける。そのことはみす。御ほそのをはとのゝうへ。御ちつけは橘三位。つな子。御めのともとよりさふらひ。むつましう心よいかたとて。大さゑもんのおもと。つかうまつる。

備中守むねときの朝臣のむすめ。くら人の辨のめのと。御ゆとのはとりの時とか。火ともして。宮のしもへみとりのきぬのうへに。しろきたうしきさて。御ゆまいる。其おけすへたるたいなと。みなしろきおほひしたり。おはりのかみちかみつ。宮のさふらひのおさなるなかのふきて。みすのもとにまいる。みつし二。きよいこの命婦。はりま。とりつきてうめつゝ。女房二人。大もく。むま。くみわたして。御ほとき十六にあまれはいる。うすものゝうはきゝかとりのも。からきぬ。さいしさして。しろきもとゆひしたり。かしらつきはへておかしく見ゆ。御ゆとのは宰相の君。御むかへゆ大納言君。源遍子。ゆまきすかたともの。れいならすさまことにおかしけなり。宮は殿いたき奉り給て。御はかしこ少將の君。虎のかしらは宮の内侍とりて御さきにまいる。からきぬは。まつのみのも

ん。もはかいふ（海部）を〻りて。おほうみのすりめにかたとれり。こしはうすものから草をぬひたり。少將の君は秋の草村。てふ。とりなとをしろかねしてつくりか〻やかしたり。をりものは。かきりありて。人の心にしくへいやうなけれは。こしはかりをれいにたかへるなめり。殿の公達二所（賴通教通）。源少將。雅道。なと。うちまきをなけの〻しり。われたかううちならさんと。あらそひさはく。へんち寺の僧都。こしん（護身）にさふらひ給ふ。かしらにも。めにもあたるへけれは。扇をさ〻けて。わかき人にわらはる。文よむはかせ藏人辨ひろなり（廣業）。高欄のもとにたちて。史記の一くわんをよむ。弦うち廿人。五位十人。六位十人。ふたなみにたちわたれり。よさりの御ゆとのとても。さまはかりしきりてまいる。きしきおなし。御ふみのはかせはかりやかはりけん。伊勢守むねとき（致時）のはかせとか。れいの孝經なるへし。又たかちか（擧周）は。史記文帝のまきをそよむなるへし。七日のほと。かはる〳〵

よろつのもの〻くもりなくしろきおまへに。人のやうたい。色あひなとさへ。けちえん（揭焉）にあらはれたるをみわたすに。よきすみゑに。かみともをおほいたるやうにみゆ。いと〻物はしたなくて。か〻やかしきこ〻ちすれは。ひるはおさ〳〵さしいてす。のとやかにて。ひんかしのたいのつほねより。まうのほる人々をみれは。色ゆるされたるは。をり物のから衣。おなしうちきともなれは。中々うるはしくて心々もみえす。ゆるされぬ人も。すこしおとなひたるは。かたはらいたかるへきことはせて。た〻えならぬ三重。五重のうちきに。うはきはをりもの。むもんのからきぬすくよかにして。かさねには。あやうすものをしたる人もあり。扇なとみめには。おとろ〳〵しくか〻やかさて。

よしなからぬさまにしたり。心はへある本文うちかきなとして。いひあはせたるやうなるも。心々とおもひしかとも。よはひのほと。おなしまちのは。おかしと見かはしたり。人の心のおもひをくれぬけしきそ。あらはに見えける。裳からきぬのぬひものをは。さることに て。袖くちにをきくちをし。裳のぬひめにしろかねのいとをふせて。くみのやうにし（箔）はくをかさりて。あやのもんにすへ。あふきとものさまなとは。た〻雪ふかき山を。月のあかきにみわたしたるこ〻ちしつ〻。きら〳〵と。そこはかと見わたされす。か〻みをかけたるやうなり。三日にならせ給ふよは。宮つかさ大夫よりはしめて。御うふやしなひつかうまつる。右衛門のかみは。おまへの事。ちんのかけはん。しろかねの御さらなと。くはしくはみす。源中納（俊賢）言。藤宰相は御そ。御むつき。衣はこのおりたて。いれかたひら。つ〻みおほひ。したつくえなと。おなしことのおなししろさなれとも。しさま人の心々みえつ〻。しつくしたり。あふみのかみ。たかまさは。おほかたのこと〻もや〻つかうまつらん。東の對の西のひさしは上達部の座。北をかみにて二行に。南のひさしに。殿上人の座は。にしを上なり。白きあやの御ひやうふともを。もやのみすにそへて。とさまにたてわたしたり。五日夜に。殿の御うふやしなひ。十五日の月。くもりなくおもしろきに。池のみきはちかう。か〻り火ともを木のしたにともしつつ。年木ともたてわたす。あやしきしつのおのさえつりありく氣しきともまて。色ふしにたちかほなり。とのもりかたちわたれるけはひも。をこたらすひるのやうなるに。こ〻かしこのいはかくれ木のもとことに。うちむれてをる上達部のすいしんなとやうのものともさ

へ。をのかしゝかたらふへかめることは。かゝる世中の光の。いておはしましたることを。かけにいつしかと思ひしも。およひかほにこそ。そそろにうちゑみ。こゝちよけなるや。ましてとのゝうちの人は。なにはかりのかすにしもあらぬ五位ともなとも。そこはかとなくこしもうちかゝめて行ちかひ。いそかしけなるさまして時にあひかほなり。おものまいるとて。女房八人ひとつ色にさうそきて。かみあけしろきもとゆひして。しろき御はんもてつゝきまいる。こよひの御まかなひは宮の内侍。いともの／＼しく。あさやかなるやうたいに。もとゆひばへ〔みイ〕したるかみのさかりは。常よりもはらめなと。いときよらに侍しかな。かみあけたる女房は。源式部。かゝのかみ景好かむすめ。小左衛門。こひちうの守道ときか女。小兵衛。左京のかみあきまさか女。大輔。いせのさいしゆすけちかゝ女。大むま。左衛門大夫よりのふか女。小むま。左衛門のすけ道のふか女。小兵部。〔備イ〕藏人なりちかかむすめ。小木工。もくのせう平ののふよしといひけん人の女なり。かたちなとおかしきわか人のかきりにて。さしむかひつゝゐわたりたりしは。いとみるかひこそ侍しか。れいはおものまいるとて。かみあくるををそするを。かゝるおりとて。さりぬへき人々を。えらせ給へりしを。心うしいみしとうれへなきなと。ゆゝしきまてそ見侍し。御丁の東面二まはかりに。卅よ人居並たりし人々のけはひこそ。みものなりしか。〔威儀〕いきのおものは釆女とも参る。戸口のかたに。御ゆとのゝへたての御ひやうふにかさねて。又みなみむきにたてて。しろきみつし一よろひにまいりすへたり。夜ふくるまゝに。月のくまなきに。うねめ。も〔水〕ひとり〔司〕。みくしあけとも。とのもり〔闈〕。かむもり〔司〕の女官。かほもしらぬをり。みかとつかさなとやうのものにやあらん。をろそかにさうそき

けさうしつゝ。をとろのかんさし。おほやけおほやけしきさまして。しんてんの東のわたとのゝ戸くちまて。ひまもなくをしこみてゐたれは。人もえとをりかよはす。おものまいりはてゝ。女房みすのもとにいてゐたり。ほかけにきら〳〵と見えわたる中にも。おほしきふのおもとの裳からきぬ。をしほ山のこ松原をぬひたるさまいとおかし。おほしきふは。みちのくのかみのめ。とのゝせんじよ。たいふの命婦は。からきぬはてもふれす。もをしろかねのていして。いとあさやかにおほうみにすりたるこそ。けちえんならぬものからめやすけれ。辨の内侍の裳に。しろかねのすはま。鶴をたてたるしさまめつらし。ぬひものも。松かえの齢をあらそはせたる心はへかと〳〵し。少將のおもとのこれらにはをとりなる。しろかねのはくを人々つきしろふ。少將のおもとゝいふは。しなのゝかみすけみつかいもうと。殿のふる人なり。その夜の御前の有さまの。いと人にみせまほしけれは。よゐの僧のさふらふ御ひやうふをゝしあけて。此世にはかうめてたきこと。またえみ給はしといひ侍しかは。あなかしこあなかしこと。本尊をはをきて。手をゝしすりてそよろこひ侍し。上達部座をたちて。御はしのうへにまいり給ふ。殿をはしめ奉りて。攤うち給ふ紙のあらそひいとまさなし。うたともあり。女房。さか月なとあるおり。いかゝはいふへきなと。くち〳〵思ひこゝろみる。

珍らしき光さしそふさか月はもちなからこそちよもめくらめ

四條大納言（中納言公任）にさしいてんほと。歌をはさる物にて。こはつかひよふいひのへしなとさゝめきあらそふほとに。ことおほくて。夜いたうふけぬれはにや。とりわきてもさゝてまかて給ふ。ろくとも上達部には。女のさうそくに御

そ。御むつきやそひたらん。殿上の四位はあはせ一かさね。六位ははかま一具そみえし。またの夜月いとおもしろく。ころさへおかしきに。わかき人は舟にのりてあそふ。色いろなるおりよりも。おなしさまにさうそきたるやうたい。かみのほとくもりなくみゆ。小大夫。源式部。宮木の侍從。五せち辨。右近。小兵衞。小衞門。むま。やすらひ。いせ人なと。はしちかくゐたるを。左宰相中將。殿中將(教通)の君。いさなひいて給ひて。右宰相中將かねたかにさほさゝせて舟にのせ給ふ。かたへはすへりとゝまりて。さすかにうらやましくやあらんと。見出しつつゐたり。いと白き庭に。月のひかりあひたるやうたい。かたちもおかしきやうなる。北のちむに。車あまたありといふは。うへ人ともなりける。藤三位をはしめにて侍從命婦。藤少將命婦。むまの命婦。左近命婦。ちくせんの命婦。近江命婦なとそ聞え侍し。くはしく見しらぬ人人なれは。ひかことも侍らんかし。ふねの人々もまとひ入ぬ。との出ゐ給て。おほすことなき御けしきに。もてはやしたはふれ給ふ。をくりものともしな〲に給ふ。七日のよは。おほやけの御うふやしなひ。藏人少將。道雅。を御つかひにて。物のかす〲かきたるふみ。やないはこに入てまいれり。やかて返し給ふ。勸學院衆ともあゆみしてまいれるけさん(見参)のふみとも。又けいす。かへし給ふ。ろくとも給ふへし。こよひのきしきは。ことにまさりておとろ〲しくのゝしる。御丁のうちをのそきまいりたれは。かく國のおやともてさはかれ給ひ。うるはしき御けしきにもみえさせ給はす。すこしうちなやみ。おもやせて。おほとのこもれる御ありさま。常よりもあへかにわかくうつくしけなり。ちいさきとうろを御丁のうちにかけたれ

は。くまもなきに。いとゝしき御いろあひの。そこひもしらすきよらなるに。こちたき御くしは。ゆひてまさらせ給ふわさなりけりとおもふ。かけまくもいとさらなれは。えそかきつゞけ侍らぬ。大かたの事ともは。一日のおなしこと。かんたちめのろくはみすのうちより。女さうそく。宮の御そなとそへていたす。殿上人。頭ふたり（頼定 道方）をはしめて。よりつゝとる。おほやけの祿は。大うちき。ふすま。こしさしなと。れいのおほやけさまなるへし。御ちつけつかうまつりし橘三位のをくり物。れいの女のさうそくに。をりものゝほそなかそへて。しろかねの衣はこ。づゝみなともやかてしろきにや。又つゝみたるものそへてなとそ聞侍りし。くはしくはみ侍らす。八日。人々色々さうそきかへたり。九日。夜は春宮權大夫（頼通）つかうまつり給ふ。しろきみつしひとよろひにまいりすへたり。きしきいとさまことにいまめかし。しろかねの御衣はこ。かいふをうちいてゝ。ほうらいなと。れいのことなれと。いまめかしうこまかにおかしきを。とりはなちては。まねひつくすへきにもあらぬこそわろけれ。こよひはおもてくちきかたの木丁。例のさまにて。人々はこきうちものをうへにきたり。めつらしく心にくくなまめいてみゆ。すきたるからきぬともに。つや〳〵と。をしわたしてみえたるを。また人のすかたもさやかにそみえなされける。こまのおもとゝいふ人の。（恥）はちみ侍し夜なり。十月十よ日までも。御丁出させ給はす。西のそはなるおましに。よるもひるもさふらふ。とのゝ夜中にもあかつきにもまいり給つゝ。御めのとのふところをひきさかさせ給に。うちとけてねたるときなとは。なに心もなくおほゝれておとろくも。いと〳〵おかしくみゆ。心もと

なき御ほとを。わか心をやりてさゝけうつくしみ給ふも。ことはりにめてたし。あるときは。わりなきわさしかけ奉り給へるを。御ひもひきときて。御木ちやうのうしろにてあふらせ給ふ。あはれこの宮の御しとにぬるゝは。嬉しきわさかな。このぬれたるあふるこそ。おもふやうなるこゝちすれと。よろこはせ給ふ。中つかさの宮わたりの御ことを御心にいれて。そなたの心よせある人とおほして。かたらはせ給ふも。まことに心のうちは おもひゐたるをおほかり。行幸ちかくなりぬとて。とのゝうちをいよ／＼つくりみかゝせ給ふ。世におもしろき菊のねをたつねつゝほりてまいる。いろいろうつろひたるも。黄なるか見ところあるも。さま／＼にうへたてたるも。あさきりのたえまに見わたしたるは。けにおいもしそきぬへきこゝちするに。なそやまして。おもふとのすこしもなのめなる身ならましかは。すきすきしくももてなしわかやきて。常なき世をもすくしてまし。めてたきこと。おもしろきことを。みきくにつけても。たゝおもひかけたりし心のひくかたのみつよくて。ものうくおもはすに。なけかしきことのまさるそいとくるしき。いかて今は猶ものわすれしなん。思ひかひもなし。つみもふかゝりなと。あけたてはうちなかめて。水鳥ともの。思ふことなけにあそひあへるをみる。

水鳥を水の上とやよそにみん我も浮たる世を過しつゝ

かれもさこそ心をやりてあそふとみゆれと。身はいとくるしかんなりと。思ひよそへらる。小少將の君のふみをこせたる返ことかくに。時雨のさとかきくらせは。つかひもいそく。又空のけしきもうちさはきてなんとて。こしおれたることやかきませたりけん。くらうなり

にたるにたちかへり。いたうかすめたるこせんしに。

雲間なくなかむる空もかきくらしいかに忍ふる時雨なる覽

かきつらむこともおほえす。

ことはりの時雨の空は雲まあれと詠むる袖そ乾くまもなき

その日あたらしくつくられたる舟とも。さしよせさせて御覽す。れう頭けきゆのいけるかたちおもひやられて。あさやかにうるはし。行幸はたつの時と。またあかつきより人々けさうし心つかひす。上達部の御座は。にしのたいなれは。こなたはれいのやうにさはかしうもあらす。内侍のかんのとの丶御かたに。中々人々のさうそくなとも。いみしうとゝのへ給ふときこゆ。曉に少將の君まいり給へり。もろともにかしらけつりなとす。れいのさいふとも日たけなんと。たゆき心ともはたゆたひて。あふきのいとなをなをしきを。また人にいひたる。もてこなんとまちゐたるに。つゝみの音を聞つけて。いそきまいるさまあしき。御こしむかへ奉る。ふなかくいとおもしろし。よするを見れは。かよちやうのさる身のほとながら。はしよりのほりて。いとくるしけにうつふしふせる。なにのことことなるたかきましらひも。身のほとかきりあるに。いとやすけなしかしとみる。御帳のにしおもてに。おましをしつらひて。みなみの庇のひんかしのまに。御いしをたてたる。それより一間へたてゝ。ひんかしにあれたるきはに。北みなみのつまにみすをかけへたてゝ。女房のゐたる南のはしらもとより。すたれをすこし引あけて。内侍二人いつ。その日のかみあけ。うるはしきすかた。からゑをおかしけにかきたるやうなり。左衞門のないし。御はかしとる。青いろのむもんのからきぬ。すそこのも。ひれ。くんたいはふせむ

れうをはしたんにそめたり。うはきはきくの五へ。かいねりはくれなゐ。すかたつきもてなし。いさゝかはつれてみゆるかたはらめ。はなやかにきよけなり。辨の内侍しるしの御はこ。くれなゐにえひそめのをりものゝうちき。裳からきぬは。さきのおなしこと。いとさゝやかにおかしけなる人の。つゝましけにすこしつゝみたるそ。心くるしうみえける。あふきよりはしめて。このみましたりとみゆ。ひれはあふちたん。ゆめのやうにも今宵のたつほとよそほひ。むかしあまくたりけんをとめこのすかたも。かくやありけんとまておほゆ。近衞つかさ。いとつき／＼しきすかたして。御こしのことゝもをこなふ。いときら／＼し。頭中將御はかしなとゝりて内侍につたふ。みすの中を見わたせは。色ゆるされたる人々は。れいの青いろあかいろのからきぬに地すりの裳。うはきはをしわたしてすはうのをり物なり。たゝむまの中將そえひそめをきて侍し。うちものともは。こき薄き紅葉をこきませたるやうにて。中なるきぬとも。れいのくちなしのこきうすき紫苑色。うらあをき菊を。もしは三重なと心心なり。綾ゆるされぬは。れいのおとな／＼しきは。むもんのあをいろ。もしはすはうなとみな五へにて。かさねともはみなあやなり。おほ海のすりもの。水の色はなやかにあさ／＼として。こしともは。かたもんをそおほくはしたる。うちきはきくの三へ五へにて。をり物はせす。わかき人は。菊の五へのからきぬを心々にしたり。うへはしろく。あをきかうへをはすはう。ひとへはあをきもあり。うへうすすはう。つき／＼こきすはう。中に白きませたるも。すへてしさまおかしきのみそ。かと／＼しくみゆる。いひしらすめつらしくおとろ／＼しき

あふきともみゆ。うちとけたるおりこそ。まほならぬかたちもうちましりてみえわかれけれ。心をつくしてつくろひけさうし。をとらしとしたてたる。女ゑのおかしきにいとようにて。としのほとのおとなひ。いとわかきけちめ。かみのすこしをとろへたるけしき。またさかりのこちたきか。わかまへはかり見渡さる。さてはあふきよりかみのひたいつきそあやしく。人のかたちをしな〳〵しくも。くたりてももてなすところなんめる。かゝる中にすくれたるとみゆるこそ。かきりなきならめ。かねてより。うへの女房。宮にかけてさふらふ五人は。まいりつとひてさふらふ。ないし二人。命婦二人。御まかなひの人ひとり。おものまいるとて。ちくせん左京のおもとの。かみあけて。内侍のいてゐるすみのはしらもとよりいつ。これはよろしき天女なり。左京は青いろに柳のむもんのから衣。ちくせんは菊の五へのから衣。裳はれいのすり裳なり。御まかなひ橘三位。あをいろのから衣は。からあやの黄なるきくのうちきそ。うはきなんめる。ひともとあけたり。はしらかくれにて。まほにもみえす。殿。わか宮いたき奉り給て。おまへにゐて奉り給。うへ。いたきうつし奉らせ給ふ程。いさゝかなかせ給ふ御こゑいとわかし。辨宰相のきみ。御はかしとりてまいり給へり。もやの中とよりにしに。とのゝうへおはするかたにそ。わか宮はおはしまさせ給ふ。うへ。とにいてさせ給てそ。宰相の君はこなたにかへりて。いとけそうにはしたなき心地しつると。けにおもてうちあかみてゐ給へるかほ。こまかにおかしけなり。衣の色も人よりけにきはやし給へり。くれゆくまゝに。かくともいとおもしろし。上達部おまへにさふらひ給ふ。萬さい

らく。太平樂。賀てんなといふまひとも。ちや（長）うけ（慶子）いしをまかで音聲にあそひて。山のさきのみちをまふほと。とをくなりゆくまゝに。ふえの音も。つゝみのをとも。松風も。こふかく吹あはせて。いとおもしろし。いとよくはらはれたるやり水の。こゝちゆきたるけしきして。池のみつなみたちさはき。そゝろさむきに。うへの御あこめたゝふたつ奉り給へりけり。左京の命婦の。をのかさむかめるまゝに。いとをしかりきこえさするを。人々はしのひてわらふ。ちくせんの命婦は。こ院（圓融）のおはしましゝ時。この殿の行幸はいとたひ／＼ありしとなり。そのおりかのおりなと。おもひいてゝいふを。ゆゝしきことゝもありぬへかめれは。わつらはしと　。ことにあへしらはす。木丁へたてゝあるなめり。あはれいかなりけんなとたにいふ人あらは。うちこほしつへかめり。御前の御あそひはしまりて。いとおもしろきに。わか宮のみ聲うつくしう聞え給ふ。右のおとゝ（顕光）。萬歳樂みこゑにあひてなんきこゆると。もてはやしきこゑ給ふ。左衛門のかみ（公任）なと。萬さいらく千秋樂と。もろこゑにすして。あるしのおほいとの。あはれさき／＼の行幸を。なとてめいほ（面目）くありとおもひ給へけん。かゝりけるをも侍りける物をと。ゑひなきし給。さらなるとなれと。御みつからもおほししるこそ。いとめてたけれ。殿はあなたにいてさせ給ふ。うへはいらせ給て。右のおとゝを御前にめして。筆とりてかき玉ふ。宮つかさ殿の家司のさるへきかきり加階す。頭辨（道方）してあないは奏せさせ給めり。あたらしき宮の御よろこひに。うちの上達部引つれて拝したてまつり給ふ。藤原なからかとわかれたるは。列にもたち給はさりけり。次に別當になりたる右衛門督（齊信）大宮の大夫（同人）よ。

宮のすけ（實成）。かゝいしたる侍従宰相（同人）。つき〳〵の人難踏す。宮の御かたにいらせ給て程もなきに。夜いたうふけぬ。御こしよすとのゝしれは出させ給ぬ。又のあしたに内の御つかひ。朝霧もはれぬにまいれり。うちやすみすくして。みすなりにけり。けふそはしめてそひ奉らせ給。殊さらに行幸の後とて。又（イ无）の日宮の家司。別當。おもと人なと。しきしさたまりけり。かねてもきかて。ねたきことおほかり。日比の御しつらひ。れいならす。やつれたりしをあらたまりて。御前のありさまいとあらまほし。とし比心ちとなく見奉り給ける御ことの。うちあひてあけたては。との。うへも參り給つゝ。もてかしつき聞え給ふ。にほひいとこゝろことなり。くれて月いとおもしろきに。宮のすけ。女房にあひて。とりわきたるよろこひもけい（啓）せさせんとにやあらむ。妻戸のわたりも。御ゆとのゝ

けはひにぬれ。人のをともせさりけれは。このわたとのゝひかしのつまなる。宮のないしのつほねにたちよりて。こゝにやとあないし給。宰相は中のまによりて。またさゝぬかうしのかみをしあけて。おはすやなとあれと。いてぬに。大夫のこゝにやとの給にさへ。きゝ忍はんもこと〳〵しきやうなれは。はかなきいらへなとす。いとおもふことなけなる御けしきともなり。我御いらへはせす。大夫を心ことにもてなしきこゆ。ことはりなからわろし。かゝる所に上臈のけちめ。いたうはわくものかとあはめ給。けふのたうとさなと聲おかしううたふ。よふくるまゝに月いとあかし。かうしのもととりさけよとせめ給へと。いとくたりてかむたちめのゐ給はんも所といひなからかたはらいたし。わかやかなる人こそ。ものゝほとしらぬやうにあさへたるも。つみゆるさるれ。なに

かあされかましとおもへははなたす。御いかは。霜月のついたちの日。れいの人々の。したてゝのほりつとひたる。御前の有さま。繪にかきたる物あはせの所にそ。いとようにて侍し。御丁の東のおましのきはに。みきちやうを。おくのみさうしよりひさしのはしらまて。ひまもあらせすたてきりて。南おもてにおまへの物はまいりすへたり。にしによりておほみやのおもの。れいのちんのおしき。なにくれのたいなりけんかし。そなたのことはみす。御まかなひ宰相の君。さぬきとりつく。女房もさいしもとゆひなとしたり。わか宮の御まかなひは大納言のきみ。ひんかしによりてまいりすへたり。ちいさき御たい。御さらとも。御箸のたい。すはまなとも。ひいなあそひの具とみゆ。それよりひんかしのまのひさしのみすすこしあけて。辨の内侍。中つかさの命婦。小中將の君なと。さへいかきりそとりつきつゝまいる。おくにゐて。くはしうは見侍らす。こよひ小輔のめのと色ゆるさる。こゝしきさまうちしたり。宮いたき奉れり。御丁のうちにて。とのゝうへ。いたきうつし奉り給て。ゐさりいてさせ給へり。ほかけの御さまけはひことにめてたし。あかいろのからの御そ。ちすりの御裳。うるはしくさうそき給へるも。かたしけなくもあはれにみゆ。大みやはえひそめの五への御そ。すはうの御こうちきたてまつれり。殿。もちゐはまいり給ふ。上達部の座は。れいの東のたいのにしおもてなり。いまふた所（顕光）（公季）の大臣もまいり給へり。はしのうへにまいりて。またゑひみたれてのゝしり給ふ。おりひつ物。こものともなと。殿の御かたより。まうちきみたちとりつゝきてまいれる。かうらんにつゝけてすへわたしたり。たちあかしの光の心もとなけれは。四

位少將などをよひよせて。しそくさゝせて人人はみる。うちのたいはん所にもてまいるへき。あすよりは御ものいみとて。こよひみないそきてとりはらひつゝ宮の大夫みすのもとに參りて。上達部おまへにめさんとけいし給。きこしめしつとあれは。殿よりはしめ奉りて。みなまいり給。はしのひんかしのつまとのまへまてゐたまへり。女房ふたへみへつゝゐわたされたり。みすともを。そのまにあたりて居給へる人々。よりつゝ卷あけ給ふ。大納言の君。宰相のきみ。こ少將の君。宮の內侍とゐ玉へり。右のおとゝよりて。御木丁のほころひゝきたちみたれ給ふ。さたすきたりとつきじろふもしらす。あふきをとり。たはふれことのはしたなきもおほかり。大夫かはらけとりて。そなたにいて給へり。みの山うたひて。御あそひさまはかりなれと。いとおもしろし。そのつきのまのひんかしのはしらもとに。右大將よりて。衣のつま袖くちかそへ給へるけしき人よりこなり。ゑひのまきれをあなつりきこえ。又たれかとはなとおもひ侍て。はかなきこともいふに。いみしくされ。いまめく人よりも。けにこそおはすへかめれ。しかさかつきのずんのくるを。大將はおち給へと。れいのことならひの千とせ萬代にてすきぬ。左衛門督。あなかしこ。このわたりに若むらさきやさふらふと。うかゝひ給ふ。源氏にかゝるへき人見え給はぬに。かのうへは。まいていかてものし給はんと聞ゐたり。三位のすけ。かはらけとれなとあるに。侍從の宰相たちて。內のおとゝのおはすれは。しもよりいてたるをみて。おとゝゑひなきしたまふ。權中納言すみのまのはしらもとによりて。兵部のおもとひこしろひ。きゝにくきたはふれこゑも。殿のたまはす。おそろしかるへ

き夜の御ゑひなめりと見て。ことはつるまゝに。宰相のきみにいひあはせて。かくれなんとするに。東おもてに。とのゝきんたち宰相中將なと入て。さはかしけれは。ふたりみちやうのうしろにゐかくれたるを。とりはらはせ給て。ふたりなからとらへすへさせ給へり。わかひとつゝつかうまつれ。さらはゆるさむとの給はす。いとはしくおそろしけれは。きこゆ。

いかにいかゝ數へやるへき八千歲の餘り久き君かみよをは

あはれつかうまつれるかなと。二たひはかりすせさせ給て。いとゝうのたまはせたる。

蘆たつの齡しあれは君かよの千歲の數もかそへとりてん

さはかりゑひ給へる御こゝちにも。おほしけることのさまなれは。いとあはれにことはりなり。けにかくもてはやし聞え給にこそは。よろつのかさりもまさらせ給ふめれ。千代もあへましく。御行すゑのかすならぬこゝちにたに。おもひつゝけらる。宮のおまへきこしめすや。つかうまつれりと。我ほめし給て。宮の御てゝにて。まろわろからす。まろかむすめにて。宮わろくおはしまさす。はゝもまたさいはい有とおもひて。わらひ給ふめり。よいおとこはもたりかしと おもひたんめりと。たはふれきこえ給も。こよなき御ゑひのまきれなりとみゆ。さることもなけれは。さはかしき心ちはしなから。めてたくのみきゝゐさせ給。とのゝうへ。きゝにくしとおほすにや。わたらせ給ひぬるけしきなれは。をくりせすとて。はゝうらみ給はん物そとて。いそきて御丁のうちをとをらせ給。宮なめし(無禮)とおほすらん。おやのあれはこそ。子もかしこけれと。うちつふやき給ふを。人々わらひきこゆ。いらせ給ふへきこともちかうなりぬれと。人々はうちつきつゝ心のとかならぬに。おまへには。御さうし(冊子)つくりいとなませ給

とて。あけたては。まつむかひさふらひて。色色のかみえりとゝのへて。物語のほんともそへつゝ。ところ〳〵にふみかきくはる。かつは。とちあつめしたゝむるをやくにて。あかしくらす。なにのこもちかつめたきに。かゝるわさはせさせ給ふと。きこえ給ふものから。よきうすやうとも。ふてすみなと。もてまいり給ひつゝ。御すゝりをさへもてまいりたまへれは。とらせ給へるを。おしみのゝしりて。もののくまにむかひさふらひて。かゝるわさしいつとさいなむなれと。かくへきすみふてなと給はせたり。つほねに物かたりの本ともとりにやりて。かくしをきたるを。御前にあるほとに。やをらおはしまいて。あさらせ給て。みなないしのかんの殿に奉り給てけり。よろしうかきかへたりしは。みなひきうしなひて。心もとなき名をそとり侍りけんかし。わか宮は御

物かたりなとせさせ給ふうちに心もとなくおほしめす。とはりなりかし。御前の池に水鳥とものひゝ〳〵におほくなりゆくをみつゝ。いらせ給はぬさきに。雪ふらなん。このおまへの有さま。いかにおかしからんとおもふに。あからさまにまかてたるほと。二日はかりありてしも雪はふる物か。見ところもなき故郷の木立をみるにも。ものむつかしう思ひみたれて。年比つれ〳〵になかめあかしくらしつゝ。はなとりのいろをもねをも。春秋に往かふ空のけしき。月のかけ霜雪をみて。その時きにけりとはかりおもひわきつゝ。いかにやいかにとはかり。行末の心ほそさはやるかたなき物から。はかなきものかたりなとにつけて。うちたらふ人。おなし心なるは。あはれにかきかはし。すこしけとをきたよりともを。たつねてもいひけるを。たゝこれをさま〳〵にあへしら

ひ。そゝろことにつれ〳〵をはなくさめつゝ。世にあるへき人かすとは　おもはすなから。さしあたりてはつかしいみしと思しるかたはかりのかれたりしを。さものこせるとなく　おもひしる身のうさかな。こゝろみに物かたりをとりてみれとも。見しやうにもおほえす。あさましくあはれなりし人の。かたらひしあたりも我をいかにおもなく心あさきものと思おとすらんとをしはかるに。それさへいとはつかしくて。えをとつれやらす。心にくからんとおもひたる人は。おほそらにては。文やちらすらんなとうたかはるへかめれは。いかてかは我心のうちあるさまをも。ふかうをしはからんとことはりにて。いとあいなけれは（あまたイコ・ニアリ）。中たゆ（イナシ）となけれと。をのつから・かきたゆるもあまたすみさたまらすなりにたりとも思ひやりつゝ。をとなひくる人も。かたうなとしつゝ。すへてはかなきことにふれても。あらぬ世にきたる心ちそ。こゝにてしもうちまさり物あはれなりけり。たゝえさらすうちかたらひ。すこしもこころとめておもふ。こまやかに物をいひかよふ。さしあたりて。をのつからむつひかたらふ人はかり。すこしなつかしくおもふそものはかなきや。大納言の君のよる〳〵は。御まへにいとちかうふしたまひつゝ物かたりし給しけはひの戀しきも。猶よにしたかひぬる心か。

浮寐せし水の上のみ戀しくて鴨のうは毛にさえそおとらぬ

かへし。

打はらふ友なき比のねさめにはつかひし鴛そよはに戀しき

かきさまなとさへいとおかしきを。まほにもおはする人かなとみる。雪を御覧して。折しもまかてたることをなん。いみしくにくませ給ふと。人々もの給へり。とのゝうへの御せうそこには。まろかとゝめしたひなれは。ことさらに

いそきまかてゝ。とくまいらんとありしもそらことにて。程ふるなめりと。のたまはせたれは。たはふれにても。さきこえさせ給はせしことなれは。かたしけなくてまいりぬ。いらせ給ふは十七日なり。いぬのときなと聞つれと。やうやう夜ふけぬ。みなかみあけつゝゐたる人卅よ人。そのほかにもみえわかす。もやのひんかしおもてひかしのひさしに。うちの女房も十よ人。みなみのひさしのつまとへたてゝゐたり。御こしには宮のせんしのる。いとけの御車に。とのゝうへ少輔のめのと。わか宮いたき奉りてのる。大納言宰相の君こかねつくりに。つきのくるまに。こ少將。宮の内侍。つきにむまの中將とのりたるを。わろき人とのりたりとおもひたりしこそ。あなと〱しと。いとゝかゝる有さまむつかしう思ひ侍しか。とのもりの侍従の君。辨の内侍。つきに左衞門の内侍。とのゝせんし。しきふとまてはしたいしりて。次々はれいの心々にてのりけり。月のくまなきに。いみしのわさやと思ひつゝ。あしをそらなり。むまの中將の君をさきにたてたれは。ゆくゑもしらすたと〱しきさまこそ。我うしろをみる人はつかしくもおもひしらるれ。ほそとのゝ三のくちに入てふしたれは。こ少將のきみもおはして。なをかゝる有さまのうきことをかたらひつゝ。すくみたる衣ともをしやり。あつこえたるきかさねて。ひとりに火をかき入て。身もひえにける。ものゝはしたなさをいふに。侍従の宰相。左の宰相中將。きんのふの中將なと。つき〱によりきつゝとふらふもいと中々なり。こよひは。なきものとおもはれて。やみなはやと思ふを。人にとひ聞給へるなるへし。いとあしたにまいり侍らん。こよひはたへかたく。身もすくみて侍なと。

ことなしひつゝ〔くいひつゝイさ〕。こなたのちんのかたよりいつ。をのかしゝいへちといそくも。なにはかりのさと人そはと。おもひをくらる。わか身によせては侍らす。大かたの世のありさま。こ少將のきみのいとあてにおかしけにて。世をうしとおもひしみてゐたまへるを見侍るなり。ちちきみよりことはしまりて。人のほとよりは。さいはひのこよなくをくれたまへるなんめりかし。よへの御をくり物。けさそこまかに御覽する。御くしのはこのうちの具とも。いひつくしみやらんかたもなし。手匣一よろひ。かたつかたには。白きしきしつくりたる御さうしとも。古今。後撰集。拾遺抄。そのぶとものは〔のイナシ〕。五てうにつくりつゝ。侍從の中納言〔行成〕と延幹と。をの〳〵さうしひとつに。四くわんをあてつつかゝせ給へり。へうしは羅。ひもおなしからのくみ。かけこのうへにいれたり。したには。よしのふもとすけやうの。いにしへ今のうたよみとものいへ〳〵の集かきたり。えんかむとちかすみ〔近澄〕のきみとかきたるは。さるものにて。これはたゝ。けちかうもてつかはせ給へき。みしらぬものともにしなさせたまへる。いまめかしうさまことなり。

紫式部日記下

五節は廿日に參る。侍從宰相〔行成〕に。まひ姫のさうそくなとつかはす。右宰相中將〔兼隆〕の。五節にかつら申されたるつかはすついでに。はこ一よろひにたきものいれて。心葉梅の枝をして。いとみ聞えたり。にはかにいとなむ。常のとしよりも。いとみましたるきこえあれは。東のおまへのむかひなるたてしとみに。ひまもなくうちわたしつゝ。ともしたる火の光。ひるより

もはしたなけなるに。あゆみいるさまとも。あさましう。つれなのわさやとのみ思へと。人のうへとのみおほえす。たゝかう。殿上人のひたおもてにさしむかひ。しそくさゝぬはかりそかし。へいまんひきをいやるとすれと。おほかたのけしきは。おなしことそ見るらんとおもひいつるも。先むねふたかる。なりとをの朝臣のかしつき。錦のからきぬ。やみのよにもものにまきれす。めつらしうみゆ。きぬかちにみしろきも。たをやかならすこそ見ゆる。殿上人心ことにかしつく。こなたにうへもわたらせ給て御らむす。殿も忍ひて。やりとより北におはしませは。心にまかせたらすうるさし。なかきよのは。たけともひとしくとゝのひ。いとみやひかに心にくきけはひ。人にをとらすとさためらる。右宰相中将の。有へきかきりはみなしたり。ひすましのふとりとゝのひたるさまそこ

さとひたりと。人ほゝゑむなりし。はてに藤宰相のおもひなしに。いまめかしく心ことなり。かしつき十人あり。又ひさしのみすおろして。こほれいてたる衣のつまとも。したりかほにおもへるさまともよりは。見ところまさりて。ほかけにみえわたさる。とらの日のあした。殿上人まいる。常のことくなれと。月比にさとひにけるにや。わか人たちの。めつらしとおもへるけしきなり。さるはすれる衣もみえすかし。その夜さり。春宮のすけめして薫物賜ふ。大きやかなるはこ一つに。たかう入させたまへり。おはりへは。とのゝうへそつかはしける。そのよはお前の心みとか。うへにわたらせ給て御覧す。わか宮おはしませは。うちまさしのゝしる。常にことなることゝちす。物うけれはしはしやすらひ。ありさまにしたかひて。まいらむとおもひてゐたるに。こひやうゑ。こ兵部なともすひ

つにゐて。いとせはけれは。はか〳〵しう物もみえ侍らすなといふほとに。殿おはしまして。なとて。かうてすくしてはゐたる。いさもろともにと。せめたてさせ給て。心にもあらすまうのほりたり。舞姫とものいかに苦しからんと見ゆるに。おはりのかみのそ。心ちあしかりてゐぬる。夢のやうに見ゆる物かな。ことはてゝおりさせ給ぬ。この比のきんたちは。たゝ五節所のおかしきことをかたる。すたれのはしもかうさへ。心々にかはりてゐてゐたる。かしらつきもてなしけはひなとさへ。さらにかよはす。さま〳〵になんあると。きゝにくゝかたる。かからぬ年たに。御らむの日のわらはのこゝちともは。をろかならさる物を。ましていかならむなと。心もとなくゆかしきに。あゆみならひつゝいてきたるは。あいなくむねつふれて。いとをしくこそあれ。さるは。とりわきてふかう

心よすへきあたりもなしかし。我も〳〵と。さはかり人のおもひて。さしいてたることなれはにや。めうつりつゝ。をとりまさりけさやかにもみえわかす。いまめかしき人のめにこそ。ふとものゝけちめも見とるへかめれ。たゝかくこもりなきひる中に。扇もはか〳〵しくもたせす。そこらの公達の立ましりたるに。さてもありぬへき身のほと。心もちひといひなから。人にをとらしとあらそふ心ちも。いかにおくすらんと。あいなくかたはらいたきそ。かたくなしきや。たはのかみのわらはの。あをいしらつるはみのかさみ。おかしと思ひたるに。藤宰相のわらはは。赤色をきせて。しもつかへのからきぬに。青色をゝしかへしきたる。ねたけなり。わらはのかたちも。ひとりはいとまほにはみえす。宰相の中將はわらはいとそひやかに。かみともおかし。みなこきあこめに。うはきは

心々なり。かさみは五へなる中に。おはりはたたえひそめをきせたり。中々ゆへ〳〵しく心あるさましく。物の色あひ。つやなと。いとすくれたる。あふきとるとて。六位のくら人ともよるに心となけやるこそ。やさしきものから。女にはあらぬかとみゆれ。われらをかれかやうにて出居よとあらは。又さてもさまよひありくはかりにそかし。かうまてたちいてんとはおもひかけきやは。されと。めにみすあさましきものは。人の心なりされは今より後のおもなさは。たゝたれになれすき。ひたおもてにならむもやすしかしと。身のありさまの。夢のやうにおもひつゝけられて有ましきことにさへ思ひかゝりて。ゆゝしくおほゆれは。めとまることも。れいのなかりけり。侍従宰相の五せち・つほね。宮のおまへのたゝ見わたすはかりなり。たてしとみのかみより。をとにきくすたれのはしもみゆ。人の物いふこゑもほのきこゆ。かの女御の御かたに。左京むまといふ人なむ。いとなれてましりたると。宰相中將むかしみしりてかたり給を一夜かのかひつくろひにてゐたりし。ひんかしなりしなん。左京と源少將も見しりたりしを。ものゝよすかありて。つたへ聞たる人々おかしうもありけるかなといひつゝ。いさしらすかほにはあらし。むかし心にくたちてみならしけんうちわたりを。かゝるさまにてやは出たつへき。忍ふとおもふらんを。あらはさんのこゝろにて。おまへにあふきともあまたさふらふ中に蓬萊つくりたるをしもえりたる心はへ有へし。みしりけんやは。はこのふたにひろけてひかけをまろめて。そらいたるくしとも。しろきもののいみしく。つまつまをゆひそへたり。すこしさたすきたまひにたるわたりにて。くしのそりさまなんなをな

なしきと。君たちの給へは。いまやうのさまあしきまて。つまもあはせたるそらしさまして。くろほうを〻しまろかして。ふつ〻かにしりさき〻りて。しろきかみ一かさねにたてふみにしたり。たいふのおもとしてかきつけさす。

（後拾遺）おほかりし豊の宮人さしわきてしるき日かけをあはれとそみし

おまへには。おなしくはおかしきさまにしなして。扇なともあまたこそとの給はすれと。おとろおとろしからむも。とのさまにあはさるへし。わさとつかはすにては。忍ひやかに氣色はませ給へきにも侍らす。これはか〻るわたくしことにこそと聞えさせて。かほしるかるましきつほねの人して。これ中納言の御使。御と〔文。女御とのイ〕のより左京の君に奉らんと。たかやかにさしをきつ。引と〻められたらんこそ。見くるしけれとおもふに。はしりきたり。女のこゑにて。いつこより入きつるとゝふなりつるは。女御とのゝとうたかひなく思ふなるへし。なにはかりのみゝと〻むることもなかりつるひころなれと。五せちすきぬとおもふ内わたりのけはひ。うちつけにさう〳〵しき。をみ（小忌）の日の夜のてうかく（調楽）は。けにおかしかりけり。わかやかなる殿上人なと。いかになこりつれ〳〵ならん。たか松（明子）のこきんたちさへ。こたみいらせ給し夜よりは。女房ゆるされてまもなくとをりありき給へは。いとはしたなけなりや。さたすきぬるを。かうにてそかくろふる。五せちこひしなとも。ことにおもひたらす。やすらひ。こ兵衛なとや。その裳のすそかさみにまつはれてそ。こ鳥のやうにさへつり。されおはさうすめる。臨時の祭の使は。との〻権中將（教通）の君なり。その日は御物いみなれは。殿御とのゐさせ給へり。上達部も。まひ人の公達もこもりて。夜ひとよ。ほそ殿わたり。いとものゝさはかしき

けはひしたり。つとめて。うちのおほいとの〻（公季）御随身。このとの〻みすいしんにさしとらせていにける。ありしはこのふたに。しろかねのさうしはこをすへたり。か〻みをしいれて。ちんのくし。白かねのかうかいなと。使のきみのひんか〻せ給へきけしきをしたり。はこのふたに。あしてにうちいてたるは。日かけの返事なめり。文字二つ落てあやうし。とのゝ心たかひても有かなと見えしは。かのおと〻の。宮よりと心え給て。かうこと〳〵しくしなし給へるなりけりとそき〻侍りし。はかなかりしたはふれわさを。いとをしうこと〳〵しうこそ。殿のうへも。まうのほりて物御らんす。使のきみの藤かさして。いともの〳〵しくおとなひたまへるを。くらの命婦は舞人にはめも見やらす。打まもり〳〵そなきける。御物いみなれは。御社より。丑の時にそかへりまいれは。御かくらなともさまはかりなり。かねときか。こぞまてはいとつき〳〵しけなりしを。こよなくをとろへたるふるまひそ。みしるましき人の上なれと。あはれにおもひよそへらる〻ことおほく侍る。しはすの廿九日にまいる。はしめて参りしも。こよひのことそかし。いみしくも夢路にまとはれしかなと思ひ出れは。こよなく立なれにけるも。うとましの身のほとやとおほゆ。夜いたうふけにけり。御物いみにおはしましけれは。おまへにもまいらす。心ほそくて打ふしたるに。まへなる人々の。うちわたりは。猶いとけはひことなりけり。さとにては。今はねなましものを。さもいさときくつのしけさかなと。色めかしくいひゐたるをき〻て。

年暮て我世更行風の音に心のうちの冷しき哉

とそ獨こたれし。つこもりのよ。ついなはいととくはてぬれは。はくろめつけなと。はかなき

つくろひともすとて。うちとけゐたるに。辨の内侍きて。物かたりして臥給へり。たくみのくら人は。なけしのしもにゐて。あてきか。ぬふものゝかさね。ひねりをしへなと。つく〳〵としゐたるに。おまへのかたにいみしくのゝしる。内侍をこせと。とみにもおきす。人のなきさはくをとのきこゆるに。いとゆゝしく。物も覺えす。ひかとおもへとさにはあらす。たくみのきみ。いさ〳〵とさきにをしたてゝ。ともかうも宮しもに おはします。先まいりて見奉らんと。内侍をあらゝかにつきおとろかして。三人ふるふ〳〵。あしもそらにてまいりたれは。はたかなる人そふたりゐたる。ゆけひ。こ兵部なりけり。かくなりけりとみるに。いよ〳〵むくつけし。みつし所の人も。みないて。宮のさふらひも。たきくちも。なやらひはてけるまゝに。みなまかてゝけり。てをたゝきのゝしれと。いらへする人もなし。おものやとりのとし〔刀自〕をよひいてたるに。殿上に兵部丞とくら人よへよへと。はちも忘れてくちつからいひたれは。たつねけれとまかてにけり。つらきことかきりなし。式部丞すけなり〔資業〕そ參りて。ところ〳〵のさしあふらとも。たゝひとりさしいれられてありく。人々ものおほえすむかひゐたるもあり。うへより御つかひなとあり。いみしうおそろしうこそ侍しか。おさめとのにある御そとりいてさせて。この人々にたまふ。ついたちのさうそくはとらさりけれは。さりけもなくてあれと。はたかすかたはわすられすおそろしきものから。おかしうともいはす。こといみもしあへす。正月〔寛弘六〕一日。かん〔坎〕日なりけれは。わか宮の御いたゝきもちゐのことゝまりぬ。三日そまうのほらせ給ふ。としの御まかなひは大納言の君。さうそくついたちの日は。くれな

ゐ。えひそめ。からきぬは赤色。地すりの裳。二日。かうはいのをりもの。かいねりはこきあを色のから衣。いろすりの裳。三日は唐綾の櫻かさね。から衣はすはうのをりもの。かいねりは。こきをきるひは。くれなゐはなかに。紅をきる日は。こきをなかになと。れいのとなり。もえぎすはう。山吹のこきうすき。こうはいうす色なと。常の色々をひとたひにむつはかりとうはきとそ。いとさまよきほとに侍。さいしやうのきみの御はかしとりて。とのゝいたき奉らせ給へるに。つゝきてまうのほり給ふ。くれなゐのみへいつへ〳〵とませつゝ。おなし色のうちたる七へにひとへをぬひ。かさねかさねませつゝ。うへにおなし色のかたもんの五へうちき。えひそめのうきもむの。かたきのもんををりたる。ぬひさまさへかど〳〵し。みへかさねの裳。赤色のから衣ひとへのもんををりてしさまも。いとからめいたり。いとおかしけに。かみなともつねよりつくろひまして。やうたいもてなしらう〳〵しくおかし。たけたちよきほとに。ふくらかなる人のかほ。いとこまかににほひおかしけなり。大納言の君は。いとさゝやかにちいさしといふへきかたなる人の。しろうゝつくしけに。つふ〳〵とこえたるか。うはへはいとそひやかに。かみたけに三すんはかりあまりたる。すそつきかんさしなとそ。すへてにるものなく。こまやかにうつくしきかほも。いとらう〳〵しく。もてなしなと。らうたけになよひか也。せんしのきみは。さゝやけ人の。いとほそやかにそひへて。かみのすちこまやかにきよらにて。おひさかりのするより一尺はかりあまり給へり。いと心はつかしけに。きはもなくあてなるさまし給へり。物よりさしあゆみていてておはしたるも。わ

つらはしう心つかひせらるゝこゝちす。あてなる人はかうこそあらめと。心さまものうちのたまへるもおほゆ。この次に。人のかたちをかたりきこえさせは。物いひさかなくや侍るへき。たゝいまおや。さしあたりたる人のとはわつらはし。いかにそやなと。すこしもかたほなるはいひ侍らし。宰相の君は。北野三位のよ。ふくらかに。いとやうたいこまめかしう。かと〳〵しきかたちしたる人の。うちゐたるよりも。みもてゆくに。こよなくうちまさりらうらうしくて。くちつきにはつかしけさも。にほひやかなることもそひたり。もてなしなと。いとひゝしくはなやかにそみえ玉へる。心さまもいとめやすく。心うつくしき物から。又いとはつかしき所そひたり。こ少將の君は。そこはかとなくあてになまめかしう。二月はかりのしたり柳のさましたり。やうたいいとうつくしけに。もてなし心にくゝ。心はへなとも。わか心とはおもひとるかたもなきやうにものつゝみをし。いとよをはちらひ。あまり見くるしきまてこめい給へり。はらきたなき人。あしさまにもてなし。いひつくる人あらは。やかてそれにおもひいりて。身をもうしなひつへく。あへかにわりなきところつい給へるそ。あまりうしろめたけなる。宮の内侍そ。又いときよけなる人。たけたちいとよきほとなるか。ゐたるさますかたつき。いともの〳〵しく。いまめいたるやうたいにて。こまかにとりたてゝ。おかしけともみえぬ物から。いとものきよけにうゐ〳〵しく。なかたかきかほして。色のあはひ白きなと人にすくれたり。かしらつき。かんさし。ひたひつきなとそ。あな物きよけと見えて。はなやかにあいきやうつきたる。たゝありにもてなして。心さまなともめやすく。露はか

り何方さまにも。うしろめたいかたなく。すへてさこそあらめと。人のためしにしつへき人からなり。えんかりよしめくかたはなし。式部のおもとは。をとうとなり。いとふくらけさすきて。こえたる人の。色いとしろくにほひて。かほそいとこまかによしはめる。かみもいみしくうるはしくて。なかくはあらさるへし。つくろひたるわさして。宮にはまいる。ふとりたるやうたいの。いとおかしけにも侍しかな。まみひたひつきなと。まことにきよけなり。うちゑみたる。あいきやうもおほかり。わかうとの中に。かたちよしと思へるは。小たいふ。源式部。小たいふはさゝやかなる人の。やうたいいと今めかしきさまして。かみうるはしく。もとはいとこちたくて。たけに一尺よあまりたりけるを。おちほそりて侍り。かほもかと〳〵しう。あなおかしの人やとそみえて侍。かたちはなをすへき所なし。源式部は。たけよきほとにそひやかなるほとにて。かほこまやかに。見るまゝに。いとおかしく。らうたけなるけはひ。ものきよくかはらかに。人のむすめとおほゆるさましたり。こ兵衛丞なとも。いと清けに侍り。それらは。殿上人のみのこすすくなか・り。たれもとりはつしてはかくれなけれと。人くまをもようゐするに。かくれてそ侍るかし。宮木の侍従こそ。いとこまかにおかしけなりし人。いとちいさくほそく。猶わらはにてあらせまほしきさまを。心とおひつきやつしてやみ侍にし。かみのうちきにすこしあまりて。するゑをいとはなやかにそきて參侍しそ。はてのたひなりける。かほもいとよかりき。五節の辨といふ人侍り。平中納言のむすめにして。かしつくと聞えしか。ゑにかいたるかほして。ひたひいたうはれたる人の。ましりいたうひき

く。かほもこゝはと見ゆる所なく。いとしろう。手つき。かいなつき。いとおかしけに。かみは。みはしめ侍し春は。たけに一尺はかりあまりて。こちたくおほかりけなりしか。あさましうわけたるやうにおちて。すそもさすかにほそらす。なかさはすこしあまりて侍めり。こまといふ人。かみいとなかく侍りし。むかしはよきわかうと。いまは琴柱に膠さすやうにてこそ。さとゐして侍なれ。かういひ〳〵て。心はせそかたう侍るかし。それもとり〳〵に。いとわろきもなし。又すくれておかしう心おもく。かとゆへもよしも。うしろやすさも。みなくするをはかたし。さま〳〵いつれをかとるへきとおほゆるそ多く侍る。さもけしからすも侍るをゝもかな。齋院（選子）に。中將の君といふ人侍るなり。聞侍るたよりありて。人のもとにかきかはしたる文を。みそかに人とりてみせ侍

し。いとこそえんに。われのみ世にはものゝゆへしり。心ふかきたくひはあらし。すへてよの人は。こゝろもきもゝなきやうに思て侍るへかめる。見侍しにすゝろに心やましう。おほやけはらとか。よからぬ人のいふやうに。にくゝこそおもふ給へられしか。文かきにもあれ。歌なとのおかしからんは。わか院より外に誰かみしり給ふ人のあらん。よにおかしき人のおひいては。わか院こそ御らむししるへけれなとそ侍る。けにことはりなれと。わか方さまのことをさしもいはゝ。さい院よりいてきたる歌の。すくれてよしと見ゆるも。ことに侍らす。たゝいとおかしう。よし〳〵しうはおはすへかめる所のやうなり。さふらふ人をくらへていとまんには。このみ給ふるわたりの人に。かならすしもかれはまさらしを。つねにいりたちてみる人もなし。おかしきゆふ月よ。

ゆへある有明。花のたより。郭公のたつね所にまいりたれは。院はいと御心のゆへおはして。所のさまは。いと世はなれかむさひたり。又まさるゝこともなし。うへにまうのほらせ給ふ。もしは殿なむまいり給。御とのゐなるなと。ものさはかしきおりもましらす。もてつけ。そのつからしりこのむ所となりぬれは。えんなることゝもをつくさん中に。なにのあふなきいひすくしをかはし侍らん。かういとむもれ木を折いれたる心はせにて。かの院にましらひ侍らは。そこにて。しらぬ男に出あひ。ものいふとも。人のあふなき名を。いひおほすへきならすなと。心ゆるかして。そのつから。なまめきならひ侍りなんをや。ましてわかき人のかたちにつけて。としのよはひにつゝましきことなきか。そのか心に入てけさうたち。ものをもいはんと。このみたちたらんは。

こよなう人にをとるも侍るまし。されとうちわたりにて。明くれ見ならしきしろひ給ふ女御きさいおはせす。その御かたかのほそ殿と。いひならふる御あたりもなくおとこも女も。いとましきこともなきにうちとけ。宮のやうとして色めかしきをは。いとあはくしとおほしめいたれは。すこしよろしからんと思ふ人は。おほろけにていてゐ侍らす。こゝろやすくものはちせす。とあらんかゝらむのなをもおしまぬ人。はたことなる心はせのふるもなくやは。たゝさやうの人の。やすきまゝにたちよりてうちかたらへは。中宮の人。うもれたり。もしはようゐなしなとも。いひ侍るなるへし。上らう中らうのほとそ。あまりひきいり。さうすめき（上手際）てのみ侍るめる。さのみして宮の御ためものゝかさりにはあらす。見くるしとも見侍り。これらをかくえりて侍るや

うなれと。人は皆とり〳〵にて。こよなうをとりまさることも侍らす。そのこととけれは。かのことをくれなとそ侍るめるかし。されとわかうとたに。おもりかならんと。まめたち侍るめる。世にみくるしうされ侍らむも。いとかたはならん。たゝ大かたを。いとかくなさけなからすもかなとみ侍る。されは宮の御心あかぬ所なく。らう〳〵しく心にくゝおはします物を。あまりものつゝみせさせ給へる御心に。なにともいひいてし。いひ出たらんも。うしろやすく。はちなき人は。世にかたわものとおほしならひたり。けに物のおりなと。なか〳〵なることしいてたる。をくれたるにはをとりたるわさなりかし。ことにふかきよういなき人の。所につけて。われはかほなるか。なまひか〳〵しきことも。物のおりにいひいたしたりけるを。またいとおさなきほとにおはしまして。よにな

うかたわなりと。聞しめしおほしゝみにけれは。たゝことなるとかなくてすくすを。たゝめやすきことにおほしたる御けしきに。うちこめいたる人のむすめともは。みないとようかなひきこえさせたるほとに。かくならひにけるとそ心えて侍る。今はやう〳〵おとなひさせ給まゝに。世のあへきさま。人の心のよきも。あしきも。過たるも。をくれたるも。みな御らんししりて。この宮わたりのことを。殿上人もなにもめなれて。ことにおかしきことなしと。おもひいふへかめりと。みなしろしめいたり。さりとて。心にくゝもありはてす。とりはつせは。いとあはつけいこともいてくる物から。なさけなくひきいれたる。かうしてもあらなんとおほしの給はすれと。そのならひなをりかたく。又いまやうのきんたちといふもの。たふるゝかたにて。あるかきりみなまめ人なり。齋院な

とやうの所にて月をも見 花をもめつる。ひたふるのえんなること也。をのつからもとめ思ひてもいふらむ。朝夕たちましり。ゆかしけなきわたりに。たゝことをもきゝよせ。うちいひ。もしはおかしきことをもいひかけられて。いらへはちなからずすへき人なむ。よにかたくなりにたるそ。人々はいひ侍るめる。みつからえ見侍らぬことなれは。えしらすかし。かならす人のたちより。はかなきいらへをせんからに。にくいことをひきいてんそあやしき。いとよう。さてもありぬへきことなり。これを人の心有かたしとはいふに侍めり。なとかかならすしも。おもにくゝひき入たらんかかしこからむ。又なとて。ひたゝけてさまよひさしいつへきそ。よきほとに。おり／＼の有さまにしたかひてもちひんことの。いとかたきなるへし。まつは宮の大夫まいり給て。けいせさせ給へきことありけるおりに。いとあへかにこめい給ふ。上らうたちはたいめんし給ふことかたし。又あひても。なにことをかはか／＼しくの給ふへくも見えす。ことはのたるましきにもあらす。心のをよふましきにも侍らねと。つゝましはつかしとおもふに。ひかこともせらるゝを。あいなし。すへてきかれしと。ほのかなるけはひをも見えし。ほかの人は。さそ侍らさなる。かかるましらひなりぬれは。こよなきあて人も。みなよにしたかふなるを。たゝひめきみなからのもてなしにそ。みなものし給ふ。下らうのいてあふを。大納言こゝろよからすとおもひ給たなれは。さるへき人々さとにまかて。つほねなるも。わりなきいとまにさはるおり／＼は。たいめんする人なくて。まかて給時も侍なり。其ほかのかんたちめ。宮の御かたにまいりなれ。物をもけいせさせ給は。をの／＼の心よ

せの人。そのつからとりとりにほのしりつゝ。その人ないおりは。すさましけにおもひて立いつる人々の。ことにふれつゝ。この宮わたりのこと。うもれたりなといふへかめるもことはりに侍る。齋院わたりの人も。これをおとしめ思ふなるへし。さりとてわか方のみところあり。ほかの人はめも見しらし。物をもきゝとゝめしとおもひあなつらんそ。又わりなき。すへて人をもとくかたはやすく。我こゝろをもちひんことはかたくいわさを〔かたかへいわさイ〕。さはおもはて。まつわれさかしに。人をなきになし。よをそしるほとに。心のきはのみこそ。見えあらはるめれ。いと御らんせさせまほしう侍し文かきかな。人のかくしをきたりけるを。ぬすみてみそかに見せて。とりかへし侍にしかは。ねたうこそ。いつみしきふといふ人こそ。おもしろうかきかはしける。されといつみはけしからぬかたこそあれ。うちとけてふみはしりかきたるに。そのかたのさえある人。はかないこと葉のにほひも見え侍めり。うたはいとおかしきこと。ものおほえ。かた〔うイ〕のことはり。まことの歌よみさまにこそ侍らさめれ。くちにまかせたることともに。かならすおかしき一ふしの。めにとまるよみそへ侍り。それたに人のよみたらん歌。なむしことはりゐたらんは。いてや。さまて心はえし。口にいとうたのよまるゝなめりとそ見えたるすちに侍かし。はつかしけのうたよみやとは覺え侍らす。たんはのかみの北のかたをは。宮殿なとのわたりには。まさひら衛門とそいひ侍る。ことにやんことなきほとならねと。まことにゆへ〳〵しく。歌よみとて。よろつのことにつけてよみちらさねと。聞えたるかきりは。はかなき折ふしのことも。それこそはつかしきくちつきに侍れ。やゝもせは。こしはなれぬは

かりおれかゝりたるうたをよみいて。えもいはぬよしはみことしても。われかしこにおもひたる人。にくゝも。いとをしくも。おほえ侍るわさなり。清少納言こそ。したりかほにいみしう侍りける人。さはかりさかしたち。まなかきちらして侍るほとも。よく見れは。またいとたへぬことおほかり。かく人にことならんとおもひこのめる人は。かならす見をとりし。行すゑうたてのみ侍れは。えんになりぬる人は。いとすこうすゝろなるおりも。物のあはれにすすみ。おかしきことも見すくさぬほとに。をのつから。さるましくあたなるさまにもなるに侍へし。そのあたになりぬる人のはて。いかてかはよく侍らん。かくかた〳〵につけて。一ふしのおもひいてとるへきことなくて。すくし侍ぬる人の。ことに行すゑのたのみもなきこそ。なくさめおもふかたゝに侍らねと。心すこうもてなす身をとたに思ひ侍らし。その心なをうせぬにや。物おもひまさる秋の夜も。はしに出ゐてなかめは。いとゝ月やいにしへをめてけんとみえたる有さまを。もよほすやうに侍るへし。世の人のいむといひ侍とかをも。かならすわたり侍なんと。はゝかられて。すこしおくにひき入てそ。さすかに心のうちには。つきせすおもひつゝけられ侍。風の涼しき夕くれ。きゝよからぬひとりことをかきならしては。なけきくはゝると聞しる人やあらんと。ゆゝしくなとおほえ侍るこそ。をこにもあはれにも侍けれ。さるは。あやしうくろみすゝけたるさうし（曹司）に。さうのことわこんしらへなから心に入て。雨ふる日ことちたうせなともいひ侍らぬまゝに。ちりつもりて。よせたてたりしつしとはしらのはさまに。くひさし入つゝ。ひはも左右にたて侍り。おほきなるつしひとよろ

ひに。ひまもなくつみて侍もの。ひとつにはふる歌ものかたりの。えもいはすむしのすになりにたる。むつかしくはいちれは。あけてみる人も侍らす。かたつかたに。ふみともわさとをきかさねし。人も侍らすなりにしのち。てふる人もことになし。それらを。つれ〳〵せめてあまりぬる時。ひとつふたつひき出て見侍るを。女房あつまりて。おまへはかくおはすれと。御さいはひはすくなきなり。なてう女かまんな（眞名）ふみはよむ。むかしは經よむをたに。人はせいしきと。しりうこちいふをきゝ侍るにも。物いみける人の。ゆく末いのちなかゝるめる。よしともみえぬためしなりと。いはまほしく侍れと思ひくまなきやうなり。ことはたさもあり。よろつのこと。人によりてこと〳〵なり。ほこりかにきら〳〵しく。心地よけにみゆる人有。よろつつれ〳〵なる人の。まきるゝこ となきまゝに。古きほんこ（反古）ひきさかし。をこなひかちにくちひゝらかし。ずゞのをとたかきなと。いと心つきなく見ゆるわさなりと思給へて。心にまかせつへきことをさへ。わかつかふ人のめにはゝかり心につゝむ。まして人の中にましりては。いはまほしきことも侍れと。いてやとおもほえ。心うましき人には。いひてやくなかるへし。物もときうちし。我はと思へる人の前には。うるさけれは。ものいふこともものうく侍。ことにいとしも物のかた〳〵えたる人はかたし。たゝわか心のたてつるすちをとらへて。人をはなきになすめり。それこゝろより外の我おもかけをはつとみれと。えさらすさしむかひ。ましりゐたることたにあり。しかしかさへもとかれし（とイ）と（かなイ）。はつかしきにはあらねとむつかしくおもひて。ほけられたる人に。いとゝなりはてゝ侍れは。かうはをしはから

さりき。いとえんにはつかしく。人に見えにく
けに。そは〳〵しきさまして物かたりこのみ。
よしめき歌かちに。人を人ともおもはす。ねた
けに見おとさんものとなん。みな人々いひお
もひつゝにくみしを。みるにはあやしきまて
おいらかに。こと人かとなんおほゆるとそ。み
ないひ侍るにはつかしく。人にかうおひらけ
物と。見おとされにけるとは思ひ侍れと。た
たこれそ。わか心とならひもてなし侍ありさ
ま。宮のおまへも。いとうちとけてはみえし
となんおもひしかと。人よりけにむつましう
なりにたるこそと。の給はするおり〳〵侍り。
くせ〳〵しくやさしたち。はちられ奉る人に
も。そはめたてられて侍らまし。さまよう。す
へて人は。おいらかにすこし心をきて。のとや
かにおちゐぬるをもとゝしてこそ。ゆへもよ
しも。おかしくうしろやすけれ。もしは。いろ
めかしくあた〳〵しけれと。本性の人からく
せなく。かたはらのため見えにくきさませす
たになりぬれは。にくうは侍るまし。我はとく
すしく。くちもちけしきこと〳〵しくなりぬ
る人は。たちゐにつけて。われよういせらるゝ
ほとに。その人にはめとゝまる。めをしとゝめ
つれは。かならすものをいふこと葉の中にも。
きてゐるふるまひ。たちていくうしろてにも。
かならすくせは見つけらるゝわさに侍り。物
いひすこしうちあはすなりぬる人と。人のう
へうちおとしめつる人とは。ましてみゝも
めも。たてらるゝわさにこそ侍へけれ。人のく
せなきかきりは。いかてはかなきことのはを
もきこえしとつゝみ。なけのなさけつくらま
ほしう侍り。人すゝみて。にくいことしいてつ
るは。わろきことをあやまちたらむも。いひわら
はんに。はゝかりなうおほえ侍り。いと心よか

らん人は。我をにくむとも。われは猶人を思ひうしろむへけれと。いとさしもえあらす。しひふかうおはする佛たに。三ほうをそしる罪は。淺しとやはとき給ふなる。まいてかはかりににこりふかき世の人は。猶つらき人はつらかりぬへし。それを・まさりていはんと。いみしきことのはをいひつけ。むかひゐてけしきあしうまもりかはすとも。さはあらすもてかくし。うはへはなたらかなるとのけちめそ。心のほとはみえ侍るかし。さゐものないしといふ人はへり。あやしうすゝろに。よからす思ひけるも。えしり侍らぬ。心うきしりうとのおほうきこえ侍し。うちのうへの。源氏の物語人によませ給ひつゝ。聞しめしけるに。この人は日本紀をこそよみ給へけれ。まことにさえ有へしとのたまはせけるを。ふとをしはかりに。いみしくなむさえあると。殿上人なとにいひちらして。日本紀の御つほねとそつけたりける。いとおかしくそ侍る。このふるさとの女のまへにてたに。つゝみ侍るものを。さる所にてさえさかしいて侍らむよ。この式部丞といふ人のわらはにて。ふみよみ侍しとき聞ならひつゝ。かの人はをそうよみ。とりわするゝ所をも。あやしきまてそさとく侍しかは。ふみに心いれたるおやは。くちおしう。おのこにてもたらぬこそさいはひなかりけれとそ。つねになけかれ侍し。それを男たにさえかりぬる人は。いかにそや。はなやかならすのみ侍めるよと。やう／＼人のいふも聞とめてのち。いちといふもじをたにかきわたし侍す。いとてつゝにあさましく侍り。よみしふみなといひけん物。めにもとゝめすなりて侍しに。いよ／＼かゝると聞侍りしかは。いかに人もつたへきゝてにくむらんと。はつかしきに。御屛風のかみに

かきたることをたに。よまぬかほをし侍しを。宮のおまへにて。文集の所々よませ給なとして。さるさまのこと。しろしめさせまほしけにおほいたりしかは。いとしのひて。人のさふらはぬものゝひま／＼に。をとゝしの夏ころより。樂府といふゝみ二くわんをそ。しとけなく。かうをしへたて聞えさせてはへるも。かくし侍り。宮もしのひさせ給しかと。殿もうちも。けしきをしらせ給て。御ふみともをめてたうかゝせ給てそ。殿は奉らせ給ふ。まことにかうよませ給なとすること。はた。かのものいひの内侍はえきかさるへし。しりたらはいかにそしり侍らむものと。すへて世中ことわさしけく。うきものに侍りけり。いかにいまは。ことといみし侍らし。人。といふともかくいふとも。たゝあみた佛にたゆみなくきやうをならひ侍らむ。世のいとはしきことは。すへて露はかりこゝろもとまらすなりにて侍れは。ひしりにならんに。けたいすへうも侍らす。たゝひたみちにそむきても。雲にのほらぬほとの。たゆたふへきやうなん侍へかなる。それにやすらひ侍なり。年もはたよきほとになりもてまかる。いたうこれよりおいほれて。はためつらにきやうよます。心もいとゝたゆさまさり侍らん物を。心ふかき人まねのやうにはへれと。今はたゝ。かゝるかたのことをそおもひ給ふる。それつみふかき人はまたかならすしもかなひ侍らし。さきの世しらるゝことのみおほく侍れは。よろつにつけてそかなしく侍る。御ふみにえかきつゝけ侍らぬことを。よきもあしきも。世にあること。身のうへのうれへにても。のこらす聞えさせをかまほしう侍そかし。けしからぬ人を思ひきこえさすとても。かゝるへきことやは侍。されと。つれ／＼におはしますらん。またつれ

つれの心を御らんせよ。又おほさむことの。いとかうやくなしことおほからすとも。かゝせ給へ。みたまへん。ゆめにてもちり侍らはいといみしからん。また〳〵もおほくそ侍る。この比。ほんこともみなやりやきうしなひ。ひいななとの屋つくりに。この春し侍にしのち。人のふみも侍らす。かみにわさとかゝしとおもひ侍そ。いとやつれたる。ことわろきかたには侍らす。こと更に御らんしては。とう給はらん。えよみ侍らぬ所ところ。もしおとしそ侍らん。それはなにかは。御らんしももらさせ給へかし。かく世の人ことのうへをおもひ〳〵て。はてにとちめ侍れは。身を思ひすてぬ心の。さもふかう侍るへきかな。なにせんとにか侍らむ。十一日のあかつき。御堂へわたらせ給ふ。御車にはとののうへ。人々は舟に乗てさしわたりけり。それにはをくれて。ようさりまいる。教化をこなふところ。山寺のさはうゝつして。大さん悔す。しらいたうなと。おほうゑにかいて。けうしあそひ給ふ。上達部おほくはまかて給て。すこしそとまり給へる。後夜の御たうしけう化とも。説相みな心々。廿人なから。宮のかくておはしますよしを。こちかひきしなことはたえて。わらはるゝこともあまたあり。ことはてて。殿上人舟にのりて。みなこきつゝきてあそふ。みたうのひんかしのつま。北むきにをしあけたるとのまへ。池につくり。おろしたるはしのかうらんをゝさへて。宮の大夫はゐ給へり。殿あからさまにまいらせ給へるほと。宰相の君なと物かたりして。おまへなれは。うちとけぬようい。内も外もおかしきほとなり。月おほろにさし出て。若やかなる君達。今様うたうたふも。ふねにのりおほせたるを。わかうおかしく聞ゆるに。大くら卿正光のおふな〳〵

ましりて。さすかに聲うちそへんもつゝましきにや。忍ひやかにてゐたる。うしろてのおかしうみゆれは。みすのうちの人も。みそかにわらふ。舟のうちにや。おいをはかこつらむといひたるを聞つけ給へるにや。大夫。徐福文成誑誕おほしと。うちすしたまふ。こゑもさまも。こよなういまめかしくみゆ。池のうき草とうたひて。ふえなと吹あはせたる。曉かたの風のけはひさへそ心ことなる。はかないことも。所から折からなりけり。源氏の物語おまへにあるを。とのゝ御らんして。れいのすゝろこともいてきたるついてに。むめのえたにしかれたるかみにかゝせ給へる。

すき者と名にし立れは見人のおらて過るはあらしとそ思ふ

たまはせたれは。

人にまたおられぬ者を誰か此すきものそとは口ならしけん

めさましうときこゆ。わた殿にねたる夜。とをたゝく人(道長)ありときけと。おそろしさに音もせてあかしたるつとめて。

新勅 よもすからくゐなよりけに泣々そ槇のとくちに叩侘つる

かへし。

同 只ならしとはかり叩く水鷄故あけてはいかに悔しからまし

(寛弘七) ことし正月三日まて。宮たちの御いたゝきもちゐに。日々にまうのほらせ給ふ。御ともに。みな上臈もまいる。左衛門のかみいたい奉り給て。殿もちゐはとりつきて。うへに奉らせ給。ふたまの東のとにむかひて。上のいたゝかせたてまつらせ給ふなり。おりのほらせ給きしき。見ものなり。大宮はのほらせ給はす。ことしのついたち。御まかなひ宰相の君。れいのものゝ色あひなと。ことにいとおかし。藏人はたくみひやうこつかうまつる。かみあけたるかたちなとこそ。御まかなひはいとことにみえ給へ。わりなしや。くすりの女官にてふやの

はかせさかしたち。さひらきゐたり。たうやくくはれゐ。れいのとゝもなり。二日。宮の大饗はとまりて。臨時客。ひんかしおもてとりはらひて。れいのことしたり。上達部は。傅大納言。右大將。中宮大夫。四條大納言。權中納言。侍從の中納言。左衞門督。ありくにの宰相。大藏卿。左兵衞督。けん宰相。むかひつゝゐ給へり。源中納言。左兵衞督。左右宰相中將は。なけしのしもに。殿上人の座のかみにつき給へり。わか宮いたきいて奉り給て。れいのことゝもいはせ奉り。うつくしみ・きこえさせ給ふ。うへに。いと宮いたき奉らんと。殿のたまふを。いとねたきことにし給て。あゝとさいなむを。うつくしかりきこえ給て申たまへは。右大將なと。けうし聞え給ふ。うへにまいり給て。うへ殿上に出させ給て。御あそひありけり。とのれいのゑはせ給へり。わつらはしとおもひて。かくろへゐたるに。なと。御てゝの。御まへの御あそひにめしつるに。さふらはて。いそきまかてにける。ひかみたりなと。むつからせ給へる。さるは。歌一つつかうまつれ。おやのかはりに。はつねの日なり。よめ〳〵とせめさせ給ふ。うちいてんに。いとかたわならん。こよなからぬ御ゑいなめれは。いとゝ御いろあひきよけに。ほかけはなやかにあらまほしくて。年比。宮のすさましけにて。ひとゝころおはしますを。さうさうしく見奉りしに。かくむつかしきまて。ひたりみきに見たてまつるこそうれしけれと。おほとのこもりたる宮たちを。ひきあけつゝ。み奉りたまふ。野へに小松のなかりせはと。うちすしたまふ。あたらしからんことよりも。おりふしの人の有さま。めてたくおほえさせ給ふ。又の日夕つかた。いつしかとかすみたる空を。つくりつゝけたる軒のひまなさに

て。たゝわた殿のうへのほとをほのかに見て。中つかさのめのとゝ。よへの御くちすさみをめてきこゆ。この命婦そ。ものゝ心えて。かとかとしくは侍人なれ。あからさまにまかてゝ。二の宮の御いかは。正月十五日。その曉まいるに。こ少將のきみ。あけはてゝ。はしたなくなりたるにまいり給へり。れいのおなし所にゐたり。ふたりのつほねをひとつにあはせて。かたみに。さとなるほともすむ。ひとたひにまいりては。木丁はかりをへたてにてあり。殿そわたらせ給。かたみにしらぬ人も。かたらはるゝなと聞にくゝ。されとたれもさるうと〳〵しきことなければ。心やすくてなん。日たけてまうのほる。かの君は。さくらのをりものゝうちき。あかいろのから衣。れいのすり裳き給へり。紅梅に。もえき。柳のからきぬ。ものすりめなといまめかしければ。とりもかへつへくそ。

わかやかなるうへ人とも十七人そ。宮の御かたにまいりたる。いと宮の御まかなひは橘三位。とりつく人。はしには。こ大夫。式部。うちには。こ少將。　御かと。きさい。みちやうの中に。二ところなからおはします。朝日の光あひてまはゆきまて はつかしけなる御まへなり。うへは御なをし。こくち奉り。宮はれいのくれなゐの御そ。こうはい。もえき。柳。山吹の御そ。うへにはえひそめのをりものゝ御そ。柳のうへしろの御こうちき。もんも色もめつらしくいまめかしき奉れり。あなたは。いとけそうなれは。このおくに。やをらすへりとゝまりてゐたり。中つかさのめのと。宮いたき奉りて。御丁のはさまより みなみさまにゐて奉る。こまかにそは〳〵しくなとはあらぬかたちの。たゝゆるらかに。もの〳〵しきさまうちして。さるかたに人をしつへく。かと〳〵しきけは

ひそしたる。えひそめのをりものゝこうちき。むもんの青いろにさくらのからきぬきたり。その日の人のさうぞく。いつれとなくつくしたるを。袖くちのあはひ。わろうかさねたる人しも。御まへのものとりいるとて。そこらの上達部。殿上人にさしいてゝ。まほられつることとぞ。のちに宰相の君なとくちおしかり給めりし。さるはあしくも侍らさりき。たゝあはひのさためたるなり。こたいふはくれなゐ一かさね。うへにこうはいのこきうすきいつゝをかさねたり。からきぬさくら。源式部はこきに又紅梅のあやそきてはんへるめりし。をり物ならぬをわろしとにや。それあなかちのこと。けさうなるにしもこそ。とりあやまちのほのみえたらん。そはめをもえらせ給へけれ。きぬのをとりまさりは。いふへきことならす。もちゐまいらせ給ふことゝもはてゝ。御たいなと

まかてゝ。ひさしのみすあくるきはに。うへの女房は。御帳のにしおもてのひのおましに。をしかさねたるやうにて。なみゐたる。三位をはしめて。内侍のすけたちも。あまたまいれり。宮の人々は。わかうとは。なけしのしも。東のひさしの南のさうしはなちて。みすかけたるに上らうはゐたり。み丁のひんかしのはさま。たゝすこしあるに。大納言の君。こ少將のきみゐ給へる所に。たつねゆきて見る。うへは平敷の御座に御物まいりすへたり。おまへの物したるさま。いひつくさんかたなし。すのこに北むきに。にしをかみにて。上達部。左。右。うちのおほいとの。春宮大夫。中宮大夫。四條大納言。それよりしもはえみはへらさりき。御あそひあり。殿上人は。このたいのたつみにあたりたるらうにさふらふ。地下はさたまれり。かけまさの朝臣。これかせの朝臣。ゆきよし。と

もまさなとやうの人々。うへに。四條大納言はうしとり。頭辨ひは。ことは經孝朝臣。左の宰相中將さうのふえとそ。さうてうのころにてあなたうと。つきに。むしろ田。この殿なとうたふ。こくの物はとりのはきうをあそふ。とのさにも。てうしなとをふく。歌にはうしうちたかへてとかめらる。いせのうみにそありし。右のおとゝ。わこんいとおもしろしなと。きゝはやし給。されたまふめりし。はてにはいみしきあやまちの。いとをしきをこそ。見る人の身さへ。ひえ侍しか。御をくりものふえ二。はこにいれてとそみえ侍し。

邦高親王
御在判

右以伏見殿邦高親王御筆之本書寫一挍畢。

右紫式部日記以屋代弘賢藏本書寫以流布印本及扶桑拾葉集挍正畢

群書類從卷第三百二十二

日記部三

讚岐典侍日記上

（嘉承二）五月の空もくもらはしく田子のもすそもほしわふらむと。ことはりも見えさらぬたに。物むつかしきころしも。心長閑なる里居に。常よりもむかし今の事おもひつゝけられて。物あはれなれは。はしを見出してみれは。雲のたゝすまひそらのけしき。思ひしりかほに。村雲かちなるを見るにも。雲井の空といひけんひとも。ことはりと見えて。かきくらさるゝ心地そする。のきのあやめの雫にことならす。山ほとゝきすも諸ともに音をうちかたらひて。はかなく明る夏の夜なく〳〵すきもて。いそのかみふりにしむかしの事を思ひいてられて。泪とゝまらす。思ひ出れは我君につかうまつる事。春の花秋の紅葉を見ても。月の曇らぬ空をなかめ。雪のあした御とともに侍らひて。もろともに八年のはる秋つかうまつりし程。常は日出たき御事おほく。あしたの御をこなひ。夕の御笛の音わすれかたさに。なくさむやと。しいつる事ともかきつゝくれは。筆のたちともみえすきりふたかりて。硯の水に涙落そひて。水くきの跡もなかれあふこゝちして。泪そいとゝまさるやうに。かきなとせんに。まきれなとやするとて書たる事なれは。姨すて山になくさめ

かねられてたへかたくそ。六月廿日の事そかし。内(堀河)は例さまにもおほしめされさりし御けしき。ともすれはうちふしかちにて。是を人はなやむとはいふなと人々はめもみたてぬと仰られて。世をうらめしけにおほしたりしものを。ことおもらせさせ給はさりしおり。御祈をし。つゐに有ける御事をも。ゆつりまいらせらるゝと。我さたにもをよはぬ事さへそおほゆる。かくて七月六日より。御心地大事におもらせ玉ひぬれは。たれも月ころとても。例さまにおほしめしたりつる事は。かたきやうなりつれとも。これかやうにくるしけに見參らする事はなくて過させ給つる。かくおほしませは。いかならんするにかと。むねつふれて思ひあひたり。その比しも上﨟たちさはりありてさふらはれす。あるは子うみ。あるは母のいとま。今ひとりはとうよりもこもりゐて。此二三年まいられす。御めのとたち。藤三位ぬるみ心ちわつらひて參らす。辨三位は東宮(鳥羽)のはゝもおはしまさて。おひたゝせ給へは。心のまゝにさふらはるへくもなきに。あはせてそれも此ころ。おこり心地にわつらひて。たゝ大貳三位われくして三人そさふらふ。されはたゝあやしの人のわつらふたに。人のいとまいりしたしくあつかふ人おほくほしきに。是はまして。ほし(同イ)日のくるゝまゝに。たへかたけにおほしめしたれは。院(白河)にかくと案内申さする。おところかせ給ひて。ちかくて御ありさまきかんとて。俄に北の陣に御幸ありてと奏す。かくくるしうおほしめしたれは。おほとなふら例よりもちかく參らせなとする程にたゝ消にきえ入せ給ひぬ。あないみしとなきあひて。内大臣(雅實)關白(忠實)殿まいりて。つと侍らはせ給ふ。大かたのゝしりあひたり。そうよ(増譽)僧正らいき(賴基)律師そうけん

律師なと召にやりつゝ。らいさ律師すなはち參りて。經よみ佛くときまいらせらるゝほとに。しはしはかりありて。打身しろきせさせ給ふに。今少しのゝしりあひぬ。經よまるゝをきかせ給ひて。今はやくあらし。たゝかりうつせよと仰られ出たれは。物つくものなとめして。ゐて參りうつさるゝ。おひたゝしさはをしはかるへし。うつりて其事とはいはて。かはめきのゝしるさまいとおそろし。すこし御かゆなとまいらすれは。めしなとすれは。嬉しさは何にかはにたる。大臣はあるかとゝはせ給へは。大とのいらせたまひて。さふらふよし申給へは。御幸は成ぬるかとゝはせ玉へは。しか成候ひぬと申させ給へは。まいりて申せ。今は何事もやくさふらはし。たてさせ給ふ尊勝寺にて。九壇の護摩と懺法とさふらふへきなり。又侍らはむすらん事は。なに事もこよひ侍らふへきそ。あすあさてさふらへき心地し侍らすとおほせらるれは。あまり護摩こそおひたゝしく侍らへと申給へは。こはいかにいふそ。かはかりに成たる事をはと仰らるれは。御なをしの袖を顔にをしあてゝ立たまひぬ。それをきかむ御めのとたちも。いかはかりおほえむ。大殿かへり參らせたまひて。されは去年をとゝしの御事にも。さるさたはさふらひしかと。宮の御年のおさなくおはしますによりて。けふまて侍らふにこそとなむはへると奏せらるゝにそ。何事もたゝこよひさためさふらふへきそと仰らるれは。さは此御事にこそ有けれと。今そ心うる。誰もいもねすまもりまいらせたれは。御けしきいとくるしげにて御あしをうちかけて仰らるゝやう。我はかりの人の。けふあすしなむとするを。かくめも見たてぬやうあらんや。いかゝみるとゝはせ給ふ。きくこゝちたゝむ

せかへりて。御いらへもせられす。たへかたけにまもりゐるけは。ひのしるきにや。とひやませ給ひて。大貳三位なけし（長押）のもとに侍らひ給ふを見つけ おはして。をのれはゆゝしくたゆみたる物かな。我はけふあすしなんするはしらぬかとおほせらるれは。いかて たゆみ侍らはむするそ。たゆみ侍らねと。ちからのをよひ侍らふ事に侍らはこそと申さ るれは。何か今たゆみたるそ。今心みんとおほせられて。いみしうくるしけにおはしたりけれは。かた時御かたはらはなれ參らせす。たゝ我め のとなとのやうに。そひふし まいらせて なく。あないみし。かくてはかなく ならせ給なむゆゝしさこそありかたくつかふまつりよかりつる御心のめてたさなと。思ひつゝけられて。めも心にかなふ物なりけれは露もねられすまもりまいらせて。ほとさへたへかたく暑き頃にて。御さう（障子）しとふさせ給へるとにつめられて。よりそひ參らせて。ねいらせ給へる御かほをまもらへ參らせて。泣より外の事そなき。いとかう何しになれ仕ふまつりけんと。くやしく覺ゆ。參りし夜よりけふ迄の事。おもひつゝくる心ち。たたをしはかるへし。こはいかにしつる事そとかなし。おとろかせ給へる御まみなと。日ころのふるまゝに。よはけに見えさせ給ふ。御とのこもりぬる御けしきなれと我はたゝまもりまいらせて。おとろかせ給ふらんに。みな寢入てとおほしめさは。物おそろしくそおほしめす。ありつる同しさまにて有けるとも御らんせられむと思ひて見參らすれは。御日よはけにて。御らんし合せて。いかにかくは寢ぬそと仰らるれは。御覽しるなめりと思ふも。たへかたくあはれにて。三位の御もとより。さき〳〵の御心地のおりも御かたはらに常にさふらふ人

の。見まいらするかよきに。よく見まいらせよ。おりあしき心地をやみて。まいらぬかわひしきなりと申せと。えそつゝけやらぬ。せめてくるしくおほゆるに。かくして心見ん。やすまりやすると仰られて。枕かみなるしるしの箱を。御むねの上にをかせ給ひたれは。まことにいかにたえさせ給ふらんとみゆるまで。御むねのゆるくさまそ。ことのほかに見えさせ給ふ。御いきもたえ〳〵なるさまにて聞ゆ。かほもみくるしからむと思へとかくおとろかせ給へるおりにたに。物まいらせ心見んとて。顔に手をまきらはしなから。御枕かみにをきたる御かゆやひるなとを。もしやとくゝめまいらすれは少しめし。又おほとのこもりぬ。あけかたに成ぬるに。鐘の音聞ゆ。あけなんとするにやとおもふに。いとうれしく。やう〳〵からすの聲なと聞ゆ。朝きよめの音なときくに。明はてぬと聞ゆれは。よし例の人たちおとろきあはれなは。かはりてすこしねいらむと思ふに。御格子參り。おほとなふらまかてなとすれは。やすまんと思ひてひとへを引かつくを御覽して。引のけさせたまへは。猶なねそとおもはせ給ふなめりとおもへはおきあかりぬ。おほい殿の三位。ひるは御まへをはたはからむ。休ませ給へとあれはおりぬ。待つけて。我もつよくてこそあつかひまいらせ給はめといふ。中々かくいふからにたへかたき心地そする。日のふるまゝに。いとよはけにのみならせ給へは。此度はさなめりと見[長治二]まいらするかなしさ。たたおもひやるへし。をとゝしの御心地のやうに。あつかひやめまいらせたらん。何心地しなんとそ覺ゆる。又人のほらせ給へとよひにきたれは參りぬ。物まいらせ心見んとて成けり。大貳三位。御うしろにいたき參らせて。もの

まいらせよとあれは。ちいさき御はんに。たゝ露はかりをきあからせ給へるを。みまいらすれは。今日なとはいみしうくるしけに。よにならせ給ひたるとみゆ。殿のうしろのかたより參らせ給ひけるも。例のやうになとして參らせ給ふこそしるけれ。此頃はたれもおりあしけれは。うちしめりならひておはしませは。いかてかはしるからむ。おとゝくと。いみしうくるしけにおほしめしなから。つけさせたまふ御心の有難さは。いかてか思ひしられさらん。かくくるしけなる御心地に。たゆますつけさせ給ふ御心の。哀に思ひしられて涙うくを。あやしけに御覽して。はか／＼しくもめさて。ふきせ給ひぬれは。又そひふし參らせぬ。かくおはしませは。殿もよるひるたゆますまいらせ給へは。いとゝはれにはしたなき心地すれは。三位殿も。おりにこそしたかへ。かはかりに成にたる事に。なんてう物はゝかりはするとあれは。いかゝはせんとてすくす。大とのちかく參らせ給へは。御ひさたかくなして。かけにかくさせ給へは。我もひとへをひきかつきてふしてきけは。御うらにはとそ申たる。かくそ申たる御祈はそれ／＼なん始りぬる。又十九日より。よき日なれは。御佛御修法のへさせ給ふと申させ給へは。それまての御命やはあらんすると仰らる。かなしさせきかねておほゆ。大殿たゝせたまひぬれは。引かつきたるひとへひきのけて。うちあふきまいらせなとするほとに。宮の御かたより宣旨仰かきにて。三位なとのさふらはるゝおりこそ。こまかに御ありさまもきゝ參らすれ。大かたの御かへりのみきくなんおほつかなき。むかしの御ゆかりには。そこをなんおなしう身におほしめす。今の御ありさまこまかに申させたまへとあり。た

かふみそととはせ給へは。何の御かたよりと申せは。ひるつかたのほらせ給へと仰事あれは。さかきて參らせ給へは。ひるつかたに成程に。道具なととりのけて。みな人々うちやすめとておりぬ。されともし。めす事もやとおもへは。御障子のもとに侍らふ。いかなる事ともをか申させ給ふらむ。いかてかはしらん。しはしはかり有て。御扇うちならしてめす。それとりてと仰らるへき事ありけれは。めして。猶障子たてゝよと仰らる。よくそおりてさふらひけると思ふ。なを仰らるゝ事有とみえたり。立のく。みさうしたてゝ。御扇ならさせ給へと申させ給ひけれは。御さうしあく事むこになりぬ。夕つかたかへらせ給ひぬれは。誰も／＼參りあひぬ。御けしきうちつけにや。かはりてそみえさせ給ふ。けふしかすこし夜のあけたる心地しておほゆれとおほせらるゝ。きく心地のうれしさ何にかはにたる。御まへにかなまり*にひのおほらかに入たるを御らんして。おれみれは心ちのさはやかに覺ゆる。ひのおほきならんひさけに入て。人とも集めてくはせてみむと仰らるれは。女房たちみな立のきぬ。大殿はかりそさふらはせ給ふ。大貳三位大殿の三位殿くして。夜のおとゝに入て。戸口に御き帳たてゝ。ほころひよりみれは。大殿なけしのもとに侍らせ給ひて。みすきはのもとになかなかと。左衞門督源中納言大臣殿の權中納言宰相中將左大辨なとめし入て。大臣殿ひとりて各にたふ。我もせんと覺したる。もてはやさんとなめりとみえて。ひとつとり給ひぬ。みきちやうのうちなる人。かやうにて一とせのやうにやませ給へかし。いかはかり嬉しからんと思ふ。くれはてぬれは。人々おほとなふらなと參らする程に。いみしう苦しけに覺しめさ

れたれは。殿たちいそき參らせ給ふて。そうよ僧正なとめしさはく。參り給へれは。御几帳たてゝ。われらはすへりのきてきけは。加持參り給ふ。經よみなとするけにや。しつまらせ給ひて。おほとのこもらせ給ふけしきなり。かくいふは十五日の事とそ覺ゆる。かやうにてこよひもあけぬれと。なをよはけに見えさせ給ふ。けふもくれぬ。十七日の曉に大貳三位あからさまにまかてゝ。此むねのたへかたく　おほゆれは。湯すこし心見て立かへり參らむとて。出給ひぬ。くるゝとひとしく參りたまひて。うち見まいらせて。あないみし。ひる見參らせさりつるほとに。はれさせ給ひにけりなと。いひあはせらるゝをきかせ給ふて。何事いふそと仰らるれは。ひるの程に　はれさせおはしましにけることを。申さふらふやと申さるれは。今は耳もはかへしく聞えすと仰られて。いとよはけに見えさせ給ふ。しはしはかりありて。此度はさるへきたひと覺ゆるそとおほせらるれは。つゝましけれと。なとさはおほしめすそと申せは。僧正の。さしもかしらよりくろけふりを立ていのれと。そのしるしと覺て。心ちのやすます。まさる心地のすれはと仰らるゝをきくは。何にかは似たる。明ぬれは。おほいとのまいり給ひて。院の御使にて。事ともありけなるけしきなれは。心なきこゝちしぬへけれはねたり。何事にかこまやかに申させ給ふ。御位ゆつりの事にやとそ心えらるゝ。申はてゝ。ふしたる所にさしよりて。御かたはらに參らせ給へといひかけて立たまひぬ。きのふより山のくちうさとも召たれは。十二人の供[久住者]従者まいりて。加持まいりのゝしるさまいとおひたゝし。せめておほしめしたるかたのなきにや。大臣殿をめし。院に申せ。一年の心地

にも。さもと仰られし。行尊めしてたへと申させ給へれは。やかてすなはち參りたれは。やかて枕かみちかくめしていのらせ給ふ。三井寺の人々は千手經をたもちたれは。それをそいとたふとくよまるゝ。御惱消除して壽命長からむと。ゆるゝかにすせ(誦)らるゝ。きくそたのもしき心地する。かやうにいみしき人たちあまたさふらひて。我もをとらしと祈り參らせらるゝけにや。御物のけあらはれて。りう僧正ら(頼)いか(豪)うなと名のりのゝしる人あらはれさせ給ふて。一とせの行幸の後。又見まいらせはやと。ゆかしくおもひ參らするに。そのとくなけれは。驚かしまいらするそといふをきかせ給ひて。いかにも此二三年。例さまに覺ゆる事のあらはこそ。行幸もあらめ。ちかきほとたになし。此こゝちやみたらはこそは。年の内にもあらめと仰らるゝほとより。くるしけにならせ給ひにたり。例の御かたより人つかはしたり。さる心なとなき人ときけと。せめて思ひやる方のなけれはいふなり。こなたへたゝ今のほりまいりなんや。道なとそふたかりて。かたはらいたくおほしめせとおほせられたれは。いかてかは參らしと申さん。承りぬと申たれは。さらは今の程にと仰られたれは參ぬ。はなれぬ人なれは。宣旨をそあそはさせ給ひて。御心地のありさまとはせ給ふ。文まいらするまゝに。申さんと。おひたゝしく申ちらしけりなともれ聞えて。あしき事もやなと覺ゆれは。さもえ申さす。又わさと召てとはせ給ふに。申さゝらんもあしかりぬへけれは。たゝのほりて見參らせ給へ。さはいみしうくるしけにみえさせ給ふと申せは。さはもしやとほりよからんひまにと申て。とくかへしつかはしつ。參りてみれは。殿や大臣殿院より戒うけさせ給ふへ

きなりと奏せさせ玉ふけりとて。せんせい法印めすへきさたせられ。その御もうけともせらるゝ程なりけり。かやうの後ならは。夜も明ぬへけれは。宮の御かたよりめしつれは。参りたりつれは。かう〳〵こそ仰られつれと申。道の所せはきそと。よはけに仰らるゝ。くるしけに覺しめしたり。殿にも。のほりてみせまいらせはやと申させ給ひけれは。今の程。宮のほらせ参らせん。物さはかしからぬさきにと思ふに。のほらせ給ひぬれは。御かたはらに人のなきかあしきそとさたせられて。そのよしを申されけるなめり。かへり参らせ給ひて。たゝすけはかりは侍らへと仰らるゝ。さて三位殿おはして。殿たち皆障子の外に出させたまひぬ。なけしのきはに。四尺の御几帳立られたり。御枕かみにおほとなふらちかく参らせて。あかあかとありけるに。そひふし参らせたり。はしたなき心地すれと。えのかす。宮のほらせたまひたると。あない申せは。いつらいつくなと仰らるゝは。無下に御耳もきかせ給はぬにやとおもふに。心うく覺ゆ。その御几帳のもとにと申せは。いつらと。御几帳のつまを引あけさせ給へは。こゝにと申させ給ふ。物なと申させたまはんとそおほしめすらんと思へは。御跡の方にすへりおりぬ。ちかひて。なけしの上に宮のほらせ給ひ。しはしはかり何事にか申させ給ふ。殿の御聲にて。久しうこそ成ぬれ。御かゆなとはや参らせんやと仰らるゝに。宮きかせ給ひて。今はさは歸りなん。あすの夜もと仰られて。かへらせ給ひぬ。例のかたはらに参りて。氷なと参らす。殿たちまいらせ給ふて。今は法印めし入よとて。ふたまなるけいなと参らせて。戒のさたせさせたまふ。法印まいらせ給ひぬれは。みき丁はかりへたてゝ。御なをし

とりてまいれと仰らるれは。取て參りたり。御手水まいらすへけれと。おきあからせ給ふへきやうなけれは。紙をぬらして御手なとのこはせ參らせなとする程そかなしき。御かうふりなと持てまいりたれは。するかせぬかのほとにをし入て。御なをし引かけて參らせたる。御ひもさゝむとおほしめしたるなめり。さゝんとせさせ給へと。御手もはれにたれは。えさせ給はぬ。みる心ちそ目もくれて。はか〳〵しう見えぬ。かね打ならして。事のおもむき申あきらめ給ふ。十戒を先の世にうけさせ給ひて。やふらせ給はさりけれはこそ。此世にて十善の位長くたもち。佛法をあかめ一切衆生をあはれみさせ給ふ心。いまたむかしより今に至るまて。かはかりの帝王おはしまさす。いとゝこよひの御戒のしるしに。すみやかに御惱清除せうさんして。百年の御命なかくたもたしめ給へと申さるゝ。きくにたゝ。今やませたまひぬるときこえてめてたき。さて御戒うけさせまいらすれは。いとよくたもつ〳〵と仰らるゝ。殿たち。たもつと仰らるゝやと申させ給へは。うなつかせ給ふ。うけさせまいらせはてゝ。法印出させたまへは。故右大臣の子にちやうかいあさりといふ人のもとよりさふらはるゝ。御枕かみに近くめしよせ仰らるゝやう。經すしてきかせよ。ちやうかいか聲きかむも。こよひはかりこそきかめと仰られて。いみしうくるしけにおほしめされたれと御涙もえ出す。それを聞ん心地。たれかはなのめなる心ちせん。たれもたへかたき心ちそする。あさりややもいらへなし。經の聲も聞えぬは。あれもためらはるゝなめりと聞ゆ。しはしはかりありて。すこし出されたるをきけは。方便品の比丘偈に。かゝるほとの長行をそよまるゝ。つくつ

くときかせ給ふて。衆中之糟糠備威徳故去といふ所より。御聲うちつけさせたまひて。露はかりかほとゝこほる所なく。ゆふ〳〵とよませたまふ。御聲たふときあさりの御聲をしけたれてきこゆ。あさりもとりわきて。そこをしもよみきかせ参らせらる。明暮一二の巻をうかめさせ給ふと。きゝをき給へる事なれはなめり。かゝる程に。三位のもとより。むけにおもくおはしますよし聞て。女房おこせてこまかの事きくに。威にけり。いませ給ふとも。まいりてつほねなからもきゝまいらせん。よそにてしからせ給ふ。のほらせ給へといへは。やかてくしてまいりぬ。みれは。大貳三位うしろのかたいたきまいらせて。大殿の三位。有つるまゝに。そひふし参らせられたり。御跡のかたについ居たれは。大貳三位。くるしうせさせ給へは申つるそ。そのあしとらへまいらさせ給へとあれは。とらへまいらせ給たり。御すせのこひなとせさせたまふ。大殿の三位。かくしつまらせ給へる程に。せまほしき事のあり。してまいらんとて。まいらせ給へとあれは。そひふしまいらせぬ。しはしはかり有て。例のちやうかいあさり。御几帳のそはにめし入て。觀音品讀てきかせよと仰らるれは。いとたふとくよみ給ふ。いかに覺しめすにか。偈をよめと仰らるゝ。おほしめすやうあるなめりと。心えかたし。大臣殿の三位歸り参られたれは。御足うちかけて。御手をくひに打かけさせたまへは。えはたらかねは。三位殿。我ゐたるやうに。御跡のかたにさふらはる。例の氷なと参らせ。御あせなとのこへとおほせらるれは。御枕かみなるみちのくに紙して。御ひんのわたりなとのこひ参らする程に。いみしくくるしくこそなかるれ。我は死なんする成けりと仰ら

れて。南無阿彌陀佛とぞ仰らるゝをきくに。たたにおはしますおりに。かやうの事は□□くの下人まて。いま〱しき事にこそいふを。御口よりさは〱おほせられ出すときくは。夢かなとまてあさましけれは。涙もせきあへす。殿御かほにあてゝ。佛を念せさせ給へ。かゝせ給ふときゝまいらせし御筆の大般若は。いつこにかおはしますぞ。それをよく念しまいらさせ給へと申給へは。ふたまにこそあらめと仰らるれは。殿聞てとりてまいらせ給ふ。是にやなとみせまいらせ給へは。これなりと仰らるゝ。なをくるしうこそ成増るなれとて。たゝせきあけにせきあけさせ給御けしきにて。たた今しなんするなりけり。太神宮たすけさせ給へ。南無平等大會講明法華なと。誠にたふとき事とも仰られつゝ。くるしうたへかたく覺ゆる。いたきおこせと仰らるれは。おきあかりていたきおこし參らするに日ころはかやうにおこしまいらするに。いと所せくいたきにくくおほえさせ給へるなりけり。いとやすらかにおこされさせ給ひぬ。大貳三位。御うしろに居給ひたり。御せなかをよせかけまいらせて。御手をとらへまいらせなとする。御かひなひやゝかにさくられさせたまふ。かはかりあつきころかくさくられ給ふはと。あやし。あさまし。譬へんかたなし。僧正めし十二人の供從者めしよせて。大かた物も聞えす成にたり。大臣殿の三位。御口に手をぬらして。ぬりなとし參らせ給ふ。念佛いみしく申させ給ふさまこそ殊外なれ。ともすれは。太神宮たすけさせ給へと申させ玉ふも。其しるしなく。無下に御目なとかはり行。僧正とみに參らせ給はす。やゝひさしく有て參らせ給へれは。日ころへたつれと何の物覺えんにか。物のはつかしとも覺え

む。たゞひとつにまとはれて。僧正三位殿二人。御前我身五人のひと〳〵。ひとつにまとはれあひたり。聲をおします。かしらより誠くろけふり立はかり。めも見あけす念し入て。佛をうらみくとき申さるゝさまいとたのもし。例ならぬおりは。あやしの僧たにも物いのゐはたのもしくこそなるこゝちすれ。かはかりの人の。一心に心に入て。年ころ佛につかうまつりて。六十餘年になりぬるに。またされとも佛法つきす。すみやかに此御目直させ給へと。人なとをいふやうに。をそし〳〵とあれと。何のしるしもなくて。御口のかきりなん念佛申させ給へるも。はたらかせ給はすならせ給ひぬ。殿御覧ししりて。今はさは院に案内申さむと申させたまへは。民部卿こなたにめして。殿みすをしあけ。物忍ひやかに。いかに仰らるゝにか仰らるれはたゝれぬ。大臣殿よりて。今は何のかひなしとて。御枕なをしていたきふさせ参らせつ。殿たちみなたゝせ給ひぬ。僧正なを御かたはらにそひゐ給ひて。何の事にかしのひやかにつふ〳〵と申きかせ給ふ。かゝるほとに日はな〳〵とさし出たり。日のたくるまゝに。御色の月ころよりもしろくはれさせ給へる御かほの清らかにて。御ひんのあたりなと。御けつりくししたらむやうにみえて。たゞおほとのこもりたるやうにたかふ事なし。僧正今はと見はて奉りて。やをら立て。御かたはらの御障子を忍ひやかに引あけて出給ふに。大貳三位。あなかなしや。いかにしなし出させ給ひぬると。たすけさせ玉へと。聲もおしますなき給ふを聞て。さなからなきとよみあひたり。左衞門督。源中納言。大臣殿の權中納言。中將の御めのと子の君たち十餘人。女房のさふらふかきり。聲をとゝのへて。せめてお

ほゆるまゝに。御障子をなゐなとのやうに。かはかはとひきならして。なきあひたるおひたたしさ。物おちせん人はきくへくもなし。今一度見まいらせんとて。したしき上達部殿上人。我も〳〵參れと。うときはよひもいれす。大貳三位。おほとのこもりたるやうなる人を。我君や。いかにして方々をはすておはしましぬるそ。むまれさせたまひしより。かた時はなれまいらせす。あやしのきぬの中より　おほしまいらせて。いつれの行幸にもはなれす。しりにたちさきにたち。病の心ならぬさとゐ十日はかりするにも。戀しく床しくおもひまいらせつるに。かた時見まいらせて。いかてかさふらはん。たゝ具しておはしましね。今一度おとろかせたまひて見えさせ給へ。あなかなしや。こひしさをいかにしてか侍らはん。たゝめしてそと。御手をとらへて。をめきさけひ玉ふ。きくそたへかたき。此聲を聞てそこらのゝしりつるくしうさともひしとやみぬ。山の座主今そまいりて。僧正の出たまひぬる障子引あけ給へは三位山の座主をも今は何にせんするそといひつゝけてなき給ふ。御さうしよりなけ入らるゝ物を何そとみれは。我局に置たる二あゐのからきぬかつきたるものなけ入て。人のゐるをみれは。藤三位殿のかくときゝて參り給へるなりけり。あな心うや。例さまにうち見あけ給ひつらんを。今一度見まいらせす成ぬるこゝろうきを。何のものいみをしてよひ給はさりつるそ。年ころの御病をたに。はつるゝ事なくあつかひ參らせて。限の度しもかくここちをやみてける身の。すくせの心うき事といひつゝけてなき給ふ。我は御あせをのこひまいらせつるみちのくにかみを。貌にをしあてゝそへゐられたる。あの人たちおもひ參ら

せらるらむにもをとらすおもひまいらすと。年ころは思ひつれと。猶をとりけるにや。あれらのやうに聲たてられぬはとそおもひしらるる。大臣殿參らせ給ひて。うち見まいらせていかにおほしとくにか。持たまへる扇の骨をたゝみながら。はら〳〵とうちすりて。なきて出給ひぬと思ふ程に。今は御かうし參れとありけるにやとみえて。すなはちしたしき殿上人なめり。源中納言の四位少將あきくに。右大臣殿の加賀介家さた。あか〳〵と日のさし入てあかきに。はら〳〵とおろしていぬ。あなあさまし。こはいかにしつるよと。えさらぬ心にまかせぬ日のくるゝたにおほとなふらをとくさし出よかしと。またおろさぬ先に心もとなくおほえしものを。はな〳〵とさし出たる日におろしこめて。わさとくらうなすよと覺ゆるに物そおほえぬ。藤三位あないみし。かくは

いかにおろしつるそや。かひなき御かほなからも。あかくて守り參らせてあらんとこそおもひつれと。聲もおしますなき給ふ。大臣殿またまいりて。御そ今はぬきかへさせ參らせて。御たゝみ今はうすくなさんと。えもいひやり給はすの玉ふて。御ひとへ取よせ給ふて。ひきかつけまいらせなとせられぬ。なけしの下にまかりいてさせ給ひぬと見まいらするまゝに大臣殿の三位まろひおりて。やかてそこにおなしさまにて。いきも絶たるさましてふし給ひたる。大臣殿見給て子の中納言めして。あれゐてのけよとあれは。其方の女房。中納言としていとたのもしくめてたけにて。かきいたきていぬ。さるほとに大貳三位も。御子播磨守出雲守なといふ人々かきすくひてゐていぬ。藤三位殿は。例ならぬよはけにみえつる人の。なけ入られつるよりとゝてこゑたにもせすいひ

つゝけてなき給ふさま。ことはりとみゆれとすきいられぬるにやと見ゆれは。子の加賀守を見おこせて。それいたきのけ奉らせ給へと。いとよはけにみえさせ給ふさまをは。物の覺え侍らぬそ。たすけたまへとあれと。いふかひなし。しもにおりさせ給へとひきのくれと。何事の給ふそ。うるはしくておはしましつる御顏を。今一度見せさせ玉はすなりぬるか。うらめしさはいふかたなしとあちきなく人のつみのやうにうらみなきたまふも。ことはりにそ聞ゆる。御かひなをさくれは。いまたひえなから。例の人のやうにたをやかにさくらるれは。心みかてら。しはしもさらはたかへ參らせて。物の給へかしとおもへは。いたくもすゝめて。もろともに御かひなをとらへて居たれは。いつの程にかはるにか。たゝすくみにすくみはてさせ給ひぬ。今はかひなしとおもひて。いさ

させ給へ。さふらはせ給ふとも今はかひなし。一言もこそもしやとおもひつるほとこそ有つれと。引のくれと。大かた取つき參らせて。いかて一所をきまいらせていかむするそとの給ふ。加賀守のさはかりあるは。いたきのくへき心ちもせねは加賀守に我はえいたき給ふましくは。局の人をよひ給へといへは。さはかりの物もおほえすけなる人のとりあへす。いかて我君のおはします所にけす(下﨟)をはよせんとて。いみしうなかる。參りさまにいたかれたりつれは。せめて物のおほえてかとそおほゆる。されは我方の女房ともよひよせて。ひたうに引のするやうに。人のせなかにおほせてやりつ。御めのとたちたゝれぬれは。因幡内侍とて。明暮あまたの内侍の中に。とりわきつかうまつりつきたりし人とふたり。御かたはらにむこにちかくさふらふ。あはれおほく侍らひつれ

と。契ふかくもつかふまつりはてさせ給へるなといひつゝけて。いみしうなかるゝさまそ。いとゝもよほさるゝ心地してたへかたき。つほねよりいそきたるけしきにてきとおはしませ。三位殿たえ入せ給ひぬといひて。引さけてゐていぬ。誠になき人のやうにて。大かたいきもせす。暮かゝる程にあつまりてかきのせてゐていぬ。御まへのかたかいすみて。いつの間にかはるにか。日ころおひたゝしく物も聞えすのゝしりつるけしきとも。しめ／＼と火をうちけちたるとは是をいふへきにやとおほえて音もせす。大貳三位の局。かへをひとへへたてたる。なくけはひともして。晝の聲とものやうに泣あひたる中に。三位の御聲にて。哀かやうに日のくるゝに御かうし（格子）とくまいれかしと心もとなくおほえしに。いふへき事もなくしなしまいらせつるは。いかにしつる事そや。是たすけよや。たゝおはしますらん所へ我をめせや。をひ／＼とくどきたてゝなかるゝをとす。きくそいとゝたへかたき。日の御座のかたに。こほ／＼と物とりはなす音して。人々のこゑあまたすなり。何事にかときく程に。おまへより。おなし局に我かたさまにてさふらひつる人。うちきて。いみしう物もいはすなく。見るに。いとゝ其事ときかぬに。なきふさるゝ心地そする。しはしためらひていふやう。あなこころうや。たゝ今神璽寶劒のわたらせ給ふとてのゝしりさふらふそ。日の御座の御物具のわたり。御帳のひき御かゝみなと取いてさふらふ。御帳こほつをとなりけりといふに。かなしさそたへかたき。ひるより美濃内侍を。やかて殿のはかしにつけさせ給ひつれは。つき參らせて。おはしつるやうなとかたる。我は朝かれゐのおましのことはしらさりつれは。此人

のかたをきゝて何にかはせん。

右拜借　仙洞御本。使安中書泰廣　太神景明與書寫之。與清閑寺亞相具房卿一按了。落字魚魯等不可勝計。重可加按正者也。

寛永十六稔念二　秘書郎

讃岐典侍日記下

かくいふ程に。十月に成ぬ。(嘉承二)辨三位殿より御ふみといへは。取入てみれは。年ころ宮つかへせさせ給ふさま。御心のありかたさなと。よくききをかせ給ひたりしかはにや。院(白河)より社(勅)。このうち(鳥羽)にさやうなる人のたいせちなり。たうし參るへきよし仰ことあれは。さる心地せさせ給へとある。みるにそ淺ましく。ひかめかと思ふまてあきれられける。おはしましゝおりより。かくは聞えしかと。いかにも御いらへのなかりしにそ。さらてもとおほしめすにや。それをいつしかといひかほにまいらむ事あさましき。周防内侍。後冷泉院にをくれ參らせて。後三條院より七月七日まいるへきよし仰られたりけるに。

(後拾)天河おなしなかれと聞なから渡らん事はなをぞ悲しき

とよみけんこそけにとおほゆれ。故院(堀河)の御かたみには。ゆかしくおもひ參らすれと。さし出ん事なを有へき事ならす。そのかみたち出したに。はれ／＼しさは思ひあつかひしかと。おやたち三位殿なとしてせめられん事をとなん思ひて。いふへき事ならさりしかは。心のうちはかりにこそ。あまのかるもにおもひみたれしかと。けに是も我心にはまかせすともいひつへきことなれと。又世をおもひすてつときかせ給はゝ。さまて大せちにもおほしめさしゝ思ひみたれて。今すこし月ころよりも。物おもひそひぬる心地していかなるついてをとり

出ん。さすかにわれとそきすてんも。むかし物語にもかやうにしたる人をは。人もうとましの心やなとこそいふめれ。我心にもけにとおほゆる事なれは。さすかにまめやかにもおもひたゝす。かやうにて心つからよはりゆけかし。さらはことつけてもと思ひつゝけられて。日ころふるに。御めのとたち。また六位にて五位にならぬかきりは物まいらせぬ事なり。此廿三日六日八日そよき日。とく／＼とあるふみたひ／＼見ゆれと。おもひ立へき心地もせす。過にし年月たに。わたくしの物思ひの後は。人なとに立ましるへき有さまにもなく。見くるしくやせおとろへにしかは。いかにせましとのみおもひあつかはれしかと。御心のなつかしさに。人たちなとの御心も。三位のさて物し給へは。その御心にたかはしとかや。はかなき事につけても。ようゐせられてのみ過しに。今さらに立出て。見し世のやうにあらん事もかたし。君はいはけなくおはします。さてならひにし物そとおほしめす事もあらし。さらんまゝには。むかしのみ戀しくて。うらみむ人はよしとやはあらんなと。おもひつゝくるに。袖のひまなくぬるれは。

かはく間もなき墨染の袂かな哀むかしのかたみと思ふに

かやうにてのみ明くるゝに。かく里に心のとかなる事かたし。五六日なれは。内侍のもとより。人なし參れといふふみのこしなと。おもひつゝけられて過す程に。御即位なと世にのゝしりあひたり。大納言のめのととはりあけし給ふへしとて。安藝の前司の三位殿こそ。故院の御ときとはりあけはせさせ給ひけれは。その例をまねはんなとたつねらるゝときくほとに。大納言。日ころ例ならて。俄におもりてうせ給ひてときこゆ。いとこゝろほそき世かな

と思ひかこちぬ。夕暮に。三位殿のもとより。ことはりあけすへきよしあれは。いとあさましくて。日ころはきゝすくしてのみ過つるを。まいらしとおもふなめりと心得させ給ふて。をしあてさせ給ふなめりとおもふに。すへきかたなし。たのみたるまゝに。例の人よひて。かうかうなん院より仰られたるを。いかゝはせむするといへは。いかゝせさせ給はむ。世中わつらはしく侍らふめり。たゝとく思しめしたつへきなめり。まいらしとさふらはゝ。我爲にこそよしなき事出まうてこめ。我君さるへきとおほしめさせ給ふへきになと。さたしあひたる程に。くらのかうの殿より人參らせたり。院宣は攝政殿（忠實）の承りにて侍ふ。堀河院の御そふく（喪服）賜りたらは。とくぬくへきなりと宣旨くたりぬ。とくぬかせ給へといひにをこせたり。かはかりの事たに心にまかせす。たうり（道理）にぬくへきおりもまたすぬきてん事心うきに。せりつみしといひけんふることを。身に思ひよそへらるゝ。かくさたするを聞て。せうとなる人。あはれ男の身にてかくいはれ參らせはや。うら山しくもおほえさせ給ふかな。女の御身にてさらても有なん。故院の御時に。年ころの人たち御めのとこたちなとの。たまはりあはれしそふく（喪服）を。何はかりの年ころさふらはせ給はさりしかと給はらせ給ふ。今の御時に。又なを大せちにいるへき人にて。月もまたすぬけと。宣旨くたるもあやしなといひつゝくるを聞程に。あちきなくはつかし。花山院のおりに。これしけ（惟成）の辨を。入道殿（兼家）一條院にわたりて。もとのことくろくさにてつかはんと仰られけるをたに。我君につかうまつりし事の。それにつけても。思ひ出られぬへけれは。つかさ位をすてゝ法師に成にけん我身の。何の思ひ

出にて。いにしへのはつかしさにおもひこりすさしいつへき。あまたの女房の中に。なと我しも二代まてかくはあるましきめをみるへからんとおもふに。先の世の契も心うけれと。さるへきにこそはと思ひなして。流の水をむすひさやかになり。したしくなれつかうまつるしうとならせ給へは。おほろけならぬ契にこそとおもひなくさむれと。藻に住むしのわれからとのみ。世にありてかゝるめも見ることかなしけれと。さてあるへき事ならねは。いそき立ぬ。しもの人なとは。年ころもゝしきの中にあそひならひたる心ちにつく／＼とおもひたえたり。里ゐは口おしう思ひけるに。かゝる事出きたるを。嬉しうおもひたるけしきにて。心ちよけにおもひけるを見るは。つれなくうらめしきに。霜月にも成ぬ。十九日に例の参らんと思ふに。雪よるよりたかくつもりて。こちたくふる。いそかしさ。今いく程なく殘りすくなく成にたれは。大かたの人も夜をひるになして。物もきこえぬまていそくめれは。我はこの日ならんからに。いそかしとてまいらさらむか口おしさに出たつを。ひとりうけ引人なし。さはかりいそかしくしちらさせ給ふてよかし。けふまいらせ給ひたらんに。院も大臣殿も。よにいみしともあらし。参らせ給はすともあしき事もあらし。かはかり雪は道もみえす降めり。我御身こそ車のうちなれは。扱もおはしまさめ。御供の人はいかてかたえむするそなとわひあひて。とゝめつれと。人たちによしと思はれむとて。まいる事ならはこそあらめ。此月ならむからにいそかしとてかくへき事かは。いさましく嬉しきいそきにてあらんたに。それにさはるへき事かは。我をすこしも哀とおもはん人は。けふて参らせよといふまゝに。

けしきもかはるかしるきにや。いはれぬる人とも。さはかり思しめしたらむ事。さまたけ參らすへき事ならす。車よせよ。供の人よはせなとする程に。例はしまるほとゝおもふほと。やう〳〵日たくるに。まいらてやみなんするなめりとおもふ。口おしくわりなき人ともきぬれは。とく〳〵といへは。嬉しくてのりぬ。道のほとまことにたへかたけに雪ふる。車のうちにふりいりて。雜色うしかひみなかしらしろく成にたり。うしのせなかもしろきうしに成にたり。二條の大路には大宮のみちもなきまてふる。參りたれは人々。あないみし。例よりも日たけつれは。けふはえまいらせ給はぬなめり。ことはりそかし。いそかしくおはしつらんと申あひたりけるに。おほろけならぬ御心さしかな。けふはとあはれかりあひたり。十一月もはかなく過ぬ。十二月朔日。また夜をこめて大極殿にまいりぬ。西の陣に車よせて。えんたうしきて入へき所とてしつらひたるに參りぬ。ほの〳〵と明はなるゝほとに。かはらやとものむねかすみわたりてあるを見るに。むかしうちへまいりしに。過さまに見えし程なと思ひ出られて。つく〳〵と詠るに。北の門より長ひつに。ちはやきたるものとも。すはうのこきうたるくはうこゝの出しきぬ入てもてつゝきたる。へちにもおもしろく見ゆへき事ならねと。所からにやめてたし。人とも見さはき。いみしく心とに思ひあひたるけしきともにて見さはけとも。我は何事にも目もたゝすのみおほえて。南のかたをみれは。れいのやたからす見もしらぬものとも。大かしらなとたてわたしたる。見るも夢のこゝちそする。かやうの事は世繼なとみるにも。その事かゝれたる所はいかにそやおほえて。ひきこそかへさ

れしか。うつゝにけさ〳〵と見る心地。たゝをしはかるへし。日たかくなる程に。行幸なりぬとて。のゝしりあひたり。殿原里人なと玉のかうふりし。あるは錦のうちかけ。近衛つかさなと。よろひとかやいふ物着たりしこそ。みもならはす。もろこしのかたかきたるさうしの晝の御座にたちたるみる心地よとあはれに。かくて事成ぬ。おそし〳〵とて。衛門の佐いとおひたゝしけにひきもんなとをみる心ちして。我にもあらぬ心地しなからのほりしこそ我なから目くれて覺えしか。手をかけさするまねして。かみあけよりとはりさしつ。我身いてすともありぬへかりける事のさまかななと。かくしをきたる事にかとおほゆ。御前のいとうつくしけにしたてられて御もやのうちにゐさせ給ひたりけるを。見參らするもむねつふれてそおほゆる。大かた目もみえす。はちかましさのみ世に心うくおほゆれは。はか〳〵しくみえさせ給はす。事はてぬれはもとの所にすへり入ぬ。夜に入てそかへりぬる。あるかなきかにて歸りたれは。かほをあやしけにおもひてまもりあひて。御顏の色のたかひておはしますはいかになとといひあへるは。またなをらぬにこそと。しほ〳〵となかれぬる。しはすも漸つこもりに成て。辨のすけ殿の文といへは。とり入てみれは。院より三位殿大納言のすけなとさふらはぬ朔日也。さやうのおりは。さるへき人あまた待らふこそよけれ。參るへきよし仰られたるとそある。いかゝせん。とく參らんとそいそきたつ。朔日の夕さりそ參りつきて。陣いるゝより。むかし思ひ出られて。かきそくらさるゝ。つほねにいきつきてみれは。こと所に渡らせ給ひたるこゝちして。其夜は何となくてあけぬ。つとめておきてみれ

は雪いみしく降たり。今もうちゝる。御まへを見れは。へちにたかひたる事なき心地して。おはしますらん有さま。こと〳〵に思ひなされていたる程に。ふれ〳〵こゆき(粉)と。いはけなき御けはひにて仰らるゝ聞ゆる。こはたそ。たか子にかと思ふほとに。誠にさそかしおもふに淺ましく。是をしうとうちたのみ參らせてさふらはんするかと。たのもしけなきそ哀なる。ひるははしたなき心地して。くれてそのほる。こよひよきに物まいらせそめよといひにきたれは。おまへのおほとなふらくらゝかにしなして。こちとあれは。すへり出てまいらする。むかしにたかはす。御たい(臺)のいとくろらかなるこきなくて。かはらけにてあるそ見ならはぬ心ちす。はしりおはしまして。かほのもとにさしよりて。たれそこはと仰らるれは人々。堀河院の御めのとこそかしと申せは。まことゝ

覺したり。ことの外に見まいらせし程よりはおとなしくならせ給ひにけりとみゆ。そとゝしの事そかし。參らせたまひてこきてん(弘徽殿)におはしまいしに。此御方にわたらせ給ひしかは。しはしはかり有て。今はさは歸らせ給ひね。日のくれぬさきにかしらけつらんとそゝのかし參らせ給ひしかは。今しはしさふらはゝやと仰られたりしそ。しみしうおかしけに思ひ參らせ玉へりしなと。只今の心地して。かきくらすこゝちす。そのよも御かたはらにさふらひたれは。いといはけなけに。御そかちにふさせ給へる見るそあはれなる。明ぬれは。みなひとひとおきなとしてみれは。御まへのみす。いとおひたゝしけなるあし(蘆)とかいふ物かけられたり。へりはにひ(鈍)色なり。御さうしの御きちやう。おなし色の御几帳の手しろきなり。御けつりくしの大床子もなし。かゝるおりにはなき

にや。おさなくおはしませはかとそ物なと參らすれ。うけくにしてめすそ哀なる。ひるつけて殿參らせ給ひて。人々ゐなをりなとすれは。物をまいらせさしてたゝんも。おとなにおはしまいしにそ。さやうのおりもわかす立しか。又おとなしくなともつけさせ給ひしか。是はうちすてゝたゝはよき事やいはれんすると思へは。なをゐたるも。かくこそありかたかりける事を。心にまかせてすくしけん年月を。いかて思ひしらさらん。はしたなく思へはうちうつふしてゐたれは。御さうしの外にゐたる人たちに。あれはたそとゝはせ給ふ御聲聞ゆ。それといらふるなめり。御さうしの内にちかやかについゐて。いつよりさふらはせ給ふそ。今よりはかよふにてこそは。そもむかしの思ひ出られ給ひてこひしきに。そのかみの物語りしてなくさめんなとある。いとかなし。我も人もおなしやうにてこそ物せさせ給ふめれ。はかなりし世にはいせんは誰そとゝひて。それかしときかせ給ふては。御したさし出させ玉ひて。さしぬきたかく引あけてにけさせたまふとて。人々わらひ興しまいらせしは。ひと所の御けむはいにて。有けると思ふに。何の御かへりかは申さん。物申されねは思ひかけさりし事哉。かやうにちかやかにまいりて。物なと申しことゝはおもはさりしかな。例ならておはしまいしおりなと。御かたはらにそひふさせ給へりしおりにまいりたりしかは。御ひさ高くなさせ給ひて。陰にかくさせ給ひしおり。かやうならん事ともとこそおもはさりしか。けにかけにもかくれさせ給ひしかな。世はかくもありけるかなといひかけて立せ給ひぬる。聞そけにと心うき。かやうにて。はえなき朔にて過ぬ。人たちのきぬの色とも。思ひ／＼

にうすらきたり。正月になりぬれは。此月ならんからにかくして参りて。堀河院に参りたれは人々。いかて参り給へるそ。内にと聞まいらせつるは。この月はよもとおもひ参らせしにと。いひあはれたり。いかてかまいらさらむ。つかうまつりはてんと思へは。いみしういそかしかりしにたにも参りしをといへは。誠にかくかゝす参らせ給ふ事のありかたさなといひあひつゝ。つれ〳〵のなくさめに法花經に花たてまつり給ふにとて。いとなみあはれたるそいと哀にみゆる。二月になりて。わたくしのきにちにわたりあひたり。講きくさうしのもとにてみれは。ひとゝせの正月に。す〔修〕しやう〔正〕をこなふとて内にさふらひしを。むかひにをこせられたりしかは。おもしろき所なるに。我とくしておはしませとて。大夫のすけや内侍なとくしておはしたりしに。此さうしのもとにゐるおとなひをきゝて。おはしましにけりな。たれ〳〵くしてといへは。内侍殿にあひ参らせん。いとうれしき事かなといひて。あはれたり。此御まへおほしあつかふるさまの。ことの外にくなけに悩もえ申させす。今はこもりゐたる身にて。まかりありきなとも。かしらつきの見くるしう成たるみれは。さと殿なとへもえ参らす。さらてのけさうはえなけれは。此月にとけてやまかせかくれんすらむと。しうに成ぬへき心ちのしつるに。こよひは佛の御しるしとおほえて。いみしうなん嬉しきは。今に心やすくよしあきらめつれは。後の世もやすくとありし聞しか。さまておほすらんと有しか。まつおもひ出らる。かくて二月も過ぬ。三月に成ぬれは。例の月に参りけれは。堀河院の花いとおもしろく。かねかた〔後イ〕三條院にをくれまいらせて。

參考　金葉集第二初句こそ見しにゝアリ」
いにしへに色も替らす咲にけり花こそ物は思はさりけれ

とよみけん。けにとおほえて。花はまことに色もかはらぬけしきなり。むかしの清涼殿をは御堂になさせ給ひて。七月迄は宵曉のれいしたえす。共人のくらうとまち左近の陣なと僧坊になりたり。內裏にて。ありし所ともさひしけなるみるにも。うせさせ給へりけん院の中のひきかへかいすみ。さひしけなる御覽して。

かけたにもとまらさりける草の上を玉の臺と誰かいひけん

とよませ給ひけん。けにとそおほゆる。宮の御方に三十講を行はせ給ふ見て。法華經を日に一品つゝ講せさせ給ふ。それきくに。三位殿のまいらせ給ふにくして參りて。講なとはてゝ。御まへちかく三位殿をめせはさふらはる。宰相とてさふらはる人。三位殿は今すこしちかくまいらせ給へ。すけ殿は今ははつかしといふをきかせ給ひて。それしもこそ心さしみゆる。見たてなくおもひ出もなけに。見ゆる所をわすれすみゆると仰られもはてす。むせ歸らせ給へる音のきこゆるに。我もたへかたし。暮ぬれはまかてぬ。つこもりに內へ參りぬ。四月の衣かへにも。女官とも例の事なれは。我も我もと身のならんやうもしらす。几丁ともとりあへる人見あへれと。我はみまほしからす。これをおかしとおほしめしたりしか。おもひ出られて。灌佛の日になりぬれは。我も／＼ととり出されたり。事はしまりぬれは。日の御座の御まへのみすおろして。人々出てみる。殿をはしめまいらせて。ひろひさしの高欄に。例のさほうたかはす。下かさねのしりうちかけつつ。上達部たちゐなはたり。御導師事の見さま申て。みつから山の座主こしきのわたるむかしにたかはて。御たうし水かけて。殿參らせ給ひて。かけさせ玉へれは。次第によりてつき

つきの上達部。かく何事かはたかひてみゆる。左衛門督源中納言よりてかくとて。いとたへかたけに物思ひ出たるけしきなり。かほもたかふさまにみゆる。あちきなし。我もせきかねられて。大かた例はとのかたも見しとおもひて。御几丁ひきよせてみれは。みきちやうのかみより御覧せんとおほしめす。御たけのたらねは。いたかれて御覧する哀なり。おとなにおはしますには。ひきなをしにて。ねんすしてこそ。御帳のまへにおはしましゝか。先めたちて。中納言にもをとらすおほゆれは。人めも見くるしうて。おまへことはてぬにおりぬ。五月四日夕つかたに成ぬれは。さうふいとなみあひたるをみれは。こそのけふ何事思ひけん。さうふのこし。朝かれゐのつほにかきたてゝ。殿ことに人々のほりて。ひまなくふきしこそ。みつ野のあやめも今はつきぬらむとみえしか。

又の日も空はさみたれたるに。軒のあやめ雫もひまなくみえけるに。

五月雨の軒のあやめもつく〱と袂にねのみかゝる空かな

とのみおほゆ。やう〱十日あまりに成ぬれは。さいそう講いとなみあひ参らせてと聞しかは。はてゝの十餘日はかりのつれ〱物語には。その日のろんきといひ出し。いみしさなとさたせさせ給ひしおもひ出らる。六月になりぬ。あつさ所せきにも。まつこその此頃は事となく御心地よけにあそはせ給ひて。堀河のいつみ。人々みむと有しを。何とおほしめしゝにか。あなかちにすゝめつかはしゝかは。思し召事なれは。先あすとて。我は出て人たち待しに。一車はかりのりつれて。日くらしあそひて歸りしに。みれは。こよひとまりて心やすき所にて。うちやすまんとおもひてとゝまりしを。ひたち殿といふ女房。あなゆかしたゝ参らせ

給へ。あふきひきなと人々にせさせんなとありし。御扇子ともまうけて待参らさせ給ふあとあれは。此人たちにくして参りぬ。待つけて泉のありさまうち〳〵にとひなとして。あふきひき。こよひはさはとおほせられしかは。あけんか心遣なさよ。こよひと思ふに。人たちのけしきのくるしくて。見えさらむこそ口おしく候へと申しゝかは。つとめてあくるやをそきとはしめさせ給ひて。人たちめしすへて。大武三位殿をはしつめて。あはれたりしに。先ひけと仰られしかはひきしに。うつくしとみしをえひきあてゝ。中にわろかりしをひきあてたりしを。うへになけ置しかは。かゝる心うやあるとてわらはせ給ひたりし事を。但馬殿といふ人の家の子の心なるや。こと人はえせしなと興しあはれしに。そのおりは何ともおほえさりし事さへ。いかてさはしまいらせけるにかと。なめけにけふは有かたく覺せる。七月にもなりぬ。御はてとてのゝしりあふ。その日に成ぬれは。こその御法事おなしと百僧なり。ありさまおなしことなれはとゝめつ。こそより後。女房六人をとゝめつ。宮の御方にあつかはせ給へるか。今はまかてなんする。哀に出なしき事。かやうにさふらひつれはこそ。月なとに参らせ給ひしを。日たちてはとく其日になれかしと。かそへくらされて待参らすれは。今はさはみ参らするか心うきと。たれも〳〵いひあひて泣ことかきりなし。なきあふことはてぬれは。三位殿立て出ぬ。□の出雲といふ女房の讀て。北面のつほに薄にむすひつく。

今はとてわかるゝ秋の夕暮は尾花か末も露けかりけり

とよみたりつれと聞も哀なり。萬はてぬれは。廿五日。よの中の諒闇ぬきあはる。御まへのしつらひ。日ころおひたゝしけなりつるみす本

丁のかたひら御さうしなとゝりはらはれて。日ころは夜のおとゝの御帳もなかりつれと。有しやうに立られなとして。たゝいにしへの御しつらひにて。たかふ事なくめでたく成にたり。殿をはしめて。殿上人藏人さうそくかへゑいおろし。女房たちのすかた。我も〳〵と色色とつくしあはれたるさまぞ。たゝおりけん心地してそなえ居られたる。永無月ころに引かへてめつらしき心地する。さいしもとゆひはしろかりつる。例のやうにむらこになされんとて。いとなみあはれたり。殿うるはしくさうそきて參らせ給ふて。とくまいらせ給へとめせは參りたれは。御前もろともにさうそくせさせまいらせ玉ふ。うつくしけにしたてられ。ひきなをしにておはします。御しりつくり參らするにも。むかしまつ思ひ出たる。かやうにみそせさせ參らせて。日ことにいしはいの御はいのおりは。いかゝさせ給ひしと。まつおもひ出らる。くはんし參りたるや。時よくなりにたりやと。とく〳〵と申させ給ふに。我ひとりぬきかへてさふらふへきならねはぬきかへつ。局におりても。先きかへんともおほえす。是をさへぬきかふるこそ。院の御かたみとおもひつれ。これをさへぬきつれは。いと心ほそし。一天の人。御心さしあるもなきもみなしたりつるに。したしくつかうまつりつるさへ。一度にぬきてんする。思ふによからぬ事なれと。ぬきかへましき心地する。かきり有ことなれは。いかゝとそぬきつ。遍昭僧正の。深草の帝にをくれまいらせて。法師になりてこそうせけるか。又のとし御ふく人々ぬきけるに。

みな人は花の衣になりぬなり苔の衣よかはきたにせよ

とよみけん。かくて八月に成ぬれは。廿一日御渡りと定りぬ。ひと〳〵いとなみあひたり。さ

れは。我はかはらぬ九重のうちの有さまをみんに。はしめたる御わたりに。えねんすましき心ちのすれは。參らんともおもはぬ。院より。さるへき人々みな參るへきよし。參らせ給へと。三位殿よりあれは。そのさたあらはさてあてたらん。ひとり水とりはかり參らせて。われはまいらしとなん思ふといへは。けにさそ覺しめすへき事にてそあれと仰らるゝに。まいらせ給はさらむも。ひかくしきやうなり。思ひねんしてなをまいらせたまふへきとて出したてらるれは。かはかりの事たに。心にまかせぬ事と思ひなから出たつ。その日もなりて。内大臣殿御ひんつらにまいらせ給ひて。朝かれゐのみす卷あけて。御ひむつらゆひまいらせらるゝみれは。かはらぬかほしてみえさせ給ふもあはれなり。暮はてぬれは行幸なりぬ。御仰に。やかて引つゝけてまいりぬ。中御門の

門いるより。思ひしにしるくかきくらさる。かうりう寺に參るとてみいれしに。我明くれ出入し門そかし。をとゝしのしはすの廿餘日こそ。堀河院にうつろはせ給ひしか。それに出けんまゝにこそは有けめ。かきりの日ともおもはてそ出けむかし。今は何事にてかは。此世にて又いらんすると思ひしを。我身もおなし身なから。又たち歸りいるそ。心うくかなしくも覺ゆる。參りつきて見れは。局は大貳三位殿おはせし所とそ。ひる三位殿ありつれは。御物のくを持て參りつるとて。そなたへ出んからくらへやをあゆみ過て。今も少しのほる。その夜も御そはにふしてみれは。夜のおとゝ見るに。みしよにかはらぬさましたるにそ。みのところ此かなとたにこそなしはしめたる御あたりなれは。火とり水とりなとのわらはもちたりつる。御まくらかみに左右にをかれたるそ。た

かひたる事にてはある。御かたはらにふしたるも。かやうにてこそ。宮のほらせ給はぬ夜なとは侍らひしかとおほえて。哀にのみそ。みな人はよけにぬれとも。我は物のみ思ひつゝけられて目もあはす。瀧口の名たいめむ（對面）。御ゆとのゝはさま殿上の口にて申聲そ。聞ゆるほとにおほえたりしかと。耳に立て聞ゆる。うけせう時そうして尋へし。心みねはといひて。時のふたにくひさす音す。左近の陣の夜行てんめきたるありくも。昔にもかはる事なし。御帳のかたひら見るにも。先仰られし事とも思ひ出らる。むかしをしのふいつれの時にか。露かはく時あらんとおほえて。かたしきの袖もぬれまさり。枕の下につりしつはかり。萬の事に目のみたちて。たかふ事なくおほゆるに。たゝ一所のすかたのみえさせ給はぬとおもふそかなしき。御（鳥羽）まへのふさせ給ひたる御方をみれは。

いはけなきにておほとのこもりたるそ。かはらせおはせましゝとおほゆる。をとゝしの頃に。かやうにて。よるひる御かたはらに侍らひしに。御心ちやませ給ひたりしかとも。院よりあなかしこ。よくつゝしみて。夜のおとゝを出させ給はて。しはしと申させ給ひしかは。つれ〳〵のまゝに。よしなし物かたり。昔今の事かたりきかせ給ひしおり。殿のあとかたにより奉らせ給ひしかは。そのまゝにてさふらはんは。なめけにみくるしく覺えしかは。おきあかりての給はんとせし。みえ參らせしと思ふなめりとおほして。たゝあれ木丁つくり出んとて。御ひさをたかくなして。陰にかくさせ給へりし御心のありかたさ。今の心ちす。いつのまにかはりける世のけしきそと。萬の人たちの。そのかみの人ならぬ中に。我はかりありし昔なからの人。いかにむすひ置けるさきの

世の契にかと。物のみおもひつゝけられて。哀しのひかたきこゝちす。あけぬれは。いつしかとおきて。人々めつらしき所々見んとあれと。くしてありかはいかゝ。物のみおもひ出られぬへけれは。たゝほれてゐたるに。御前のおはしまして。いさ／＼くろ戸のみちを。おれらしらぬに。をしへよと仰られて引たてさせ給ふ。参りてみるに。清涼殿しゝう殿いにしへにかはらす。たいはん所こむめいちの御さうし。今みれは見し人にあひたる心地す。弘徽殿に皇后宮おはしましゝを。殿の御とのゐところに成にたり。黒戸の小はしとみのまへにうへをかせ給ひし前栽。心のまゝにゆゝ／＼とおひて。みはるのありさけか。

君かうへし一村薄むしのねのしけきのへとも成にけるかな

といひけむも思ひ出たる。御溝水の流になみたてる色々のはなとも。いとめてたき中にも。萩の色こきさきみたれて。朝の露玉をつらぬき。夕のかせなひくけしきことに見ゆ。是を見るにつけても。御覧せましかは。いかにめてさせ給はましと思ふに。

萩の戸におもかはりせぬ花みても昔を忍ふ袖そ露けき

と思ひいたるを。人にいはんもおなし心なる人もなきにあはせて。事のはしめにもりきこえむよしなけれは。承香殿をみやるにつけても思ひいてらるれは。里につく／＼とおもひつゝけ給はんと。をしはかりて。これを奉りしかは。

おもひやれ心そまとふ諸ともにみし萩の戸の花ときくにも

思へはさておなしさまにて。しありかせ給ふたにさおほすなり。ましてつく／＼とまきるるかたなくおもひつゝけんは。をしはかられてそありし。かゝてあるし。昔今すこしおもひ出らるゝ。かくて長月になりぬ。九日御せく参

らせなとして。十餘日にも成ぬ。つれ〳〵なるひるつかた。くらへやの方をみやれは。御經をしへさせ給ふとて。よみし經をよくしたゝめてとらせんと仰られて。御おこなひのつひてに。ふた間にてたちておはしまして認させ給ひて。局におりたりしに。御經したゝめてもて參りて。わらはれんどそおほしめして。あまりなるまてかしつかせ給ひし御事は。思ひ出らるゝに。御まへにおはしまして。われいたきてさうしの爲見せよと仰らるれは。萬さむる心ちすれと。朝かれゐの御障子の繪御覽せさせありくに。夜のおとゝのかへに。あけくれ目なれておほえんとおほしたりし樂を書て。をしつけさせたまへりし。笛のふのをされたるあとの。かへにあるを見つけたるそ哀なる。

笛の音のをされし壁の跡みれは過にし事は夢とおほゆる

かなしくて。袖をかほにをしあつるを。あやしけに御覽すれは。心えさせ參らせしとて。さりけなくもてなしつゝ。あくひをせられて。かく目に涙のうきたると申せは。みなしりてさふらふと仰らるゝに。哀にもかたしけなくもおほえさせ給へは。いかにしらせ給へるそと申せは。ほもしのりもしの事思ひ出たるなめりとおほせらるゝは。堀河院の御事と。よく心えさせ給へると思ふもうつくしくて哀もさめぬる心地してそ爲まるゝ。かくて九月もはかなくすきぬ。十月十一日大嘗會の御禊とて。天の下の人いとなみあひたり。其日になりて。播磨守なりさね御ひんつらに參りたり。內の大い殿朝かれゐのみすまきあけて。なけしの上に殿さふらはせ給ふ。爲んに左衞門佐いとあからかなるうへのきぬきて事をきてゝ。しはしありて御ひんつらはてかたに成て藏人參り。女御たいめんにまいらせ給へりとそうすれ

は。聞せ給ひぬ。事ともすゝめよといそかせ玉ふ。事なりて。皇后宮なとめてたくしたてさせ給へり。かやうに世のいとなみ。やう〳〵過て。今は五節りん時のまつりいとなみあいたり。ことしの五節は大嘗會の年なれは。例にも似す。上達部かすそひて。いとめてたかるへき年といひあひたり。女房たち我も〳〵と。御覽の日のわらはとて。ゆかしき事。とらの日のよすてに例の事なれは。殿上人かたぬき有へけれは。いつれよりかのほるへきとゝひあはれたれは。いらへせんともおほえす。一とせ限のたひなりけれはにや。常より心に入て。もて興して。參の夜よりさはきありかせたまひて。その夜。帳臺の試なとによふけにしかは。つとめて。御朝いの。例よりもありしに。雪降たりときかせ給ふて。おほとのこもりおきて。皇后宮もそのおりにおはしましゝかは。御かた〳〵に御ふみ奉らせ給ふとて。御前にさふらひしかは。日かけをもろともに作りて。むすひゐさせ給ひたりし事なと。うへの御局にてむかしおもひ出られて。物ゆかしうもなき心地して。まてなとわらはのほらんする。なかはし例の事なれは。うちつくり參りてつくるを。そきやう殿のきさはしより。清涼殿のうしとらのすみなるなかはしとのつましてわたすさま。むかしなから也。御前めつらしうおほして御覽すれは。くるゝまて御かたはらにさふらふにも。雪のふりたるつとめて。またおほとのこもりたりしに。雪たかくふりたるよしをきこしめして。その夜御かたはらにさふらひしかは。諸共に具し參らせて見しつとめてそかし。いつも雪をめてたしとおもふ中に。ことにめてたかりしかは。あやしの賤家たに。それにつけて見ところこそは有に。まいて玉鏡よとつく

りみかゝれたる百敷のうちにて。諸ともに御覧せしありさまなと。繪かく身ならましかは露たかへす書て。人にも見せまほしかりしかと。なしあけさせ給へりしかは。誠にふりつもりたりしさま。梢あらん所は。いつれを梅とわきかたけなりし。じゝう殿のまへなる竹の臺。おれぬと見ゆるまてたはみたり。御前の火たきやもうつもれたるさまして。今もかきくらし降きまこちたけなり。瀧口のほんそのまへのすい垣なとに降をきたる。見所ある心ちしておりからなれはにや。こせんのたちし。せめての我心の見なしにや。かゝやきしまてに見るに。我わくたれの姿まはゆくおほえしかは。常よりみまほしきつとめてかなと申たりしを。おかしけに覺しめして。いつもささそみゆると仰られて。ほゝゑませ給ひたりし御口つき。むかひまいらせたるこゝちするに。五節のおりきたりしきなるより紅までにほひたりし。紅葉ともにゑひそめのから衣とかやきたりし。我きたる物の色あひ雪の匂ひ。ふさ〳〵とこそめてたきにとみにもえ參らせ給はて御覽せしよ。瀧口の本所のさうしなめり女の聲にて。すいかいのもとちかくさし出てみるけはひして。あなゆゝしの雪のたかさや。いかゝせむする。さをもえとりゆくましきはとよといひしをきかせ給ひて。是きけ。いみしき大事出來にたりとこそおもひあつかひたれ。雪のめてたささめぬる心地するとて。わらはせ給ひしなと。思ひ出されてつく〳〵と思ひむすほるゝも。たゝも御覽ししらす。なのうちへくもやりもちたる物こはせて。いて〳〵出てゆかぬさきにこはせよ。それいへ〳〵とひきむけさせ給へは。うつくしさに萬さめぬる心ちす。御返事申なとするに。まきれぬれはまかてな

んといへは。あなゆゝし。なと物も御覧せてといひあひたり。皇后宮の御方。つねよりは心ことに。細殿の几張なとにも。織物の三重の木丁に菊をむすひなとして袖口さくもみち色々にこほし出されたりしかは。過にし方。例はさやうにみたれさせ給ふ事もなかりしか。をとゝしもうへの御局に。人々のきぬともの中に。よしと御覧せんを。上らう下らうともいはす。それかれをいたさん。わさといたしたるとはなくて。はつれてゐあひたるやうにせよとて。御手つから人たち引すへて。一のまには出せと仰られしかは。皆人の袖口もりうたんなるに。我からきぬのあか色にてさへありしかは。ひとりましりたらんかけしきおほえて。是こそみくるしくやと申しかは。とをくては何か見えむ。あへなとその人といふ書つけてもなし。よもみえし。あなかちにせんとおほしめしたりし事なれは。とかなきやうにいひなさせ給ひて。すへてくろとのかたはらにつゝきたる小はしとみより御覧して。あの袖今少しさし出せ。これすこし引入よなと。もて興させ給ひし有さま。いかてかおもひ出さるへきをなとおほえて。目とゝめらるれ。とまりてなと思ふ程に。院よりせいそ堂のみかくらには。すけ二人。さき〳〵も参ると仰られたるに。一人そ排のすけまいる。今一人は参らせ給ひなんやと。殿仰らるれは。その出たちに事つけて。出なんとおもひて。むかへに人をこせよといはせたれは。くるゝまゝにをこせたり。道すから心やすく。夜のふけぬさきに出るにつけても。物のみそ哀なる。こと人何事かつかうまつりなれし。御心に侍らひしおり。ふけしさまに所せかりし心地せし物を。まして出悦ひすとて。わひさせんとおほしめしたりしおりは。あや

にくかりて。とみに御手もふれさせ給はさりし物を。いそきてまかてんと思ひしよの事そかし。宮の御方にわたらせたまひて。夜のふくるまて歸らせ給はさりしに。かろうしてまちつけ參らせて。すゝめ參らせしを。いかて心えさせたまひたりしにか。まかつる事仰られしかは。さにさふらふと申たりしを。きかせ給ふまゝに。うちふさせ給ひて。こよひは明かたに何事もせん。ねむたし。ねなんと仰られて。いかにつきなうそ見あへる物かなと思ふ人あらんと。ほゝゑませ給ひて仰られしかは。我は何の心にかさまては思ひたまはん。待ゐたりとも。人いつはるとこそわひしからめと申せは。いつみもわひよ。いけもわひよ。我くるしからすと仰られて。御たゝみの上にうちふさせ給ひて。みつかはして。あはれゆゝしに。にくけにおもひたるさまこそしるけれ。いかゝせむ。くるしけれはうちふしてやすむそかしと。しはし念せよかし。あなわひしなと仰られて。さまてもなき事をこちたけに仰られなして。わらはせ給ひし事なと。思ひ出られなからまかてぬ。つとめてかたぬきまたしからんと思ひゐたる程に。かみつかひ。うつくしけなる文これまいらせん。内にもちて參りてさふらひつれは。出させ給ひにけれは。こち參りさふらひつるなりとてさしいれたり。おもひかけすとおもふに。やまと殿よりといふ。とりてみれは。

　そのかみのをとめの姿おもひ出ていとゝ戀しき雲の上人

とそ書たる。

　そのかみの忘かたさに雲の上もいつる日高くおとろかす哉

とそかゝれぬるに。小安殿の行幸とてのゝしりあひたり。里よりやかて參る。大嘗會の事かかすともおもひやるへし。みな人しりたる事

なれはこゝまかにかゝす。御神樂の夜に成ぬれは。事のさま内侍所のみかくらにたかふ事なし。これは今すこしいまめかしくみゆる。みな人たちをみ(小忌)のすかたにてあかひもかけ日蔭のいとなとなまめかしく見ゆるに。かさしのはなの有さま見る。臨時の祭みる心ちする。皆座につきて。その〳〵すへき事ともとり〳〵にせらるゝに。殿も本末のひやうしとり給ふそうるはしき。ひのそうそくなる殿は今すこし人たちの座よりはあかりて。御さしきなれは。それにゐさせ給ひたり。つかひのかさしの花さゝせ給ひたるみるに。さまかはりてめてたき。もとのひやうしあせちの中納言(宗通)の子の中將のふみち。ことそのおとゝのひちうのかみこれみち。ひちりきあきの前司つねたゝ。あまたゐたりしを。事なかけれはかゝす。かくて御神樂はしまりぬれは。もとすゑのはうしの

音さはかりおほきに。たかき所にひゝきあひたり。聲さゝしらぬ耳にもめてたし。みかくらやう〳〵はてかたになると聞ゆ。せんさいせんさい萬さい〳〵とうたふこそ。あまてる神の岩戸にこもらせ給はさりけんもことはりと聞ゆ。我君のかくいはけなき御よはひに世をたもたせ給ふ。伊勢御神もまもりはくゝみ奉らせ給ふらむと。位たもたせ給はん年の數そひ。すゑはなか井のうらのはる〳〵と。濱の眞砂のかすもつきぬへく。みもすそ川の流いよいよひさしく。位の山の年へさせ給はん。誠にしら玉椿八千世にちよをそふる春秋まて。四方の海の浪の音靜にみえたり。かくてみあこひはてかたに成ぬれは。殿御こと。治部卿もとつなひは。はうしもとのまくむねたゝ(宗忠)の中納言。しやうの笛内大臣(雅實)の御子の少將まさたゝ。笛ひちりきもとの人々御つかひにて。殿の御

聲にてまんさいらく出せとて。われうちそひさせ給ひ。ふたかへりはかりにて。あなたうといせのうみなと。みたれあそはせ給ふ。むねたたの中納言拍子とりて出す。事はてぬれは。各さうそくぬきかへさせ給ふ。殿の御琴の音つまをと。なへてならすめてたし。みな／＼人々ろく（祿）かたにかけてたつに。殿は人には今ひときはまさり參らせて。御したかさねかち（褐）御そ（衣）かたにいたかせ給ひたるを見まいらすれは。三笠の山にさし出る望月の。世々（五十）をへてすみのほるらんやうに見ゆ。御年のほとなと。誠に盛なる櫻の花の咲とゝのほりたらむを見る心ちす。御よそほひ。天りんしやうわうかくやとおほえさせ給ふ。たゝせ給ふとてたまはりたる物なり。をきてたつへからす。なめけなりとて。御かたにかけなからおはしまして。大しやうしの前にて。御子の中將殿をまいれ。これ給はれとて。ゆつり參らせ給ふ。見參らすれは。二葉の松の千世に榮へむ御ゆくさき。雲をわけてなりのほらせ給はん程たのもしく見えたり。事はてぬれは。車をたてゝやかてまかてぬ。又の日。よへの名殘めつらしく心にかゝりておほゆるにも。先むかしの御名殘おもひ出られさせ給へは。周防內侍のもとへ。たひ／＼おほえて。けにと思ひあはせらるらむとて。いひやる。

めつらしき豐のあかりの日影にもなれにし雲の上そ戀しき

かへし。

おもひやる豐の明のくまなきもよそなる人の袖そそはつる

つこもりに成ぬれは。朔日の御まかなひすへきよし仰られたれは。いそきあひたるにも。我はたゝ。わかれやいさとのみおほえて。つこもりの夜內へ參るとて。堀河院過るに。二條の大路堀河なと。かいすみ物さはかしけに。人の出

入たるけしきみえす。目のみ先とゝまりて。

後拾遺 わしたしと答ふる人もなけれとも宿の氣色そいふに増れる

とよみけむふることゝさへ思ひ出らる。うちみん人。女房の身にて。あまり物しりかほににくしなとそ。そしりあはんすらむ。かやうの法問のみちなとさへ。朝夕のよしなし物語に。つねに仰られきこえさせ給ひしかは。事のありさまおもひ出らるゝまゝに書たる也。もとくへからす。忍ひまいらせさらん人は。なにとかはみん。我はたゝ一所の御心の。ありかたくなつかしう。女房しうなとこそかくはおはしまさめとおほえ給ひしか。わすらるゝ世なくおほゆるまゝに。かきつけられてそ。

歎つゝ年のくれなは無人の別やいとゝとをくなりなむ

十月十餘日の程に。里にゐて。萬の事につけても。おはしまさましかはと。常よりもしのはれさせ給へは。御すかたにこそみえさせ給はねと。おはします所そかしといへは。香隆寺にまいるとてみれは。木々の梢ももみちにけり。外のよりは色ふかく見ゆれは。

いにしへをこふる涙のそむれはや紅葉の色もことにみゆ覽

御はかにま[ゐ]りたるに。おはなのうすしろく成て。まねきたちてみゆるか。所からさかりなるよりもかゝるしも哀なり。さはかりわれもわれもと男女のつかふまつりしに。かくはるかなる山の麓に。なれつかうまつりし人もひとりたになく。たゝ一所まねきたゝせ給ひたれとも。とまる人もなくてと思ふに。大かた涙せきかねて。かひなき御跡はかりたに。霧ふたかりて見えさせ給はす。

花薄まねくにとまる人そなきけふりと成し跡はかりして

たつね入心のうちをしりかほにまねくお花をみるそ苦しき

はな薄きくたに哀つきせぬによそに涙を思ひこそやれ

これをある人いひをこせたり。

いかてかく書とゝめ叙みろ人の涙にむせてせきもやらぬに
かへし。
思ひやれなくさむやとて書置し言のはさへそみれは悲しき
我おなし心にしのひ参らせん人と。是をもろともにみはやと思ひまはすに。忍ひまいらせぬ人は誰かはある。されと我をあひおもはさらむ人に見せたらは世にわつらはしくもれ聞えんもよしなし。またあひおもひたらん人も。かたうとなとなからん人は。はへなき心ちすれは。此みかとにあひたらん人も哉と思ふに。ひたち殿はかりそ。此みかとにあひたる人はあなれとおもひむかへたれは。思ふもしるく哀に心やすくわたられたり。日くらしにかきらひくらして。

右申請　官本。俾源極﨟俊治書之。與岩倉中將一挍畢。

寛永十六稔臘十六　　秘書郎

右讃岐典侍日記以奈佐勝皐本書寫以百花庵宗岡本挍合

群書類従巻第三百二十三

日記部四

辨内侍日記上

寛元四年正月廿九日。とみのこうちとのにて御譲位なり。そのほとの事ともかす／＼しるしかたし。いと／＼めてたくて。辨内侍。

今日よりは我君の世と名つけつゝ月日し空にあふかさらめや

三月十一日。官廳にて御即位。春の日もことにうらゝかなりしに。さま／＼のきしきとも。いはむかたなくめてたし。人々のすかたともめつらかにみえ侍しかは。辨内侍。

玉ゆらに錦をよそふ姿こそ千とせはけふといやめつらなれ

四月一日。平野のまつり也。上卿土御門大納言。秋定。辨。經俊。車。すけつく。くやく。ときつな。いたしきぬ。若かへて。御てうつまいらせよといふをみれは。かみをぬらしてくしにはさみて。こと／＼しけに車へさしいるゝもおかし。松の木かけ風すゝしく吹て。けいきおもしろく侍しかは。辨内侍。

萬代と君をそいのる千早振ひらのゝ松の昔をためしに

おなし日。少將の内侍。松尾のつかひにたつ。上卿二位中納言。頁教。辨。ちかより。くやく。ためなは。車。かれとも。いたしきぬ。しやうふ。しけき木するにほとゝきすの初音をきゝて。少將内侍。

千早ふる松のおやまの郭公神もはつねをけふやきく覽

四月十三日。りむしに内侍所へ使にたちて侍しに。こむらうをとをりて。きやうてんのたむ

のうへなれは夜ふけてめくる月かけ。さやかに見えしかは。辨内侍。

増鏡くもらぬみよに仕へてそさやけき月のかけもみるへき

五月五日。あさかれゐに。かつみを參らせたるを。歌をそへてとりてまいらせよと。仰ことありしに。あやめと思ひて侍れは。ひきたかへたるもおもしろくて。辨内侍。

かつみおふる淺香の沼もまたしらて深くあやめと思ける哉

五月の廿日あまり。在明の月くまなくて。ことにおもしろく侍りしに。御ちよくろにて御連歌ありしこそ。いとやさしく侍し。かた家ためつくはかりにて。人數もすくなかりしかは。いとまさりし程に。此ついてにこうたうの内侍のひはをきかはやと。仰ことありしかとも。月もいりかたちかくなりて。みなかへり侍にし。名殘おほくて。つりとのかたにやすらひて。辨内侍。

月をみて思ひも出はなのつから忍はれぬへき有明のそら

かへし。少將内侍。

思ひ出む後とはいはし今のまの名殘の□有明の月

七月七日。きかうてむの夜。頭中將。まさい事とも奉行す。あさかれゐにて。こう當の内侍。ことちたてられて。ちとかきならしていたされしこそ。いとおもしろかりしか。頭中將奉行からにや。今宵の雨もしめやかにふるなと。人々おほせらるれは。少將内侍。

しめ〱と今宵の雨のふるまひに奉行の人の氣色なそしる

なと申せは。大納言殿ことにけうして。わらひ給もおかし。こと〻もよくなりて。うへの御つほねより二間にてみれは。ともし火の影かすかなるもおもしろくて。少將内侍。

ともし火のかけもはつかし天河あめもよにとや渡りかぬ覽

返し。辨内侍。

星あひの光はみせよ雲ゐよりくもゐはちかしかさゝきの橋

八月十六日。御せ所へ行幸ありしに。萬里の小路の大納言。公基。左衛門督。實藤。頭中將。雅家。頭辨。顯朝。なんと參て。御あそひとも有。御留主には。中納言のすけとの。宮内卿との。辨内侍なと。朝かれゐのひろひさしにたちいてたれは。かうらむにそへてたてたるむまかたの障子はつれより。ほのかにみゆる月影いとわりなきを。いにしへ二條の后後涼殿に候給ひけむは。此一の對の程そかし。その世にもかくや心つくしなりけんなと申出て。辨内侍。

むかしよりくもらすといふ月影をさやかにみゐは心なりけむ

還御のゝち。これを聞て。少將内侍。

雲の上に猶澄なから秋のよの月なさやかになとかみさらん

八月晦日。女く所へさたまるへき内侍。朱雀門へむかふへきにて侍けるに。少將内侍いたはることありて。代官にたて侍しに。風いとすゝしく吹て。みかきかはらおもしろく侍しかは。辨内侍。

おほうちや古きみかきに尋きてみよ改まるけふにも有かな

九月八日。中宮大宮女院の御かたより。菊のきせわたまいりたるか。ことにうつくしきを。朝かれゐの御つほの菊にきせて。夜のまの露もいかゝとおほえわたされて。おもしろく侍しかは。辨内侍。

九重やけふこゝぬかのきくなれは心のまゝに咲せてそみる

十月一日。除目ときこえしか。十一日にのひて。土御門院の御忌日とて。ちむに公事ありて。大宮公相大納言。萬里小路公基大納言なと參らせ給へり。職事とも。つね經俊とし。むね宗雅まさ。光國なとまいり。御いのりのことさためらる。十九日より金輪の法てんちさいへむなとはしまるへしときこえし。奉行藏人侍從むねまさ。おりしもあられはけしくさへたるけいき。いとおもしろくて。辨内侍。

やなよろつ祈るしるしもあらはれて露玉ちる數もみえけり

十月廿四日。河原の御はらへなり。その日の事ともめてたしといふもおろかなり。しとみやより見わたしたれは。はるかにいさこ地しろしろとみえて。河風さえたりしに。辨内侍。

けふし社清き河原のいさこ地に千世へむ數もとり始むらめ

十一月十四日の夜。雪いとおもしろく。みちたえてつもりにけり。夜番にて。花山院宰相中將。もろつく。頭中將なと候けるも。院の御所へ參りにけれは。人々清涼殿へたちいてゝみれは。竹にさえたるかせのをとまても身にしみておもしろきに。月はなを雪けにくもりたりしも。中々見所あり。大宮大納言。きんすけ。萬里小路大納言。きんもと。なとまいらせたまひて南殿にてよもすからなかめ給けるか。曉かたことにさえたりけれは。うへのをのことも。殿上のおりまつめしけれとも。つきたるよし申けれは。ひろ御所のきたむきにて。かれたる萩の枝なと。おり松にせられけるときゝし。いとやさしくて。辨内侍。

霜かれのふるえの萩のおり松はもえ出る春の爲とこそみれ

有明の月くまなかりしに。雪のひかりさえとをりて。おもしろくみえ侍しかは。常の御所のかうらむのもとへたちいてたりしに。公忠の中將。大宮の大納言殿の。すゝりこはせ給とて。もちてまいりしも。いつくの御文ならむとゆかしくて。辨内侍。

明やらてまた夜は深き雪のうちにふみゝる道は跡やなか覽

十四日のよ。少將内侍女く所へわたりゐて。心ちなをわひしくて侍りけれは。なにこともしらすふしたるに。曉かた。はるかに雪ふかきをわけいるくつのをとのきこゆるに おとろきて。こゝちをためらひて。やをらおきあかりてきけは。大宮大納言殿よりといふこゝろにつき

て。つまとをゝしあけたれは。いまた夜はあけぬものから。雪にしらみたるうちのゝけいき。いつのよにもわすれかたくおもしろしといへは。なへてなり。御ふみをあけてみれは。

九重や大内山のいかならん限りもしらすつもる白雪

かへし。少將內侍。

こゝのへのうちの、雪に跡つけて遙に千代の道をみるかな

その雪のあした。少將內侍のもとより。

九重にちよをかされてみゆるかな大内山の今朝のしらゆき

返し。辨內侍。

道しあらんちよのみゆきを思には降共のへの跡はみえなん

十七日。雪なをいとふかうつもりしに。吉田の使にたちて。かへさに。しゆきかたの女く所の事からゆかしくて。そなたさまやれと申侍しかは。くゝやく。ためもち。かれとも。六位のくるまのとものものなとも。夜ふけてはるかにめくらむ事。かなふましきよし申侍しかとも。せめてたつねまほしさに。吉田のつかひのかへりには。かならす女く所へたちいるしきにてあるそと申侍しかは。まことにさる先例ならはとて。はるはるとたつねゆきたりしに。ゐしかもむをそくあけ侍しに。今にはしめたる事か。吉田使のかへさに。內侍のいらせ給に。ことあたらしくあけもまうけぬかと。あらゝにいさめ申侍しも。かやうの事や。先例にもなり侍らむと。おかしくて。辨內侍。

とはましの積れる雪の深きよに是もむかしの跡といはすは

十八日は。中のとりの日なり。攝政殿參らせ給ひて。御くしそかせおはしますに。ものゝくにてまいるへきよし仰ありしかは。おりしもをしいたしの衣。よそひなきよし申て。なえたらむも又いかゝとて。辨內侍。

しほれたる衣なきせそおほうみの蜑の袖かと人もこそみれ

ゆきかたの女く所は。こう當の內侍なり。この

程の雪さえとほりたる夜もすから。ことひきあかしたまふときゝしも。ことにいみしくおほえて。辨内侍。

よもすから野への白雪ふることも千世松風のためしにやひく

少將内侍。女く所。左近ふのついかきの中なれは。はる〳〵と見わたされたるに。月のさえたる雪のうへは。かきりなく面白て。少將内侍。

いつのよも忘(なイ)れやはせむしら雪の古き御垣にすめる月影

衞士めふるとか。夫ともとるとて。になひたるものともうちをかせて。さま〳〵つかはるゝなかに。こにものいれてになひたるか。ことになけきて。さしたる所へまかるに。かまへていとまたへと。なくやうにいふも。いと〳〵をしくて。少將内侍。

身におへはさそ思ふ覽たけのこのてなはなつよの心迷ひに

おかしけに。色々なるものとも。ぬひかけたれは。ゆきとけにぬれぬへくて。衞士ともうへにのほりて。雪かく音もおもしろく。みゝにとまるこゝちして。少將内侍。

あはらなる板屋の軒のしら雪のかくはかりなと降つもる覽

ことにかせふきさえて。おそろしき程なりしに。奉行辨ちかより。うちのゝ風に吹すゐらるる心ちして。たへかたくて。つや〳〵とものもいはれす。けさよりきやうし所へのかせにふかれて。何事もおほえす。かゝるたへかたきことなしと。ふるひ〳〵いはるゝる。まことにことはりとをかしくおほえしに。女官とも。辨殿こそ。まいらせ給ひたれとて。ひしとならひいてそめく。さなにかさかりて。御ことかけはてなんすと。ころ〳〵申侍しかは。すへてふるはれて。ものもいはれはこそとありし。おかしくて。少將内侍。

言の葉も思ふにさこそなかるらめ吹とふくよの風の景色に

廿二日。宮廳へ行幸ならんとて。かねて中宮の

行啓也。
廿日。よひ月まちいつるほとに。ふけてそいらせおはします。藏人のすけ。經俊。內侍たつぬときゝて。奏事にやあらんとて。たいはむ所のぬいの障子のもとにてまつ程。行啓の供奉の人人。こなたさまへくるをとして。中宮權大夫。通成。花山院宰相中將。師繼。頭中將。雅家。通世の少將なと。ゆつえのをとまても。さえとをりておもしろきに。きりみすのほとに。藏人の侍從むねまさか聲にて。ゆゝしき月の光かな。しろうすやうのころこそ。思ひやらるれといふ。けにかきりなくみゆれは。辨內侍。

かれて思ふ豐の明のさむけさたましていかにとすめる月哉

廿二日の曉。官廳へ行幸あり。ことにさむくて雪さへこほりたるに。あからさまにしつらひたる御所なれは。大そうの御屛風のすきまの風に。雪のちりくるもいとおもしろし。大宮大納言殿まいらせ給て。やふれたる御かうしとも參りわたし給ふ。御所はたかみくらむきなり。かはらのむねに雪しろくつもりたるに。只今も修理しきとものほりて。おのゝをともたたこゝもとにきこゆ。清涼殿は。つねの御所の御障子のあなた。二間をしつらひて。御拜の座とす。くるゝとよりしもは。おものやとり御つし所也。つほね一まを四にへたてゝ。二三人つつあひいたれは。せはきもわりなし。中宮の御かたへいらせおはします。御みちはつまとのひとまより。せいそたう見わたされて。いとおもしろし。かりそめにしつらひたれは。人々のあしをとまてもおかしうきこゆる。今宵は帳たひの心みなり。清涼殿にしつらひたる二間。殿上のくしかたあるまには德大寺の大將。さねもと。をはしめて上達部のいたしつまのすかたとも。めとまりてこそ見ゆる。常の御所の御障子の

しはしまてうちたれ髮の差櫛をさし忘れたる時のまはかり
後にこれをきゝて。辨内侍。
さしくしのさしあふほどの時の間はうち垂髮も我そ亂れし
とらの日は。みやの御方のえむすいなり。夜も
更にしかは。御所も御よるにならせおはしま
したりしか。しろうすやうのこゑに。御めさま
して。又出させおはします。をの〳〵たちてま
ひ給。右大將。實基。三と。大宮大納言。公相。五
度。萬里小路大納言。公基。四度。右兵衞督。有資。
いたしうたなり。左衞門督。實藤。ときこえし
か。俄にきやうふくになり給ひし。いと〳〵ほ
なし。又は花山院宰相中將。師繼。中院三位中
將なとぞ見えし。その夜はちこのまつりの使
にたちたりしに。顯朝の辨。院の推參えんすい
なとはてゝ。まいりたりしかは。あかつきにな
りて。宮のことからも心すみて。物の音しらへ
たるも。おりからおもしろくて。辨内侍。

かたは。たいはむ所なり。女房たち袖をつらね
ていなみたり。なかにたいそうの御屛風をた
てたれとも。ひきくて。御所へ參る人々も。あ
なたの公卿ともに。めをみあはするもまはゆ
くて。むかし女房のやうに。いさりありきしも
おかし。あらこものやうなるものをしきたれ
は。おりものゝきぬのすそは。みなちりにそな
りし。あらしはけしく吹て。へたての屛風つゝ
きてたをれにしかは。わた殿まてみわたされ
たる。はれ〳〵しさかきりなくて。辨内侍。
へたてつる風のたよりもおしなへてさらにそ豐の明也ける
少將内侍。くろ木のやへむかひて侍けるに。か
みあけのくをとりおとして。官廳のつほねへ
こひにたひたりしに。是にもさしあふほとに
て。かなはさりしかは。ことゝもよくなりて。
とく〳〵とたひ〳〵せめられしも。たへかた
くて。少將内侍。

今宵しもいかなる神の誓にてものゝれならす跡となりけむ

藏人の侍從むねまさ。いそきないらんすへしとて。いそきの節會より。しうきにうつらむに。御隨身はなをしたかふへきにやと申侍しを。あまりにことしけくて。え申とをさゝりしかは。しきりにいそき申へきよし侍しを。中納言のすけとのたゝなかにて。歌なとにてはからへかしときこえしを。さしものことのまぎれに。なかめいたしたらむ心つきなさと。おかしくて。心にはかくそおほえし。辨内侍。

さしも身にしたかふ夜半の月なれは移る方にそ影は絕らめ

卯の日は。せいそたうのみかくらなり。中宮の御方へまいるみちにて。人々きかはやとありしかとも。攝政殿候はせ給ひて。いとくちおし。淸凉殿のかたへたちいてたれは。職事ともたちならひたり。又きぬかつきかさなりて。さらに道なし。つねの御所の御帳のもとに。人々のろくともにたきものなとして。ほのかにききしかは。大宮大納言ひは。花山院大納言ふえ。兵衛督ひやうし。面白ともいへは中々なり。辨内侍。

雲ゐより猶はるかにやきこゆらんむかしにかへす朝倉の聲

こと〻もはて〻。大宮大納言殿。常の御所へまいれ給て。勾當内侍とのに。ほくは(牧馬)のねはいかか侍つるとありしかは。かの大こくてむのひはのねとかやのやうに。いつくまてもくもりなくこそと申給も。けにかきりなくて。辨内侍。

いにしへの雲井にひゝくひはの音に引くらへても猶限なし

辰の日は節會也。たかみくらへいらせおはします。たかきいしはしに。はかまのふみところたとられて。扇もさゝれす。いとわりなし。其夜のこと〻ものめてたさ。いひつくすへからす。辨内侍。

雲のうへと思ふも高き古への道をそあふくけふのみゆきは

節會はてぬれは。わらはのほり。露臺の亂舞。御せむのめしなとはて。せいそたうの月のあり明のかけ。あかす身にしみて。おもしろきを。人々なかめて。辨内侍。

九重によをかさねつる雪のうへの有明の月をいつか忘れむ

かくて閑院殿へいらせおはしまして。大内裏の事おもひいてゝ。辨内侍。

雲ゐにて有し雲井の戀しきは古きを忍ふ心なりけり

臨時祭は十二月一日ときこへしか。のひて十二日也。日來ふる雪さえとほりたるに。いしはいの間にかへりたち。つく／＼とまちいたりし。ひえさまもいとたへかたし。少納言内侍少將はいせむのいくさあらそひして。しかれしもおかし。攝政殿。公卿には花山院宰相中將はかりそみえし。職事光國。庭火のかけに月のひかりさえて見えしも。おもしろくて。辨内侍。

あか星のこゑもさこそはすみぬらめ庭火に月の影そ移ろふ

内侍所の御神樂は。十二月十五日なり。すけ。按察のすけとの。内侍。少納言。月いとおもしろくて。人々いさなひてきゝにおはせしか。中院三位中將。雅忠の中將なと。こむらうのかたにみえしかは。むなしくてたちかへりしを。大納言殿。このせきもりの心つきなき。いかゝおもふとおほせられしかは。辨内侍。

うちもねぬその關守のこゝちしてとをさぬ道に立かへる哉

廿一日。せちふむの御方違の行幸。官廳へなりたりしに。ありしよの事思ひ出られて。清涼殿にしつらひたりし所に。少納言内侍とよもすから月をなかめて。辨内侍。

あかさりし雲井の月のこひしきにまためくりきぬ有明の影

廿四日。久我太政大臣のかたせち會なり。夜ふけて殿まいらせ給ひたりしに。かみあけの内侍にて。少納言とふたり大はん所に候しに。夜

はふけぬるか。うしのくひのほとかとゝはせ給ふを。たれも何とも申さゝりしを。少納言心のうちに。御返事さためてありつらむ。いかゝときこゆれは。辨内侍。

轉寐にねや過なましさよ中の丑のくひともさしてしらすは

やくしの御修法。十二月十八日よりはしまりて。廿四日けちくわむときゝしか。のひて廿六日佛名の夜。けんしゝまもりたてまつるとて。つく／＼と候しに。のりのこゑ／＼いとたふとくて。辨内侍。

七日そと思へはおかぬ日をのへておこなふ法の聲そ聞ゆる

寛元五年。元日のはいらいのけひき。ことにめてたくて。辨内侍。

今日そとて袖をつらぬる諸人のむれたつ庭に春はきにけり

七日。白馬節會也。春の日かけもうらゝかなるに。内辨（右大臣九條殿）のよそほひゆゝしくみえしかは。辨内侍。

とれりめす春の七日の日のひかり幾萬代のかけかめくらむ

その夜。はくはのわたるをみて。辨内侍。

ひきつれてうちもたゆまぬ駒の足はやく此よは更やしぬ覽

十九日。攝政かはらせ給とて。せんきせらるゝ。上卿二位中納言。頁教。職事頭辨。顯朝。てうたてまつるほと。おりしも月くもりかちにて。なにとなくものあはれなれは。辨内侍。

はるゝよの月とは誰かなかむらんかたへ霞める春の空かな

奏したてまつるを。御ゆとのゝ上にて。少將内侍みてちやくたうせられたるかや。かみのさうしのつまをやりてかきつけたる。少將内侍。

色かはるおりも有（不審イ）けりかすかやま松なときはと何思ひけむ

これをみて。辨内侍。

かすか山松はときはの色なから風こそしたに吹かはるらめ

日記の御雙子三帖。おほたいりの比。中納言のすけ殿にあつけさせ給たりしを。光國申いてて。返しまいらすへきよし申侍しに。なにとま

れ申さはやといふことにてありしかとも。御なけきのほと心はかりはよういせられて。辨内侍。

濱千鳥あとなかたみの恨みたに波の上にはいかゝとゝめむ

廿三日。御拜の御ともに。大納言殿中納言のすけとのなとまいりて。二間のすのこのもとにたち出給へるに。餘寒のかせも猶さえたる。くれ竹に日はてりなから。雪のふりかゝりたるを。中納言のすけとの。文屋のやすひてかいとひけむこそ。おもひよそへらるれ。さすかさほとのとしにはあらしとやなときこゆれは。辨内侍。

たか身にかわきていとはん春の日の光にあたる花のしら雪

二月廿八日。年號かはりて寶治といふ。ちんのさための人々。大藏卿八條大納言。みちたゝ。通忠土御門大納言。顯定。のこりの人々は。きゝしかとわすれにけり。攝政殿。なかのやとの兼經。まいらせ給て。いにしへの陣の定に。四納言たち。いかにゆゝしかりけむ。さてこそ。てる少將。ひかる少將なとは。つかさくらゐたかくのほらむとおもふは。身のはちをしらぬなりけりとおもひとりて。世をのかれけめなと。ふることかたり出させ給も。けに思ひやられて。辨内侍。

いにしへに定め置けることのはな今もかされて思ひやる哉

三月一日。ことうの御神事に。きやうふくにて仁壽殿のつまの局にわたりゐたりしに。左衞門の陣むきなれは。東三條の木すゑも。ちかくみえわたされて。いとおもしろし。けふは陣に公事ありて。經光の宰相。頭中將。頭辨もまいり。たきくちともしたかひてみゆるもおかし。宗雅光國なとも參る。花もさかりにいとおもしろきに。おりしも大宮大納言參り給。なをしすかた常よりも心ことに。にほひ深くみえたまひしかは。辨内侍。あなかりきぬきたる人そ御ともにはありし。

花の色にくらへて今そ思ひしる櫻に増る匂ひ有とは

三月九日。左衛門督。實藤。夜番にまいり給て。こよひは宿をとほすへきよしありしに。衛門督。通成。もまいりたるよし。きかせおはしまして。なにことにても。おもしろからむ事なくてはほゐなしとて。殿上にたれ〳〵かさふらふ。せう〳〵めしてまいるへきよし。有資卿うけ給はりて。公忠。公保。通世。隆經やうの人々まいりて。五節のまね亂舞なとはてゝ。左衛門督りやう山みやまの五よう松。右衛門督。兵衛督つけうた。おもしろしともおろかなり。今夜のなこりをとめはやと。人々ありけれは。辨内侍。

いつはりのをしもいかゝ忘るへき豊のあかりは時そともなし

中宮の行啓は。やよひの頃なれは。其程に人々いさなひて。いつくの花も雲井よりとてたつねむに。さかぬ櫻はあらしなと。萬里小路大納言殿のたまひしかとも。なにとなくてやみにし。くちおしくて。辨内侍。

花みむと頼めしをやいかなれは尋ぬはかりのなたに留らぬ

返し。少將内侍。

華咲ぬ花やあたなに立ぬらん空たのめにも成にける哉

三月廿一日。御いのりともあるへしときこゆ。藏人の侍從奉行す。金輪法は太政大臣殿。佛眼法は殿の御さたとそきこえし。さきの座主仁壽殿に候はせ給へき御しつらひに。なにとなくよもふけぬと思ふに。もむしやくのこゑきこゆ。たゝいまゝてはなと申さゝりけるにかとたつねれは。こよひはくわんそうとて。陣に公事ありてといふもことはり也。なにとなくおもしろくて。辨内侍。

我ならぬ人もさこそは聞つらめ曉かたのたきくちのこゑ

廿三日は季の御讀經也。大宮大納言。萬里小路大納言。左衛門督まいりて。昔御所へ御まいり

有。殿より。かゝてのえたに手まりを付てまいらせさせ給ひたるを。中納言のすけとの見たまひて。こそさきのとのより。ふねにまりを十つけられて。まいりたりしこそ。おもひ出らるれとて。なにとなく。ふねのとまりは猶そ戀しきと。くちすさみ給へは。辨内侍。みなと川なみのかゝりのせとあれてと。つけたりしを。是を一首になして。返す人のあれかしときこゆれは。辨内侍。

いかにしてかけたる波の跡やそのうきたる舟のとまり成覽

花山院宰相中將。西園寺のはなみの御幸の御供にまいりたりけるまに。はゝのうせにけるを。ことになけかるゝよしきゝしも。いと哀にて。少將内侍さとなりしに申つかはし侍し。辨内侍。

かなしさのさらぬ別をしらすしてちよもと花の陰や頼めし

返し。少將内侍。

春との花又ともたのみなむさらぬ別れよいつを待らん

三月廿八日。洞院攝政殿の十三年に。せんにん門院。御とし十九。御くしおろさせ給ときゝしおりしも。雨降ていと哀なりしかは。少將内侍のもとへ。辨内侍。

たちなれぬ衣のうらや春雨にはしめてあまの袖ぬらす覽

かへし。少將内侍。

津の國の難波もしらぬ世中にいかてかあまの袖ぬらすらん

權大納言ひるはむに參りて。常の御所のかうらんのもとにて。なにとなき御あそひあり。公忠。公保。資保なとも候。みかはみつに山ふきの花のなかるゝをみて。大納言新吉野川と見ゆものかなと聞ゆるを。御殿のうへには。人々もいとおもしろくこそ。なにとまれ申さはやなとありしかは。心のうちに。辨内侍。

山ふきの花の陰みる水なれはうつすよしのゝ河といふ也

卯月十日のころは。太政大臣殿北山におはし

ますほと。女房たち。ほとゝきすのはつ音たつねにおはしましたりけるに。甲斐々々しくまいりたりしか。我心のうち。うたによめと有しかは。辨內侍。

いとはしよ何方よりも尋ねとへあかぬ名殘にきなは返さし

最勝講は十八日よりなれは。結願廿二日也。行香にたつ人々。左大臣殿。近衛殿。花山院大納言。さたまさ。權大納言。されたゝ。なとそ。御あかしのひかりにほのみしりたりし。さならぬ人々はいとみわかす。殿はおにの間に候はせ給ふ。きゝもしらぬ論議のこゑも。結願なにとなく名殘おほくて。辨內侍。

くらへみる御法のちゑの花ならはけふやはつかに蕾開けん

花山院宰相中將。もろつく。いろにてこもりいられたりしに。南殿のたち花さかりなりしを。一枝おりてつかはすとて。兵衛督とのにかはりて。辨內侍。

あらさらむ袖の色にも忘るなよ花たちはなのなれし匂ひを

返し。宰相中將色のうすやうにかきて。しきみの枝につけたり。

いにしへに馴し匂ひを思ひ出て我袖ふれはなやゝつれむ

五壇の御修法は。十七日よりはしまりて。七日なれは。廿三日けちくわむなり。こよひはいとなこりおほくて。曉の御時に。かならすちやう聞せむなといひて。月のかたふくまて。常の御所の御えんのかうらむにおしかゝりて。兵衛督殿。勾たうとの。少將辨なと。なにとなきこそそろ事ともいひかはして。とのゐすかたもつつましきに。唯いま人のまいりたらんになといへは。これほとふけたるに。たれかはこゝにものせんなといふ程に。按察使殿まいらせ給ひてのち。御ゆとのへとをりのたてしとみに。かふりのさきのみへつる心ちのする。人のおともしつるにやなといひ出して。あなたさま

にたれか候。いさとはんとて。女王たかつんしてたつぬれは。三條の中納言殿。公親。こそおはすれといふ。あなあさまし。たてしとみのうへよりも。よく／＼見えぬらんと。心うかりなけくほとに。あかつきの御時のかねのこゑきこゆれは。ちやうもむして。たゝいまふかくなけきつるつみもうかふらむとおほえて。いとたうとくて。辨内侍。

何となき心のつみも消ぬらん月もあり明のかねのひゝきに

六月一日。つちみかとの中納言。あきちか。の夜はんなり。その日は院の御所のも。よはんなりけるにや。いとゝくひるほとにまいりて。かくとこうたうの内侍とのにきこえさすれは。めつらしくこそとて。あひしらひ給を。きりみすのもとにてのそけは。なをしの色はなやかに。ことにひきつくろひて。にほひふかくみゆ。今の世にはこれ程なる人も有かたしなと。人々もきこゆ。番にもけたいなくまいり。さらぬ奉公もおこたるましきよしなと。こまやかに聞えてたちぬるなこりも。なにとなくとまるこゝ地す。たきのくちよりいて行を。ひろ御所にてやみるへきなといふほと。殿上にひさしくたたすみて。にきうの御ふた。ちやくたうなと見て。とのもんつかさにものいひ。着到つけてもなをいてやらす。なりいたのほとにたちて。なにゝもめとまるけしきなるを。いかなることにか。さき／＼は院の御所に心のひまなき人人にておほろけには。番にもまいらぬに。あやしくこそなといふほとに。つきのひきけは。はや此あかつき。りやうせんにて世をそむきぬときくも。むかしものかたりをきく心ちして。あはれさかきりなくおほえて。辨内侍。

そむきえて心もかせも涼しさの岩のかけちな思ひこそやれ

八日。けふはひるのはんにまいらましものを。

くまのゝみちのほとにてやあるらむと。あはれにて。大納言とのに。辨内侍。
たひ衣たちて幾日に成ぬらんあらましかはとけふそ悲しき
時継の辨まいりて。たいはむ所にてしんこむしきの御神事のこと中侍しついてに。土御門中納言のことあはれさ。こゝろ有人のめてぬはなし。うき世をしらぬ人は。ちくしやうに人のかはをきせたるとこそきゝ侍れといふも。けにかなしくて。辨内侍。
かく聞は流石身の毛もたつものなとりに劣らぬ心なれとも
七月十五日。月いとおもしろきに。清涼殿いかならんとおほせことありて。只今は御前にまいるほとなれは。御かうしもすへらす。御丁のもとにて。御覧せさせおはします。ことにくまなくみゆれ。はいせむ爲氏なり。
今宵又はしめの秋のなかはとてかすく月の影そみちぬる
十六日。除目なり。殿まいらせ給ふ。つねとしみつくになとまいりて。たいはむ所に。内侍もてそうまつへきよし。つねとし中侍しかは。内侍たち月なかめて。何事も物をまつはひさしきやうにおほゆる。夜もすからもなかめあかしてのみこそあれとも。これまても。公事とおもへはこゝろもとなきなといひて。辨内侍。
是も又待となれは秋のよのふけぬさきにと月をみる哉
御ゆとのゝうへに。少將内侍候しに。女主してきこえたれは。かへし。少將内侍。
心にもあらて今宵の月をみて更ぬさきにと誰を待らん
八月一日。中宮の御方よりまいりたりし御たきもの。よのつねならす匂ひうつくしう侍しかは。辨内侍。
けふはまた空焚物の名をかへてたのめは深き匂ひとそなる
院の御所の辨内侍。こうたうの内侍のもとへ。はきのとの萩はさきたりやとたつねられたるに。一枝おりてつかはすとて。こうたうの内侍

にかはりて。辨内侍。

秋をへて馴こしにはの萩のえにとめし心の色をみせはや

かへし。

思ひやる萩のふるえにをく露はもとみし人の涙なりけり

十一日はしやくてんなり。あさかれいにて。ありつくそうす。ゆゝしきみちの人々。詩つくりてあそふらんこそゆかしけれ。なとこの殿上なとにてなかるらむ。さもあらは。たちきゝてむなと。人々おほせられしかは。辨内侍。

道しあらは尋れてそ聞ん敷嶋や倭にはあらぬ唐のことのは

八月十五夜。常盤井とのにて。院の御會侍しに。大宮大納言。萬里小路大納言。藤大納言。爲家。權大納言。實雄。右衞門督。通成。吉田中納言。爲經。ためうち。ためのりなと。さらぬ殿上人も侍しかとも。これこそとをりにみえし。花山院の大納言。定雅。はすこしさかりて。歌講せられしほとにそまいられたりし。月はくもりかちにて。いとくちおし。このあかつき。みくしけとのうせさせ給ひぬときこえしほとなれは。よろつもの哀なり。御連歌なともありき。またみるかけのなかるらんといふふることの。御くちすさひにきこえしもいとあはれにて。辨内侍。

秋のよのうき雲はるゝ月はあれとまたみぬ影を誰忍ふらん

十六日は。こまひきなり。上卿園中納言すけすゑ こよひは月ことにはれて。いとおもしろく。あきとものの辨。十五夜にはおそれをいたき。すましたる月かな。内侍たちこれにかとて。夜への月のくもりたりしも。身のとかのやうにうれへありくもおかしくて。辨内侍。

澄まさる今宵の月のいかなれは半よりけにさやけかるらん

みくしけとの ひきわけのつかひは。公保の中將ときこえしか。にはかにきやうふくに成てまいらぬよし。きかせおはしまして。たれならむと御たつね 公忠の中將とそ

ありしに。辨内侍。

雲井よりこなたかなたへひきわけの使は誰そきりはらの駒

月のあかゝりしよ。清涼殿のまこひさしに人人あまたあそふ中へ。中宮大夫。隆親。あふきのつまをゝりたるにかきつけて。

よろつよもすむへき月の影そとはいかにか今宵契をくらん

少將内侍。

契ありてすむへき月のかけ迄も空にそしろき秋のよろつよ

辨内侍。

萬代とちきりたきてもあまり有月にともなふ雲のうへ人

權大納言は夜番にまいりて。はきのとにて御あそひ侍しに。たゝいまはなにの時そと御尋あれは。おきてゐの時と申給へと。よるのおとゝには。内侍もねなんとせしかは。ゐよりはふけぬらんとて。辨内侍。

たゝいまはおきてゐそとはいふめれと衣片敷誰もねなゝん

中宮の御方へ御使にまいるとて。はきの戸のすいかゐよりみれは。花もさかりにおもしろきに。きりたちわたり侍しかは。辨内侍。

よゝに咲ふるえの萩のもとなれはきり立渡り隔そなくなり〔るイ〕

こうたうの内侍のつまのつほねにて。よもすからひは引あかし給しを。按察三位殿の心のうち思ひやられて。いとこそおもしろけれとおほせられしかは。辨内侍。

あまそゝき袖にや露のかゝるらんなかはの月の影そ更行

九月十四日。殿の上表也。ことゝもはてゝ。夜ふくるほとにまいらせ給ひて。あまりに月のおもしろきに。女房たちさそひて。月み侍らむとて。南殿つりとのなとの月御覧す。かやうの月のよは。むらかみ一條院の御ときは。[六十二]わかきかんたちめ殿上人なと。いまやううたひ。と經あらそひなと侍けるに。まいりてあそふ人のなき。いとこそくちおしけれ。こよひのはんの人はたれか候つるととはせ給へは。萬里小路

大納言たゝいまゝて候つるものを。いましはしなと申いてゝくちおし。すけよしといふ六位めし出て。月みるへきやうなとおしへさせ給も。いとおかし。あかつきかたにもなりにしかは。御ちよくろへいらせ給ひしに。兵衛督との御なこり申さはやとあらまして。辨内侍。

いさといひてさそはさりせは久方の雲ゐの月を誰か詠めむ

おなし月の比。萬里小路大納言。按察のすけとの。中納言のすけ殿なとさそひて。かはよりあなたまて。夜もすからあそひてかへり參りたりしに。按察三位殿きかせ給ひて。いとおもしろかりけることかな。かはをへたてたる戀といふ題にて歌よめとおほせられしかは。辨内侍。

袖ぬらすかはよりをちにすむ月のかけにも人を戀や渡らん

秋のよなかくていとつれ〳〵なるに。御よるのゝち。大納言との。按察すけとの。中納言のすけとの。少將辨。歌をつきてあそひ侍しに。こうたうの内侍とのはましらしとて。つまのつほねにてことひかるときゝて。按察のすけとのうらみやらはやと侍しかは。辨内侍。

和歌の浦にうらむる波も有ものを松のあらしよ心してふけ

中宮大夫たかつむしといふ女主に。かくいははやとおもふいかゝとて。

思ひそむる心の色そまたみせぬよそめ計りに年はへぬれと

女主にかはりて。辨内侍。

人しれぬよそめ計りはかひもなしみえぬ心の色ならはや

つねの御所の御つほに。秋のくさともうへられたるなかに。かしらけつらすといふ木の。ちいさくていたひけしたるを。いはのはさまにうへられたるを。權大納言見給て。かしらけつらすとこそあかくさけなれときこえしを。いとおかしと人々おほせられしかは。辨内侍。

亂たるそのなはかりの黑髮につけの小櫛もいかゝとるへき

月あかきよ。おなし御つほねの菊。いとおもしろきを。左衛門督實藤。おりてまいらせられたる枝の殘り。またおりてまいらせよと。おほせことありしかは。辨內侍。

月かけに折けん人の名殘とて結ひなとめそ菊のした露

おなし比。大宮大納言。萬里小路の大納言。左衛門督。なへてならすうつくしう見ゆるきくともをまいらせて。御つほにうへられたるを。いつれにてもことに見えむ一枝。おりてまいれとおほせことあれは。辨內侍。

いつれとか分てもおらむ色々の人の心もしらきくの花

五節は十六日よりはしまる。月ことにさえておもしろし。丁たいのこゝろみ。ふたまよりやをらみやりしかは。攝政殿兼經。あつゝま。（やなき。）實基 內大臣殿。こゝはおほみやの大納言殿公相。まつか（され。）のこりの人々はいともみえわかす。とらの日。月いとあかきに。五節所へ行幸なりしに。攝政殿まいらせ給。左大臣殿近衛殿御供にまいらせたまひたりしか。御ふむとていたされたりしくしを。御ふところへいるゝよしにて。さなから御袖のしたよりおとさせ給ひし御ことから。いひしらす見え給ひしかは。辨內侍。

霜こほる露の玉にもあらなくに袖にたまらぬ夜半のさし櫛

御覽は。殿いたさせ給ふ。わらはもなへてならすみえ侍りき。ひとりはふるきはしたもの。ふくらかにうつくし。いま一人はいつくのきみとかや。ほそらかに思ひいれたるけしき。とりとりなり。人々ことにもてなして。かさみの袖なとつくろひ侍るもめとまりて。辨內侍。

あかすみるをとめの袖の月影に心やとまる雲のうへ人

節會は十八日なれは。月いとあかゝりしに。めしにすゝみて侍し。御階の月わすれかたきよし。中納言のすけとのに申いてゝ。辨內侍のかみあけのきぬ。ゆきのしたのこうはい。

雪のした梅のにほひも袖さえてすゝむみはしに月をみし哉

權中納言五節いたさるゝときゝて。くしこひたてまつるとて。辨内侍。

思ひやれ誰かはみせんこゝのへや豐の明のよはのをきくし

返し。大納言。

たれこめて豐の明もしらさりき君こそみせめよはのさし櫛

いたはることとおはしけるともしらて。申たりけるも。けにこゝろつきなくて。辨内侍。

たれこめし比ともしらぬおこたりに豐の明の月は更にき

臨時のまつりの御うま御らむのよ。大宮大納言まいらせ給て。御所にをかれたる風流に。九十くもといふこゝろしたるたなをみたまひて。あれをかくしたいに人のうたよみたりける。なにはうくしうくもえせしとかやなといひてわらひ給。いさおりくに歌よまむときこえさすれは。程なくものにかきて。御丁のもとにさしをきたれはいとこそはやけれ。かへることこそなけれとて。大納言殿。

はなにからとかやうのやうに。かゝるこはき

くるゝよはしのゝは草のうはゝまて碎くる露のもる時雨哉

少將内侍。

雲の上やしろきみ垣の内にのみくろゝよすからもるや殿守

辨内侍。

吳竹の霜をく夜半のうは風にくもらぬ月のもるたみる哉

敍位に。たきくちのすくるをきけは。こひと思とてなと。さまくなこりおしむときくほとに。たちかへり。うれしやみつとはやす。いつしかいかにとおもへは。なかやす一﨟になりたるよろこひやときくも。うつりかはるほとなさおかしくて。辨内侍。

しほりつる袖の名殘を引かへてつゝむあまりになる瀧の水

廿四日。記錄所の行幸なり。萬里小路大納言。左衛門督。さねふち。右衛門督。みちなり。右兵衛督。ありすけ。頭中將。まさ家。頭辨。あさとも。なとまいりて。れいの

さま〳〵おもしろき御遊とも侍しに。いつれかことにおもしろくおほゆると。人々おほせられしに。少將内侍。左衞門督のことのねなをすくれてきこゆるよし申て。

柏木のはもりといへる神もきけそのことの音に心ひかすは

五せちのまねのいたしうたは。なをまさりてこそとて。辨内侍。

ことの音に心はひかす柏木のはにふく風のこゑそ身にしむ

權大納言はをそく參給ひて。御よるになりてのち。御かうしのとにたゝすみて。さすやをかへのまつのはのと。返々なかめたまふも。みゝにとまりて。きく人もやあらむとおほえて。辨内侍。

夕月夜さしてしるへきかたそなきつれなき松にそむる心を

後夜にうつるかねのこゑ〳〵きこゆとてくわむきよなりぬ。人々みな出給ふに。ちかき火ありとて。少々はさふらひ給。權大納言女房たちなとゝもなひて。南殿のかたさまにてあそひ侍しに。左衞門のちむのはしに。霜のしろくさえたりし。さむくつめたさかきりなかりしもおもしろくて。辨内侍。

たき迷ふ霜もさなからさゆる夜に誰けちかぬるほのほ成覽

寶治二年。母のいみにてさとに侍しに。いはし水のりむしの祭廿日おもひやりて。辨内侍。

日影さす春のかざしの色々もおりしらぬ身の程そかなしき

おなし比。夏のひとへをたまはせたれは。辨内侍。

かゝる身は時しもわかぬ衣手にけふ社夏のたつとしりぬれ

十二月十九日。佛名のよまいりたりしに。月いとさえて面白し。職事とも例の鬼の間にて。ふむはい。左右の頭中將。もとゝも。きむやす。まいらす。つねとし。むねまさ。みつくになと。せちかゝりしたひにしるす。ちんこのまつりはむねまさなとそきこえし。むかしは小袖あはせといふこ

と。こよひ有けるなとかたる。上卿皇后宮權大夫。もろつく。きゝもしらぬ佛の御名。ともになのりつゝくるこゑ〳〵。まことに滅罪のやくもあるらむとおほえて。辨内侍。

まことには誰も佛のかすなれやなのりつゝくる雲の上人

寶治三年正月一日。寅時四方拜也。清涼殿へ出させ給。御ともに按察三位殿。中納言佐殿。勾當内侍殿。奉行宗雅。春のはしめの事からまことに目出度て。辨内侍。

今日になるときなは春のはしめとて祈りなれたる方も畏し

正月十五日。月いとおもしろきに。中納言のすけとの人々さそひて。南殿の月見におはします。月華門より出て。なにとなくあくかれてあそふ程に。あふらのこう地おもての門のかたへ。なをしすかたなる人のまいる。いとふけにたるに。たれならむ。皇后宮大夫の參るにやなといひてつまへいりてみれは。權大納言殿也。いとめつらしくて。兵衛督との。たいはん所にてあひしらひ給ふほとに。まことやけふは人うつひそかし。いかゝしてたはかるへきなといひて。出給むみちにていかにもうつへし。いつかたよりかいて給はんをしらねは。あしこゝゝに人をたゝせむとてましみつるいつるひる。こめいち(昆明池)のしやうしのもと。御ゆとのゝなけしのしもの一間に。勾當内侍との。みのとのきりみすのもとに。中納言のすけ。兵衛督との年中行事のしやうしのかくれに。少將辨なとうかゝひしかとも。あかつきまて出給はす。いとつれなくおほえて。すけやすの少將して。なにとなきやうにてみすれは。殿上のこ庭の月なかめて。たち給へるといふ。兵衛督殿日の御さの火ともけちて。くしかたよりのそけは。殿上のかへにうしろよういしてゐたまへり。かくしてしけむもねたし。なにとまれ。つえにか

きつけて。くしかたよりさしいたさはやなと。さま／＼あらまほすほとに。夜もあけかたに成ぬ。いかにもかなはす。つひにあふらのかうちの門のかたよりいて給ぬと聞も。かきりなくねたくて。しろきうすやうにかきて。つえさきにはさみて。をひつきてつかはしける。少將內侍。

うちわひぬ心くらへのつえなれは月みて明す名こそ惜けれ

返事。權大納言。

うちわふる心もしらて有明の月のたよりに出にける哉

かくてつきの日の暮ほとに。かれより。うはかきには。御あしつめたの御かたへとそかゝれたる。御てうつのまにて。兵衛督殿勾當內侍殿なとあけてみれは。

うちわひてねにける夜半の鐘の音に驚かされて月や詠めし

待かねし身は夏虫のともしけちいたつらことに物思ひけん

御はきのふときはそきもたちそひて月に忘れぬ夜半の面影

返事。辨內侍。

うちはへてねるとは何そ有明の月な見すてし心ならすは

いさしらすたれ夏虫のともしけち竹のは風や吹もしつらん

忘れすよ月の面かけ立そひてその御はきもくろしかりけむ

さとに。春のはしめとて。とくさく紅梅ありときかせおはしまして。おらせて まいらせよとおほせことありしに。藏につかはしたれは。さかりなる枝にむすひつけて。寂西。

雲井まていともかしこく匂ふかな垣ね隱れの宿のむめか枝

その花の枝をかめにさして。はきの戸にをかれて。めむ／＼にかへされたるを。やかてぬしのかきてむすひつけける。太政大臣。實氏。

雲ゐまて匂ひきぬれは梅花かきねかくれも名のみなりけり

四條大納言。たかちか（隆親）。

垣ねよりくもゐに匂ふうれしさを色に出ても花そみせける

冷泉大納言。きんすけ（公相）。

咲そむるかきね隱れの梅の花君かやちよのかさしにそおる

萬里小路大納言。公きむもと。

君か代に垣ほかくれもあらはれてあまねく匂ふ梅の初花

權大納言。實雄さねを。

くもゐまてかきねの梅は匂ひけりいともかしこき春の光に

このかすにかへすへきよし。おほせことあれは。辨内侍。

雲ゐにてみれは色こそ増りけれうへし垣ねの宿の梅かえ

大納言二位殿。こかの大臣のむすめ。よりまいりたりけるうすやうのこそうしを。權大納言たまはりて。おもしろき戀のうたともを。なへてならすかきてまいらせられたるをみて。少將内侍。

戀すてふ名をなかしたる水莖の跡をみつゝも袖ぬらせとや

辨内侍。

なをなかすその水莖の跡にしも戀てふことをみぬそ悲しき

建長元二月一日。よふくるほと。大はん所より參りて鬼の間のぬのしやうしかけんと思ひしかとも。ともしひのかけかすかにて。つねよりはいかにやらむおほえて。朝かれいより常御所へまいりたれは。宮内卿佐との。兵衛督殿。こうたうの内侍とのなと候はせ給ふ。御所も。いまた御夜にもならせおはしまさす。御手習なとありて。おもしろく思はむ詩かきてまいらせよと仰ことあれは。蘆葭洲裏孤舟夢とかきてそはに。辨内侍。

身ひとつのうれへや波に沈むらん蘆の下ねの夢もはかなし

なとかきて秋の詩はいつれもおもしろくてこそと。さま〳〵申ほと候はむに。公忠の中將候か。まことにさはきたるけしきにて。せうしの候。皇后宮の御かたに火のといふ。あさましともをろかなり。あまりうつゝともなくて。やなきのうすきぬうら山吹のからきぬきたりしをぬきて。はかまはかりにてつほねへすへりて。あらゝかにたゝきて。いそきさほなるむめかさねのきぬに。ゑひそめのからきぬかさね

てまいりたれは。勾當内侍とのやかてよるのおとゝへいりて。けむしとりいたしまいらす。あふらの小路の門のかたへゆく。御所(後深草)も。二位とのいたきまいらせて。中納言少將の内侍はおほはらのゝ使にたちて。心ちわひしくてつほねにふしたりけるか。あらくたゝくをとにおとろきて。火ときゝて。いそき御所へ參りたりけれは。人もおはしまさす。けふりはみちたり。いつかたへ行幸もなりつらんと。あさましくてまよひありく程に。よるのおとゝの一間にやといふ人有。はけものにやと。おそろしなからゆきてみれは。なにやらむのみ御そに。うす御そかさねて。さしものさはきの中にも。さまよくもてかくして。御くしのかゝり。御ひたひのかみ。御たけまてかゝりたり。せんしとの御たちもちて。これはいつくへか具しまいらすへき。按察三位とのに申せとおほせらるれとも。いつくともこれもしり候はぬとて。あふらのこうちおもてのつまとの方へいてたれはひしと人々おはします。かくと申せは。兵衞督殿。みちひきまいらむせんとておはしましぬ。一はんに權大納言殿のくるま參りたるに。御所。皇后宮。中納言のすけ殿。宮内卿のすけ殿のらせ給。門のとにてそ御輿にはめしうつりける。皇后宮。冷泉大納言とのゝかたをふまへて。めしうつるへきよし侍りけれとも。なにとなきさまにて。やすやすとそめしうつりける。權大納言。萬里小路。冷泉大納言なと。そのまきれにもゆゝしけに。いそきあはれけるに。中納言のすけとのよく御かいしやくして。したすたれにてとかくまきらはしてこそ。御こしにはめしける。夜めにも。御ことからたゝの人にはみえさせ給はさりしとそ。のちにかたり給ひし。けんしは二位殿のめしたる御車

に勾當。辨内侍もちまいらせてのりたりしを。御輿にもおはしまさす。とり出しまいらせたりけるにやと。なにのなかにも。さうとうにてありけるにもちていてたまひつる人おはしましつといひけるとて。たれかみつるといはれけるに。兵衛督殿。一定勾當辨とりいてまいらせつるとありけれは。勾當辨めしたる御車はいつれぞ〳〵と。馬をはやめて。はしりちかひはしりちかひたつねられし。なに事ならむと思へは。けむしはおはしますか〳〵とぞ。あつたきて。聲のかはるほと。たつねおはしますといふに。なを一定にやと〻はれし。けにもことはりなりけん。しやうはのりときそ。とり出しまいらせける。大納言殿たちうつしうまにのりなから。あるはゆみもち。やおひなとして。かとにた〻れし。夢のこ〻ちしていと淺まし。さりなから。延喜天暦のかしこき御代にも。あまた〻ひ侍けるなと。おほせらる〻人々もおりしかは。辨内侍。

やけぬともまたこそたてめ宮はしらよしや烟の跡も歎かし

とみのこうちとの内裏になりて。ひろ御所のつまの紅梅さかりなりし比。月のおほろなる（二月十六日）夜。たれとはなくて。しろきうすやうにかきてむすひつけられたりし。

色もかもかされて匂へ梅の花こ〻のへになる宿のしるしに

この御返事は。院の御所へ申へしと おほせられしかは。辨内侍。

いろも香もさこそ重ねて匂ふらめ九重になるやとの梅かえ

こうたうの内侍とのゝつほねは。女院の御所なりけるほと。宰相とのと申人のつほねにてありける。その人のもとより。むめやさかりなるらんとたつねたる返事に。勾當内侍にかはりて。辨内侍。

色もかもなれし人をやしのふ覽みせはや梅の花の盛を

返事。宰相殿にかはりて。權大納言。

なかめはやなれこし梅の花のかも今九重に色はそふ覽

このうたとも。太政大臣（實氏）殿きかせ給て。さしもゆゝしき色もかもの御秀歌にかよひて。いろもかもとあるわろし。又御返事も。こゝのへになるといみしくつゝけられたるに。いまこゝのへとよみたる。たゝしかるへからす。ともにおつとなりとおほせらるゝ。ときゝしめむほくなさ。おかしくて。辨內侍。

匂ひなき色を重ねて梅のはなつらくも人にとかめられぬる

廿七日は。七社のほうへいなり。やかてその日は七らいの御はらへなれは。內侍たち大はむ所にて。きせきぬのきたして。花もさかりにおかしきを。つく／＼となかめゐたり。御所にもなりて御覽せさせおはします。冷泉大納言御しやうそくにまいらせたるも。やかて御ともに候て。ことしは御まりあるへきよし申たまふ。からはしの大納言。まさちか。上卿にまいられたる。もゝとせに一とせたらぬほとにやとみえて。雪と霜とをいたゝけるかみ。けにくろきすちなきもいとゝいとをし。花のこかけにたゝれたるをみて。辨內侍。

君か代に花をしみけるしるしには頭の雪もいとはさりけり

三日の御鳥あはせに。ことしは女房のもあはせらるへしときゝしかは。わかき女房たち。心つくしてよきとりとも尋られしに。宮內卿のすけとのは。爲教の中將か。はりまといふ鳥をいたさんなとそありし。萬里小路大納言のまいらせられたるあかとりの。いしとさかあるかけいろもうつくしきをたまはりて。あきつほねにほこらかしてをきたるを。もりありといふ六位か。そのとりきとまいらせよといふ。かまへてとりなとにあはせらるましきよし。よく／＼いひてまいらせつ。とはかりありて。

かためはつふれ。とさかよりちたり。おぬけなとして。見わするほとになりてかへりたり。おほかた思ふはかりなし。今はゆゝしき鳥ありとも。なにゝかはせん。たまはりの鳥なれは。きくもいみしらむとこそ思ひしになと。かへすかへすこゝろうくて。辨内侍。

われそ先にたつはかりおほえけるゆふ付鳥のなれる姿に

三日。御鳥合なり。御所もひろ御所へいてさせおはします。冷泉大納言。萬里の小路大納言。左衞門督。三條中納言。公親。頭中將。公保。伊與中將。公忠。すけやすの中將。藏人はのこりなし。はつゆきなるあか（みイ）こくろなといふ鳥とも。かねてよりふせこにつきて。をの／＼あつかりて。丁子しやかうすりつけ。たきものなとして。いつれかにほひうつくしきとそあらそひし。みすのうちより出されしかは。萬里小路の大納言たまはりて。あはせられし。ゆゝしかりし君なり。ひよ／＼より御所に御手ならさせおはしまして。かひたてられしいみしさはかりにてこそ侍れ。御とりからはあやしけなれはかたせんとて。それよりをとりたる鳥ともにあはせられしもおかし。公忠公保かとりあはせしおり。伊與中將かとり。そらおとりするとて人々わらひしに。冷泉大納言。ひさかたのそらおとりこそおかしけれとのたまへは。公忠さこそといひたりしおかしくて。辨内侍。

雲ゐとはなれさへしるや久かたの空おとりする鳥にも有哉

廿日は。りむしのまつりの御馬御覽なり。さきさきはたゝめふかひきわたしたるはかりにて有しに。御隨身かねみねに。あけさせて御覽せしいとおもしろし。公卿はまてのこうちの大納言そ候給し。けつけ中將するさね。庭の月かけいとおもしろくて。辨内侍。

なにしおふ月けの駒のかけまても雲ゐはさそとみえ渡る哉

はなさかり。ことにおもしろかりしに。ためうちの中將奉行にて御まりあり。花山院大納言。冷泉大納言。萬里小路大納言。左衞門督。右衞門督。すけひら。きむたゝ。ためうち。ためのり。たかゆき。日くれかゝるほと。ことにおもしろく侍しかは。辨内侍。

花の上にしはしとまるとみゆれともこつたふ枝に散櫻かな

少將内侍。

思ひあまり心にかゝる夕くれの花の名殘も有とこそきけ

かすもあかりて。木すゑのあなたへまはるほと。左衞門督のあしもはやくみえ侍しを。兵衞督との。まりはいしいものかな。あれほと左衞門督をはしすることよとありしを。大納言。我もさみつるを。いみしくもめいくを聞えさする物かな。めのとにてあるに。この返りことあらはやと侍りしかは。辨内侍。

散はなあまりや風の吹つらん春のこゝろはのとかなれ共

三月廿八日。改元（建長）也。公卿八人。上卿花山院大納言。さたまさ。經光の宰相なとそきこえし。奏まつほと。ふくるまて大はん所に。内侍たちなにとなきものかたりして。往古の延曆延喜は廿年にもあまりけるに。かくほとなくかはる。なこりおしきやうにこそなといひて。辨内侍。

ほともなくかはるもつらし古ははたとせあまる年も有世に

四月七日。松尾の使にたつ。上卿吉田中納言。爲經。辨。經俊。かつら川をわたりしに。みなかみのかたに。やなといふものに。水のたきりておつるをとのきこえ侍しかは。辨内侍。

川のせにやなうちわたすみつなみのあまりも音の碎け行哉

十七日。御方違の行幸なり。今出川殿へなる。女院もやかてわたらせおはしますほとなり。左衞門督まうけの御所に候給。御けんのすけまさいゑの宰相の中將。兩貫首も還御まて候。

月ことにおもしろく。たれも夜もすからねてそなかめし。冷泉大納言。萬里小路大納言。左衞門督と。か丶る月こそなけれとてことにめて給、餘にうつりたる有明かたのかけ。たとへむかたなくおもしろきに。おりしもほと丶きすのなき侍しかは。辨内侍。

歸るさのかれまつ程の有明につれなからしと鳴ほと丶きす

祭は廿日なれは。けいこのめしおほせ十八日なり。上卿權中納言。冬忠。賀茂よりあふひともまいりしを。大はむ所にて。人々さうしにをさんとて。こあふひえりて候よしほと。左頭中將。もと丶。ことに色はなやかなるなをし。けいこのすかたいとうつくしうてまいりたり。おなしく右頭中將。きむやす。もまいりたり。これもはなやかに。あらぬすちにほこりたるけしき。とり／＼にみゆ。公忠もほそたちゆるさるときゝし。けいこのすかたともおもしろくて。辨内侍。

千早ふるまつりのころに成ぬれは近きまもりも心してけり

攝政殿まいらせ給て。廿一日の夜の月いと心もとなくまたせ給ほと。人々にいてたるやととはせ給へは。さま／＼にやうをかへて中に。やまのこなたへはいてなから。ひかりのいまたあらはれぬと申人侍しを。この中やう念ありて。さもありなと人々もおほせられしかは。辨内侍。

山のはにせめても月の遲きよは此方と思ふも猶そまたる丶

さいせう講は。廿二日よりはしまりて。廿六日結願也。この御所にては。これかはしめなれはめつらかに。行香のほとおもしろし。鬼の間をかみにて。御てうつの間。大はむ所はうしろにて。堀川内大臣ともみ。冷泉大納言。權大納言。新大納言。左衞門督。三條中納言。ふそくさたひら。きんた丶。ことゝもをそくはしまりて。

有明の月出るほとに。人々出給し。そのころ聖護院僧正正觀音法をこなはる。ひろ御所。廿七日結願なるへきを。そのよ行幸にて侍しかは。あかつきの御ときをひきあけて。夕暮におこなはれし。れいのころもことさら心すみてたうとかりしかは。辨内侍。

曉のかねよりもなを夕くれのれいしにれいの聲もすみけり

卅日。大はむ所のこいしのまいりたるを。御らんせさせおはしまして。せちゑのにつくりたるわろし。あかつきにてこそつくるへけれとてかへさる。天上のこいしは。いにしへ寛平法皇と業平朝臣と御すまひありけるにあたりて。おれたりけるを先例にて。いつもそのおれたるすかたにつくられ侍と。つたへきくもいとおもしろくなと申いてゝ。辨内侍。

ふりにける昔の跡をそのまゝに變らすみるや名殘なるらん

六月廿八日より。ことなる御いのりとも侍しに。醍醐の座主。實賢。普賢延命法。皇后宮御かたの日。御座をしつらひておこなはる。冷泉大納言殿御沙汰。七佛藥師ひろ御所。太政大臣殿御沙汰。秋になりて。風いとすゝしくふきて。皇后宮の御かたの御つほねに。やう／＼むしのこゑほのきこえて。おもしろく侍しかは。辨内侍。

君かへむ千とせをいのる法の聲こなたかなたに松蟲のなく

神なりていとおそろしかりしに。御所はあさかれゐにわたらせおはします。六位のつるうちめすほと。たきくちのくやくかゆみめして。冷泉大納言とのつるうちし給。かみのなるをとに。いみしくてうしのあひてきこゆる。たゝいまは壹越調ならむと。すけやすにふえふきならさせてきかせ給へは。まことにそのてうしなりけりとて。こうたうの内侍とのもけうし給。いとおもしろくて。辨内侍。

もの丶音をひきも鳴さて梓弓をして調へをいかてしるらん

八月十五夜。院の御所にて御連歌ありしに、夜ふけゆくまゝに身にしみかへりて。おもしろき句とも有しおりしも。かねのをと。こゝもとにきこえしかは。御いのりはしまりたるにやときくほと。權大納言みすのもとにさしよりて。後夜のときこそはしまれ。とく〱つけよとおほせられしこそおかしかりしか。かねのをとも心すみて聞えしかは。連歌をはさしをきて。少將内侍。

秋のよの月に冴たる鐘の音にやかてもときのうつりぬる哉

辨内侍。

時うつる鐘のをとそと聞からに月もなかはのかけや更ぬる

九月八日。までの小路大納言。ひろ御所に夜はむにしにゆくをとして。さふらひ給しに。きくにつけて。少將内侍。

菊のうへにをきゐる露も有ものをたれ徒らにれてあかす覽

返事。大納言。

九重の雲のうへふし袖さえてまとろむ程の時のまもなし

雲のうへふし。いとやさしくて。辨内侍。

まとろまぬ程をきくにぞ思ひしろ露をかたしく雲のうへ人

大納言殿三位せさせ給たりしよろこひ申とて。少將内侍。

秋風の身にしむはかりうれしきやな人しれぬ心成らん

辨内侍。

かひ有て今こそみつのくらゐ山まよはぬ道は猶そうれしき

御返し。大納言三位殿。

身にしみてうれしき物と今そしるたゝ大方のあきのはつ風

この御所より常盤井殿はちかけれは。月のころは夜をへて。までのこうちの大納言との。女房たちさそひて。よもすから遊ひ侍しに。水にうつりたる月いとおもしろく見えしかは。少將内侍。

やかて我心そ移るときは井の水にやとれる月なられ共

これを聞て。辨内侍。

おりふしな空にしりける月なれは猶常盤ゐの影そさやけき

かやうに遊ひ行侍し程に。女院の御方の女房たち。内裏の月見にとて。あまた参られたりけるか。たつねあはせ給けれとも。いさいつくへやらんときこへければ。まいりて侍つれとも。ほいなくてこそ侍れといひをかれたりけるを。かへりまいりて。かくときゝて。女院の御かたのひせんとのといふ人のもとへ。少將内侍。

あくかるゝ心くらへもある物をなを尋ねみよ秋のよの月

返事。

またもみむのとけき御代の秋の月近き雲ゐに心へたつな

此御返事。いとおもしろくて。辨内侍。

尋みむ心のへたてくまもあらしちかき雲井の秋のよの月

辨内侍日記下

今年五節は。この御所はせはくて。冷泉とのへ十二日行幸ありて。十八日よりはしまりし。月はくまなくていとおもしろし。兩貫首。もとゝも。きんやす。ことなる人々なれは。きさいまちの亂舞なともことにはへありてそみえ・し。女院の御かたのゑむすい寅日也。四條大納言女房達さそひて。御帳のうしろよりはつかにのそきて侍しこそ。いとおもしろかりしか。閑院大納言たちはさらなり。いとけうありて侍しに。內大臣殿いかにはやしたてまつれとも。うるはしくもたち給はさりしに。右兵衞督。ありすけ。しらさきこそしらはへのそくなれと。ひやうしをあけてはやしたりしかは。さしあふきしてたち給ひたりし。御ことからことによくみえ給ひしかは。辨内侍。

しら鷺はいかなる色のためしにて立舞袖のかけなひくらん

卯日はわらは御覽なり。ことしはつねのとしにも似す。御覽のわらはみなのほり侍し。いとめづらかに。辨内侍。

いにしへのならひは聞す九重やあまたをとめの數をみる哉

權大納言。木のさきのゆへおはしたりしに。雪ふかくつもりたる頃。兵衞督のとのゝもとへ。内侍たちにつたへよとて。

九重にふりつもるらんしら雪を深きみやまに思ひこそやれ

返し。少將内侍。

こゝのへの雪の中にもたひ人のふみゝる道を思ひこそやれ

辨内侍。

こゝのへになをかされても思はすよふみゝる程の山の白雪

十二月十八日。月くまなきよ。頭の中將。もとゝも。夜はむにまいりて。おにのまに候ほとに。しやうそくのをとのする。たれならんみてまいれと。すけやすの中將におほせことあれは。かへりまいりて。中將。

おにのまに人をとのする誰ならん弓とるかたのとうの中將

左の心もことにえむありて。とりなしたりなと。按察三位殿もおほせられき。やかていてぬるよしきゝて。辨内侍。

やといひて引やとめまし梓弓いるかたしらぬとうの中將

十九日。れいの佛名なり。皇后宮（宣化門）御方もこよひなるへしと聞えしほとに。ことにいそかる。月ばいとおもしろきに。いてゐの殿上人のおりまつするも。この御所にては。大はむ所もわたとのちかくて。たゝこゝもとにそみゆる。定平。伊頼。伊長。基政なとそみえし。女主かめつらしくはかまのすそみしかにきなして。おりまつするを。定平はやしあけたるもおかし。辨内侍。

いとせめてさゆる霜夜のなくさめにしは折くふる雲の上人

ふけてのち。行香にたつ人々。四條大納言。左

宰相中將。皇后宮權大夫。土御門宰相中將。左大辨宰相。けそくさたひら。これより建長二年正月三日殿上のえんすいなり。このたひは。ちもくに貫首もあかるへしと聞えしかは。四條大納言ことに忠つくすへきよし。奉行し給ふ。御所もこしとみより御覽す。さねたか。つねたた。これもとなところある人々。てをつくしてはやされしかは。兩貫首十度はかりまひたりし。興ありてみえ侍しかは。辨内侍。

みたれつゝうたふちくはの松の色に千代の影そふけふの盃

やかて。皇后宮御かたへまいる。みち〳〵おもひの津に舟のよれかしと。はやし〳〵まいりし。こまにてみ侍し。いとおもしろくて。辨内侍。

しほしまて立よる波にとゝはむ思ひの津にそ舟よはふなる

二月五日。春日使にたちたりしに。上卿皇后宮權大夫。もろつく れほとになしはらにつきたれは。夕つくよほのかにおもしろく侍しほと。辨内侍。

梨原の其なは秋になりならすねてやは夜半の月を見るへき

さくやといふさうしを具したりしを。くやく。ためなは。さたむら。しやくとりてもてならして。今は春へとさくやこのはなと。したひをとりてはやしたりし。まことにをのかはるにあひたる心ちやすらむと。おかしくて。辨内侍。

春なみる我身ひとつになにおひて咲やと人にいはれぬる哉

佛法僧となくとり。太政大臣殿よりまいりたるを。常の御所の御えむにをかれたりしか。雨なとの降日はことになく。けにそなもさやかにきこゆ。すかたはひえとりのやうにて。いますこしおほきなり。辨内侍。

とにかくにかしこき君か御代なれは三のたからの鳥も鳴也

局は二のたいのつまなれは。夜ふけてすへるおりは。かならす京極おもての大やなきのこ

かけより。月のさやかにもりたるか。さしむかひて出たるやうにみゆる。いとおもしろくて。少將内侍。

青柳のいとはよろとも見えぬかな木かけくもらぬ月の光に

おなしつほねなれは。ともと〔とイナシ〕にすへり侍しか。まことに月のかけおもしろかりしかは。辨内侍。

青柳の糸に一イはかけもみたれねは同しすちにそ月はさやけき

三月十六日。七瀬の御はらへなり。使々まつほと。大はむ所のかうらんのもとへたちいて。閑院殿には。はなはかりやまさりたるらむなと。御さたありしかは。少將内侍。

櫻花やへに咲ともこゝのへと思ひなすにそ色增りける

又辨内侍。

なにこともしのふむかしの雲ゐには花こそ及ふ匂ひ也けれ

三月廿九日。御まりなり。冷泉大納言。公相。萬里小路大納言。公基。權大納言。實雄。左衞門督。實藤。右衞門督。通成。源宰雅イ相。有資。頭中將。爲氏。爲教。資平。公忠。時經。はなはちりすきこすゑなかなかおもしろきに。人々のようゐことから。とり〳〵にそみえし。くれかゝるほと。院の御所より御隨身賴峯御使にて。御葉松のえたにそ御鞠はつけられたる。頭中將とりてまいらす。しろき薄様むすひつけられたり。あけて御覧せらるれは。

吹かせもおさまりにける君か代の千歲の數は今日そ數ふる

御返し。辨内侍。

かきりなきちよの餘りのあり數はけふ數ふとも盡しとそ思

御鞠はてゝ。はなのかけにたちならひ給へる。御名こりともなとさま〳〵申いてゝ。少將内侍。

かす〳〵にあまりなる迄戀しきはいかに詠めし夕とかしる

返し。辨内侍。

風に匂ふあまりは花の色に出て數限りなき夕とそみし

そのゝち又御まりあるへしとて。まつ萬里小路大納言殿へ申されて。やかて奉行せらるへきよし。おほせことありしに。かせの氣ところせくて。かなふましきよし申されたりしほとに。常盤井にて。しのひてまりあそひ侍よしきかせおはしまして。にくし。なにとまれいひやれど。仰ことありしかは。少將内侍。

春風のつらさなかこついつはりの身に餘ぬる程そしらるゝ

かへし。大納言殿。

春かせのつらさなかこつ心より身の僞りになるかゝなしき

なそいつはりならすときこゆるこそなと。御さたありしかは。辨内侍。

花のためあまりそななもつらからむ僞にやは風の吹へき

卯月の八日はくわん佛なりしに。むろまちの大納言。されふち。たまはせたる布施に。くれなゐうちの色こゝに花やかなるに。蔦かへて青葉なるをきて。うつの山の心し。さまことにうつくしうて。かねのうちえたにつけたり。人々のは。殿上へいたされてのち。をそくまいらせたりしを。大はむ所より職事にたはんに。その人のとて出さるへきよし。按察三位殿。兵衞督殿おほせられしこそ。ことにようゐあるへくやとおほえて。辨内侍。奉行光國。

傳へきく蔦もかへても若葉にてまたうつろはぬうつの山道

祭の女使に。中納言のすけとのたち給しに。なてしこのきぬ。すこし色うすく侍しををくるとて。辨内侍。

くらへみるこゝには色の薄けれは唐撫子にいかてそむへき

六月十一日は。しむこんしきのまつりなり。上卿土御門中納言。通行。辨。顯雅。内侍とうよりたちてのち。辨上卿ははやたゝせ給。内侍とくと申侍けれは。少將内侍。

たそしとは誰ないふらん君なこそ待らんと思ふ時も過ぬれ

歸りまいりて侍しに。少將内侍かくとかたり

侍しかは。上卿よりとくたちて。我こそまちしかなとかたりて。辨內侍。

いつもさそ我を待とはいひしかとまたれし物をさよふろ〔ふくるカ〕迄

權大納言。くろとのはむなともかきかちにて。まとをになり給しを。こその七月ほしあひのほとに。參り給たりしなど申いてゝ。少將內侍。

雲ゐをはよそにのみしてあまの川遠き渡りにはや成にけり

返し。辨內侍。

くもゐにてとをしとはみし天川人の心やわたりなるらん

七月十三日。閑院殿のことはしめの日。事のそう辨。つれとし。まいられたり。なにとなく心もとなき心ちして。辨內侍。

百敷の大宮つくりけふよりやかれてその日と定めをくらん

八月十五夜。れいの御會也。雨ふりていとくちおし。ことゝもはてゝ。つまとあけさせ給ひて。御覽せられしかとも。月のくもりさまいとくちおし。なこりに阿彌陀佛連歌たゝ三人せむと仰事あり。いひすてならんこそねむなけれ。少將おほえよとそおほせことありし。

なこりをはいかにせよとて歸るらむ　御所
もしやとまたむ秋の夜の月　少將
あかなくにめくりあふよもありやとて　御所
みちうきほとにかへるをくるま　辨
たくひなきわか戀草をつみいれて　御所
つゝみあまるはそてのしら露　少將

夜もあけはなれにしかは。のこりはまたの御連歌にしつかんとて。名殘おほくてそかへりまいりにし。此おり〳〵の御連歌を。大納言三位殿きかせ給て。この戀くさの御連歌思ひいてなるへし。そのよしのうたよみて。家の集なとにかゝるへしと仰られしかは。辨內侍。

思ひ出のことのはとなる草ならはなゝ車にも我そつむへき

十六日はこむまひき也。上卿萬里小路大納言宰相。まさ家。ひきわけの使もとまさ。ことゝもは

て〻。大納言殿局のつまにかきて。公忠して。

君か代につかへて今宵みつるかなよそに聞こし望月の駒

返し。少將内侍。

君か代につかへてし身は望月の駒も千とせのためしにや引

ことのやうことにやさしくて。おなしく返し。辨内侍。

今もさそよ〻のおもかけかはらめや秋のこよひの望月の駒

今出川殿へ行幸ならんとて。夜雨ふりけに侍しに。とうたいのくひを。七人していはせられ侍しはてに。ゆふ人はてれ〳〵日のこと〻。まうことにてありしを。いつも少將内侍そのやくつとむる人にて侍しか。さとへいてたりし代官に。まふへきよし人々おほせられしに。あまりにあるへくもおほえて。つほねにかくれゐて侍しかは。いよといふ人まひけるとそ。辨内侍。

楫なとるその舟人にあらぬみのあすのひよりをいか〻祈覽

御神事のほと。御人すくなにて。いと御つれつれなりしに。おもてかたして。人々をとせと仰事ありしかは。はかまをむねまてきて。こきひとへをかつきて。大はん所のくちにたちたれは。大番のものとも。さはきて弓なととりなをして。たちめくり侍しかは。かへりて。あまりにおそろしくて。やり水におちいりて侍しを。おめたる鬼かなとて。人々わらはせ給。つきの日。さとよりつ〻しむへきことありとて。ものいみをたひたりし。おやのまもりあはれにて。辨内侍。

あつさ弓引たかへたる命こそそへける親のまもりなりけれ

節會臨時祭のしたいなと御覽せさせおはしまして。そのまねを女房たちにせさせて御覽せしを。太政大臣殿。この御遊は。まことにおもしろく侍るらむとて。けうせさせ給て。しやくともつくらせてまいらせ給。頭中將。爲氏。節會

の次第など書て參らす。人數は大納言三位との。太政入道（大臣イ）のむすめ。按察のすけ殿。たかひら卿のむすめ。大納言のすけ殿。たかちか卿のむすめ。中納言のすけ殿。實家卿女。宮内卿との。あき氏卿むすめ。兵衛督殿。家みち卿むすめ。こうたうの内侍殿。たか時入道のむすめ。少將いよの内侍。しやく共に。みな名を書てもち侍し。中納言のすけとの。權大納言になりて。節會の次内辨もよほされて。したうつをえはかす。そうらうとてこじやう申て。つほねにおはせしに。あしのはにかきつけて。つほねのみすにさす。辨内侍。

津の國の蘆の下根のいかなれは波にしほれて亂（失イ）れかちなる

大納言三位殿は。御しちらいのたひに。これはいへのやう〳〵とおほせらるゝを。中納言のすけ殿。いつもかくきこゆ（日記）れは心にくきやうに侍しか。まさしきいへのにきみさらむには。たのむましきよしきこゆるも。ことはりとおほゆ。少將内侍は三條大納言になりて。つねにしちらひかちにて。小てうはいにも。しやくををきてせうはいなとせられ侍しを。兵衛督殿。ぬしにかたられて侍けれは。さしもしちらひもせぬと思ふに。たへかたきことかなといはれけるそをかしき。伊よの内侍は。いつもりんしのまつりには人長になりて。みつからわをつくりてそれをもちてまはる（いイ）。かほふるへし。あまりに此やくのつとめたくもなきとて。わひられしもまことにとおほえておかし。辨は行幸のとしにうそをふくやくをつとめ侍し。又これも人長にはをとらすおほえ侍き。冷泉大納言殿衣番にまいりて。此御遊にましりて。うそふくやくつとめさせ給たりしこそ。いといとうれしかりしか。按察すけとのは。いかにもをの〳〵の中にては。いたしうたもらむふも。てをつくし侍るへし。ことなる人々御參りあらむには。かなふましきよし。かねてよく

く申させ給て。ことにみたれてつとめ給き。近習の人々御所へ御まいりあるはみなましはり給。萬里小路大納言なとは。なけしのしもの一間より袖さし出して。かう〳〵なと。よくまはせ給もおかし。又五節のまねに宮内卿のすけとの。いたしうたせらるへきにて侍しおりしも。左衛門督まいり給たりしに。たゝいまはいかにもかなふましけにて。おほかたこゝろもいたし給はぬを。按察三位との。これはかゝりはことはりにこそと申させ給しもけにおかし。あまりをそくなりて。そのさもすみて侍しに。左衛門督も。ちとはおかしけにおもひてそたち給にし。いと〳〵おかしくてこゝろのうちに。

辨内侍。

闇はやすしろうすやうの折からはいかゝいふへき巻上の筆（なりイ）

十月十三日。鳥羽殿へてうきむの行幸にて。よひのほとはしくれもやなと思ひ侍しに。あしたことに晴て。いとめてたくそ侍し。鳥羽殿の御所のけいきの おもしろさ。ことはりにもすきたり。いろ〳〵のもみちも。おりをえたる心ちす。れうとうけきすうかへる池の みきはの紅葉なと。たとへんかたなし。かみあけの内侍。こう當の内侍。少將内侍なり。日くらしかみあけて。さま〳〵の内侍おもしろくめてたきことゝも見いたして。おいのゝちのものかたりは。いくらも侍へしなと いひて。少將内侍。

かたり出む行末迄の嬉しさはけふのみゆきのけしき成けり

これをきゝて。辨内侍。

よゝたへて語り傳へん言のはやけふの御幸の庭の紅葉なる覧

還御のゝち。めてたかりしその日の事とも申いてゝそ。めしたるまね。たれかしはなにいろいろと。少々はきのとにてしるし侍しに。太政大臣殿のうらおもてしろき御したかさね。こ

とにいみしくおほえて。辨内侍。

白妙のつるの毛衣なにとして染ぬをそむる色といふ覽

廿七日。皇后宮の御かたへいらせおはしまして。日の御座の御つほのもみち。御覽せさせおはします。女房たちも。みきはにちりつもりたるなとたちいてゝみる。おもふことかなふといはゝ。あのちりたるもみちのかすかそへてんやと。人々おほせられしかは。少將内侍。

もみちはの數をかそへて流すとも思ふ心はえやはゆくへき

今も風にちりみたるゝ程。なをいとおもしろくて。袖にうけんなと。人々おほせられしに。こむらうのみうらの上卿にて。つちみかとの中納言。みちゆき。別當のさきこと〳〵しくきこえしに。おとろきてみなうちへ入侍し。なこりおほくて。辨内侍。

をとつれて聞ゆるさきの追風に散もみちはをみすてゝそ行

五節は十六日なり。あさかれゐよのひろひさし御とりやなと。露臺につくりなさむとて。かねて十二日。今出川殿へ行幸なり侍しに。御留守に候て。月くまなく侍しかは。辨内侍。

雲の上や豐のあかりのおなし名をかねてあらはす月の影哉

をしいたしは。大はん所の二間かけてにしむきなり。てうきむの行幸のきくもみちなと秋の色にて。つねの年よりも。世にしらすうつくしう見え侍しを。大納言三位殿。ありし行幸のなこりとまりたる心ちする。いかにとおほせらるれは。辨内侍。

神無月ありし行幸のなこりとて紅葉の錦たえぬなりけり

十九日。節會。露臺の亂舞なとはてゝ。御前のめしつねよりもいとおもしろく。ものいひてのよまひには。左頭中將。爲氏。六位や候。さしあふらせよ。右頭中將。さねひさ。うちなかめて。かほつえつきて。とよのあかりはくもらさりけりと。爲氏か方みやり〳〵なかめたりし。おか

し。經忠はきぬかつきならひゐたるをみて。このほとはしろ〳〵。又そくたいの人々みやりて。あしこのほとはくろ〳〵とはいひし。これもとはていつていはたかなそ刑部卿ときこゆる。てんたつしやこは[ ]正くはんより次第いひつゝけて十月は十せ[ ]れうたにまひ給。ましてむねのりかまはさらめやは〳〵とてをれこたれ。身をなきになしてまひたりし。ふしきにおかしく興あり。つねさたむはらこきのしたにいたち。ふえふく。さるかなつ。ことにおもしろくきこえき。ものさねに爲氏。實久。經定。伊長。爲教。經忠。伊基。みなむれたちて。あらたにおふるとみくさの花。おもしろくうたひて。たうへ（田植）のまねしたりし。なにゝもすくれて。ことにおもしろく見え侍しかは。辨内侍。

君か代に難かぬ人はあらしかし風になみよるをたの早苗は

ものみのきぬかつきのなかに。雨貫首をみて。

ちうのはんはしとそみゆるりやうくはむ首。

といふ連歌をしたりけむ。いとおかし。少將内侍つくへきよしきこえけれは。

めにたつものと人やみるらんと。つけたりける。

廿四日は。りんしのまつりなり。あはれなりし事は。にはかに久我大將（源通忠三十五歳）はかなくなりぬと聞えし。この十二日の行幸に供奉せられたりしほとのちかさもいとはかなし。このはるのりむしの祭のかさしによりしこと。たゝ今の心ちして。いとあはれに思ひ出られ侍しかは。辨内侍。

藤浪のかさしによりし面影のなとてもはるに立わかるらん

かへし。少將内侍。

この春のかさしによりし面影の立わかれぬる心ちこそせれ

十六日。ちもくなり。冷泉大納言（公相）右大將。花山院大納言（定雅）左大將になり給。とり〳〵にゆゝし

き大將たち。いと〳〵めてたし。其ちもくの頃人々の中文こなたかなたより侍しに。ある人。いとしもなき先祖ひきたてゝ。中文にかきのせたりしをは。大納言三位殿。いにしへみき公任は五代の太政大臣の子なりと。かきたりけむにはをとりたるにやと。仰られしかは。辨内侍。

のほりえぬ山を〔マ〕ゝしと思ふなよをのかさか行ときも有世に

十二月十六日。野さきの使のたつ日也。南殿の庭にまん引まはして。たいそうの御屛風なとたてゝ。みくらやつかひなとか。雪はかきたれふるに。あらしをしのきて。つかひ〳〵いそかしもよほすけしき。いとさむけなり。雪うちはらふもおもしろくて。辨内侍。

風まぜの雪うちはらふ袖さむしのさきのつかひ心しらなん

建長三年正月十二日。法勝寺の修正の御幸。院の御方のいたしくるまにまいりたりしかは。月あかくていとおもしろきに。うしろとのさるかう。けう有てそみえ侍し。すゝのすかた。すのこゑ。すこ〳〵聞ゆるも。おりからおもしろくて。辨内侍。

しらかはの三代の御寺の跡なれや昔ふりせぬすゝのこゑ哉

十五日。頭中將。爲氏。まいりたりしを。かまへてたはかりてうつへきよし仰事ありしかは。殿上に候を少將内侍けさんせむといはすれと心えて。大かたたひ〳〵になりて。こなたさまへまいるをとす。人々つえもちてようゐするほと。なにとかしつらむ。みすをちとはたらかすやうにそ見えし。かへりて少將内侍うたれぬ。ねたき事限りなし。十八日よりは。うちにはたゝ御所のやうとてうつへきよしおほせことありしに。十六日にさき丁やかれしに。たれたれもまいり［し］かとも。頭中將はかり。なかはしへものほらて出にけり。いかにもかなは

てやみぬへかりしに。十七日。雪いみしくふりたるあした。とはとのへ院の御幸なりて。此御所の女房まいるへきよしありしかは。ひとつくるまに。こうたう。少將。辨。いよ。侍從。四條大納言のりくして

し。せはさかきりなし。きぬのそてはかも。たゝまへいたにこほれのりたり。道すからの雪いかにもふるめり。いとおもしろし。とはとのゝけいき。山のこすゑとも。みきはの雪いひつくすへからす。爲氏うちかねたることを。きかせおはしましたりけるにや。御所にはつえを御ふところに入て。もちてわたらせおはしまし。これにて爲氏けふうちかへせ。たゝ今つかひにやらむするを。こゝにてまちまうけて。かまへてうてとおほせこと有。少將内侍ようゐしてまつ程。思ひもいれすとほるを。つえのくた〳〵とおるゝほとうちたれは。御所をはしめまいらせて。公卿殿上人とよみをなしてわらふ。さもそにくうちにせさせ給とて。にけのきしもおかし。そののち。北殿へ御船よせてめすほと。はれ〳〵しさかきりなし。いりあひうちてのち還御なる。たゝかやうの御遊はかりにてやみぬるもくちおしくて。御車にめすほと。御太刀（さゝゑにはきの葉をかきたり）のをにむすひつけつゝ。少將内侍。

あらましの年たかされて白雪のよにふる道はけふそ嬉しき

還御のゝち。御よるにならんとて。御まくらに御たちをきたりけるを。御らんしつけてそ御返し侍し。しろきうすやうに。

あらましの年積りぬる雪なれと心とけてもけふそおほえぬ

かやうに。ことならむ御歌の返しは。ともに申つへしと。按察三位殿仰られしかは。たゝこゝろのうちはかりに。辨内侍。

年つもる雪とし聞はけふそへに心とけてもいかゝみゆへき

此雪に内侍たち。さためて面白うたともあるらん。いよの内侍はてかきなれは。ゆきのうへにもかきちらすなと。しゆこうおほせ有けるもおかしくて。辨内侍。

かきつくる心はしらすふりつもる雪には鳥の跡をやはみんすけやすかもとに。ゐきのふのあるまいらせよといふ心。うたによみてやれとおほ「せ」こと有けれは。少將内侍おりくに。

苔のむすの山の奥の麓にてこれを□みをへてかへりけん返し。中將。

ふるさとの花の盛をもろともに□みまゝむかしなりやとなをせめにやれと。仰こと有しかは。辨内侍。

ふる里の花よりもけに思ひやれそれよりおくのしかの山越やよひの十日ころ□御かたの花いと盛なるに。こそのはるは□さにて。花山院宰相中將日ことにまいられしに。なにとやらむしはしこもりゐられたりし所へ。一枝おりてつかはすとて。兵衛督殿にかはりて。辨「内侍」。

こその春なれけるみやの花のかも□おもひ出すや返事。宰相中將。

宮人のなさへ逝るゝ此春ははなやか□てあたにみるらむ三月十一日。月おほろにて。おもしろかりしよ。四條大納言。萬里小路大納言なと。女房たちあまたさそひて。鷲尾の花さかりいとおもしろく侍しに。月のかたふくまてあそひて次日。少將内侍。

見ても猶あかぬ名殘そおしまるゝ朧月夜の花の下かけかへし。あるしの入道。たかひらの大納言。

こゝのしなにかさる蓮の色を社みれともあかぬ姿とはきけ法門にとりなされたるも□。辨内侍。

あかすみる櫻もいへはおなしをこゝの品とは思ひへたてし三月卄日に。皇后宮院號かうふらせおはしまして。まかりいてさせ給。御なこりおもひやり

たてまつりて。辨内侍。

行春の名殘はことのかすならす□ぬけふのわかれに

返し。少將内侍。

またはよもあひも思はし雲の上に霞る月はよにめくる共

五月五日。三條の中納言のもとより。れいのうつくしきくす玉□ころもみたれて。そさうなるよし申され□いとうつくし。むすひたるよもきの露にふかき□みえしを。兵衛督殿。このこゝろいはゝやとありしかは。辨内侍。

あやめ草そこしらぬまの長きねにふかきといふや蓬生の露

返し。中納言。

あやめ草そこしらぬまの長き根を深き心にいかゝくらへん

ひろ御所よりみやれは。かつらといふものゝ。あやしのすかたしたるか五六人。かたみといふものひちにかけて參る。あれもおほやけものそかし。□いとおもしろくて。辨内侍。

かつらより鮎つる少女ひきつれて□井のひなみしるらん

よるのおとゝは。つねの御所よりあさかれゐをへたてたれは。内侍も二三人はかりそふしたる。夏はゝしあけたるに。月のさしいりて。まはゆきほとにそみえし。夜ふけぬれは。柳のこするのおそろしきに。たてゝねなんとするおりしも。水鷄のたゝくをとのきこゆるを。こうたうのないしとの□きくやとあれは。少將内侍。

明てのみぬる夜かちなる月影にたかとたゝく水鷄なるらん

これをきゝて。辨内侍。

木末なを叩きもすらん月みむと□さゝぬよはの水鷄は

六月廿八日。閑院殿□しなり。女房廿四人こきものゝくわらはしもの。物□みなしろきあこめともなり。かみあけの内侍。こう當の内侍。少將内侍。攝政殿をはしめたて

まつりて。まいらぬ上達部殿上人なし。三日かほとはさま／＼の御遊ともありなときこえしこそ。いにしへ九條右大臣の。てうろくうちたまひたりけむこと思ひ出られて。いまさらゆゆし。左大將。さたまさ。右大將。きんすけ。たちならひて。ことに□給し。みめもことさらためしなく。とり／＼にみ□人々いつれかなほまさると。おほせられあひた□

色深き花やもみちにわきかれて春秋そむる我こゝろ哉

常の御所には。きやうようの丸いかけちに。ほらかひをすりたる御つし。御手はこ二。御すゝり。御はんさうたらひ。はきのとにはきりたけまき。かひすりたる御つし。御手はこ。花の御所へ御すゝりかいく。うへにたかき御手はこに。かね千へのたひか六けん。きたのたい八間。二のたい十五間。さほにしろきかさねのすわうのうはき。ふたあひのから衣□こきはかま。はんさうたらひ。とうたい。お□殿に。はんゑまきたる御つし。御手はこ御硯□□たい十五間。ものゝくのをきやう。みなおなし。ろたいあ□殿ところ／＼つくりそへられたり。たまかゝみなとのやうにかゝやきたる心ちす。三日かほとは。こきものゝ具にて。よるなとのあつさたへかたし。あさかれゐのみすうちかつきて。なけしにより かゝりてそ。わかき人々うたゝねなから。あくるまてみなふしたる。三日すきて。七月一日□いろのすちかうし。ふたへあやなと。心をつく□□かさねともをそきかへ侍し。二日はまた□□きぬふとんてうのうす物。すちかう□のなかにぬひ物し。いろ／＼のゑのくにて。□なとをもかく。心もをよはぬほとなり。仁□さふらはせ給。

九月十一日。□かひにたちて侍しに。なにとなく内裏のけいきは。いとおもしろし。すへりていそうの御屛風つ□はなれたるを。たてまはしてゐたり。うしろ□さきのこゝろ。はなやかに聞ゆるを。たれならん□のあなよりのぞけは。上卿右大將殿。きんすけ。中□て。わきのちむとかやにつき給へり。御屛風のは□みれは。辨たかまさことゝも奉行す。にしき□りいたし侍らぬとて。つかひはしりちかひて。ほとことゝもさかりて。くれかたにも成□もうちしくれ侍しかは。辨内侍。

夕時雨このはそ染るときしもあれなとおりあへぬ錦なる覧

九月廿七日。□權大納言ひるはんなり。さきのはむつとめさりしかはりに。こよひはよもすから候はんなとの給ひて。有明の月いつる程にそいて給し。二のたいのほとすくるとて。おもはぬかたにたなひきにけりといふ歌をなかめてすき給し。おりからおもしろくなと人々きこえしを。さとに少將内侍に申遣したりしかは。少將内侍。

やかて我戀の煙にくらへはや□たははるかなりとも

返し。辨内侍。

はるかなる鹽やはよその烟に□思ひのけつかたそなき

さとに侍し頃。□十六日。新大納言。されふち。夜番にまいりて。れいの□にきり。をのつからなれとも。ままいり給ぬれはいとひさし。□に。きりみすのほとにたたすみて。なのめ□しみかへりたるこゝろにて。わさとならす。なにとな□□にけり。みせよきほとにうたひすてゝ。いてた□を。ありししほやのけふりにもたちこえ。それをかはりにかたりかへすそと。少將の□

たきもの丶匂ひな袖にうつし□ぬかゝみのかけな惜みそ
十七日。女□して侍しに。ろくを
ことしらぬといふ□たりしか
と。さま〳〵いはひことも申□
□くて。辨内侍。

立なるゝ霞の袖につゝみても□色やあまらん

二月十四日。までの□とのゝもと
より。とみのこうちとのゝむめさ□
□につけて。

なへて世の色とそ今は□雲ゐの春の梅かゝ

返し。

梅花なれし雲ゐのちかけ□なへての色とやはみる

北山殿より□こしといふ心。ふ
りうにしたる□むめのはな□いら
せさせ給て。このこゝろ歌によめと。おほせこ
とありしかは。辨内侍。

鶯のことゝふ宿のむめの花むかしな今にうつしてそ見る

顯方の宰相中將。あつまへくたるとて。いとま
申にまいりて侍。□貫首にてちかくなれ
しなごりもなにと□るへし。□
十九日鳥もちて參て□はせにまいる
へきよし申さる。井□經忠。□惟基なと。
めむ〳〵に鳥ともちて□せられけるに。
顯方の白鳥ことにゆゝし□ともみなまけ
にけり。ひろ御所の北むきの御□れ
てそ侍し。いま一とまいらむと申されしか。□
□まゝにてそくたりにし。御鳥屋の事。少將内
侍。

たのめこしゆふつけ鳥はよそに□れにれ社なかるれ

かへし。宮内卿。

あふ坂の關ちの鳥に思ひ出□りのわかれ有とは

四月廿一日。御□なり。右大將とのまいら
せ給ふ。けらむのめ□たはてさりけるに。
けいこにてもまいらせてとて□殿さまに

て御えいはかゝりなをしてまいり給て。[ ]ゑ□しやうは。くらのかうたかゆき。もちてまいる。右大將とのは。てうきんの行幸にまいりたりし。御ひはをひき給ふ。そのほとのことゝもいとめてたくて。辨内侍。

よつのをのしらへはけふを始にて[ ]ためしを引や傳へん

御てさりの[ ]ゑとも。こなたかなたよりまいりたりし。[ ]むかしの花山院の御繪。又圓融院[ ]侍しに。左大將。朝光。右大將。成時。御幸に[ ]を人々みたまひて。ゆゝしかりける。[ ]ならひて。ことにしたかひけむ。いかにい[ ]おほせられしかは。いまの大將。さたまさ。きむすけ。な[ ][ ]とて。辨内侍。

咲ならふ昔の花の色[ ]枝に匂はさらめや

土御門の宰相。[ ]つまへかたりてのちまて。くろとのはん[ ]る名はかはらすのこりて侍けるをみ[ ]

雲のうへになのりすてゝや郭公[ ]には思ひ立けむ

返し。辨内侍。

郭公雲のいつくにすきぬらんなの[ ]てたる跡を殘して

事わさしけき御まつりことのあまりにや。この御所中のくみいれのかすを。みなかそふへきよしをうけ給はりて。伊與内侍敦説か妹はりまなと。安福殿あけさせてかそへ侍しに。つりとのゝくみいれのことにおほくて。いとゝつもりたるといふことにて侍。辨内侍。

みるまゝにいとゝつもりて釣殿[ ]かすは限りしられす

五月雨し[ ]つれ〳〵なるに。大はん所に女房たちなに[ ]て。大はむのかみに。御物たなたきのはんあ[ ][ ]さしもこのたひの内裏ゆゝしくつく[ ][ ]のたくみのつくりたる。棚のゆかみて[ ]みゆれは。辨内侍。

御え［　　］侍しに。女房たちみな供奉人

な［　　］つとめ侍しこそい

とおかしか［　　］大納言も

ましりて。さま〳〵［　　］をしへ［　］

［　］内藏頭［　　］侍し

に［　　］み［　　］

これほと［　　］

私云。

此集。後深草院辨内侍歌多見之。仍號二彼集一。

此辨内侍者。閑院冬嗣公一男中納言長良卿

之末葉中務大輔信實息女也。辨内侍日記下云々。

右辨内侍日記以二本校合之傍注以草書者原本所附蓋當時之

爲也楷書則今之所加以便覽者云

日記部五

中務内侍日記

いたつらにあかしくらす春秋は。たゝひつしのあゆみなる心地して。するの露もとの雫にをくれさきたつためしの。はかなき世をかつ思ひなからも。得達のえんにはすゝます。みな生々世々にまよひぬへき人間の八苦なるそあさましき。たゝかゝる世のそゝろことのみ。心にしみてわすれかたき中にも。弘安三年ふしみとのゝ御せん法とて。院(後深草)の御かたはかなくなりしに。十五夜の月も雪うち散て。かせもひやゝかなるかれ野の庭の氣色。物あはれなれと。おなし心にみる人もなし。ひとりなかめんもすき／＼しかりぬへけれは。入てふしぬるに。春宮(伏見)御方つり殿にいてさせおはします。御ともさふらふもんのかうの殿内侍殿。おとこには左中将はかりまいる。宰相殿宮内三人ねぬるを。御所になりぬるとてあれは。みなおきてまいる。すさましき物とかやいひふるすなる。しはすの月夜なれと。宮の中そみなしろたへにみえわたりて。木々のこすゑは花とみゆ。池のかゝみもされたるに。かれ蘆のはかなくしほれふしたるほと。よろつにみところあり。をとなくしつまりたるに。たえ／＼いはにもるゝ水のをとはかりして。軒端の松のみそつれな

くみゆる。權大夫[貝守]しこうしたるほとなるに。御つかひあり。ときは非殿の御まいりとはかりこたへて。つほねにはちい さきわらははかりそある。いとねんなく。はつ雪の心地してなと申。女院の御かたも御らんすなり。御つほ御らんせらる。軒ちかく一 むら生たるくれ竹の 雪おれしたるも。なへてかれ ぬる草よりもはかなく。よろつにけちかきさまに。み所そひてそ侍る。また女房のつほねとも。いまたねぬ所もあり。いとえん たちて。おかしきことゝもおほし。猶たちかへり。ありつるかたを御らんせらるれは。すこしはれつる空もまたかきくらし。風もはけしくさえたるに。やもめからすの一聲もあはれをそへておほゆる。

なかめわひ心も空にかきくれて降白雪にすむ月のかけ

うきふしを思ひみたれてはかなきは汀の蘆の雪の下おれ

かくていらせ給ひぬれは。御るすの御所にねぬれとも。しはしは猶はしをあけて。はれくもる空をなかめて。なにとなく物かたりともするに。時うつり鳥もしは〳〵なくに。またあはれをそふるかねのをとも。まくらにちかき心地して。いとあはれにものかなし。

我ならて鳥もなきけりれをそへて明行鐘のさゆるひゝきに

たゝ心の中はかりつゝかぬことのみあんせらるゝも。われなからおかし。又弘安三年のとし。御さかきいてさせ給ひしかは。ひさしの御所なりしに。四年の八月十六日。たそかれのほとよりかきくれてふる雨のふくるまゝになこりなくはれて。おなし空ともみえぬ月影おもしろけれは。春宮の御かた入らせおはしましてて御月見あり。きりふりておかしきに。猶くもらぬ露の光り。聲々になく蟲の音も。とりあつめたる心地して。吹まよひたるかせにみたれまさる露の玉も心くるしきに。松にかゝるひ

かりはことなるも。如意ほうしゆの玉かとみえけんさか野も。これにはすきしとおほえて。

をのつから暫しもきえぬたのみかは軒端の松にかゝる白露

御かた／＼にいらせ給ひぬ。あかつきちかくなるほとに。院の御方はまた南殿の月を御らんせらる。よひよりはこよなうきりもふりまさりて。木々のこすゑもみえわかす。かすめる空にかりなきわたりて。あはれもそへておもしろけれは。

霧こめて哀もふかき秋の夜に雲井の鴈もなきわたる哉

御よるのゝちもとみにねられす。

よな／＼はねぬよの友と眺むるに霧なへたてそ秋のよの月

また弘安五年四月十七日。さかとのゝ御るすなりしに。雨もをやます。空さへとちて日數つもるころ。おほやけわたくしはつねをまつなくさめはかりに。あま夜の空を御らんせらるる。御ともに三位殿。御つほね。大納言殿。別當殿。男にはあやの小路の三位。土御門の少將。そゝろことゝもまうして。おかしくけうあることゝもなり。心つくしにまちあかしつる郭公は。それかとおほめくほとの一聲に。花たちはなのかほりなつかしきも。よそふる人もありかほの心地して。ひかりなきよのやみのうつゝも。おもひなすかたはいつれもあさからねは。なか／＼なるわすれかたみに。いまもつきせさりけり。

時鳥おほめくほとの一聲になこりの空もむつましきかな

世にふれは。なにとなくわすれぬふし／＼もおほく。袖もぬれぬへきことはりもしらるゝこそ。かはゆくおほゆれと。ことに弘安六年四月十九日。れいのさかとのゝ御かうなりて。還御なる御よるのゝち。春宮の御方土御門の少將はかり御ともにて。院の御方さまにしのひて御らんせらるゝ。南殿のはな橘さかりなる

ころなれは。かをなつかしむ時鳥もやと。またせおはしますに。心つくしの一聲もあかすうらめし。そのころ。左中將なにことにかありけん。こもりて久しくまいらさりけるに。有明の空になきぬる一聲を。ねさめにやきくらんなと。かたしけなくもおほしめしいつるは。夢の中にもかよふらんをと思ひやらるゝに。

思ひやるねさめやいかに時鳥なきてすきぬる有明の空

と御けしきあれは。内侍との。たと／＼しきほとの有明のひかりにかきて。花たちはなにつけられたり。さるへき御つかひもなくてあけぬへけれは。土御門少將人もくせす。たゝひとりむまにて行ぬ。てつから馬の口をひきてかとをたゝくに。とみにもあけす。空はあけかたになるもあさましくおかし。かとをあけぬるに。思ひよらすあきれたちけんもことはりなり。さらぬなさけたに。おりから物はうれしきに。かしこき御なさけもふかく。色をもかをもとおほしめしいつるも。御つかひのうれしさは。けにいかなりけん。おなしたくひならん身は。けにいかてかうらやましからさらん。ありかたきめんほくいける身の思ひ出とそ。よそに思ひしられて侍りし。ほの／＼とあくるほとにそかへりまいりたる。

みやのうち鳴てすきける時鳥まつ宿からは今もつれなし

その日土御門少將に。

あし引の　山ほとゝきす　しゐてなを　まつはつれなく
ふくろ夜に　とはかりたゝく　まきの戸は　あらぬくゐなと
まかへても　さすかに明て　たつぬれは　しけき草はの
露はらひ　わけ入人の　すかたさへ　思ひもよらぬ
おりにしも　いともかしこき　なさけとて　つたへのへつる
ことのはを　我身にあまる　心地して　けに世にしらぬ
有明の　月にとゝむる　おもかけの　名殘までこそ
わすれかれぬれ

言の葉にいかにいひてもかひそなき顯れぬへき心ならねは

返事に少將。

久かたの　月のかつらの　かけにしも　ときしもあれと
ほとゝきす　一聲なのる　ありあけの　月毛のこまに
まかせつゝ　いともかしこき　玉つさを　ひとりある庭の
しろへにて　たつれし宿の　草ふかみ　ふかきなさけを
つたへしに　袂にあまる　嬉しさは　よそまてもけに
しら雲の　たえまに日影　ほのめきて　朝なく露の
たまほこの　道行人の　くれはとり　あやしきまてに
いそきつる　そのかひありて　千はやふる　かみしもともに
おきゐつゝ　まつにつけても　すみよしの　岸におふなる
草のなの　わすれかたみの　おもひてや　これあらはれは
闕　なか〳〵いかに　うらみまし　心にこむる
わすれかたみを

内侍との少將にことつけ。

時しもあれみかきにゝほふ橘の風につけても人のとへかし

かへりこと。

めつらしきそのことのはも身にしむは有明の空に匂ふ立花

廿日。内侍殿に。左中將。

いかならん世にかわすれん橘の匂ひもふかきけさの情を

返ことに。

橘の匂ひにたくふなさけにもことゝふいまそ思ひしらるゝ

弘安七年三月十七日。これもさかとのゝ御るすなりしに。御あそひあり。御ともに女房四人おとこ三人そ侍りし。たいの御方大納言殿れんせい殿。御てうつのまのみすまきあけて。御所御ひは。あやの小路の三位らうゐい。はくの少將ふえ。土御門の少將こと。よもすから御あそひともあるに。いつもといひなから。ちやうの屋の花の木するゐおもしろく。秋ならねとも身にしむはかり風もはけしき花のあたりは。けにゆきてもうらみまほしき心ちして。おほつかなきほとにかすめる月は。しく物なくおほえて。おりからはものゝねもすみのほりおもしろきに。のちも又しのふはかりのことの葉を御たつねありしに。めん〳〵にあらはすもおかし。さためなくはれくもる村雨の空も。つくりいてたらんやうなり。かこち　かほなる

ともいひぬへうなかめたるに。三位。

はれくもり花のひまもるむらさめに

とあれと。うちまきれつゝつくる人もなけれは。心の中に。

あやなく曲のぬるゝ物かは

ひある心地して。

とそおほえし。こよひはけに春のみやゐもか

月影にいく春へてか花もみし今宵はかりの思ひ出そなき

八月十三日。ひるより雨ふりてしめやかなるに。くれぬれは。月はなやかにさし出て。をくらの山もたとるましけ也。よもふけしつまりたるに。人たゝふたりはかゝりたちいてゝみれは。御所になりてしはし御覧せられて。いらせおはしましぬれとも。ふたりは猶のこりて。むかし今をなきみわらひみ。てんほうりんの契り。ちやうせい殿の心地して。あかつきちかくなれは。入かたの月山のはにかたふきたるは。入日ならねとをくるゝ心地して。いにしへのをのゝ山さへゆかしきまておほゆるも。入なんあとの心ほそさを思ふにふしぬ。

なかめつる月もいるさの山端に心はかりやなをしたふらん

八年三月十七日。夢にいくらもまさらぬ春の夜を。あかしかねぬるねさめに。まことやこそのこよひ。月と花とによをあかし侍りしも戀しく。たゝいまのやうなるに。ほとなくもめくりあひぬるさためなき世に。なからへにけるかなと思ひつゝくるを。いまた御所は御よるのほとに。すへりて人しれす。ほかにはしらぬ心の中をと思ひて。大納言との丶御つほねへはなにつけて。

我ならぬ人もやこそのこよひとて月と花とを思ひいつらん

かくまて御所に御入すくなゝりつれは。御ひるよりさきにといそきまいりたれは。女くわん。土御門の少將殿まいらせよとて候といふ。

とりてみれは。ちりたる花につけて。こそのこよひおほやけわたくしのこと葉をこめて。歌ともあまたかきたり。めん／＼みなひろうせよとて。あるなかに。三位はおなしかきりならぬなけきにたへて。みやこのたのみたになく。かやうにまうて侍るときけと。人しもこそあれ。なとかゝりけんと。かならすあひぬることくさのすゑもあはれにかなしきに。ありし夜のむらさめ。けふまた袖に時雨ぬる心地してそ侍る。

忘れすよしなは共にといひをきしこその軒端の春のよの月

此歌のはしめはあはれ也しことなり。すゑはかしこき御ことの葉を。ひとつによみこめたるとみえたり。御返事に。

月影をのちに忍ふへき物そとはなをなへてにもなかめける哉

わひぬれは移ふ人はつらけれと心のそこにあはんとそ思ふ

これもはしめは。さそふ人あらはと。身を木からしのとありしことゝみえたり。心のそことといふ事はとかむへきふしなり。あはんと思ふといふは我ことの葉のすゑなり。かへりとに。

瀧川のなかれてあはん行末を心のそこにわすれやはする

めくりあふけふまちえても面影のかすめる月は物そ悲しき

これはこと葉にてひとへにこめたる御かへりことなり。かゝる世のそゝろことゝもきくにつけても。あるましかはとおもふためしもかなしくて。まして宮このほかをおもひやるは。あはれもふかくかなしけれは。けふとわすられすも申せといはせて。ちりたる花につけて。

なけきこしそのかれことの末ならは諸共にとや身は厭ふ覽

よそにたにたへぬ歎きの花櫻ちりにしあとを思ひこそやれ

みやこにかへりてのち。三位。

今こそは思ひしらるれかれことの歎によらぬ思ひありとは

花ならて散にしあとのおも影はたえぬなけきの殘はかりそ

又大納言殿の御つほねへ。三位。

わすれしと契をきてし言の葉や都にのこるかたみなりけん

むら雨の空にはあらてみし月の我袖からとかけそやつれし

思ひいて丶まつ袖ぬれし村雨やうき身ひとつの涙なりけん

又三月卅日。へたゝる日數のなごりも。あはれにおもひやられて。

いかはかり哀そふらんへたて行日數もけふの春をなこりに

かへりこと。三位。

かくはかりなけきやはせし大方の年へてなれし春の名殘を

少將。てゝにて侍し人にをくれてこもり侍るに。をくれさきたつも。これにかきる世のためしとのみなけくに。ほとなく月日もへたゝりぬれは。秋もふけゆく山さとのすまゐは。袖もひとつの村雨のみ。みねのあらしやことゝふらん。宮古たに。ふりみふらすみさためなきころは。たゝおほかたのなかめに侍るをと。あはれもふかくおもひやるはかりにて。ひさしくとはぬにつけて。

物思ふ袖の涙もくれなゐのおなしちしほにそむるもみちは

返ことに。

ちしほまてそむる紅葉をみるよりも袖の涙や色まさるらし

又弘安七年のとし。遠き所にしのひて。ものにこもり侍るに。としころあさからす申かはしたる人なくなりて。としもあまたへたゝりぬるに。これにまいりて。つねにこもりしやとに侍といふ所をみれは。いたうあれなとはせねと。人なくあはれけなり。かけつくりなるに。しはかきやり水なとはかなき物から思ひ入ぬるはかりにや。みところある心ちして。あはれになつかしけれは。たつね行てみれとも。いかにとゝかむる人もなし。かけすみはてぬとみるいけ水にも。やともる月たになきころなれは。をとする物は。山よりおちくる瀧のひゝきはかりそおとろかしかほなる。あはれもおなしかきりに。ふかき涙はかりは。袖にうかへて

も猶ところせきいは波たかく。谷になかるゝ水のをとまても。とりそへものかなし。

袖の上におちくる瀧のすゑなれやをとたてゝ行山川の水

世にすまは又みんとこそ思ひしかおも影なれし山の井の水

なかれあふ涙の末もかひそなきかけすみはてぬ宿の池水

たゝかひなきひとりことのみそあはれなる。

七月五日。北山殿に行けいなる。御かうもなりしかは。はへ／＼しき御あそひともなり。ひるは山瀧なと所々御らんせられて。くるれは御舟にめす。夕つく夜より有明になるまて。かゝるよもなし。

九日。月さしいつるほとに。れいの御舟にめす。大夫（實秉）ちさんし侍りぬと。あそひくたひれ侍と申。しはしはつり殿にやすらはせおはしまししかと。御舟さしいたさる。御樂あり。殿上人ともちいさき舟に乗て。なか嶋をへたてゝ吹あはせたるものゝね。たとへんかたなくおもしろし。はるかにこきいてぬるに。かすかにかつこをうつをと聞ゆるを。人々あきれて。いつくならんと申に。大夫（秉）にやあらんとて。むかへの小舟に。かくしらうゑいなとして。さしよせたれは。火をたきてそまいりたまふを。いみしく興せさせ給ふ。春宮の御かた。十三日は御くたひれにやありけん。御舟にもめさす。無量光院のひさしにて月御覧せらる。すのこに花山院大納言大夫殿（家教）さふらひ給ふ。さま／＼おかしき御物かたりともあり。ひんかしのつま戸の口に。大納言殿權大納言殿さふらひ給ふ。やかてそのひんかしのまのすみ。かうらんに宮内宰相殿三人さふらふ。なにとなき物かたりともして。ふけ行まゝに。ことにちかきにしの山もと。入かたちかくかたふきたる月の。池に移ひておもしろきを。ところからはけにみところあるよゝの月かけ。いかなる世にもわ

すれしやなと。いひあはせつゝ。廿五のほさつらいかうの御かたみるよりはしめて。たのもしくあはれなるかたもそひて。なこりおほけに。なからへは又こん年のこよひ。おもひいてなるへしやなといふ心のうちに。

山かけになかむる月よめくりあはん都の空に面かはりすな

ふけぬれはいらせ給ひぬ。

十六日もこの御方は御ふねもなし。あさかれゐのみすまきあけて。月御らんせらる。御えんに人々さふらひ給ふ。はくの新少將衞門の藏人めしいてゝまいらせらる。花山院大納言(家教)笛。大夫殿たいこ。さらぬ殿上人とも。りち(律)には月の光りもことなるに。はとう(拔頭)のまいいてたるほとは。まことにおもしろし。なこりおほくてはてぬ。宮内のおもとに。おやのおやともいひぬへき人の許より。月のたよりにとたのめ侍るに。人々くしてまへわたりしてみえ侍るをうらみて。

僞と思ひなからもまちかねつれぬよの月にかけあくるまて

といひをこせたる返事を。あまりひたやこもりならんもさすかなれは。しのひて返ことつかはし侍るか。さるへきつかひもなきを。いかかし侍へきと。いひあはするかひなからんもと思ひて。あらぬさまなるすかたをして。夜もなかはにすきて。あか月ちかくなるほとにゆきて。御まやをつほねにしつらひたるしとみを。しのひやかにうちたゝけと。みな人ねたる氣色にて。こたふる人もなけれは。あまりことことしからんもいかゝ也と。思ひわつらひてやすらふほとに。東のつまとのかたに。たゝくくゐなのと。うちなかむる聲すれは。それにやあらんと。ことはりもすきて。やさしくもおもしろくもおほえて。聲につきてやりとにたちそひて。月をなかむるなりけりときくに。まこ

とに月をまつにはあらて。人まつほとのすさみにやとおもひやられて。うちたゝけは。たそともいひあへぬはかりにあけたれは。なにとはいはすふみをさしをくに。袖をひかへてはなたす。おそろしくあきれたる心地してあさましけれと。さはかぬさまにもてなして。さりけなく。やをらすへりにくるに。くまなき月にみゆらんうしろてもはつかしく。われなから心あさかりけるふるまひも。そらおそろしくあんせられて。くやしくおほえて。心のうちに。

くゐなかと疑はれつるまきの戸をあくる迄とは何叩きけん

人にはいはぬことなれは。よろつはあいなき心ひとつなり。

十八日。野上の御かう行けいなる。ゐんたうに殿上人ともわらうたをあまたしてしきたるを。またひろひをとらしとはしりなとするもおかし。のかみのけしきまことにおもしろし。かけひの水のけしき。はかなき木草まても。みところあり。ひろき野に。われもかうを。ましる物なくうへわたしたるに。わかきねうはうたち。山きはまてわけ入てみれと。みちなくてかへりぬ。くるゝまて御あそひありて。いらせ給ぬれは。れいの御ふ・ね(もイ)はてぬ。

十九日は。めうをんたうの御幸なり。おもしろくめてたし。

廿日。夜はことにひきつくろひたる御ふなかくあり。春宮御ひは。花山院大納言ふえ。ことはれん中也。とく大寺の大納言らうゑい。大夫殿は二位入たうか御ものやとりのとしといふものとのりたる舟にて。入江の松の下にかくろへて。ひはをしらへてをとつれ給ふ。いつくならんいたしたれは。御舟さしよせてまいり給ふ。けいせいの舟に乗たかり侍つるほとに

なと申給ふ。いとおかし。廿日月はすこし心もとなくまたるゝほと。御堂の御あかしの光りかすかに水にうつろひたるほと。おもしろくみゆ。月さし出ぬれは。まはゆきほとなるに。漕まはすふねのかちのをとに。たちさはく水鳥のけしき。なか嶋の松の木末。物ことにおもしろきことかきりなきにも。又かゝることいかなる世にかと。なこりかなしうこそ。あそひはてぬれは。また田むきの月御らんせらるゝに。春宮の御かたは。道遠くことはなれたるやうなれはならす。のかみへそいらせ給ふ。たむきのかた。ことに草ふかくわけ入たるに。なにおふもけにとおほえて。はてはいつくとみえぬまてはる〳〵とひろきに。いなはにをきわたす露の光はたまをならへたらんやうなり。とり〳〵さま〳〵なる所々のけしき。いひつくすへうもあらす。還御なりていらせ給ひぬれは女はうたちは猶大御堂のひろひさしにいて。よこ雲のひまみえゆくに。すさきにたてる松の木たち。つり殿ちかき松にふねうきたりし中嶋に。羽うちかはしたる鳥とものむれゐたるまても。よろつにみすてかたけれと。心心にさしきの野上わけ行に。あるかなきかの月のなこりなをしたひけん。さしきはにしの山もとゆかしくて行ぬ。まつ山にわけておひたるまきの木末露けき山田のいほまてもはかなく。いなはの風にみたれたるほと。山のはちかく雲にきえゆく有明の影。とりあつめたるあさほらけものかなしくて。心ほそくなかめつるさへ入ぬれは。

横雲の空に消ゆく有明を心ほそくもなかめつる哉

しのゝめの明行空の秋風になひくいなはも露そこほるゝ

かやうにつゝかぬことのみそ心の中におほき。また野かみより還御なりて。あけほのに御

舟めされて。あけはてぬれは入せ給ひて。やかてそのまゝなから御くわいあり。數ならぬすゑすゑまても。心々にうちぬる時もなくそあそひあひぬる。

廿一日は還御なり。院の御かたはくるゝほとになりぬれは。御なこりあかす。月まつほと御舟にめす。月いてぬれは。野上へいらせおはします。さきにはひきかへのとかにて。ふけぬれは還御なる。そのゝち御心地れいならす。わらはやみにてわたらせおはしませは。おもしろくわすれかたかりしなこりも。此御ことのあさましさに。よろつものうくて日數つもるに八月にもなりぬ。ありし野上ふとおほしめしいてらるゝに。大夫とのゝ御歌あり。

今かゝる心にも猶忘られすのかみのみちのけさのあけほの

御返事。

今思へは誠やけふにてありし哉のかみの松の夜のあけし色

あさましきなかにも。おほやけわたくしわすれかたく戀しきに。わかき女房たち。けふはいかになといふにつけても。思ひ出らるゝ事おほし。さらに露をきたるか。ありしなからそかしと思ふに。我から衣の戀しさもかなしくて。

わすれすよ野上に茂るわれもかうわけし袂の露もまたひす

かくて日數つもらせ給ふ御こと。あさましかりしに。めてたくおちさせおはしましぬ。

晦日に里に出て。九月四五日のほとに。尼崎といふ所にゆくに。京をよふかくいてゝ。とは殿ちかきほとにて。夜やう〳〵あけゆく空に。木木の木末も色つきそむるころなれは。えんなるほとにて。なか〳〵おもしろし。舟にのらんとするに。かすしらすさりあへぬまてふねおほきに。きゝしらぬさまにおそろしけなる聲したる物ともひしめくをきくにつけても。ひきかへたるしきもあはれにて北山殿思ひ出ら

れて。いかにとたにいひあはする人もなし。はるはるこき行に。河霧たちてこしかたゆくさきもみえず。きんや（禁野）かた野といふ所すくるに。をとにのみきゝわたるをと思ひてしはしみるに。遠けれはさたかにはあらねと。しは野のなかより鳥のたつを。きゝすにやあらんなといへは。

古もありとはかりになとにきく交野のきゝすけふみつる哉

またはし　おほくすきぬるなかに。これなんあまの川に侍るといふをみれは。はしやふれてそのかたはかりそ。はつかにのこる。

これやこの七夕つめのこひわたる天の河原のかさゝきの橋

かくて日の入ほとに行つきぬ。日は水の下に入とのみみえて。河よりうみになるけちめ波あらくたち。はるかなる沖にこく舟はゑにかきたらんやうなり。うしとらのかたをみやれは。すみよしの松むらたち。たえ〳〵にかすみてみゆ。たちかへる波風も。うらならねともいたうはけしき心地そする。ひるきふねのうらといふかたに出てみれは。うらの松風波にかよひて。入海心すこく神さひていとたうとし。はまにあまとものかひひろひ。また沖に釣するもあり。たくなはあみなといふほしをきたるをみれは。ほすひまもありけるをと。

うちはへて苦しき物と思ひしに蜑のたく縄ほすひまもあり

夕日の影おもしろきに。沖よりあまの釣舟ともおほくかへるもあはれなり。くるれは。遊女か舟とも歌うたひ物かすへなとするも　おかし。一かたならすみやこのみ心とまりしに。海山へたゝりぬる心ほそさを思ふに。おも影はかりかたみとて。波ちはるかに月をなかむるさへ。よそにくまなき影も。我からは猶くもらぬ夜半もなし。かくて心もとなくかすへられつる日数も。ほとなくてのほるは又立歸りあ

かぬ心地して。さすかなれぬるうら風に。心はなひくからと。われなからあやにくにて。思ひしらるゝ。こしかたもはるかになりぬるも心ほそく。梢をかへりみれとも。へたゝりかすむ雲井はかりをなかめて。

こし方をかへりみれ共にる〳〵と霞隔てゝそこはかとなし

をそくいてゝ。あすも日くれぬへしといへは。夜もすから舟をこくに。廿日の月なれは。ふくるまゝにすみまさりておもしろきに。みな人ねぬれは。ひとりおきゐてみるに。かけもなかるゝとみゆる月は。なをこそをくれさりけり。よろつを思ひつゝくるに。はては物おそろしき心地して心ほそし。むしあけのせとにといひけんむかし物かたりさへそあはれに思ひいてらるゝ。人おとろきて。はるかにもきにけるかなと。みちもおそろしかんなるを。いつくにかとまるへきなといふ。はしもとゝいふ所につきぬ。あさましおかしけなる家とも。川のつらにつくりつゝけたる所にとまりぬ。かくするすまゐはいかならんなと思ふもあはれなり。あけぬといへは。また舟に乗る。よもすからひとりなかめし月は。あけ行きりにひかりもさへにけり。ほのかにきえのこりたるけしきに。心つくしけなる秋の空なるは。物かなしきこゝちするに。あまり夜ふかくいてゝ。あふ舟もなきに。きりにかすみてほのかにくるを。ちかくなるまゝにみれは。はかなき木をくみてのりて行ものあり。なにそとゝへはいかたと申物に侍るといふ。あたなるさまもはかなくあはれなり。

朝霧もはれぬ川せにうきなからすき行ものはいかた也けり

みなせといふ所をすくるに。これなんむかし御所にていみしかりしも。いまかくなりぬる。あはれに侍ると。ふるめかしき物かたりする

ものあれは。
あさからぬ昔のゆへを思ふにもみなせの川に袖そぬれぬる
かへりてのち。あはれなりしすさひも戀しく
もわすれかたく。御所より人々御ふみあり。と
りたてゝはなけれと。心地なやましくて日數
つもるに。さらてもはかなくもはかなきに。い
つかうき世の風にさそはれんなと思ふも心ほ
そくおほゆるころなめれは。めつらしさもう
れしさも一かたならす。いつしか御所さまの
さしきもゆかしくかなしきに。かれゆく花も
おなしわかれの秋の色に。あはれもふかき御
ふみはいつよりありかたかりぬへしと。心ひ
とつにはかなくたのまるゝそあはれなる。
花鳥の色にもれにも忍ふやとありのすさみもあらはあらまし
さりともと。おなし心のたのみにも。またるゝ
人のひさしくたえて。かゝるをなとかと思ふ
もうらめしくて。
身のうさも命もかきるこの秋を哀とはかり人のとへかし
かくてほとなく年もかへりぬれは。また三月
十七日もめくりあひぬ。さためなき世になか
らへにけるもうれしなから。しめの外なるふ
せやにうつもれ過しぬるも。おなしうき世に
めくれとも。なをかひなき身なりけりと。くち
おしくおほゆるに。みちのたより木すゑはか
りをよそにみるもなか〳〵なる心地して。大
納言殿花につけて。
月もすむ雲井の花をよそにみてなれし昔のけふそ戀しき
御返ことに。
なしなへてやよひのけふを忘れぬを花故にこそ思ひ出けれ
花ゆへとかやみゆるもうらめしく。その世の
こともたゝいまの心地して。こよひは入まで
月をみるもかはゆく。我なからおかしくけう
さめておほえなから。
雲の上の月に心はすむ物をしめの外にや思ひなすらん

猶はかなく。大かたのかすにはもれぬこともやと。おほゆるぞおかしき。

また四月廿五日まつりなれは。御けいなとひしめく。めん／＼にあふひつけなとするも。年に一たひもいくめくりあひぬらんと思ふに。こその此ころもたゝいまの心ちして侍るほとなさもあはれにて。そのなにつけていにしへをわすれすしのふ人もあるらん。まち／＼心心にみるらんけふのかさしをと思ふに。まことや新宰相殿の。ことしはひきかへてあらぬさまにやよそにみて。かひなきそのかみのこともいかにと。かす／＼おもひやられて。あふひにつけて。

そのかみのとやはかなき葵草何ゆへよそになのみきくらん

かへりことほとへて後。

さま／＼に思ふ心をなしこめてとふにそいとゞ涙おちける

五月六日。御かうのひて。六條殿へ十三日御幸なる。御るすもいつしか人なくさひて。雨しめやかなる夕くれに。まつむきとのゝみすまきあけて御らんしいたされたり。御まへに大納言殿はかりさふらひ給ふ。すのこにたちいててみれは。池にはわくへきひまもなくしけりたる蘆まにみゆるふねの。ありかさためすうきたるさまもはかなきに。さはりおほくみゆれは。

はかなくて蘆まにみゆる浮舟のよるへさためす物そ悲しき

くれぬれはいらせ給ひぬ。こよひは御よるもとし。おそろしきまて人なくのとかなるつり殿に出てみれは。雨もすこしをやむけしきなり。雲の絶間にとき／＼もりいてゝかすめる月のひかりもめつらしき心地して。大納言殿。

あま雲にしはしやすらふ夜半の月なかむる人の心をやしる

とおほえ侍て。いたく心つくしけなる影もうらめしく。なにとなく物哀也。南殿の橋もさか

りなるに。かれたる軒のあやめもひとつになつかしくて。

かれ〳〵に残るあやめもなつかしく花橘もひとつかほりに

七月二日。御くわいあり。ゆふつく夜のころなれは。更行まゝの空は星の光りはかりなるに。しつまりたるよの氣色。長閑におもしろし。まつむき殿にみすまきあけて。御ひきなをしにていてさせ給ふ。ひろひさしに三條の三位頭辨。すのこに殿上人ともはさふらふ。かうしためさねなり。

あら玉の年をかさぬれは。春のみ山ゝ木かくれより花郭公月雪につけて。心をのふるなくさみも。さすかにありといへとも。おほやけわたくしうちまきれて。物まいりなとのひま。いつをかきりとなけれは。ならはつせのかたへおもひたちて。いまたみぬかたの木すゑもゆかしくて。いとま申いれんとて。けんき門院の御所衣笠殿へ。九月十三日にまいりたれは。人人おほく。せうほう院の山にてまつとらんとて行に。時雨うちそゝき風すこしふきて。やうやう木すゑも色つくころの氣色。なにとなく物あはれにみえたるに。おなしふせやのなかに。すこしよしあるさまにしなして。軒ちかくうへたる荻のひかきのうへよりみえて。かきほに植たる夕皃のつる。かれのこりたるかれ葉とも。月にみたれてそよ〳〵となる。みゝもめもとまる心地して。いかなる人のすむならんといへは。むかしのぬしは世をいとふ人にて。いまはなし。そのふるきすみかときくといへは。哀もまさりて。

枯残る賤かかきほの夕顔に心をそめてすきそやられぬ

荻の葉もおなしふせやのかきなれはたゝには過ぬ風の音哉

おなしき十三日。はりまの中將。日比のわつらひをもくなりて。いまはたのみなくなんとき

く。あはれにかなしきをおもひなから。いまゝてとはぬをこたりもうたてくて。

いかにして暫し此世に影とめん別れんをの悲しくもある哉

限りなく哀とのみはなけゝ共いはれは人のしらすそ有らん

あるかなきかのやうにて。うき身世にかけとゝむへき心ちせぬ心ほそさは。たゝ思ひやれといへは。

いさやけにあはれ悲しと思ひける心のほとも今こそはしれ

ことはりもけにとかなしくあはれなり。こよひは十三夜そかし。御くわいあれともましらねはあはれに。いつしかこの世なからあらましかはのかなしさも。やう〳〵人々あはれかる。くれぬれは春宮は院の御所へいらせおはしまして。御舟にめして月御らんせらる。空はくもりむら雲たちて。なか〳〵みところあるさまなり。心の中に。

はれくもる月そなか〳〵珍らしき空も心のあるよなる哉

御舟ともはてぬ。御湯殿のうへのすのこにたち出てみれは。月のあたりなる雲もはれて。庭のあさちも露の光もみえわくに。ふけにける夜のけしき。つり殿のかたへ出てみれは。とうろのともし火かすかにて。やり水のいしまにもるゝをとのみあはれにきこゆ。

岩まもるいしまの水のをとすみて秋は哀ときゝそなさるゝ

十月十日ころ。はつせにまいり侍れは。河原のほとにてほの〳〵とあくるに。川霧たちて行さきもみえす。よこ雲の空はかりけしめみえていとおもしろし。

川霧に道こそみえね小車のまはりていつくわたせなるらん

うちなるをちといふ所をみれは。いつれ昔のあとならんと。色々のもみちともみえたるに。しる人あらまほしくおほゆ。

おほつかないつれ昔の跡ならんをち方人にことやとはまし

まきのしまといふ所。すさきに鷺のゐたる。お

ほきなる水車にもみちのいろ〳〵。にしきをかけわたしたらんやうなり。芝つむ舟ともあり。つみはてゝいそき岸をはなれんとするもあり。

心ほそやゐくゐにつなく柴舟の岸を離れていつちゆきなん

平等院をみれは。極樂のしやうこん(莊嚴)ゆかしくみるとかやきこゆるもことはりに。もみちの色さへことなるも。時雨もこの里はかりわきてそめける。みやこのつとにおらまほしく。かへらんたひと思ひなしてすくるに。又にゐのゝ池といふ池のはたをすくれは。鳥のおほく水にをりゐてあそふ。なにそとゝへは。かもめといふ鳥なりといへは。

池水もあさけの風もさむけきになりゐてあそふ鴎とりかな

春日にまいりつきて。宮めくりすれは。春日野はる〳〵と入て。鹿のふすはきもしもかれてみえす。

春日野は鹿のみそふす霜枯て萩のふるえもいつれなるらん

御まへにまいりたれは。かり殿の御ほとにて。やう〳〵作りたてまいらするいとたうとし。心のうちに。

頼もしや三笠の山をあふきつゝ影にかくれん身なし思へは

さてさる澤の池をみれは。にこりなくすみて。釆女か身をなけけん昔の影もいまうかひたる心ちして。いまはとみけん面影を。我なからいかにかゝみのかけのかなしとみけん。御幸ありけん帝の御心ちも。かたしけなく哀也。

思ひやる今たに悲し我妹子かかきりの影をいかゝみつらん

とあはれなり。はつせにまいりたれは。朝ほらけ霧たちて。かり田のおもさひしきに。つるのむれゐてなきあひたる聲いとすこし。

秋はつる山田の庵のさひしきに哀にもなく鶴の聲かな

三輪の山といふ所をみるに。音にきくはかりなりしを。ゆかしく心もとなけれと。かへら

んたひと思ひてすきぬ。はつせにまいりつきて。のぼりらうを入よりたうとく。おもしろきことの世にあるへしともおほえす。らんしゆのけしきもなへてならすたうとし。かひ〳〵しく心にしむるおもかけ。しんおこりて。年月のあらましけふこそと。うれしきことかぎりなくて。御帳もあきておかまれさせ給ふ。おりなんのちいかゝとおほゆ。

へたゝらん後を思へは戀しさのいまよりかれて涙こほれぬ

かねては長閑におもひしかとも。めでたき御世のひしめきて。京よりつかひあれは。心も心ならす。あかつきはいそき下かうするに。宮こもいそきなから又これもなごりおほし。このたひそみわにまいる。をとにきゝしよりはたうとく。杉の木にわを三つけたるもおもしろし。

年月は行ゑもしらてすきしかとけふ尋ねみるみわの山もと

みつなりなる杉の實のおちたるをとりひろひて。しゆく願ありて又まいらんおり。かへしをかんと思ふに。

しるしみんしるしの杉のかたみとて神世忘れす行先なまて

又たまの井といふ所すくる。いてやあらん水はといへは。くみてきたり。

くみみれは戀さめに社なかりけれ音にきゝこし玉の井の水

あくる日は京へかへりぬ。さとにしやうそくしたゝめまうけたれは。やかて御所へまいりぬ。御しやう（讓）ゐ（位）廿一日。節會はてぬれは。けん（劔）しい（璽）らせおはします。たゝ行幸のきしきのやうなり。ゑん（筵）とう（道）しきて。御劔は左近中將むねさた。璽をは右近中將のふ（信）もと（基）。さきに公卿供奉。左右大將（兼忠道基）公卿のすけは。けんしのさうの御うしろにくふす。左右近衞つかさ。中門のとにとゝまりてれちにたちたり。けんしははしのまより入御なれは。左右大將さうこんの木の

下にたつ。母屋のみすすへらかして。御丁のまへに御ひきなをしにて わたらせ給ふ。こうたう左より 御けんをうけとる。つきに璽をわたす。右より少將内侍璽をうけとるありさまゆゆしくめてたし。とかくきしき久しくて。あくるほとにそ内侍所は いらせ給ふ。明はてぬれは。御せんももんしやくはなし。内しゆときをそうす。

三日は。おのことも殿上につきて 大はんをこなふ。年中行事のしやうしのもとに出御なりて。ない／＼御らんせらる。やかてこん夜けちんなり。中門に出御なる。

十一月九日。はりまの中將とも あきなくなりぬ。雲のうへに心をかけて。今一たひとくわんともたて。なにかしけれとも。かきりある世のならひなりけれはかなはす。まうねんのみあはれにかはゆきことも。いまはのきは 思ひさためてといひしにと悲し。

九日は。春日まつりに内侍勾當たつ。

十五日。まつりことはしめ。

十七日。けさいの御てうつ。

十二月五日。りんしのまつりなり。つかひは花山院宰相中將。せいりやう殿に出御なる。きくちんの御はう。つゝしの御したかさね。御簾に殿下御まいりあり。御神馬ひきたてゝつかひまいりて。御へいとれは。御はいありていらせ給ひて。御いしに御しりかけさせ給ふ。つかひ舞人とも座につく。中門の下に公卿つきたり。けんはい三こんはてぬ。かさしの公卿内大臣。左大將。權大納言。花山院中納言。大炊の御門の中納言。久我の中納言。皇后宮權大夫。さしきにしさいありて。殿上はかりにて着座なし。洞院の宰相中將。左大辨宰相。みの時にもよほされて。まひ人もとくまいりたれとも。きしき

とうも久しくて日もくる。けんはいはてぬれは。内大臣殿つかひのかさし藤をとりてかうふりにさゝせ給ふ。つらにまかはぬかさしの色もおもしろく世のはしめにて。公卿の使よろつはへ／＼しきにも。雨雪のさはりたになくて長閑にめてたし。神もめつらしとやうけみ給ふらんとおほえて。

色ふかき雲井の藤をかさしにて神もうけみるつかひなる覽

かさしはてぬれは。すのこにちやくさ。まひ人ともさうにたちて行ちかふ。あをすりのそてくちおかし。とのもんれうのたちあかしの光りにみえたるいひつくすへうもなし。ふえのをと。わこんのねもおかしうきこゆ。北のちんわたさるゝに。なかはしのつまに行幸なる。はてぬれはやかて御はいあり。かくてふけぬるに。やかて還たちなれは。このたひは御ひきなをしにていてさせ給ふ。庭火のかけにまひ人の櫻かさして。にんちやうがひやうしにあはせたるあしふみ。わこんのねすこく。やう／＼明行空の光りかきあひて。いひつくすへうもなくおもしろし。

八日九日は。ちもくなり。

十二月十二日。神こんしきのつかひたつ。しやうけい權大納言。辨には右大辨宰相。もんより莚道しきて。をりてやくにしたかふことゝも。おさなきあそひのやうに。おかしきことゝもなり。

十五日。内侍所御神樂。雪宮の中におひたゝしくふりたるに。わこんにれんせいの侍從よりなり。本ひやうし二條中將すけかた。すゑのひやうし綾小路少將のふあり。ひちりき山もとの中將かね行。笛はくの新少將やすなか。月はふけゆくまゝにさえたるに。日數へてふりつみたる雪に。かつふりそふけしき。池のなか嶋

松の木すゑ木々のこずゑかゝやきたるも。庭火のかけにそくたいのくろきかうへにふりかかる雪は。うちはらふもおりからことにすみ。神さひたるけしきかきりなし。雪おひたゝしくてそさ(所作)の人たゆへくもなけれは。はしをとりて中門の下にてあり。

廿五日は。北山(實兼)とのへ御かたゝかへの行幸はしめなり。又雪ふりて。月たにあらはとおほえし。けんしのやく花山院宰相中將。やくの內侍勾當內侍新內侍となり。すけに權大納言のすけおせち殿少將內侍はうき殿。まうけの御所へまいりてむかひて。こうたうといそきかみあけて。もやの御すのうちにて。御こしまちまいらせてさふらふ。入御なりぬれは。御裝束御ひきなをしめしかへて。月もなきころなれは。殿上人ともしそくさして雪御らんせらる。いらせ給ふて御くわいあり。おとこには左中將ため(爲兼)かぬはかりなり。けいこのすかたにてまいりたる。いとやさしくみゆ。權大納言のすけ殿。新さい相殿。女房三人。おとこ三人。かすにもれぬ身。我なからうれしうこそおほゆれ。還御はほの〴〵とあくるほとになりぬれは。雪うちはらふけいこのすかたとも。やさしくおもしろくみえたり。

廿六日。皇后宮(遊義門院)の御かたへなる人なくて。御供もたゝひとりまいりたれは。還御まちまいらせて。池のかたみいたしてつく〴〵となかむるに。かりのなきてすくるか。きのふよりこそ春もたちしに。いつしかこしちにやかへるらん。いまは秋こそたのみなるらめと思ふに。

春きぬと鴈はこしちにいそくなり心に秋をたのめてそ行

弘安十一年二月五日。春日まつり(兼仲)にたつ。しやうけい一條大納言。辨にはかねなかなり。雨すこしふりてかすみたるに。こつ川のはたをゆ

けは橋あり。しはをくみて わたしたるはしと申。

十日。そのからかみのまつり。しやうけい大井の御門の大納言。辨にはためとし。

十二日。大原のゝまつりなり。雨うちそゝきかすめるに。またみぬさとゝめつらしくみゆれは。かつら川なといふところもすきて。にし山とこそ申といふ。

心ほそくつれにしたひてなかめせし是や日の入にしの山本

みやにまいりつきぬれは。辨しやうけいつきてことゝもをこなふ。木丁さして御まへにまいりてみれは。四所の御戸ひらきて。にしきの御ちやうにたちをよこさまにすちかへたるやうにつけて。とひらのわきにほこたてたり。日くるれは。いとめつらかにたうとし。はてぬれはかへるに。雨もとき〳〵なをそゝく物から。夕日のかけに影もすこしみえつるに。又ありつるかつら川にもなりぬ。うふねも二三あり。橋の下行やうにて。さしとゝめたるに。つなてひくやうに。人ふたりはかりつなをひきてさきにあり。くるまのとをれは。つなを水にしつめて。

かつら川くたす鵜舟のつなて繩沈むる果よいかになりなん

こよひ北山とのへ行幸に歸まいらんといそくに。亥のはしめにそまいりつきたる。やかてかみあけてまいる。あくる日 御舟にめされんとて。莚道しかせて。りやうくわんす。皇后宮大夫殿。しきしとも。さらぬ殿上人六ゐなと御供にてあり。御堂のつり殿より御舟にめす。こきわたせは。中嶋の松のしつえに鳥のすくひたる。うきすと申侍れは。これよなとて御らんす。かゝるすみかとて。いまよりうきたるはかなさもあはれなり。

はかなけの鳥のうき巣の哀さや池のこしまの松のしつえに

けふ十三日なれは。さかとのゝ御八講とて。御幸なれは。いそき還御なる。そのゝちくるゝほとに野上へ行幸なる。人々さきに参りて。ありつるやうにゑん道しきて。殿上人六位しりなりつるをいそきとりて。さきにをとらしとして。少藏人のゑもんのすけ。せきゐ(赤衣)のすかたことことしきに。ときはるあを色きてましりたり。野なかにはしりちりたる女郎花の中にくわんさうのさきたる秋のゝをみるにて。こたまのめもやたつらんとおもしろくそみゆる。春宮の御時もなりたりしか思ひいてられて。松山の中なれはたゝ昔の秋にかはらす。かけひのをと。みねの松の氣色かはるけしめなし。いよすたれかけわたしてすゝしけなるに。月はやう／＼さし出て。このもとにて御みきまいる。りやうくわんす殿上人ともは。心とけてあそひあひたり。御せんとわすれたる氣色わらはせおはします。

思ひ出の昔の秋もほとふれはこの夕くれにまさりしもせし

心の中にをの／＼よみあへる歌とも。あくる日そけさん(見参)に入ける。やかて北山とのへまいらせらる。

二月廿七日。くわんのちやうの行幸。かみあけの內侍勾當と少內侍なり。

三月八日は。ちもくなれは。あかつきちかく御よるなれとそうしよをもちて。あくるまてねす。ほの／＼とするに。明ほのゝ花みんといひて。大納言。權大納言。すけとの。新少將殿。四人つり殿にいてゝ。池の花をみれは。さかりなるもあり。すこしちるもあり。ことしは風やふかぬ。花やさかりとみえてひさしくなりぬといへは。

九重は風もよきてやふきすくる盛久しくみゆる花哉

八日は。御むま御らん。

九日。りんしのまつり也。つかひにまいる。花もさかりなるに。風すこし吹て。ちりまかふ花の下に。まひ人ともゑにかきたらんやうなり。たちまふ袖の氣色神かきもおもひやられて。

待えたる御世のはしめに咲匂ふ花のかさしないかゝみる覽

三月廿一日。禮服御らん。日の御座に出御ならせ給ふ。御ひきなをし。母屋の御すをたれたるはしのみすをあけてすのこに圓座をしく。關白大臣のはあつゑんさ。その外の公卿のはうすゑんさなり。奉行五位の職事あきよ（顯世）。六位なかかた。公卿に關白殿。內大臣殿。こかの右大（通基）將との。おほいの御門大納言。皇后宮權大夫殿なり。御らんはてゝいらせ給ふ。おにのまにて御らんあり。殿下おほゐの御かと大納言 皇后宮權大夫殿めしいれらる。よく／＼御らんありて。このたひもちひられんするはめしとゝめられぬ。其外はらいぐさうへかへしおさめられぬ。うち／＼つきの日より。たまの御かうふりめして御らんあり。なかつね召て御らんしたゝめすへき御かうふりなと御よういあり。御ものそんしたる所。御めのとのさたにてなをさる。

三月十五日。御そくゐ行幸のきしき。關白殿左大將以下供奉の人々めつらしく おもしろし。かみあけの內侍。この御所より少將內侍。せうのないし也。御所御しやうそくめされぬ。殿いらせ給ふ。めし仰はてぬるよし。奉行しきし申せは。南殿へならせ給ふ。御こしにめされぬれは。くわんのちやうへいそきこうたうもまいる。かみあけのとくせんまうけたれは。くるまのしりにのせて。くわんのちやうの 北むきより參りて。かみあけしたゝめて。あした所の南むきに勾當もさふらへは。やう／＼ 行幸ちかつかせ おはしますとて。供奉の公卿したいに

れちにたちたり。御こしよらせ給ひぬ。關白殿御下かさねひきなをしまいらせらる。公卿のすけまいりて。けんしとりて内侍につたへて後。御こしにつきて。みつなのすけそうそきぬ。奏はてゝ主上いらせ給へは。殿御れんにまいらせ給ふ。ひさしのみすあらはより。しきしあきよたれては。御もやの御れんあけられて。主上大しやうしにわたらせ給ふ。けんしも大しやうしにをき奉りて。内侍あした所の北むきにいてゝさふらふ。そのゝち大しやうしのひんかしにひらしきの御さに。うけん二帖のうへに御しとねよそひて。この上にて。わきの御せんなとまいらす。御はいせんは女房。やくさうのねうはうはこ上らう。あした所の北むきに北にさふらふ。奉行のしきしをめして。たかみくらの事はくしたるかとおほせくたさるれは。しきしかへり參りて。くしたるよしそうす。ひらしきの御さにて。御そくたいときくつろけさせおはしまして。玉の御かうふりめさる。らいふくゝめされて。大しやうしに主上わたらせおはします。たまの御かうふりにあけのをゝつく。あけの御はうに。左右の御かたは月と日とをいたし。御なをしにはほくと七星をあらはしたてまつる。御むね御袖にはたつののほりたるをぬひたり。あられちの御うへのはかまのうへに。らいふくの御裳をめす。その上に御大そての御はうをめす。御くひかみ御まひもなり。そのうへにたかくひの御小袖の御はうをめす。この色々の御もんは御小袖の御はうにあらはしてうへにめしたり。あかちの錦の御したうつ。はなかたのからの御くつ。あかちのにしきにてつゝみたり。御こしには。御しゆとて。ひらをのしろきをひかせ給たり。左右の御うしろの御わきのとをりに。たんし

ゆとて二すち。御よそろのほとにさせられたり。御まへの左右の御わきに。きよくはいとて玉をつらぬきてつけられたり。御すそにひうちかたのかうかねをつけられたれは。ふけんのことくにりやらめきならせ給ふ。御ちかへには大しゆをむすひさせられたり。たちのひらをのことくむすひたれたり。たかみくらの事くしたるよししきし申せは。やかて行幸あり。御劒は勾當給る。璽はこれのやくなり。右の御わきにまいる。殿下のおほせに。そのしるしの御はこのうへにかけたるあみをゆひにかけつれは。とりはつしてあやまちはせぬそとおほせあるに。御なさけの有かたく。心もつよつよしくおほえて。あやまちなし。たか御くらへことゆへなくまいりつきぬ。とはりあけの役ははくの三位のむすめなり。みやうふ藏人四人。やくの内侍六人。うらこきそはう。こきものゝく。行幸たかみくらへなれは。御さきの命婦四人御さきにたつ。そのゝちかみあけの内侍二人二行にならひて參る。たか御くらの御はしの左右にないしたちとまれは。殿下御れんのやくにまいり給ひぬ。左の内侍まつのほりて。左の御わきより御けんをまいらせをく。御はしをしりそきて。右のしもに内侍のきにつきぬ。女王のしやうそく。二色くれなゐのひとへ。そはうのうはき。あか色のからきぬ。かみあけの内侍は。勾當とこれ新内侍なり。御せんの命婦。

みあれの。いつぬき。宮人。いしかは。

いきの命婦。

はゝ木。さぬき。ひせん。たまかき。

これみなうらこきそはう。やなきのから衣なり。

こせうの命婦。

右衞門督殿。やなきにくれなゐのひとへ。こうはいのうはき。
新左衞門督殿。もえきにくれなゐのひとへ。山ふきのうはき。
新宰相殿。むらさきのうすやうにしろきひとへ。やまふきのうはき。もえきのから衣。
宮内卿殿。新宰相におなし。
治部卿殿。むらさきのうすやうにもえきのうはき。えひそめのから衣。
少將内侍。少輔内侍。まつかされにくれなゐのひとへ。やなきのから衣おなし。
つねの衣のうへに。かいふにからきぬ。かうけつの衣。ひらひたいなり。

きやうれつのあいたの事。

みさきにいきの命婦四人。ゑんたうの左右につく也。しやうちやうの左につく。つきにけんしの内侍二人。左こうたう。右はこれなり。こせうの女房。御うしろにあゆみつゝきてまいる。ことしつまりて。みなみをはるかにみやれは。せちけのはたとて。風にひらめきてたちたり。おほきなるかうはんに。みやうかうやにほふらんとみえたり。こかねのたからすとて。あしのみつある鳥みゆ。しんこんたけうのなかには。日の中にさんそくのからすあり。月の中にはろくそくのうさきありときゝしも。ほんせちあることなりけりと。しんおこりておほえて。から人のすかたともなみたちてはいし奉るに。身のけもたち涙かましく。めてたくうれし。右大臣殿からめかしき御すかたにて。まくのうちよりねりいて給へは。きよくはいのをとかや。みちにりやらめきてひさしく。御たけのたかさ御てんのたかさにもたちをとり給はす。たかみくらにむきてはいし給ふをみるにも。めてたく侍。

ためしなき心ち社すれ君か世のかゝる行幸にけふ仕へつる

とおもひつゝけたれとも。うちまきれぬ。やうやうたいれいのこともゝはてぬれは。殿たかみくらへのほり給ふ。あした所へかへりいらせおはします。御けんしるしの御はこなとも

とのことくつとむ。主上御装束めしあらためて。くわんきよのきになるほとに。この御やす(休)まく(幕)へいらせ給ひぬ。花山院さい園寺殿候はせ給ふ。還御の御きしきくせらるゝほと。大しやうしのひんかしひらしきにてはくこまいる。御はいせんは女房もとのことし。又大しやうしのにしにからゐの御ひやうふをたてられたり。そのにしにて。兩大納言殿御わりこひらき給ふにや。そのやくそうには。五位のしきしよりふちあきよなとみえ侍つ。御せんはてぬれはくわんきよなる。公卿のれち御こしよりてめされぬれは。すさともよせて。またかへりまいりぬ。出車には。一のくるまには。

左衞門督殿。新左衞門督殿。はゝき。さぬき。

二の車に。

宮内。　新さ。　ひせん。　たまかき。

三の車。

新兵衞。　ちふ。　みあれ。　いつぬき。

四のくるま。

少將。　少。　宮人。　いつぬき。

十六日。夜ふけしつまりたるに。せいりやう殿へ月にさそはれて。はなみにいてけれは。大納言殿いけの花のおも影月にさたかに覺えて戀し。こゝのへになる花の色あかてむかしや戀しかるらんとおほゆれと。それにつけても。ふりにし昔は思ひ出らるゝを。わすれしといひしその世のともは。なきもあるにとそひきかへたる雲のうへ草のかけにや思ひやるらん。かゝるなさけのつゐてにはわすれぬ。おほくしのはれんとやいひをきつらんなといふに。舟にのらんとて。池のみきはなる花の下に月のかほのみまほられて。しはしあるに。大納言殿。哀にこの世ならても思ひいつらんやとてあれは。

月にとひ花にかたりてしのふるをまた哀なる人もありけり

つとめて。大納言殿。

年をへてけふをかならす契こし人しもなとか留らさるらん

御かへし。

春をへて變らぬ花の色なれはさこそみし世の友とこふらめ

いつとても哀は絕て有なから忘るなといひしけふそ悲しき

三月廿六日。雲井の花みなちりはてたるに。春日殿へ御ふみのまいりたる御返ことに。花をまいらせらるゝに。少將とのちいさき枝ををりくしてことつけ侍るに。世にありかたきころなれは。はつはなよりもめつらしと思ふに。をりくしぬれはとてやらんめされぬ。やつれぬ花のちきりはいみしけれと。ころはしもとおほえて。花のかへり事。

思ひきやまれなるころの櫻花君かなさけをそへてみるほと

いたつらに散なん花をあはれ〳〵いま一枝とみるよしも哉

又返こと。

なへて咲ころにしあらは櫻花かゝること葉の色もそへしな

雨風に花はおとなく散果ぬむなしき枝をかたみとはみよ

四月十九日。まつりなり。つかひ一條中將さねつくのあそん。皇后宮のつかひはしるへし。

五月五日。軒のあやめもことしはめつらしきさまにふきたり。しやうふの御こしかきたてて。ことにおもしろし。もとへの女官とも。くすたまのしやうふもちてゆきかふ。御くす玉のはなともまいらす。

五月八日。むらさきのゝ若宮より。まつのみとりにしつけてまいらせたり。御はいまたしきほとなるに。御所へまいりたるに。なにとなくきくもやさしく。これをたいにて歌をよみ侍らはやとさたあれは。

むらさきにみとりかへたる姫小松あたし色とや君にみす覽

九日は。小五月の御幸なり。

五月十五日。御はいの御ともに。せいりやう殿

のすのこにさふらへは。花はあとなくて。木く
らきあをはのこすゑもおもしろし。
六月二日。女御まいり。
五日。ろけんなり。御つかひに一條中將さねつ
く。紅のうすやうの御ふみあさかれゐよりま
いらせて。女御の御かたのたいはん所よりろ
く給へる。
六月六日。御とのあふらまいらせてのち。つね
の御所の御えんを新宰相殿ととをるに。むし
のなきそむるをきゝて。新宰相殿。

なきそむるむしの聲をしきゝつれは

とて。しものくもなけれは。

すてに秋なる心地こそすれ

とつけたるを。新宰相殿のこゝちさへするに。
いひたきになんせさせ給ふいかゝ。
おなしき七日。四條人の許より。女御御まいりのめ
てたく。仁治のれいのまゝに。雨さへたかはぬ
もめてたくて。

古へをいまに傳ふる雲の上は雨さへふるきためしをそしる

返ことに。

そのまゝを傳ふる雲の上なれは雨さへそけに時をたかへぬ

六月十六日。月さし出て。空はむら雲たちて。
はれくもりするしも心ありかほなるに。花山
院中納言御ともにて。せいりやう殿にいてさ
せ給ひて。月御らんせらる。皇后宮權大夫まい
り給ひて。舟にのり侍らんと申給ふほとにし
も。大はん所の物ともめしいてゝ。舟にのせら
る。とう院の宰相中將もまいりて。やかて御舟
にまいりて。藏人左衞門のりなをひちりき。權
大夫しやうのふえ。花山院よこふえ。いとおも
しろし。
おなしき廿七日。新王のせんしなり。その日常
盤井とのゝいつみとのへ御わたましに。女房
たち御まいりともあり。いと御人すくなにて

長閑やかなるに。御はいの御てうつもちて。まいりてみいたしたるに。女御のたてしとみにあをやかに藤のしけりたるを。ことしは花さかてすきぬると申せは。このほとさきたるをいまたみすや。うたてとおほせことあれは。さも侍らすと申せは。さてそれはこなたよりみえさりけり。いつふさはかりさきたりき。いつものころにはあらて。ことしもおりしりてさきける花の心もありかたし。

おりしりてかく咲あへる藤の花猶なへてには思ふへきかは

れいのまゝならは。いまはさかりもすきまし。

七月七日。院の御所より。露の御さうしとて。めん／＼に給はりて。歌よみ侍る。權大納言のすけ殿にたつねまいらすれは。御しもにとあり。御つほねをひきあけたれは。この御さうしかけは。北山とのゝ。けふ戀しくおもひいたされてとて。

たきものゝふけし煙の末までもよとせの秋はあはれ也しな

とやかてかへらせ給へは。思ひいての戀しきもかくなれはいとゝ色そひて。

けにやけにいつも星合の空なれとよとせの秋は哀なりしな

待えたるけふもけふ社嬉しけれ七夕つめやけふもけふなる

くれぬれは。きかうてんの火の光り水にうつろひて。けしきことにおもしろし。ことちたてよ。洞院の宰相中將なり。くわいのしるしとめつらしくや。七夕つめもおもひやられて。

手向なく玉のを琴も此秋は七夕つめのいかにきくらん

此秋は七夕つめに手向なく玉のを琴にねもやそふらん

たむけするそらたきものにいかはかり天の羽衣袖薫るらん

權大納言まいらせ給ふて。御かたりあり。前大納言殿ひは。ことは女御の御かたの權大なこん殿。とう院の宰相中將。ふえ花山院中納言殿。はくの少將やすなか。ひやうしあやの小路の少將。御かくはてぬ。心の中しつまりはて

て。月みんといひて。女御の御かたにしのひて
御ひはひかせ給ふ。
七月十九日。くはんのちやうの行幸なり。
廿一日。御けいの行幸。出御の内侍少將少輔
内侍なり。女こ所のないしむまにはのるへし
とて。勾當とこれと命婦四人。はゝ木。かはち。
備せん。ひせん。藏人にみあれのすむつる陰陽
れうにていてたつ。うらこきそはうの三衣。あ
をきひとへ。かうけちのも。こきはかま。むら
さきのさしぬきのもゝたちよりつまをいたし
て。くはんのくつとてはきて。かみあけてむま
にのりてくたる。すかりやにまんをひきて。女
御代の御くるまたてられたり。いたしくるま
色々にみえて。ひんてうさうし車のまへにた
つ。そらたきものゝ匂ひ心にくゝくゆりみち
てなん。
閑院とのゝあとに御さしき七けん。なかのま
は院の御かた。左は皇后宮の御かたなり。もみ
ちかさねのをしいたしみゆ。御所のにしにひ
らいたしきに。むらさきへりしきて。さうし二
人ていしたり。御はしのまにさいをんしの大
納言とのつかせ給ふ。右のかたのかりやに殿
上人ともちやくさしたり。そのしもに北おも
て御すい身ゐたり。きくもみちうへて。御さし
きのきしきいひつくすへくもなし。すきぬれ
は。みちよりおりて。くるまにてしとみやにま
いる。石たて松植たり。主上ようよにめしては
らへとのへなる。くはん御なりて後十三日。そ
のたひにそのおりつら／＼久しからんおりな
とあり。御わきまへはそのおりにてあり。
十一月は。大しやうゑとて。しも月八日女工所
はしめとて。ゆうきしゆきにてつくるか。いま
たいてこねは。ゆうきには神きくはんをもち
ゐらるとかや。しゆきには陰陽れうなり。

八日。月さしいつるほとに。こうたうと一くるまにてゆく。夕つく夜のさひしき影。うちのゝはる〳〵と。霜かれの野へにさはる物なくみえたるもなか〳〵おかしきに。

霜枯の野へにしあれははる〳〵と處えかほに月のみそすむ

さて月入てのちかへる。女工所にかねて十二日とてありしかと。をそくつくりいたすに。十七日より入に。雪うち[ゝ]りて冬こもりたる空のけしきのすこきに。陰陽れうのなかなるに。やしろのみそひとつにみいたしたる。こうたうは神きくはんのつかさの東に。女工所のやたてたるに侍る。これには陰陽れうのうちにいぬゐのすみなり。とくせんをとらぬおとゝい。女官にはつかさとて。代々のくはんと名のりて。れいともひき。きやうしくはん(行事官)にたゝみ(厨)をめいたしてしく。さとよりひやう風さほつしやう(手)のてうと(調度)ともめしよせてしつらひつる。さるほとに日くれぬ。さとより人まいりてつしたてさほつらせなとす。思ひもよらぬほとに御幸ありときゝ。こうたうの所よりこれへ入らせおはします。はれかましくなる女房たち。いくらも〳〵をし入て。いかに〳〵なとおほせらるゝ。さほなるはかまひきおとしてきつゝ。やかていらせおはしまして。衣のかけやう思ひ所あり。幸にこそかけたれとおほせことありて。しつらひやさしなときよかん(御)にあつかる。こよひおとなしき人まいらすは。いかにいかにはちかましからましとおほゆ。木丁なともたてめくらしつ。よく〳〵御らんありて還御なりぬ。めんほくもはちかましさも。をとるかたなくこそおほえ侍れ。さても夜もあけぬれは。くはんよりきやうしくはんとて。いりさふらはんことうけ給はらんと申。大しやうゑのいなのみのおきな。いんこや女とか

や。色々のものゝしやうそくの衣。色々のそめ草花くれなゐなとまいらせたり。かたのことくなれは。女官このちやうにては。みち行かたきしたいとも。奉行の辨なかかぬにふれ申せは。國々へ下地し侍れともいまたさたせす。せめふせ侍らんなと申。きやうしくはんと女官といさかふ。おそろしなからおかし。

十八日には。行幸なる。

十九日。權大納言御つほねへくるゝほとに。

きのふよりちかきたのみは慰むに覺束なくてけふも暮ぬる

と申せは。御返事。

いましかくかき通はせは情こそあひにあひぬる近き驗しに

いまは心つよくおほゆるにつけて。

つれ〳〵はみる心ちせよこゝにいま大内山の暮のけしきを

廿一日は。まいりの夜。ちやうたいの出御に。御つまいたしてなる。女房たち御しりにつきてまいる。女工所はてぬほとは。夜をこさぬことにて。あからさまにまいりて。かねうたぬさきに女工所へかへる。つきの日新宰相殿のもとより。ことのまきれなるにかく。

人しれすやさしくそみし月影もおほ宮人の袖のけしきも

よそにみん物とはかれてしらさりき豐のあかりの有明の月

夜もすから大内山の月影にたちまふ袖をおもひこそやれ

せめてたゝもしや心のなくさむとはこやの山の月を社みれ

をのつから馴し名殘を忘れすは見せはやともや思ひ出らん

かへし。

ありしにもあらすや人の恨むらん思ひ乍らに日數へぬれは

よそにみてさこそきのふは思ひけめ大宮人の袖のけしきを

まきれつゝ忘るらんとや思ふらん心の中にとはぬ日はなし

哀にも心よはくそなかめけるとよのあかりのありあけの月

さこそけに豐の明のもろ人のたちまふ袖もおもひやりけめ

さるほとに。きやうしくわん色々のそめ草まいらせたれは。女官つかさにうけとらす。しるしふみにまかせて。御ちやうのかたひら。いなのみのおきな。いんこや女の裝束の衣。うけと

らするに。そめくさとも。りやうのこくしのもとへつみつかはす。また奉行の辨なかかぬ。とさまのもよほしもしきりかけて御けうそつかはす。行事くはんちきにうけとらせ給へとていてきたれは。さふらひともをいたしてあひしらはするに。心えぬことゝもあれは。女工所のねうはうをはしにいたして。みすのきはへ。かの行事くはんをめしよせて。きぬのすんほうなとこまかにあひしらはせたれは。心えてよろこふといへとも。そめくさの色々みえすして。御所の御りきしやを申て。ところ／＼へつけて。かたのことくせめいたしつ。ころもをとりかさねて。花の色々くれなゐの色々を。ひとへによせててうせさせて。のちにそのいろいろしな／＼にわかちぬはせて。ほとなくさたしいてたれは。行事の辨よりはしめて悦ふ。いまた夜の中に。行事くはんならひに奉行の辨。めん／＼に裝束うけとらす。そのきもつきぬし／＼女工所にいてきて。しやうそくもあり。いなのみのおきなとて。ひん白く髭は帶のもとまてなかくて。年もも〻とせにもやとみゆるにそくたいせさす。これをみて心の中に。

いなのみの翁さひたるひん白し君か千年もかれてしられて

かやうのともから。しやうそきつれたちていてぬれは。たいりより出車給はりまいりぬ。つほねともせはくて。とのゝ御やすまくのにしのらうに。あつまりそさふらふ。

廿二日。ひを〔標〕の山ひく。ひしめく。しやうそくともしてわたしつれは。心やすくてくるれは。くわいりう殿の行事に。こうたうはまいらせ給はす。少將内侍とのとそまいり侍る。くろ木のやにまいる。行事なりて。山陰の氏の藏人またせて。御ゆまいりて。はくの御しやうそくにて莚道しき。神殿になる。御きしき申もをろか

なり。殿いけしよしのをみともきて。神殿に内侍もまいるへかりしかとも。かたてかはりて。女二所のならてはまいらぬことなれは。ひとりしてふたつのことをつとむへきにもあらすとて。これにとゝまりて還御なりて。又御ゆをめして又なる。殿はたひ〳〵御まいりありて。されともまた御歸ありて。還御のほとに御むかへに御まいりあり。ほの〳〵と明行にみれは。こしばあちこちおほくゆひまはして。くろ木のとりゐあまたたてたるめつらかにおもしろきに。かゝる公事の御けいきをみのこしたらましかはと。さはりなくけふまてのことみつるもうれしくてありかたく。ことはてゝあふへきにもあらす。

君にかく契り有けり畏くてけさの御ゆきにかくてあふ身よ

還御なれは。夜は明はてゝ日さしいつるほとに。風もしづかに。さし出る日影ものとやかなれは。

御幸なるけさとや峰に出る日も常よりことに影ものとけき

ゆふきしゆきのせちゑ。とよのあかりのせちゑ。ことになこりおほくおほえて。ゐたいのらんふ。ほの〳〵とするほとに。こゑはかりきく。ゆふきしゆきとよみしに。かはる〳〵かみあく。とよのあかりのせちゑはてかたに。まひひめのほか大うた所うたふをそうす。まひ人樂をそうす。まひことのもとはてゝ。よことのそうとて。さいしゆたてあかしの光りにみれは。をみのしやうそくことにうるはしく。こはこはしけにしやうそきて。はいしたてまつるをみるにも。

すへらきのやを萬代と祈るらし天津ひるめの神そしるらん

と思ひつゝけらる。ことはてゝ。たかみくらよりあした所へなりぬ。せいしよ堂の御かくらは御代のはしめの御いのりなれは。ことに君

もしんも。御神事にてもてはやし給ふことなれは。そさの人かねてより。その人々とさためられてみなまいりぬ。御かくらの御しやうそくはてゝ。出御（主上）なりてはしまりぬ。もの〻ねすみのほりて。けんしやうの御はちをと。ことにひゝきのほりて。わこんのしらへ。もとすゑのひやうしにあはせてかきなす。おもしろくやさしきに。ふるめかしなと申もをろか也。八そちにあまりたるさねたか（實清）の二位の聲の色。むかしゆかしくおほゆ。とき〳〵きえ返て。としのしるしとかすかなるおりにも。けんしやうの御はちをとにまきれて。おもしろくやさしくきこゆ。やう〳〵御かくらもはつれは。空もあけぬ。神きくわんもことにちかけれは。なうしうし給ふらんとおほえて。心のうちに。

君か世を千世の初といのる哉神のつかさのちかきたよりに

御神樂はてぬれは。人々ろくたまはりていでぬ。をみのすかたあくる日影にかゝやきてやさしくみゆ。

山あゐの色やこほりにみたるらん日影うつろふをみの衣手

そのゝち御せんのめし。あした所の南おもてのひろひさしに殿上人まいりて。まひのゝしるものゝまねなとするに。なにをもよくさうするいままいりめしいたしたれは。馬をよくさうして。この御馬はかさおとろきやし侍らんと申せは。いしくさうしたりとて。しう人わか身さうせよといふに。かみはなにこともめてたくわたらせ給て。つねに御からかさおとろきや候らんとさうしたりしもおかしう。其のぶもとの中將久しくたいりさまへもまいらす。いかにとなりたるやらん。いとおし。

正月元日の御きしき。つねのことし。

二月五日。大原野へたつ。かつら川をわたるにみれはみの時になりぬ。ゝまいくたひかかく

これをとをるらんと思ひて。

久しからん君か世なれは我もかくて今幾度かこのせ渡らん

にし山といふ所になれは。あはれにいとおしくおほしいつらんといひしあまのすみし所。いまはなくなりぬ。むかひの明神ちかきほとにて。つねにまいるといひしか。思ひいつるよりあはれになつかしくて。

なつかしむ心をしらはゆくさきを向の神のいかゝみるらん

さて大原野にまいりつきぬ。辨としみつ。しやうけいをそくて。かへさくれはてゝ。みちたとたとしきに。夕つく夜かすかなるに。くるゝままにすこし光もさしゆけは。

夕つくようすき光りを待出てみちのしるへもなかめてそ行

二月十日。春日のりんしのまつりにたつ。此きはしめたることなれは。おもしろく嬉しくて。とりのはしめになしはらにつきぬ。ねにもやなりぬらんの程にそ宮にまいる。ふけたる月の木のまよりみえて。庭火のかけ神さひたるふえのね。ひやうしのをともすこく。まひ人のたちまふけしき。光を神もいかにとおもしろくめてたし。

君か世にかゝる光の色そふる神の心もおもひしられて

ことはてぬれは。なしはらへかへりぬ。つとめてにちと入たうなとして。京へまいりつきぬ。

三月九日夜。せいりやう殿にむしやまいりて。つねの御所へまいらんみちを。藏人やすよにとひける程に。にけてかゝること申せは。御所は中宮の御方にそわたらせおはしますほとに。つねの御所へ。中宮くしまいらせてにけさせおはしましぬ。女つとひしめきのゝしりて。とく女しゆ（孺）火をけちて。けんしやう（玄上）とりて。これと申せは。手さくりにうけとりて御所にをきつ。夜のおとゝへけんしとりにまいれは。人のとりいたしまいらせてみちにあひたり。せ

けんそのゝちひしめき。大ばんのふしひしめく。おそろしきことゝもいてきぬ。せいりやうてんけかれて。御所もあくれは春日とのへなる。とりあへぬことなれは。御ひきなをしにて。ようよにてなる。供奉の人々ちよくいなるすかたにて。めつらしくこと〳〵しき。常よりもおもしろくて。

十九日。とみの小路殿へ御くそくとりくして。花山ふきおりくしてまいりたるに。權大納言のすけ殿。

なかめこしたゝ人つてのひと枝に花も哀やそへてみゆらん

返しに。

おりてみるこの一枝の哀より殘るみきはの花そ戀しき

君しかく殘る木末なとへとこそつねより花の色もふかきは

藤の花にさして。

人しれす心になれてみし藤のたれまたれとも時なしりけり

みな人のおりて。木するの殘りなくときけは。

君まちてちらしと花や思ふらん誰なさけなく折やつすらん

大納言殿さくら木につけて。

折てみる人の心のなさけよりみきはの花の色そそひぬる

又中つかさ。

思ひきやまちし軒はの櫻花たゝ一枝なつてにみんとは

いかにまたみるに哀の色そひて咲殘りける花のこゝろよ

一枝もおりてみせすは櫻花たゝいたつらにちりそすきまし

此花を一ふさ。あつまへ行たる人のもとへ。ふみの中に入ておなしくやるとて。

東路のみちのおくにも花しあらは雲井の春や思ひいつらん

返し。

いまさらに哀そまさるこの花のおなし柎なゝかめてしかは

三月廿日。夜雨ふる。中宮大夫殿かくらをうそふき給ひて。せう〳〵たるくらき雨のまとをうつこゑと。くちすさみ給ふ。ゑ物かたりにかきたらむことを。きくやうにておもしろし。雨風もともにはけしけれは。

物ことに哀れすゝむるけしきにて秋とおほゆる雨のなと哉

あくる日。せいりやう殿のかたに。大納言殿へ御ともに三人いてゝみれは。雨風に花はあとかたなくちりて。すのこにしろくちりたり。

よとゝもの雨と風とにしほられて軒端の櫻ちりはてにけり

大納言殿。

おりしもあれ花散比の雨風ようたても春のすゑにふりぬる

四月十四日。松尾へたつ。おほぬさにあふひをくしてくるまにいる。かもならて又あふひはありけりと。けふはしめてめづらしうおほえて。

待わひしその神山のあふひ草又ゆるすよの神もありけり

大納言殿の御つほねへ。まつかひありて。たゝいまの郭公のなき侍りつるは。もしおなし聲をやきくとて。

今なかん聲なしきかは郭公なしへやりつるはつれとはしれ

御返に。

君か宿にまつかひありて時鳥うらやましくもなきてける哉

いかにくあはれときかん子規いましもおなし聲と思はゝ

雨はるゝ空にのとけく詠めしてまつらん程そ思ひやらるゝ

やまひわつらはしくて さとに侍るに。新宰相殿。

もろ共に詠めはとのみおもほえてけさの雪にも君そ戀しき

返し。

さこそとそ思ひやらるゝ降雪に我も君なしおもひいてゝは

哀也おもひいてつゝなかめつる時しも人にとはれぬるかな

正應五の二月まてつほねに さふらへは。いよいよやまひおもくて。さとにいてたるに。三月つこもりにちりたるはなに かきつけて。新宰相殿。

ちる花のなこりのみ社歎かるれまたこん春もしらぬ我身に

返し。

ことしはた花ふく風も厭はれす唯我身なもさそへと思ふに

右中務内侍日記以扶桑拾葉集挍合

群書類從卷第三百二十五

日記部六

堯孝法印日記

文安三丙寅年正月一日。天氣悠然屬二陽春一。としとしの例にまかせて。五條の社頭にまうでて。講はべりし三首。

社頭春

まもれ神道ある御代の身の春にあふをかしこみ猶そつかへむ

社頭松

いく春もまつのことのはまつの春手向かされて神を仰かん

社頭祝

ことし猶道をもたてゝ宮柱ねかひのまゝにみかきそふへし

方陽景鮮七社法樂歌。

八幡

八幡山はるをかさぬる春にあひてかすそふ神の惠をそしる

玉津嶋

道しあるよに白ゆふのかけまくもかしこき神を猶そ仰かむ

北野

心さへひらくる梅の色香をそいとゝきたのゝ神にたむけん

住吉

すみの江の松の惠のかしこきは道につかへて猶そあふかむ

祇園

猶守れ神のそのふをその〔マヽ〕ゝまゝに殘すは雲の道もたゝしく

稻荷

稻荷山たちそふ杉のふかみとり霞になひく春風そふく

日吉

神の名の日吉とけふをかそへても春の手向や千世もかされん

及二深更一講頌。讀師予。講師春喜譽君。法樂以後。古今集披覽。序春部上。於二神前一讀レ之。勤行及二數刻一。終夜不レ一睡一。美乃國眞桑庄。爲二本領一舊冬令二還補一。仍一昨日御下知。御施行等拜領之時。細川右馬助入道家へ申侍し。

仰く哉みのゝ中山のまつかひも有ける御代の道のめくみを

返し。其日世務繁昌忩劇無レ極侍るに。即返しを殊更書状にそへて。申たまひはへる。

立かへるみのゝ中山の松のたね猶さかふへき千代の行すゑ

只今の贈答。上世をはちさるよしなと申侍き。今日また管領職の佳躅にて。室町殿御女中方々の御あひしらひ。さいはひなともかきりなく侍る中に使あり。一昨日の返歌下句。さかふる道のすゑそはるけきと侍らんことはいかゝ。もし此方まさり侍らはこれに治定したく存よし示送らる。道と云文字ことに金言のせ申て。此下句に定む。今日殊吉日にて侍れは。會始の題を出すへきよし同被二相示一。仍庭松契久と云題出レ之。三善常房。飯尾彦六左衛門。来て祝詞をのふ。典厩音信之義なと。此道繁昌時いたり侍るよし申て。様々祝かしこまり申き。

三日。寒嵐吹二雲霞一。晩頭西天にむかひて繊月を拝に。霞いとふかくてさたかならす。

夕くれの月はそれともみえわかて霞に匂ふ遠方のそら

今夜修正之儀能願。

四日。漢雲遅晴。民部少輔。顕経。下総入道。素欣。三善元秀。宮道親忠以下ひねもす人々来。

五日。天気快晴。叙位執筆師郷。

神も猶光たちそふ春きぬと空にしめゆふあさかすみかな

今日も日くらし人々来て述レ祝。眞桑庄申沙汰之。奉行三善為教もとより。

ふみ分し末あらはれていにしへに又立かへるみのゝなか山

と申侍し返事に。

いにしへに返るもうれしなに高きみのゝ中山道もたとらて

六日。寒風吹レ雪。又まうてゝ。

世を祈り道を學に春をへてはこふあゆみは神もうくらん

入レ夜深雪。

七日。雪のうちに参詣して。

ふる雪は袖にさゆれと神の為春の野に出て若な摘なり

八日。出仕以前夜ふかくまうてゝ。

長閑にと君かみかけを祈るにも神に夜深くつかへぬる哉

方々参賀毎春のことし。晩頭三善常房来りて。一續張行せしに。

歌闘

九日。白雲散亂。つとめて又まうて侍り。

この神に霜をいたゝき雲を分つかへまつりて年ふりにけり

沙彌素欣もとにすくにまかりて。三十六首うた讀はへりしに。

春天象

のとかなる岩戸のせきの明方に霞吹こす春のはつ風

春人事

夢ならて結ふへしやは春のよのねよけにみせる草は有とも

秋人事

月をめて露をかなしふよなよなもつもれは老の秋と成ぬる

冬雜物

こきかへりよゝのみきはの跡とめよわかの浦半の雪の友舟

戀地儀

たのみこしいなはの山のかひ有て今かへりくる契をそしる

今度還補眞桑庄。稻葉山程近し。仍爲二逸興一如レ此詠之。但彼行平中納言の古歌は。いなはの國のいなは山也。同名たる計におもひよせ侍る。不レ可レ有二混亂一事也。

人數。正徹禪師。下總入道素欣。沙彌常勳。正晃。知蘊。藤原氏世。此外一族等少々。鶴丸。

十日。又まうて侍しに。昨日夜に入て會はてゝかへりしに。夕月夜其興侍き。今朝うす雪ふりて春の空いとえんにおほえけれは。六條殿。左女牛。五條天神。因幡堂。三條八幡宮なと巡禮。

さえかへる夕の月の面影もわすれぬけきの春の雪かな

十一日。七日參今日にみちぬると申上。年始のかゝみなと奉りて。

いく春も猶あきらかにてらさなん千代の鏡を神も守りて

十二日。讀經稱名如レ常。

十三日。此亭月次三首會始に。

霞知春

のとかなる春の心のしる人と空になれきて立かすみ哉

松殘雪

猶殘る雪さへあかすうす綠なひきそめたる春の松かえ

寄神祝

守るてふ道につかへて神も猶光立そふよをそ祈らむ

當座五十首に。

朝霞

あまの戸を明る光は霞にてはる日のとけき御代にも有哉

稀戀

誰にかは思ふ契りをわくらはにとふこそつらき心なりけれ

浦鶴

和歌の浦にあまたむれゐる友鶴の數々契る千よの行末

人數。出題予。讀師同。講師寳能。中務大輔。春喜譽丸。民部少輔顯經。法橋長全。法橋經長。圓雅。散位爲數。沙彌常勳。沙彌元康。藤原重隆。源貞信。藤原正信。沙彌智蘊。藤原經俊。宮道親忠。宗順。念阿。以上廿二人。

十四日。讀經稱名如レ常。自二寳池院法印御坊一。法樂二十首題御所望。則注進了。長全法橋二十首題所望。同染筆了。自二方々一和歌添削事申。

十五日。勤行如二毎日一。無二他事一。心靜吟二和歌一。唱二稱名一。

十六日。朝天參二室町殿一。御いのりの義被レ申。大方殿同卷數進入。晩頭人々來て。五十首歌よみ侍し時。

鶯出谷

たれもみな出つかふよの春とてや谷にのこらぬ鶯のこゑ

遙尋花

みよしのもたつたの奥も猶あさし心のはなの道そはろけき

名所鶴

むしろ田のつるのよはひを敷嶋の道に友なふ人そ契らむ

題予。讀師同。講師春喜譽公。

人數。忠詠。春喜譽公。素球。太平入道。知安。安田入道。元康。内藤入道。圓雅。紀元盛。安田勘解由。源久國。常繼。遠イ矢野入道。藤原元康。内藤。紀元家。安田。常安。奥州入道。堅有。在岡入道。三善元秀。高安。藤原元賀。源元仲。橘元家。矢野。興阿。以上十八人。

十七日。勤行如レ常。每春之例にまかせて。七所にて御百度つとめ申せし。

十八日。三善爲數もとにて。月次會始に。

都早春

雲きえぬみ山もとなくかすむより都の野へに春そしらるゝ

梅薫風

匂ひくる風さへうれし梅花はるにあふみのそてにつゝまむ

寄世祝

いにしへのたゝしき道を其儘に今も行なふ御代のかしこさ

當座十五首に。

鶯告春

のとかなるよのしるへかも鶯のさへつりそむる春のはつ聲

門早蕨

誰かけさ早わらひあさる春きても寒き岡への霜のふりはに

契戀

かはるなよたのめしまゝに聞えくる入逢のかねは僞もなし

欲顯戀

いかにせんうき身とかむる犬かみの床の山風たのみ難さな

海村烟

もしほやく浦はも民いかまとゝや賑はふ烟たゝぬ日もなし

題予。讀師同。講師貞基。

人數。愚詠。永祥。飯尾肥前入道。時纂。左京大夫。圓雅。貞基。布施民部。熙〻。齋藤上野。源持子。冨永修理亮。爲數。常勳。貞秀。以下數輩。

十九日。中龍上人來て。觀經講讀。信心銘レ肝。終日勤行無二他事一。男山へ進二代官一。

廿日。畠山修理大夫入道。賢眞。家にて。月次會始に。

初春松

今日しこそ千日にかさせ春にひく心をたれの松のことのは

對花

なをさりにいひいたすへき色そなき見る花の陰聞とりの聲

霧

夕つくよさたかにもなき松のはに猶霧まよふ秋風そふく

擣衣

秋さむき淺茅かすゑの麻衣夕日かくれの霜にうつなり

名所關

ふはの山關の坂屋の板ひさし久しき道もあらはなるよに

旅

故郷にかよふはかりの道も哉すゑもつゝかの夢のうきはし

出題飛鳥井中納言入道。讀師同。講師宗砌。

人數。飛鳥井。亭主一宮左京大夫。予。正徹。春日三位入道。畠山次郎。圓雅。賢盛。常勳。心惠。正晃。忍誓。常佐。智蘊。宗砌。以下數輩。

愚詠中霧歌及二披講一之所に。題一首不足。俄可レ詠之旨。題者密々被レ申之間。馳レ筆了。講師宗砌。初春之松ヲヨメル和歌と讀上。〻中斷腸。賢盛神樂歌に。梅かえうたふと詠也。催馬樂也。

廿一日。兵庫助貞親もとにて。月次會始に。

初春見鶴

春くれは花さく色をまな鶴の千代のすかくる峯の松かえ

當座三十首に。

霞春衣

いく春を空に□の衣手もつらね初ぬる（此會初度出現）千代の行末

祈久戀

つれなくてもとのみしめは朽に鬼吏に靡けとかけや初まし

名所松

今日よりそみきと語らふ武隈の松のもとたち床しかりしを

兼日題他人。當座題予。此會自二今日一出頭之間如レ此。臨期之義也。

廿三日。一色左京大夫教親家にて。月次會始に。

竹遐年友

言のはの花にもなひく千代のかけを窓に友なふ春のくれ竹

當座五十首に。

野雲雀

夕日かけ遠方のへは長閑にてあかるひはりの聲のひまなき

寄木戀

思ひのみこりつむ事をやくにして苦しく辛き螢のもしほ火

名所鵜

かへりきて結ふもうれしたつのすむいつぬき川の古き流を

思往事

しきしまの道にいらすはさのみかく思もいてし代々の古事

出題予。讀師同。講師智蘊。

人數。修理大夫入道。賢真。亭主。正徹。三位入道。常閑。沙彌周道。三上入道。圓雅。正晃。常勳。近藤入道。範盛。三上右京亮。貞爲。賢盛。智蘊。時阿。壽阿。常佐。

廿四日。細川右馬助入道道賢家にて。月次會始に。

庭松契久

宿にしる松のよはひの思ひ出を八千よの色に契るはるかな

當座五十首。

題闕

をしなへて人の心のなひくよを空にもみする朝霞かな

閒戀

いもせ山中なる川をいかにせん吹こす風はきゝわたるらん

神祇

かしこしな神の心もすなほなる道にまかせて現はるゝとは

題者予。讀師同。講師三善元秀。

人數。管領。亭主。正徹。治部少輔。氏久。下野入道。常忻。中務大輔。持経。僧都長算。遠江守頼益。天竺持宇。賢秀。常勳。近藤伊與入道。素球。太平入道。智安。安田入道。元康。内藤入道。橋元吉。釋庭。藥師寺

元明。元盛。安田勘解由。以下廿餘人。
廿五日。三寶院門跡にて。社頭祝レ君と云事を。
をのノ\よみはへりしとき。
この門は神のみむろもひとつにて老せぬ君そ千代を迎へん
當座連歌百韻あり。及二曉天一退出。
廿七日。沙彌元康來。自二典厩一勅撰清書事談
合。爲二往來一云々。
廿九日。任大臣

二月一日。勤行如二每朝一。太政大臣家より。正月
分百首歌の内。題五首給り侍りし時。

春山
春の日の名におふ神も峯高き君かみかけに光そふらし

秋河
誰か今あその河原にふむ石の數もたとらて月をみるらん

秋社
よや寒きいろやはうすき衣手の杜の露霜置まよふ頃

冬風
ねくらとふ鳥もうかるゝ聲す也木からし寒き夕くれの空

蕣花園の難波の梅盛に侍し時。細川右馬助
入道のもとへ。一枝をくり侍し次に。結ひ付
侍し。
この花はなにはたかつの高きよに及ふいろ香そ知人にせよ

返し
ことのはの花もたかつの梅かゝにふかき心の色そしらるゝ

十七日。兵庫助貞親もとにて。月次の三首に。

夕春雨
かれの音は霞のよそにくれはてゝ春雨近し軒の玉みつ

名所花
いもせ山にほへる花の瀧津せは中に落たる聲もむつまし

祈身戀
うかりける我みの程に初瀬路の苦しかれとて祈りやはせし

當座三十首に。

春夜
心ありて花をはよきよかすむ夜の月のかつらをしほる春風

春杉
春をへて又おひそふもふる河やいつれむかしの二本のすき

春衣
あま人もしほなれ衣ぬき置て霞やかつく春の夕なき

春懷
身にはたゝ老の涙のみ數そひてみしよの春そ立もかへらぬ

題者予。讀師同。講師親忠。人數如二先月一。
十八日。三善爲數もとにて。月次三首に。

河柳
青柳のはるのかけとや立田川からあゐくゝる水のしらなみ

春月

のとかなる光は空に猶みちてかすむともなき夜半の月哉

忍戀

□□うき身しのふのあさ衣たゝうらふれてよをやつくさん

廿三日。實相院准后住吉にまうて給て。社頭の松の枝につけて。神前にて思ひつゝけ侍るとて。給りし。

道にめくむ神の心のしらるれはわきてそみする千代の例を

御返し

あふきみる千世のためしに道を思ふ神と君との惠しるしも

廿四日。一色左京大夫教親家にて月次三首に。

歸鴈

こしちをはおもふかたとて行鴈の鳴れまかはぬ春のよの空

初花

さほ姫の今や手にまくいと櫻吹とく風もにほひそめつゝ

契戀

草の名のさしも人やは思ふへき我はいふきのやます忘れす

當座五十首歌。

早蕨未遍

雪消るたるみのうへはもえ初てまた春しらぬ谷のさわらひ

夕落花

けさまては花にいとひきふけやたゝ夕への雪の庭の春かせ

寄枕戀

うきなのみたかせの淀にさはく也いつ薦枕かはしそめまし

雲浮野水

そことなき野澤の末の雲水の浮てたゝよふみにこそ有けれ

水江蘆

みさひさへふるきほり江の蘆のはの昔もなひく浦風そ吹

題者予。讀師同。講師壽阿。人數如二先一々。

石清水社に奉納のためとて。細川讃岐守すすめ侍し五十首に。

梅薫袖

さくむめに神の昔をおもへとや今も匂ひそみつの衣手

聞時鳥

時鳥初音かたらふ枕こそ老のねさめのうさもわするれ

早秋露

秋のくるかたのゝみのゝ白しはに馴てをきちる露やまさ覽

浦千鳥

和歌浦にもとよりかよふ濱千鳥猶みちありてなるゝよも淺

祈身戀

長らへはうきみしめさへかくて社くちぬ契りの限をもみめ

三月八日。細川右馬助入道。道賢。家にて。月次三首。去月の分なり。

浦春月

霞さへおほふかた枝にもる月もえならぬ春のおふの浦なし

山寒花遲

さえかへる袖ふる山の朝ほらけいつか櫻の雲にまかはむ

洩始戀

いつしかと板間もとむる初時雨さそなくたさんれやのさ莚

當座三十首に假名題。

今日の子日の

みち廣き千代のためしに引初つ今日の子日の松のことのは

梅のにほひに

やとれ月梅のにほひにかすみても又光そふ花の上のつゆ

春のくれかた

をのつからなかき日影にまとゐして心のとけき春の暮かた

題者予。讀師同。講師元秀。人數如レ先。

今日吉日之間。福壽。典廐養子。管領弟。はしめて物をならはしそむへきよし。申され侍し程に。詠歌大概はしめつかた。仍子日の歌其意趣をあらはし侍り。二十首之題をさくりて。

夜思花

櫻花明行いろやいそくらん月さへにほふこよひならすは

十三日。蔡花園にまうてゝ。法事の後。御室木寺の神殿なとの花を。只獨眺望して。

たくひなき色をしるへきうき身さへ獨み山の花のかけ哉

十四日。黒谷の花のもとに。三寶院門主をまちたてまつる事有て。寳池院法印皆門下人々。ひねもす花にむかひ侍し時。

夕日影うつろひけりなけさの間に思ひ立にし花のしら雲

十八日。三善爲數もとにて。月次三首に。

遠尋花

みよしのもあさき山路に分なれぬ花ゆへしけき春の人めに

花下友

なれにけりあかぬ一木の花の陰哀いくよの契なるらん

旅宿

やとりをもいさをもとらぬ旅なれや手向も同し花の下ふし

橘元吉 藥師寺四郎左衞門すゝめ侍て。崇德院の法樂百首に。

子日

子の日せし春もわすれぬ松山の神やむかしに心ひくらむ

盧橘

よをへてもそのことのはに立花の匂ひ殘れる陰はむつまし

七夕

あまの河よりくる涙のたま〳〵も逢瀨にさへや心くたくる

落葉

露霜のそめぬ涙も夕くれのおつる木のはにいさなはれつゝ

佛名

さよもはやたけの燈火更にけりとなふる御名や殘りすくなき

初戀

おもひしれはつとやいてしわか鷹のなれぬ絲に通れえぬよな

祝言

入すみしるそのかみたかき恵もてやすくや四の國守るらし

出題予。

太政大臣家月次續百首に。

三月三日

今日とてや流れも清き水くきに取かはすらん花のさかつき

立秋

秋はけさたつの市人いつしかと露もうるほす袂なるらむ

爐火

いたつらにねやの埋火かたらひて窓の光をそむくへしやは

山

たかきよに風の姿も立かくれふしの煙のたえぬ道とて

親王

ことのはの花そふ竹のその影や草にも木にもあらて匂へる

廿八日。一色左京大夫教親家にて月次三首に。

水邊躑躅

涙よする礒の岩ほに咲つゝしあまのたく火のかけかあらぬか

山家暮春

この頃はいつち行らん山にすむ山人さへに春をしたひて

鐘聲何方

ねぬる夜も夢のたゝちも鐘の音もそこはかとなき曉の空

當座五十首。

暮春天

空にたゝ霞の關しまさしかれくれゆく春はとめあへすとも

暮春礒

たえ〳〵にかすむ礒への夕附日みらく少なき春のかけかな

暮春車

小車のめくる日數に春も哉花の錦のひもはたゆとも

暮春旅

我のみそなく峯こゆる行春の鳥は空路にかへるゆふへも

出題予。讀師同。講師壽阿。人數如二先々一。此會果て。沙彌智蘊庭の藤盛に侍しを。立よりて見侍るとて。人々一首のこし侍し時。

かへるさそいとゝわするゝことのはに心をかくる松の藤浪

廿九日。橋元吉人のすゝめ侍るよし申て。三十首題所望せしに。同よみてつかはし侍し。

初春霞

春といへは猶のとかにて天津空限しられす立かすみかな

契待戀

こよひたにいつしかかはる心哉更るまてとは契らさりしに

曉遠情

老の涙よるのね覺の枕にはまつかよひけりわかのうら風

親元等をかきならす。

同日。智蘊夜前一座難レ忘侍るよし申て。

松風ににほひし花のいろ〳〵そ面影にたつ宿のふちなみ

返し

色そふる君かことはのはなゝくはしほれやはてん宿の藤浪

四月一日。勤行如二毎朝一。

三日。石清水にまうてゝ。六首歌讀て奉りし時。

春朝

白雲のはなに朝ゐる朝ぼらけ雪さへにほふ春の八重山

夏夕

月をそく出るかたの夕くれに聲も雲間の山ほとゝきす

秋夜

遠方やかはせの浪はみえわかて月そいさよふうちの山さと

冬曉

冴にけり明るむかひの里かくら霜もをかへのさゝうたふ聲

戀心

かきりなく塵ならぬ名も立やせん空にしめゆふ心つからに

神祇

石清水あふく心のともかゝみ猶もかゝみて神そまもらむ

おなし時紀元盛參籠して。廿首うた法樂申はへりしに。

首夏朝

歌闕

祈逢戀

今そしろいのれはかなふ理になひくみしめのむすふ契を

曉更鷄

時をしろ八聲のとりもおさまれる御代は今とや神に告らん

題者予。讀師同。講師元盛。巳刻參二神前一。酉刻歸京。其間に於二橋本坊一法樂。當座遂二講頌一了。

七日。三善爲秀飯尾備中守もとにて。はしめて三十首歌よみ侍し時。庭躑躅賞翫。

首夏

夏きてもさゝれに匂ふ岩つゝし八千代の春を殘すとそみる

早苗

つくはれの茂き惠にあふ民やすそはの田井に早苗取らん

鵜川

月はゝや入ぬる西の河よとに山あひ出るうかひ火のかけ

契戀

我方にあたなる浪はこされとも淚せく袖や末のまつやま

久戀

契しも袖ふる山のためしにてけにみつかきのみつからそ憂

水鄕

たちかくれよろつの道もさゝ波や大津の宮の深きためしに

十七日。伊勢兵庫助貞親もとにて。月次三首歌に。

賀茂祭

いつまてそいつきの宮の宮人もけふに葵をかさしけんよは

薄暮時鳥

れくらとふ習もしらてくれ行は猶ゆくかるゝほとゝきす哉

寄雨戀

なをさりに侘つゝれんにかこちしや月に慰む雨のかれこと

當座三十首に。

郭公頻

此ころはもりの雫のをちこちに鳴ぬ日もなきほとゝきす哉

名所鵜川

かゝり火のいさよふ涙にしられけり夜河更ゆく宇治の山本

述懐非一

ことのはゝ心のたねもつくは山分る道にはかけ茂くして

時阿去月をこたり侍しを。同しく張行せしに。

雲雀

あさゆふにあかる雲雀の心さしわか道芝にいかてまなはん

遅日

色にそむ心のはなの咲ちるにのとけき春のかけそ忘るゝ

懐舊

郭公しのひねそへてことつてんみしよの人の行ゑ知かも

廿一日。畠山右馬頭入道。仙室家にて三十首歌讀はへりしとき。

庭新樹

歌閫

廬橘薫枕

匂ひきて夢はとまらぬ枕にも過し昔を殘すたちはな

峯照射

さ月やみはかなき鹿のよるほとそ哀に峯のほかけいさよふ

立名戀

あふにしもかへぬ思ひの唐錦立まくおしきなのみふりつゝ

相互恨戀

覺束ないつかたよりかくゆりけんつらき二見の浦の藻鹽火

雲浮野水

朝雲のまよふ野さはもよそならぬ庭の清水の面影にみゆ

出題子。讀師同。講師壽阿。

人數。正徹。亭主父子。素欣。智蘊。壽阿。

廿四日。祭の日。智蘊もとより。かつらの枝に付て申侍し。

ぬるかうちに神のみせける花そとはけふの翳しに思合せて

夢に。八重櫻を鉢にうつくしくそたてたるを。よかもとへ人のたひたるを。これかれめまたきて。みはやしもてあそひ侍るよしおほゆるとて。如レ此申云々。

返しあふひに結ひつけ侍き

夢のつけあふひを結ふ今日さへに心かけける程そうれしき

廿五日。一色左京大夫家月次三首。

山新樹
きのふかも榊とりしは御影山そのかけわかす茂りあひぬる
暁時鳥
心あれや暁おきをもよほしてあかすかたらふ山ほとゝきす
立名戀
うかりけゐなたかの浦に迷ふ哉扨なひきもはかつくよもなく
當座五十首に。
急早苗
はなみんと春もいそきし櫻田に又はつ苗をとりやそめまし
野徑夏草
いにしへの水の心はえもしらす茂る野中に草や結はむ
寄海人戀
心あるあまとなりてもいつまてかつれなき人をまつか浦嶋
湖水眺望
さゝ浪やよるとてかへる海人もなし月にこき向ふ興津嶋山
夕聞法
いほしめて聞は夕の涙の聲ふかき御法にかよふなりけり
出題予。讀師同。講師壽阿。人數如レ例。畠山匠作二月以來無二出現一。依二違例一也。會之間に園の豆をおりいたし候侍しかは。人々こほれくふ。俳諧に紙のはしに書付侍る。
しき嶋の道のすさひにひろひくふことはの園の豆にも有哉
廿八日。畠山修理大夫。賢良。家にて月次三首に。
卯花處々
花さきぬむかひの里のうつき原わかすむ方も同しかきほに
對月待郭公
時鳥なれもかたらへ小夜深て月待出る有明のころ
來不留戀
うつりゆくかりそめふしのさゝ枕一夜の夢も結ひはてなて
當座五十首に。
子規何方
ほとゝきす聞そ定めぬ鳴こゑも一村雨の雲まよふそら
寄星戀
やとりきてなかるゝ星の影もなし涙の床の暁のそら
松作友
としへてもなをき心のしるへとや松のみさはなさして契覽
徑苔
いかなれはたもともいほも通路も深き契りの苔におるみそ
心靜延壽
しき嶋の道に心のいる人そ老ても和歌の浦にともなふ
題者兼日飛鳥井中納言入道。當座予。讀師同。講師壽阿。人數如二先々一。

玄與日記

文祿五年七月十日。薩州鹿兒嶋より近衞前左大臣信輔公御歸洛也。黑齋玄與令二供奉一。御船海上に出れは。鹿兒嶋の僧俗船にのり。御なこりをしたひ送り奉りぬ。十日之曉景に。大隅濱之市に御着船。則相良善右衞門尉所。御旅館になる。明る十一日。龍伯館にて御歌の會を申すすめらる。

兼題松蔭新涼　杉
立かへる名殘こそあれ松蔭はすゝしき秋のやとりと思へは
龍伯
暑日の影も忘れて馴なるゝ松の下枝に秋風そふく
近衞殿　長治
問よるもかはらぬ友と松蔭にかたらふ秋の袖の涼しさ
玄與
枝しけき松の下露落そひて衣手涼しあきの初かせ
當座早秋月　杉
見る程もまたみしかよや秋といへは月にあかなき初なる覽
薄露　龍伯
行袖をむすひもとめよ糸薄末はの露は玉とちるとも
夕鹿　杉
狩人のゐるやもゆるた哀しらは妻こふしかの夕暮の聲

隣擣衣　幸侃
聞馴て近き隣のきぬたさへ更ゆく空はかすかにそなる
河霧　杉
秋風にまほひく船の行衞にやわけていらまし淀の河霧
籬菊　珠長
ゆるされぬ籬のうちの菊の花たゝ咲こすなよそにみよとや
嶺紅葉　玄與
みる人の心は行て手折ぬもかさしになれる嶺のもみちは
寄鏡神祇　龍伯
神垣のうちゆたかにもうつし置心やよゝの鏡成らむ

此外御會之人數十五人程侍し。晝よりはしまり。深更になりて御成就也。十二日には御座敷能あり。十三日には秋月入道宗闇舞臺にて。能九番興行なり。十四日早天にめくりへ御船よりうつりおはします。幸侃假屋御旅所になる。十五日はめくりへ御逗留。十六日に庄内の渡川なりぬ。龍伯庄内まて送り給ひぬ。十九日幸侃宿所にて御當座の御歌あり。折節草花座敷に侍れは。

小男鹿の音もかよはなん秋草の花たこかめにさせる宿には　龍伯

御家門樣被レ遊候。

花々を分にし野への歸るさや手折もてきてかめにさすらん　幸侃
秋草の花もてかさろ宿と見は問來ろ袖にしはしとゝまれ　玄與
玉たれのこかめの花は秋の野の露にしられす盛成哉

此外にもあまたはへりつれとも書もらし侍りぬ。廿日幸侃所にて座敷能あり。打つゝき二十一日に秋月入道興行なり。廿五日しふしに御着被レ成候。大慈寺といへる寺。御旅宿になる。役寺の坊主參扣。則和漢あらましある。拙者發句つかうまつるへきよし。近衞樣御意之まゝ仕りぬ。役寺松木ふかきところなれは。

波のこゑまつに入江の秋の海　玄與
蘆火招二釣船一　杉

又御出船を祝侍りて。

追風も有明の月の船出かな　玄與

しふしへ御逗留の間。松良吉右衞門尉。福崎久左。雨入御旅の調仕りぬ。閏七月五日しふしを御出船。くしまのうらちのゝ湊といふ浦に夜更て御船をとめらる。秋月入道馳走被レ申候。七日ちのゝ湊を漕出侍れは。唐土かけて見え侍りぬ。和田の原漕出て見れは久かたの雲井[に]まかふ沖津しら浪の歌。おもひあはせ侍りぬ。其日暮かたにことの浦へ御着船なり。彼浦に十日餘り御船をとゝめられ候。御つれつれのあまりに御うた有。

海邊月　杉
和田の原むかふ嵐にいかなれは月のみふねのまほに行らん
初會戀　同
つれなきに心つくしのはてても今ありける物よあふの松原
羇中衣　同
峯を分麓の露にぬれ衣野路ゆく程や萩か花すり
同し題をくたされて　玄與
沖津風吹につけてや夜はの月くまもなきさによする白浪
同
しきかはす新手枕か別れ路のうきをもしらぬ心なりけり
同
袖の露にやとれろ月の光りまてやつしはてたろ旅衣かな

又詠五首和歌。

初秋風　玄與
秋い來ろかたとしられて西の海の波吹風も音かはる也
松下萩
庭に生ふろ松のねさしやかよふらん吹もたゆまぬ風の下荻
海邊曉月

あかつきの雲は消つゝいそ山の嵐の上の月のさやけさ

寄露戀

我袖にくらへてやみん消かへりなく夕影の草の上の露

社頭祝君

あふきくる君か千とせはすみ吉の松の緑にたくへてそみる

此外に近衛様二十首の御歌有。愚詠も廿首あり。かくて浪風靜まり。十五日内之浦といふ浦まて御成候。道すから おもしろき礒山の有様なと有中に。もうとの岩屋を見侍りて。

千早振神代に今もかへる波の玉よるなきさみまへにそなる

拙子。武神阿蘇の明神は。うかやふきあはせすのみことの御孫なれは。かくおもひつゝけ侍りぬ。又玉依姫も阿蘇明神の御うばなれはなり。内海にては日向伊東より御□調なとと申候。十七日に陸路をおほしめしたち給ふ。御馬なとの事とも。きよたけの城主川崎 是を馳走也。近藤殿拙子は。十七夜の月に船を出し侍りぬ。よるの船はいとゝ心ほそく侍りて。十八日細嶋へ七時に着侍りぬ。廿日に 近衛様細嶋へ御着被成候。細嶋にてあかたの高橋九郎。可然士を付置て。御旅の調侍りぬ。廿三日に細嶋を曉天に御出船にて。豐後國の内かまへと申浦へ御着船。海士の住さとなれは。御宿に成へき所もなきに。松蔭ふかきあたりに古たる寺有。是御宿に成へき處やらんとおもひ。立入て見れは。住人かけかすかなり。取あへす狂歌申つつけ侍りぬ。

ふる寺のあるし顔にてさひしさの待かまへたる御宿也けり

俄に塵かきはらひ。たゝみ所々敷て。二三日御逗留也。夫より廿五日御船を出し。同國よなふ津とやらん。人家すくなき浦に御着船也。此浦にて御發句有。

荻のこゑ稍にもろし濱楸　杉

眞砂地となき秋のゆふなみ　玄與

五十韵程御沙汰被成候。拙子又發句つかふまつりぬ。

夕きりに日の影つゝむみ谷哉

と申候。

京都にて。紹巴隱居三井寺へ行て。此發句にて百韻獨吟に申つゝけみせ申候へは。右之發句長あはれ候。八月一日御船を出し。海上壹里計過侍るに。日向船とやらん。岩にあたり白浪に

沈ぬ。乘たる人はたすかり。哀なる有樣を見侍りて。いよ〳〵船路のかなしさせんかたなし。三日にほとゝいふ所へ着給ふ。雲とまりと申所。ちかくみえけれは。

影きゆる月やいつこの雲とまり

と申狂句仕候。それよりさかの關迄御着被成候。去七月十二日之地震之時。かみの關と申浦里は。大波にひかれて家かまともなし。いのちを失なふもの數をしらす。哀なる事ともなり。彼須磨の巻に。高麗におちて。むすめをは岡部の里へやり侍ると見えしも。ことはりおもひしられ侍りぬ。同七日にいまの海へ渡りぬ。あをしまこく嶋なとゝ申浦々にうき泊りして。讃岐へうつりぬ。こゝに松山のみへたるを。いかなる所そと浦人に問侍れは。是なんしら峯と申侍る。保元のいにしへ。崇德院の。身は松山に音をのみそなくと遊はされし御歌。今のやうにおほえ侍りき。十日備後ともの浦へ着給ふ。夫よりは順風も心のまゝにて。はりまの室の津に御着也。十五日朝天に。室の津を御出被成。波路はる〳〵うつり行に。高砂の松なと見え侍りぬ。彼松。愚身先祖一見之事。高砂之うたひにみえ侍れは。由緒なつかしく見侍りぬ。最中の月を須磨明石にて詠め侍りぬ。

時しもあれ名高き空の月影を今宵明石の浦にみる哉

と申侍りぬ。近衞樣御詠歌前に書付はへりぬ。夫より和田の御崎。難波の浦つたひなとして。大坂近くなれは。船子とものうたふ聲にきはしく成て。十八日大坂に着船なり。地震の折節。浪たかく風はけしき海上。つゝかなく侍りつること。佛神のまもりうたかひなくおもひはへりぬ。近衞樣の御門前市のことくに見ゑ。枯たりし木の春にあへることとく也。昔周公旦のさすらへ立歸たるも。かくこそと思ひ侍りぬ。太閤樣より。福原右馬介。長谷川右衞門。兩使御迎として參られ。都へ御のほりなされぬ。其頃愚身所勞之義有。愚宿せんは町也。近衞樣拙子御覽あるへきとて。よるに成て御渡なりぬ。忝事共なり。もうしう法印に被仰。良藥を

用待りぬ。人心付侍りぬ。武庫樣よりも伊地知與兵衞にて御たつね被成候。忝事とも侍ぬ。然るに幽齋老より御使下着し。九月六日一葉のふねをさし秋風にさそはれて淀河をのほり侍りぬ。江口の里なと過て。三嶋江のあたりにて。夕月夜ほとなく入て。村蘆のほのかなるかけ猶あはれなり。あくれは長月七日。八幡山山崎なと見侍りて。伏見の入江に着侍りぬ。八日武庫樣へ參上。武庫樣拙子病氣草臥を御覽被成。忝存意なと侍りぬ。重陽幽齋老吉田より伏見に御くたり也。則拜尊顏也。十一日。竹崎千左衞門尉幽齋老御用之事ありて。薩摩へかへし申候。伏見にて盛方院良藥を用侍りて。病氣よく成侍りぬ。伏見より九月廿四日京にのほり侍りぬ。同廿六日吉田にて。幽齋老御興行。

爪木こる宿さへ秋の山路哉　二位法印玄旨
まかきを近みをしかなくくれ　兼如
見渡しの四面の原は霧ふりて　玄與

廿七日。呂叱へ行侍りて近衞樣に參上申候也。十一月一日。吉田より幽齋老御供申。名所々々を御おしへ候也。吉田より新黑谷を通り。東三條の森。鹿の谷杯を見侍りて。南禪寺にまいりぬ。南禪寺と新黑谷のあはひに法性寺有。如意かたけなと見え侍りぬ。僧正遍照の古跡花頂山。夫より祇園の社。八坂のたかつらのはし。鷲峯りやうせん雙林寺。きおんはやし下河原。六條鳥邊山。あみたか峯東岩倉。又鳥邊山の上に十住心院しんけいの舊跡あり。東山の紅葉を見侍りて。

冬かけては山に見ゆる薄紅葉猶も時雨の雨やまつらん

と申侍りぬ。夫より東福寺通天橋を渡り。いなりの社。藤の森。深草を分過て。伏見へ着侍りぬ。神無月十一日たひこし(醍醐寺)の隣石田と申所に。玄蕃頭との御座候まゝ參りぬ。十三日絕巴幽齋三井寺へ行侍りぬ。たいこ寺迄は。玄蕃頭殿か送り也。笠取山。日野。山科。音羽里なと通り相坂を越大津に出申候。志賀の山ひらの高ねのしくれ。かゝみ山もかきくもり。水うみの船のゆきかひ。たくひなき有樣也。大津町にて玄蕃頭との役人まいられ。途中にての御振舞。筆

に盡しかたき事ともなり。三井寺坊舍皆々くつれはて。紹巴の栖古寺の傍也。終日遂閑談。日くれ侍れはかへり侍りぬ。三井寺のかねかすかに殘りて。淋しき事とも也。神無月十九日大比叡の雪を見侍りて。

東路の空に心のかよふ哉都のふしの雪をみれともと申侍りぬ。又發句に。

出る日やおしむ初雪朝曇

雪にみるすゝきや秋な忘れ草

又よし田にとまりて。

ふかきよの夢路に通ふ松風は月みよとてやおとろかすらん　玄旨法印

とふ宿のかことなりけり夕時雨

庭に紅葉のちりのころかけ　兼如

十月廿三日上京。兼如宿にて興行。

廿四日近衛様へ祗候。廿五日伏見へくたりぬ。其折節建仁寺の雅長老へ參扣。又十月十七日紹巴より合點の連歌到來。其便宜に松前の昆布送給也。霜月より慶長元年に改。霜月三日幽齋老拙子と兩吟被遊候。四日八ッ時百句成就也。右之兩吟名譽のよし。紹巴老人より褒美の一書預り候。同四日幽齋御宿にて中國太守毛利殿參會仕候。飛鳥井殿なと御座候也。毛利殿御盃御さし候。其晩景若狹少將殿御發起にて。伊勢物語幽齋御講釋也。聽聞人數。少將殿。木下宮内少輔殿。山名禪高。山中山城守殿。溝口大炊介殿。其外歴々御人數也。同日夜に成て紹巴より書狀幷松前之一種預り候。十五日吉田へのほり侍りて。明十六日。菊亭前右大臣殿幽齋御宿所にて御茶湯也。墨跡はきとうの筆かゝる也。御相手に拙子御座鋪へまいり侍りぬ。觀世大夫其外京中の名人とも參り候。幽齋四番目の御子茶君丸。太鼓あそはし候。十七日近衞殿へ伺候。十八日吉田へかへり侍りぬ。其日幽齋老碁の會御興行。京中の碁打皆々被參候。本因坊なと也。せんやも被參候也。廿日吉田にて連歌御興行也。

氷りゐて行水ふせく河邊哉　昌叱

蘆の枯葉にましろ澤　玄旨法印

春風に田面の柳色みえて　玄與

日野大納言殿なと御出座也。其懷紙。從禁中吉田神主殿を以被成勅言。叡覽に侍り申候。拙子

第三一せならぬ冥加のよし。京都にて人々被仰候。廿一日北野社へ參詣候。社頭にて。

春にみん山口しるし冬の梅

と仕候。能禮にて一折。かへる道すから嵯峨山のつゝきの雪を見侍りて。

日のいろもこほるか今朝の峯のゆき

夫より。日野殿飛鳥井殿三條西殿なとへ參りはへりぬ。廿二日盛方院參り。南禪寺へ茶智丸樣御逗留のまゝ參りぬ。廿三日上京。幸前與行。

ちりちらす雪さへ花の都かな　玄旨法印
こすの外山のさむき朝風　幸前

廿四日近衞樣祗候。鷹司殿御座候也。將基仕候。廿六日南禪寺にて。茶智丸能九番被遊候。廿七日伏見へくたりぬ。三條河原のあたり曉通候。寒月の體言語同斷。廿八日より伊勢物語の注寫し侍りぬ。八條宮樣へ幽齋御傳受の注なり。京都へも拙子下國迄は□禁中八條樣。御兩所までに御寫被成候注にて□極月五日常心樣にも。幽齋老能九番御興行。茶智丸三番。常眞二番。老松なとなり。樋口又次郎兩人にて候。重平一番はやし候。九日に幽齋老丹州へ御下向。拙子は御留守居し侍りぬ。是書寫の本多き故也。十日に近衞樣より御書被下候。紹巴より一札到來候。盛方院より寒中の藥又々給候。七日薩摩より安右衞門參候。文なとのほり候。十一日に紹巴老に助五郎遣候。巴より美濃紙十帖給り候。廿三日近衞樣に伺候。勸修寺殿なと將基仕候。笛の名人安中其外公家衆御參會之座敷也。廿五日。

冬木にも春や立枝の梅花

杉被遊候。

出る朝日のかけ寒き庭

と拙子仕候。

廿六日龍山樣。光照院殿。入江殿。大炊御門殿。富田殿。昌叱なと夜更まて御酒宴也。廿七日聖門樣龍山樣又々御參會也。廿八日に御家門樣御馬に御のせなされて。伏見に歸り侍りぬ。

慶長二年伏見幽齋老御屋形にて年をこえ侍りぬ。

試筆　玄與

吳竹のふしみの里の朝露に一夜をこめて春や立らん

發句

こそたちて今朝光そふ春日哉　　玄　與

七日の翌日初子なれは

袖はへて若菜摘のゝゆくてにや明ろ子の日の松をしめなん

七日之日。紹巴へ右之發句にて獨吟申候て遣候。其かへりに紹巴試筆預候。

谷も今朝よそならぬ春の光かな　　紹　巴

又酔中の狂句とて。

皆人は世にあふ坂の春といへと我身は老のくたり坂也

又紹巴七十三歳の年のくれの晦日に。

なからへて浮山住も七十ゝみ冬の暮のおしまるゝかな

書付給候。其時筆なと預り候。同十一日丹州より御狀被下候。

試筆　　二位法印玄旨

ふる雪のふかき山路も春と立ことしと越てかすむ色哉

丹州千とせのうらちかきゆへ

立かへり千とせやよはふ浦の波　　同

十二日近衞樣より御書被下候。本壹札薩摩表町田入道存松より被願書遣候也。十六日近衞樣より被成御書。則出京申候也。同日紹巴より合點の連歌到來也。十九日上京。いまたちうちにて一折有。兼如同心也。廿日勸修寺殿へ參候。さけさや被掛御意候給也。廿一日近衞樣にて一條殿御目にかゝり候也。廿二日近衞樣に留田殿伺候也。廿三日近衞樣にて連歌御興行。昌叱。其外廣橋殿。勸修寺殿。西洞院殿なと。拙子も御連衆也。廿四日紹巴にて一折興行。廿五日北野へ參詣也。法樂に十首の歌よみ候也。近衞樣も被遊候。かしら字を置く也。

家門息災安堵此字也。

夜梅　　玄　與

風ならておとろかれけり春夜の夢路に通ふ梅の匂ひに

花近簾

百鳥の聲さへちかしこすのとの花の盛の明ほのゝそら

見花

村々の霞も消て蘆のやの浦のみるめや花にからまし

池邊藤

袖はへて折やかさゝん玉敷のみきりの池に匂ふ藤浪

浦歸雁

暮渡る浦半の波のかへるさや雲井の宿の心なるらん

野旅行

さらぬたに旅の衣の露けきに小篠かた敷野路　夕くれ

夕鼯

いつはあれとさひしかりけり山里の暮ろ梢のむさゝひの聲

夜風雨

明やらぬよるの船人いかならん舟ふりそひてあらき浦風

海邊鶴

むは玉の夜半の月影浦風にさへまさりてやたつの鳴らん

祝言

ときはかぬ惠みの程は春日山峯の朝日の光りにもしれ

廿六日兼如にて。一折興行也。廿七日近衞樣にて。灯下片時に十首被遊候。愚詠も十首也。廿八日幽齋老御上着。吉田にて御目にかゝる也。廿むすめへくゝし小袖被下候。廿九日伏見に御下向。御供申也。大佛御門跡樣へ參候なり。二月一日古今眞名序の清濁傳受申也。同日宗技一卷寫し。新古今注の書そへ仕候也。五日京へ上り申也。六日近衞樣參。櫻の御所にて御連歌興行。并御當座の歌あり。七日近衞樣へ。幽齋老御案內者申參候也。十日清水觀音に參詣申法樂に。

いろかへて四方の梢に咲花もあまねき春の光りとそみる

又清水寺にて。

あし引の山風吹は散花の波やこゆらん谷のかけはし

十一日幽齋老より。態御飛脚給り。其故一條殿御連歌に參候得とも。ふしみへくたり申候。十二日東條殿にて。黑田如水老餞別の連歌。

枝々やあひにあは緣ゐ糸柳　玄旨法印

二月六日。近衞樣糸櫻の亭にて。かしら字を置て。御當座あり。

山櫻　龍山

ろいもなき花は櫻のよしの山ちらぬもちるも雪とみる迄

松藤

見るまゝに池のさゝ波藤浪のさそはれこゆる岩ね松かね

春日　杉

おろかにも誰かおもはん春日山あまねき神の深き惠を

早春

千々の秋も宿にや經なん年々にまつへる春をいはふ諸人

水鳥知主

見るまゝにちかよりつゝも鴛鴨の我になれ行池のおはしま

伊勢

守れ猶清き流れやわたらへやいすゝの川の末絶ぬ世を

朝萩露　聖門樣

一かたはこほれやすらん萩か枝のをもけに置る庭の朝つゆ

池柳陰

柳かけ梢をひたす池水の底のみとりや猶まさるらむ

石清水

長閑なる春まちえつゝ石清水花をかさしのけふの舞人

籬瞿麥　奈良の一乘院殿

みたれそふ籬の露の玉敷の床なつかしき花の色かな

河時雨

聲高き河瀬の波や水上の山風さそふ時雨なるらむ

水邊月

よせ歸る波まのかけは遠近に見えてすゝしき秋の夜の月

庭霜　玄　與

日ののころみきりなからも呉竹の葉分の霜やかつ結ふらん

夕納涼

庭の面に木々の露ちる夕風によそにはふらぬ雨のすゝしさ

二月十四日。伊勢へ參宮申。富田信濃守殿馬御馳走也。相坂を越大津粟津を過て。みかみ山鏡山なと見て。水口といふ所に着侍りぬ。十五日鈴鹿山を越てあのゝ津に着ぬ。富田甚五殿さまさま御馳走也。十六日伊勢の山田へまいり着ぬ。御炊大夫宿所へ行侍りぬ。外宮內宮へまいり。かたしけなきになみたこほるゝと。西行のうたおもひ合侍りぬ。外宮の前をなかるゝ川。宮河と申也。外宮の上に天の岩戸たかまか原あり。月よみの森有。內宮へは一里隔る也。內宮の前の橋宇治はしと申也。神路山より流るゝ水みもすそ川。その末いすゝ川。其末わたらへ也。是內宮也。うち山は內宮より南也。神路山は東也。あさくら山は內宮より東也。ふたみの浦に。內宮よりたつみ。大淀の浦そのつゝき也。外宮內宮法樂に。

跡たれて世をやすく國と守りぬる神の心や猶もあふかむ

淺みとり霞の衣打はへてみもすそ川の名こそしるけれ

宮かけて杉むらふかし朝霞

十七日あのゝ津へ歸り侍りぬ。又甚五殿亂舞なとにて。終夜の酒宴。十八日鈴鹿山の麓土山にていうかの谷の內留りぬ。雪ふり積りて。あくれは十九日大津に着ぬ。其夜紹巴へとまりて。いろ〳〵の物語也。廿日伏見へ歸りぬ。八十瀨川はすゝか山の麓也。あこきか浦はあのの津よりはあなた也。かゝみ山の雪をみて。

雲歸る空の霞は風に消てくもらぬ雪のかゝみ山哉

幽齋老いつれの歌も御氣色にあひ申。紹巴宿所を別れ侍る時節。扇なと給りて。又はる〳〵送出られて。から崎の松なからの山のつゝき。かたゝまのゝ入江のあたりおくられ候。三井寺とひゑの山の間は。志賀の山也。あふさかの走井は。大津のかた也。大津を打出の濱と申侍

る也。しみつ相坂のなかは也。廿二日近衛樣に參上。廿四日に禪高江雪參。卽興の御歌あり。又御發句にて一折。

さかぬ間や我をとひ來し花の友　　杉
影ものとかに月うつる庭　　禪高
遣水のかすみをなかす音澄て　　江雪
田面のはしの雨ははれけり　　玄與

同日雨に糸さくらをよみ侍る。

春の雨に糸くりかけて庭の面はみたれあひたる花の色哉

咲出ん砌の花の盛をも松のときはにならへとそおもふ

近衞樣御返しあり。

咲はちる花にはありともことしより松の常盤に習ひても哉

廿八日。吉田にて幽齋老御興行。

一たひにさかはいつれか初櫻　　昌叱
梅うつろへる軒の山風　　玄旨法印
うくひすの關垣へたつる聲はして　　如水

日野殿飛鳥井殿なと御出座也。卅日伏見へ下り侍りぬ。近衞樣餞別之御うた被下候。

へたつとも沖津しら波立かへり又もきてみよ花の盛を

御かへし申侍りぬ。

うき旅を忘れやせまし言のはの花の匂ひを袖にうつして

三月一日。伏見江より船にのり大坂へ着侍りぬ。二日大坂にて龍伯樣へ伺候。則御暇被下候。三日すみよしの鹽干を見物申侍る也。五首の法樂。

海邊霞

春風はおさまりつゝも寄てくる浪のなきさの朝霞哉

春月

片敷の枕もとらしつくつくと朧月よの影をなかめて

苗代

村々にたてる衲は青柳のみとりふかめる小田の苗代

松間藤

咲ふしのさかりてしろし浦かけて松の木間に波そ立くる

社頭花

千早振神のゐかきに咲花や春の手向の色に見ゆらん

住吉の行あひの間。ほそえあられ松原津守遠里小野なと見侍りぬ。又住よしの花かけにて。

歸るさも忘れこそすれ咲花の陰をしめつゝすみよしのさと

かくて海上長閑にて。十七日月になりて。細待へ着ぬ。夫より庄內郡之城へ。廿三日に着侍りぬ。

群書類從卷第三百二十六

日記部七

宗長手記上

大永二年五月。北地の旅行。越前國のしる人につきて。かへる山をしらねとも。宇津の山をこえ。小夜の中山にいたりて。

　このたひは又こゆへしとおもふとも老の坂也小夜の中山

掛川（朝比奈備中守）泰能亭に逗留。この比普請最中。外城のめくり。六七百間堀をほり土居をつきあけ。凡本城とおなし。この地岩土といふものにて。只館をつきあけたりともいふへし。城と外との間堀あり。冷々としてのそくもいとあやうし。此城にて發句とて。

　五月雨はくも井のきしの柳哉

又南に池あり。岸たかく水ひろくして大海に似たり。凡龍池ともいふへし。又發句。

　池の面やきしはすみのえ春の海

是は四五ケ年さきのことなり。本城に井あり。前（朝比奈）備中守泰熙當國の事承はしめ此山を見たて築といへ共。水かたし。鶴のはしかなつき鋤鍬はいふにおよはす。種々の道具數をしらす。二三百日にいたれとも。みつほりいたせることかたし。既に退屈におよふ所に。黑小蛙小蛇土あくる籠に有。さては水近にやとて力を得。終に水に掘あたる。麓の川の底とおなし汲あくる轆轤の繩千尺にもあまりぬらんかし。武藏

野のほりかねの井はいかゝ有けむ。此城をめくりて大なる川あり。仍懸川といふにや。東西都部の大道なり。抑備中守泰熙當國におきて粉骨戰忠の次第。社山に左衞門佐殿（今川一門後號二俣左衞門佐）在城。配流をもつて二俣の城へ退け。則尾張の國當國浪人等。足を空にしてかくるゝ所なし。信濃三河の國境まて手裏にしたかひ。又河西村櫛堀江下野守數年の館。濱名の海南北にめくり。本城外城黑山といふ。早雲庵（伊勢新九郎氏茂）備中守相談せられ。當國諸軍勢うちよせ。兩三日に落居す。濱松庄。吉良殿御知行。奉行大河內備中守（三州之住人）堀江下野守にくみしてうせぬ。其刻飯尾善四郎賢連吉良より申下され。しはらく奉行とす。すへて此父善左衞門尉長連。義忠（今川治部大輔）入部の時に當庄の奉行として。度々の戰忠他にことなり。剰義忠歸國の途中にして凶事の時に。（塩貝坂討死之時）名譽の防矢數射盡し。則討死。其息善左衞門賢連。其子善四郎乘連。伯父善六郎爲清まて。其舊號をわすれ給はす。永正元年九月初に鎌倉山內扇谷。（號兩上杉。山內管領歟。）鉾楯。扇谷は早雲一味河越江戶。山內は上戶鉢形。いつれも合戰すへきになりて武藏野にもあまるはかりなるへし。坂東路三里はかり。敵退に及す味方すゝむにあらす。十餘日相さゝへて注進あり。氏親（今川修理大夫）九月十一日俄に進發。十三日備中守福嶋左衞門尉。駿遠兩國の勢逐日出陣す。同廿日廿一二日早雲の陣益形（武州）着陣。駄退くやと見えき。をひすかひ一夜野陣。明る辰刻計の朝霧のうち。武藏野も深山のやうに。敵味方の軍兵みえけるとなり。凡雷電のことし。午刻はかり馬を入あひ。數刻の合戰敵討負て本陣立川に退。其夜行方しらす。二千餘討死討捨。生捕馬物の具充滿。一日一夜有て。大將修理大夫氏親同十月四日鎌倉まて歸陣。一兩日逗留。豆州熱海湯治一七日。韮山二三日。陣勞休られ歸國

ありしなり。其時三嶋明神に立願申侍りし。則神前にして。同十日より三日に千句獨吟。發句題。四季第一。

たなひくやちさともこゝのはる霞　　氏親

青柳やかけそふみしま木綿かつら　　宗長

又八九年して大河内備中守おほけなきくはたて。濱松の庄にうち入。引馬にして當國浪人等百姓以下を楯籠らす。則發向。今度は悉寺庵在家放火。大河内及生害所。されとも吉良殿御代官につきて懇望。先以免せられ各歸陣。泰熈其（永正九年十一月）冬不慮に病死。力およはす。泰能幼少にして。伯父泰以（備中弟）しはらく輔佐。（永正十一）また大河内信濃三州尾張をかたらひて大亂くはたつ。今度は御進發。笠井庄樓嚴寺に御馬たてらる。諸軍勢川を打越大菩薩といふ山に着陣。北に伊井次郎（遠州住人）深嶽といふ山武衞（治部少輔義達）を覺悟申。又浪人以下相あつまり。毎夜の篝曉の星のことし。泰以（朝比奈）やすくとうちおとし武衞同奥の山に退。則尾張歸國。此深嶽の城は。なかころ甲斐美濃守（武衞被官）數千の軍兵にて三ヶ年に及責。つゐに落居せすとなり。泰以戰功により。當國無爲に屬す。（永正十二）其後甲斐國武田次郎鉾楯に付て。氏親合力の事あり。（遠州勝山城ニ今川勢二千人籠國人別心故）又此（相濟各歸國）刻をえて。大河内當國浪人等信濃國人を催し。（正月廿八日ヨリ至三月二日和談）武衞をかたらひ申。（義達改名義敦濱松庄川開在陣）天龍川前後左右在々所々押領す。其冬當城に八幡を立らる。八幡の祝發句。

これや世にこほらぬなかれ石淸水

泰能伯父時茂（下野守）八幡を守護し。當國同駿州迄の御留守嚴重なり。（氏親）明る夏五月下旬かの城にうちむかはる。折節洪水（天龍川）大海のことし。舟橋をかけ。舟數三百餘艘。竹の大繩十重廿重。只陸地にゝたり。此橋の祝として千句あり。發句。

水無月はかち人ならぬ瀨々もなし

今おもへは。みなかち人のわたりかなと申へ

かりけり。敵川のむかひにうちいて。射矢雨のことし。數萬の軍兵やす／＼とうちわたす。敵はすなはち引入ぬ。敵の城六ッ七ッ。めくり五十餘町の内おひこめ。六月より八月まて攻らる。城中そこはくの軍兵。數日をへて八月十九日（永正十三年）に落居。安部山の金堀をして。城中の筒井ことことくほりくつし。水一滴もなかりしなり。大河内兄弟父子巨海高橋其外楯籠傍輩數輩。あるは討死。あるはうちすて。あるは生捕。男女落行體目もあてられすそありし。武衛又子細有て出城。ちかき普齋寺と云會下寺にして後出家。供の人數各出家。尾張へ送り申されき。すへて秋山二俣伊井の奥の山。今度共に三四か度如此。希代の不思議にや。此大河内備中守當國に敵する事。同三四ヶ度なり。抑當國尾張半國當方分。中比上意いかむ。しはらく武衛御領國として御あつかりの事にや。範國。（基氏二男 定光寺殿。）

法名省心。永仁五年丁酉誕生。範氏誕生正和五年丙辰。泰範誕生建武元甲戌年。範政誕生貞治三甲辰年。範忠誕生應永十五戊子年。義忠誕生永享八丙辰年。知行は泰範の時にや分明ならす。八十五年有て義忠入國。子細は河勾庄普光院領。懸川庄普廣院改替。共に御判有て入部の事。その時狩野宮内少輔といふ者。遠州守護代職。吉良殿の内巨海新左衛門尉。この庄を請所にして在城。よき城をかまへ。狩野と申合入部を違亂す。しかるに義忠自身進發。（寛正六年）八月より十一月まて狩野か城府中責らる。同廿日せの落され。狩野生害す。此宮内少輔は伊豆狩野助一類。武衛の狩野加賀守。當國之部代。同名にして與力す。結句加賀守息次郎生害させ。家督となりて。當國心のままに進退す。是又當方の力を以てかくのことし。されは安部の狩野介謀叛。此山中甲州につつきせめ入かたくして三ヶ年。宮内少輔遠州

數千軍兵を引入て。此山中にうち入。案内者して悉責亡す。いまに靜謐。其忠も又異他なきにあらす。當國の事。應仁年中細川讃州（義之）。三河國守護代東條近江守國氏等鉾楯につきて合力の事。伊勢守（貞親歟）して被仰下。依其忠國（遠州）の御判なさるへきにて。宮内少輔巨海退治。則參河堺引馬に兩手勢衆先手計さしつかはされ。義忠其十二月歸國。明る年浪人蜂起して。小夜の山口にして陸奥守（瀬名貞延）堀越（今川族）不慮に討死數輩。雖然所々合戰味方理運。されとも敵の殘黨等不休。義忠又進發。然る所に面々中あしくして。味方の凶事を互に悦ひなとして。はては各討死す。三ヶ年の間に矢部左衛門尉。肥後守泰盛。岡部左衛門尉三人病死す。是たゝにあらす。されは度々の合戰に利をうしなはれ義忠歸國（遠州）。途中の凶事廿餘年にや。氏親入國靜謐とはいへとも。隣國の凶徒等たゆることとなし。三河國境舟方といふ山に味方有。田原彈正忠（参 戸田）諏訪信濃守以下浪人衆催し。舟方の城うち落す。城守多米又三郎（今川方）討死す。敵この城をもつ。泰以時をうつさす。濱名の海渡海して。則うちおとし數輩討捕。則奥郡過半發向して懸川に歸城。如此十ヶ年。泰以補佐して泰能にわたし。暇申駿河に下り。府中のかたはらに閑居。されとも御用には遁れすとなん。濱松庄奉行今は飯尾善四郎乘連。爰に一兩日逗留。當庄のうち山崎よりいなさ細江をこかせ。濱名備中守館。一日連歌あり。

水はれてそらやさつきのあまつゝき

本坂といふ越て。西郷宿所あないして。熊谷越後守館勝山。一日ありて連歌あり。

あふち咲くもゐなちりのふもとかな

八幡ちかき所　牧野四郎左衛門尉宿所本野か原といふ野を分ていたり。一日連歌あり。

ゆく袖を草葉のたけの夏野哉

此國折節似に鉾楯する事ありて。矢作八橋をはえわたらす。舟にて同國水野和泉守館苅屋に一宿。尾張知多郡常滑水野喜三郎宿所一日。野間といふ所義朝の廟あり。こゝより伊勢大湊へわたり。山田につき侍り。則參宮す。かねて立願の事ありて。當宮にをいて千句。宗碩法師さそひくたし侍り。七月下旬下着。やかて八月四日より始め。毎日二百韻兩吟。五日にはてぬ。此千句の事。今の管領高國江州より御入洛の刻。御法樂として。立願申せし事也。紫野大徳寺眞珠庵(一休ノ寺)のかたはらにありし時御芳恩。かつは其謝とも申へきにや。第一之御發句京都より申下す。

朝日影四方ににほへるかすみかな　高國
梅さきてあらしもなひく柳かな　宗長

山田の各馳走。目をおとろかしつ。宗碩は此ついて尾張へ越。長阿(宗長)は北地の旅行やう〳〵雪になるへくおとろかれて。この十六日におもひ立ぬ。雲津川阿野の津のあなた。當國牟楯の堺にて。里のかよひも絶たるやう也。あなたは關民部大輔。今は隱遁何似齋。こなたは多氣より宮原七郎兵衞尉盛孝。あのゝ津の八幡まていひあはせ。自身平尾の一宿まて山田を立。平尾の一宿のあした夜をこめて出。辰の刻より雨しきりにふりて。みわたりの舟渡り臨たかくみち。風にあひて雲津川又洪水。乘物人おほくそへられをくりとゝけらる。此津十餘年以來荒野となりて。四五千軒の家堂塔跡のみ。淺茅蓬か杣誠に鷄犬はみえす。鳴鴉たに稀なり。折ふし雨風たにおそろし。をくりの人は皆かへり。むかへの人は來たりあはすして。途をうしなひ方をたかへたゝすみ侍る程に。有知人きゝつけて。このあたりのあしかるを賴。窪田といふ所二里をくりとゝけつ。其夜中に關よ

りのむかへ。乗物以下具してたつね來りぬ。けふの無爲こそ。ふしきにおほえ侍れ。この所の一宿おり句なとして。その夜のね覺に。

思ひたつ老こそうらみ鈴鹿山行すゑいかにならむとすらん

あのことく江州きのふよりみちふたかるとなり。何似齋の館龜山程三里はかり山に入て。三町へたてゝ。新福寺といふ律院のうち成就院旅宿。奇麗の掃除目をおとろかし侍り。十日餘り休息。毎日の懇に中々心いたくそ侍りし。連歌一座あり。

八十の瀨のみなかみたかし秋の聲

鈴鹿川八十瀨の水上といふはかりなり。

なかれも霧のおくふかきやま　何似

會席の體。歷々息三人。十七十三十一。秋の野の花のやうにて出立し。又こゝにも鉾楯軍の用意隙もなし。江州蒲生の城主護より退治。日數になりてこゝかしこ浪人あつまり。後詰の合戰度々と聞ゆ。道のやすからぬをあないせられしかど。なにならぬかよひはかゝは有。乘物等のをくりはかたきにより。又山田に立かへりなんとすれは。雨風やます。逗留して。

梓弓なしてはる雨けふもふるあすもふるとて宿や定めん

爾あらはこのまゝ逗留にもなと。誹偕の筆のすさひ。硯のあたりにちりほひけるを。人何似へ傳へけるにや。

いかて君やとり定んあつさ弓なしてけふ降雨なかりせは

いひをくられぬ。艷なるかへしなり。窪田の六太院より發句所望に。

すゝかやまいろ〳〵になるこゝろかな

この院の本尊觀音の心にや。越前へ人つかはすにも。これよりあないしりたるものを坂本までそへのほさる。阿野の津を退たる里。鹽屋のやうなる蓬ふきに。何似よりをくらる。又の日は宮原盛孝よりむかへの人を待て逗留。こ

の津の人々懇望にて。連歌あり。

かへるよなまつやしらなみ秋の海

此里もとの津還住のあらまし事なるへし。此濱のゆふへ立出て。渺々たる遠近伊勢尾張の海つらくまもなく見えわたされ。休らふほとに。爰かしこより若衆誘引。所につけたる酒肴笛鼓なともて來たりて。興に入しかは。かのはなも紅葉もなとの歌まて心に贈答して。

この夕はなも紅葉も有物をうらの苫屋の人の心に

夜に入て歸る。まことに浪をまくらの心地せしに。けふの若衆いつれありけむ。旅ねをとふらひやかてかへりしあした。いひつかはしつ。

思はすも蘆のかりねのせゝの涙しき捨られし名殘なしやは

九月一日こゝをたちて。その／＼もとの津のあたりまて酒もたせ。かたみに別おしみて。雲津川にいたりぬ。朝倉太郎左衛門教景の使の山伏たつねあひ。文ともみて。平尾の宿へともなひ。一宿のあしたに返事書て。

こし路にそ何そはありと恨つる名はけふかへる鈴鹿山かな

盛孝この一宿を聞つけて。けふの送りをもせられしとなり。同二日に山田へかへりて。この程の旅の老屈を書しるし侍るものならし。

同月廿日あまり。内宮の建國寺にまかりて。西行谷とてかの上人の舊跡へ各誘引有て。五十鈴御裳濯のすゑをわたり。山田のあせのほそみち萩薄の霜かれを分さし入より。まことに心ほそけなり。山水をかけひにて。その世ながらの松のはしら。竹あめる垣のうち。坊に尼十餘人はかり。晝の衾麻のつゝり襦のかほりむかしをもみるやうにおほえて。ふと心にうかふことを。

聞しよりみるはあはれに世を厭ふ昔おほゆる住居かなしも

松かきの杜にかきつけ歸り侍りし。誘引の人人發句所望に。

秋ふかし神路のおくの谷の聲　　宗　長
月はゆふへのみれのまつかせ　　建國寺
いつれも上人の舊歌の面影なるへし。十月に。山田をたちて。多氣二日三日逗留。連歌一座。
神な月もみちをふける軒端かな
泊瀬に詣て。一日二日侍りしに。はやく京にて知人來りて。終日物語してかへられしに。中つかはし侍りし。
はつせ山入相の鐘を聞まてにむかしを今のけふも忘れし
多武峯より祭禮見物の誘引につきて登山して。誠に聞しより見るは目おとろかれ侍り。宿坊安養院連歌あり。發句。
霜をあやこすゑをたゝむ錦かな
今春七郎夜ふけて來り。童形さそひ出て酒。夜あけかたになりぬ。翌日橋寺一見して。大和の府八木に一宿。あくる日白土法眼澄英の坊に一宿。又明る日南都千手院澄英同道。連歌あり。發句。
冬やいつわかくさ山の春日かな
一日ありて慈尊院。十日あまり宿坊。連歌發句。
今朝ちるやあらしの花の雪の庭
蓮華院にして。
ましれちれあらしの雪の花もみち
大佛に參れり。それより山城薪へまかりのほる。門をくりかれこれさきにたちて。般若坂にまたる。折食籠數しらず。坂の松の本に。落葉を燒て酒あたゝめなとして。輿に入侍りし。宿坊にして出立の數盃。坂にて乘物よりおり侍るとて。腰をつき損し。則。
たのみこし杖つきなから郎等は續かぬ老の武さところひぬ
さて薪酬恩庵にはふ〳〵つきぬ。紹崇として尺八吹僧。もとは東山靈山の時宗五條東洞院

當福寺紫野大仙院。四五年もありて。この比は和泉の堺夢庵尺八の弟子。旦那にて活計。伊勢參宮とて。長阿折ふし山田に逗留。尋來て十日あまり。長阿は山城薪へのほりしなり。晝夜もてなし共とそ聞えし。いかゝありけむ二見の浦の浪にしつみけるとつたへ聞て。

無常心おこす一曲いかにして吹しつみけむあなうみのよや

南都にてつたへ聞しことなるへし。山田へ申つかはし侍りし。此尺八物にもかへて。跡のこととふらはむとて。妹の尼時宗度々いへとも。つゐにのほせす。さらはあすか川かはる瀬をものほせすとなん。酬恩庵きこしめし及はれて。三條西殿逍遙院殿より。

折にあふ薪は有ともはる近き宮古の花の名をもとへかし

御返しとは侍らねと。山家の冬を申侍りし。

つれ／＼とくらす薪の山里の名をのみたのむ雪のうちかな

宗碩法師津の國へくたりの ほりにも無音。かの清胤僧都のむかし生田の森の初あらし思ひ出られ。申つかはし侍し。

君すまはとはまし物を山城の岩田の森の雪の下かせ

酬恩庵にして。末期のねかひ。さりともことし歳暮にやと。心の祝ひはかりに。

ねかはくはことしの暮の薪きる峯の雪よりさきに消なん

明る正月酬恩庵にはへりしに。逍遙院殿御詠をくり給ひし五首。

長閑にて更によはひものひぬへし塵の外なる春をむかへて

いとはやも谷の戸出よ待里の一かたならぬはるのうくひす

富士の雪清見か月を心にてすむらん山の春そ床しき

山人のおへる名にある薪をは花のかけにも行てとはゝや

我もいま炭よりさむき心にてのりの薪もひろひ侘ぬる

右卒述卑懷呈柴屋老人禪旅下　逍遙子

大永癸未上毛後二日

贈答申はへり。

をのつから思ふはる哉長閑にて塵の外にはわくみならねと

おとろかす都の春のつてなくはいさしら雪の谷のうくひす

いつこをか思ひやらまし目の前の春の大ひえうちの渡りに

やすむへきかけなそかれて見せつらむ薪の峯も花し咲はと
朝夕のみのりの薪いくとせもよはひとともに君そひろはん
京よりなにかと文のありしに。老懐を申をくりし。
老つゝもおもふことゝはけふあすの今はの外の慰めそなき
おなし年正月にせんへい。もちゐ。かゝみをゝくりしに。
我よはひとりもみまうき朝な〳〵此鏡にはうちそふまろゝ
木津より所望に。
やまかすむ雪けの水かいつみ川
南都より所望に。
そめかくるさほかせいくかはるのいろ
うくひすのいとによらるゝやなき哉
樋口油小路護國寺力重とて。久朋友あり。閑居をとふらひ來りて。十夜にあまり枕をならへしに。いかにもいきたなき人にて。時衆の時をもわかさりしに。
數ふれは七つも六つもいつとてか時しらぬ時衆山はふしれ〔マヽ〕
宇治白川別所辻坊より。年始の音信とて。柳一荷。梅漬桶一。青梅漬おけなとにそへて。
はる雨の露も忘れぬ心さしいと細撫の柳とや見む
かへしに扇なとそへて。
淺みとり柳に梅の二桶はふたあけあへすもてはやす哉
長阿眞子承葩喝食つねに闘定はれて。やしなひにすへきなと。たひ〳〵の文。つゝの中より見いたして。そのうらを。金剛經承葩十三の幼少にしてかゝせて。薪心傳庵に侍りし。此庵は能勢因幡守後室慈香禪尼結ひをかるゝ庵なり。其經をみて奥の端に書付侍りし。
露けさはたゝ吹風にやしなひのはゝその色のあさからぬ跡
けさむにも入らぬよしおもひをくなと。いまはの時までもたひ〳〵ありしとなり。因幡守〔芥川豐〕頼則。年來異他の芳恩遠行追善のため。東山安養寺にして。千句のとふらひし侍りし。頼則歌連歌なをさりの數奇ならさりし故なり。逍遥

院殿申たて。肖柏法師宗碩法師寺町波々加部河原林對馬守なと上洛。まことに珍重の事なりし。千句第十。

月にあはれあらましかはも夢路哉

慈香禪尼この事なとをよろこひて。承芭をやしなひにとやおもひよられ侍りけむ。

三月薪より出京の次に。宇治白川の別所辻坊にして。

はるやはなつれなわすれぬはつ櫻

さわらひの巻のよせにや。むかひの寺なとこの巻にあり。京にてある宿所にして。

うつせみのうすはなさくらさくよ哉

山科より所望に。

いく岩根音羽のたきつはるのみつ

丹後より所望に。

まつたてるかすみになみやよさのうみ

閏三月に。

あひにあひぬうるふのやよひ花の春

人の年忌のとふらひに。

花にてふりにし玉かはるのかせ

三井寺より所望に。

聲そせきたれ杉村のほとゝきす

紫野大徳寺山門造營の事。門徒老僧祖心禪師。越前一乘深嶽末期に。京都へ乘物むかへにて。急き罷下るへきよしありて。三月十五日に一乘に下着。朝倉太郎左衞門教景。造營の事申屆へきよし有て。申屆侍り。ほともなくて祖心遠行後罷上。則駿河へ下りて翌年罷上りしに。眞珠庵より。此造營の事大功成かたし。先うちをくへき書狀有て。長阿奉加の用意も。薪妙勝寺惣門修造の出錢五十貫文。山門の事は無覺悟の處に。眞珠庵宿所へ入來有て。寺の衆議如此し。越前へ罷下奉加の事再興すへきよし有し。教景にも。此修造うちをかるゝ事さたしつれは。いかゝといなひつれと。猶衆議のさりかた

きにより罷下り。教景五萬疋。其外法眷二萬疋餘申調つれと。今に京着せすとなむ。眞珠庵用捨。今はけにもとこそ覺え侍れ。長阿奉加。何ならぬ物沽却。當年迄凡三萬疋におよひ侍り。寺木四郎左衞門とて京にありしか在國。年來異他知音により。是は長阿奉加の合力とて。去年夏四月まて三萬疋寺納。修功あらは猶寺納申へきなと〻書狀あり。越前逗留中發句。

時雨軒とて。庭の石木無比類所にて。

行と來と木すゑやあふち峯の雲

雨かほゝはなたちはなの五月かな

夕たちやまかせしみつの岩小菅

おもかけはふみわけかたき一葉かな

宗祇年忌に。

まつむしやよゝきかもとの秋のこゑ

萩すゝきふかぬ野分のあしたかな

八月十四日。

月夜いかにてらんあすの夜くまもなし

平泉寺より所望に。

霜なきてしらやまの名也月の秋

越前よりのほり侍りし時。江州觀音寺にして。

あさきりの外山は八重のはれまかな

みしやみなこすゑうつろふ朝戸かな

鹿の音や尾上のあらし夕月夜

志賀にて。

秋の海はなさくなみのちくさかな

薩摩の坊の津の商人京にて興行に。

磯の上のちしほもあきのゆふへ哉

四條の坊門町にて。

よるはしくれ朝戸は霜の板屋かな

有馬の湯治のついてに。兒屋寺にて。

しなかとりゐな野なゆきのあした哉

有明やそらに霜かれのはなすゝき

城山能勢源五郎千句に。

くれてなゝのとけき年のひかり哉

越年は薪酬恩庵傍捨蜜下。爐邊六七人あつま

りて。田樂の鹽噌のついて俳諧たひ〳〵に。

あすのしるたまかきりなるあらめ哉
かほはしはすのはるのはつよめ

鉄

藤原うちかもんはふちなみ
馬鞍はきんふくりんの源九郎
引つれつゝもねはりこそすれ
津の國のゆの山ももを枕にて
高野ひしりのやとをこふ聲
夏の夜のやふれかや堂たち出て
はんにやし坂の大乞食とも
こゝろみなせちへん坊や文殊院
風情もつきてひきやいれなん
人に月おもしろかられふけにけり
兒か女かれてのあかつき
まへうしろさくる手に月の有明に
主も從者もつえをこそつけ
もろともにこしをれ歌をよみつれて
なんほうこされたはなにたはふれ
お茶の水桶かえこそにくみよせて

小聖道みなはなみをそする
ちこ小袖やなきさくらをこきませて
にやけのあたりはたゝ菊のはな
あき風の吹上にほふとほそかみ
しりぬかしたるすはりわか俗
もてなしのはらの音こそ聞えけれ
一帖貳帖はりますいはら
ひきてものあふきの風になひかせて
かすみのころもすそはぬれけり
なはしろをおひたてられて歸る鴈
五條あたりにたてるあまこせ
たか後家のうかれ君とはなりぬらん
おなし年こそ三人はあれ
まおとこを二かたしむる腹のうち
おもろしけにもあきかせそふく
立ならへたなはたおれるあし揃手
おもきかたにはもたれこそせれ
そも戀よちんにても誰やとはれん
人のなさけやあなにあるらん
女ふみかしこ〳〵にかきすてゝ

たのむ若俗あまりつれなや
ひつくんてさしもいれはやちかへはや
不動も戀にこからかす身か
我よりもせいたか若衆きちわひて
神の代よりもすきのすんきり
ちはやふる三輪山もとの茶屋坊主
ふしつころひつむかしこふらし
とやかくとすれともおへぬ物おもひ
かすみこまかに引まはしけり
うつくしなたゝ丸貌のほゝほまゆ
馬にのりたる人丸なみよ
しもにたつ中間おとこひとりにて
なひつかん〳〵とやはしるらん　宗鑑
高野ひしりのあとのやりもち
高野ひしりのさきのひめこせ　宗長
愚句はをひつかむといふ心付。まさり侍らんや。
碁盤のうへにはるは來にけり　宗鑑
うくひすのすこもりといふつくり物
朝かすみすみ〳〵まては立いらて　宗長

是も愚句つけまさりはへらんかし。
大永四年正月一日。薪酬恩庵。早朝に遁世者とて。門外より案内するを聞て。
新玉の初もとひきり一年な小僧とや云ん小沙彌とやいはん
試筆於酬恩庵院主を奉賀一首
七十に七とせのけふな加ふれは君かちとせの春はるかなり
報答柴屋老人年頭試筆和歌一首。　紹凞
行末も猶はく〳〵の春の日に君かよはひなかゝみにもみよ
同正月十日あまりの夜半はかりに。夢中に玉の出行を。我玉にやとおもひゆめさめて。
見かきりて我身出行むくひなん錢の御玉の入かはり給へ
此錢のみたまやかて入かはれかしと。念し入はへるなるへし。中御門殿より。宣胤
さむからぬ都の春に薪をはひろひ捨こよやまさとのとも
同つゝみ紙に。心中難述。以一首呈萬詞千八句餘。老後再會。念願難盡短筆乎。贈答由はへり。
長閑なる都のうちに薪をはひろひそ捨んはゐの山人

おなし正月に。

とし〱のはるや立かへるあさかすみ

南都より所望に。

いつくよりわか草山の春日かな

八幡梅坊にて一折の興行に。

むめのはなうつりしそてか朝かすみ

夜に入て兒若衆餘多酒宴。老﨟とて罷入侍り。たひ〱使ありしと。平臥なからあまり無下のことゝおもひ。柳のちいさき枝につけて出しはへり。

思ひやれ柳の糸のみたれこゝろむかしはよそに聞し春かは

やかて酒の席詠せられしこゝろせしなり。

京にて。

あつさ弓おしなへ春のひかりかな

三井寺勝藏坊京に出て興行に。かの寺にてけに山のはは出うかりけりのよせにや。

（細川高國）管領一日千句に。

なひく世は雨のとかなる草葉かな

三人千句。逍遥院殿月村宗長江州 種村中務丞於月村（宗碩）齋張行。

うくひすやたのかぬふはな笠やとり

豊雅樂頭藥をくられしつゝみ紙に。

君も我も老す死すの藥にて又あひみんも心成けり

かへし。

これやこの遠くもとめし生藥今も老せぬ君つたへけん

ゐ中へ下侍る折ふしの事なり。中御門殿より。（宣胤法名）乘光。

老の友まつそとしらはかへりこよ田子の浦波立は行とも

御返し。

君により田子の浦はに老の波思ひしたゝぬ日もそなからん

朝倉太郎左衛門教景宿所の庭に。鷹の巣を四とせ五とせかけさせて。去年はしめて巣立せ。大小二ツ。誠にふしきの事なるへし。これにつきて。鷹の記建仁東堂一花。又詩歌なともとりとり侍りしに。

また聞すとかへる山の峯ならて巣たゝせそむる庭の松かえ

尾張の國知人さそふ文たひ〳〵有。しはし逗留あるやうになとありしに。卯月十一日京をたちてひんかしの旅行。先都の南は八幡ちかき薪酬恩庵。一休和尙遷化の地あり。まかり申の燒香のために下り侍り。京の知音の人々。上は下京まて。下は法勝寺深草のあたりまて。かたみにわかれおしみて立わかるゝに。

なからへは又ものほらん都人もとなくれかふことしある老

されたる歌の結句俳諧一咲。都人とは。今をくりて別るゝ人々の事なるへし。伏見津田備前入道かねて約あり。立よりて。薪の山材木。この津より紫野へ車力の事奉加申調へ。いまた日もたかく。いそくに付て。宇治の川舟さしのほらんといふに。發句所望に。

くれたけのなつ冬いつれよゝのかけ

此所祝はかりなり。此津より宇治橋まてさしのほさするに。船の間美豆の御牧。八幡山木津川なかれあひて。水ひろく湖水のことし。京よりいさなはれくる人々。舟はたをたゝきて。尺八笛吹ならし。宇治の川瀨の水車なにとうき世をめくるなと。このころはやるこうた與に乘し侍り。岸の卯花汀の杜若さきあひて。おもしろかりしなり。いくせともなきはやせ。のほりわつらふ綱手のふることとうち吟して。船さしよせおるゝ。みな心ならす。其夜は白川別所辻坊一宿。曉水鷄のうちたゝくを。

谷ふかみくゐなのめくる外山かな

俳諧にそ侍る。當國守護所東雲軒。薪のをくりなといひつけらるゝ間に酒あり。一折のゝそみありしかと。いそくにより發句。

ほとゝきす月や有明のあさ日山

のこりおほくそ侍りし。酬恩庵一夜。山の材木申調へ。十三日に影前燒香。其日。三井寺勝藏坊とてわかき法師。此春京へ出て連歌興行あ

りしなり。此法師出あはれて。大津の濱旅宿の誘引 夜に入て上光院。相州宮根別當童形。二とせ三とせ住院。このはる得度。兵部卿。盃出て夜ふけぬ。あくるあした院主一折の興行。さり所なくて。

ほとゝきす山のゐのあかぬはつれかな

結ふ手のしつくにゝこるこゝろのよせはかりなるへし。脇。

いはほもしろしさけるうのはな　　兵部卿

是も巖にも咲るなとのよせにや。宗碩一兩輩。昨日坂本祭禮見にありと聞て。曉人つかはして今朝きたりあひ。興ありし事なり。一折果てさかつきのついて。此寺の老僧八十の坂ちかつく。東圓坊尺八。今夜兵部卿尺八とり出られて。平調一手二手はかり吹すてられし。身にしみてそ覺し。俊成八十におほくあまりて。百首歌奉られし中に。蓬かもとの松虫の音もさなからと覺ゆ。夜明かたに旅宿大津へ歸り侍りし。十五日この亭主宗珪。さりとてはとて頓に興行。いなひかたくて。

よるなみやはなの山越なつの海

麓の波更に花とそみえし はかりなり。連歌半に。本須大和守。木の濱のあたり宿所より迎舟さし來りて。まことに心あはたゝしく漕出侍るに。このはる京にて勝藏坊の興行に。

いつ出てかすむ山のは夕月夜

發句おもひ出はへりて。此寺にて。

月をなとまたれのみすと思ひけんけに山端は出うかりけり

千載集の歌にや。まことに舟も出て 覺え侍りしなり。夜に入て南の風吹。片時はかりにやはしり渡りぬ。今夜十五夜の月。おほろけならぬ光かゝみの山より立のほり。誠に鏡をかけたるやうにこそ。一日ありて又の日の連歌に。

くゐなゝくむら苗はこふ朝戸哉

河井駿河守の迎のゝり物。もる山まて來り。か

かみの山をこえて。翌日連歌あり。

卯のはなやみる〳〵ふれる木々の雪

觀音寺より種村中務丞かれこれ下られ。駿河守息の童形同五郎連衆。おもしろく老をわすれぬ。廿二日たひ〳〵抑留ありしかと罷出ぬ。鈴鹿山の坂の下まて乘物。以下同行衆馬。其程ゐのはな土山内の白川外の白河。かねてやつたへをかれけむ。酒肴山中の輿忘れかたし。所所をくりの人出て。關々とかむるもなし。坂の下につきぬ。龜山より又乘物たふ。今日の老屈休息。其夜は坂の下の旅宿。此山のむかし齋宮御くたりの頓宮あしのかり庵なとおもひいつる。ねさめに時鳥しきりになく。

鈴鹿山しのに鳴なる時鳥みやこにいかに聞とすらむ

しのに鳴つるは。すゝかのよせにや。又かの上人この山を越とて。

鈴鹿山うき世をよそにふり捨ていかになり行我身なるらん

うらやみ侍るはかりに。

すゝか山ふり捨ぬ身の悲きは老かゝまれるこしなかゝれて

こしをかゝれて俳諧比興々々。又川をわたるとて。

けふ渡る影はつかしき鈴鹿川八十瀬の浪な老のしはにて

其日のひるほとはかりに龜山につきぬ。旅宿は野村大炊介。やかて風呂あり。何似齋きのふ鷲山正法寺とて山庄あり。紫野の門徒。程五十町はかり。此寺へ作善の事につきてのほりあり。廿三日早朝乘物たふ。よそよりはされふかからぬとみえし。入もて行は折ふし雨氣の空。四五朶の山雨よそほへるけしき。巖たかく苔ふかく。松杉いく村ともなし。凡寺のさま高雄山神護寺にも似たり。まつさし入の寺大龍寺。谷行水めくりてはしあり。栂尾にもおほゆ。仙家ともいふへく。やまことにをのゝえもくたしつへし。正法寺長老拝顏。何似齋點心以下盃

有沈醉。雨にきほひて龜山に歸りぬ。翌朔日いとよくはれて。何似齋の館より招請。朝飯より晩頭におよひかへり侍りしなり。又連歌興行發句。おとゝしの秋京へ登りしついてに。一折の事はへりし。

八十の瀨の水上たかし秋のこゑ

此たひは中々と。たひ／＼いなひ侍りしかは。

とるたひもとつは高し八重榊　一閑

ゆふかけてなけやまほとゝきす　宗長

一日をきて又ひと折。

うへてこなた幾ことし生の園の竹

又二日三日ありて正法寺齋あり。前夕より一宿。同道巳下風呂。又の日鷲の巣山見にとて乘物何似齋誘引。苺の細道なめらかにて。うへよりみなきる水。谷廣くひたして入たる海のことし。たま／＼手をかくる岩もあしはとまらす。むかし山寺ありけるとなむ。鉾楯の用意にや。をのつからの巖を楯。矢倉門は石を棟柱。四方五十町。谷めくりてみゆ。凡數萬軍兵とりむかへるとも。おそるへくもみえす。其日正法寺のならひ興禪寺。是は東福寺門徒住持。和漢張行あり。

わしのすむ山とやとをきほとゝきす

人如五月涼

一折のうちより盃出て。沙喝數盃になりて。歸路暮におよひき。又今月廿五日月次法樂とて催しに。慈恩寺といふにて。

五月雨にますけの水のすゑ葉哉

又廿九日新福寺にて。

かほる香ははなたちはなの五月かな

是は四郎種盛の代。

六月二日。於闕何似齋一續十五首。息次郎盛祥（書イ）明題集の內書ぬかれて當座。又盃いてゝ數獻。夜ふけぬ。人に扇をつかはし侍り。なにゝても書つけてと所望に。

誰をかも友とはいはむなからへは君と我とし高砂のまつ

扇の繪松汀りて。七にて八七十七。

龜山旅宿に[illegible]大炊介。こゝに下りたるより鷹をひとつかこに入て。とりかはるへきためとて有。不便かなしさのあまりに旅宿の小庭に水を桶にたたへせり淀にませ。色々してなつけにける。またかり立あした。この歌を柱にかきつけをきぬ。

かりふしも露かけすつなさそひこん秋をたのむの友に逢迄

何似齋息關六郎正祥。有夜おもひかけ侍らぬに旅宿をとふらはれし朝に申をくりし。

人よりも老の思んことをしそけさは倒てこゝろともなき　正祥

返し。

心にもあらて倒て思ふてふ人のことのはくまやなからん

何似齋にて。五月雨暮しかたかりしに。各心うつくしく。日ことに來りてなくさめおほく。面白かりし中に。神戸右京進盛長（關何似齋一族號神戸平氏也）かたりのついてに。この尺八關阿彌にやとてみせられし。（頓阿切關ヨリトテ尺八名物也一ヨ切ノ尺八也）うつくしきよし申つれは。さらはたふへきよしいなひ及はす。文してよろこひ侍るとて。

曉の友をそえたるいそのかみふりにし老のかひはなけれと

人の許より。篠粽せんへい二色送られしに。

心さしみやまのしけき篠粽数は千秋千へいにして

杉原伊賀入道宗伊（孝盛息伊賀守貫豪）百首歌。龜山にて自筆一卷。こゝかしこ虫はみて有をみせられ侍り。所望してうつして。本をは今の伊賀守孝盛のほせ侍り。例の瓦礫。

今も世はさもこそあらめいその上ふる言のはや類なからん

龜山は。慈恩寺。新福寺。阿彌陀寺。長福寺等四箇寺。各律院七堂みえたり。その／＼宿所々々東西市あり。既に尾張の國へとおもひ立はへる折ふし。駿河より使をし返して二たひ文ともあり。清宮内卿法印（今川氏親室氣故清法印ヲ招ニ）申合同道して罷下るへきのよしあれは。さりかたくて。龜山より京へ人度々のほせ。關何似齋より申調られ。むかへの使傳馬五六千水口のとまり鈴鹿山坂下とま

り申つけられ。六月五日龜山下宿。こゝのもてなしわづらひいひつくしかたし。一日休息。七日に。森隼人佐送にとて。伊勢尾張のあはひの舟わたり。何似齋のをくりの人に。舟をとゝめて申をくりはへる。

靜なみ浪のあはひの海つらをかへりみる〳〵行空そなき

龜山五十日にをよひ逗留。時々刻々何似齋の芳志難謝のあまりなるへし。六月七日尾張知多郡大野の旅宿。八日に參河苅屋といふ所水野和泉守宿所一宿。同國土羅一向堂（本願寺派）一日逗留。十日に今橋牧野田三一宿。十一日遠江吉美。十二日引馬飯尾善四郎一宿。十三日懸川一宿逗留。十五日駿河藤枝鬼巖寺。十六日府中。折節夕立して宇津の山に雨やとり。此茶屋むかしよりの名物十たんこと云。一杓子に十つゝ。かならすめらうなとにすくはせ興して。夜に入て着府。一兩日休息。龍王殿（氏親子息）對面。盃三獻。匠作（氏親）の御藥等の事逐日驗氣の事。とかくして清見か關のあらましに。又京より同道の人あひともなひ侍る事を。先あないせんとて。興津（今川被官）藤兵衞尉正信宿所にいたり。七月廿七日。此磯の夕やみにまかり過るとて。

浪の音夕やみふけて岩つたふ磯まのみちをてらすいさり火

廿八日。京よりの人々の爲に。此いそにて一續三十首。題三條前内府御在國中うけて張行し侍り。同御詠卷頭小原親高。磯よりいひをくられし。

まつらむと駒のあし並よる出て清見か關にひろれをそする

返し。

契りしも忘れにけりな老の浪朝みつしほのひろれするとて

廿九日。宗祇故人先年當國下向おもひ出て。折にあひ侍れは。としわすれの一折張行。

おもひいつるそてや關守月となみ

此こゝろは。先年此寺に誘引して。關にて一折の發句。

月そ行袖にせきもれきよみかた
おもひ出るといふ愚句なるへし。新古今集に。

みし人の面影とめよ清見潟袖にせきもる波の通路

この歌本歌にや。宗祇此寺一宿。ことし五十八年に成ぬ。一折のついて。寄月懐舊といふ題。愚歌。

月はしろやこの磯なれて七十に三四までのあきのしほ風

此寺(清見寺)中に瑞雲庵(山ノ上池アリ)。塔より上に有。杖にて腰をかかへさせ。まかりあかりて。日暮し輿に乗する餘り。俳諧に。

みても〳〵猶又みても涙のうへの雲を片しくあかつきの寺

雲波とて京の人。此寺性海庵のかたはら。京にちきりて草庵をむすひ。十とせあまりにや。今はなき人にて。荒しはてたるをみて。

結ひをく清見か磯の草の庵あらすやなみのかたみなるらん(をイ)

正廣(日比正廣招月也)先年下向。又此磯に誘引して。三保か崎あたりまて舟をこかせて。かへるさに。

月なから幾世の波を清見潟よせてもあらす關のあらかき

關のあらかきの柱にかきつけてをかれしなり。今はその柱たに朽はてぬれは。

かきつけし柱たにこそあらかきの朽てのこらぬ涙の言のは

此寺同祿の後は。等持院殿(高氏将軍)御影堂關國(開山也)さへ。塵のかたはらにおはしますを拝して。深く悲涙して。

清見潟關のあらかきよろ涙を昔にかへす國そさかへん

なとよみてかへられて後。此柱を短冊箱にさす程所望。やかて長資寺殿(義忠號長資寺殿桂山)とりよせつかはされしに。おなしく御歌をそへられてとありしに。

たつれつと都にかたれ清見潟これそしるしの關のあらかき

此歌を箱のふたに蒔繪にさせて自愛ありし。いまは能登國の守護(畠山修理大夫)にあるとなり。

藤增とて十三四の童形。手跡まことの器量とみゆ。父市川宿所にて。八朔の翌日一折興行。執筆藤增。

はやしそめて幾袖のはな萩のつゆ

此こゝろは。この童手跡器量進退のしかるへきを褒美して。杣士のはやしはしめのさの萩と。萬葉とやらん歌にや。萩はもとあらにすくに生立たるを。杣形のやうによめるにや。府中に歸りて。京より同道の人の爲に興行。

さそはれはみやこのふしの秋の雪

心は。此山さそはるゝものならは。都のふしの秋の雪ならんとはかりなり。八月中旬ころまて。子規夜晝となく鳴けれは。齋非時にもたへかたくて。

聞たひに胸わろけれは時鳥へとゝきすとそいふへかりけれ

九月始に。こゝもと四五町罷出て。かへるさに落馬して。半身いたみ。右の手かなはすして。

いかにせん物かきすさふ手はなきて箸とろと　尻のこふ事

京よりの人々。おなしく薪酬恩庵の僧達。かへりのほられ侍る。ことつてに。

哀なるわかことつてや山城のたきゝところへき七十のはて

酬恩庵にして終焉の事を。申をくり侍る心なるへし。神無月すゑつかた。興津にて鹽湯の湯治のついてに。此城の庭の山水を發句にと。所望ありしに。

みるたひにめかれぬ庭の草木かな

今年の暮まてなにかとあれと。もらしつ。

大永五年正月はしめに。龍王殿(氏輝童名)發句にて獨吟。

雪のうちの梅咲庭のあらしかな

はつ子の日とやまつのうくひす　　宗長

あら玉のとしのいくはるかすむらん

伊勢のあのゝつより所望に。

あまたふれはるやあこきのうらの松

甲斐の國より。人の所望に。

かすみけりはるやあさみつしほのやま

河邊の宿所にして。

すゑやみな川かみすめるはるのみつ　　有注

興津よこやまの城にて。清見か關近きところにて。

はるのくもよこやましろし浪のうへ

三條殿御方御月次に。(實望公也[illegible]也御方トハ公兄卿ノ事也三條殿御子)

ほとゝきすまことなけふはつれ哉

河原ちかき所にて。

夕すゝみ身も日もさむし河原風

つれ／＼のあまりに書(歌イ)つらねて。京のしる人のかたへのほせける。

みな月の　あつさなあらふ　けふの雨　庭の池みつ
はちすはの　露はしら玉　かす／＼の　うつしうへなく
木も草も　まかきの竹も　わかえつゝ　こゝろよけなる
すゐはにも　老なのはへて　とり／＼に　みるはことなる
宿なから　おもふことゝは　めしおあし　にこり九こんも
まれ／＼に　さすかに人の　いていりは　絶るひもなく
みえくれと　なにもてこれは　もてなさす　むれのみすみて
つれ／＼と　御茶なたにと　いふはかり　むかしかたりの
老のとも　かたれふりして　はて／＼は　立さるなさへ
しらさりき　こゝなしめなく　我庵は　するかのこふの
かたはらに　竹あみかくろ　窓こしの　ふしのけふりは
蚊遣火の　夕顔しろき　かきつゝき　小家かちなる
あたりにて　市女あき人　さりあへす　な候いも候
なすひ候　白ふり候と　こゑ／＼に　門なとなれと
いつとなく　我今日明日の　あすか川　かはるへき瀬も
たえぬれは　みゝにのみふれ　すこきなつ哉

我等田舍の住居。かやうにかきつけ侍るにて。御をしはかられ候へし。又京はいかゝ候つらん。田舍此頃大雨ふりくらし。いつくかしらさし出へくもなくて。隣のかよひもたえ侍りしに。

いつくもる木柴炭たえ茶湯たえ味噌醤しらぬ雨のつれ／＼

時鳥さへ。文月于蘭盆かけて。耳のまもなく鳴は。十三日に。

あすはこん過去靈に立かはれまつらんしての山時鳥

七月廿九日宗祇年忌に。發句。

のこしつる夜やはわするゝ秋の月　紹喜(氏親法名)
朝かほにさけいにしへの夢　宗長

又。

ひとりして思ふかひなき欝みに君なそけふは戀くらしぬる

此連歌の懷紙にそへて。宗碩かたへ申のほせ侍る。

豐雅樂頭統秋一回忌に。

こそのけふ月日書つる一筆のこれをかきりとおもひける哉
いつかみん都の風のつてことに戀しゆかしのうつの山ふみ
玉ゆらもかゝるとやいはん末の露はかなの萩のもとの雫や
こひしさも限ありけりなれ〳〵てなきか多もあるか中にも
思ひたにたゆるまも哉秋の露きえしと聞てひる世なけれは
たゝあらましのふしの白雪
かりそめも惜みしひなの名殘こそかたみに長き別なりけれ
もろ共に老すしなすの言のはは常ならぬ世のすさひとそ思
數ふれは一たとりも先たちてこのかみにさへなる世なり覺
はかなしやしらへの道の類なく聞えあけゝん名こそ高けれ

豐原雅樂頭統秋。京に有ても田舍にありても。片時おもはすといふ日もなく。かたみに文のかよひ八十に近きまて絶す。去年秋京へ文のほせ侍りしに。此月のけふ十九日いまはの折ふし此返事。奇緣淺からぬことなとかきて。明る廿日に身まかり侍るとなん。抑此統秋は。我道の長者として。天子の御師範に參り。そのしらへ雲井をひゝかせ。又大和歌の千首をつらね叡進。所々の當座の二首三首の歌まて其艶なる名をえ。物ことになさけふかし。されは我等にいたるまてあさからさりけんかし。京都ならはかのとふらひの歌勸進して今日の跡をもとひ侍らん。又心おなしくする人もおほかるへし。逍遙院殿（三條西實隆）にしても。必今日の一續御興行。おもひやり奉るのみ。さてこの曉のねさめに。かのためを十首の歌につらねて。懷をのへ侍る事しかならし。同三條內府（實望）御在國。此十首を申請書加はへる。統秋一同忌に付て。追善の爲。十首の詠歌加一覽。哀憐をもよほし候。仍愚詠の事斟酌なから申さるゝ事候間。瓦礫を述候。

た車のめくるやはへき去年の秋のけふの別れた思ひ出るに
いまはたゝ都の風のつてとても猶なたさりに聞やなすらん
咲萩のもとの雫や末の露と消し名殘ものこることのは
折々は我もなれきて唐衣はるいく秋の哀そふらん
面影はまつ立きえて留竹のれのみ雲ゐに猶のこるらん
露深み草のかけにもうけひくや言のはことのけふの手向に
よしや今夢となりてもうつの山うつゝに殘る面影も哉

秋の夜の長きやみちもまよはしなことはの玉の數の光に
夢ならて今はいかてか水茎の跡や身にそふ形見ならまし
のちせ山しゐて後とふ言の葉の色にや深き情みゆらん

去月三日尊札。今日十九日到來。致拜見先以本懷候。
一路次中無事御下着之由。尤珍重候。殊彼御驗氣之由。御祝着令察候。
一御約束之鳫皮之紙上給候。雖不始于今儀候。御芳情之至。難盡紙面候。畏入候。
一去月十五日不慮痢病煩。存命限今日候處。御札拜見。年來奇緣之純熟候哉。不可得之至候。哀致存命。今一度再會之念願計候。一向平臥候間。以他筆申入候。處存之外候。恐惶敬白。

八月十九日　統秋在判

柴屋軒答

如此返札。翌日廿日遠行。

統秋一同忌逍遙院殿十首。十一月十二日下着。書加奉るものなり。悼統秋朝臣和歌十首。以法花經題號置句首。

めのまへにきえぬ佛ものいはゝたえす昔のことやかはさむ
うつ蟬のよの一ふしや笛竹の聲をしるてふ人もたえゆく
ほけ經に契結へるかひ有てかならす長き闇をいつらん
うちなすに花を催す調へをは手に任せてしつゝみとそしる
れい人のなかに立出おり〱も物にまされぬ姿なりしを
むつましとへたてぬ物にみつかきの久くなれし名殘をそ思
けふわかれあすはと賴む此世たに名殘は人に悲しからすや
きみに傳へ人に教て笛竹のみちのきはめは只ひとりのみ
やよやまてと計りたにも聞せはや老は後るゝ程あらし身に
うつゝある物とはなにを思川みよや消行水のうたかた

爲一周忌。自我偈を。御自筆にあそはされて下さる。御奥書云。

此偈者。一經所說之眼目。諸佛出世之本懷也。而今迎故雅樂頭統秋朝臣周忌辰。拭老淚染短筆。仰願幽靈增進佛果乃至法界平等利益。

大永五年八月廿日　三條西殿 桑門堯空

したふそよ月ははつかの雲かくれ常にある空と思ふ物から

旅宿のきちかく萩荻をうへをきての秋。
心からくらへくるしき夕也はき荻うへて風と露とに
此萩をおりて人に。
てる月もよるの錦の萩か花おりはへけふや露もみるらん
去年の秋尋はなちしすゝむしにや。おなし庭になきけるを。
哀こそたつれはなちしそれかあらぬすゝきか本の鈴虫の聲
五夜六夜鳴て。いつちかいにけむ。又まつ蟲の鳴侍けれは。
たちかはりおとらぬ物や是ならんすゝ虫のれに松虫のこゑ
尾州人
長田四郎太郎親重。此年月病して。剃心たかひのみありて。奉公にも及はす。然あれは給恩にもはなれて後。本心に立かへり。そのはつかしさおもひ出るにしたかひ。さし出る事もせす。されは又誰とり申かたもなくて月日をふるほとに。窮困いふはかりなく。一振一腰身にかくるものまても沽却し。あるはまつりはらへの祈の物につかはし。あるはけふあすのまかなひにして。飢寒の二字この宿のものともいふへし。はて〳〵は妻子をも縁々にはなちやり。此頃はひとりすみにてあかしくらす。舊借の返辨にもおよはねは。催促のせめつかひしきりにして。いかむともせす。思わひての事にや此月の十七日の夜。近き所の觀音に參下向して水をのみ。縄の一尺なければにや。自在といふかきのなはに頭を入て。桁にしめあかりてすへりくたり死するとなり。明る朝巳の刻。下女みつけ。あたりに告けるとなり。如此のもひいかはかりのことにや。五日さきよりいさゝかの朝暮をたちて。しか思ひとりけんことあはれ淺からす。すへて人は當座の口論にてさしもちかへ。戰場にして討死する事。侍の常のことなり。虎は死して皮をとゝめ。人は死て名をとゝむといふことあり。希代の事なるへし。彼とふらひのため。六字の名號を句のか

みにすへて。終に六字をさなからをきて。志をいふ所しかり。

なこりなく露の命のかけところ別るゝはてては南無阿彌陀佛
むへもこそ思ひ入せはとも角もかなはぬ果の南無阿彌陀佛
あさ顔の露の命の秋をへて風をもまたす南無阿彌陀佛
みつせ川渡るみさほにかけゆかむみなれ衣の南無阿彌陀佛
たらちねの心や又も立かへりあはれかくへき南無阿彌陀佛
ふれはかくうき事をしもみつ聞つ命長さの南無阿彌陀佛

此文加賀守安元。今川被官齋藤加賀守予舊好のあまり。芳恩又いくはくそや。かくなからへてかゝる事にあひ侍る〻返々遺恨に。

誰となきをちかた人の上にてもかゝるを聞は歎かさらめや

又此七八九年の愚句に。

かくおもふとは人はしらしな
たかうきも身にかふはかり悲きに

九月四日に。野分おそろしく吹出て。夜もすから老の心玉しゐもなき様にて。明る朝の庭の露を。

萩か花とふしかくふし老か身は野分せし夜のはなの朝露

紫野山門再興奉加の爲に。なにならぬ物から。これかれ沽却し侍りしはてに。源氏物語を老の手なれしをはなちやるとて。

けふよりはなにゝかはらん飛鳥河此瀬をはての老い白波

此本はなちやる人に。

見るたひに露をきそへよ徒然のなくさめ草の言のはことに

萩を折てと人のいひをこする歌。

秋風の吹みたすらん糸萩の心なき枝もおしみやはする

かへし。

あき風はふきみたすともいと萩を折てといふや心なるらん

旅宿の庭に。槇の一丈はかりなる。みちの程五里はかりなる所より堀よせて。

まきの葉はみやまの霧の朝戸哉

此連衆各一種一瓶。興に入し事なり。當山寺主興津彥九郎。清見か關より。かくなんとて書を

くられし。

清見かた明まくほしき涙の上に月の關もる末の白雲

かへしとはなくて。

清見潟關もる月のことのはのなかめをよするをちのしら波

此秋の九月の盡に。七旬有餘の長命なること
をなけきて。七十八九月盡といふ事を。我と題
して。

けふことの長月をしもさきたつる老よいかなる賤のをた巻

此秋の御歌。内府（三條殿）淨空御方紹僖（尾形）氏兼（關口）親高（小原）保悟（由良左近）
殊易（大宅氏）。

淨空

くり返ししつのをた巻長月や幾たひけふにあはんとすらん

（御方）公兄

老らくのかくてふやとは長月やけふいくかへり賤のをた巻

紹僖

ちとせへんやそちは越んけふの秋くり返しく賤のをた巻

氏兼

更にへん老かちとせの長月のけふのくるゝは惜まさりけり

親高

いくとせの長月のけふをさきたてゝ老せぬ宿のしら菊の花

保悟

もろともに老をそ契るけふことの長月も猶ゆくすゑの秋

殊易

老らくの猶行末も長月のけふにくれてもしつのをた巻

此御短冊。奥津彦九郎所望仕侍り。稽古の爲と
て申送りし。やさしきあまりに。又書くはへは
へり。

けふに暮て幾秋老の長月や行末も猶しつのをた巻

冬のはしめ。鳫を一文にそへてもてきたる。其
返事に。

（氏親）音にのみ初かりかれの秋風のつはさをかはす神無月哉

匠作より。りんたうのしろく咲る一枝をみせ
られはヽるに。そへられたまふ歌。

あるか中にこの一枝のいかにして雪まつ花の色に咲らん

御返し。

數々にめやは移らん有か中にまれなる花はうとんけにして

下野國那須助太郎とて。出家して。草庵の庭を

一見とて立より。高野參詣なと語て。瓦礫一首懇望。其故は愛着せし若きもの（壹男）を討死させて。愁傷にたへすして。跡をたにとふらはんとてなと。同行の僧かたりし。あはれにおほえて。

曉をいかに契て立ぬらんたかの丶奥（にイ）の有明の月

やかて此一首を卒都婆に書付へきなとそありし。

此十月。三浦彌太郎（今川被官）とて行跡いとしかるへき有。痢病を煩て日數ありて死去す。愛着のわかき齋藤四郎。そのなけきをなし丶折ふし。菊の枝に付てつかはしはへりし。

よそにたに菊の上の露いかはりか丶らん君か袖をしそ思ふ

ねさめのそら。鳫鳴て過行を聞て。時鳥あかつきかたの一こゑは。うき世の中をすくすなと。古こと思ひあはせて。

曉の嵐にむせひとふ鳫のこゑしとろ也いつちおつらん

由良美作守法名保悟。かみこのためとて。富士のわた一把。その文の返事に。いひつかはし侍る。

何々にとかく駿河のふしわたのたえぬ裾野に雪はふりつ丶

保悟かへし。

雪は唯けさふる富士の綿帽子たえぬ裾野のしはしまたなん

十一月十四日。父の年忌に。何のいとなみもなくて。

年々にけふの泪の玉のみはなにの光もなきたむけかな

痢病に日比わつらひて。たはことに。

思すも直乘なこそきたりけれ名をは甕へこめるといはん

あるつれ〳〵に。當宮（府中一宮下淺間一所鎭座也）惣社の神主志賀駿河守（號忠有宮内少輔）泰守終日ものかたりせしに。當社造宮由來の事あきらかに。代々守護の敬信願文なとの事かたりて後。文にいひつかはし侍り。歌方の事執心有かたくそ覺し。

跡たれししつはた山のそのかみの道のくまなく聞も畏こし

十一月廿日。龍王殿御元服ありて五郎氏輝。をのをの祝言馳走。例年にもこえはへると也。同廿五日。かの祝言法樂連歌發句。

霜となしはつもとゆひの若みとり

古今集聞書五冊。口傳切紙八枚。氏輝へまいらせをき侍る。あとはかもなきことはつかしく思はぬには侍らねと。氏輝廿にもあまり。この道いたりふかくならせ給ひてのち。自見ありて無用のものともおもひ捨給はゝ。八人童子にあたへらるへからんや。

あさければ聞しはかりた君はこれ我家の道に傳へそへけん

宗祇古人この道執心あさからすして。諸家の師範となり。殊に近衞殿下逍遙院殿堯空。唯受一人の御口傳とかや。長阿同宿して數年無執心。一紙の物もきかすしらすかし。やう〳〵此集結緣はかり。只一篇あら〳〵の事なるへし。此時に。靑蓮院殿治部卿法眼泰綱同□有。人の中心よからすして年月をふるに。いひやはらけとありしかは。臘月十日に。連歌興行の席參會。發句。

風やはるふるとしにとくるこほりかな

かの袖ひちて結ひし水のよせにや。

長谷寺觀音勸請の所。長谷堂有夜爐火のあやまち。すての事なりしを無事にうちけちて。そのころほひ法樂連歌に。所望の發句。

うつみ火は池水こほるあしたかな

火坑變成池のこゝろまてなるへし。

建長寺の東堂。歲暮とて出府あり。幸のついてにや。下野守時茂和漢連歌興行。

雪消尙朧天　建長寺　長樂寺

鶯兒纔學語　天龍寺　養得寺

かたえ咲て片枝春まて梅のはな

發句は五郎氏輝の代に申侍る。

宗碩法師。月村齋。歌よみて文にあり。中の七文字ふたもしたらす。

都には三十もしあまり一もしの二文字たらぬ歌も有けり

と申のほせ侍り。

表布衣師三郎五郎と云。綾小路室町とのあひ

た北のつらにあり。跳のものたひ〳〵使に下さす。かへりてはてまのゝこりあるにより。無沙汰のよし申くたしつ。則のこりの ほせつかはすとて。

あつらへのかきりのほせつくたさなん三郎五郎てまの闕守

中御門一位（權大納言宣胤卿ノ事也大永五年）。此十一月十七日御逝去（八十四歳）注進下着。長阿京都にては 晨昏御芳恩。されは一七日茶湯焼香。閏十一月十七日御月忌はしめに。

東なる人をも西にあひみんとさらぬ別れも末はたのもし

（宣胤卿ノ）御辭世の歌とて。見せたまひぬ。

思ひあへすあはれ打みるうちつけの袖になかるゝ水茎の跡

此御返しとはなくて。おちの人 文のはしに御歌とて。

みれは猶涙おちそふ袖のうへにをき所なきみつくきの跡

御辭世のうた 五句を句の かしらにをきて。三十一首の題内府淨空に申請て。月忌の 始一續中催しはへり。此一續中愚歌二首。初秋露。披書逢昔。

秋風の萩の上葉も旅にして袖にや露のなれんとすらん

のちもおしあるかなきかのいそのかみよゝへて消ぬ筆の跡

この一續御覽 せられての事とて。おちの人の文に。

みてなけき聞てとふらふ皆人のそのはしけきをなしそ思ふ

下野守時茂爐火に來て閑談。歳暮の 不辨借錢返辨扶持給分。萬に事たらはぬなとの次手に。例の老のたはこと。

一借錢借米可償了簡なければ。人に はつかしめられ惡口せられて。去へき人も。忽に無理非道のみにて。見し人ともあらす。

一所詮用脚をもとめ。利々賣買 をせんにはしかし。此等の人は。佛神ともいはす。世間の盛衰をおもはす。雪月花の興遊をもしらす。朋友にもうとく。むらさきの 故をもかこたせす。唯利々賣買の工夫。曉のねさめも他事

ならんや。此等の活計なかたちともいふへし。又知形も知行寺領あらむ僧俗の。利々賣買つたなかるへし。又酒屋とて。京堺南都坂本こゝもとにも。利々賣買世をわたるしわさなるへし。

一巡禮往來時々刻々養るゝ事。慈悲のかきりとはいへと。巡禮するものを。唐土には遊手の民とて。許容せすとなん。あるは佛事作善のついてなとには有へし。かならすとすることにはあらすかし。

一なま〱の瘦侍。一所懸命の知行にもあたはす。いかんともせす。さすかに妻子ははなれす。けふあすの糧つきて。女は水を汲。男は爪木をひろひ。子はめのまへに人のやつことなり。はひかしこまる體。まことに不便のかきりなるへし。されは心あるはくひをくゝりなとするもあり。一紙半錢のこともこれらにこそ云人も侍りし。是慈悲の至極なるへし。路頭に物をこひ。家々門々にたゝすむものいふにたらす。慈鎭和尙歌に。

たれそこの目なゝし拭ひたてる人この世を渡る道の邊に

この世をわたる人といふ心あるへし。又古今やらん。

侘人のわきて立よるこのもとは頼むかけなく紅葉散けり

不運のかきりにや。

一獅々舞猿飼金たゝき鉢たゝきやうのたくひは。けには手にしわさあり。哀ならぬにはあらねと。これは世中なにとなき人のたすけもあらん。たゝいかむともせさらんは。世をわひ人なるへし。癩病以下の乞食いふにはおよはす。かはゆき物の限なるへし。

一參禪學道の人あり。かたき大切の人なるへし。しかはあれと。なま〱の參禪。都鄙隨分の侍多く進退を損す。

一教外別傳不立文字の宗師今誰人ならん。參者凡魔魅とも天狗ともいふへからんといふ人侍し。是みな世俗にいふ溝越天狗等にや。今程長老坊主會下。ともに或は官家にましはり。あるは土檀那をほりもとめ。山林斗藪を結緣し。奔走し參者を接し。我身接する知識たれともきこえす。中々念佛三昧こそあらまほしき修行ならめといふ人侍り。かゝるともこそ床しくも侍れ。是つらは我等やうの愚癡暗鈍の修行にこそ侍れ。

一父祖の祭。父母過去聖靈の月忌齋粥。僧衆寄次第。座頭以下餘りに多人數はいかにそや。盆彼岸は各別。毎月人數さためらるへきにこそ。一月の中度々の月忌寄次第粥飯の雜事。目にみえすして借物積るなるへし。

一弓馬物具をもとめ。よき者を扶持せられんや。侍道ともいふへからん。又何ならぬ物。ことかけぬもの。奔走結構せすともなるへし。朝暮の活計いかゝとそいふ人のはへりし。

宇津の山の傍。年比閑居をしめをきて。五とせ六とせ京にありて。臘月廿六日に又歸り住侍らんとて。

年の暮の薪こるへきかとてのみうつゝの山の宿もとむ也

此門出は。山城薪まかりのほらんの事なるへし。

今よりはちよの薪もこりぬへしうつゝの山の松にまかせて

彼山居。萱垣といふもの。あるは蔣箔。竹のすかき。あらためなとして。ふと住居侍りしに。廿七日あした大雪ふりて。こゝもかしこも埋れかはりて。なか〳〵あたらしくもみえ侍れは。

我庵はかやゝこも垣あし簾すゝろに雪をもてはやす哉　有注

此ころ雪を十首。

はるかにて立歸りすむけさしもあれふる里人は庭の白雪

たてうへし庭の石木に花咲ていつこ荒ともみえぬ雪哉
山里の三の友とや今朝の雪かきれのしとゝ窓の呉竹
雪ふれは垣根もたはにふみならしそこはかとなく通ふ山里
蔦楓日のめもいつる太山路のあまりあらはに雪はふりつゝ
夜なふかく道まよふらしふる雪に手兒の喚坂人とよむ也
もろともに心ほそくも消る也筧の竹のゆきのあかつき
霞たちきゆ（むイ）へき峯の春なのみまつことにする老の白雪
八十まて出ぬる事なうれへすむ宿も雪なそはつへかりける
雪の内つみなくと云も今そしる一つかれにもたらし爪木な

彼上人の。庭にうき木をつみをきて。みし世にも似ぬとしの暮の滿足。思ひ出られ侍り。人の心さしわつかなるを。滿足して申侍る物ならし。既に除夜に至て。

あけん年のけふのこよひの新玉のくると云人の誠しるへき

除夜のあした。試筆に。

くるといふ今夜も明ぬ玉のをの絶なはけさの春の淡雪

同二日の朝。山椒にむせて息の下にて。

何もかも取くふと老の山椒にむせにしといはん名社惜けれ

正月廿八日。五郎殿御興行に。

不盡やこれかすみの四方の州の春

すみの山をたち入て申侍り。本所様御方入御。歴々御會席にや。二月八日泰以亭。七日暮程より此亭に旅首途一折興行。

なへてはるいたり至らぬ宿もなし

九日夜に入。北川殿（氏親ノ母公伊勢新九郎妹）御見參。三獻。色々御心のとかなる御物かたり。こゝもとの御他事御神をしほり給へるやうに候て。悲しさ迷惑。此度は子細を申につけて。ともかくもとおほしめし候事にて候。必々罷下候へとおほせ。やかて罷下候はんするなと申て。やう／＼罷歸候。御折紙過分。ことの葉も候はてこそ候つれ。

同十日。宇津の山の麓丸子閑居一宿して。作事（小川法永長者）なと申付。十一日の早朝小川へ罷立ぬ。小川長谷川元長千句懇望。去かたきにより。十三日始行。泰以をの／＼をくりにとて同道。千句三日。發句。

まつの葉ははなそみつしほ山櫻

當國此はるまての心ほそき。一入面白かりしなり。又雨日。

つはめとふ雨ほのけふろやなきかな

行と來といつこもかりの名殘かな

餞別の會席とおほえ侍れはなるへし。

同廿日。すてに小川をまかり立侍るに。泰以そてをひかへて。

立別れ今より後はたらちねのおやのいさめと誰を思はん

かへし。

おほち父君まて老か長生をあはれむにつけ驚かれぬる

かたみに立わかれ。さ夜の中山のふもとかなやといふ所に一宿して。

幾度も又越んとそ祈る也君をれさめにさ夜の長山

かの身をおもふとてこゝろなるへし。このいのるなり。いひおほせられぬやうにこそ覺え侍れ。

抑長山の事。西行上人この山にして。齡たけたる男ゆきつれて。事とも尋られけるに。男語て云。この山は昔長山と申けるといひけれは。いかて長山とはいひけるにか。男。四郡の中に有て山長かりけれはにや。古歌にもありとやらんいひけり。旅のふる小袖杯ぬきてやられけると。彼（西行）上人の東路の記にあり。されと命なりけりさ夜の中山。小夜の長山とや上人も詠せられけるとおもひあはせ侍り。此東路の記は。糟屋中務松綱。今川被官。相州住人。所持と聞て。此度小川より借用して一見し侍りしなり。

廿一日懸川泰能亭。廿二日則一折興行。

はし鷹のとかへる花か山さくら

當城數年さま／＼普請。堀は幽谷のことし。山は岑の椎樫しけく。よそめもたゝ鷹の巣山ともいふへく。春の花雲のたなひくかとみえわたさるゝを興して。花を愛してとかへるにやなと。おもひよせ侍る計なるへし。

懸川廿一日。二日より霖雨。三月朔日まて晴間ちなくふりくらして又連歌あり。

春雨のゝとけき眞木の板屋哉

三日府中六郎殿。明日連歌。日あしけれは今晩發句とて。

花さきてなるてふ三の千とせ哉

けふ桃花のよせまてなるへし。

宗長手記下

大永六年駿州にして正月廿八日。

天の原ふしやかすみの四方の春

同二月九日こゝを立て。宇津の山埋谷。年比しめをき行かよふ柴屋。石をたて水をまかせ櫻をうへなと。普請のついて。かたはらに又杉あり松あり。竹の中に石をたゝみ垣にして。松の木三尺はかり。一方けつりて。

柴屋の苔の下道つくる也けふを我世の吉日にして

柴屋に一兩宿して。おなし國三里はかり南北川といふ所。かねてより千句の連歌こふにより。左京亮泰以（今川被官朝比奈氏[illegible]）かれこれ誘引。

まつの葉は花そみつしほ山櫻

おなし廿日に。その〳〵立別れ。遠江懸川さ夜の中山の麓金谷といふ里一宿。廿一日山をこゆ。西行上人東國みちの記に。この山をこえ侍るに。年なかはたけたる男行つれ。ゆく〳〵かたりけん。昔此山はさ夜の長山と申。ふるき歌にも有とやらん。ほゝゆかめてかたりけるとなん。さては若命なりけりさ夜の中山も。長山にてやとそおほゆる。山中の道三里はかり。長長と松の木の本につゝきたる道なり。旅衣なとぬきてたひけると。かの記にあり。菊川といふ川も此山の中なり。里あり。かひのしらねはるかに見えて。さやにも見しかけゝれなくよこをりふせる山なるへし。この山なかはこえ

て日坂と云。こゝを二里はかゝり過て懸川。十餘年先の年の神な月のころ。こゝにての發句。筆ついてに書加。

かひかれは雪にしくるゝ山路かな

甲斐かねは雪にて。こゝはしくるゝといふはかりなり。懸川にて連歌あり。

はし鷹のとかへるはなか山さくら

この山年々椎樫ふかくなり行中の櫻なるへし。鷹も花をは自愛しけるにや。

三月三日。おなし國見つけの國府堀越六郎亭と。先祖は（九州探題今川）伊豫守貞世。風雅玉葉作者。法名了俊の事。

はな咲てなるてふ三の千とせ哉

天龍川の西濱松庄飯尾善四郎宿所。

すみれさく野は幾すちの春の水

ひくまの野邊名所なり。こゝをたちて濱名橋。ひとゝせの高汐より。あら海おそろしきわたりすとて。此たひの旅行まてと。なにとなく心ほそく物悲くて。

たひ／＼のはま名の橋も哀也けふこそ渡りはてと思へは

此わたりまて。飯尾善四郎爲淸うちをくり。歸路の袖をひかへてのことなるへし。參河國今橋牧野田三。彼父おほちより知人にて。國のさかひわつらはしきに。人おほく物の具なとして。むかへにとて。こと／＼しくそ覺えし。此所一日熊谷越後守來り。物語夜更侍りし。田三同名平三郎猪名といふところ一宿。松平大炊（忠定）助宿所連歌。

澤のうへの山たちめくる春田かな

此所の樣なるへし。東條殿はしめて參する事なり。二三日逗留。連歌發句は色代申て。

ふちなみやさかりかへらぬはるも哉

暮春のよせにや。翌日宗長。

涙や行はるのかさしのわたつうみ

おなし暮春なり。

苅屋水野和泉守宿所。

かせやはる磯のはなさくおきつなみ

廿七日。尾張國守山松平與一信定館千句。淸須より織田の筑前守伊賀守同名衆に。守護代坂井攝津守。皆はしめて人數。興ありしなり。

あつさ弓はなにとりそへはる野かな

新地の知行。彼是祝言にや。

熱田宮社參。宮めくりやしつるに。松風神さひて。誠に神代おほゆる社内。此御神は東海道の鎭護の神とかや。宮の家々くきぬきまて。汐の滿干鳴海星崎松のこのま〳〵伊勢海みわたされ。こゝの眺望たかことのはもたるましくなむ。旅宿瀧の坊興行。筑前守來あはれて。

ほとゝきすまつの葉こしの遠干潟

神官人所望に。

うす紅葉松にあつたのわか葉かな

後堀川院後百首やらん。こゝもあつたのなとあるやうにおほゆる。老のひかおほえにや。

宮をたちて四五町。松原に。兼てさきたち。宮の若衆僧俗色々さかなもとめて。たひ〳〵うたひまひ。つゝみ笛興に入し。心易といふされ法師又興ありしなり。かたみになこりおしみて。立わかれぬ。

おきのゐて身をやくよりも覺ゆるはけふの熱田の宮の別そ

一笑々々。

淸須の旅宿は坂井攝津守。庭ひろくふるきたちの。ほりせき入て。柳の古木。藤山吹のきし。池のさゝ波。水鳥とも羽うちかはす樣。緒にもかゝまほしくそみえし。連歌興行。

さきさかす木は夏木立花もなし

綠陰花にまさるとやいふへからん。咲さかすは。花のさかぬ木も咲し木も。綠陰はおなしやうといふへし。此館は代々守護所。招月庵正徹東國みちの記にあり。筑前守亭にして。

朝かしはぬるやしのゝめほとゝきす

筑前守息藤左衞門宿所。

なつや時卯月はかりのやとのふし

伊賀守亭。

卯の花はきよかるなみのかきねかな

かやうの事は。自然の事おほかる中なるへし。

高品孫左衛門宿所。

水鶏なくあしはらくらき朝戸哉

藤左衛門短冊かきてとて。一兩枚何とも心え侍らねとも。とかくいなみかたくて。

兼てより都のつての文にたにうとき今はの老そくやしき

此たひはしめての見參の心なるへし。

おなし國津嶋へたち侍る。旅宿は此所の正覺院。領主織田霜臺息の三郎禮とて來臨。折紙なとあり。宿坊興行。

つゝみ行家路はしけるあしまかな

此所のをの〳〵堤を家路とす。橋あり三町あまり。熱田の長橋よりは猶遠かるへし。およひ洲俣河落合近江の海ともいふへし。橋のもとより。舟十餘艘かさりて。若衆法師誘引。此河つらの里々數をしらす。桑名まては河水三里はかり。舞うたひ笛つゝみ大皷。舟はたをたゝき。さゝすしてなかれわたりしなり。桑名よりむかへの舟。うたひのゝしり。さしあはせこきちかへ。送迎のふねひとつになりて。心もとなくそをり侍りし。あくるあした正覺院へあしのはにつけて。

綱手縄ひかれわすれし老の波けふは袂に立歸りつゝ

又此津にて等運所望。

飛ほたる百舟のとまる蘆火かな

此津南北美濃尾張の河ひとつに落て。みなとのひろさ五六町。寺々家々數千軒。きこゆる西湖ともいふへし。數千艘橋の下ひろく旅泊の火。星か河邊のなとふることとも。さなからにそみえわたる。おなし國龜山（伊勢國司被官）關民部大輔。今は何似齋見參あらまほしき事ありて。路次申合。既に罷出る折ふし。俄の合戰注進。思ふにかなは

ぬ世中。引かへし八峯峠になりぬ。又をくりの僧俗こゝにてもかしこにても數盃。梅戸よりの迎の人來りて。その日に八峯をこえぬ。この峠は昔より馬輿とをらぬ子細ありと聞とも。老の足一あしもすゝます。人に負るれは胸いたみいきもたえ。谷にも落入ぬへくおほえはへれは。老のこしかき二三十人。梅戸よりやとひよひて。左右の大石をふまへ。おち瀧津波をまたけ。度々心をまとひし。空へもかきあくるこゝちして。やう／＼峠の一屋に一宿。あくるあした江州山上の會下寺一見して。麓のたか野といふ里に。日たかく一宿。このあたりの知人酒肴もたせ。物語（佐々木六角亡方の臣）のつらしかりしなり。又觀音寺より、後藤但馬守のむかへこしかき人夫あまた來りて。長覺寺爰も日たかく一宿。谷中務なとも。中郷土佐守來て物かたり。明る日矢嶋の少林寺。薪酬恩庵末庵。かゝみ山をすくとて俳諧。又一笑々々。

鏡山いさ立よりて見てゆかし年へぬる身はおしはかるなり

ひとりわらひして少林寺。そのあした木の濱のわたりまて寺の僧をくりして。されて發句所望に。

ほとゝきすしける木の葉まの渡り哉

坂本金輪院より。旅宿いろ／＼もたせたふ。夜に入て來臨。明日一折のもよほし。京ちかきいそきにことつけて。發句はかり申をくりしなり。

かされあけふしのれもいさ郭公

大津一宿。寺より上覺院。さりかたきに。

明ぬとや夜ふかき月の水鶏哉

大津のあるし宗椎。又さりかたくて。されともいかにも發句沸底の石木をとらへて。

なつの雨苔のまたなる岩木かな

ある人の所望。またさりかたくて。

さみたれは雲のこなたの柳かな

寺の東圓坊八十の老宿。連歌の内夜ふくる。物語のついてに。尺八のおもしろくもあはれにも身にしみてそ侍りし。關山をこえ粟田口に至れとも。人ひとりもあはす。さしも此峠は。かさをかたふけかたをすり。馬輿さりあへさりし道そかし。京をみわたし侍れは。上下の家昔の十か一もなし。只民屋の耕作業の體。大裏は五月の麥の中。あさましとも申にもあまり有へし。武者小路ふる知人の所にして。ちやうとの乘物の身を。

老のこしけふそのへつゝ時わかぬ花の都の風にあたりて

さすかに都といふ名をむつましみてなるへし。

同廿八日。紫野龍寶山大德寺山門。去正月廿六日立柱拜見。去四月七日崩御。御葬禮は東山泉涌寺。雨さへふり道の草木もうちしほれ。されとも其夜は天氣たちなをりけると也。御七々日は伏見御山庄。般舟三昧院。後柏原院と申とかや。御弔山の座主。寺の長吏。紫野龍寶山南禪五山律衆淨土門。御燒香ひまもなしとなん。この間は京中なにはのこともたえはて。火をけちたるやうにそ聞えし。御踐祚は去三日とそきこえし。

五月六日。月村齋宗碩密々興行。

天か下やはれまつ時さつきやみ

諒闇の御事は作者あるへきことゝ度々いかゝあらんなと申き。逍遙院殿きこしめしつけられて。さらにくるしかるまし。天下あるとあるものしつ山賤に至るまで此御歎は存へき事とて懷紙にかきつけさせらる。うちつゝき兩座。

朝露にてる日なうつすあふひ哉

常夏の外はこゝろのちくさかな

大性寺大仙院東大寺齋點心終日。廿三日下京。十五日建仁寺常光院湘雪にして小齋。一花院東堂靈仙院東堂相看申て。その日に伏見津田

聚情軒 宿。桑風呂腰痛養生。やかて平臥。夜に入て園の竹に陣とる。蚊とも大なり。ちいさきも多く打出。家中にみち／＼。蚊の大將軍勢時の聲たゝ雷のことし。蚊火をたいていかにふすふれとも。おもてもふらすこみ入。古紙帳の城はらふかたなく。夜もすから團扇の粉骨もかひなし。曉かたに思へは。これもうき世中にやと觀して。

呉竹のしけきふしみの蚊の聲や拂ふにかたき塵の世中

夏のみしかきころも。明ぬ夜のこゝちそせし。明る日は聚情軒同道。宇治の川舟さしのほせ。橋のもとよりおりて東雲軒。當國奉行。二三獻ありて橋をわたり薪へまかりくたるとて。

我庵は都のたつみしかそすめ世をうちにしもなにか苦しき

薪酬恩尊像拜し奉り。燒香申て。

するかよりいそかぬ日なく山城の薪を老の荷をそかろむる

七月三日泉州のあたりの人興行に。

今いくかけふ三日のはらあまの川

七夕に法衣かし奉とて。

法にあふ二の星のかり衣けふのえにてや思ひはなれん

今日の法衣を借衣にて。二星ともに萬年の業をつくしはて侍れかしといふこゝろなり。

廿九日宗祇年忌。いつくにても每年一折ある は千句なとの弔。人數もなし。酬恩庵茶湯次。地下殿原までの事にて興行と。院主尊意にて。門外の心傳庵にして。

朝かほやゆめつゆはなの一さかり

八月四日。院主江州矢嶋少林寺御下向。おなしく罷下へきにはあらねとも。逍遙院殿古今集御筆そめさせられ拜領。かたしけなきをも申上んとて。十一日出京。宇治白川別所辻坊一宿。十二日東雲軒。兼日よりあらまし連歌。

霧の朝け河音くらきはれまかな

宇治橋の遠かたの朝夕眺望なるへし。その夜半まて酒あり。風呂あり。十三日の朝明過て。伏見よりむかへの舟橋にさしよせて。又ふね

あり。東雲軒をくりにとて。種々とりつませ。茶の湯なとの用意。とり〳〵面白そありし。槇の嶋水のよとみにさしよせ。終日河逍遙。たゝ身にのみあまることにて。

月日のみ身にそはやせの宇治川やけふはいさよふ老の波哉

舟のうち。短冊なとゝりあへすして。扇に書て東雲軒の扇にとりかへしなり。京より印政因桂各輿にそ。聚情軒に沈醉なから桑風呂に湯治して。翌日出京。袖をひかへて發句所望。

朝戸明の田面いろつく千里かな

十五日。名月とて。月村兼日のあらましにて誘引。逍遙院殿古今集拜領かたしけなさ申上て。月村因桂同道。日くれて罷歸しなり。二三日して月次の連歌。

吹あへすちりあへぬ風の柳かな

下京茶湯とて。此ころ數奇なといひて。四疊半敷六疊鋪。その〳〵興行。宗珠さし入門に大なる松あり杉あり。垣のうち清く。蔦落葉五葉六葉。いろこきを見て。

今朝や夜のあらしを拾ふ初紅葉

此發句かならす興行なとあらましせしなり。波々泊部〔源政邦〕兵庫助宿所。

うへし世や秋といふ秋の宿の菊

同十日。伊勢備中守亭。

いつくもろ千代〔忍カ〕のこりの菊の露

十三日。一色綱州亭。

秋の月いつこてらさぬくまもなし

寺町三郎左衛門宿所。千句。

鴈鳴てさむき空すむあした哉

逍遙院殿久うかゝひ申さぬことゝて御詠。

恨みあれや都に來てもうつの山夢はかりなるあふとにして

身にあまるなと。中々にして。ことのはも侍らぬなり。いつかたへも。年老はて行歩かなはぬ體。罷出ることはなし。この御詠しかし忠存にやと。かたしけなくて。しかあらは短冊を一首の懐紙に申請て。表紙をさせて御目にかけ。宗

長我心をみ侍る物ならし。眞珠庵假屋作事奇麗。折ふし旅宿。又竹の緣。ひかし南ぬれ緣にして。手洗所の水門石四五たて。梅に椿篠つく〔こカ〕しうへそへ。すな入させて。すゝしけにそ有し。樋口油小路其國守梅名所望せし返事に。あかねとも岩にそかふるなとありしに。

あかねとも岩にしかへは同くはつゝしをも猶添てたへかし

伏見聚情軒桑風呂。五木八草湯治。兼約とて。罷下るへきの夜。伊勢八郎殿兄弟一色新九郎殿誘引。若衆八九人。下京なる宿へ夜更て入來。心とけたるさかつきたひかさなりて。老を忘侍し。あしたに。

人しれす身にしめそめし千入をはよそに過行初時雨哉

いかにせは思ひ絶なん忘れなむこゝろのまゝの心ともかな

今夜より伏見の里の草枕いく露けさをはらひあかさん

新九郎ふし見へたふ。

いかにともおほつかなきに我も又おなし心の袖もしくるゝ

なれこしは夢か現かとはかりも語んほとのこゝろとも哉

しらすさ草の枕の終夜たれに伏見の夢通ふらん

八郎殿文のかへしに。

幾夜われふしみの月を思ふともしらてや人の袖のかたしき

京へ出てかへし。

詰てはさめし伏見の夜半の月君かよはする夢にや有けん

伏見への夜。盃の次に。新九郎の扇にとりかへし尺八。そのあふきにかきつけてうちをかすこそ。

あかぬ夜のせめてしるしに取替し忘られ形見たく方そなき

聚情軒桑風呂一七日あまり。時々刻々起居のねんころさ。まことに聚情とそおほゆる。醍醐に聚情同名北村兵庫助。朝めしの招請誘引せられて。おなし乘物にて同道。伏見を拂曉にいてゝ。宇治八幡春日山を見わたし。木幡の里を過るとて。

昔わかおちて杖つく老なれは馬のある里の名さへおそろし

此二三年さき落馬に。今あし腰かなはぬことなり。日野七佛藥師門前より杖にて。まことに

さひしく哀に。あらしにまよふ落葉。佛前のふるき戸帳に吹まよひ。車のわれこゝかしこにちりほひ。むかしおほゆる心ちして。鴨長明閑居の舊跡。かの重衡卿笠やとりの跡。泪こほれ侍し。ふる坊所々の道しは紅葉の朽葉を分て。醍醐のあるしまことに上味ともいふへし。菩提院一見。故准后持佛やうにおもひ給ひけると也。九山八海といふ石。淺茅の中にあり。ききしよりは見るはともいふへし。宗長師匠駿河の宰相とて。此院家に宮つかへせし人なり。常に物語せられしにかはらす。笠取山のふもとうち時雨。今朝宿所に立かへり。又ゆつけなとあり。連歌の用意硯文臺ありしかと。發句はかり。

はつしくれかさとりあへぬ山路かな

その日に伏見へかへりて。あくるあした鳥羽の知人一宿。發句。

たかさとのしくれせぬ空神な月

聚情軒杖二枝。内外のためとて。みしかくなかく切てをくらる。

此杖はたかにはあらす君とわか八十の坂こえん嬉しさ

文にそへて。つかはし侍りし。

三井寺東圓坊。八十まて尺八の名をえたると也。尺八をきりしらへらるゝこと上手にもや。切て送らる。歌あり。

すさめなけ五のしらへすむ竹の齡八十の身になすなみて

まことに八十の作不思議のことにそ。かへし。

君かなす五のしらへすむ竹の千代に八十を取そへてける

祝着をかさねて。殊にこの竹なり。うつくしく手にふれかたけれは。

竹のよのうつくしさ手にふれかたみ君か調へを聞ぬ限りは

此一二日はむらさき野より出て。月村所にして。廿五日の夜北野宮司能祐法師の宿所。因桂若衆誘引。終夜若衆笛吹うたひ。おもしろかりし。朝に社參。發句。

今朝手にもうすきあは雪紙屋川
むらさきのへそかへりはへりし。

ある夜眞珠庵かたはら小寮にして。小僧達聯句の次。一盃のもよほしに。予隣寮に老の夕まとひ平臥し侍りし。をひおこされて罷出ぬ。ある人狂歌とやらむいひて。

七十九年古來まれなり

上句は失念。小僧達けにとや。みなわらはれはへりし。返しとく〳〵なとせめられしかと。なにことをかと。いはむかたなし。田樂のうたひものにや。こひしの昔やたちもかへらぬ。老の浪いたゝく雪ましら。かのなかきいのちそうらみなる。よくそとりあはせけると思ふに。かきつけ侍り。老を祝し賀せらるれと。老は興なくそありし。をしはかるへし〳〵。

七十九述老懷歌十首。

やすけなみたちゐにつけて歎かるゝ我身は老も憖な苦しき
よせかへるいつこも我身あら磯になにむつましき老の白波
やく鹽とあまのしわさの朝夕のからきないはゝ老の白浜
よしや老さもあらぬ世かと思へ共歎くは我身有のすさみに
人のうへに常はきけ共我しらぬにくき物とは老のつれなさ
是も又告そとそ思ふつれもなき老の憎さのかきもしもなき
今は我人のためさへわひしてふことを思ふになけく老かな
忘れてはなからぬ老をなけく哉心にかなふ命ならぬに
こんとしりて初め四十のかとさゝは八十に至る老は歎かし
くりかへし同しことのみ老ぬれはしつのをた巻賤のをた巻

逍遙院殿御贈答。

昨日閑談。近年無如此事。本望滿足難忘候。又加樣に參會所期候。仍十首金玉難打置。於燈下書付候。眞實指燭の體。詠草まて見せ申候。一笑々々。期面計候。

老の波立て見ゐてみ思ふにもかへらぬ物と過し年月
をしかへし思へは老そ睦ましきうき身を捨す慕ひ來にけり
老はたゝうきめをみつにやく鹽の難波のこともからき世中
なくてそと云れん事はしらぬ身のいつ迄老の有のすさみそ
人の上になしてはいかにゝくからむ我たに老は飽果にけり

にくからむ人こそとかはつれもなき老はよの常何か苦しき
人の爲わひしからても老か身の安らかにして世を盡さはや
なかゝらしとはかりしれは命のみ老は心にかなふとそ思ふ
そのかみはこむともしらて杉の門深くも老の入たちにける
老の後同し事とて云へくはなむあみたふつなむあみたふつ

右同宗長述老懷和歌十首。於燈下馳凍筆。

逍遙子。去年の冬。駿河宇都の山丸子柴屋閑齋にして越年し侍りし。つれ〳〵のあまり。岩山道堅古今一句を題にして。百首の歌よまれけるとて。人みせしを。つゝけはへり。このたひまかりのほり。逍遙院殿へ持參。御一覽。御點四十二首。奧の御詠。

いかにして時雨降にしことの葉をあらぬ色にそ染返しけん

身にのみあまることゝもな「る」へし。

十月廿三日四日。京都不慮のさはき。なにことゝは聞えす。右往左往の體。耳にも目にもたゝあさましとそおほえし。江州矢嶋少林寺薪酬恩庵院主。此八月下旬やかて罷下へきとて。とかくする程に。此さはきいてきて延引。今月十日下京に出て。あすは大津まてと云。かれこれ物かたりして。やかてなといふついてに。

老ぬれはあすは近江とたのまぬに夜更れとも袖そしくるゝ

俳諧一笑々々。

若松の池しる谷。白浪さはくなといへは。道の人あまたして。三井寺勝藏坊。山科花山まてむかへとて。人おほくして。若衆誘引。先心をのへしなり。京よりの人をかへし。神なひの森を過て。關屋の軒端見ゆ。折しりかほの時雨。とはかりして。

空蟬のうすき丸屋の夕時雨立よるはかりあふ坂の山

時雨も人もたちとまらぬやうにや。

大津々田宗桂一宿。京よりの堅等勝藏尺八吹て。夜ひとよおもしろく明ぬ。うち出の濱より舟にて坂本。船の中勝藏堅等かれこれ數盃。時雨し風の名殘あらくて。ふねにや酒にや。いつ

れともなくて醉ふしなから。比叡辻の法泉寺榮能の聽月軒。又こゝにて酒ありてそ勝藏かへられし。一兩夜休息。この軒のつくりやう。こゝろをつくされ。茶湯等まて。數奇さへ又たくひもなし。其夜雪ふりて。あかつきかた門に出て。海見やられ。ひえの山つゝき横川の峯。ことのはもなし。俳諧に。

打忘れやすらふ程の朝ほらけ身とてもあしもひえの大雪

一笑々々。聽月の屋を發句と所望に。月をきくとはいか樣にそや。分別なけれと。月なから雪折やう計を。

月なから雪おれ竹ののきはかな

月をも聞こゝちそかし。

矢嶋へとて。木の濱舟に火鉢入て。あらしも雪もしらすそわたりし。少林寺相看門外の妙勝庵宿庵。海をへたてゝもなを都のさはきゝこゆれは。

爰もし耳やすからぬ白濱の都の風のつてしたえれは

此里人の稻の藏まちつけはこふ馬牛。富にとみをつむにやとそ見ゆる。めの子ともいねつきこうたうたひたはふるゝ聲。是そ耳にめてらるゝこゝろなるへし。

耳やすきことゝは今夜里の子の稻つきうたふ聲聞ゆ也

大嘗會のさか田のいねと侍るも。此里のちかきあたりとやらん。

旅宿の小庵。此すみあらし。嵐も雪もたまるへくもなけれは。大工めしてうちかたむれと。山とをくして材木まれなり。堅田坂本よりもとめて。よしのかきね蘆をふちにわたし。冬籠のかまへをろそかなるを自愛して。

梓弓やしまの里の冬こもり今をよろへと梅も咲なん

ある人來ついて。發句所望に。

わたる瀨やいつくやす川朝こほり

今日よりいなひはて侍るへし。中鄉土佐守ふる知人。二三里へたてあり。きゝ

つけて。炭十荷かれこれ。此里は山遠くて。炭薪賣買もたやすからす。難得の音信懇志々々。文のかへしにつけて。

その里に住こゝちさへしからきの眞木の炭やく煙たてつゝ

ある夜爐火しとろなる火榻し。ねふりかゝりて。紙子に火のつくをもしらす。おとろきて。

とろ所なくてそ明ぬかた裾もむれはしり火の恨めしのよや

杉江の兵庫とて。此あたりちかき古知人尋來。樽一荷又色々。此人は清宮内卿法印につきて。又のさきの年駿河にくたられし。三上越後守使者坪田平右衛門尉。樽一荷兩種そへたふ。十一月廿一日。少林寺一休和尙年忌。曉より雪ふりて。

庭の松空しもけふたしら雪の枝もたはゝにふれるあかつき

院主。

十かへりの花ともみえてけふことにいく白雪の庭の松か枝

よき酒とて。小甕に一をくりし。院主へ例の俳諧。

玉たれの小甕はみるめその底はうつすに盡ぬ年はへぬへし

院主。

不消安排一口無兩舌

玄周とて南都の人。この比は京。參河國知人有て。遠江駿河まてくたりて。此廿二日少林寺尋來。二三ヶ國は無爲の演說。尾州小守護代坂井攝津守音信傳達。百疋赤池茶筅二。懇切にそ。廿三日。三井寺勝藏坊日くれて訪來。終夜尺八。玄周ありあひ。なにとなくおもしろく侍りし也。廿四日歸寺。少林寺僧達一兩人若衆誘引。酒ありて。やう〳〵にそ歸られし。このあかつきせめてのことに發句。

そらは月あけかたとつるこほり哉

寒月の有明にたへすしてなり。脇。

夜ふかき鳥にそてのうすゆき

しかあらは。今日一折なと申侍りしかと。殘多

し。廿六日京へ入のほするついてに。三井寺勝藏へ。

左右おもふ君々立はなれ一夜もよそや出うかるらん

若衆多くつとへ。自愛の人なるへし。彼寺のふるき歌。けに山のはしのよせもあるへし。

長夜夢にくるしみて。

心のみまとろみさめはまとろまて覺ぬ夢路や絶んとすらん

しはふきやみに身をくるしむ。曉に。

誰そこの老のしわさのしはふきを先に立つゝ常にをとする

七十九の易命期。極月一日殘夜と卅日に限れることを。

えしなすは生かはれるか我なれやことしをかきる命成けり

少林寺納所へ。さむきあしたに。

老ぬれはねかひ物そよあま酒のみなから口にすゝり入はや

方外軒道堅。此一兩年能登の太守（畠山）□助在國。予駿河にありとや座頭つたへて。芳書。江州矢嶋少林寺駿河文の中にあり。歌あり。

猶そ思ふ越のみ雪に埋れてもふしのたかねの春の明ほの

京へつたへ。月村便風あらはと申をくりし年の暮。雪中とゝきかたき事にこそ。

昔君ふしのれはみき雪もよに白山の名やたくふ空なき

一休尊像太刀の尊像感得奉て。

打拂ふ床のあたりにをく太刀のさやかにいつこ曇る塵なき

くもりなき刄すゝしき劍太刀ときし心のますかゝみかな

臘月四日夜。曉夢中。柏木禪門榮雅宗祇もありて。駿河府下向。御上のをくり申。國の境とおほゆ。そこにて。さてもなとて淸見關をは御覽せさらんと申心地にや。

思へともかへらぬ涙や淸見潟けふは岩こそ磯うらむらむ

夢中にやさめてにや。おほつかなし。あまりにふしきに覺て。おきてかき付侍り。しはすの楪はきする家にもきこゆ。

すゝ花は枕に咲て老か夢いひきおろしにをのれさめつゝ

一笑々々。

臘八。

今夜これいかなる星の曉にみれは空のみきら〳〵として院主。

知音識後更誰知

毎夜まとろみたにせぬあかつきに。

鳥の音にめのみさめつゝいつちとも行方うとくあたら曉

旅宿草庵。杉の板戸もすきまおほく雪風吹入。所々とかくふせくとて。

身なつめはいとはるゝ老の風の音ちりのすきまて防く心に

中郷土佐旅宿を訪。飯米薪雜事等とりくして。爐邊の閑談二夜。かへりて後傳達せしなり。

米に薪雜事等とりくしてたひれの雪を酒のよひ〳〵

此旅宿は。しな木の濱。山田矢嶋の海つら。鳥とりあみをく舟とも。棹をよこたへ數しらす。伊吹おろしひらのねおろし。簑笠なみにゆられ浮沈する體。殺生のにくさ。又かれらことわさ不便さ。おもへはおなしやうにや。曉夜鴈のをりわつらひかなしむ聲々。水鳥ともの羽音。いつれかいつれならむ。やう〳〵におりぬやときけは。はへをく網にや。すなはちころされさはく聲。あさぬしともいふにたへす。たゝ耳をふさく。枕うくはかりにて。

哀なる鴈の聲哉めもはるにあみをきわたすなみのあけほの

波のうへたちゐまかするあし鴨の網の綱にかゝりぬる哉

此下句等類ありや。使者右兵衛尉高好より。樽一荷なにやかや。くた〳〵敷にもらしつ。河井又五郎使者。樽は代。炭十籠。雪中音信眞ケ眞ケ。親父故駿州連歌とて合點。吊の事書狀引ひらきみるより涙せきあへす。去年の夏にや。彼宿所連歌。今にわすれかたし。逢坂の關屋より吊下人。上下につたへて發句所望。これそ關のよき過書とよろこひ入て。

雪に入たえすあふさかやまちかな

關屋の祝言。これに過へからす。一笑々々。

十一月晦日。駿河より彌太郎上。駿遠無事先々大慶。黄金二兩。粂以。時茂。左京。下野。越年の音信。又一兩。房州。これは京へとて思をきたまひけん。遠行のあとより此たひのほせらる。

我爲に思ひ置けんかろからぬかれての心いかにむくひん

伊勢龜山關戸部。臘月十七日矢嶋の旅宿尋來入。殊に雪中。年の暮無餘日に。さらはものゝたよりにもあらす。眞ケとそ覺る。此月のはしめ飛脚書狀。このあらまし。唯尋常のなをさりことにやと思へは。かく雪ふりはへたることのはもなし。則旅宿のため食籠なとをくりはへるついて。

鈴鹿山こそなふりつむ雪のうちいかに越ける心なるらん

やかてかへし。

すゝか山ふり埋もるゝ雪のうちもみまくほしさの道求つゝ

夜に入て來臨。雪よりつもるかたみのことは。夜も更。爐邊ひさをならへ。田樂たうふの盃たひかさなりて。旅宿にかへられき。樽五荷代五百疋。炭六筒。蜜柑二籠。干物色々。旅宿所せくこそ。逗留五日。此内種々懇志とも。日夜かれへもこれへも來入。爐邊盃の中。連歌八句。

ふるかうちのゆきあふみちのやとり哉

雪中國をへたて尋來入の心なるへし。脇。

たひれわするゝうつみ火のもと　　宗鐵

廿二日拂曉。飛駄の陣へとて歸城。今朝はたかひに暇にをよはすと。きのふ申かため。旅宿をたゝれ一町はかり乘物に入はしらせて。

たのまれとはるとそ契る行年の殘りおほかる君に引れて

春はかならすと。きのふちきりしことなるへし。年の暮世俗と云節季とて。此里も家々つきのゝしるを聞て。

臼杵の音にゝきはふ此里にいかてたひれのすむ心かな

此たひ丹波の軍何となく破て。若槻次郎無比類討死の聞えあり。父若狹守先年河原林の城

に一人入て。名譽の死のきこえありしなり。父子ともになれみし人なり。歌ことなとなけきて。逍遥院殿へも。常に參りかよはれし。哀にも不便にもこそ思ひ給けめ。

とりつたへ若槻弓のいかなれやしなぬか中のあらぬ死する

とりつたへは。父子名譽のこゝろなるへし。

廿五日。節分の夜。大豆うつを聞て。

福はうちへいり豆の今夜もてなしを拾ひ／＼や鬼は出らん

京には役おとしとて。年の數錢をつゝみて。乞食の夜行におとしてとらする事を。おもひやりて。

かそふれは我八十の雜事錢やくとていかゝおとしやるへき

立春のあした廿六日。易の勘文七十九の年已暮て。

けさはかつ八十に息を延てけりかふかへ文の年もくれにき

おなしあした。

けふよりはいきていつまていつ迄の急く方なき八十年の春

天明和尚の歌に。

死なうとも生ていつ迄あらふ共身にいろはれは煩ひもなし

おもひ出けんなるへし。

宗梅法師。歳末とて茶五袋。種村中務貞知觀音寺より氷一駄。宮木入道眞觀しのね藥のためもとむるを聞て。

君か爲冬の野に出てしのねほる我紙衣に雪はふりつゝ

かへし。

我爲にもとむるしのね雪のうちのたかなと社は生も出けめ

宗牧伊勢みやけとて。芥子三袋京より。

鞍馬路や小野路や爰に入かはれけしからぬ雪の旅の宿りに

口のうちさはやかなる事なり。

正月餅つく家々ほこらしきを聞て。

大方の旅のやとりにもことたりぬ隣の餅をみゝにつかせて

除夜に今夜はなき玉歸くる事と經にもいへり。詞花集やらん。涙の玉を手向つる哉ともあり。宗長七十九。おほくの故人。茶湯燒香燈を

かゝけて。

我そ此道しるへしてくへきよひまたゝき向ふともし火の影

已大永六年くれて。七年正月元日。

梓弓やそぢの春たちからにて人の界をひきはなちてよ

今日少林寺齋點心。試筆元日祝を。

動きなき千年のかけの春にあふ世を人もちぬかゝみ山哉

當國太平。大守心のまゝ。都鄙いつくももちゐのかろからぬこゝろを。試筆にとりかく事にや。もちゐかゝみ。初音の巻にやとおほゆ。俳諧にはあらしかし。抑八句存命言語道斷。此一兩年。まめことにもあたことにも。毎日のなくさめに日記しをき侍る。いつしかおとろきてもかへらぬ老の波に筆なけ捨。けふまての事なるへし。

まことにや僞にやといひすてゝ罪さり所いつく尋れん

折にふれなくさめ筆のなにならぬ楳は結ふ夢行水の泡

如此のあたこと元日までとて。筆をなけ捨つれと。逍遙院殿年始御書御詠。これ又うちをきかたく存ることにて。

なかめやる雪の麓の柴の庵いかに吹らむひらのねおろし

柴屋旅宿おほしめしやらるゝかたしけなさに。御返し。

今そ思ふひらのねおろしなかむらん雪の麓に住へかりけり

宗牧御發句申請。旅宿に下て。脇第三よりつらねて。百韻のあやにく。御發句の珍重銘心肝さりかたくて。終に百韻にそなりぬる。

梅かゝたきえあへぬ雪や匂ふらん

心さしふかく染てしの雪。かへりて梅か香をにほふらんなと。まことに歌異なる御作意とそおほゆる。

少林寺宗精藏主。俄和泉堺へ下向。離別の詩あり。三四句題として歌二首。

兩地江山今白頭

またるなよ今わかる共春の内に君にそ老をわかえつゝみん

半窓月落一燈幽

わかるへきことた思ふにまとろまぬ月は有明のよひの燈火

此五日六日。さきの日むかへの文來りしをは。とかくいひのへ。けふはいかにもとゝめやるかたなきに。

しゐてみなかれて別をとゝめすは俄に物のけふや悲しき

少林寺近里地藏院詩をゝくる。又三四句。

茅檐雖野有祇待　晴好雨奇江上止

涙の上の山ほの霞む雨ならし春しも君を知人にして

觀音寺より平井右兵衛尉年始音信。樽二荷。鳫荒卷色々。中郷土佐正月に獨吟のためとて。舊冬より所望に。

あさかすみみなみを四方の立とかな

江州は南北といふにや。

矢嶋馬場兵庫助興行。

梅やなきにほふかうへのかすみかな

三井寺よりとて。所望に。

かさやはるさゝなみよするこほり哉

馬淵宮内少輔殿。かけても思ひよらす。かねても中通る事もなし。超過音信。福田八郎僧宗觀久知音につきて傳達あり。內儀にや。領中天神宮千句發句とて所望あり。廿五日明日よりとて俄の事也。種々の音信にめてゝ。

梅さかりにほてる波のはる日かな

宗祇月忌初。廿九日燒香のついてに。

立かへり春やふゆこもるけさのゆき

はるやとき冬こもらする今朝の雪

おなし事なから分別なし。

餘寒の雪。曉より少林寺の松竹ふりなひかし。下折のひゝきひまなかりし朝なるへし。おもふに夢まほろしといふ事つく〳〵と。

なにかそれ幻とはゝ夢やこれ我まほろしのなのりかほせん

わきて誰二になつけいひをきし夢や幻まほろしや夢

生死に暗々として。

いかにして何そとゝはゝ心より外にはすへぬ闇にそ有ける

音羽山きゝてもいかてあふ坂や闇のこなたに八十へぬらん

福田八郎僧歌をかきて懇望。

一筆の跡みるたひに思ひ出て南無阿彌陀佛と唱へわするな

返し。

なれし世な忘れかたみに思ひ出に何れかさきの南無阿彌陀

松平大炊助。去年秋九月とやらん。舊妻にをくれて。愁傷つたへ聞しかと。ほのかなることは。えなむ文にてもとふらはて。此春たしかに聞て申つかはし侍り。

去年の夢なかたしき衣さむしろの塵うちはらへ春の手枕

はや新枕なともやといとおかし。

京へ田舍へと。人つかはす朝に。

一人二人めしつかふ猶いな舟のいなと名つけて下し登せつ

めしつかふもの油斷して。雜事錢なととられて。事かくるまゝに。

愛もとの不弁ないへは雜事錢今宵ぬもしにともしせらるゝ

又京都の事きゝて。

こきませの櫻はさけと淺みとりみやこは柳一もとのはる

舊冬以來京都右往左往。うつゝの事にもあらす。大永七二月十二日十三日。七條わたり一合

戰。武田伊豆守代々粉骨の勝利をうしなはれ。さらは敵といふへきも誰ならす。丹波山家樵夫やうのものにや。抑明德に。山名陸奥守內野にいたり。數萬の軍兵雲霞のことくたなひき入洛す。然はすなはち御動座。一日一夜のうち。陸奥守悉く滅却。又應仁年中諸國守御敵となり。京中三分二大堀をかまへ。東西十町其半に。大內左京大夫御敵にくみし上洛。終は降參有。御免下國。されは國々の守もちり／＼に下。さてしはらく靜謐。又永正年中。三好筑前守といふもの阿波より攝州にをしうつり。おほくの城郭落居。道永江州山上に下向。程なくその五月に入洛。筑前守父子一類侍。あるは討死うちすて生捕。又しはらく無異にして。舊冬丹波[illegible]浪人等蜂起して。剩嵯峨西京桂川を過て。七條邊迄亂入す。しかれは六條大宮わたりまで御動座。道永東寺南大門一日一夜。桂川左

右の合戰。御動座とて。御敵楯をふせ射矢をとゝめかしこまりけるとなり。夢のさめたるやうにして。十四日に坂本へ御下向。志賀木濱山田矢橋守山二三日。長光寺かりの御所しつらはれ御うつり。筑地以下普請。しはらく御座のやうに聞ゆ。長光寺名詮自性を。

此時とあふかさらめや春の日のなかき光を四方にしきつゝ

東海道北陸西國中國の侍參給。萬の名乘。昔木丸殿のゆくは誰子そなとも。さなから長光寺の今にや。あら〳〵の行するゑ。筆にまかせはへるへし。

三月四日。矢嶋をたちて。甲賀水口といふ里は十町はかりつゝきて。昔御參宮の御所なともおもひ出られ罷すくる程に。此所關おほく門門より關々といふを聞て。

水口に我やみゆらん門ことにせきよ〳〵ともろこゑによふ

佐治長坂。今は少雲軒三雲軒。むかへにとて同庵雨宿。人數なくして。連歌一順八句。

やまかすむ谷の戸ひろき田面かな

甲賀谷といふ心なるへし。此庵主あまりの懇志を。

ことにふれ人の情をやそちまて見しも君のみ深き色哉

返し。

契あれや一木の陰のことのはの花にとはるゝはるの行すゑ

又江州河井又五郎。父一回忌のためとて。名號の發句。

なきにしもしかし夢てふはるのはな

木濱ちかき所。井口三郎左衞門。伊勢龜山まてをくり來り。歸路に所望の發句。

里つゝき門うたかひのやなきかな

柳おほき里のさまなるへし。

細字のもの五六十丁。老眼をしほりうつすに。文字のかたち鳥のあとにてもはかなく。筆うち置て獨わらひに。

墨筆もつくえ硯も笑ふへしまことに鳥の跡にこそあれ

三月七日。鈴鹿山をこえて龜山逗留。十四日連歌。

おそさくらのちそさかましさかりかな

廿首題ありて。歌一續。

初春霞　　宗鐵

かすむめりいつより春の曙と思ひもわかぬ四方の空哉

竹鶯　　宗長

雪とつるいさゝ村竹すゝか風吹ときぬらしうくひすそなく

浦眺望

おきつ波鹽ひのかたの松原のこすゑの上にかへるともみゆ

寄神祝

なへてよやもなくもあらむ事もなく願ふ心は神そ知るへき

此ちかきわたり。あみた寺の本尊。歯生いてゝ人のことし。奇特ともいふにたらす。此寺の院主九十八とやらん。同し此歯こと〳〵く生出たるなり。人やらん佛やらむ。折しも花のころ。龜山の左右寺々の花盛り過て青葉まじりの山路をわけて。河原三町はかり。神戸佐藤長門守宿所。一日有て翌日連歌とて。發句一廻もよほしに。

はるやこの松にかゝれるやとの藤

暮春は萬物景氣の後にて。はやう藤山吹の外もなし。脇亭主。

さくらはのころ庭の木ふかさ

なにとなく。暮春のおもかけやさしく候て。又廿首題ありて一續。

海上霞

舟人も心なくらしいせの海うちはへうたふあさかすみかな

不逢戀

よせかへる汐干のかたの白波のうつせにゝたる物おもふ哉

神戸を立て。高岡寺のこなた一里あまり。長門守うちをくり。若衆をの〳〵引具して。日くらし酒の中に。

長らへはけふの心もみゆへきに老しす物はかひなかりけり

又若衆の中へとて。

さそはるゝ人ならませはふしのれの駿河へいさといはまし物を

寺の院主所望發句。

今朝はたれわかのまつ原朝かすみ

此松原ちかき寺なるへし。けさと朝霞いかゝとおほゆれと。けさの朝けなといふおなし詞にやと。心をやりはへり。

あさけ日永をすきて。桑名等運一里はかり迎にとて。追々若衆來て。日暮等運庵。翌日連歌興行。

たなひかれゆくはるならし夕かすみ

廿六日。尾州津嶋河のほと三里はかり。桑名衆老若。舟にて雨後河水をさしのほす。數盃の中津嶋より又むかひのふねにのりうつり。をくりの舟もしはし川上にうかへてさしやらす。見をくりみかへりてそへたゝりぬる。正覺院やかて一折興行。

ちるなみよ青葉はいつく花もなし

若衆執筆。手跡うつくしくそみえ侍し。

廿七日。尾州清須坂井攝津守旅宿ねんころにいひつけられ。又翌日興行。

はるいくへ岩かきつはたきしの藤

脇亭主村盛。

水にかけそふ庭のやまふき

織田丹波守興行。

はるよたゝあかすはちよもこよひ哉

三月盡なるへし。曾ともかれこれ懇望ありしかとも今月一日まかり立ぬ。かつは傍若無人にやとおほえ侍れと。うちつゝきの老屈たへかたくて。熱田宮へ。攝津守うちをくりのやうにして。宮人同意。途中にても酒ありし。一興にそ。宮の宿坊興行の事。老屈とて。兼日より無益のよし申さためしかと。攝津守同道さりかたきに。さらは發句。攝津守さた有へきよし。數度色々申つれは。

ほとゝきすはつれそはなの運さくら

俄にては思案入たる趣向珍重。脇なにとも分別なけれは。

なつとぼしるしはるやくれぬる

若衆おほくありて。その興ありしなり。宮をたちて。又攝津守をの〳〵。四海まてはるはると打をくられ。名殘おほくこそ。宮と鳴海の間に笠寺と云あり。人おほく詣つるをみて立よれは。寺の本尊観音のほうはれて。笠をきせつる。殊勝にもあはれにも。さま〳〵なり。此寺のむかしも此本尊ほうはれて。笠をきせ奉りける。さてなむ笠寺とはいひけるにや。參河苅屋水野和泉守館兩日逗留。俄一折興行。

はるはくれぬほとゝきすはたはつ音哉

みやけにとて五百疋。去年のほりしにも千疋はなむけ。以下の芳恩。惣して此年來萬疋にもおよひ侍らん。おそろし〳〵。安城一夜。松平與一尾州よりこゝもとにて一夜。それよりやはぎのわたりして妙大寺。むかしの淨瑠璃御前跡。松のみ殘て。東海道の名殘。いのちこそなかめ侍つれ。今は岡崎といふ。松平次郎三郎の家城なり。深溝とて松平大炊助宿所。去年上にも一日逗留。このたひ一日逗留。興行。

しげりあふ木すゑはなつの外山かな

西の郡鵜殿三郎宿所ひるとをり。ゆつけなとありて。井奈といふ牧野平三郎家城一日逗留。又興行。

卯の花やなみもてゆへるおきつしま

此城上嶋といふ名をよそへてなり。わたつみのかさしにさせる白妙の波もてゆへるあはし嶋山。ことはをかりて。たゝこゝを卯の花の波もてゆへる奥津嶋となり。

今橋牧野田三宿所一日。興行。こゝは古日以來年々歲々芳恩の所なり。興行。あはれにもむか

しおほえて。老屈をわすれぬるなるへし。

けふさらに五月まつはなのやとりかな

むかしをおもひ出ぬることになん。此はなは五月をまちて咲といへは。卯月の花と申侍。風雨に又一日ありて。國のさかひの城鵜津山にいたりぬ。此鵜津山の館といふは。尾張三河信濃の堺。やゝもすれは競望する族ありて。番衆日夜無油斷城なり。東南北濱名の海めくりて。山のおひ〳〵せき入。堀いれたる水のことく。城のきしをめくる。大小舟岸につなかせ。東むかひは堀江の城。北は濱名城。刑部城。いな佐山細江。舟の往來自由なり。西一方山つゝきにて。敵のおもひかゝるへき所もなし。此一兩年を。長池九郎左衛門尉親能承。普請過半。本城の岸谷の底まて堅にほりつゝけ。あしをとゝむへきやうもなし。三ケ國の敵のさかひ。晝夜の大鼓夜番の聲無寸暇きこゆ。一日逗留。連歌興行有増。しかれとも老屈休息。發句はかり一順八九人。

なみやこれかさしおる花なつの海　　宗長

當城の景氣まてなるへし。わたつみのかさしにさすといはふもゝ。君か爲にはおしまさりけり。本歌ともおほゆ。かさしおる花は。當城を以て隣國のかさしたるへき。千秋萬歳なるへし。夏の海とは。春過てなにの花もなき時。此海のすゝしき波をかさし折花と申侍り。脇親能。

まつにのこれる礒のうきみる

本歌のよせもゆへありてみゆ。

引間に一夜。みつけの國府ひるとをり。そと六郎殿へ申入。懸川二日逗留。さ夜の中山途中杉原伊賀守上洛。かたみにことの葉もなくて立わかれぬ。その夜かなや一宿。それより懸川の旅宿へつたへて。

夢なれやさ夜の中山なか〳〵にあひみすはとそ立別つる

粮物なと。ゆめ〳〵しきをくりものなるへし。かなやにとまりて。

幾度か又やはこゆと越て又けふはやそちのさ夜の中山

大井河を見わたり。藤枝を過て。宇津山丸子の閑居にいたり。さてもおもへは。去年七十九をかきりと門出せしに。又越きぬるつたの細道。心ほそきこゝろも長々。いつちいぬらん。長生の老の因果。いかなるはてのしにせんと。恥おもふより外はなし。抑喬山御事はをきぬ。房州豆州又かれもこれも。一とせの夢は我いかてさめさりけむ。

数ふれは我たか為もこのかみの死をくれきぬ是いかにせん

客人清見か關一見とて。彼寺へ文かきてそへやる。かへりきてもともかくもなけれは。興津彦九郎かたへかへしにかきそへて。

いさゝらは我名をかへて呼てみん宗長故やつれなかるらん

京人に立かはりつゝ清見かた岩しく波もおもふとをしれ

三井寺。

かへるにはふしのれもしかしほとゝきす

參河松平大炊助。勾當とて座頭弟子二三人一宿事。上下送馬なとの事。書狀に。一兩夜隣庵毘沙門堂借用して。歸りのほするとて。あまりに不辨にて。扇一本つかはすついてに。

ほか〳〵のたかき聞えの富士のれの柴やは煙立わひぬとて

さひしとよ又もたつぬな〳〵のしるしの杉そ柴屋のかと

存城勾當坊。

[illegible]喬山一回忌六月廿三日。彼御詠草中廿首。五文字を一文字つゝ句の上にをきて。

獨吟百韻

かせはなをわすれかたみのあふきかな

清書人にあつらへはへれと領掌なし。ちからをよはす老筆にまかすとて。

さらてたに行としこほる水茎の八十の跡も手向とそ思ふ

奥州岩城民部大輔由隆多年書狀通用にて。度度座頭あまたくたしつるに。いつれも勾當ま

て四度六度の扶助。此度泰昭白川關一見悲狀。去年夏より彼館にて越年。此六月上られぬ。色色芳志。道の物可然馬ひかせのほせらる。されはかつは愚老もうら山しくおほえて。泰昭の文の傳達の樣にして。

八十そよもしも猶もしなからへは岩木の奥の中にかくれん

述老懷俳諧一笑々々。今川氏輝にして當座。

山眺望

月いつるあかつきかけて別ては入日にかゝる峯のよこくも

尋虫聲

夕風にすゝの聞えし秋のゝはふりすてかたき蟲の聲哉

おなし一回忌。長閑寺和尙有韓詩。題三四句以和也。一首東和耳。

猶留仁愛□林藹　花白紅々草自青

彿はさなからあかし色香にてみちの草しけき花そ悲き

同一回。中御門殿文字かしらの歌御勸進に。りもし。

山家

りんゑせは水草きよき山の井のあかぬ心はさもあらはあれ

りうのすむ水上つれにはるゝ日も雲風雨の絕ぬ山かな

七夕に氏輝にて。

名所七夕

田子の浦や天の河原の年々にたゝぬ日もなみ戀ぬ日もなみ

嶋鶴

よとゝもに浪より松のことのはの敷嶋の道をたつの諸こゑ

神祇

千はやふる神のしめ繩かけまくも今やかしこき例なるへき

七夕に。老のいのちなかきをなけきて。

れかひきぬ願ふにたえぬ八十也けふそ我世はあひはての星

俳諧。一笑々々。

おなし日。庭の萩につけて人にやるとて。

もとあらの花咲にけり天の川萩かりあけて渡ろかさしか

丸子七月九日のあしたとくおき侍るに。隣のいといたひけなるおさなひ。腹の煩にてうしなひ。歎かなしむをきゝて。夕に。

けふいかにれのみ立らむよそにても思ひ暮しの袖そ露けき

なてしこのはなに付てつかはし侍し也。

柴屋一とせの七月十四日朝の野分に。客殿吹こほたれつと聞し。その比越前に有て。歸下りても久あらしはてつるを。おとゝしの冬。又この三分一はかりの茅屋をとりたて。ことしの七月九日に歸住て。庭のなかれ淺茅の中に埋石なととりのけて。門外の川よけに過半とり出し。のこる石こかしこにちらしをきしを。又とりならへて。水をすまし心をなくさめ侍る。晩涼に。

影も手も老かゝまりぬあらたむる淺茅かそこの水はもと水

すみうつる影恥かしなうつもれし蓬かもとのみつはくむ迄

于蘭盆過て十六日に。

此たひに歸るさにたに捨られて又けふあすの老たしそ思ふ

宇津山柴屋庭もとの水石。所々ほりをこしなとして。過半畑になして。まめひきなの種まかするとて。

まめひきなのさゝれ石まの山畑のかたしや老の後まきの種

あら／＼無下の庭數寄候哉。おなしはたに庵を結ひ。床に簑竹のこ笠かけ。わらうたをしきて。

思ひやれ我山畑の菜の庵鹿のなくねた老のあかつき

西行上人も。雲かゝる遠山畑の秋されはおもひやるたにを。贈答しはへるなるへし。

宗祇年忌七月廿九日。

あさかほや花といふ花のはなのゆめ

柴屋むかひなる峯の畑に。鹿をふこゑを聞て。

獨吟

鹿のねやとたた山はたのゆふあらし

又我園に大豆あつきをうへ。いほりを結ひ。鳴子をかけて。朝夕の自愛に。

まめ／＼しくもなれる老かな

畑の菜をつみて。人につかはすとて。

つまてこそみすへかりつれ朝な／＼我山はたの秋の露けさ

庭の山水雨にもよほされ。石ふしかしかやう

の聲聞れは。

せきいるゝ庭の山水ころ〳〵と石ふしかしか雨すさむなり

風やう〳〵夜さむになりて。老のねさめ何事をおもふも。物のほしさのみを歎て。

天か下ありと有物のなくも哉さてやほしさの盡ると思へは

閑居といへとも。けには巡禮往來の立よりて。京田舍の事かたるを聞て。

度ことにきても手なのみうつの山うつゝともなき事を聞哉

人の所望に。

野はあきの露むしはなのさかり哉

今川
そらみたれ雲野分たつゆゝきかな

範忠御歌。物にかきいるゝとて尋る中に。了俊三十三回忌。品經二十八品の中に。範忠の歌あり。とふらふもとふらはるゝも。皆古人なることを。

涙のみときあへぬ紐の卷々の言の葉ことにむすほゝれつゝ

山家の草庵にて發句。

鹿の音やとを山はたの夕あらし

興津宗鐵館にて。庭の眺望を。

しくれさへそめあかぬやとの木末かな

おなし庭の水鳥を。

霜はけさはらふもなしのうはけ哉

大永六年六月廿三日。喬山御他界飛脚。臨川庵より山城薪酬恩庵七月廿九日到着。則承あへす御吊ひ罷下ぬへきに。宗長已七十九。命期當年とて。その御暇乞申て。紫野薪の末期覺悟のうへは。ふた〳〵とはいかゝいひしにたかふ世中にやと。先御中陰の儀式薪にして一七日。其内なる粥飯はかりの茶湯。若又命期當年にかきらすは。來春中罷下ぬへき事。御ちの人の御かた泰以時茂へ文して申候ひし。八月より逍遙院殿　奉賴品經廿八品。諸家の御懷紙申調侍る。折節京都の忩劇に延引して。やう〳〵當年二月十六日矢嶋へ下し給畢。則三月四日矢嶋罷立。此四月に下着持參。折ふし中御門殿歷

歴御下向。御講殊勝珍重本望。御樽御折紙以下。本所御感御書たひ候。又逍遙院殿御老筆の古今集。八九年先より懇望申。去年あそはしたてられ拜領候。同持參。又罷上の時も。彼集宗長一重の傳授口傳の物三冊一合進覽。御名殘にのみと覺し。喬山へも凡抄物多年下進覽。又持參畢。長寳寺殿桂山別而宮仕とはなくて。只朝夕多年御身ちかくこそ候つれ。今はたれも御知候まし。北川殿(義忠内室)なにとなく御覺ら候はんつらむ。いつそやめされてまいり候し時も。さやうにこそおほせられ候つれ。其時左京亮泰以祗候候にて候つる。喬山御幼少御時は。御暇申紫野徘徊。心さしにのみ御こと〳〵しく。廿ヶ年ありて罷下まかり立。異他御めかけられし。これはたれ〳〵も存知あるへし。又は御用にもたちまいらせ候事もたひ〳〵候し。抑此四月より罷下。國の體次第承り。又見及申候。

何事もうつゝも候はぬ御事のみにてこそ。ことしは幾程も候はぬに。かくのことくかはりはてたる御事にやとおとろき入。罷過候ゆへ。しりかほの申事なから任筆候。此七月初丸子の閑居へ罷歸候とて。泰以に申遣し候。

さも有はあれとは思へとめに耳に聞てもみても餘る口そよ

なにことも過言のみ罷成候事。歎入事にて候。喬山も十ヶ年先より。御心ら御中風氣につきて。御成敗の樣も調儀の御思案もそやと。承度候ことのみ候ひし。今は又はたちの御內。御わらはの心の御程は。何事も御心のほとおさまりかたく。奉公の人々も心にまかせらるへし。されは此度當國罷下我等體まて。雜言容言傍若無人の事のみ耳にみち候。われらか身にをきてはくるしからす。なにとなく都鄙の身ほめのやうには侍れと。せめて身ほめたるなと筆にまかせつる。都鄙の外聞なけきてもあま

りなきにあらす。口惜さたれ〱も可被察候。紀明の事度々申つれと不及是非候。その上讒者露顯現形候。只詮とする所は。なきかことくにして。丸子の柴屋末期の用意のみ。しかれとも丸子手越は河原はかりのへたて。けには往來もたえす。老のきく耳もくるしくこそは。興津左衞門の館しほ風呂興行。一七日湯治。此次熱海湯治隨體。これよりひかし邊の古知人をもたつね見はやのあらまし。折節痢病散々式。結句脚氣さへ發あひ。車におされたる犬のことく。はいありきの體不及旅行。又年内幾程の日數にもあらす。存命にまかせ。年あけてふと關東可思立にて。館ちかき寺不捨院旅宿。名のきゝおもしろく覺て。瓦礫。

老のゝちすて捨すともいひ難みしはし名にのみめつる宿哉

不捨院いまた板ひさしなくて。時雨霰いかならんとおもふ夜に。

こそ今年杉の板屋のまはらなる月に時雨を聞あかしつる

去年のこのころより。矢嶋少林寺門外妙勝庵旅宿す。住あらしたる庵にて。伊吹おろし比良のねおろし。雪霰うすき杉の板戸とをすやうなりしを思ひ出て。おもしろさに述老心ものなるへし。八旬も年暮ぬ。神無月下旬のほと。又なからへてもなと。つれなさを嘆て。

はかなさは露の夢路の幻の外をたつれは我身なり鳬

中御門殿御在國。折ふし興津しほゆ湯治。旅宿へ文にあそはしそへて。

寒き夜はむかふうちにも埋火のなきつの事そ思ひやらるゝ

御かへし。

曉はいけるはかりのおきゐつゝ思ふことゝは老のさむけき

旅宿不捨院のあかつきに。

よそけにも杉の軒端の板間荒みもらぬ時雨にふかせたり鳬

人の歡樂法樂連歌發句所望に。

としのうちはふゆこそ松の深みとり

清見か關ちかきあたりにて一折に。

とわたるやまたてもしらむ小夜千鳥

伊勢內宮一禰宜書狀。守晨とて。先の一の禰宜十三回。來年二月十七日宇治山田知音せし。各興行。

西行谷にてあらまし連歌發句所望。急便にて筆とりあへすつかはしつ。

あひにあひぬそのきさらきの花の春

慈廣院殿いつくやらん御歸に。丸子柴屋たちよらせおはしまして。庭をなかは畑に作て。田屋を結ひ。鳴子をかけ置たるを御覽して。其松木はしらにあそはしつけらる。あるしは興津しほゆ湯治。

山畑の鹿の鳴れの淋きを思ふにさそな老のあかつき

よと〻もの事なから。當八十歲の冬の曉。なをしのひかたさよ。

起わかれうらむ物てふ鳥の音の老の曉なとまたるらん

長善寺法樂連歌發句。客殿新造。

のきのまつ雪のしら玉つら〻かな

吉川次郞左衞門賴茂。淡路小守護の息。繼母のにくみにて。宗長につきて罷下。浪人とも被官ともなくて。當國より甲州手楯の合力の人數にて討死。今年十一月廿三日七年忌。藤五郞方今小原兵庫頭高親へ申つかはし侍り。

あはち嶋あはとはるかにしほの山さしての磯なてらす月影

七とせの冬そかなしき蒲雪の葉はかりの事もあはて消けむ

露はかりの給恩にもあらす。人なみ〳〵の討死不便。命は葉のうすきかことしといふこと。思ひ出て侍るものならし。泰昭この二三年富士一見。又筑波のあたりまて下向。この六月に駿府にかへりっ此ま〻越年なとのあらましし。俄東山治部卿法橋泰賢より迎くたりぬ。すてに四五日中上洛。小原兵庫頭高親二三年知音。餞別の興行。發句さりかたく。

さきさかす待としら河はなのはる　泰昭

としになれぬる雪のくれかた

ゆきかへり薪こりつむやとならん　嵩親

東山はしら川最勝寺にして雅經卿。
なれ〳〵てみしは名殘の春そともなとしら河の花の下陰
此鞠のかゝりの櫻なるへし。
泰賢泰昭の父泰綱。予四十餘年の知音。他にことなるに付て駿河國詩下。いま上洛。はるはやかて下向あるへきのちきりつゝとしらかはの心にや。
十二月一日曉。八十歳宗長ねかひ事の祝言に。
ねかはくはけふ元日のとしの暮いまこんはるは苔の下にて
泰昭このあかつき火桶にあしさしならへて。
君いなは風のつてにも曉はねかひしことゝ袖ぬらすかに
贈答。
なれ〳〵し君か心のあかつきの折ふしことをいかに忘れん
中御門殿より。鴈にそへられてたふ御歌。
故郷にかへる心のすゑをきけ今おとつるゝ鴈の玉つさ
御かへし。
身にあまる君か言の葉かけそふる鴈の玉章をくかたそなき
早梅の枝もたはゝに咲たりけるを。人もち來り侍る。やかて坊城殿へもたせまいらすとて。
物はみなひとつ二つか花たにも咲ころ枝はみところのなき
冬の梅は。一りん二りんかすかに咲て匂ふこそ。あはれふかゝらめ。あまりに正月に童の餅花つけたるやうにさきたるを。ふさはしからす見ての事なり。老後の腹たゝしき事おもひつめたるを一書にしてうちむかひ。かつ〳〵といひて。そのまへにて火に入て。老心うちわらふといふを。そこにある人きゝて。さそな心やすからんと。いひをこせたる歌のかへし。
閑人のよそにしゐてふことわりよ思ふはかりはいひ果ぬ共
あまりにこゝもといつはりおほく。人をはかりうち譏するをきゝて。さやうならん折ふしましはらは。我も人もおなし人ならんとて。
よきにつけ惡きは况て世人のをはむこ〳〵しまにかれつゝ
慈光院殿。中御門歳暮の一續中たてしに。
草庵雨

心あれやかりほのくらき夜の窓うつ音はして過る雨かな

下野守時茂より小袖たふ。歌あり。心さしふかく染てしのよせあり。

心さしきえあへぬ雪も今そしろふかくそめてし花の色とは

水仙花一本。人の文にそへられて。そのかへしに。

味氣なやことしもありてつれもなく歳暮の文か書交しつる

おほちの父孫の代まて。歳暮の音信に。

おほち父むま子のとしの暮にして有てなさけは嬉し耻かし

群書類從卷第三百二十七

紀行部一

土左日記

木工權頭貫之

をとこもすなる日記といふものを。をむなもして見んとてするなり。それのとしのしはすのはつかあまり。ひとひのいぬのときにかどです。そのよしいさゝかものにかきつく。ある人あがたのよとせいつとせはてゝ。れいのことゞもみなしをへて。げゆなどとりて。すむたちよりいでて。ふねにのるべきところへわたる。かれこれしるしらぬおくりす。としごろよくぐしつる人々なんわかれがたくおもひて。その日しきりにとかくしつゝのゝしるうちに夜ふけぬ。

廿二日に。いづみの國までと。たひらかに願たつ。ふぢ原のときざね。ふなぢなれどむまのはなむけす。かみなかしもながら。ゑひすぎていとあやしく。しほうみのほとりにてあざれあへり。

廿三日。やきのやすのりといふ人あり。この國にかならずしもいひつかふものにもあらざなり。これぞたゞはしきやうにてむまのはなむけしたる。かみがらにやあらん。くに人の心のつねとして。いまはとて見えざなるを。心あるものははぢずぞなんきける。これはものによりてほむるにしもあらず。

廿四日。講師むまのはなむけしにいでませり。ありとあるかみしもわらはまでゑひしれて。一文字をだにしらぬものしが。あしは十文字にふみてぞあそぶ。

廿五日。かみのたちより。よびにふみもてきたなり。よばれていたりて。日ひとひ夜ひとよ。とかくあそぶやうにてあけにけり。

廿六日。なほかみのたちにて・（あるにイ）あるじしのゝしりて。郎等までに物かづけたり。からうた聲あげていひけり。やまとうた。あるじもまらうどもこと人もいひあへりけり。からうたはこれにえかゝず。やまとうた。あるじのかみのよめりける。

都いてゝ君にあはんとこしものをこしかひもなく別ぬる哉

となんありければ。かへるさきのかみのよめりける。

白妙のなみぢを遠くゆきかひて我ににへきは誰ならなくに

こと人々のもありけれど。さかしきもなかるべし。とかくいひて。さきのかみいまのも。もろともにおりて。いまのあるじもさきのも。手とりかはして。ゑひごとにこゝろよげなることとして。いていり（さイ）にけり。

廿七日。おほつよりうらとをさしてこぎいづ。かくあるうちに。京にてうまれたりしをんな・（こイ）こゝ（くにイ）にてにはかにうせにしかば。このごろのいでたちいそぎをみれど。なにごともいはず。京へかへるに。をむなごのなきのみぞかなしびこふる。ある人々もえたへず。このあひだにある人のかきていだせるうた。

都へと思ふものゝ悲しきはかへらぬ人のあればなりけり

またあるときには。

ある物と忘れつゝ猶なき人をいつらとこふぞ悲しかりける

といひけるあひだに。かこのさきといふところに。かみのはらから。またこと人これかれ。

さけなにともて〔にイナシ〕おひきて。いそにおりゐて。別がたき事をいふ。かみのたちの人々のなかに。このきたるひと〴〵ぞ心あるやうにはいはれほのめく。かくわかれがたくいひて。かの人々のくちあみももろもちにて。このうみべにてにないひいだせる歌。

をしと思ふ人やとまるとあし鴨の打むれて社我はきにけれ

といひてありければ。いといたくめでゝ。ゆく人のよめりける。

棹させどそこひもしらぬわたつみのふかき心を君にみる哉

といふあいだに。かぢとりものゝあはれもしらで。おのれしさけをくらひつれば。はやくいなんとて。しほみちぬ。かぜもふきぬべしとさはげば。ふねにのりなんとす。このおりにあるひと〴〵おりふしにつけて。から〔のイ〕・うたども。ときにゝつかはしき・いふ〔をイ〕。又ある人にしぐになれど。かひうたなどいふ。かくうたふに。ふなやかたのちりもちり〔イニナシ〕。そらゆく雲もたゞよひぬとぞいふなり。こよひうらとにとまる。ふぢはらのときざね。たちばなのすゑひら。こと人人おひきたり。

廿八日。うらとよりこぎいでゝ。おほみなとをおふ。このあひだにはやくのくに〔イニナシ〕のかみのこ。やまぐちのちみね。さけよき物どももてきて。ふねにいれたり。ゆく〳〵のみくふ。

廿九日。おほみなとにとまれり。くすし。ふりはへてとうそ白散さけくはへてもてきたり。心ざしあるににたり。

元日。なほおなじとまりなり。白散をあるもの夜のまとて。ふなやかたにさしはさめりければ。風にふきならさせて。海にいれてえのまずなりぬ。いもしあらめも。はがためもなし。かうやうのものなきくになり。もとめもおかず〔イニナシ〕。たゞをしあゆのくちをのみぞすふ。このあふ

ひと〲のくちをおしあゆもしおもふやうあらんや。けふはみやこのみぞおもひやらるゝ。こゝのへのかどのしりくべなはのなよしのかしらひゝら木ら。いかにぞとぞいひあへる。

二日。なほおほみなとにとまれり。講師ものさけおこせたり。

三日。おなじところなり。もし風なみのしばしとおしむ心やあらん。こゝろもとなし。

四日。かぜふけばえいでたゝず。まさつらさけよきものたてまつれり。この〔ほイ〕かうやうに。物もてくる人に。なほしもえあらで。いさゝけわざせさすものもなし。にぎはしきやうなれどまくるこゝちす。

五日。かぜなみやまねば。なほおなじところにあり。人々たえずとぶらひにく。

六日。きのふのごとし。

七日になりぬ。おなじみなとにあり。けふはあをむまをおも〔なとイ〕へどかひなし。たゞなみのしろきのみぞ見ゆる。かゝるあひだに〔ほとイ〕。人のいへ〔野イ〕のいけとなあるところより。こいはなくて。ふなよりはじめて。かはのもうみのもこともものども。ながびつにになひつゞけてをこせたり。わかなぞけふをばしらせたる。うたあり。その歌。

浅茅生の野へにしあれは水もなき池につみつる若菜也けり

いとをかしかし。このいけといふは。所の名なり。よき人のおとこにつきて。くだりてすみけるなり。このながびつのものは。みな人わらはまでにくれたれば。あきみちて。ふなこどもは。はらつゞみをうちて。海をさへおどろかして。浪たてつべし。かくてこのあひだにことおほかり。けふわりごもたせてきたる人。そのなどぞやいまおもひいでん。この人うたよまんとおもふこゝろありてなりけり。とかくい

ひいひて。なみのたつなることゝ。うれへいひてよめるうた。

行先にたつ白波の聲よりもをくれてなかんわれやまさらむ

とぞよめる。いとおほごゑなるべし。もてきたる物より。うたは〔はイ〕いかゞあらん。このうたを。これかれあはれがれども。ひとりもかへしせず。しつべき人もまじれゝど。これをのみいたがり。物をのみくひて夜ふけぬ。このうたぬし〔ほイ〕なん。またまからずといひてたちぬ。ある人のこのわらはなるひそかにいふ。まろこのうたのかへしせんといふ。をどろきて。いとおかしきことかな。よみてむやは。よみつべくははやいへかしといふ。まからずとてたちぬる人をまちてよまんとてもとめけるを。夜ふけぬとにやありけん〔イニナシ〕。やがていにけり。そも〳〵いかがよんだるといぶかしがりてとふ。このわらはさすがにはぢていはず。しゐてとへば。いへるうた。

ゆく人もとまるも袖のなみだ川汀のみこそぬれまさりけれ

となんよめる。かくはいふものか。うつくしければにやあらん。いとおもはずなり。わらはごとにては。なにかはせん。おんなおきなにをしつべし。あしくもあれいかにもあれ。たよりあらばやらんとてをかれぬめり。

八日。さはることありて。なほおなじところなり。こよひ月は海にぞいる。これを見て。なりひらのきみの山のはにげて入ずもあらなんといふうたをもほゆる〔なんおほゆるイ〕。もし海べにてよまゝし〔もイナシ〕かば。なみたちさへていれずもあらなむともよみてましや。いまこの歌をおもひいでて。ある人のよめりける。

〔後撰〕てる月の流るゝ見れは天の川出るみなとはうみにさりける〔ぞあイ〕

とや。

九日のつとめて。おほみなとより。なはのと

まりをおはんとてこぎいでにけり（にイナシ）。これかれたがひにくにのさかひのうちはとて。見おくりにくる人。あまたがなかに。ふぢはらのときざね。たちばなのすゑひら。はせべのゆきまさらなん。みたちよりいでたうびし日より。こゝかしこにおひくる。この人々ぞ心ざしある人なりける。この人びとのふかき心ざしは。この海にはをとらざるべし。これよりいまはこぎはなれてゆく。これをみをくらんとてぞこの人どもはおひきける。かくてこぎゆくまにまに。海のほとりにとまれる人もとをくなりぬ。ふねの人も見えずなりぬ。きしにもいふことあるべし。船にもおもふことあれどかひなし。か〻れど。この歌をひとりごとにしてやみぬ。

思ひやる心は海を渡れとも文しなければしらすやあるらん

かくて。宇多の松ばらをゆきすぐ。その松のかずいくそばくいくちとせへたりとしらず。もとごとに波うちよせ。枝ごとにつるぞとびかよふ。おもしろしと見るにたへずして。ふなびとのよめるうた。

み渡せは松のうれことに住鶴は千世のとちとそ思へらなる

とや。このうたはところを見るにえまさらず。かくあるをみつゝこぎゆく〱。山も海もみなくれ。夜ふけてにしひんがしも見えずして。てけ（天氣）のこと。かぢとりの心にまかせつ。をの子もならはねばいともこゝろぼそし。ましてをんなはふなぞこにかしらをつきあて〻ねをのみぞなく。かくおもへば。ふなこかぢとりはふなうたうたひて。なにともおもへらず。そのうたふうたは。はるのゝにてぞねをばなく。わかすゝきにて。手をきる〱つんだるなを。おやゝまほるらん。しうとめやくふらん。かへらや。よんべのうなゐもがな。ぜに（錢）こはん。そらごとをして。おぎのりわざをして。せ

にもゝてこず。おのれだにこず。これならずおほかれどもかゝず。これらを人のわらふをききて。うみはあるれども心はすこしなぎぬ。かくゆきくらして。とまりにいたりて。おきなびとひとり。たうめひとり。あるがなかにこゝちあしくして。物もものした[まイ]はでひそまりぬ。

十日。けふはこのなはのとまりにとまりぬ。

十一日。あかつきに船をいだして。むろつをおふ。人みなまだねたれば。海のありやうも見えず。たゞ月をみてぞにしひんがしをばしりける。かゝるあひだに。みな夜あけて。手あらひ。れいのことどもしてひるになりぬ。いましはねといふ所にきぬ。わかきわらは。このところの名をきゝて。はねといふ所は。鳥のはねのやうにやあるといふ。まだをさなきわらはの事なれば。ひと〴〵わらふ。ときにありけるをんなわらはなん。このうたをよめる。

まことにて名にきく所はねならはとふか如くに都へもかな

とぞいへる。をとこもをんなもいかでとく京へもがなとおもふ心あれば。このうたよしとにはあらねど。げにとおもひてひと〴〵わすれず。このはねといふ所とふわらはのついでにて。[そイ]又むかしの人をおもひいでゝ。いづれの時にかわするゝ。けふはましてはゝのかなしがらるゝことは。くだりし時の人のかずたらねば。ふるうたに。かずはたらでぞかへるべらなるといふことをおもひいでゝ。人のよめる。

世の中に思ひやれどもこをこふる思ひにまさる思ひなき哉

といひつゝなん。

十二日。あめふらず。ふんときこれもちがふねのおくれたりし。ならしつよりむろつにきぬ。

十三日のあかつきに。いさゝかに雨ふる。しばしありてやみぬ。をんなこれかれゆあみなどせんとて。あたりのよろしき所にをりてゆく。

うみをみやれば。

雲もみな浪とぞ見ゆるあまもがないづれか海と問て知べく

となんうたよめる。さてとうかあまりなれば。月おもしろし。船にのりはじめし日より。ふねにはくれなゐこくよききぬきず。それはうみのかみにおぢてといひて。なにのあしかげにことづけて。ほやのつまのいずしすしあはびをぞこゝろにもあらぬはぎにあげて見せける。

十四日。あかつきより雨ふれば。おなじところにとまれり。ふなぎみせちみ(節忌)す。さうじ(精進)物なければ。むまどきよりのちにかぢとりの昨日つりたりしたひに。ぜになければ。よねをとりかけておちられぬ。かゝる事(欄)なほありぬ。かぢとりまたたひもてきたり。よねさけしば〳〵(などイ)くる。かぢとりけしきあしからず。

十五日。けふあづきがゆ(小豆粥)にず。くちをしくなほ日のあしければ。ゐざるほどにぞけふはつかあまりへぬる。いたづらに日をふれば。ひとびと海をながめつゝぞある。めのわらはのいへる。

たてはたつゐれは又ゐる吹風と浪とは思ふとちにやあるら覧

いふがひなきものゝいへるにはいとにつかはし。

十六日。風なみやまねば。猶おなじ所にとまれり。たゞ海に浪なくして。いつしかみさきといふところわたらんとのみなんおもふ。かぜ浪ともに(〔もイナシ〕)やむべくもあらず。ある人のこのなみたつを見てよめる歌。

霜だにもおかぬ潟ぞといふなれど浪のなかには雪ぞ降ける

さて舟にのりし日よりけふまでに。はつかあまりいつかになりにけり。

十七日。くもれる雲なくなりて。あかつきづく夜いとおもしろければ。船をいだしてこぎゆ

く。このあひだに。雲のうへも海のそこも。をなしごとくになんありける。むべも昔のをとこは。さをはうがつなみのうへの月を。ふねはおさふ海のうちのそらを。とはいひけん。きゝざれにきけるなり。またある人のよめる歌。

みな底の月のうへより漕舟の棹にさはるはかつらなるらし

これをきゝてあるひとの又よめる。

かげみれは浪の底なる久かたの空こきわたる我ぞわびしき

かくいふあひだに夜やうやくあけゆくに。かぢとりらくろき雲にはかにいできぬ風ふきぬべし。みふねかへしてんといひて舟かへる。このあひだに雨ふりぬ。いとわびし。

十八日。なをおなじところにあり。海あらければ船いださず。このとまり。とほく見れどもちかくみれども。いとおもしろし。かゝれどもくるしければなにごともおもほへず。をとこどちは心やりにやあらん。からうたなどいふべし。船もいださでいたづらなれば。あるひとのよめる。

いそふりのよする礒には年月をいつともわかぬ雪のみぞ降

この歌はつねせぬひとのごとなり。また人のよめる。

風による浪のいそにはうぐひすも春もえしらぬ花のみぞ咲

この歌どもをすこしよろしときゝて。ふねのをさしけるおきな。つきごろのくるしき心やりによめる。

たつ浪を雪か花かとふく風ぞよせつゝ人をはかるへらなる

このうたどもを人のなにかといふを。ある人の又きゝふけりてよめる。その歌よめるもじみそもじあまりなゝもじ。人みなえあらでわらふやうなり。うたぬしいとけしきあしくてゑず。まねべどもえまねばず。かけりともえよみあゑ[すい]がたかるべし。けふだにいひがたし。ましてのちにはいかならん。

十九日。ひあしければふねいださず。
廿日。きのふのやうなればふねいださず。みなひとびとうれへなげく。くるしく心もとなければ。たゞ日のへぬるかずを。けふいくか。はつかみそかとかぞふれば。および[指]もそこなはれぬべし。いとわびし。よるはいもねず。はつかの夜の月いでにけり。山のはもなくて。海のなかよりぞいでくる。かうやう[かやうイ]なるを見てや。むかしあべのなかまろといひける人は。もろこしにわたりてかへりきける時に。船にのるべきところにて。かのくにびとむまのはなむけし。わかれをしみて。かしこのから歌つくりなどしける。あかずやありけん。はつかの夜の月出るまでぞありける。その月は海よりぞいでける。これを見てぞなかまろのぬし。わがくにには[にイナシ]かゝるうたをなん。神代よりかみもよんたび。いまはかみなかしもの人も。かうやうにわかれをしみ。よろこびもあり。かなしびもある時にはよむとてよめりける歌。

青海原ふりさけみれはかすかなるみかさの山に出し月かも

とぞよめりける。かのくに人きゝしるまじくおもほへたれども。ことの心をおとこもじにさまをかきいだして。こゝのことばつたへたる人にいひしらせければ。心をやきゝえたりけん。いとおもひの外になむめでける。もろこしとこの國とはことなるものなれど。月の影はおなじことなるべければ。人の心もをなじことにやあらん。さていまそのかみをおもひやりて。あるひとのよめる歌。

[後撰]都にて山のはに見し月なれとなみ[う]よりいてゝ浪[うみ集]にこそいれ

廿一日。うの時ばかりに船いだす。みなひとびとのふねいづ。これを見れば。春のうみに秋のこの葉しも。ちれるやうにぞありける。おぼろげの願によりてにやあらん。風もふかずよき

日いできてこぎゆく。このあひだに。つかはれんとてつきてくるわらはあり。それがうたふふなうた。猶こそくにのかたはみやらるれ。わがちゝはゝありとしおもへば。かへらやとうたふぞあはれなる。かくうたふをきゝつゝこぎくるに。くろとりといふ鳥いはのうへにあつまりをり。そのいはのもとに浪しろくうちよす。かぢとりのいふやう。くろ鳥のもとにしろきなみをよすとぞいふ。このこと葉なにとにはなけれども。物いふやうにぞきこへたる。人の程にあはねばとがむるなり。かくいひつつゆくにふなぎみなる人。なみを見て。國よりはじめてかいぞくむくひせんといふなる事をおもふうへに。海のまたおそろしければ。かしらもみなしらけぬ。なゝそぢやそぢはうみにあるものなりけり。

わかかみの雪と礒への白浪といつれまされり沖つしまもり

とかぢとりいへり。

廿二日。よんべのとまりよりことゞまりをおひてぞゆく。はるかに山見ゆ。としこゝのつばかりなるをのわらは。としよりはをさなくぞある。このわらは。船をこぐまに〳〵。山もゆくと見ゆるをみて。あやしきこと歌をぞよめる。「その歌」。

漕てゆく舟にて見れは足曳の山さへゆくをまつはしらすや

とぞいへる。をさなきわらはのことにてはにつかはし。けふ海あらげにて。いそに雪ふりなみの花さけり。あるひとのよめる。

浪とのみひとへにきけと色見れは雪と花とにまかひける哉

廿三日。ひてりてくもりぬ。このわたりかいぞくのおそりありといへば。神ほとけをいのる。

廿四日。きのふのおなじところなり。

廿五日。かぢとりらのきた風あしといへば。船いださず。かいぞくおひくといふ事たへずき

こゆ。
廿六日。まことにやあらん。かいぞくおふといへば。夜なかばかりより船をいだしてこぎくる。道にたむけする所あり。かぢとりしてぬさたひまつらするに。ぬさのひんがしへちれば。かぢとりのまうしてたてまつる事は。このぬさのちるかたにみふねすみやかにこがしめ給へとまうしてたてまつる。これをきゝて。あるめのわらはのよめる。

わたつみのちふりの神に手向する幣の追風やますふかなん

とぞよめる。このあひだに風のよければ。かぢとりいたくほこりて。船にほあげなどよろこぶ。そのおとをきゝて。わらはもおきなもいつしかとしおもへばにやあらん。いたくよろこぶ。このなかにあはぢのたうめといふ人のよめるうた。

おひかせのふきぬる時は行舟のほてうちて社嬉しかりけれ

とぞ。ていけのことにつけていのる。
廿七日。かぜふきなみあらければ船いださず。これかれかしこくなげく。をとこだちの心なぐさめにからうたに。日をのぞめばみやことほしなどいふなることのさまをきゝて。あるをんなのよめる歌。

日なたにも天雲近く見ゆるものを都へと思ふみちのはるけさ

またある人のよめる。

吹風のたへぬ限りしたちくれは浪路はいとゝ遙けかりけり

日ひとひ風やまず。つまはじきしてねぬ。
廿八日。夜もすがら雨やまず。けさも。
廿九日。ふねいだしてゆく。うら〳〵とてりてこぎゆく。つめのいとながくなりにたるを見て。ひをかぞふれば。けふは子日なりければきらず。む月なれば京のねの日の事いひいでて。こまつもがなといへど。海なかなればかたしかし。あるをんなのかきていだせる歌。

覺束なけふはれのひかあまならは海松をたにひかまし物を

とぞいへる。うみにて子日のうたにてはいかがあらん。またある人のよめるうた。

けふなれと若菜もつます春日野の我漕わたる浦になけれは

かくいひつゝこぎゆく。おもしろきところに。船をよせてこゝやいづこと とひければ。とさのとまりといひけり。むかしとさといひける所にすみけるをんな。この舟にまじれりけり。そがいひけらく。昔しばしありし所のなたぐ(なら)ひ(ひイ)にぞあなる。あはれ。といひてよめる歌。

としころをすみし所の名にしおへはきよる浪をも哀とそ見る

とぞいへる。

卄日。あめかぜふかず。かいぞくはよるあるきせざなりときゝて。夜なかばかりに船をいだして。あはのみとをわたる。よなかなればにしひんがしもみえず。おとこをんなからく神ほとけをいのりてこのみとをわたりぬ。とらうの時ばかりにぬしまといふ所をすぎて。たながはといふ所をわたる。からくいそぎていづみのなだといふ所にいたりぬ。けふ海になみににたるものなし。神ほとけのめぐみかうぶれるににたり。けふふねにのりしひよりかぞふれば。みそかあまりこゝぬかに成にけり。いまはいづみのくにゝきぬれば。かいぞくものならず。

二月一日。あしたのま雨ふる。むまどきばかりにやみぬれば。いづみのなだといふところよりいでてこぎゆく。海のうへ昨日のごとくに風なみ見えず。くろさきの松ばらをへてゆく。ところの名はくろく。松の色はあをく。いその浪は雪のごとくに。かひのいろはすはうに(てイ)。五色にいまひといろぞたらぬ。このあひだにけふは。はこの浦といふ所よりつなでひきてゆく。かくゆくあひだにある人のよめる歌。

たまくしげはこの浦濵たゝぬひはうみを鏡と誰かみざらん

またふなぎみのいはく。この月までなりぬることとなげきて。くるしきにたへずして。人もいふこととて。心やりにいへる〔イナシ〕うた。

ひく舟の綱手の長き春の日をよそかいかまで我はへにけり

きく人のおもへるやう。なぞたゞごとなるとひそかにいふべし。ふなぎみのからくひねりいだして。よしとおもへることを。ゑじもこそしいへ〔たべイ〕とて。つゝめきてやみぬ。にはかに風なみたかければとゞまりぬ。

二日。雨風やまず。ひゝとひ夜もすがら神佛をいのる。

三日。うみのうへ昨日のやうなれば舟いださず。風の吹ことやまねば。きしのなみたちかへる。これにつけてよめるうた。

をゝよりてかひなきものはおち積る涙の玉をぬかぬなり鳧

かくてけふ〔にイ〕・暮ぬ。

四日。かぢとりけふかぜ雲のけしきはなはだあしといひて。船いださずなりぬ。しかれどもひねもすに浪かぜたゝず。このかぢとりは日もえはからぬかたゐなりけり。このとまりのはまには。くさ〴〵のうるはしきかひいしなどおほかり。かゝればたゞむかしの人をのみ戀つゝ。ふねなる人のよめる。

よする浪打もよせなむ我こふる人わすれ貝おりてひろはん

といへれ〔れイナシ〕ば。ある人の〔のイナシ〕たへずして。ふねの心やりによめる。

忘貝ひろひしもせじ白玉をこふるをだにも形見とおもはむ

となんいへる。をんな・〔こイ〕のためにはおやをさなくなりぬべし。玉ならずもありけんをと人いはんや。されどもしゝこ〔死にしこイ〕かほよかりきといふやうもあり。猶おなじところに日をふることをなげきて。あるをんなのよめるうた。

てをひてゝ寒さもしらぬ泉にそ汲とはなしに日比へにける

五日。けふからくして。いづみのなだよりをつのとまりをゝふ。松ばらめもはる〴〵なり。これかれくるしければよめるうた。

ゆけとなをゆきやられぬは妹がうむをつの浦なる岸の松原

かくいひつゞくるほどに。ふねとくこげ。ひのよきにともよほせば。かぢとりふなこどもにいはく。みふねよりおほせたぶなり。あさきたのいでこぬさきにつなではやひけといふ。このこと葉のうたのやうなるは。かぢとりのをのづからのことばなり。かぢとりはうつたへにわれうたのやうなることいふとにもあらず。きく人のあやしくうためきてもいひつるかなとてかきいだせれば。げにみそもじあまりなりけり。けふなみなたちそと人々ひねもすにいのる。しるしありて風なみたゝず。いましかもめむれゐてあそぶところあり。京のちかづくよろこびのあまりに。あるわらはのよめる歌。

祈りくるかざまともふをあやなくも鷗さへだに浪と見ゆ覧

といひてゆくあひだに。いし津といふ所の松原おもしろくて。はまべとをし。またすみよしのわたりをこぎ行。ある人のよめる歌。

今見てぞ身をはしりぬる住の江の松より先に我は〔ペイ〕へにけり

こゝにむかしつひとのはゝ。ひとひかた時もわすれねばよめる。

すみの江に舟さしよせよ忘草しるしありやとつみて行べく

となん。うつたへにわすれなんとにはあらで。戀しきこゝちしばしやすめて。またもこふるちからにせんとなるべし。かくいひてながめつゞくるあひだに。ゆくりなくかぜふきて。こげども〳〵しりへしぞきにしぞきて。ほとほとしくうちはめつべし。かぢとりのいはく。この住吉の明神はれいのかみぞかし。ほしきものぞおはすらん。今は〔とはイ〕いまめくものか。さて

ぬさをたてまつりたまへといふ。いふにしたがひてぬさたいまつる。かくたいまつれゝ〔ヽイナシ〕ども。もはら風やまで。いやふきにいやたちに風なみのあやうければ。かぢとりまたいはく。ぬさにはみ心のいかねば。みふねもゆかぬなり。なをうれしとおもひたぶべきもの。たいまつりたべといふ。またいふにしたがひて。いかゞはせんとて。まなこもこそふたつあれ。たゞひとつあるかゞみをたいまつるとて。海にうちはめつれば。い〔イナシ〕とくちおし。さればうちつけに海はかゞみの〔おもてのイ〕・ごとなりぬれば。あるひとのよめる歌。

千早振神のこゝろのあるゝ海に鏡をいれてかつみつるかな

いたくすみのえわすれぐさ岸の姫松などいふかみにはあらずかし。めもうつら〳〵。かゞみに神のこゝろをこそは見つれ。かぢとりの心はかみのみ心なりけり。

六日。みをつくしのもとよりいでゝ。なにはにつき〔をイ〕て。かはじりにいる。みな人々をんなおきな。ひたひにてをあてゝよろこぶ事ふたつなし。かのふなゑひのあはぢのしまのおほいこ。みやこちかくなりぬといふをよろこびて。ふなぞこよりかしらをもたげて。かくぞいへる。

いつしかといふせかりつる難波潟蘆漕そけてみふねきに鳬

いとおもひのほかなる人のいへれば。ひとびとあやしがる。これがなかにこゝちなやむふなぎみいたくめでて。ふなゑいしたうべりしみかほにはにずもあるかなといひける。

七日。けふかはじりに船いりたちてこぎのぼるに。川の水ひてなやみわづらふ。ふねののぼることいとかたし。かゝるあひだにふなぎみの病者。もとよりこち〴〵しき人にて。かうやうのことさらにしらざりけり。かゝれどもあはぢたうめのうたにめでて。みやこぼこりに

もやあらん。からくしてあやしきうたひねりいだせり。そのうたは。

きときては川の堀江の水を淺み舟も我みもなつむけふかな

これは。やまひをすればよめるなるべし。ひとうたにことのあかねば今ひとつ。

とくと思ふ舟なやますは我ために水の心のあさきなりけり（ろへしイ）

このうたはみやこちかくなりぬるよろこびにたえずしていへるなるべし。あはぢのこのうたにおとれり。ねたきいはざらましものをとくやしがるうちに。よるになりてねにけり（いりてねにけりイ）。

八日。なほかはのぼり（河上）になづみて。とりかひのみまきといふほとりにとまる。こよひふなぎみれいのやまひおこりていたくなやむ。ある人あさらかなる物もてきたり。よねしてかへりごとす。をとこどもひそかにいふなり。いひほしてもてる（もつつるイ）とや。かうやうの事ところ〲にあり。けふせちみすればいをもちひず。

九日。こゝろもとなさに。あけぬから船をひきつゝのぼれども。河の水なければ。ゐざりにのみぞゐざる。このあひだにわだのとまりのあかれのところといふ所あり。よねいほなどこへばおこなひつ（をくりつイ）。かくてふねひきのぼるに。なぎさの院といふ所を見つゝゆく。その院。むかしをおもひやりてみれば。おもしろかりけるところなり。しりへなるをかには松のきどもあり。なかの庭にはむめのはなさけり。こゝにひと人のいはく。これむかし名だかくきこへたるところなり。故これたかのみこのおほんともに。故ありはらのなりひらの中將の。世のなかにたえてさくらのさかさらは春の心はのとけからましといふ歌よめる所なりけり。いまけふある人ところににたるうたよめり。

千世へたる松にはあれといにしへの聲の寒さは變らさりけり

またある人のよめる。

君こひてよをふるやどの梅の花むかしの香にぞ猶匂ひける

といひつゝぞ。都のちかづくをよろこびつゝのぼる。かくのぼる人々のなかに京よりくだりし時にみなひと子どもなかりき。いたれりし國にてぞ子うめるものども有あへる。人みな船のとまる所にいだきつゝおりのりす。これを見てむかしのこのはゝ。かなしきにたへずして。

なかりしも有つゝ歸る人の子を有しもなくてくるか悲しさ

といひてぞなきける。ちゝもこれをきゝていかゞあらん。かうやうの事ども。うたもこのむとてあるにもあらざるべし。もろこしもこゝも。おもふことにたへぬ時のわざとか。こよひうどのといふところにとまる。

十日。さはることありてのぼらず。

十一日。あめいさゝかふりてやみぬ。かくてさしのぼるに。ひんがしのかたに山のよこほれるをみて人にとへば。やはたのみやといふ。これをきゝてよろこびてひと〴〵をがみたてまつる。山ざきのはしみゆ。うれしきことかぎりなし。こゝに相應寺のほとりにしばし船をとどめて。とかくさだむることあり。このてらのきし・(のイ)ほとりにやなぎをほくあり。ある人このやなぎのかげの河のそこにうつれるを見てよめる歌。

さゝれ浪よするあやをば青柳の影の糸しておるかとぞみる

十二日。やまざきにとまれり。

十三日。なほやまざきに。

十四日。あめふる。けふくるま京へとりにやる。

十五日。けふくるまゐてきたり。船のむづかしさに。ふねより人の家にうつる。このひとのいへよろこべるやうにてあるじしたり。このあるじのまたあるじのよきを見るにうたておも

ほゆ。色々にかへりごとす。家の人のいでいりにくげならずゐやゝかなり。

十六日。けふのようさり〔りイナシ〕つかた京へのぼるついでに見れば。山ざきのこびつのゑもまかりのおほぢ〔ほらイ〕のかたもかはらざりけり。うるひとの心をぞしらぬとぞいふなる。かくて京へいくに。しまざかにてひとあるじしたり。かならずしもあるまじきわざなり。たちてゆきしときよりは。くる〔かへるイ〕時ぞ人はとかくありける。これにも〔それにもイ〕。かへりごとす。夜るになして京にはいらんとおもへば。いそぎしもせぬほどに月いでぬ。かつら河月のあかきにぞわたる。ひと〴〵のいはく。この川あすかゞはにあらねばふち瀬さらにかはらざりけりといひて。ある人のよめるうた。

久かたの月におひたる桂川そこなるかげもかはらさりけり

またある人のいへる。

あま雲のはるかなりつる桂川袖をひてゝもわたりぬるかな

またある人よめる。

かつら川わか心にもかよはねと同し深さになかるへらなり

京のうれしきあまりにうたもあまりぞおほかる。夜ふけてくればところ〴〵も見えず。京にいりたちてうれし。家にいたりてかどにいるに月あかければ。いとよくありさま見ゆ。きゝしよりもましていふかひなくぞこぼれやぶれたる。家をあづけたりつる人の心もあれたるなりけり。なかがきこそあれ。ひとついへのやうなれば。のぞみてあづかれるなり。さるはたよりごとに物もたへずえさせたり。こよひかかることゝこはだかにものもいはせず。いとはつらく見ゆれど。こゝろざしはせんとす。さていけめいてくぼまり水つける所あり。ほとりに松もありき。いつとせむとせのうちにちとせやすぎにけん。かたへはなくなりにけり。

いまおひたるぞまじれる。おほかたのみなあれにたれば。あはれとぞひと〴〵いふ。思ひいでぬことなくおもひ戀しきがうちに。この家にてうまれしをんなごのもろともにかへらねば。いかゞはかなしき。ふなびともみなこ(子)・たかり(おイ)てのゝしる。かゝるうちに猶かなしきにたへずして。ひそかに心しれるひとゝ(〔ひと〴〵イ〕)いへりけるうた。

むまれしも返らぬものを我宿に小松のあるを見るが悲しさ

とぞいへる。なをあかずやあらん。またかくなん。

見し人の松の千年にみましかば遠く悲しきわかれせましや

わすれがたくくちをしきことおほかれど。えつくさず。とまれかうまれ。とくやりてん。

延長八年庚寅土佐の國にくだりて。承平五年乙未京にのぼりて。左大臣殿しら河殿におはします御ともにまうでたる。歌つかふまつれとあればよめる。

百草のはなのかけまてうつしつゝ音もかはらぬ白河の水

本云

土佐日記。以二貫之自筆本一。故將軍御物希代之靈寶也。今度密々自二小河御所一申出云々。依二或人數寄深切所望一書レ之。古代假名猶二科蚪一。末愚臨寫有二魯魚一哉。後見輩察レ之而已。

明應壬子仲秋候　　亞槐藤原　判

右土佐日記以作者自筆轉寫本書寫畢假名遣相違多不敢私改而以扶桑拾葉集及流布印本挍合畢

いほぬし

増基法師

いつばかりのことにかありけん。世をのがれて。こゝろのまゝにあらむとおもひて。世のなかにきゝときく所々。おかしきをたづねて心をやり。かつはたうときところ〱おがみたてまつり。我身のつみをもほろぼさむとある人有けり。いほぬしとぞいひける。神無月の十日ばかり熊野へまうでけるに。人々もろともになどいふもの有けれど。我心ににたるもなかりければ。たゞ忍びてとうしひとりしてぞまうでける。京より出るひやはたにまうでてとまりぬ。その夜月面白うて。松の梢に風すゞしくて。むしの聲もしのびやかに。鹿の音はるかにきこゆ。つねのすみかならぬ心地も。よのふけ行にあはれなり。げにかゝれば。神もすみ給ふなめりと思ひて。

こゝにしもわきて出ける石清水神の心をくみて知はや

それより二日といふ日の夕ぐれにすみよしにまうでつきぬ。みればはるかなる海にていとおもしろし。南には江ながれて。水鳥の様々なるあそぶ。あまの家にやあらん。あし垣のやのいとちいさきともあり。秋の名殘夕ぐれのそらのけしきもたゞならずいとあはれなり。みやしろには庭も見えず。色々さまざまなるもみぢちりて冬ごもりたり。經などよみ聲して人しれずかくおもふ。

ときかけつ衣の玉は住のえの神さひにける松の梢に

かくてやしろ〱にさぶらひていのり申やう。この世はいくばくにもあらず。水のあは草の露よりもはかなし。さきの世のつみをほろぼして。行末のぼだいをとらんとおもひ侍る心ふかうて。世をいとふこと。おもひ

をこたらずあらんによりてなり。ねがはくはわれ。春は花を見。秋はもみぢを見るとも。にほひにふれ色にめでつる心なく。朝の露夕の月をみるとも。せけんのはかなきことををしへ給へ。

世中をいとひ捨てんのちはたゝ住のえにある松とたのまむ

いづみなる信太のもりにてあるやう有べし。

我思ふことのしげさに比ふれは信太の杜の千えはものかは

きの國の吹上のはまにとまれる月いとおもしろし。此濱は天人常にくだりてあそぶといひ傳へたる所なり。げにそもいとおもしろし。今宵のそらも心ぼそうあはれなり。夜のふけゆくまゝに。かものうはげの霜うちはらふ風も空さびしうて。たづはるかにて友をよぶ聲もさらにいふべきかたもなう哀なり。それならぬさま〴〵の鳥ども。あまた洲崎にもむらがれてなくも。心なき身にもあはれなることかぎりなし。

をとめこか天の羽衣ひきつれてむへもふけ井の浦におる覧

月の海のおもにやどれるを。浪のしきりあらふを見て。

月に浪かゝるおり又ありきやとふけゐの浦の蜑にとはゝや

波いとあはれなるよしを。また。

浪にもあれかゝるよの又有はこそ昔をしれる海士も答へめ

ふき上の濱にとまれる。夜ふかくそこをたつに。なみのたかう見ゆれば。

あまのとを吹上の濱に立浪はよるさへみゆる物にそ有ける

しゝのせ山にねたる夜。しかの鳴をきゝて。

うかれけむ妻のゆかりにせの山の名を尋ねてや鹿もなく覧

いはしろの野にねたる夜。あるやうある心し。

石代のもり尋てといはせはやいくよか松はむすひはしめし

ちかの濱にこいしひろふとて。

うつ浪にまかせてをみん我拾ふはまゝの數に人もまさらし

みなへの濱にしりたる人のみやまより歸るにあひぬ。同じうはもろともにまて給へかしといへば。かへる人。忍びて申給ふことこそあれといへば。いほぬし。なにごとにかあらん。ものうたがひはつみうなりとて。ひろひたる貝を手まさぐりになげやりたれば。ものあらがひぞまさるなる。かうなあらがひ給そとて。かうなのからをなげをこせたり。また浪にもうかびてうちよせらるゝを。かれ見給へ入ぬるいそのといへば。かへる人。こふる日はと心ありがほにいへば。いほぬし。くまのおのづからといへば。浦のはまゆふといらふる。いほぬし。かさねてだになしとこそといへばかへる人。中々にとて。

もしほ草涙はうつむとうつめともいや現れに現れぬかり

いほぬし返し。

みくまのゝ浦にきよすてふ濡衣のなき名をすゝく程と知なむ

などいひてたちぬ。さらば京にてといへば。いほぬし。おさふる袖のといらふれば。あなゆゝしや。後瀬の山になどいひてたちぬ。その夜むろのみなとにとまりぬ。きのもとに柞のもみぢして。いほりつくりて入ふしぬるに。夜のふくるまゝに時雨いそがしうふるに。

いとゝしくなけかしきよな神無月旅の空にもふる時雨哉

御山につくほどに。木のもとごとに手向の神おほかれば。水のみにとまる夜。

萬代の神てふかみにたむけしつ思ひと思ふことはなりなん

それより三日といふ日御山につきぬ。こゝかしこめぐりて見れば。あむじち(庵室)ども二三百ばかりをのがおもひ〳〵にしたるさまもいとおかし。したしうしりたる人のもとにいきたれば。みのをこしにふすまのやうにひきかけて。ほだくひといふものを枕にし

て。まろねにねたり。やゝといへば。おどろきて。とくいり給へといひていれつ。おほんあるじせんとて。ごいしけの おほきさなるいものかしらをとり出てやかす。これぞいものはゝといへば。さはちのあ まさやあらんといへば。人の子にこそくはせ めといひて。けいめいすれば。さてかねうてば御堂へまいりぬ。かしらひきつゝみて。みのうちきつゝ。こゝかしこにかずしらずまうで あつまりて。れいしはてゝまかり出るに。あるはそ上の御まへにとゞまるもあり。らい堂のなかのはし・のもとに。みのうちきつゝ忍びやかにかほ引いれつゝあるもあり。ぬかづきだらによむもあり。さま〲にきゝにくくあらはにそと聞もあり。かくてさ ぶらふほどに。霜月の御はかうになりぬ。そのありさまつねならずあはれにたふとし。はかうはてゝのあしたに。ある人かう いひをこせたり。

をろかなる心の暗にまとひつゝ浮世にめぐる我身つらしな

いほぬしもこの事をまごゝろにたう心を佛のごとしとおもふ。

また年ごろ家につくせることをくいて。

白妙の月また出てゝらさなむかさなる山の遠にいるとも

玉のをもむすふ心のうらもなく打とけてのみ過しけるかな

さてさぶらふほどに。霜月廿日 のほどのあすまかでなむとて。をとなし川の つらにあそべば。人しばしさぶらひ給へかし。神もゆるし聞え給はじなど いふほどに。かしらしろきからすありて。

山からすかしらも白く成にけり我かへるへき時やきぬ覽

さて人のむろにいきたれば。ひのきを人のたくか。はしりはためくをとりて侍れば。むろのあるじ。この山はほだくひけんありて。

はた〳〵とぞ申すといへば。たきごゝろならむといひてたちぬ。さてみふねじまといふ所にて。

山そこのおいに誰さほさしてみふね嶋神の泊りにとよさせけむ

たゞの山のたきのもとにて。

名にたかく早くよりきし瀧の糸に世々の契りを結ひつる哉

この山のありさま。人にいふべきにあらず。あはれにたうとし。かへるとて。そこにかひひろふとて袖のぬれければ。

藤衣なきさによするうつせ貝ひらふたもとはかつそ濡ける

この濱の人。はなのいはやのもとまでつきぬ。見ればやがて岩屋の山なる中をうがちて經をこめ奉りたるなりけり。これはみろくぼとけの出給はんよにとり出たてまつらんとする經なり。天人つねにくだりてくやうし奉るといふ。げに見奉れば。この世ににたる所にもあらず。そとばのこけにうづもれたるなどあり。かたはらにわうじのいはやといふあり。たゞ松のかぎりある山也。その中にいとこきもみぢどもあり。むげに神の山と見ゆ。

法こめてたつの朝をまつ程は秋の名こりそ久しかりける

夕日に色まさりていみじうおかし。

心あるありまの浦のうら風はわきて木の葉も殘す有けり

天人のおりてくやうし奉るを思ひて。

天津人いはほをなつる袂にや法のちりをはうちはらふ覽

四十九院のいはやのもとにいたる夜。雪のいみじうふり。風わりなくふけば。

うら風に我こけ衣ほしわひて身にふりつもる夜半のみ雪かな

たてが崎といふ所あり。かみのたゝかひしたる所とて。たてをついたるやうなるいはほどもあり。

打濱に滿くる汐のたゝかふをたてが崎とはいふにそ有ける

伊勢の國にてしほのひたる程に。見わたり

といふはまをすぎむとて。夜なかにおきてくるに。道も見えねば。松ばらの中にとまりぬ。さて夜のあけにければ。

よをこめていそきつれ共松の根に枕をしてもあかしつる哉

あふ坂ごえしてやすむほどに。雪うちふりなどす。ものゝ心ぼそければ。なちの山にとまりなましものを。いづちとていそぎつらんなどおもふほどに。きあひたる人。いかで關はこえさせ給ひつるぞなどいふにつけてかうおぼゆ。

雪とみる身のうきからにあふ坂の關もあへぬは泪なりけり

とてたちぬ。つゝみのもとにて。京極の院のついぢくづれ。むまうしいりたち。女どもなどかさをきて。こむくうちありくをみるに。ことのおはせし時思ひあはせられて。なを世中かなしやなどおもふ。

金葉 けにそ世は鴨の川浪たちまちに淵もせになる物には有けり

など。見ることの木艸につけていはれける。かもに葉月ばかり。すゞむしのいみじうなき侍りしかば。

聞からにすこさそまさるはるかなる人を忍ふる宿の鈴虫

おぎおほかる家にて。風のふき侍に。よの中のはかなきことなど思たまへられて。

いかにせむ風にみたるゝ荻の葉の末はの露に異ならぬみを

秋のゝに鹿のしからむ荻のはのすゑはの露の有かたのよや

おなじ月の十日ごろに月いづるまで侍しに。たゞ入にいり侍しかば。これを思ふやう侍りて。

さもあらはあれ月いてゝさも入ぬれはみるへき人のある都かは

おなじころ。つれ〴〵にねられで侍しに月のいで侍ければ。

新古 天原はるかにひとりなかむれは袂に月のいてにけるかな

そのころのことにや侍けん。いつとも侍らねども。

つれなくてをさふる袖のくれなゐにまはゆき迄に成にける哉

かものふだ經にあひ侍しに。しかのなき侍しかば。

鹿の音にいとゞわりなさまさりけり山里に社秋はすませめ

すゞか山に。

なとにきく神の心をとろ〳〵とすゞかの山をならしつる哉

かはのまゝにかんだちにまかりしに。かはなみのいみじうたちしかば。

わりなくも心一つをくだくかなよをへて岸にたつ涙はたゞ

つのくになるてらにまかりけるに。神なびのほどにしかのなきければ。

我ならぬ神なび山のまさきへてつのまく鹿もねこそ鳴けれ

よのこゝろうきこゝろひとつに思わびて。

君たにもみやこなりせは思ふ事まつかたらひて慰めてまし

十月かもにこもりて。あかつきがたに。

みつかきにふる初雪を白妙のゆふしてかくと思ひけるかな

二三日侍てきぶねのもとの宮に侍しに。むらぎえたる雪ののこりて侍しかば。うちとけぬことや思いでけん。

白雪のふるかひもなき我身こそきえつゝ思へ人はとはぬを

もみぢのえもいはず見え侍しかば。みくらし侍て。夜になしていで侍とて。

紅葉はの色のあかさにめをつけてくらまの山に夜たどる哉

ある人のはつ雪のふり侍しつとめて。きくにさしていひて侍し。

ませの中に移ろふ菊のけさいかに初雪といはぬ君を恨みん

かへし。

初雪のふるにも身こそ哀なれとふへき菊のそのしなけれは

あけぼのにながめたちて侍しに。きりのいみじうみるまゝにたちわたりて。そらに見ゆらんとまことにいひ侍ぬべかりしかば。

からにしき染る山には立田姫きりのまくをそ引まはしたる

かたらふそうのまうでこで。かはもにさして。

こゝにとてくるをは神もいさめしを御手洗川の川藻成とも

かへし。

みな人のくるにならひて御手洗のかはも尋ねす也にける哉

みたゝし川のつらに侍しに。もみぢのかたへはきくにあをばなみはへしを。人々みたまへてかへり侍てみえず侍しに。ちり侍しかば。

御手洗のもみぢの色は川のせに淺さも深くなりはてにけり

京よりまうできたりける人の侍らざりけるほどにまうできて。かういひをきてまかりにける。しものみやしろなりしほどに。

みたらしのかさりならては色のみえつゝかゝらましやはこ

とてまかりにければ。こと人をかくなんといひていざなひて。はし殿にもろともに侍しに。日のくれ侍しかば。

ひとの落る御手洗川の紅葉はなよにいるまても折てみる哉

夜なられ侍ぬまゝにきゝ侍れば。まことに夜中うちすぐるほどに。ちどりのなき侍しかば。

曉やちかくなるらんもろともにかならすもなくゝ川千鳥かな

神のおまへによゐあかつきとさぶらひて、の御事をいのり申に。

いひいつれは涙さし出る人の上な神もあはれや思すくらし

しものをきて侍しつとめて。もみぢはいかにと人のいひて侍しに。

なく霜のあさふす程やあらはあらん今一日たにみぬはもみち葉

紅葉のちりはてがたに風のいたうふき侍しかば。

おちつもる庭をたにとてみるものをうたて嵐の吹はらふ覧

十月一日かんしに人々うたよみしに。

もみち葉のこのもとゝしにみもわかす心なのみも廻らかす哉

つきを。

山のはな出かてにする有明の月は光そほのかなりける

しぐれを。

ことそとて思ふともなき衣手に時雨のいたく降にけるかな

あるそうのみやしろに一夜さぶらひてまかでけるに。しものみやしろにまうでて侍しほどに。かくかきてすだれにさしはさみて

まかりにける。

たひのいもねて心みつ草枕霜のおきつるあかつきそうき

返しいひにつかはしゝ。

さてなれしもの社もよをへてはおきつゝかよふ我衣手を

神に申侍し。よにはべるかひ侍らぬをこゝろにかなふなどおぼえ侍しかば。ながれむのちの名も。しらでやはべりなましなどおもひ給へられ侍しかば。身をやなげてましとおぼえ侍て。

ひたふるに頼むかひなき浮身をは神もいかにか思なりなん

まかりいでしに。きぶねに。

うきことのつゐにたえすは神にさへ恨を残す身とや成なん

かたをかのすぎにむすびつけし。

片岡のいかきのすきしるしあらは夕暮毎にかけて忍はん

いひちぎる事ありける人に。

契なきし大和なでしこ忘るなよみぬまに露の玉きえぬとも

こまかなる文をえてうれしき事の侍に。

うきこともきみかゝたまつみつるより露残さすそ思捨つる

のぼらん事。はるかに人ののたまへるに。くらうなるほど。しとみおろす人のなどかさてはといふに。おもふたまへし。

思やるかたしなければつれ／＼と

よろづに思ひやりきこゆるに。しだりをのとのみ思ひしられ侍。みによろづしられ侍て。

かくしあらは冬のさむしろ打拂ふよはの衣手今やぬるらん

風にはかにおこり侍て。宮しろよりまかりいで侍て。

かつらきのくめの岩橋しるまてはと思ふ命の絶ぬへきかな

きくやうある人に。

した紐は結ひをきけん人ならてまた打とけむ事やものうき

返し。

濡衣につけゝん紐はきなからも結ひもしらすときも習はす

すのりとりにとて。人々あまたまうできて。かりたてゝゐてまうできたるに。これをと思ふ人や侍けん。よ半のけしきぞいとあは

れに侍や。

すのりとるぬまかは水におり立て取にもまつそ袖は濡ける

さき〲見る人のねごろになりて。うとうもてなして侍に。月のあはれなりし夜。

ほのかにもほのみしものを遙かにも雲かくれ行空の月かな

これはとをたゞあふみの日記。

三月十日。あづまへまかるに。つゝみてあひみぬ人をおもふ。

都いつるけふ計りたにはつかにも逢みて人に別れにしかは

おはたでらにて京をかへり見て。

都のみかへりみられしあつま路に駒の心にまかせてそゆく

せきやまの水のほとりにて。

せき水に又衣手はぬれにけりふたむすひたにのまぬ心に

人のとうくだりねといひしをせきいづるほどに思いでて。

うかりけ又身は東路の關守も思かほにてとゝめさりけり

をかたのはらといふ所をめぐるに。

うきなのみおひ出る物を雲雀あかる岡田の原をみすてゝそ行

かゞみ山のみねに雲ののぼるを。

鏡山いるとてみつるわか身にはうきより外の事なかりけり

あかつきにきじのなくを。

すみなれののへになのれは妻とれて旅ゆくかほに鳴雉子哉

はるかにひえの山をみて。あすよりはかくれぬべしと思て。

けふ計りかすまさらなんあかて行都の山をあれとたにみん

むかしこもりてをこなひ侍し山里の火にやけて。ありしにもあらずなりて。あむすちのまへにありしやまぶきの草のなかにまじりて所々あるを。

あたなりとみる〲植し山吹の花の色しもくたらさりけり

また。

山吹のしるしはかりもなかりせはいつこを住し里としらまし

そこよりくだるに日くれぬ。かたらひしひじりのある所にまかりたれば。その人はしにけり。もろともにはじめはべりしに。ふけ

かうをこなふとて。人々あまた侍れど。みもしらぬ人なり。ひとをよびいだしていふ。

われをとふ人こそなけれ昔みし都の月はおもひいつらん

又こと人々のさるべきもなくなりにけりときゝて。

なそもかくみとみし人は消にしをかひなき身しも何留り劍

すのまたのわたりにてあめにあひて。そのよやがてそこにとまりて侍に。こまどもあまたみゆ。

澤にすむこまほしからぬ道にいてゝ日暮し袖を濡しつる哉

おはりなるみのうらにて。

かひなきは猶人しれすあふことの遙なるみのうらみ成けり

ふたこ山にて。つゝじのはるぐ\と咲て侍に。

からくにのにしなりとてもくらへみむ二村山の錦にはにし

その夜こふにとまる。このをりしのをかに人々とまりて。きたなどいふべきにもあらず。かしは木のしたにまくひきてやどり侍て。人しれずおもふことおほう侍に。曉がたに。

ねらろやとふしみつれとも草枕有明の月も西にみえけり

しかすがのわたりにて。わたしもりのいみじうぬれたるに。

旅人のとしも見えれとしかすかにみなれてみゆる渡守哉

みやぢ山の藤のはなを。

紫のくもとみつるはみや地山名高き藤のさける也けり

たかし山にてすへつきつくるところときゝて。

たつならぬ高師の山のすへつくり物思ひをそやくとすと聞

はまなのはしのもとにて。

人しれすはまなの橋のうちわたし歎そ渡るいくよなきよを

はしのこぼれたるを。

中絶て渡しもはてぬ物ゆへになにゝはまなの橋をみせけん

まかりつきてのち雨のふり侍にければ。かくおぼえ侍。

誰に言むひまなき比のなかめかる物思ふ人の宿りからかと

ほとゝぎすのころなきゝて。
此比はれてのみそまつ時雨(鳥カ)しはし都のものかたりせよ
はこ鳥のなくをきゝ侍て。
故郷のことつてかとてはこ鳥のなくなうれしと思ひける哉
ぬなはのながきを人のもてまうできたるを
みて。
我ならはいけといひても浮ぬなは遙にくるはまつ留てまし
夜ぶかくほとゝぎすをきゝて。
身なつめは哀れとそきく時鳥よなへていかゝ思へはかなし
五月五日。あめのふり侍に。
世の中のうきのみまさるなかめには菖蒲のね社先流れけれ
たちばなの木に郭公のなき侍に。
郭公花(寺ヵ)たちはなのかはかりになくはむかしや戀しかるらん
山里よりむめをもてまうできたるをみて。
都にはしつえの梅も散はてゝたゝ香はかりの露や(のイ)なくらん
ほとゝぎすのなくを。
我はかりわりなく物や思ふらん夜ひるもなくほとゝきす哉
六月七日。またつとめて。

夏山のこのしたかけに置露のあるかなきかのうき世成けり
よもすがら月をながむる曉に。
つれ／＼と慰まれともよもすからみらるゝものは大空の月
つごもりにねられず侍まゝに。夜ふくるま
で侍て。
そらはるゝと闇のよる／＼眺むれは哀れに物そ見え渡りける
おなじ月の六日。つゆのほたるにかゝりて
侍りければ。
戀わひてなくさめにする玉つさにいと(レイ)ゝもまさる我涙かな
七日のつとめて。かはらへ人のいざと申に。
たなはたのあまの羽衣すきたらはかくてや我な人の思はん
おなじ日。うらやまれぬるなど思ひ侍て。
七夕なもとかしとみし我身しもはてはあひみぬ例とそなる
又。
逢ことなけふとたのめて待たにもいか計りかはあるな七夕
ある僧のもとよりをみなへしなをこせて。
白露のなくに咲けるなみなへしよ中にやいりて君なみる覽
おとこのこと所よりかよふ人のもとより。

つくろふ人侍らねば。ところとやうになん
とて。うりをゝこせて侍に。
秋ことにたゝみるよりはうりふ山我そのにやはなり試みぬ
あか月にむしのなくを。
きゝしかなわかこと秋のよもすからねられぬ儘に虫も鳴也
あるそうののぼり侍らん事とひて侍しに。
君はおもふ宮古はこひし人しれすふたみちかけて歎比哉
きくをいとおほううへて侍に。のぼり侍な
んとてむすびつけ侍し。
みつきなはふる郷もこそ忘らるれこの花さかぬまつ歸り南
をちゝうるこどものはゝの。ことおとこに
つきてはべれば。いみじうなげくよしをき
ゝき侍て。
その原の梢をみれは箒木のうきをほのきく袖もぬれけり
かひのすけといふもののごをいみじうこの
み侍しにつかはす時。しかのなき侍しに。
よりこゑをそしかも誠に思ひけるかひよ〳〵とこと草にして
京よりねんごろなる人々の御ふみどもある
に。なくなり給にし人おはせましかばと。み
ればおぼえ侍て。
今一人そへてやみましたまつさを昔の人のあるよなりせ
きくにむすびつけしふみをある人のみたま
ひて。九日。
みつきなく留れと迄は思ねとけふはすくといふ花に社みれ
返し。
眞心によはひしとまる物ならはちゝの秋迄すきもしなまし
なをいでて十一日はまなのはしのもとにと
まり・て。月のいとおもしろきを見侍て。
うつしもて心静かにみるへきをうたても涙のうち騒くかな
夜ふけてしかのなくに。
たかしやま松の木すゑに吹風のみにしむ時そ鹿もなきける
うつろひする所にいはひのこゝろを。
君か代はなるをの浦になみたてる松の千歳そ數にあつめん
このまへになるをのはまといふ所の侍な
り。さてそのまつは見え侍しなりとぞ。

右いほぬし一巻以亞相爲氏卿眞蹟書寫以扶桑拾葉集及
一本挍合畢

紀行部二

さらしな日記

菅原孝標朝臣女

あづまぢの道のはてよりもなをおくつかたにおひ出たる人。いかばかりかはあやしかりけむを。いかに思ひはじめける事にか。世中にものがたりといふもののあんなるを。いかでみばやとおもひつゝ。つれづれなるひるまよゐなど。あね[にイ]まゝ母などやうの人々の其物語。かのもの語。ひかる源氏のあるやうなど。ところどころかたるをきくに。いとゞゆかしさまされど。わがおもふまゝに。そらにいかでかおぼえかたらむ。いみじく心もとなきまゝに。とうじんにやくし佛をつくりて。手あらひなどして。人まにみそかにいりつゝ。京にとくあげ玉ひて。ものがたりのおほく候なる。あるかぎり見せたまへと身をすてゝぬかをつき祈り申ほどに。十三になるとしのぼらんとて。九月三日かどでして。いまだちといふ所にうつる。年ごろ遊びなれつるところをあらはにこぼちちらして。立さはぎて。日の入ぎはのいとすごく霧わたりたるに。車にのるとて打みやりたれば。人まにはまいりつゝぬかをつきしやくし佛の立たまへるをみすて奉る。かなしくて ひとしれず打なかれぬ。かどでしたる所は。めぐりなどもなくて。かりそめのかやのしとみなど

もなし。すだれかけまくなど引たり。南ははるかに野のかたみやらる。ひんがし西は海ちかくて。いとおもしろし。夕霧たちわたりていみじふおかしければ。あさいなどもせず。かたがたみつゝこゝをたちなん事もあはれにかなしきに。おなじ月の十五日雨かきくらし降に。さかひを出て下野の國のいかたといふ所にとまりぬ。家などもうきぬる計に雨ふりなどすれば。おそろしくていもねられず。野中にをりたちたる所に。たゞ木ぞみつたてるところに。其日は雨にぬれたるものどもほし。國にたちをくれたる人々まつとて。そこに日を暮しつ。十七日のつとめてたつ。昔下つさの國にまのの長といふ人住けり。引ぬのも千むら萬むらをらせさらさせけるが家の跡とて。深き川を船にてわたる。むかしの門のはしらのまだ殘りたるとて。おほきなる桂川の中によつたてり。人々歌よむを聞て。心のうちに。

　くちもせぬ此川はしら殘らずは昔の跡をいかてしらまし

その夜はくろどの濱といふところにとまる。かたつかたは廣濱なる所のすなごはるゞとしろきに。松原しげりて。月いみじうあかきに。風の音もいみじう心ぼそし。人々おかしがりて。歌よみなどするに。

　まとろましこよひならてはいつかみんくろとの濱の秋のよの月

そのつとめてそこをたちて下つさのくにとむさしのさかひにて有。ひと井がはといふがかみのせ。まつさとのわたりのつにとまりて。夜ひとよ舟にてかつゞ物などわたす。めのとなる人は。おとこなどもなくなして。さかひにて子うみたりしかば。はなれてべちにのぼる。いとこひしければ。いかまほしくおもふに。せうとなる人いだきてゐていきたり。みな人はかりそめのかりやなどいへど。風すさまじく。

ひきわたなどもしなどしたるに。これはおとこなどもそはねばいとてばなちにあら〳〵しげにて。とまといふものをひとへ打ふきたれば。月のこりなくさし入たるに。紅のきぬうへにきて。打なやみてふしたる。つきかげさやうの人には。こよなく過て。いとしろくきよげにて珍らしと思ひて。かきなでつゝうちなくを。いとあはれに見すて難くおもへど急ぎゐてわかるゝ心地。いとあかずわりなし。おもかげにおぼえて悲しければ。月のけうもおぼえずくんじふじぬ。つめとて。舟に車かきすへてわたして。あなたのきしにくるまひきたてゝ。をくりにはへつる人々。これよりみなかへりぬ。のぼるはとまりなどして。いきわかるゝほど。行もとまるもみななきなどす。おさな心地にもあはれに見ゆ。今は武藏の國に成ぬ。ことにおかしき所も見えず。はまもすなごしろくなどもなく。こひぢのやうにて。むらさき生ときく野も。あし荻のみたかくおひて。馬にのりてゆみもたるすゑ見えぬまでたかく生ひしげりて。中をわけ行に。たけしばといふ寺あり。はるかにいゝさらふといふ所のらうのあとのいしずへなど有。いかなる所ぞととへば。是はいにしへたけしばといふさかなり。國の人の有けるを火たきやのひたく衞士にさし奉りたりけるに。御前の庭をはくとて。などやくるしきめを見るらん。わがくにに七三つくりすへたるさかつぼにさしわたしたるひたえのひさごのみなみ風吹ば北になびき。北風ふけば南になびき。西吹ば東になびき。東ふけば西になびくを見で。かくてあるよと。ひとりごちつぶやきけるを。その時帝の御むすめいみじうかしづかれ給ふ。たゞひとりみすのきはに立いでたまひて。柱によりかゝりて。御覽するに。此

おのこのかく獨ごつをいとあはれに。いかなるひさごのいかになびくらんと。いみじうゆかしくおぼされければ。みすをしあげて。あのをのこ。こちよれとめしければ。かしこまりてかうらんのつらにまいりたりければ。いひつることと今ひとかへり我にいひてきかせよとおほせければ。さかつぼの事をいまひとかへり申ければ。我ゐていきてみせよ。さいふやうあ〔と抹〕りとおほせられければ。かしこくおそろしく思ひけれど。さるべきにや有けむ。おひ奉りてくだるに。〔ろイ〕びんなく人をひてくらんとおもひて。その夜せたのはしのもとに此宮をすへたてまつり。せたのはしをひとまばかりこぼちて。それをとびこして。このみやをかきおひ奉りて。七日七夜といふに。むさしの國にいきつきけり。みかどきさき。みこうせ玉ひぬとおぼしまどひもとめ給に。武藏の國のゐじのをのこなん。いとこうばしきものをくびにひきかけて。とぶやうに逃けると申いでてこのをのこをたづぬるになかりけり。ろんなくもとの國にこそ行らめと。おほやけよりつかひくだりてをふに。せたのはしのこぼれてえゆきやらず。三月といふにむさしの國にいきつき〔あイ〕て。このをのこをたづぬるに。此みこおほやけ・つかひをめして。われさるべきにや有けん。このをのこの家ゆかしくて。ゐてゆけといひしかば。ゐて來たり。いみじ〔れイ〕くこゝありよくおぼゆ。此をのこつみしにうせられれば。我はいか〔ト抹〕であれど。これもさきの世に此國にあとをたるべきすぐせこそありけめ。はや歸りておほやけに此よしをそうせよと仰られければ。いはんかたなくてのぼりて。帝にかくなん有つると奏しければ。いふかひなし。そのをのこをつみしても。いまは此みやをとりかへし。都にか

へし奉るべきにもあらず。たけしばのをのこに。いけらん世のかぎり。武藏の國をあづけとらせて。おほやけごともなさせじ。たゞ宮にその國をあづけ奉らせ給ふよしの宣旨下りにければ。此家を內裡のごとくつくりてすませ奉りける家を。宮などうせ玉ひにければ。寺になしたるをたけしば寺といふなり。その宮のうみ給へるこどもは。やがてむさしといふ姓をえてなん有ける。それより後。火たきやに女はゐるなりとかたる。野山あしをぎのなかをわくるよりほかの事なくて。武藏と相摸との中に有[アイ]てあすだ川といふ。在五中將の。いざこととはむと。よみけるわたり也。中將の集にはすみだ川とあり。舟にてわたりぬれば相摸の國になりぬ。にしとみといふ所の山。ゑよくかきたらん屏風をたてならべたらんやうなり。かたつかたは。海はまのさまも。よせかへる

波のけしきも。いみじうおもしろし。もろこしがはらといふ所も。すなごのいみじうしろきを二三日ゆく。夏はやまとなでしこのこくうすく。にしきをひけるやうになん咲たる。これは秋の末なれば。見えぬといふになを所々は打こぼれつゝ。あはれげに咲わたれり。もろこしがはら[ニイ]。やまとなでしこしも咲けんこそなど。人々おかしがる。あしがら山といふは。四五日かねて。おそろしげにくらがりわたれり。やう〳〵いりたつ。ふもとのほどに。空のけしきはか〴〵しくも見えず。えもいはずしげりわたりて。いとおそろしげなり。麓にやどりたる所に[所イナシ]。月もなく。くらき夜のやみに。まどふやう成に。あそび三人いづくよりともなく出來たり。五十ばかりなるひとり。二十ばかり成。十四五なると有。いほのまへに。からかさをさゝせてすへたり。をのこども火をともし

て見れば。むかしこはだといひけんがまごといふ。かみいとながく。ひたいいとよくかゝりて。色しろくきたなげなくて。さても有ぬべきしもづかへなどにても有ぬべしなど。人人哀がるに。こゑすべてにるものもなく。空にすみのぼりて。めでたくうたをうたふ。人々いみじうあはれがりて。けぢかくて。人々もてけうずるに。こしくにのあそびはえかゝらじなどいふをきゝて。難波わたりにくらぶればと。めでたくうたひたり。みるめのいときたなげなきに。こゑさへにる物なくうたひて。さばかりおそろしげ成山中にたちて行を。人々あかず思ひて。みななくを。おさなき心地には。まして此やどりをたゝん事さへあかずおぼゆ。まだ曉より足柄をこゆ。まいて山のなかのおそろしげなる事いはむかたなし。雲はあしの下にふまる。山のなかばかりの木の下のわづかなるに。あふひのたゞ三すぢばかりある。世はなれて。かゝる山中にしもおひけんよと人人あはれがる。水はその山に三ところにながれたる。からうじて越はてゝ。關山にとゞまりぬ。是よりは駿河なり。よこはしりの關のかたはらにいはつぼといふところ有。えもいはずおほきなる石のよはうなる中に。あなのあきたる中よりいづる水の。淸くつめたき事かぎりなし。富士の山は此國なり。我生出し國にては。にしおもてにみえし山なり。その山のさま。いと世にみえぬさま也。さまこと成山のすがたの。こんじやうをぬりたるやうなるに。雪の消る世もなくつもりたれば。色こききぬにしろきあこめきたらんやうに見えて。山のいたゞきのすこしたいらぎたるより。烟は立のぼる。夕暮は火のもえたつも見ゆ。淸見が關は。かたつかたは海なるに。關屋どもあまた有

て。海までくきぬきしたり。けぶりあふにやあらむ。清見が關の波もたかくなりぬべし。おもしろき事かぎりなし。田籠の浦は。波たかくて船にて漕めぐる。大井川といふわたりあり。水の世のつねならず。すりこなどをこくてながしたらんやうに白き水はやくながれたり。ふじ川といふは富士の山より落たる水也。その國の人の出てかたるやう。ひとゝせごろ。物にまかりたりしに。いとあつかりしかば。此水のつらにやすみつゝ見れば。川上のかたよりき成ものながれきて。物につきてとゞまりたるをみれば。ほぐなり。とりあげて見れば。きなる紙に。にしてこくうるはしくかゝれたり。あやしくてみれば。らいねんなるべき國どもを。ぢもくのごとみなかきて。此國らいねんあくべき事もかみなして。又そへて二人をなしたり。あやしあさましとおもひて。とり上てほして。おさめたりしを。かへるとしのつかさめしに。この文にかゝれたりしひとつたがはず。此國のかみとありしまゝなるを。三月のうちになくなりて。またなりかはりたるも。このかたはらにかきつけられたりし人也。かゝることなむ有し。らいねんの司めしなどは。ことし此山にそこばくのかみ〴〵あつまりない玉ふなりけりと見給へし。めづらかなる事にさぶらふとかたり。ぬましもと云所もすが〴〵とすぎて。いみじくわづらひ出て。遠江にかゝる。さやの中山など越けんほどもおぼえず。いみじくくるしければ。天りうといふ川のつらにかり屋つくりまうけたりければ。そこにて日ごろすぐるほどにぞ。やう〳〵をこたる。冬深くなりたれば。河風はげしく吹上て。たへがたくおぼえけり。そのわたりしつゝ。はまなの橋についたり。はまなのはしくだりし時は。く

ろきをわたしたりし。このたびはあとだにみえねば舟にてわたる。入江にわたりし橋也。とのうみはいといみじくあらく。波たかくて。入江のいたづらなるすどもに。こと物もなく。松原のしげれる中より浪のよせかへるも。いろいろの玉のやうにみえ。まことに松の末より波はこゆるやうに見えて。いみじくおもしろし。それよりかみは。井のはなといふさかのえもいはれず〔れイナシ〕わびしきをのぼりぬれば。三河の國の高師の山といふ。八はしはなのみして。橋のかたもなく。なにの見所もなし。二むら山の中にとまりたる夜。大きなるかきの木の下にいほをつくりたれば。夜ひとよいほのうへにかきのおちかゝりたるを。人々ひろひなどす。宮ぢの山といふ所こゆるほど。十月晦日なるに。紅葉してさかりなり。

嵐こそ吹こざりけれ宮路山また紅葉葉のちらで殘れる

三河と尾張となるしかすがのわたり。げにおもひわづらひぬべくおかし。尾張の國なるみの浦を過るに。夕しほたゞみちにみちて。こよひやどからんも。ちうけんにしほみちきなば。こゝをも過じと。あるかぎりはしりまどひすぎぬ。美濃の國なるさかひに。すのまたといふわたりして。野がみといふ所につきぬ。そこにあそびどもいできて。夜ひとようたうたふに。あしがら成し思ひ出られて。哀に戀しき事かぎりなし。雪降あれまどふに。ものゝ興もなくて。不破の關あつみの山などこえて。近江の國おきながといふ人の家にやどりて四五日あり。みつさか〔のイ〕山のふもとに夜ひるしぐれあられ降みだれて。日の光もさやかならず。いみじうものむづかし。そこをたちて。いぬがみかむざきやすくるもとなどいふところ〳〵なにとなくすぎぬ。みづ海のおもてはる〳〵として。

なでしま竹生嶋などいふ所々〔扶〕のみえたるいとおもしろし。せたのはしみなくづれてわたりわづらふ。あはづにとどまりて。しはすの二日京にいる。くらくいきつくべしと。さるの時ばかりに立てゆけば。關ちかく成て。山づらにかりそめなるきりかけといふものしたるかみより。丈六のほとけのいままであらづくりにおはするが。かほばかりみやられたり。あはれに人はなれて。いづこともなくておはする佛かなと打見やりてすぎぬ。こゝらの國々を過ぬるに駿河の清見が關と相坂のせきとばかりはなかりけり。いとくらく成て。三條の宮の西なる所につきぬ。ひろ〴〵とあれたる所の過ぎつる山々にしも〔しイナシ〕おとらず。おほきにおそろしげなるみ山木どものやうにて。〔以下一本三七八頁下段三行ニツヾク〕」はゝなくなり〔以下一本三七一頁下段八行ヨリツヾケ〕にしめひどもも。むまれしよりひとつにて。よるはひだり右にふしおきするも哀に思ひ出られなどして。心もそらにながめくらさる。たちぎきかいまむ人のけはひして。いといみじくものつゝまし。十日計有てまかでたれば。てゝはゝすびつに火などおこしてまちゐたりけり。くるまよりおりたるを打みておはする時こそひとめもみえさぶらひなども有けれ。この日ごろは人ごゑもせず。まへに人かげもみえず。いと心ぼそくわびしかりつる。かうてのみも。まろが身をばいかゞせむとかするとうちなくを見るもいとかなし。つとめても。けふはかくておは〔しイナシ〕すれば。うちと人おほく。こよなくにぎはゝしくも成たる哉とうちいひてむかひゐたるもいと哀に。なにのにほひの有にかと涙ぐましうきこゆ。ひじりなどすらさきの世のこと夢にみるはいとかたかなるを。いとかうあとはかないやうにはか〴〵しからぬ心ちに夢に見るやう。きよ水のらい堂にゐたれ

ば。別當とおぼしき人いで來て。そこはさきの生に。此みてらの僧にてなんありし。佛師にてほとけをいとおほく作り奉しくどくによりてありしすざうまさりて人と生れたるなり。このみだうの東におはする丈六の佛はそこのつくりたりし也。はくをおしさしてなくなりにしぞと。あないみじ。さばあれにはくをしたてまつらむといへば。なくなりにしかば。こと人はくをし奉りて。こと人くやうもしてしとみてのち淸水にねんごろに參りつかうまつらましかば。さきの世にそのみてらに佛ねんじ申けんちからに。〔以下一本三七三頁上段一行ニツヾク〕をのづからようも」〔以下一本三七八頁下段三行ヨリツヾク〕おこがましく見えしかば。われはかくてとぢこもりぬべきぞと。のこりなげに世をおもひいふめるに。心ぼそき〔さイ〕たへず。東は野のはるぐとあるに。ひんがしの山ぎはは。ひゑの山よりしていなりなどいふ山まであらはに見えわたり。西はならびの岡の松風いとみゝちかう心ぼそく聞えて。内にはいたゞき〔扶〕のもとまで。田といふもののひたひきならす音など。井中のこゝちしていとおかしきに。月のあかき夜などは。いとおもしろきをながめあかしくらすに。しりたりし人さと遠く成ておともせず。便につけて何事かあらんとつたふる人におどろきて。

おもひ出て人社とはれ山里の笆の荻に秋風そ吹

といひてやる。十月に成て京にうつろふ。母あまになりて。おなじ家の内なれど。かたことにすみはなれてあり。てゝはたゞ。われをおとなにしすへて。我は世にもいでまじらはず。かげにかくれたらんやうにてゐたるを見るも。たのもしげなく心ぼそくおぼゆるに。きこしめす（禖子內親王　當今第三皇女　後中宮嫄子崩後也　御半于關白殿號一宮）ゆかりあるところに。何となくつれぐに心ぼそくてあらんよりはとめすを。こだいのおやは。宮づかへ〔人イ〕・はいとうき事也とおもひて

すぐさするを。今の世の人はさのみこそはいでたて。さてもそのづからよきためしもあり。さてもこゝろみよといふ人々有て。しぶ〳〵にいだしたてらる。まづ一夜まいる。きくのこくうすき八ばかりに。こきかいねりをうへにきたり。さこそものがたりにのみこゝろをいれて。それを見るよりほかにゆきかよふるいしぞくなどだにことになく。こだいのおやどものかげばかりにて。月をも花をもみるよりほかの事は〔ホイ〕なきならひに。たちいづるほどの心地。あれみにもあらずうつゝともおぼえで。あかつき〔ヌイ〕にはまかでぬ。さとびたる心地には。中々またまりたらむ。さとずみよりはおかしきこともを見きゝて。心もなぐさみやせんと思ふおり〳〵ありしを。いとはしたなくかなしかるべきことにこそあべかめれと思へどいかゞせむ。しはすになりてまたまいる。つぼねして。このたびは日ごろさぶらふ。うへには時時よる〳〵ものぼりて。しらぬ人の中にうちふしてつゆまどろまれず。はづかしうもののつゝましきまゝに。しのびてうちなかれ〔ていイ〕つゝ。あかつき・〔にイ〕は夜ふかくおりて。ひ〔レイ〕くらしてこのおいおとろへて。われをことくもたのもしからむかげのやうに思ひたのみむかひゐたる〔以下一本三七二頁下段一五行ヨリツヾク〕に戀しくおぼつかなくのみ〔以下一本三六九頁上段一五行ニツヾク〕おぼゆ。」くちお〔くちをしイ〕し。いかによしなかりける心なりと思し見はてゝ。まめ〳〵しくすぐすとならば。さてもありはてず。まいりそめし所にも。かくかきこもりぬるを。まことともおぼしめしたらぬさまに人々もつげ。たえずめしなどする中にも。わざとめして。わかいひとまいらせよと仰〔くだイ〕らるれば。えさらずいだしたつるにひかされて。又とき〴〵いでたてど。過にし方のやうなるあいなだのみの心をごりをだにすべきやうもな

くて。さすがにわかい人にひかれて。おり／＼さしいづるにも。なれたる人はこよなく何ごとにつけてもありつきがほに。我はいとわかうどに有べきにもあらず。又おとなにせらるべきおぼえもなく。時々のまらうどにさしはな（たゞ扶）れてすゞろなるやうなれど。ひとへにそなたひとつをたのむべきならねば。我よりまさる人あるも。うらやましくもあらず。中々心やすくおぼえて。さるべき折ふしまいりて。つれづれなぐ〔ろイ〕さむべき人ともものがたりなどして。めでたきこともおかしくおもしろき折々も。我身はかやうにたちまじり。いたく人にも見しられむにも。はゞかりあんべければ。たゞおほかたの事にのみきゝつゝすぐすに。内の御（長久三年四月十三日宮達入内給藤壺御十四日主上渡御二十日南宮自由是出給）ともにまいりたるおり。有明の月いとあかきに。わがねむじ申す天てる御神は。内にぞおはしますなるかし。かゝるおりにまいりておがみ奉らんとおもひて。四月ばかりの月のあかきに。いとしのびてまいりたれば。はかせの命ぶはしるたよりあれば。とうろの火のいとほのかなるに。あさましくおい神さびて。さすがにいとよう物などいひゐたるが。人ともおぼえず。神のあらはれ玉へるかとおぼゆ。又（い）夜も月のいとあかきに。ふぢつぼのひんがしのとをしあけて。さべき人々物がたりしつゝ月をながむるに。梅つぼの女御（女御藤生子長暦三年十二月二十一日入内内大臣教通女）ののぼらせ給なるをとなひ。いみじう心にくゝいうなるにも。故宮（中宮嫄子長暦元年正月七日入内二十九日爲女御關白女三月立后同三年八月二十八日崩御）のおはします世ならましかば。かやうにのぼらせ給はましなど人々いひいづる。げにいとあはれなりかし。

天のとを雲ゐながらもよそにみて昔の跡をこふる月哉

冬になりて。月なく。雪もふらずながら。星のひかりに空さすがにくまなくさえわたりたる夜のかぎり。殿の御かたにさぶらふ人々とも

のがたりし明しつゝ。あくればたち」やあらま[以下一本一八七頁上段一四行ニツヾ」「以下一本三七〇頁上段一二行ヨリツヾク]し。いとい ふかひ なくまうでつかうまつるこ となくてやみにき。十二月廿五日宮の 御佛名にめしあれば。そのよばかりと思ひて參りぬ。白ききぬどもにこ きかいねりをみなきて。四十餘人計出ゐたり。しるべしいでし人の かげにかくれてあるがなかに。うちほのめいて。あかつきにはまかづ。雪うち散て。いみじくはげしくさえこほるあかつき方の。月のほのかに。こきかいねりの 袖にうつれるも。げにぬるゝがほなり。みちすがら。

年はくれ夜は明かたの月かけの袖に移れる程そはかなき

かう立出ぬとならば。さても宮づかへ のかたにもたちなれ。世にまぎれたるも。ねぢけがましきおぼえもなきほどは。をのづから人のやうにも おぼし もてなさせ 玉ふやうも あらまし。おやたちもいと心えず。ほどもなくこめすへつ。さりとてその有さまの たちまちにきらきらしきいきほひ などあんべい やうもなく。いとよしなかりけり。すゞろ心にても。ことのほかにたがひぬる有さまなつかし。

幾千たび水の田芹をつみしかと思ひしことの露もかなはぬ

とばかりひとり ごたれてやみぬ。其後は何となくまぎらはしきに。ものがたりのことも 打たえわすられて。物まめやかなる さまに心も成果てぞ。などて おほくの年月を いたづらにてふしをきしに。をこなひをも物まうで をもせざりけん。此あらましごととても。思しことどもは。此世にあんべかり けることゞもなりや。ひかる源氏ばかりの人は。此世に おはしけ[るイ]りやは。かほる大將の 宇治にかくしすへ玉へ[以下一本三七一頁下段八行ニツヾク] [以下一本二八七頁上段十四行ヨリツヾク]きもなき世なり。あな物ぐ」るをやくにゝて物まうでを わづかにしても。はかぐ\しく[トイナシ]人のやうならんともねん ぜられず。此ごろの世の

人は。十七八よりこそ經よみをこなひもすれ。さること おもひかけられず。からうじて思ひよることは。いみじくやんごとなき〔くイ〕かたち有さま。ものがたりにあるひかる源氏などやうにおはせん人を年にひとたびにてもかよはし奉りて。うきふねの女君のやうに山里にかくしすへられて。花紅葉月雪をながめて。いと心ぼそげにて。めでたからん御文などを時々まちみなどこそせめとばかり おもひつゞけ。あらましごとにも おぼえけり。おやとなりなばいみじうやむごとなく我身もなりなんなど。たゞ行衞なきことをうち思ひすぐすに。おや（長元）からうじてはるかに遠きあづまになりて。年（五年二月八日任常陸介）頃はいつしか おもふやうに。（女子廿五）ちかきところになりたらば。まづむねあくばかり かしづきたてゝ。ゐてくだりて。海山のけしきも見せ。それをばさるものにて。わがみよりも たかうもてなしかしづきてみんとこそおもひつれ。我も人もすくせのつたなかりければ。ありくてかくはるかなる國になりにたり。をさなかりし時。東の國にゐてくだりてだに。こゝちもいさゝかあしければ。是をや此國にみすてゝ。まどはんとすらんと思ふ。人の國のおそろしきにつけても。わが身ひとつならばやすらかならましを。ところせうひきぐして。いはまほしき事もえいはず。せまほしき事もえせずなどあるが。わびしうもあるかなと心をくだきしに。いまはまいておとなになりにたるを。ゐてくだりて。わが命もしらず。京のうちにてさすらへむはれいの事。東のくにいなか人に成て。まどはんはいみじかるべし。京とてもたのもしうむかへとりてんとおもふるいしぞくもなし。さりとてわづかになりたる國をじし申べきにもあらねば。京にとゞめてながきわか

れにてやみぬべき也。京にもさるべきさまにもてなして。とゞめんとはおもひよゐ事にもあらずと。よるひるなげかるゝを聞こゝち。花紅葉のおもひもみなわすれて。悲しくいみじく思ひなげかるれどいかゞはせん。七月十三日にくだる。五日かねては見んも中々成べければ。うちにもまいこず。まひて其日は立さはぎて。時成ぬれば。今はとてすだれを引あげてうちみあはせて。涙をほろ〳〵とおとして。やがていでぬるを見送る心ち。めもくれまどひて。やがてふされぬるに。とまるをのこのをくりしてかへるに。ふところがみに。

思ふ事心にかなふ身なせは秋のわかれを深くしらまし

とばかりかゝれたるを。えみやられず。ことよろしき時こそこしおれかゝりたる事も思ひつづけけれども。かくもいふべきかたもおぼえぬまゝに。

かけて社思はざりしか此世にてしはしも君に別るへしとは

とやかゝれにけん。いとゞひとめも見えず。さびしく心ぼそく。打ながめつゝ。いづこ計と明暮おもひやる。道のほどもしりにしかば。はるかに戀しく心ぼそき事限なし。明るより暮るまで。東の山ぎはをながめてすごす。八月ばかりにうづまさにこもるに。一條よりまうづる道におとこくるまふたつばかりひきたてゝ。物へ行にもろともにくべきひとまつなるべし。過て行にずいじんだつものをおこせて。

花見にゆくと君をみるかな

といはせたれば。かゝるほどの事はいらへぬもびんなしなどあれば。

千くさなるこゝろならひに秋の野の

とばかりいはせていき過ぬ。七日さぶらふほども。(ことかたらうにこイ)たゞ東路のみおもひやられてよしなし。とかくしてはなれて。たいらかにあひみせ玉

へと申は。ほとけもあはれときゝいれさせ給ひけむかし。ふゆになりて。日暮し雨ふりくらひたる夜。雲かへる風はげしう打吹て。そら晴て月いみじうあかう成て。軒ちかき荻のいみじう風にふかれて。くだけまどふがいと哀にて。

秋をいかに思ひいつらん冬深みあらしにまとふ荻の枯はは

東より人きたる。神拝といふわざして。國のうちありきしに。水おかしくながれたる野のはるばるとあるに。もりのあるおかしき所かな。見せてとまづ思ひいでて。こゝはいづことかいふととへば。こしのびのもりとなん申とこたへたりしが。身によそへられて。いみじくかなしかりしかば。馬よりおりて。そこにふた時なんながめられし。

とゝめをきて我こと物や思ひけんみるに悲しきこしのひのもり

となむおぼえしとあるを。みる心ちいへばさらなり。返ごとに。

こしのひを聞につけても留をきしちゝふの山のつらき東路

かうてつれ〴〵とながむるに。などか物まうでもせざりけん。はゝいみじかりしこだいの人にて。はつせにはあなおそろし。ならざかにて人にとられなばいかゞせん。いし山關山こえて。いとおそろし。くらまはさる山ゐていでん。いとおそろしや。おやのぼりてともかくもと。さしはなちたる人のやうにわづらはしがりて。わづかに清水にゐてこもりたり。それにもれいのくせはまことしかべいこともおもひ申されず。ひがんのほどにていみじうさはがしうおそろしきまでおぼえて。うちまどろみいりたるに。み帳の方のいぬふせぎのうちに。あをきをりものの衣をきて。にしきをかしらにもかづき。あしにもはいたるそうの別當とおぼしきがよりきて。ゆくさきのあはれなら

むもしらず。さもよしなしごとをのみとうちむづかりて。み帳の内にいりぬとみても。打おどろきても。かくなん見えつるともかたらず。心にも思ひとゞめでまかでぬ。はゞ一尺の鏡をいさせて。えゐてまいらせぬかはりにとて。そうをいだしたてゝ。はつせにもうでさすめり。三日さぶらひて。此人のあべからんさま。夢にみせ玉へなどいひてまうでさするなめり。そのほどは精進せさす。このそうかへりて。夢をだにみでまかでなんがほいなきこと。いかゞ歸りても申べきと。いみじうぬかづきおこなひてねたりしかば。御帳のかたよりいみじうけだかうきよげにおはする女のうるはしくさうぞき玉へるが。たてまつりしかゞみをひきさげて。此かゞみにはふみやそへたりしととひ給へば。かしこまりて。ふみもさぶらはざりき。此鏡をなんたてまつれと侍しとこたへたてまつれば。あやしかりける事かな。ふみそふべきものをとて。此鏡をこなたにうつれるかげをみよ。これみれば哀にかなしきぞとて。さめ〴〵となき玉ふを見れば。ふしまろびなきなげきたるかげうつれり。此影をみれば。いみじうかなしな。これ見よとて。いまかたつかたにうつれる影をみせたまへば。みすどもあをやかに。木帳をしいでたるしたより。いろ〳〵のきぬこぼれいでて。梅さくら咲たるに。鶯こづたひ鳴たるをみせて。これをみるはうれしなどの玉ふとなむみえしとかたるなり。いかに見えけるぞとだに見もとゞめず。物はかなき心にもつねにあまてる御神をねんじ申せといふ人あり。いづくにおはします神佛にかはなど。さはいへどやう〳〵おもひわかれて人にとへば。神におはします。伊勢におはします。紀伊の國にきのこくさうと申すは此

御神なり。さては内侍所にすべら神となんおはしますといふ。伊勢の國まではおもひかくべきにもあらざなり。内侍所にもいかでかはまいりおがみ奉らん。そらの光をねむじ申べきにこそはなどうきておぼゆ。しぞくなる人あまに成て。すがく院に入ぬるに。冬頃。

涙さへふりはへつゝそ思ひやるあらし吹らむふゆの山里

かへし。

わけてとふ心のほとの見ゆる哉木陰をくらき夏のしけりを

あづまにくだりしおや。からうじてのぼりて。西山なる所におちつきたれば。そこにみなわたりて見るに。いみじう嬉しきに。月のあかき夜ひとよものがたりなどして。

かゝる世も有ける物を限りとて君にわかれし秋はいかにそ

といひたれば。いみじくなきて。

思ふ事かなはすなそといとひこし命のほとも今そうれしき

これぞ別れのかどでといひしらせしほどのかなしさよりは。たいらかにまちつけたるうれしさもかぎりなけれど。人のうへにてもみし〔以下一本三七〇頁上段一二行ニツヾク〕に。老おとろへて。世にいでまじらひしは。」〔以下一本三六九頁上段一五行ヨリツヾク〕みやこのうちとも見えぬ所のさまなり。ありも(寛仁四年)つかずいみじうものさはがしけれども。いつしか(有國十二月)と思ひし事なれば。物語もとめて見せよ見せよとはゝをせむれば。三條殿の宮に(イ无イモ)しぞくなる人の衛門の命婦(長和二年正月廿七日待一品宮[illegible]三條宮)とてさぶらひけるたづねて文やりたれば。めづらしがりてよろこびて。御前のをおろしたるとて。わざとめでたきさうしどもすゞりの箱のふたにいれてをこせたり。嬉しくいみじくて。夜ひるこれをみるよりうちはじめ。又々もみまほしきに。ありもつかぬみやこのほとりに。誰かは物がたりもとめ見する人のあらん。まゝ母(上總大輔後拾遺作者中宮大進從五位上高階成行女菅標臣爲上總時爲妾依號上總)なりし人は。みやづかへせしがくだりしなれば。思ひしにあらぬことどもなどありて。世中恨めしげにて。外

にわたるとて。いつゝばかりなるちごどもなどして。あはれなりつる心のほどなんわすれん世あるまじきなどいひて。梅の木のつまちかくていとおほきなるを。これが華のさかんおりはこんよといひをきて わたりぬるを。心の内に戀しくあはれ也とおもひつゝ。しのびねをのみなきて。その年も歸りぬ。（治安元年イ）いつしか梅さかなんこむと有しを。さやあるとめをかけてまちわたるに。花もみな咲ぬれどをともせず。おもひわびて。花を折てやる。

たのめしを猶や待べき霜枯し梅をも春はわすれさりけり

といひやりたれば。あはれなることどもかきて。

なをたのめ梅の立枝は契をかぬおもひの外の人もとふ也

その春世中いみじうさはがしうて。まつさとのわたりの月かげ。あはれに見しめのとも三月ついたちになく成ぬ。せんかたなく思ひなげくに。物がたりのゆかしさもおぼえずなりぬ。いみじくなき暮して。みいだしたれば。夕日のいとはなやかにさしたるに。さくらのはなのこりなく散みだる。

散花も又こん春はみもやせんやがてわかれし人ぞ戀しき

（權大納言記云三月十九日[illegible]病者[illegible]之處不審所爲四月九日[illegible]寺北塔）またきけば。侍從の大納言（長家）の御むすめなくなり玉ひぬ也。殿の中將のおぼしなげくなるさま。わがものの悲しきおりなれば。いみじくあはれ也ときく。のぼりつきたりし時。これ手本にせよとて。此姫君の御てをとらせたりしを。小夜深てねざめざりせばなどかきて。鳥べ山谷に烟のもえたらばはかなく見えし我としらなむと。いひしらずをかしげにめでたくかき玉へるを見て。いとゞ涙をそへまさる。かくのみ思ひくんじたるを心もなぐさめんと心ぐるしがりて。はゝ物語などもとめてみせ給ふに。げにをのづからなぐさみゆく。むらさきのゆ

かりをみて。つゞきのみまほしくおぼゆれど。人かたらひなどもえせず。されどいまだみやこなれぬほどにてえみつけず。いみじく心もとなくゆかしくおぼゆるまゝに。この源氏物がたり一の卷よりしてみなみせ玉へと心のうちにいのる。おやのうづまさにこもり玉へるにも。こと事なく此事を申ていでんまゝに。此物語みはてむとおもへど見えず。いと口おしくおもひなげかるゝに。をばなる人のゐなかよりのぼりたる所にわたいたれば。いとうつくしうおひなりにけりなどあはれがりめづらしがりてかへるに。何をか奉らん。まめ〳〵しきものはまたなかりなむ。ゆかしくし給なるものを奉らんとて源氏の五十餘卷ひつにいりながら。ざい中將。とをぎみ。せり川。しらゝ。あさうづなどいふものがたりども。一ふくろとり入て。えてかへる心地のうれしさぞいみじきや。はしなくわづかに見つゝ。心もえず心もとなく思ふ源氏を。一の卷よりして。人もまじらず木丁のうちに打ふして。ひきいでつゝみる心地。きさきのくらゐもなにゝかはせむ。ひるは日暮しよるはめのさめたるかぎり火をちかくともして。是を見るよりほかの事なければ。をのづから名とはそらにおぼえうかぶを。いみじきことに思ふに。夢にいときよげなるそうのきなる地のけさ着たるが來て。法花經五卷をとくならへといふと見れど。人にもかたらず。ならはんともおもひかけず。物がたりのことをのみ心にしめて。我は此ごろわろきぞかし。さかりにならば。かたちもかぎりなくよく。かみもいみじくながくなりなん。ひかる源氏のゆふがほ。宇治の大將のうき舟の女ぎみのやうにこそあらめとおもひける心。まづいとはかなくあさまし。五月ついたち頃。

つまちかき花たちばなのいとしろく散たるをながめて。

時ならず降雪かとぞながめまし花たちばなのかほらざりせば

あしがらといひし山の麓にくらがりわたりたりし木のやうにしげれる所なれば。十月ばかりの紅葉よもの山邊よりもげにいみじくおもしろく。にしきをひけるやうなるに。ほかよりきたる人のいま參りつる道に紅葉のいとおもしろき所の有つるといふに。ふと。

いつこにも劣らし物を我やどのよを秋はつる氣色ばかりは

ものがたりの事をひるは日暮しおもひつゞけ。よるもめのさめたるかぎりは。是をのみ心にかけたるに。夢に見ゆるやう。此ごろ皇太后（妍子禎子母）宮の一品の宮（禎子內親王）の御れうに。六角堂にやり水をなんつくるといふ人あるを。そはいかにととへば。あまてる御神をねんじませといふと見て。人にもかたらず。なにともおもはでやみぬる。いといふかひなし。春ごとに此一品宮をながめやりつゝ。

咲とまち散ぬと歎く春はたゞわがやと顔に花をみる哉

（治安二年）三月つごもりがた。つちいみに人のもとにわたりたるに。櫻のさかりにおもしろく。いまゝでちらぬもあり。かへりて又の日。

あかざりし宿の櫻を春暮て散がたにしも獨見し哉

といひにやる。花のさきちるおりごとに。めのとなく成し折ぞかしとのみあはれ成に。おなじおりなく成玉ひし侍從大納言の御むすめの書を見つゝ。すゞろにあはれ成に。五月ばかり。夜ふくるまで物がたりをよみておきゐたれば。きつらんかたもみえぬに。ねこのいとながうないたるをおどろきて見れば。いみじうおかしげなる猫あり。いづくよりきつるねこぞと見るに。あねなる人。あなかま人にきかすな。いとおかしげなる猫なり。かはんとある

に。いみじう人なれつゝ。かたはらに打ふしたり。尋ぬる人やはと是をかくしてかふに。すべて下すのあたりにもよらず。つとまへにのみありて。ものもきたなげなるはほかざまにかほをむけてくはず。あねおとゝの中につとまとはれて。おかしがりらうたがるほどに。あねのなやむ事あるに。物さわがしくて。此ねこをきたおもてにのみあらせてよばねば。かしがましくなきのゝしれども。なをさるにてこそはとおもひてあるに。わづらふあねおどろきて。いづら。猫はこちゐてことあるをなどととへば。夢に此ねこのかたはらにきて。おのれはじじうの大納言殿の御むすめのかくなりたる也。さるべきえんのいさゝかありてこの中の君のすゞろにあはれとおもひ出たまへば。ただしばしこゝにあるを。此ごろ下すのなかにありて。いみじうわびしきことといひて。いみじうなくさまは。あてにおかしげなる人と見えて。打おどろきたれば。此ねこの聲にて有つるが。いみじく哀成〔以下十七文字一本ニナシ〕なりとかたり玉ふを聞に。いみじくあはれ也。そののちは此ねこを北面にもいださずおもひかしづく。たゞひとりゐたる所に此ねこがむかひゐたれば。かいなでつゝ。侍従大納言の姫君のおはするな。大納言殿にしらせ奉らばやといひかくれば。かほを〔イナシ〕うちまもりつゝ。なかよう〔なごうイ〕なくも。心のおもひなし。めのうちつけに。れいのねこにはあらず。きゝしりがほに。あはれや。世中に長恨歌と云文を物がたりにかきてある所あんなりと聞に。いみじくゆかしけれど。えいひよらぬに。さるべき便をたづねて。七月七日いひやる。

契けんむかしのけふのゆかしさに天の川なみ打出つる哉

返し。

立いづる天の河邊のゆかしさに常はゆゝしきことも忘ぬ

その十三日の夜の月。いみじく隈なくあかきに。みな人もねたる夜中ばかりに。えんに出ゐて。あねなる人空をつくぐ\とながめて。たゞ今ゆくゑなくとびうせなばいかゞおもふべきと問に。なまおそろしとおもへるけしきを見て。ことぐ\にいひなして。わらひなどしてきけば。かたはら成所にさきおふくるまとまりて。おぎのはぐ\とよばすれどこたへざなり。よびわづらひて。笛をいとおかしくふきすましてすぎぬ也。

笛の音のたゞ秋風と聞ゆるになと荻のはのそよとこたへぬ

といひたれば。げにとて。

荻の葉のこたふる迄も吹よらてたゞに過ぬる笛の音ぞうき

かやうにあくるまでながめあひて。夜あけてぞみな人ねぬる。そのかへる年（治安三年）四月の夜中ばかりに。火のことありて。（此火事無見所）大納言殿の姫君と思かしづきしねこもやけぬ。大納言殿のひめ君とよびしかば。聞しりがほになきて。あゆみきなどせしかば。てゝなりし人も。めづらかに哀なること也。大納言に申さむなどありし程に。いみじうあはれに口おしくおぼゆ。ひろぐ\とものふかきみ山のやうにはありながら。花紅葉のおりは四方の山邊もなにならぬを。見ならひたるに。たとしへなくせばき所の庭のほどもなく。木などもなきに。いと心うきに。むかひなる所に梅の（のイナシ）こうばひなど咲みだれて。風につけてかほりくるにつけても。住なれし古郷かぎりなく思ひ出らる。

にほひくる隣の風を身にしめてありし軒端の梅ぞ戀しき

其五月のついたちにあね成人こうみてなくなりぬ。よその事だにおさなくより いみじくあはれと思ひわたるに。ましていはん方なくあはれかなしとおもひなげかる。はゝなどはみ

ななく成たる方にあるに。かたみにとまりたるおさなき人々を左右にふせたるに。あれたる板屋のひまより月のもりきて。ちごのかほにあたりたるがいとゆゝしくおぼゆれば。袖をうちおほひて。今ひとりをもかきよせて思ふぞいみじきや。其程過てしぞくなる人のもとより。むかしの人のかならずもとめてをこせよとありしかば。もとめしに。その折はえ見いでず成にしを。いましも人のおこせたるが。あはれにかなしき事とて。かばねたづぬる宮といふ物がたりをおこせたり。まことにぞあはれなるや。かへりごとに。

埋もれぬかばねを何に尋ねけん苔の下には身こそ成ぬれ

めのと成し人。今はなににつけてかなど。なくなくもと有ける所に歸りわたるに。

故里にかくて社人は歸りけれあはれいか成わかれなりけん

むかしのかたみにはいかでとなん思ふなどかきて。硯の水のこほれば。みなとぢられて。とどめつといひたるに。

かきながす跡はつらゝに閉てけり何を忘れぬ形見とか見む

といひやりたるかへりごとに。

なぐさむるかたも渚の濱千鳥何かうき世にあともとゞめむ

此めのとはか所見て。なくなく歸たりし。

のぼりけむ野へは烟もなかり見いつこをはかと尋てかみし

是を聞て。まゝ母成し人。

そこはかとしりてゆかれど先に立涙ぞ道のしるべ成ける

かばね尋ぬる宮。をこせたりし人。

住なれぬ野への笹原跡はかもなくなくいかに尋ね侘けん　定義朝臣

是を見て。せうとはその夜おくりにいきたりしかば。

見しまゝにもえし烟はつきにしをいかゞ尋し野への笹原

雪の日を經てふるころ。よしの山にすむあま君をおもひやる。

雪降てまれの人めも絶ぬらん吉野の山の峯のかけ道

かへるとしむ月のつかさめしにおやのよろこびすべき事ありしに。かひなきつとめて。おなじ心に思ふべき人のもとより。さりともと思ひつゝ。あくるを待ゐる心もとなさなどいひて。

明るまつ鐘の聲にも夢さめて秋のもゝよの心ちせし哉

といひたる返事に。

あかつきを何に待けむ思事なるともきかぬ鐘の音ゆへ

四月つごもりがた。さるべきゆへありて。東山なる所へうつろふ。道のほど。田のなはしろ。水まかせたるも植たるも何となく青み。おかしく見えわたりたる山の陰くらう。まへちかく見えて。心ぼそくぞ〔ぞイナシ〕あはれなる。夕暮水鶏いみじく鳴。

たゝくとも誰か水鶏のくれぬるに山路を深く尋ねてはこん

靈山ちかき處なれば。まうでておがみ奉るに。いとくるしければ。山寺なる石井によりて。手に結びつゝのみて。此水のあかずおぼゆるかなといふ人のあるに。

おく山のいしまの水を結び上てあかぬ物とは今のみやしる

といひたれば。水のむ人。

山の井の雫に濁る水よりもこはなをあかぬ心ちこそすれ

かへりて。夕日けざやかにさしたるに。宮古の方ものこりなくみやらるゝに。此しづくに濁る人は。京に歸るとて心ぐるしげに思ひて。またつとめて。

山のはに入日の影はいりはてゝ心ほそくそながめやらまし

念佛する僧のあかつきにぬかづく音のたうとく聞ゆれば。とををしあけたれば。ほのぐと明行山ぎは。こぐらき梢ども霧わたりて。花紅葉のさかりよりも何となくしげりわたれば。そらのけしきくもらはしくおかしきに。郭公さへいと近き梢にあまたゝびないたり。

誰に見せ誰に聞せん山里の此曉もおちかへるねも

此つごもりの日。谷のかたなる木の上に郭公かしがましくないたり。

宮古には待らんものを時鳥けふひねもすに啼暮す哉

などのみながめつゝ。もろともにある人。たゞいま京にもきゝたらん人あらんや。かくてながむらんと思おこする人あらんやなどいひて。

山深く誰か思ひはおこすへき月見る人はおほからめとも

といへば。

深き夜に月みのおりはしられとも先山里そ思ひやらるゝ

あかつきに成やしぬらんと思ふほどに。山の方より人あまたくる音す。おどろきて見やりたれば。しかのえんのもとまできてうちないたる。ちかうてはなつかしからぬものゝ聲也。

秋の夜の妻こひかぬる鹿のねは遠山にこそ聞へかりけれ

しりたる人のちかきほどにきて歸りぬときくに。

またひとめしらぬ山邊の松風もおとしてかへる物と社きけ

八月に成て。廿餘日のあかつきがたの月いみじくあはれに。山の方はこぐらく。瀧の音ども似る物なくのみながめられて。

思ひしる人にみせはや山里の秋のよふかき在明の月

京に歸出るに。わたりし時は水ばかりみえし田どもゝみなかりはてけり。

苗代の水かけはかりみえし田の苅はつる迄なかゐしにけり

十月つごもりがたに。あからさまにきて見れば。こぐらうしげれりし木の葉ども殘なく散みだれて。いみじく哀げにみえわたりて。心地よげにさゞらぎながれし水も。木の葉にうづもれてあとばかり見ゆ。

水さへ〔そイ〕にすみたえにけり木葉散あらしの山の心ほそさに

そこなる尼に。春まで命あらばかならずこむ。花ざかりはまちつけよなどいひてかへりにしを。年歸りて三月十餘日になるまでおともせねば。

契をきし花の盛をつけぬ哉春やまたこぬ花や匂はぬ

たびなる所にきて。月の頃。たけのもとちかくて。風の音にめのみさめて。うちとけてねられぬ頃。

竹の葉のそよく夜毎にねさめして何ともなきに物そ悲しき

秋のころそこを立てほかへうつろひて。そのあるじに。

いつことも露の哀はわかれしをあさちか原の秋そ戀しき

まゝ母成し人。くだりし國のなをみやにもいはるゝに。こと人かよはして後もなを其名をいはると聞て。おやの今はあいなきよしいひにやらんと有に。

あさゝらや今は雲井に聞物を猶きのまろか名のり〔ツイ〕をはする〔以下一本三七三頁下段一五行ニツヾク〕

かやうにそこはかとなき事を思ひつゞく」〔以下一本三七三頁上段一行ヨリツヾク〕わかれ〳〵しつゝまかでしを。おもひいでければ。

月もなく花もみさりし冬の夜の心にしみて戀しきやなぞ

われもさおもふ事なるを。おなじ心なるもおかしうて。

さえし夜の氷は袖にまたとけて冬の夜なからねを社はなけ

御前にふしてきけば。池の鳥どもの夜もすがら。こゑ〴〵はぶきさはぐ音のするにめもさめて。

わかことそ水の浮ねにあかしつゝ上毛の霜を拂ひわふなる

とひとりごちたるを。かたはらにふしたまへる人きゝつけて。

まして思へ水のかりねの程たにそうは毛の霜を拂ひ侘ける

かたらふ人どち。つぼねのへだてなるやりどをあけあはせて。物語などしくらす日。又かたらふ人のうへにものしたまふをたび〳〵よびおろすに。せちにことあらばいかむとあるに。かれたるすゝきのあるにつけて。

冬枯のしのゝを薄袖たゆみまねきもよせし風にまかせん

上達部殿上人などに對面する人はさだまりた

るやうなれば。うゐ〳〵しきさと人はありなしをだにしらるべきにもあらぬに。十月ついたちごろのいとくらき夜。ふだん經にこゑよき人々よむほどなりとて。そなたちかきとぐちにふたりばかりたち出て聞つゝ物がたりしてよりふしてあるに。まいりたる人のあるを。にげ入てつぼねなる人々よびあげなどせんもみぐるし。さはれたゞおりからこそかくてだにといふ今ひとりのあれば。かたはらにてききゐたるに。おとなしくしづやかなるけはひにて物などいふ。くちおしからざなり。いまひとりはなどとひて。世のつねのうちつけのけさうびてなどもいひなさず。世中のあはれ成ことどもなどこまやかにいひ出て。さすがにきびしうひきいるかたはふしぎ〳〵有て。我も人もこたへなどするを。まだしらぬ人のありけるなどめづらしがりて。とみにたつべくもあらぬほどほしのひかりだに見えずくらきに。うち時雨つゝ木の葉にかゝるおとのおかしきを。中々にえんにおかしき夜かな。月の隈なくあかからんも。はしたなくまばゆかりぬべかりけり。春秋の事などいひて。時にしたがひ見ることには。春がすみおもしろく。空も長閑にかすみ。月のおもてもいとあかうもあらず。とをうながるゝやうにみえたるに。琵琶のふがうてうゆるらかにひきならしたるいといみじく聞ゆるに。また秋に成て。月いみじうあかきに空は霧わたりたれど。手にとるばかりさやかにすみわたりたるに。風の音。蟲のこゑ。とりあつめたる心ちするに。箏のことかきならされたる。ひやうじやうのふきすまされたるは。何の春とおぼゆかし。又さかとおもへば。冬の夜の空さへさえわたりいみじきに。雪の降つもりひかりあひたるに。ひちりきのわ

なゝきいでたるは。春秋もみなわすれぬかしといひつゞけて。いづれにか御心とゞまるととふに。秋の夜に心をよせてこたへ給を。さのみおなじさまにはいはじとて。

あさ緑花もひとつにかすみつゝおぼろにみゆる春の夜の月

とこたへたれば。返す〲うちずんじて。さは秋の夜はおぼしすてつるなゝりな。

今宵より後の命のもしもあらばさは春の夜を形見と思はん

といふに。秋にこゝろよせたる人。

人はみな春に心をよせつめりわれのみやみん秋の夜の月

とあるに。いみじうけうじおもひわづらひけるけしきにて。もろこしなどにもむかしより春秋のさだめはえし侍らざなるを。このかうおぼしわかせ給ひけん御心ども。おもふにゆへ侍らんかし。わが心のなびき。そのおりのあはれともおかしともおもふ事の有時。やがてその折の空のけしきも月も花も。心にそめらるゝにこそあべかめれ。春秋をしらせたまひけんことのふしなむいみじうけたまはらまほしき。ふゆの夜の月はむかしよりすさまじきもののためしにひかれて侍けるに。またいとさむくなどして。ことにみられざりしを。斎宮の御もぎのちよくしにてくだりしに。あかつきにのぼらむとて。ひごろ降つみたる雪に月のいとあかきに。旅の空とさへおもへば心ぼそくおぼゆるに。まかり申にまいりたれば。よの所にもにず。おもひなしさへけおそろしきに。さべきところにめして。圓融院の御世よりまいりたりける人のいといみじく神さびふるめいたるけはひのいとよしふかく。昔[のイ]ふるごと[どもイ]もいひいで。うちなきなどして。ようしらべたるびはの御ことをさしいでられたりしは。この世のことともおぼへず。夜のあけなん（萬壽二年廿一日齋宮御着裳勅使藏人右兵衞佐資通諸發來月五日着裳云々）もおしう。京のことも思ひたえぬばかりおぼ

え侍しよりなむ。冬の夜の雪ふれるよは思ひしられて。火をけなどをいだきても。かならずいでゐてなんみられ〔らイ〕侍る。おまへたちもかならずさおぼすゆへ侍るむかし。さらば今宵よりはくらきやみのよのしぐれうちせんは。又心にしみ侍なんかし。齋宮の（長久三年十二月八日卅時大内燒亡）雪のよにおとるべき心ちもせずなどい〔ひイ〕ひて。わかれにしのちは誰としられじとおもふしを。又の年の八月（長久四年七月廿三日兩宮入內）に內へいらせ給に。夜もすがら殿上にて御あそびありけるに。（御東山對一條院儀八月十日兩宮御退出）この人のさぶらひけるもしらず。そのよはしもにあかして。ほそ殿のやりどをおしあけてみいだしたれば。あかつきがたの月のあるかなきかにおかしきを見るに。くつのこゑきこえて。ど經などする人も有。ど經の人はこのやりどぐちに立とまりて。ものなどいふにこたへ。これはふとおもひ出て。時雨のよこそかた時わすれずこひしく侍れと云に。ことながうこふべきほどならねば。

何さまで思ひ出けん等閑の木の葉にかけし時雨ばかりを

ともいひやらぬを。人々又きあへば。やがてすべりいりて。そのよさりまかでにしかば。もろともなりし人尋てかへししたりしなども後に（同年十二月一日一條院燒亡　十一日遷御高陽院廿一日自高陽院遷御東三條）ぞきく。ありししぐれのやうならんに。いかでびはのねのおぼゆるかぎりひきてきかせんとなんあるときくにゆかしくて。我もさるべき折をまつにさらになし。はるごろのどやかなるゆふつかた。まいりたなりときゝて。その夜もろともなりし人といざりいづるに。とに人人參り。うちにもれいのひと〴〵あれば。いでさ〔まかイ〕いていりぬ。あの人もさや思ひけん。しめやかなる夕暮をおしはかりて參りたりけるに。さはがしかりければ。まかづめり。

かしまみてなるとの浦にこがれ出る心はえきや磯のあま人

とばかりにてやみにけり。あの人がらもいと

すゝよかに。世のつねならぬ人にて。その人はかの人はなどもたづねとはで過ぬ。いまはむかしのよしなし心もくやしかりけりとのみ思ひしりはて。おやのものへゐてまいりなどせでやみにしも。もてかしく思ひいでらるれば。今はひとへにゆたかなるいきほひになりて。ふたばの人をもおもふさまにかしづきおほしたて。わが身もみくらの山につみあまるばかりにて。後の世までの事をもおもはんと思ひはげみて。霜月の廿よ日いしやまにまいる。雪うち降つゝみちのほどさへおかしきに。あふ坂の關を見るにも。むかし越しも冬ぞかしと思ひいでらるゝに。そのほどしもいとあらうふいたり。

あふ坂の關の山風吹聲は昔聞しにかはらざりけり

關寺のいかめしうつくられたるをみるにも。その折あらづくりの御かほばかりみられし折思出られて。年月の過にけるもいとあはれなり。打出の濱のほどなど。見しにもかはらず。暮かゝるほどにまうでつき。ゆやにおりてみだうにのぼるに人聲もせず。山風おそろしうおぼえて。おこなひさして打まどろみたる夢に。中堂より御かう給はりぬ。とくかしこへつげよといふ人あるに。うちおどろきたれば。夢なりけりと思ふに。よきことならんかしと思ひておこなひあかす。またの日もいみじく雪降あれて。宮にかたらひ聞ゆる人のぐし給へると物がたりして。心ぼそさをなぐさむ。三日さぶらひてまかでぬ。そのかへる年の十月廿五日大嘗會御禊とのゝしるに。はつせの精進はじめて。その日京を出るに。さるべき人々一代に一度の見物にて。ゐ中せかいの人だにみるものを。月日おほかり。その日しも京をふり出ていかむと。いとことのくるおしく。ながれ

ての物語ともなりぬべき事やなど。はらからなる人はいひはらたてど。ちごどものおやなる人は。いかにも／＼心にこそあらめとて。いふに思たがひていだしたつ心ばへも哀なり。ともにゆく人々もいといみじく物ゆかしげなるはいとおしけれど。ものみて何にかはせん。かゝる折にまうでん心ざしを。さりともおぼしなん。かならず佛の御しるしを見んと思ひ立て。その曉京をいづるに。二條のおほぢををしわたりていくに。さきにみあかしもたせ。ともの人々上るすがたなるを。そこらさじきどもにうつるとて。いきちがふ馬も車もかち人も。あれはなぞことやすからず〔あれはなぞとやすからずイ〕いひおどろき。あざみわらひあざけるものどももあり。良頼の兵衛のかみと申し人の家のまへをすぐれば。それさじきへわたり給なるべし。門ひろうをしあけて。ひと／＼たてるが。あれは物まうで人なめりな。月日しもこそ世におほかれとわらふなかに。いかなる心ある人にか。一時がめをこやしてなににかはせん。いみじくおぼしたちて。佛の御とくかならずみ給べき人にこそあめれ。よしなしかし。物見でかうこそ思ひたつべかりけれと。まめやかにいふ人ひとりぞある。みちけんぞうならぬ御き〔さイ〕にと。夜ふかう出しかば。立をくれたる人々もまち。いとおそろしう深き霧をもすこしはるけんとて。法性寺の大門にたちとまりたるに。ゐなかよりものみにのぼるものども〔のイ〕。水のながるゝやうにぞみゆるや。すべて道もさりあへず。物の心しりげもなきあやしのわらはべまで。ひきよぎて行過るを。車をおどろきあざみたることかぎりなし。是等をみるに。げにいかに出たちし道なりともおぼゆれど。ひたぶるにほとけをねんじ奉りて。うぢの渡りにいきつきぬ。

そこにも猶しもこなたざまにわたりするものども立こみたれば。船のかぢとりたるおのこども。舟をまつ人のかずしらぬに心おごりしたるけしきにて。袖をかひまくりて。かほにあてゝ。さほにおしかゝりて。とみに舟もよせず。うそぶいてみまはし。いといみじうすみたるさま也。むごにえわたらでつく〲とみるに。むらさきのものがたりにうぢの宮のむすめどもの事あるを。いかなる所なれば。そこにしもすませたるならむとゆかしく思ひし所ぞかし。げにおかしき所哉〔[illegible]所イ〕と思ひつゝ。からうじて渡りて。殿のさぶらう所のうぢ殿をいりて見るにも。うき舟の女ぎみのかゝる所にや有けんなどまづ思ひ出らる。夜ふかく出しかば。人々こうじて。やひろうちと云ところにとゞまりてものくひなどするほどにしもともなるものども。かうみやうのくりこま山にはあらずや。日もくれがたになりぬめり。ぬしたちてうどとりおはさうぜよやといふをいと物おそろしうきく。その山越はてゝ。にへの池のほとりへいきつきたるほど日は山の端にかゝりにたり。今はやどとれとて。人々あかれてやどもとむる所。はしたにて。いとあやしげなる下すのこいへなんあるといふに。いかゞはせんとてそこにやどりぬ。みな人々京にまかりぬとて。あやしのおのこふたりぞゐたる。その夜もいもねず。此おのこいでいりしありくを。おくの方なる女ども。などかくしありかるゝぞととふなれば。いなや。心もしらぬ人をやどしたてまつりて。かまはしもひきぬかれなば。いかにすべきぞとおもひて。えねでまはりありくぞかしと。ねたると思ひていふ。きくにいとむく〲しくおかし。つとめてそこをたちて。東大寺によりておがみ奉つる。いそのかみも

まことにふりにける事おもひやられて。むげにあれはてにけり。そのよ山のべといふ所の寺にやどりて。いとくるしけれど。經すこしよみ奉りて打やすみたる夢に。いみじくやむごとなくきよらなる女のおはするに。まいりたれば風いみじうふく。みつけてうちゑみて。なにしにおはしつるぞととひ給へば。いかでかはまいらざらんと申せば。そこはうちにこそあらんとすれ。はかせの命婦をこそよくかた[らはイ]はらめとの たまふと思ひて。うれしく頼もしくて。いよ〳〵ねんじたてまつりて。初瀨川などうち過て。その夜みてらにまうでつきぬ。はらへなどしてのぼる。三日さぶらひて。あかつきにまかでむとてうちねぶりたるに[にイナシ]よさりみだうの方より。すはいなりよりたまはるしるしのすぎよとて。物をなげいづるやうにするに。うちおどろきたれば夢なりけり。曉よふかく出て。えとまらねば。ならざかのこなたなる家をたづねてやどりぬ。是もいみじげ[あイ]なるこいへなり。爰はけしきある所なめり。ゆかいぬな。れうかいのことあらんに。あなかしこ。をびえさはがせ給な。いきもせでふさせ玉へと云をきくにも。いといみじうわびしくおそろしうて。夜をあかすほど。ちとせ[こイ]をすぐす心ちす。からうじて明たつほどに。すれはぬす人の家也。あるじの女けしきあることをしてなむありけるといふ。いみじう風の吹日。宇治のわたりをするに[すぐるにイ]。あじろいとちかう漕よりたり。

音にのみきゝ渡りこし宇治川の網代の浪も今日そかそふる

二三年四五年へだてたることを。しだいもなくかきつゞくれば。やがてつゞきだちたるす行者めきたれど。さにはあらず。年月へだたれる事也。春ごろくらまにこもりたり。山ぎは霞わたりのどやかなるに。山のかたよりわづか

にところなどほりもてくるもおかし。いづる
道は花もみなちりはてにければ。なにともな
きを。十月ばかりにまうづるに。道のほど山の
けしき。此頃はいみじうぞまさる物なりける。
山のはにしきをひろげたるやうなり。たぎり
てながれ行水。すいしやうをちらすやうにわ
きかへるなど。いづれにもすぐれたり。まうで
つきて。そうぼうにいきつきたるほど。かきし
ぐれたる紅葉のたぐひなくぞみゆるや。

おく山の紅葉のにしき外よりもいかに時雨て深くそめけむ

とぞみやらるゝ。二年ばかりありて。又石山に
こもりたれば。夜もすがらあめぞいみじくふ
る。たびゐは雨いとむづかしきものときゝて。
しとみをしあげてみれば。在明の月の。たにの
そこさへ曇りなくすみわたり。雨と聞えつる
は。木のねより水のながるゝ音なり。

谷川のながれは雨と聞ゆれとほかよりけなる在明の月

また初瀬にまうづれば。はじめにこよなくも
のたのもし。處々にまうけなどして。いきもや
らず。山城の國はゝその杜などに。紅葉いとお
かしきほどなり。初瀬川わたるに。

初瀬川立歸りつゝ尋ぬれは杉のしるしもこのたひやみむ

とおもふもいとたのもし。三日さぶらひてま
かでぬれば。れいのならざかのこなたに。小家
なとに。このたびはいとるいひろければ。えや
どるまじうて。野中にかりそめにいほつくり
てすへたれば。人はたゞ野にゐて夜をあかす。
草のうへにむかばきなどを打しきて。うへに
むしろをしきて。いとはかなくて夜をあかす。
かしらもしとゞに露をく。曉がたの月。いとい
みじくすみわたりて。よにしらずおかし。

行衛なき旅の空にもをくれぬは都にてみし有明の月

なに事も心にかなはぬ事もなきまゝに。かや
うにたちはなれたる物まうでをしても。道の

ほどをおかしともくるしともみるに。をのづから心もなぐさめ。さりともたのもしう。さしあたりて。なげかしなどおぼゆることどもないまゝに。たゞおさなき人々をいつしか思さまにしたてゝ見んとおもふに。年月の過行を心もとなく。たのむ人だに。ひとのやうなるよろこびしてはとのみ思ひわたす心ちたのもしかし。いにしへいみじうかたらひ。よるひる歌などよみかはしゝ人のあり〳〵ても。いとむかしのやうにこそあらね。たえずいひわたる〔がイ〕。越前守のよめにてくだりしが。かきたえをともせぬに。からうじてたよりたづねて。これより。

たえさりし思ひも今はたえにけりこしの渡の雪のふかさに

といひたる返ごとに。

白山の雪の下なるさゝれ石の中の思ひは消んものかは

やよひのついたち頃に。西山のおくなる所にいきたる。人目もみえずのど〳〵と霞わたりたるに。哀に心ぼそく花ばかり咲みだれたり。

里遠みあまり奥なる山ちには花みにとても人こざりけり

世中むづかしうおぼゆるころ。うづまさにこもりたるに。宮にかたらひ聞ゆる人の御もとよりふみある。返ごとと〔トイナシ〕聞ゆるほどに。鐘の音の聞ゆれば。

しけかりし浮世のこともわすられす入相の鐘の心ほそさに

とかきてやりつ。うら〳〵と長閑なる宮にて。おなじ心なる人三人ばかり。物語などしてまかでて。又の日つれ〴〵なるまゝに。戀しうおもひ出らるれば。ふたりの中に。

袖ぬるゝあら磯浪としりながら共にかつきをせしそ戀しき

ときこえたれば。

あら磯はあされと何のかひなくてうしほにぬるゝ蜑の袖哉

いま一人。

みるめおふる浦にあらすは荒磯の浪ま数ふる蜑もあらしな

おなじ心にかやうにいひかはし。世中のうきもつらきもおかしきも。かたみにいひかたらふ人。ちくぜんにくだりて後。月のいみじうあかきに。かやう成し夜。宮にまいりて。あひてはつゆまどろまず。ながめあかいしものを。こひしく思ひつゝねいりにけり。宮にまいりあひて。うつゝにありしやうにて有とみて。打おどろきたれば夢成けり。月も山のはちかうなりにけり。さめざらましをといとゞながめられて。

夢さめてねざめの床のうくはかりこひきとつけよ西へ行月

さるべきやう有て。秋頃和泉にくだるに。よどといふよりして。道のほどのおかしうあはれなる事いひつくすべうもあらず。たかはまといふ處にとゞまりたるよ。いとくらきに。夜いたうふけて。舟のかぢのおと聞ゆ。とふなれば遊びのきたるなりけり。人々けうじて。舟にさしつけさせたり。遠き火のひかりに。ひとへのそでながやかに。あふぎさしかくして歌うたひたる。いとあはれに見ゆ。又の日。山の端に日のかゝるほど。すみよしの浦をすぐ。そらもひとつに霧わたれる松のこずゑも海のおもても。なみのよせくるなぎさのほども。ゑにかきてもおよぶべきかたなうおもしろし。

いかにいひ何にたとへてかたらまし秋のゆふへの住吉の浦

と見つゝ。つなで引すぐるほど。かへりみのみせられてあかずおぼゆ。冬になりてのぼるに。おほ(まイ)えと云うらに舟にのりたるに。その夜雨風いはもうごくばかりふりふゞきて。神さへなりてとゞろくに。浪の立くるをとなひ。風の吹まどひたるさま。おそろしげなること。いのちかぎりつと思ひまどはる。をかのうへに舟をひきあげて夜をあかす。雨はやみたれど。風なをふきて船いださず。ゆくゑもなきをかの

うへに五六日をすぐす。からうじて風いさゝかやみたるほど。舟のすだれまきあげて見渡せば。夕しほたゞみちにみちくるさま。とりもあへず。入江の田鶴の聲おしまぬもおかしくみゆ。くにの人々あつまりきて。その夜この浦をいでさせたまひて。いし津につかせ給へらましかば。やがて此御舟なごりなくなりなましなどいふ。心ぼそうきこゆ。

あるゝ海に風より先に船出していし津の波と消なましかは

世中にとにかくに心のみつくすに。宮づかへ〔ダイナシ〕どても。ことはひとすぢにつかうまつりつゞかばや。いかゞあらん。時々立〔いさイ〕いでばなになるべくもなかめり。としはやくはた過行に。わかわかしきやうなるもつきなうおぼえなげかるるうちに。身のやまひいとおもくなりて。心にまかせて物まうでなどせし事もえせずなりたればわくらはの立出もたえて。ながらふべき心ちもせぬまゝに。おさなき人々を。いかにもいかにもわがあらん世にみをく事もがなと。ふしおき思ひなげきたのむ人のよろこびのほ（天喜五年七月卅日従五位橘俊通任信濃守得替公文）どを心もとなくまちなげかるゝに。秋に成て待いでたるやうなれど。おもひしにはあらず。いとほいなくくちおし。おやのおりより立歸つゝみしあづまぢよりはちかきやうに聞ゆれば。いかゞはせんにて。ほどもなくくだるべき事共いそぐに。かどでは。むすめなる人のあたらしくわたりたる所に。八月十よ日にす。のちのことはしらず。そのほどのありさまは。物さはがしきまでひとおほくいきほひたり。廿七日にくだるに。おとこなるはそひてくだる。（仲俊承暦元年閏十二月補文章生同三年正月廿七日式部丞寛治元年正月七日五位廿五日紀伊權守）紅のうちたるに。萩のあを。しをんのおりもののさしぬききて。たちはきて。しりにたちてあゆみいづるを。それもをり物のあを。にびいろのさしぬきかりぎぬきて。らうのほどにて馬

にのりぬ。のゝしりみちてくだりぬる後。こよなうつれ〴〵なれど。いといたうとをきほどならずときけば。さき〴〵のやうに心ぼそくなどは。おぼえであるに。おくりのひと〴〵又の日かへりて。いみじうきら〳〵しうてくだりぬなどいひて。此曉にいみじくおほきなる人だまのたちて。京ざまへなむきぬるとかたれど。ともの人などのにこそはと思ひ。ゆゝしきさまにおもひだによらむやは。いまはいかで此わかき人々おとなびさせんと思ふよりほかの事なきに。歸る年の四月にのぼりきて。夏[illegible]秋も過ぬ。九月廿五日よりわづらひいでて。十[illegible]月五日に夢[十七]のやうにみないておもふ心ち世中に又たぐひある事ともおぼえず。はつせにかがみ奉りしに。ふしまろびなきたるかげの見えけんは。是にこそは有けれ。うれしげなりけんかげはきしかたもなかりき。今行末はあべいやうもなし。廿三日はかなくも煙になす夜。去年の秋いみじくしたてかしづかれて。うちそひてくだりしをみやりしを。いと黒きゝぬのうへにゆゝしげなる物をきて。車のともになく〳〵あゆみ出て行をみいだして思ひいづるこゝち。すべてたとへむかたなきまゝに。やがて夢路にまどひてぞ思ふに。その人やみにけんかし。むかしよりよしなきもの語。うたの事をのみ心にしめて。よるひる思ひて。おこなひをせましかば。いとかゝる夢の世をばみずもやあらまし。はつせにてまへのたびは。いなりよりたまふしるしの杉よとてなげ出られしをいでしまゝに。いなりにまうでたらましかば。かゝらずやあらまし。年ごろ天照御神をねんじ奉つれとみゆる夢は。人の御めのとして内わたりにあり。みかどきさきの御影にかゝるべきさまをのみゆめときもあはせしかど

も。その事はひとつかなはでやみぬ。たゞかなしげ也とみし鏡のかげのみたがはぬ。哀に心うし。かうのみ心にもののかなふ方なうてやみぬる人なれば。くどくもつくらずなどしてたゞよふ。さすがにいのちは憂にもたえずながらふめれど。後の世もおもふにかなはずぞあらんかしとぞうしろめたきに。たのむ事ひとつぞ有ける。天喜三年十月十三日の夜の夢に。ゐたる所のやのつまのにはに阿彌陀佛たち玉へり。さだかには見えたまはず。霧ひとへへだたれるやうにすきて見え玉ふを。せめてたえまに見奉つれば。蓮花の座のつちをあがりたるたかさ三四尺。ほとけの御たけ六尺ばかりにて。金色にひかりかゞやき玉ひて。御手かたつかたをばひろげたるやうに。いまかたつかたにはゐんをつくり玉ひたるを。こと人のめにはみつけ奉つらず。我一人見たてまつりて。さすがにいみじくけおそろしければ。すだれのもとちかくよりてもえ見奉つらねば。佛さはこのたびは。歸て後むかへにこんとの給ふ聲。わがみゝひとつにき〔こゑイ〕ゝいて。人はえきゝつけずとみるに。うちおどろきたれば。十四日なり。この夢ばかりぞ後のたのみとしけるを。ひとともなどひと所にて朝夕見るに。かう哀にかなしきことの後は。所々になりなどして。誰も〔らうイ〕みゆることか〔たイ〕たうあるに。いとくらい夜。六はらにあなるをいのきたるに。めづらしうおぼえて。

月も出てやみにくれたるをはすてに何とて今宵尋きつらん

とぞいはれにける。ねむごろにかたらふ人のかうて後音づれぬに。

今は世にあらし物とや思ふらん哀なく〳〵なをこそはふれ

十月ばかり。月のいみじうあかきをなく〳〵ながめて。

ひまもなき泪に曇る心にもあかしとみゆる月の影哉

年月はすぎかはりゆけど。夢のやうなりしほどを思ひいづれば。心ちもまどひ。めもかきくらすやうなれば。其ほどの事はまたさだかにもおぼえず。人々はみなほかにすみあかれて。古郷にひとりいみじう心ぼそくかなしくて。ながめあかしわびて。ひさしう音づれぬ人に。

しげり行蓬が露にそほちつゝ人にとはれぬ音をのみぞなく

あまなる人也。

世の常の宿のよもぎに思ひやれそむきはてたる庭の草むら

ひたちのかみすがはらのたかすゑのむすめの日記也。母倫寧朝臣女。傅のとののはゝうへのめいなり。よはのねざめ。みづのはままつ。みづからくゆる。あさくらなどは。この日記の人のつくられたるとぞ。

孝標。右中弁従四位上資忠朝臣一男。

長保二年正月廿七日補藏人。元春宮藏人右衛門大尉使。三年正月廿四日叙爵。寛仁元年正月廿四日任上總介。四十五。五年正月得替。四十九。長元五年二月八日任常陸介。七月赴任。正五下。六十。

橘俊通。但馬守爲義四男。母讃岐守大江淸通女。

治安三年四月廿日昇殿左衛門尉。元帯刀長。萬壽四年三月三日使宣旨。長元四年十一月廿一日補藏人。五年正月七日叙爵。卅一。長久二年正月廿五日下野守藏人使巡。四十。天喜五年七月卅日任信濃守。従五位下。任中。康平元年十月五日卒。五十七。

參議従二位勘解由長官源朝臣資通。贈従三位正四位上修理大夫濟政一男。

長和五年正月十二日大膳亮。祖父大納言二合。寛仁四年正月九日藏人。十六。正月廿四日左衛

門尉。治安二年正月卅日式部丞。二月廿九日從五位下。九月廿三日侍從。三年正月十二日藏人。十二月十二日左馬權助。依二御賀舞人一任二衞府一。四年十二月十五日左兵衞佐。萬壽二年正月七日從五位上。中宮御給。十月廿六日民部少輔。四年正月七日正五位下。上東門院御給。長元元年二月十九日左小弁。三年十一月五日右中弁。四年三月和泉守。藏人巡。十一月廿九日從四位下。七年正月七日從四位上。行幸上東門院。八年十月十六日權左中弁。九年二月廿七日兼右京大夫。十月十四日攝津守。止二大夫一。長曆元年八月十一日正四位下。石清水行幸。二年六月廿五日左中弁。三年十二月五日右大弁。長久二年止守。四年九月十九日藏人頭。卅九。五年正月七日正四位上。寛德元年十二月十四日參議。兼。二年十月左大弁。永承元年十一月從三位。五年九月大貳。止二大弁一。十一月十一日正三位。天喜二年讓二大貳一入洛。五年正月從二位。康平元年正月兼兵部卿。十一月勘解由長官。三年八月十一日依レ病出家。廿二日薨。五十六。

經頼卿記

萬壽二年十一月廿日戊戌伊勢齋宮御裝束。織物唐衣一領。五重。白綾裳一腰。織物。紅重袴一具。綾褁入帷等也。予有レ仰調レ之奉二大內一。是來五日着裳給レ之。仍差二藏人左兵衞佐源資通一爲二勅使一。遣二件御裝束一。兼仰二作物所一令レ作二花筥一合一。入二此御裝束一。又令レ作二銀小筥一合一。入二合燒物一副二御裝束使一。明日進發。

十二月三日。差二藏人一令レ取二初雪見參一。給レ祿。

小右記

長保二年十一月。

來七日伊勢齋王着裳。年十七。左兵衞佐能通爲二勅使一參二齋宮一。奉遣御裝束使也。明日

憲定賴定朝臣又參二齋宮一。中將來借二取廐馬雜具等一。

十右記 長久三年六月廿三日。藏人少將隆俊爲二勅使一參二齋宮御着裳一。先朝之御時。右大弁資通爲二兵衛佐一時爲二勅使一參二彼宮一云々。

先年傳二得此草子一。件本爲レ人被二借失一。仍以二件本書寫人本一更寫レ之。傳々之間。字誤甚多。不審事等付レ朱。若得二證本一者可レ見二合之一。爲二見合一時代。勘二付舊記等一。

右さらしなの日記以古本書寫以屋代弘賢藏本及扶桑拾葉集挍合畢

〔以玉井氏挍訂本補挍畢〕

群書類従巻第三百二十九

紀行部三

高倉院厳嶋御幸記　土御門内大臣通親公

はかなくて。としもかへりて。治承四年にもなりぬ。春のはじめにめづらしきことども。かきつくしがたし。くらゐおりさせ給て。いつくしまの御幸あるべしなどさゞめきあひたるも。ゆめのうきはしをわたる心地するに。きさらぎの廿日あまりにや。春宮安徳にくらゐゆづりたてまつり給て。ないし所しんじほうけんわたしたてまつられし夜こそ。日ごろ思召とりしことなれど。心ぼそき御けしきみえしか。宮人もかぎりなくあはれつきせざりしが。そらのけしきもかきくもり。のこりの雪。にはもまだらにうちそゝぎて。くれがたになりしほど。かんだちべぢむにあつまりて。あるべきことどもふるきあとにまかせてをこなはれしに。せんじうけ給りて。ぢんにいでて。御くらゐゆづりのこと。左大臣おほせしをきゝて。心ある人袖をうるほして。なにとなくおもひつゞくる事色にいでたる。その中にとりわき心ざしふかき人にや。かくぞ思ひつゞける。

かきくらし降はる雨や白雲のおるゝなこりを空におしめる

時よくなりぬとて。なにとなくひしめきあひたり。弁内侍御はかしとりてあゆみいづ。せいりやう殿の西おもてに。やすみちの中将うけとる。備中の内侍しるしのはことりいづ。隆房

中將とりて。ちかきまもりのつかさたちそひていづ。としごろちかく候て。もちあつかひし御はかし。しるしのはこ。今宵ばかりこそ手をもふれめと思ひつゞけけん內侍の心のうち。おもひやられてあはれなり。まうけの君にくらゐゆづりたてまつりて。はこやの山のうちもしづかになど。おぼしめすまゝなるべきだにあはれもおほかるに。まして心ならずあはれなるらんさき〴〵のありさまおもひやらる。だいりのことどもはてゝ。夜もあけがたになりしほどに。人々歸まいりて。なにとなく火のかげもかすかに。人めまれなるさまになりて。なみだとゞまらぬ心地するに。院號おほせられて。殿上はじめなにくれさだめらる。雞人のこゑもとゞまり。たきぐちのもむじやくもたえて。もんちかくくるまのおりのりせしも。ひがごとのやうにぞおぼえける。そのころかむ院の池のほとりのさくらはじめてさきたるを見て。

こゝのへの匂ひ也せは櫻花はるしりそむるかひやあらまし

かくていつくしまの御幸あるべしとて。やよひの三日。神ほうはじめらるべき日次のさだあり。位おりさせ給ては。加茂八はたなどへこそいつしか御幸あるに。おもひもかけぬうみのはてへ。浪をしのぎていかなるべき御幸ぞとなげきおもへども。あらき波の氣色。風もやまねば。口より外にいだす人もなし。四日。よき日とて。御幸はじめあるべしとてさだめらる。そのあしたより雨ふりて。夕にぞはれたる。そむかうなどせさせ給て。實國大納言使にてまいる。夜に入て土御門高倉邦つなの大納言の家に御幸あり。殿より。からの御車。うつしのむま。なにくれと殿へまいらせさせ給。御車たてまつるよそひもいとめづらし。御隨身

どもさま〴〵ふるまひて御前まいる。上達部殿上人のこりなくつかうまつる。ひきさがりて中宮行けい有。今宵ぞいつくしまの神ほうはじめらる。御ともの人さだめらる。わづらひなく無下にしのびたるやうにとぞさだある。宮の鶯こゑしづかにさへづりて。よもの山邊もかすみこめ。春ふかきけしきにも。たびの空。なにとなく世の中さま〴〵あやなく。わかれをおしむともがらおほくきこゆ。ながき春日もはかなくくれて。十七日に宮古を出させ給べきにてありしに。山の大しゆなにくれと申ときこえてしづかならざりしかば。けふは八條殿へ御幸あるべしとて。八條大宮二位殿のもとへ御幸あり。なにとなく波のうきすにゆられありきて夢か夢にあらざるかとのみ。おほやけわたくしおもひあひたるなごりも。いかにとあらぬわかれもなど。あながちげに申たりける人のわりなさに内裏へいとま申さんとて参りしたよりにたち入て。定なき世のをくれさきだつためしも。たびの空のあはれさなど申あはせつゝ。おぼろなる月かげほのかにさし入て。まどの梅のちりすぎたる。木ずゑにとまるなごりばかりに。風のたよりにほのめかしたる。いひつくしがたし。ほどなく夜もやゝふけぬるよしいさむるこゑにもよほされて。たちいづるとてかきつけける。

めのまへにとまらぬものはいまはとて立出る程の泪也けり

思ひやれ都のそらをながめても八への鹽しのたひの哀さ

八條殿へ御幸いそがるべしときこゆる御使まいりなどしつゝ。ならはせ給はぬたびの空。おぼつかなきなど申させ給ひける。隆季大納言まいりて。御幸もよほしかくして候などすゝめ申。あはれに御ともすべき人みな舟にまいるべしとて。草津といふところにひらはりう

ちてまいらせたり。隋帝のにしきのともづなにてつなぎたりけん舟にはかはりたれども。心ことにひきつくろひたり。御ふねども峯のあらしに色々のこのはみぎはに散しきたるやうにうちちらしたり。おほかたこゑどもは。木ずゑのせみのなつふかき心ちして。御ともの女房たちみふねにまいる。立よりてさたしのせても。いかなるべきたびの御あそびぞと。こといみもせずなげきあはれたるを。御かどいでになどいさむる心地の中にもたゞならず。日さしいづるほどに御幸なる。殿上人十よ人上達部七八人ばかりにて御なをしにてぞおはします。御車さしよせて御舟にたてまつる。かん院のいけのふねなどこそたてまつりならひしか。いつかはかゝる道にも御らんぜんとぞおぼゆる。御ふねにたちさるまじきよしおほせごとありしかば。御まへには御送の人もきしになみゐたり。公卿には帥大納言隆季。藤大納言實國。五條大納言邦綱。土御門宰相中將通親。殿上人には中將隆房。弁兼光。御幸の事うけ給りをこなふ。むくのかみ宗のり。この外は前右大將宗盛。頭亮重衡。さぬきの中將時實などは女房四五人ばかりさりがたき人々ぞまいる。人おほからずとおぼしめせど。さすがに船數おびたゞしく。ほどなくみつのはまにつかせ給ふ。八はたの御へいたてまつらせ給ふ。御舟ながら。はまのうへにしきのあくをば。こもをしきてぞ御へいよせたつる。御あがもの。隆房中將とりて御船にまいらす。宗致役送はつかうまつる。かもんのかみすゑひろごけいにまいる。かくて御舟いだして。こちかぜをおいてくだらせ給。さるの時に川しりのてら江といふ所につかせ給ふ。邦綱の大納言御所つくりて。御まうけこゝろをつくして。御舟ながらに

さしいれて。つりどのよりおりさせ給。御しやうじどもも。からのやまとのゑどもかきちらしたり。むまやにあしげのむまども二ひきたてゝ。めづらしきくらどもかけたり。御よそひの物ども數しらず。上達部殿上人の居所どもみなその用意あり。ふくはらより。けふよき日とて舟にめしそむべしとて。からのふねまいらせたり。まことにおどろ〳〵しく。ゑにかきたるにたがはず。たうじんぞつきてまいりたる。こまうどにはあだには見えさせ給はじとかや。なにがしの御時にさたありけんに。むげにちかく候はんまでぞかはゆくおぼゆる。御舟にめしそめて。江のうちをさしめぐりてのぼらせ給ぬ。ゆふべの雨しづかにそぼちて。たびのとまり。いつしか宮古戀しく心ぼそきありさまなり。あめかくふらば。あすはこれにやとまらせたまふべき。またかちよりやふくはらまでつかせ給べき。御ふねにてやあるべきなど右大將におほせあはせらる。あくるあした。あめなをはれやらで。日ついでかぎりあれば。とまらせたまふべきにあらずとていでさせたまふ。あめの空は風さだまらずとて。かちより御幸なる。にしの宮のへいたてまつらせ給。にはにて御はいあり。むねのり御つかひにてまいりぬ。御こしにていでさせ給。人々むまにてみなつかうまつる。をとにきゝつるなるおのまつ。きゝもならはぬなみの音。いそべちかくいつしかなれぬる心地しつゝ。いづくともわかず山川をうちすぎ。はる〴〵とゆきける。西の宮のまへにて。ほつせたてまつりて。たいらかに宮古へ歸べきよしぞいのり申さるる。ひつじのときはとがの山ざかにつかせ給。よものうみをいけに見なして。なにかは三千世界ものこらんと見えたり。これにてひるの

くごまいりて。やがて出させたまひぬ。いくたのもりなどうち過て。さるのくだりにふくはらにつかせ給。入道大きおほいまうち君心をつくして。御まうけども心ことばもをよばず。あめのしたをこゝろにまかせたるよそほひのほどいとなまれたるあり。ありさまおもひやるべし。まことに三十六のほらに入たらん心地す。こだち庭のありさまゑにかきとめたし。をとにきゝしにもやゝすぎて。めづらかに見ゆ。つかせたまひてのち。いつしかいつくしまのないしどもまいりてあそびあひたり。御所のみなみおもてにしきのきぬやうちて。こまぼこのさほたてわたしたり。内侍八人ぞある。みなからの女のよそほひぞしたる。はなかづらの色よりはじめて天人のおりくだりたらんもかくやとぞ見ゆる。萬歳樂などさま〴〵まひたり。左右にめぐりてつかるゝことをしらず。あさゆふしつきたるまひ人にはまさりてぞみゆる。利曾のがくのこゑもかぎりあれば。これにはいかでかとぞおぼゆる。まひはてぬればうへにめしあげて御まへにてかぐらをぞうたはせらるゝ。ちかく候かんだちべ殿上人もてなしあひたり。山かげくらう日もくれしかば。にはにかゞりをともして。もろこしの魯陽入日を返しけんほどもかくやとぞおぼゆる。夜もふけしかばいらせ給ぬ。なにのなごりもなくぞ。うち〳〵はおぼしける。世のありさまにだにもてなしまいらせば。堯舜のひじりの御代にはをとらせたまはじとぞみゆる。かの天ほうのすゑに。ときかはらんとて。ときの人この舞をまなびけり。大眞といふもの。ほかにはあんろく山といふもの。うちにはおもふ所ありけん。そのこゝろには似たまはざりけん。君の御心にかはりたれど。いかにと申人も

なし。げにぞおもふにかひなき。
廿一日。夜をこめて出させ給。宮こをいでさせたまふより。かむだちべ殿上人みなじやうえをぞきたる。をとに聞しわだのみさき。すまのうらなどいふ所々。うらづたひはる〴〵あらきいそべをこぎゆくふねは。帆うちひきて。なみのうへにはしりあひたり。ふくはらの入道は。からのふねにてぞうみよりまいらるゝ。はりまの國までこえけるにや。いなみのなどきこゆるにぞ。あはれにおぼゆる。御こしちかくさぶらひて。ところ〴〵とはせたまふ。八瀬どうじをぞさすのめして。御こしつかうまつる。はりまの國山だといふところにひるの御まうけあり。心ことにつくりたり。庭にはくろきしろきいしにて。あられのかたにいしだたみにし。松をふき。さま〴〵のかざりどもをぞしわたしたる。御まうけうみのいろくづをつくし。山の木の實をひろひて いとなめる。とばかりありてぞいでさせ給。かぜすこしあらだちて。波のをともけあしくきこゆる。うかべるふねどもすこしさはぎあひたり。あかしのうらなどすぐるにも。なにがしのむかししほたれけんもおもひいでらる。さるのときにたかさごのとまりにつかせたまふ。よものふねどもいかりおろしつゝ。うら〳〵につきたり。御舟のあしふかくてみなとへかゝりしかば。はしぶね三ぞうをあみて。御こしかきすへて。かんだちべばかりにて御ふねにたてまつりし。きゝもならはぬなみのをと。いつしかおどろ〳〵しく。うら人のこゑも耳にとまりたり。これよりぞ。國々へめされ る使など返つかはさるる。たよりにつけて宮こなる人にをとづれける。

思ひやれ心もすまにねさめしてあかしかねたるよゝの恨を

いづれのさとにかにはとりのほのかにきこえていとものあはれなり。よものうら〳〵かすみわたりて。たゞならぬはるのあけぼのに。たびのそでのうへそのこととなくぞしほたれける。しほみちぬいでさせたまふべしとて。我も我もとふねどもいとなみたり。ちかく候へなどたのもしくおぼしたるいとかたじけなし。からの御ふねよりつゞみを三たびうつ。もろもろの舟どもはじめてこのころにみなとをいづ。いではてゝぞ一の御ふねはいださるゝ。舟こかんどりなど心ことにさうぞきたり。はじこかしのあゐずりに。きなるきぬどもかさねて廿人きたり。なぎたるあさのうみに。ふな人のゑいやごゑめづらしくぞきこゆる。むまのときかたぶきし程に。むろのとまりにつき給。山まはりて。そのなかにいけなどのやうにぞみゆる。ふねどもおほくつきたる。そのむかひにいゑしまといふとまりあり。つくしへときこゆるふねどもは。かぜにしたがひてあれにつくよし申。むろのとまりに御所つくりたり。御舟よせておりさせ給。御ゆなどめして。このとまりのあそびものども。ふるきつかのきつねのゆふぐれにばけたらんやうに。我もわれもと御所ちかくさしよす。もてなす人もなければまかり出ぬ。この山のうへにかもをぞいはひたてまつりける。御へいまいらせたまふ。またわたくしにもまいりてへいたてまつる。としおいたる神とのもりあり。このやしろはかものみくりやに。このとまりのまかりなりしそのかみ。ふりわけまいらせて。御しるしあらたなり。やしろ五六。大やかにてならびつくりたる。つゞみうちて。ひまなく神なぎどもあつまりてあそびあひたり。これは御みちのほどあめかぜのわづらひなどの御いのり申とぞ

きこゆる。雲わけむの御ちかひも。思ひがけぬうらのほとりに。たのもしくぞおぼゆる。

廿三日に空もはれかぜもしづまりて。有あけの月あはぢしまにおちかゝりてまたなくおもしろければ。

あはぢ嶋かたぶく月を詠てもよにありあけの思ひてにせん

びぜんのくにこじまのとまりにつかせたまふ。御所つくりたり。御もののぐどもあたらしくとゝのへをきたり。かんだちべ殿上人どものしゆく所どもつくりならべたり。しほすこしひて。御ふねつき給。みぎはとをければ。御こしにてぞのぼらせ給。御所の東の御つぼにがくやをつくりて。入道内侍どもぐしてまいる。さま〴〵のひたゝれども。にしきをたちいれはなをつけたる八人あつまりてでんがくをす。女のあそびどももみえず。たゞあらんだにあるべきに。うみのほとりにめおどろかす物やあらんとおぼゆ。でんがくはてにしかば。國のずしとて。おかしげなるものどもまいりて。ずしはしりつかうまつる。日くれにしかばみなまかでぬ。うら〳〵御らんじやりて。いる日のそらにくれなゐをあらひて。むかひなるしまがくれなる山のこだちども。ゑにかきたる心地するに。御めにかゝる所々たづねさせたまふ。このむかひなる山のあなたに入道おとゞはおはすると申に。きこしめして。御氣色うちかはりにしかば。人々までもあはれに思心の中どもみえたり。あからさまとおもふとまりだにも物あはれなるに。ましてゑびすがたちにいりぬらん氣色。いかばかりとおぼゆ。くにつなの大納言御をとづれありしなど申ける。なにのはへもおぼしめしわかず。この國にやはたのわかみやおはしますときこしめして。へいたてまつらせ給。

廿四日のとらのときにつゞみをうちてび中のくにせみとといふ所につかせ給。くに〴〵ふかくなるまゝに。山の木だちいしのたちやうもきびしくみゆ。

廿五日のさるのときにあきのくにむま嶋といふところにつく。これにてみなうしほにてかみをあらひ。身をきよむ。宮じまちかくなりにけりときよき心をおこす。

廿六日空のけしきうらゝかにて。神の心もうけよろこばせ給にやとめぐみもかねてしるし。日さしいづる程にいでさせ給ふ。むまのときに宮嶋につかせ給。神ほうのふねたづねらる。かねてまいりまうけたるよし申。をんやうしのふねしばらくまたるゝ。空のけしき。所のありさまめも心もおよばず。だいたうの湖心寺かくやとぞ見え。神がみ山のほらなどにいでたらん心ちす。宮じまのありのうらに神ほうとゝのへたてゝ御はいあり。やしろづかさかりぎぬなどきたるもの神ほうもちてまいる。おほぬさにはらへきよめ申てまいらする。ときざねの中將とりつぎてまいらす。しほひくほどにて御所へ御ふねいらねばはしぶねにてぞおりさせ給。かんだちべ御舟にさぶらひて。宮嶋のみなみの方。三げん四めむの御所つくりて。しやうじのゑどもうみのかたをぞかきたる。うみのうへなぎさまでらうをつくりつゞけて。しほみたば御ふねをさしよせんしたくをぞしたる。御ゆ殿などありて。きぬの御じやうえめしていでさせ給。御所のひんがしのにはにしらきのつくえをたてゝ。こもをしきて。しろたへのへいをよせたつ。そのひがしにからびつのふたをあけてこがねのへいををく。そのにしにわらざをしきてをんやうしのざとす。神馬一疋たつ。さゑもんのせうのぶさ

だ時むねこれをひく。北面などもいまだはじめをかれねば。御ともにはかんだちべのさぶらひをぞめされける。たかふさの中將御前にさぶらふ。宮内少輔むねのりやくさうをつとむ。御けいはてぬれば。めしつかひ御くつをもちてさきにまいる。くはいらうのきたのはまをめぐりてまいる。らうをとをりてまいらせ給。くらゐの御ときは。一二町をだにもえんだうをこそまいらせしに。めしならはぬ御くつもいかゞとぞおぼゆる。かん達部殿上人御ともに候す。まらうどの宮にまづまいらせ給。こむくのへいは二ささげ。しろたへのへい。神くはんとりてほうぜんにそなへならべたつ。はいでんのうちのほど。かうらいのはんでう一疊御はいのざとす。こんくのへいは。かねみつの弁つたへとりて。たかすゑの大納言。たう大納言。つたへ取てまいらす。御はいをはりて歸

らせ給。のとのしたまはる。御こと一。御びは一。御ひやうしよこぶえうけとりて。ほうぜんにならべをく。内侍ども色々さま〳〵にしやうぞきてにしきをたちきたり。ぬひ物せしめも心もをよばず。御かぐらをはりて大宮へまいらせ給。御ほうべいはてゝ御きやう供養あり。金でいの法花經一部。壽量品。壽命經。御てづからかゝせたまひける。御導師こうけん僧正參りて。此よしを申あげらる。こゝのへのなかをいでて。やへのしほぢをわけまいらせたまふ御心ざしなど。きく人も袖をしぼりあへず申上ける。かづけもの一かさね一包をぞたまはりける。けんじやうおほせらる。法げん一人なし給ふ。神ぬしかげひろくらゐあげさせ給。宮じまの座主阿闍梨になしたぶ。あきのかみありつねかゝい一しなあげさせ給。院の殿上ゆるさる。隆季大納言ぞかねみつにおほせ

ける。御神樂のやをとめ八人きぬ。一々わたなどたばせける。日くれて歸らせ給。上達部殿上人のとのゐ所。心をつくしてまうけたり。內侍どもかやかたをしつらひてぞをの〳〵すごしける。月のころならましかば。いかにおもしろからまし。月なき空をぞ口おしく おもひあひたる。

廿七日 にそらの 氣色うらゝかにはれわたりて。のこりの鶯おもはぬみやまの木かげにかたらふこゑす。夜をこめて。しほみつとて御所のまへまでさしいりたる。まことにこの世の有さまとも見えず。供御などはてにしかば。御宮めぐりあるべしとて みやへまいらせたまふ。けふはねのの御じやう衣をぞめしたる。國國のかみどもまいらせたる宮のまへにはこびをく。らうのまへに樂やをつくりて拜殿をたてたり。內侍ども老たる わかきさま〳〵あゆみつらなりて神供まいらす。とりつぎてがくどもして。御戸ひらきてまいらす。それはてしかば。宮司神人まで物をたまはる。ちやうくはんなどぞわかち給。內侍ども。かねをのべにしきをたちて。さま〳〵のはなをつけて。大くちをきて。でんがくつかうまつる。八人ならびは天人のおりあそぶらんもかくやとぞおぼゆる。そののちそがうこまぼこなどまふ。さほとれるすがためも心もをよばず。日もくれにしかば。たきのみやへまいらせ給。こうけむ僧正うたよみてかきつけける。

雲ゐより落くるたきの白糸にちぎりをむすぶことぞ嬉しき

よに入にしかば。こよひ御つやあるべしとてまいらせたまふ。內侍どもあつまりて夜もすがら御神樂あり。ふくるほどに。七になるこ內侍あるに神つかせ給て。はじめはたふれふして。時中ばかりたへいりにし。おとなしき內侍

どもかゝへて。ほどへていきいづ。御神樂つかうまつるべきよしおほせられて。神主めしいでてさま〲の事ども申さる。めもあやにいかにとうたがひをなす人もありぬべきに。さしもいふかひなきもののさま〲法文などときて。御神のはじめてこのしまにあとをたれ給ひしことばとて申。きく人なみだをのごはずといふことなし。入道めしいでておほせらるゝこともあり。これを人きかず。法華經のじゆりやうぼんをたび〲誦しける。かうべをかたぶけずといふことなし。あるひはけだかき女房うしろのしやうじにうつりて寶殿にむかひたまへるすがたを見たるなど申人もあり。つねにありとおぼえぬにほひ。神殿のうちよりかうばしくにほひこし。あまたおどろきさはぎあひき。まことに高唐の神女はかのやうだいにおりて。みかどのゆめにいりて。あしたに雲となり。ゆふべには雨とならんと契りたてまつりけんあとも。かくやとぞおぼゆる。あけがたになりしかば。やしろのには鳥こゑごゑあけぬととなふ。なみのをともたかくみづがきをあらふはしほみつるにや。はくらく天のうしほのこゑは來てみゝにいるとつくりけるも。きゝてはふぜいもたくみなりけるにやと。かた〲とりあつめたる折からのありさまいひつくしがたし。かくてあけにしかば。御所へかへらせ給。

廿八日このわたりのうら〲を御らんずべしとて。あまどもかづきせさせ給。からのはなだのかりの御なをし。からあやのしろき御ぞ二御大くちたてまつらせ給。御すがたいみじうなまめかしう。うつくしうみえさせ給ふ。うらつたひてさしまはして御らんず。まことにせんのほらもかくやと。りうぐうともこれをい

ふにやとおぼゆる所々のみおほかり。みるめなどもてまいる。とばかり御らんじまはりてかへらせたまふ。あくるたつの時に又御みやめぐりありて。やがて御舟にたてまつる。しまのうちにもおどろ〳〵しくさはぎあひたり。内侍どもみぎはにいでて。なにとなくひごろのなごりしのびおもひたる氣色なり。なごりおほきよしのうたつかうまつれとありしかば。

立かへりなごりもありのうらなれは神も哀たかくるしら波

かせもしづかに物のあはれも春ふかくなりにけるけしき。おもひかけぬしまのうへにさくらのちりがたになりたるみゆ。いみじくおかしく。おぼえしに。三月盡になりにけり。廿九日けふはいかでたびのとまりとても春をおしまざらんとて。人々ふみつくる。もてなしけうぜさせ給べきにもあらず。なにのはへもおぼしめされず。ことはりとぞみたてまつる。

四月一日になりぬれば。けふは衣がへなどいふことぞかしとおもひやらる。またくもりたれど。あめやみにたれば。舟どもみなとをいだしたりしかば。浦々とまり〳〵うちすぎつゝ。やう〳〵みやこちかくなる心地してたびのなごりもおぼえず。とく〳〵とすぎさせ給。むかへのきしに色ふかきふぢ。松のみどりにさきかゝりたるを御らんじて。あれとりにつかはせとおほせられしかば。ちやう官やすさだはし舟にてとをりしをめしとゞめてつかはす。をかのうへにのぼりてまつのえだにかけてもてまいる。こゝろばせありとおほせられて。そのよしのうたつかうまつれとおほせありしかば。

千歳へむ君かかざしのふぢなみは松の枝にもかゝる也けり

空はれて日さしあがるほどに。我も〳〵と船

ども帆うちあげて。雲のなみけぶりのなみをわけてはしりあひたり。びぜんの國うちうみとをらせ給。日いりがたにこじまにつかせたまふ。

四日のあかつき御ふねいださる。夜ふねこぐこゑまことにうらがなしげにきこゆ。

五日雨ふりしかば。たかさごのとまりにつかせ給。みやこ人のくだるにこそ。なにごとかと上下たづねける。さるの時にふくはらにつかせ給。いま一日もみやこへとくと上下心のうちにはおもひける。ふくはらの中御覽ぜんとて。御こしにてこゝかしこ御幸あり。所のさまつくりたる所々。こまうどのはいしけるもことはりとぞみゆる。あしたといふよりもりのいゑにて。かさがけやぶさめなどつかうまつらせて御らんぜさす。日くれてかへらせ給。

八日家のしやうをこなはる。かゝいどもたまはせけり。かねみつの弁うけたまはりておほせける。左少將すけもり。丹波のかみきよくにぞかゝいじける。宮古ちかくなるまゝにやはた山の見えしもたのもしくうれしくぞおぼゆる。ひえの山みゆるなど申しかば。女房達もたちさはぎ見あひたまふ。さるの時に御車にめして八條どのへいらせ給。二ゐどののもとへかへらせ給。宮古のうちもめづらしくぞおぼしめさるゝ。かくて御やせもたゞならずなどきこえて。くすしども申すゝめて。御きうぢなどぞきこえし。

右高倉院嚴島御幸記以扶桑拾葉集挍合了

後鳥羽院熊野御幸記 京極中納言定家卿

建仁元年十月。

五日。天晴。曉鐘以後營參。左中弁夜前示送云。折烏帽子可レ參。但於二于三津邊一可レ用二立烏帽子一。又高良御幣使（八幡御幸）可レ存（御幸人夜事）。兼又曰。前使同可レ勤也。所々御布施取可二存知一者。仍着二折烏帽子一。（兼日後光折レ之。每人如レ此。）淨衣。（短袴。袷。生小袴。下緒。脛巾用ノ白。初度如レ此云々。シトニタビヲ付。）昇二緣邊一坐（其儀）。左中弁同如レ此。[少]時如レ例御拜（イ无）如レ例訖出二御門中庭一。（被レ懸二御床子御履（尻イ）一。）晴光（廳官賜人形）奉二仕御禊一。（向二門中央一奉二仕之一。）公卿以下列居。非二御供一人々着二布衣藁履一候二門外一。御禊訖。廳官等徹二御精進屋一被レ入。此間令二相待御一。□（御所イ）取始了。未レ訖之間出御。殿上人取二松明一前行。左右。非レ道者前陣出二南門二丁一。御二御船一之間乘二私船一下。先達早速立了。遲明改二衣帽一。船甚遲。搆營參着二大渡一。出二御御船一之間也。騎馬先陣。公卿等多乘輿。

先陣了。入二御宿院（御イ）一有二御禊一。陪膳之役人如二日吉一。事訖起二御坐一。（候二御床子一也。）之間。予進仕。高良御幣參上。取二御幣一授二祠官一。（束帶之男也。）祝之間即登レ坂。自二藥師堂方一參儲。自二馬場一昇御。（御步行。）御奉幣。（內府取二御幣一被レ進。）御拜祝了御神樂。（御拜間。）廻二御馬一。御隨身引レ之。次入二御簾中一。黃衣男取二桂榊一。黑衣僧懸二幡花鬘一。御經供養。（公胤。）訖仲經。俊宗。予。隆清。有（殿イ）雅取二布施一。（請僧三口。）訖即退下。騎馬出二木津一。故方人々晝養 打屋形御所之儀等如レ例嚴重。予最前乘レ船下。解二衣裳一及二一寢一。（着二水干淨衣一。）申始許着二木津一。（先達次第申可レ觸之由。仍不二相具一。）先約拜王子人々前後會合。良久御船着御。御幣。（長房取レ之授二先達一云々。進レ之。）御拜二度。先達部（率之イ）二退出。候二御經供養一。里神樂了上下亂舞。宿老人々已前退出。即騎馬馳奔。先陣參二坂口王子一。又如二前儀一。又前陣參二コツト王子一。如二前儀一。又先陣參二天王寺一。徘二徊西門鳥居邊一。（公卿以下。）少時入御。（御船之後。每度搆輿予等少々騎馬先陣。）御金堂

禮二舍利一。公卿以下參進禮レ之。次々如レ形禮了。殿上人廻二後戶方一。取二御經供養布施一。導師之外十禪師云々。二襃計取具。取レ之卽下御。如二修二月等一。入二御御所一之後退出。宿所ヨリ禮了食。依二窮屈一今夜不レ參二御所一。又踈人無二所役一云々。猶々此供奉世世善緣也。奉公之中宿運令レ然。感淚難レ禁。御共人內府。通親。春宮權大夫。宗頼。宗行在二私共一非二供奉一。右衛門督。信淸。宰相中將。公經。從三位仲經。大貳。範光。三位中將。通光。殿上人保家。予。隆淸。定通。忠經。有雅。通方。上北面略皆悉也。下北面又淸撰在二此中一。面目過レ身。還多レ恐。入定有二吹毛之心一歟。入レ夜左中弁出二〔イイ〕給題三首一。明日於二住江殿一可レ有二披講一云々。窮屈之間。沉思不レ叶。今夜宿二讚良庄一勤二仕之一。

六日。〔天霽〕拂曉私出馬。指二〔緣イ〕參阿倍野王子一。先達相伴致二奉幣之儀一。〔次〕參二詣住吉社一。先達同奉幣。始而奉レ拜二當社一。感悅之思無レ極。依レ及二〔夜〕深更一小宅休息。天明訖又參二社頭一。辰終御幸。御奉幣。如此例袍衣冠男給二御幣一傳一。生絹袍衣冠男一令レ申レ祝。兩人共給レ祿。御經供養訖。〔此間引導師〕里神樂有二相撲三番一。勝負訖入二御御所一。住江〔殿〕。卽被レ講二和歌一。予依レ召勤二仕講師一。內府被レ書レ序。代詠訖退下。小食。歸參以前出御馳奔。今日御馬也。次參二境王子一。次第又如レ例。次於レ境有二御禊一。田中也。南向。自二此所一先陣參二晝御養御所一。但此所不レ可レ有二沙汰一。仍觸二右中弁前陣一。次大鳥居新王子云々。參シノタ明神云々。次第如レ例。次篠田王子又如レ例。先於松下有御〔禊〕宗行〔奉仕〕。次平松王子。於二〔此〕王子一殊有二亂舞沙汰一。自レ是停二御馬一。步入二御平松新造御所一。各入二宿所一。國皆悉儲二假屋一充行。予等分此所三間小屋也。無二板敷一也。今日詠歌。

初冬侍二
太上皇幸二住吉社一同詠二三首一應レ制和歌
正四位下行

寄社祝

あひおひのひさしき色も常盤にて君か代まもる住吉の松

初冬霜

冬やきたる夢はむすはぬさ衣にかされてうすき白たへの袖（霜心已見毎字信不足か）

暮松風

淡路嶋かさせるなみの夕まくれこゑふきをくる岸の松風

御製祇云

かくてなをかはらすまもれよゝをへて此みち照す住吉の神

感歎之思難レ禁。定有二神感一歟。今遇二此時一拜二此社一一身［天イ］之幸也。

今日宿二［雜事］大泉庄（九條殿）。宇多庄一。（有實朝臣中二八條院姫宮一）領狀其不レ見レ來。尤以不便。三間萱葺屋。風冷月明。

七日。天晴。遲明猶取二松明一出レ路。參二井口王子一（此王子新王子云二云先達相具。）於二此所一待二御幸一。忠信少將乘輿來會奉幣。語云。昨日損レ足云々。小時臨幸。次第如［此イ］レ例。訖競出。騎馬參二池田王子一。於二此所一被レ彈二琵琶一。法師給レ物。（小袖複敷。）從レ是先陣參二淺宇河王子一。不レ待二御幸一。又前陣參二鞍持王子一。又馳二入萱養所一。（コ木二王宮云々。）食了參二胡沐［本イ］新王子一。從レ是指［亂イ］歩行也。過二御所一。萱御宿鵜子云々。參二井野王子一。次參二粗井王子一。相二待御幸一。良久臨幸［了］。御奉幣里神樂訖。亂舞拍子及二相府一。次又白拍子。加以五房友重二人舞。次相撲三番。訖競出騎馬。先參二厩戸王子一。即馳二入宿所一。此御宿惣名信達［シダチ］［宿］。此所厩戸御所云々。如レ例有二萱葺三間屋一。自レ國充行。御所聊近。遲懷レ恐。戌時許有レ召參上。被レ召二入御前一。被レ講二二首一。忽有定被レ出二直題一。次第雪爲レ先。如レ例讀上了。御製又以殊勝。愚歌。（入夜二首當座）

曉初雪

色々のこのはのうへにちりそめて雪はうつます東雲のみち

山路月

袖のしものかけうち拂ふみ山ちもまた末遠きゆふつゝよ哉（爲有ミヽ）

讀上了人々詠吟。即退出。

内府。宰相中將。大貳。三位中將。下官。定通。長房。通方。信綱。家長。淸範。具〔イ无〕等也。

八日。天晴。拂曉出道參信達一之瀨王子。又於坂中祓。次參地藏堂王子。次參ウハ目王子。次參中山王子。次參山口王子。次參川邊〔從イ〕王子。次參中村王子。次入晝養假屋。所信等無沙汰。其所甚荒。於此所有非時水コリ。相待御幸。甚遲。忠信少將參會。小時先參此王子。〔ハンサキ〕。暫相待之間御幸訖。先出儲御祓所。（ワサキノクチ云々。日前宮御奉幣也。）予爲御〔幣〕使。小時於此所有御祓。予取御幣立。御祓訖。返給廳〔官〕。神馬一匹令牽。相具御幣。參日前宮。社頭甚嚴重。淨衣折烏帽子甚凡也。但道々〔之〕習何爲乎。坐兩社之間中央石帖（如舞臺。）上。（敷薦二枚爲座。切中西東料歟。）依社司之訓取御幣拜。（前後兩段。）付社司。（御使取御幣拜舞。不知其例。諸社奉幣使付御幣於社司。以殆拜歟如何。）社司指唐笠來。（不當日影料云々。普通束帶也。但此男大宮司男云々。猶其父戴紙冠。不出戶外。僅見在戶內。）取御幣。以黃衣冠。神人令入中門戶內。聲音開訖。神人又出中門外有還祝。予立坐東薦。又取御幣（自本二本也。）拜付同社司。次第如前。訖退出。（於石帖下徹シト、猶着脛巾奉仕。此役有恐。）自是向道甚遠。過滿願寺之間。僧等忽喚入。每度日前御幣使參此寺云々。恐參入。廳官相具御誦經物。僧等稱乏少之由。不似先例。頗比興也。僧恐昇禮盤之間。予退出。凌遠路出道。參ナクチ王子。（先是又兩王子御坐云々。〔和佐王子〕平緒王子。非道次之間不參。先達許奉幣廿王子。〔廿王子イ无〕）次參松坂王子。次參松代王子。次參菩提房王子。（自是歩指〔謝イ〕。）次參祓戶王子。次〔入〕藤代宿。（不及御所二三町許北宅也。）窮屈平臥。

九日。天晴。朝出立頗遲々間。已於王子御前有御經供養等云々。雖營參。白拍子之間。雜人多立隔無路。強不能參逐電。攀昇藤代坂。五躰王子有相撲等云々。道崔嵬殆有恐。又眺望遼海非無興。參塔下王子。次參橋

下王子一。次參二トコロ坂王子一。次參二一壺王子一。次昇二カフラ坂一。參二カフウサカ下王子一。（宮下云々）（又椎鬼。）次參二山口王子一。次入二書養所一。（入小家）過二御所一。次參二イトカハ王子一。又凌二嶮岨一昇二イトカ山一。下山之後。參二サカサマ王子一。（水遂深河有之。〔河有之イ本作仍有〕此名云々。）次又過二今日御宿一三四町許。入二小宅宿所一。自レ上雖レ有二御假屋一。此家主依レ儲二雜事一入二此所一。（文義知音男云。）先レ是又依二文義顯〔從〕男一取二宿所一。先入二小宅一之間。件宅有レ憚之由聞二付之一。仍騷出入二此所〔了〕一。（先達如レ此事不レ憚之由被レ稱。父喪七十日許云々。）雖レ然臨時水ヲカキテ。以二景義一令レ祓了。又依レ有レ所レ思。取レ潮垢離カク。是臨時之事也。此湯淺入江邊。松原之勝形奇特也。家長送二題二首一。詠吟窮屈之間甚無レ術。秉燭以後又着二立烏帽子一。加二一夜一參上。小時被レ召二入部内一。又依レ仰講師。事了即退出。今日又二首當座。

題

深山紅葉　海邊冬月　愚詠

こゝろたてぬあらしも深き心あれやみ山のもみちみゆき待けり

疊なき濱の眞砂に君か世のかすさへ見ゆる冬の月かけ

今日偏文義得意等。沙二汰田殿庄一。（女房中納言殿便書。）逢不二見參一云々。

十日。自レ夜雨降。遲明休。朝陽漸晴。晝天猶陰。拂曉凌レ雨赴レ道。無レ程王子御座云々。但依二路遠一向二路頭樹一拜云々。（ツメサキ云々。）次參二井關王子一。於二此所一雨漸休。夜又明。次參二ツノセ王子一。次又攀二昇シヽノセノ山一。崔嵬嶮岨巖石〔不〕異二昨日一。超二此山一參二沓カケ王子一。過二シヽノセ椎原一。樹陰滋路甚狹。於二此邊一有二書養御所一云々。又私同儲レ之。暫休二息山中一小食。於二此所一上下伐二木枝一隨レ分造レ槌。付二榊枝一持參。内ノハ〔一本イ〕タノ王子。（ツチ金剛童子云々。）各結二付之一云々。次出二此木原一。又過レ野。萩薄遙靡。眺望甚幽。此邊高家云々。聖護院宮幷民部卿領云々。此所共有二便事一。

但未ニ尋得一。次又參ニ王子一。田藤次云々。次又愛德山王子。次ククリマ〔ワイ〕王子。次寄ニ小松原御宿一。御所邊向宿〔所〕之處已無レ之。國沙汰人成敗獻レ之。假屋〔之〕少之間。無レ緣者不レ入ニ其員一。占ニ小宅一立レ簡之處。內府家人押入宿了。不レ可レ出之由忿怒云々。國沙汰之人又非ニ我進止一〔ヌイ〕之由後聞云々。只依ニ人涯分一偏頗歟。不レ泣ニ相論一。又非レ可レ入レ身。此御所有ニ水練便宜一。臨ニ深淵一構ニ御所一。卽打過遙尋ニ宿所一。渡レ河參ニイハウチ王子一。入ニ此邊小家一。重輔庄云々。宮戶部兩人便書在此宿如レ形到來。覺了房周梨自ニ御山一下向。今日相待。更可ニ伴參一云々。以ニ代官一可レ足之由雖ニ相示一。猶丁寧之由也。秉燭以後甚雨。今夜甚熱不レ異ニ三伏一。着レ帷。南國之氣歟。蠅多又如レ夏。

十一日。雨降。申後聊休。入レ夜月朧々也。遲明出ニ宿所一。不レ知ニ御幸一。超レ山參ニ鹽屋王子一。此邊又勝地。有レ祓。次入ニ晝宿一小食。次ウヘ野王子。野徑也。次ツイノ王子。自ニ此邊一歩指〔離イ〕。次參ニイカルカ王子一。次參ニ切部王子一入ニ宿所一。最狹少。海人〔土イ〕平屋也。御所前也。但國召宛云々。小時御幸入御。歩。晚景又有レ題。卽書之持參。戌時許如レ例被ニ召入一。讀上了退出。葉〔葉イ作二種〕無ニ極品一。

羇中聞波　野徑月明

うちもねすとまやに波のよるのこゑ誰なと松の風ならね共

於ニ此宿所一鹽垢離カク。眺ニ望海一。非ニ甚雨一者可レ有レ興所也。病氣不レ快。寒風吹レ枕。

十二日。天晴。遲明參ニ御所出御前一。先陣又超レ山。參ニ切部中山王子一。次出レ濱參ニ磐代王子一。此所爲ニ御小養御所一。無ニ入御一。此拜殿板每度被レ注ニ御幸人數一。先〔例〕云々。右中弁召ニ番匠一。板放天カンナヲカク。書ニ人數一天如レ元令レ打ニ付之一。建仁元年十月十二日。陰陽博士晴光未レ參。上北面此人數之中共署無レ術之由。以ニ左中弁一申入。卽可レ被レ聽ニ上北面一之由被ニ仰下一了。

御幸四度。
御先達權大僧都法印和尙位覺實
御導師權大僧都法印和尙位公胤
內大臣正二位兼行右近衞大將皇太弟傅源朝
臣通親

次々如レ此。殿上人上北面僧。寬快已下三人。下北面皆著レ之。此最末カク
〔イイ〕五房隆俊在レ之。
自レ是又先陣過二千里濱一。此處一町許。參二千里王子一。次參二一鍋王子一。自レ是入二晝養所一食了。參二御所一之間。御幸已出御。自二此宿所一御布施以二忠弘一送二遣之一絹六匹。綿百五十兩。馬三匹。〔出イ〕
次參二ハヤ王子一。御幸入御之間。先陣參二幽立王子一。於二此宿一御鹽垢離。御所有二御祓一云々。又先陣見二田邊御宿一入二私宿所一。宿所任〔權イ〕別當自上儲之云々。甚廣不レ似二切部一。御所美麗。臨レ河有二深淵一。田邊河云々。去夜寒風吹レ枕。咳病忽發。心神甚惱。此宿所又以荒。又鹽垢離。昨今之間一度可レ有之由。先達命レ之。但今〔日〕猶遂二此事一。
十三日。天晴。天明參二御所一。未レ上二格子一。御先達參二儲御拜所一。近臣人々未レ出之間。早出前陣參二秋津王子一。〔イイ〕春宮權大夫參會。又超レ山參二丸王子一。次ミス丶山王子。次ヤカミ王子。次稻葉根王子。此王子准二五躰王子一。每事過差云云。御幸之儀同二五躰王子一云々。〔イイ〕次入二晝養宿所一。馬自二此所一停。被レ置二師〔預〕。〔イイ〕自レ是步指二濱二石田河一。先參二一瀨王子一候之。一次參二アイカ王子一。河間紅葉淺深影映レ波。景氣殊勝。河深處及レ股。不レ寒。レ誇云。〕次昇二崔嵬嶮岨一。入二瀧尻宿所一。河灘韻忙巖石之中也。入レ夜給レ題。使者遲參。云々。〔又參入讀上之〕即詠レ之持參。如レ例披講之間參入。讀上了退出。參二此王子一。歸二宿所一。

河邊落葉
そめし秋なくれめとたれかいはた川また浪こゆる山風の袖
旅宿冬月
たきかはのひゝきは急ゝ旅のいほた靜かにすくる冬の月影

一寢之後乘輿。師沙汰之力者十二人豫示付之。作法師原裝束十二幅具。師布施送了。紺葉摺ハキ

許也。頭巾同相具。今夜付ニ書養山中宿一。此所又不思議奇異小屋也。寒嵐〔颯イ〕甚難レ堪。

十四日。天晴。天明出ニ山中宿一。參ニ重照王子一。次參ニ大坂本王子一。次超レ山了入ニ近露宿所一。于時日出後也。自ニ瀧尻一至ニ于此所一。崔嵬〔塊カ〕陂泄。目眩轉魂恍々。昨日渡レ河足聊損。仍偏乘輿。此宿近ニ御所一隔レ田。午終御幸歩。訖即給レ題。

峯月照レ松

さしのほる君なちとせとみ山より松なそ月の色にいてける

濱月似レ雪

雲きゆるちさとの濱の月かけは空にしられてふらぬ白雪

只今披講。長房朝臣注ニ送之一。驚即持參〔縁イ〕僻事也。供御之間云々。即退出。秉燭以後又參上。講際阿闍梨依レ召參候蔀外讀經。良久有レ召參ニ御前一。又讀上了退出。即于時亥刻。乘輿出レ道渡レ河。即參ニ近露王子一。次ヒソ原。次繼櫻。〔次〕サクツ中ノ河。次イハ神〔云々〕。夜中着ニ湯河宿所一。路間崔嵬。夜行甚有レ恐。寒風無ニ爲方一有ニ非時水〔コリ〕一。

十五日。天晴。天明後水。窮屈之間付レ寢了。訖見ニ御所一禮了。此宿甚寒依レ山。又出ニ道〔路〕一。此所今日御宿也。然而猶先陣。午時許着ニ發心門一。宿ニ尼南無房宅一。此宿所尋常也。件尼自レ京參會相逢會釋。給ニ所泊レ着此道之間。常不レ具ニ筆硯。又有レ所レ思。未閑所也。レ書ニ一事一。他人大略毎ニ王子一書署。此門柱始書ニ付一首一。發心門。一句。一首。

惠日光前懺ニ罪根一。大悲道上發心門。南山月下結緣力。西刹雲中吊ニ旅魂一。

いりかたき御法のみかはけふすきぬ今よりむつの道にかへすな

今日王子湯河。次猪鼻。次發門。此王子寶前殊發ニ信心一。紅葉飜レ風。寶殿上四五尺木無レ隙生。多是紅葉也。社後有ニ比丘尼南无房堂一。此内又書ニ付一首一。後聞此尼制止不レ令レ書レ物云々。不レ知書了。夕又水訖出ニ王子一。御前所作了。月出山之間也。

今日之道。深山樹木。多有ニ苺苔一。懸ニ其枝一。如ニ藤枝一。遠見偏似ニ春柳一。

十六日。天晴。拂曉又出ニ發心門一。王子二一。内水飲。祓殿。自ニ祓殿一步指參ニ御前一。過ニ山川千里一遂奉レ拜ニ寶前一。感淚〔嚴イ〕難レ禁。自レ是入ニ宿所一。遲明更歸參ニ祓殿一。左中弁自ニ夜在ニ此邊一。爲レ奉レ待ニ御幸一也。但數刻。仍入ニ近邊地藏堂一。更被レ寄ニ衣食一暫住。巳時許御幸御共參ニ寶前一。公私是〔白イ〕天ヌレヽ〔ハイ〕ウツ〔ヘイ〕ノ入堂云々。即入ニ御御所一。訖即退下。コリ訖着ニ奉幣之裝束一。新物立烏帽子。ハハキ。ツラヌキ。歸參數刻之後出御了。其間事〔御禊イ〕奉幣。左中弁取ニ金銀御幣一進レ之。合レ取ニ御幣拜。此間親兼朝臣取ニ白妙御幣一。御拜訖。祝儈法眼。取合〔受命イ〕中レ祝先若誠殿。次兩所。御幣二本。前後兩段御拜。如ニ一社之儀一。次若宮殿。御幣次一萬十萬御前。御幣白。御拜皆同前。祝申了退之間。予取ニ被物一給レ之。乍レ立給レ之。即入ニ御御經供養御所一。禮殿云々。公卿在レ西。殿上人在レ東。御誦經俊家朝臣親兼朝臣取ニ布施一。次公胤法印御經供養了。公卿被物。殿上人取ニ布施一了。予退下。此間舞相撲等云々。御加持引出物。不レ見ニ其儀一。咳病殊更發無ニ爲方一。心神如レ無。殆難レ遂ニ前途一。腹病瘡瘍等競合。秉燭以後又コリ。此事臨時依レ病無レ術也。又着ニ晝裝束一。先達相共參ニ御前一。奉幣。其儀如ニ晝御拜一。公私不レ替。幣ノサキハ左ニムケテ。獨人狼藉淺猿。次入ニ經供養所一。依レ獨入ニ西經所一云々。道師來說法了。置ニ布施一了。被物一。裹物。次滅レ火。鐘有レ火。加持僧十二人來加持了。置ニ布施一。依レ貧之綿各七兩。退出。自ニ此經所路一入ニ宿所一。扶レ病又參ニ御所一。數刻寒風病身無ニ爲方一。深更被ニ召入一。二座和歌。

發心門料二首

遠近落葉　暮聞河波　歌凡非ニ尋常一

窮屈病惱爲方ナシ。

二座事發心門本宮序。

本宮三首。内府有レ序。

讀上了退出。心中如ニ已更無ニ爲方一。

十七日。夜雨降。今朝猶陰風甚寒。明日新宮下向。船更以無レ之云々。御所召以下皆闕如云々。扶

病未時許參御所。以前出御了芝僧供云々。御所(西向禮殿也。公卿候左右。殿上人候庭。)前庭(兩華前。)東西行敷莚爲客僧座。山伏各引率其徒。相替坐次第被引之。了卽起又替。今日人々皆着楚々裝束。(長袴張下袴如供花時。)予獨不存。着日來御會裝束。甚見苦[云々]。此間參御前。心閑奉禮。所祈者只出離生死臨終正念也。僧供了令參御前候。次第御所作了。如昨日還御。殿上人在前。公卿在御後。次山伏御覽。公卿殿上人又候御前近邊。山伏作法恒例云々。依無要不委注。(渡御前乘船入向山。)寒風無術。見了卽入宿所。今夜可有種々御遊云々。此先達構驗競事云々。依所勞臥宿所。

十八日。天晴。天明拜寶前。出河原乘船。(所宛行加一艘。私三艘幷四艘。)共下人等多[力者法師二人]止了。略定侍三人。覺本房稱老屈不參。圓勝房相具。(舍人一人雜人等也。自精進屋所伴先達也。)中程有種々石等。(或稱權現御雜物。)未一點許着新宮奉拜。小時御幸如例。

[前]行先令參寶前給。次入御所。次立烏帽子。歸參良久出御。御奉幣如本宮。予取祝師之祿如前。事了入御經供養所之間。私奉幣。稱人如例。歸參取御經供養布施。次如例亂舞。次有相撲。此間退下宿所。入夜爲加持參寶前。僧等參差不來會。仍問事之由。示先達。參御所。例和歌訖退下。又有序。(輿持來。仍[illegible]來之。)

十九日。天晴。遲明出宿所又赴道。(傳馬等僅參。師沙汰送。先達侍等乘之。)山海眺望非無興。此道又王子數多御坐。未時參着那智。先拜瀧殿。嶮岨遠路。自曉不食。無力極無術。次拜御前。入宿所。小時御幸云々。日入之程參寶前。御拜之間也。又取祝師祿了。次令供神供御。別當取儲之。公卿次第取繼。一萬十萬等御前。殿上人猶次第取繼之。予同取之。次入御御經供養所。取例布施。次驗クラヘ云々。此間私奉幣退下宿所。深更參御所。例和歌訖退下。(二座也。)

一明日香云々。窮屈病氣之間。每事如レ夢。
廿日。自レ曉雨降。無二松明一。天明之間。雨忽降。
雖レ待二晴間一彌如レ注。仍營〔出イ〕步一里許行。天明
風雨之間。路窄不レ及〔龍イ〕レ取レ笠着二簑笠一。輿中如
レ海如二林〔華イ〕宗一。終日超二嶮岨一。心中如レ夢。未レ遇二
如レ此事一。雲トリ紫金峯如レ立乎。山中只一宇
有二小家一。右衛門督宿也。予相替入二其所一。如レ形
小食了。又出二衣裳一。只如レ入二水中一。於二此邊一
適雨止了。前後不覺。戌時許着二本宮一付レ寢。此
路嶮〔岨〕難過。於二大行路一不レ能二追記一。
廿一日。天晴。天明參二御所一。出御之間前行參二
寶前一。御拜了入二御禮殿一。又可レ有二御加持一云々。
此間退出。先陣馳奔。湯河晝養了。着二近露宿
所一。
廿二日。天晴。拂曉出二近露一。下瀧尻マナコ小家
晝養了。未一點許着二田邊宿一。日入了之後出二此
宿所一。過二切部一入二イハ一。明日可レ超二三宿一。遠路
無レ術之間。今夜如レ此迷惑。鷄鳴之程入二此宿
所一二寢。
廿三日。天晴。日出之後渡レ川過二小松原一。超二シ
シノセ山一。午始許入二湯淺宿所一。〔此所〕五郎云
男宿所事甚過差。予之不レ堪レ感。引所餞二鹿毛
馬二了。今日適休息。終日偃臥。
廿四日。天陰。雨降間休。曉出レ道超二〔蕪坂〕(カブラザカ)藤
代山一。雨甚。路次失レ度。入二藤代宿所一。小食了又
出レ道。凌レ〔雨〕超二ヲレ山一。申時許入二信達宿一。
御所近邊也。假屋也。國沙汰者送下如二菓子等〔无イ〕一之物上。
廿五日。天晴。曉參二御所一。出御以前出レ道。於二
大鳥居小家一食了。出過二天王寺一〔入天無〻〕。入二ナカラ〔渡イ〕宿
所一。自二京家一到來相二具船一也。仍候レ之。但此宿細川庄成時沙
汰也。人不レ來云々。仍即打出了。馳奔入二皆瀨宿
山崎前々宿所一也。今日過二十五六里一了。御幸
ナカラヨリ御船上御云々。一寢。
廿六日。天晴。鷄鳴之程御幸入御云々。但只今即

出御之由。左中弁示ニ送之一。仍忩出。天明之程入ニ御鳥羽御精進屋一。即又出御御幸稲荷御拜。御經供養。此間私奉幣。候ニ法莚一云々。如レ例取ニ布施一。俊家中將。予取ニ導師布施一了。即入ニ御二條殿一之儀。猶此人數可レ參云々。然而觸ニ少々人々一。自レ是退出。入ニ九條一小食了。即馳出參ニ日吉一。私宿願也。於ニ馬場邊一遇ニ春宮權大夫一。未時許參着。奉幣了即馳歸。於ニ清閑寺邊一取ニ松明一歸京。洗髮沐浴了付レ寢。今夜魚食。

廿七日。早朝道之間雜物悉以レ水洗レ之。又雜物等取聚送ニ先達許一。是恒例云々。文義沙ニ汰之一。

右後鳥羽院熊野御幸記以古寫二本挍合了

以別本再訂了　憙言

群書類從卷第三百三十

紀行部四

海道記

源光行

白河の渡り中山の麓に閑素幽栖の侘士あり。性器に底なければ。能をひろひ藝をいるゝにたまるべからず。身運は本より薄ければ。報ひをはぢ命をかへりみて。うらみをかさぬるに所なし。徒に貪泉の蝦蟇となりて。身を藻によせてちからなきねをのみなき。むなしく窮谷の埋木として意樹に花たえたり。惜からぬ命のさすがに惜ければ。投身の淵は胸の底に淺し。存ずるかひなき心はなまじゐに存じたれば。斷腸の棘は愁の中に茂り。春は蕨を折て臨る飢をさゝふ。伯夷が賢にあらざれば人もとがめず。秋は菓を拾て貧き病をいやす。美子が藥もいまだ飢たるをば治せず。九夏三伏の汗は拭てくるしまず。手中に扇あれば涼を招くにいとやすく。玄冬素雪のあらしは凌ぐにあたはず。身のうへに衣なければ寒をふせぐにすべなし。窓の螢も集ざれば目は暗がごとし。なにを見てかこゝろざしをやしなはん。樽の酒も酌事を得ざれば心に常に醒々たり。いかが憂を忘れんや。然間歳の水はやく流れて生涯はくづれなんとす。留とすれども留まらず。五旬のよはひの流車坂に下る。朝に馳暮に馳す。日月の廻りの駿駒のひま。かゞみの影に對

居てしらぬ翁に耻。鑷子を取て白絲をあはれむ。是によりて佛のうへにはよはひをおどろかす老をつげ。鶴鬢のほとりに早落をいとふ花。露におどろき霜をいとふこゝろざしたちまちに催して。僧を學び佛に歸する念漸におこる。名利は身にすてつ。稠林に花ちりなば覺樹の菓は熟するを期すべし。薜蘿は肩にすがり法衣の色そみなば衣のうらの玉は悟る事を得つべし。只暮の露の身は山かげの草を置所とすれども朝霞は望み絕て天を仰にむなし。世をいとふ道は貧道より出たれども。佛を念ずる思は遺意とをこたる。四聖の無爲を契りしも。一聖なを頭陀の道にとゞまりき。ひとへにをのれが有爲をいとひむさぼり。をのれいよいよ座禪の窓にいそがし。然而曹腊が酒も人をえはしてよしなし。子罕が賄は心に賄て身の藥とせり。鵝眼なけれど天命の路に杖つきて步をたすく。麞牙はかけたれども地恩の水に口すゝぎて渴をうるほす。空腹に一盃のかゆをすゝれば餘味あり。薄紙百綴の衿寒に服すれば肌をあたゝむるにたれり。檜笠をかぶり裝とす。わらぐつをふんで駕とす。遁世の道なり。出家の身なり。抑相摸國鎌倉の郡は。下界の鹿瀧苑天朝の築渦州なり。武將の林をなす。萬榮の花萬にひらけ。勇士道にさかへたり。百步の柳百たびあたり。弓は曉月に似たり。一張そばだちて胸をたをし。劔は秋の霜のごとし。三尺たれて腰すゞし。勝鬪の一陳には爪を楯にしてあだを雌伏し。猛豪手にしたがへて直に雄搆す。干戈威をいつくしくして梟鳥あへてかけらず。誅戮にきびしくして。虎おそれをまし。四海の潮の音は東川にてらされて浪をすませり。貴賤臣妾の往還するおほくむまやのみち隣をしめ。朝儀國務の理亂は萬緖

の機かた／＼に織り。去年質耳外に聞をなして。おほくの歳をわたり。舌の端唇していくばくの日をか送るや。心のふね洋爲に漕。いまだ海道萬里の波に掉さゝず。乘馬あらましにはす。いまだ關山千程の雲にむちうたず。今便人(後達河)の芳縁に乘じて俄に獨身の遠行を企り。貞應二年卯月の上旬五更に都を出で一期に旅立。昨日はすみわびていとはしかりし宿なれども今立わかるれば名殘おしく覺えてしばしやすらへども。鐘のこゑ明行はあへずして。いつまたあはた口の堀道を南にかいたをりてあふ坂山にかゝれば。九重の寶塔は北のかたにかくれ。又相坂を下に松をともして過行ば。四宮河原のわたりはしのゝめに通りぬ。小關を打越て大津のうらをさして行。關寺の門をだにかへりみれば。金剛力士忿怒のいかる眼を驚し。勢田の橋を東に渡れば。白浪瀧落て流晒とながれ。又身をひやす湖上にふねをのぞめば心輿にのり。野庭に馬をいさめて手に鞭をかなつ。漸に行ほどに都を遙にへだてぬ。前途林幽なる綫に靑蕎梢に見ゆ。後路山さかりて白雲路をうづむ。既に斜陽景くれて。暗雨しきりに笠にかゝる。袖をしぼりて始て旅のあはれをしりぬ。其間山館に臥て露よりをく曉の望蕭蕭たり。煙高旱子巖の路をうづみ。水に望みて又水に望む。波の淺深長堤の汀にすゝむ。濱名の橋の橋下には往事をちかひてこゝろざしをのべ。淸見關のせきやにはあかぬ名殘をとゞめて歩をはこぶ。富士の高根にけぶりをのぞめば。臘雪宿して雲ひとりむすぼゝうつの山路につたを尋れば昔の跡夢にして風の音おどろかす。木々の下には下ごとに翠帳をたれて。行客の苦みをいこへ。夜々の泊りにはとまりごとにこもまくらをむすびてたび人のねぶりを

たすく。行々として重て行々たり。山水野塘の興こそみちのをまし。歴々として更に歴々たり。海村林邑の感いやめづらかなり。此道若四道の間に逸興のすぐれたるをかね。又孤身が斗藪の今旅はじめなれば。過孤たる舊客猶ながめを等閑にせず。況や一生の新賓なれば感思おさへがたし。感思の中に愁傷の交事あり。所謂母儀の老を□又幼を都にとゞめて不定の再覲を契おく。無状かな愚子が爲躰。浮雲に身を乗て旅天にまよひ。朝露の命にて風のたよりにたゞよふ。道をおなじうするものは我をしらざる客なり。語は親昵に契りていづちかはなれなんとする。長途に疲れて十日あまり。窮屈頻に身をせむ。湯井の濱に至りて一時半假息しばらく心をゆるぶ。時に萍實西にしづむ。舊里を忍て後を期し。桂花東にひらけ。外郷に向て中懐をなやます。仍三十一字を綴りて。千度思ひ萬度懐て旅のこゝろざしをのぶ。これは是文を以てさきとせず。歌を以て本とせず。只興にひかれて物のあはれを記するのみなり。四月四日の曉。都出し朝より雨にあひて。勢田の橋のこなたにしばらくとまりてあまじたくしてゆく。けふあすともしらぬ老人を。ひとり思ひ置てゆけば。

思ひなく人にあふみのちぎりあらは今歸りこん勢田の長橋

はしのわたりより雨まさりて。野徑の道芝露殊にふかし。八町なはてを過れば行人たがひに身をそばめ。一邑のさととをれば亭犬頻に形をほゆ。今日しもならはぬ旅の空に雨さへいたくふりて。いつしか心のうちもかきくもるやうに覺えて。

旅衣またきもなれぬ袖の上にぬるへきものと雨はふりきぬ

田中打過民宅打過てはる〲と行ば。農夫竝び立てあら田をうつこゝろは行鴈のなきわたる

がごとし。卑女うちむれ前田の面にゑぐつむ。存外しづくに袖をぬらす。そとものゝ小川には川ぞひ柳に風たちて鷺のみの毛うちなびき。竹の編戸の垣根には卯花咲すさびて山時鳥忍びなく。かくて三上の嶽をのぞみて野洲河をわたる。

いかにしてすむやす川の水ならんよわたる計苦しきやある

若椙と云所を過て横田山を通る。此山は白楡のかげにあらはれて緑林の人をしきる所ともきこゆれば。益なく覺えていそぎゆく。

はや過よ人の心のよこた山みとりの林かけにかくれて

夜景に大岳といふ所にとまる。年比うちかなはぬ有さまにおもひとりて髮をそりければ。いつしかかゝるたびねするも哀にて。彼廬山の草庵の夜曲は情ある事を樂天の詩に感じ。此大岳の柴の宿の雨には何事を貧道の歌にはづ。

墨染の衣かたしき旅ねしついつしか家を出るしるしに

五日。大岳を立て遙に行ば。內の白河外の白河といふ所を過て鈴鹿山にかゝる。山よりは伊勢の國にうつりぬ。重山雲さかし。越れば千丈の屛風彌しげく。群樹烟ながし。裘ば又萬尋の帷帳ますますあつし。峯には松風かたかたに調べて嵇康が姿しきりに舞。林には葉花稀に殘て蜀人の錦は纔にちりほふ。是のみにあらず。山姬の夏の衣は梢のみどりにそめかけ。樹神の音の響は谷の鳥にこたふ。此路を何里ともしらず越行ば。羊腸坂さびしくして驁馬石にあしなえたり。すべて此山は一山の中に數山をへだてゝ千巖の峯にさはり。一河のながれ百瀨に流て衆客の步みに足をひたせり。山里江複は當路にありといへども。萬里の行者はなかばもいたらず。

すゝか川ふるさと遠く行水にぬれて幾せの浪をわくらん

薄暮に鈴鹿の關屋にとまる。上弦の月峯にかかれり。虚弓いたづらに歸鴈路にのこり。下流の水谷に落。奔箭すみやかにして虎に似たる石にあたる。爰に旅驛漸にかさねて。枕を宿縁の草にむすび。雲衣曉にさむし。袖をいはねのこけにしく。松は君子の徳をたれて。天のごとくおほへり。竹は吾友の號あれば。かぜにふしてよをあかす。

鈴鹿山さしてふる里おもひねの夢路の末に都をそとふ

六日。孟嘗君の五馬の客にあらざれば函谷の雞の後夜をあかしてたつ。山中なかば過て漸下れば巖扉けづりなせり。仁者の栖しづかにして樂み。澗水堀ながす。智者の砌うごけどもゆたかなり。かくて邑里に出て田中の畔を通れば。左に見右に見立田眇々たり。或は耕しをのれがひき〳〵に論じ。畦畝あせを竝て苗を我とり〳〵に蘖たり。民のけぶりは父君心躰の恩火よりにぎはひ。王道の徳は子民稼穡の土器より開けたり。水龍は本より稲穀を護て夏の雨をくだし。電光はかねてより九穂をはらみて三秋をまつ。東作の業力をはげます。西收の税たのもしく見ゆ。劉寛が刑を忘れたり。蒲鞭定て螢になりぬらん。

苗代の水にうつりて見ゆる哉いな葉の雲の秋のおもかげ

日數ふるまゝに古郷も戀しくて立歸り過ぬる跡をみれば。いづれか山いづれか水。雲より外に見ゆるものなし。朝に出て夕に入。東西を日の光にわきまふといへども晩ればとまり明れば立。晝夜を露命に論ぜん事はかたし。そのづから一歩を捨て萬歩をはこばゞ。遠近かぎりありて往還を期しつべし。只あはれむ。遙に都鄙の中路に出て前後のおもひに勞する事を。

ふる里は山のいくへにへたてきぬ都の空をうつむしら雲

夜陰に市腋と云にとまる。前を見おろせば海

さし入て河伯の民うしろにやしなはれ。見あぐれば峯崎て山祇の髪風にけづる。髻をうつ夜の浪は千光の火を出し。木々になく曉の猨は孤枕の夢を破る。此ところにとゞまりてこころはひとりすめども。明行ば友にひかれ打出ぬ。

松かれのいはしく磯のなみ枕ふしなれてもや袖にかゝらん

七日。市腋を立て。津嶋の渡と云所を舟にて下れば。蘆の若葉あをみわたりて。つながぬ駒も立はなれず。菱の浮葉に浪はかくれども。難面かはづはさはぐけもなし。とりこすさほの雫袖にかゝりたれば。

さして物を思ふとなしにみなれさほみ馴ぬ濱に袖は濡しつ

渡はつればおはりの國にうつりぬ。片岡には朝陽の影うちにさして。燒野の草に雉なきあがり。小篠が原に駒あれて。泥しけしき引かへて見ゆ。又園中に桑の下宅あり。宅には蓬頭なる女。蠶にむかひて蘇養をいとなみ。園には僚倒たる翁鋤を持て農業をつとむ。大かた禿なる小童部といへども。田を習心ざしたゞ足をひぢがごとするおもひのみあり。わかくしてより業を習ふありさまあはれにこそ覺れ。貧に父兄のをしへつゝしまざれども。生孝の志をのづからあひなるものか。

山田うつ卯月になれは夏引のいとけなき子も足ひぢにけり

幽月景あらはれて。旅店に人しづまりぬれば。草のまくらをしめて萱津の宿にとまりぬ。

八日。萱津を立て鳴海の浦に來ぬ。熱田宮の御前を過れば。示現利生の垂跡にひざまづきて一心再拜の謹啓に頭をかたぶく。暫く鳥居に向ひて阿字門を觀ずれば。權現の納ひそかに寂光の色に□夫土木霜降て瓦上松風天に吹といへども。靈驗日新にして人中の心花春のごとくにひらけたり。しかのみならず。林の梢

をたるゝ幡蓋社頭の上におほひ。金玉の檐端をうつ金色を神殿の面にみがく。彼和光同塵は來際をかざる期なき事を憐む。羊質未參の後悔に向前のうらみあり。後參の未來に向方のたのみなし。願は今日の拜參をもちて必當來の良緣とせん。路次の便詣なりといふ事なかれ。此機感相叶時也。光をまじふるは冥を導誓ひなり。明神定てその名に應じ給はゞ。長夜の明曉は神にたのみ有ものをや。

光とづるよるのあまの戸早あけよ朝日戀しき四方の空見ん

此うらをはるかに過れば朝には入海にて魚にあらずば游べからず。晝は鹽干潟なれば馬をはやめてゆく。西天は冥海漫々として雲水蒼蒼たり。中上には一葉の舟かすかに飛て白日の空にのぼる。彼仮男の船中にてなどや老にけん蓬萊の嶋は見ずとも。不死藥をばとらずとも。波のうへの遊興は一生の歡會なり。是延年の術にあらずや。

老せしと心をつれにやるひとぞ名をきくしまの藥なもうれ

猶此干潟を行ば小蟹どもをのが穴々より出て蟲きあそぶ。人馬のあしにあはてゝ横にをどり平さまに走りて。我あな〳〵へ逃入をみれば。足の下にふまれて死べきは外なる穴へ走りて命いき。外に恐なきは足の下なる穴へ走來てふまれて死ぬ。憐べし煩惱は家の犬のみにあらず。愛着は濱の蟹ふかき事を。是を見てはかなくおもふ我々。かしこしやいなや。生死の家に着する心は。かににもまさりてはかなき物か。

誰もいかに見るめ哀とよる波のたゝよふうらに迷ひ來に見

山重りて又かさなりぬ。河へだたりて又へだたりぬ。ひとり舊里を別而遙に新路におもむく。しらずいづれの日か古郷にかへらん。影をならべゆく道づれはあまたあれども。心ざし

は必しも同じからねば。心に准ずる氣色は友をそむきて似たれども。折にふるゝ物のあはれは心なき身にもさすがに覺えて屈原が澤に吟ひて漁夫が嘲を耻。楊岐が路になきて騷人のうらみをいだきけんも。身のたとへにはあらねども。逆旅にして友なきあはれには。なにとなく心ぼそくそらにおもひしられて。

露の身をおくへき山のかけやなきやすき草葉もあらし吹つゝ

潮見坂といふ所をのぼれば。吳山の長坂にあらずといへども。周行の短息はこゝにあへたり。數步を通じてながき道にすゝめば。宮道二村の山中を險に過て。山はいづれも山なれども。優興は此山にひく。松はいづれも松なれども。木立は此松にとゞまれり。翠を含風の音に雨をきくといへども。雲に舞鶴のこゑに晴の空を知。松の性松の性。汝は千年の貞あればおもがはりせじ。再往再往。我は一時の命なれば後見期しがたし。

けふすぎぬかへらは又よふたむらのやまぬ名殘は松の下道

山中に堺川あり。身は河上にうかんでひとり渡れども。影はみなそこに洗て我とふたりのく。かくて三河國にいたりぬ。雉鯉鮒が馬場を過て。數里の野原に一兩のはしを名づけて八橋といふ。砂に睡る鴛鴦は夏を辭去り。水にたてる杜若は時をむかへて開たり。花はむかしの色かはらず咲ぬらむ。橋もおなじ橋なれども幾度つくりかへつらん。相如が世をうらみしは肥馬に乘て昇僊にかへり。幽子身を捨る。窮鳥に類て當橋を渡る。八橋よ八橋よ。くもでに物おもふ人は昔も過きや。橋柱よはしばしらよ。をのれも朽ぬるか。むなしく朽ぬるものは今もまたすぐ。

すみわひて過る三河のやつ橋を心ゆきてもたちかへらはや

此はしのうへにおもふ事をちかひて打渡ら

ば。何となく心もゆく樣におぼえて。遙に過れば宮橋といふ所あり。數雙のわたし板は朽て跡なし。八本の柱は殘て滯にあり。心のうちにむかしをたづねてことのはしに今をしるす。

宮橋の殘るはしらにこととはん朽て幾世かたえわたりぬる

けふのとまりをきけば。前程なを遠しといへども。暮の空を臨斜脚既に酉金に近づく。日の入程に矢橋の宿に落つきぬ。

九日。矢橋を立て。赤坂の宿を過。むかし此宿の遊君花顏春こまやかにして。蘭質秋かうばしき女有けり。貞を潘安仁が弟妹にかりて。契を三州吏の妻妾に結べり。妾は良人に先て世を早し。良人は妾にをくれて家をいづ。しらず利生のぼさつの化現して夫を導けるか。又しらず圓通大士の發心して妾をすくへるか。互の善知識大なる因緣なり。彼舊室妬が咒咀に排舞惡怨かへりて善教の禮をなし。異域朝嘲の輕仙に鼻酸持鉢忽に智行の德にとふ。巨唐に名をあげて本朝に譽を留る上人誠に貴。誰かいはん初發心の道に入聖なりとは。是則本來佛の世に出て人を化するにあらずや。行々昔を談じて猶々いまにあはれむ。

いかにしてうつゝかみちを契らまし夢驚かす君なかりせば

かくて本野が原を過れば。懶かりし蕨は春の心を生替りて。秋の色うとけれども。分行駒は鹿の毛に見ゆ。時に日重山にかくれて。月星漢に顯れぬ。曉をはやめて豐河の宿にとまりぬ。深夜に立出てみれば。此川はながれひろく水ふかくして。まことにゆたかなる渡也。河の石瀨に落る浪の音は月の光にこえたり。川邊に過る風の響は夜の色白し。又みぎはひなのすみかには月よりほかにながめなれたるものなし。

しる人もなきさに浪のよるのみそなれにし月の影はさしくる

十日。豊河を立て野くれ里くれはる〴〵とすぐれば。峯野の原と云所有。日野の草の露より出て若木の枝にのぼらず。雲は峯の松風にはれて山の色天とひとつに染たり。遠望の感心情つきがたし。

山の端は露より底にうつもれて野末の草に明るしのゝめ

やがて高志山にかゝりぬ。石利を踏て大敵山を打過れば焼野が原に草葉萠出て。こずゑの色煙をあぐ。此林地を遙に行ば山中に堺川あり。是より遠江國にうつりぬ。

くたるさへたかしといはゝいかゝせんのほらん旅の東路の關

此山のこしを南にくだりて遙に見おろせば青海浪々として白雲沈々たり。海上の眺望は此ところに勝れたり。漸山脚に下れば匿穴のごとくに堀入たる谷に道あり。身をそばめ聲を呑で下る。くだりはつれば北は韓康獨往の栖。南は范蠡扁舟の泊り。花の色夏の望み貪して。波の聲夕の關に樂しぶ。鹽屋にはうすきけぶり靡然となびきて。中天の雲片々たり、濱腰には決れるうしほ涓焉とたまりて數條の畝傍々たり。浪によるみるめは心なけれども黑白をわきまへ。白洲にたてる鷺は心あれども毛衣にまとへり。優興にとゞめられて暫く立れば。此浦の景趣はひそかに行人の心をまとふ。

行過る袖も鹽屋の夕けふりたつとてあまのさひしとや見ん

夕陽の影の中に橋本の宿にとまる。此泊は湖海南に灌て遊興をこぎゆくふねにのせ。驛路ひがしに通りて譽號を濱名の橋にきく。晴日車西に馳て牛漢漸あらはれ。月輪峯に廻りて兎景初て幽なり。浦ふく松風は臥もならはぬ旅の身にしみ。巖をあらふ浪の音は聞もなれぬ老の耳にたつ。初更の間ひごろのくるしみにわかれて。七編のこもむしろにゆるめるといへども。深漏はこよひのとまりのめずら

しきに目ざめて數雙の松の下にたてり。磯もとゞろによる波は。水口かまびすしくのゝしれども。晴くもりゆく月は。雲のうす衣をかうぶりて忍びやかにすぐ。彼釣魚のかげはなみの底に入て魚のきもをこがし。夜舟の棹のうたはまくらのうへに音づれて客のねざめにともなふ。夜も既に明ゆけば。星のひかりはかくれて宿立人の袖はみえ。餘所なる聲によばれてしらぬ友にうちつれて出づ。しばらく舊橋に立とゞまりてめづらしきわたり與ずれば。橋の下にさしのぼるうしほは。かへらぬ水をかへし上さまにながれ。松をはらふ風のあしは。かしらをこえてとがむれどもきかず。大かた羇中の贈答は此所に儲たり。誰か水驛の跡をいはん。

橋本やあらぬ渡りと聞しにも猶過かねつまつのむら立

濵まくらよゐしく宿のなこりには殘してたちぬまつの浦風

十一日に橋本をたつ。橋のわたりより行々たちかへりみれば。跡にしらなみのこゑはすぐるなごりをよびかへし。路に青松の枝はあゆむもすそを引とゞむ。北にかへりみれば湖上はるかにうかんで。なみのしは水の顏に老たり。西にのぞめば湖海ひろくはびこりて。雲のうきはし風のたくみにわたす。水郷のけしきは。かれも是もおなじけれども。湖海の淡鹹は氣味これことなり。泥のうへには浪に葦みさごすゞしき水をあふぎ。舟の中には唐櫓おすこゑ秋のかりをながめて夏の空にゆく。本より興望は旅中にあれば。感腸しきりに廻りておもひやみがたし。此所をうちすぎて濱まつのうらにきたりぬ。長汀砂深して行はかへるがごとし。萬株しげくして風波こゑをあらそふをみれば。又湖を呑は則曲浦の曲より吐出し。濱渏珠を沙汰は則疊巖の疊にきしく。

優なるかな艶なるかな。忘難く忍がたし。命あらば□年か再び來て此うらにすぎん。
波はは ま松には風のうらうへに立とまれとや吹しきるらん
林の風にをくられて廻澤のやどをすぎ。はるかに見わたして行ば。岳の邊にはもりあり。野原には澤あり。峯にたつ木は枝をうへにさして生たれども。水にうつるかげはこずゑをさかさまにして互に相違せり。水と木とは相生中よしときけども。うつるかげは向背して見ゆ。時既にたそがれになれば。夜の宿を向へて池田の宿にとまる。

十二日。池田を立てくれ〴〵行ば。林野おなじさまなれども。ところ〴〵みちとなれば見るにしたがひてめづらしく。天中川をわたれば大河にて水面三町ばかりあれば舟にて渡る。はやく波さかしくてさほもさしえねば。大なる扒をもてよこざまに水をかきてわたる。かの王覇が忠にあらざれば滹沱河凘むすぶべきにあらず。張轉望が牛漢浪にさかのぼりけん浮木のふねのかくやとおぼえて。
よし こゝらは身をうきゝにて渡りなんあまつみ空の中川の水
上の野原を一里ばかりをすぐれば。千草萬草露の色なをあさく。野煙徑風の音またはし。あはれおなじくは。此道の秋のたびにてあれな。
夏草はまたうらわかき色ながら秋にさきたつ野邊の露かな
山口といふ今宿を過れば。路は舊に依て通せり。野原を跡にしさとむらをさきにして打かへ打かへ過行ば。事のまゝと中社に參詣す。本地をばしらず。佛陀にもいますらん。薩陲にもいますらん。中丹をば神かならずあはれみ給ふべし。今身もおだやかに後身もおだやかに。すぎのむら立は三輪山にあらずとも戀しく。春てもまいらん。願はたゞ畢竟空寂の法味を

納受して。眞實不虚の感應をたれたまへ。

思ふ事のまゝにかなへは杉たてる神のちかひのしるしとそみん

社のうしろに小川をわたれば。佐夜中山にかかる。此山口をしばらくのぼれば。左に深谷右も深谷。一峯ながきみちはつゝみのうへに似たり。兩谷の梢を眼下に見て。群鳥の囀を足の下に聞。谷の兩片はたかく。又山のあひだをすぐれば中山とは見えたり。山はむかしの九折のみちふるきがごとし。こずゑはあらたなる抄千條のみどりみなあさし。此ところは其名ことに聞つるところなれば。一時のほどに百般立どまりてうちながめゆけば。秦蓋の雨の音はぬれずして耳をあらひ。商絃の風のひゞきは色あらずして身にしむ。

わけ登るさよの中山なか〳〵にこえて名殘そ苦しかりける

時に胡馬ひづめつかれて。日鳥翅さかりぬれば。草命をやしなはんがため。きく川の宿にとまりぬ。或家のはしらに故中御門中納言宗行卿かく書付られたり。彼南陽縣の菊水下流を汲でよはひをのべ。此東海道の菊河西涯にやどりて命を全くせん事を。ことにあはれとこそおぼゆれ。身は累葉の賢枝にうまれ。其官は黄門のたかき階にのぼる。雲のうへの月のまへには冠の光をまじへ。仙洞のはなの下には錦の袖の色をあらそふ身たり。榮分にあまりて時々はなと匂ひしかば。人それをかざしてちかきもしたがひ遠きもなびきしも。かゝるうきめ見むとは思ひやはよるべき。さてもあさましや去承久三年中旬天下風あれて海内のなみさかへりき。闘亂の亂將は花城よりみだれ。合戰の戰士は夷國より戰。暴雷雲をひゞかして日月光をおほはれ。軍慮地をうごかして弓釼威をふるふ。其あひだ萬歳の山のこゑ。風わすれて枝をならし。一淸の河の色波あやま

つてにごりをたて。茨山汾水の源流たかくながれ。はるかに西海のにしにくだり。卿相羽林の花族とをく落て東關の東にちりぬ。これのみにあらず別離宮の月のひかり所々にうつりぬ。雲井をへだてゝ旅のそらにすみ。鷄籠山の竹の聲方々にうれへたり。風のたよりをたえて外土にさまよふ。ゆめかうつゝか。むかしもいまだきかず。錦帳玉端の床は主失て武客の宿となり麗水蜀川の貢數をつくして邊民のたからとなりにき。よるひるたはぶれて衿をかさねし鴛鴦。千歳比翼ちぎりいきながらたえ。朝夕にうやまひて袖をおさめし僮僕も。たねん知恩のこゝろざしおもひながらわかれぬ。實に會者定離のならひ目のまへに見ゆるに。刹利も首陀もかはらぬ奈落のそこのありさま。あはれにこそおぼゆれ。今はなげくともたすくべき人もなければ涙をさきだてて心よはくうちいでぬ。其身にしたがふものは甲冑の兵こゝろを一騎の客にかく。其目にたつものは鉞戟のつるぎ。魂を寸神のむねにけす。せめて命のをしさにかく書付られけんこそ。するすみならぬ袖の色もあらはれぬべく覺ゆれ。

心あらはさぞなあはれと水くきの跡かきわくる宿の旅人

妙井渡と云所の野原をすぐ。中呂の節にあたりて。小暑の氣やう／＼もよほせども。いまだ納涼のころならねば手にむすばず。

夏深き清水なりせは駒とめて暫しすゝまは日はくれぬへし

播豆藏の宿をすぎて大堰河をわたる。此川は川中に渡りおほく。又水さかし。ながれをこえ嶋をへだてゝ。瀬々かた／＼にわかれたり。此道を二三里行ば四望かすかにして遠情をさへがたし。時に水風例よりもはげしくて。白砂きりのごとくにたつ。笠をかたぶけて駿河國にうつりぬ。前嶋を過るになみはたゝねども。藤

枝の市をとをれば花はさきかゝりたり。

前嶋の市には波の跡もなしみな藤枝のはなにかへつゝ

岡部の里邑を過てはるかにゆけば。宇都の山にかゝる。此山は山中に山を愛するたくみのけずりなせる山也。碧岸の下に砂ながうして巖をたて。翠嶺の上に葉おちて壤をつく。貺を青におひ面を胸にいだきて漸にのぼれば。汗肩袒のはだへにながれて。單衣かさぬといへども。懐中の扇を手にうごかして。微風の扶持可也。かくて森々たる林をわけて峨々たる峯を越れば。貴石の譽は此山にたかし。大かたおちこちの木立にこゝろをわけられて。一方ならぬ感望におもひみだれて過れば。朝雲峯くらし。虎李將軍が栖をさり。暮風谷寒し。鶴鄭太尉が跡にすむ。既にして赤羽西にとび。まなこにさへぎるものとては檜原槇の葉。老のちからこゝを疲れたり。あしにまかするものは苔の岩ね蔦の下道嶮難にたへず。暫うちやすめば。修行者一兩客縄床そばにたてゝ又休む。

立かへるうつの山ふしことつてよ都こひつゝひとりこえきと

行々おもへばすぎきぬる此あひだの山河は。夢に見つるかうつゝにみつるか。昨日とやいはんけふとやいはん。むかしを今とおもへば我身老たり。今をむかしとおもへば我心わかし。古今をへだつる物はわが心の中懐なり。生死涅槃猶如昨夢といへるもあはれにこそおぼゆれ。昨日過にしあとはけふの夢となり。今日此所をすぐる。明日いづれの所にして今はきのふといはん。誠にこれ過ぬるかたの歳月を夢よりゆめにうつりぬ。昨日今日の山路は雲よりくもにいる。

あすや又きのふの雲に驚かんけふはうつゝのうつの山こえ

手越の宿にとまりてあしをやすむ。十三日手越を立て野邊をはるぐ\と過。こずゑをみれ

ばあさみどりの夏のはじめなりといへども。くさむらをのぞめば白露まだきに秋の夕に似たり。北に遠ざかりて雪しろき山あり。とへば甲斐の白峯といふ。としごろきゝしところ命あれば見つ。をよそ此あひだ數日のこゝろざしをやしなひて。百とせのよはひをのべつ。かの上仙のくすりは下界のためによしなき物をや。

おしからぬ命なれ共けふはあれはいきたるかひのしらねをも見つ

宇度のはまをすぐれば。浪の音かぜのこゑ殊にこゝろすむ所なり。はまの東北に靈地の山寺あり。四方たかくはれて四明天台の末寺たり。堂閣繁昌して本山中堂の儀式をかり。一乘讀誦のこゑは十二廻中に開絶る事なく。安居一夏の行は採花汲水のつとめ驗をあらそふ。修する所は中道の教法論談を空假の頤に决して。利する所は下立の衆生歸依を遠近のさかひにいたす。伽藍の名をきけば行基ぼさつの建立。土木の風情。本尊の實を尋れば觀世音と申。補陁落山の聖容出現の月あきらかなり。大形佛法興隆のみぎり。數百箇歳の星漢霜ふりたり。僧俗止住のみね。三百餘宇の禪房霞ゆたかなり。雲船の石神山麓に護て惡障をふせぎ。大形の木容は寺内に納て善業をなす。千手觀音かの山より石舟に乘て此地にくだり給ひけり。其舟善神となりて山路の大坂に石舟護法と號す。彼海岸山の千眼は南方より北を飛て有緣を此山に導。宇渡濱の品天面を地に得て舞樂を此濱にまなべり。むかし稻河大夫といふ人。天人の濱松の下に樂をしらべて舞けるをみてまなび舞けり。又人のみるをみて鳥のごとくに飛て雲に隱にけり。其跡をみれば一の面形を落せり。大夫これを取て寺の寶物とす。よつて其寺に舞樂をしらべて法會を始行

す。其大夫が子孫舞人氏とす。二月十二日常樂會とて寺中の大營なり。そののち天人歸り。廻雪は春の花の色みねにとゞまり。怨風は歳月のこゑはよつて此濱をすぐれば。松に雅琴有てなみにつゞみ有。天人の樂今聞に似たり。

袖ふりし天津をとめか羽衣のおも影にたつあとの白波

江尻の浦をすぐれば。青苔石におひ黑布磯にはる。南は澳の海淼々と波をわかして孤帆天にとび。北は茂松欝々と枝たれて一道つるをなす。漁夫の網をひく。身をたすけんとして身をくるしみ。游魚の鈎をのむ。命をおしみて命をほろぼす。人いくばくの利をか得たる。魚いくばくの餌をかもとむる。世をわしるおもひ。命をたばふこゝろざし。かれもこれもともにおなじ。これのみかは。山にあせかく樵夫は北風をになひて夕にかへり。野にあしなへく商客は。白露をはらふてあかつきに出。面々のたのしみまち〳〵なりといへども。各々のくるしみは。みなこれ渡世の一事なり。

人ことにはしる心はかはれとも世をすくる道は一つ成けり

此うらをはるかに見渡して行ば。海松はなみの岩ねに根をはなれたる草。海月は潮のうへに水にうつるかげ。ともにこれうき世を論じて人をいましめたり。

涙のうへにたゞよふ海の月もまたうかれ行とそ我を見る覽

清見がせきを見れば。西南は天と海と高低ひとつにまなこをまどはし。東北は山と磯と嶮難おなじく足をつまだつ。磐の下には波の花風にひらきて春のさだめなく。峯のうへには松の色みどりを含て秋をおそれず。浮天の波は雲を汀にて月のみふね夜出てこぎ。沈陸の磯は磐を道にて風の使脚あしたにふきてすぐ。名を得たる所かならずしも興をえず。耳に耽る所かならずしも目にふけらず。耳目の感

ふたつながら得るは此うらにあり。浪にあらひてぬれ〳〵や□に道をとへば松風むなしくこたふ。岸柳にくるしみを尋れば橦花變じて石あり。

關屋の邊に。布をたゝみといふ所あり。むかしせきもりの布を取たるが。つもりて石になりたるといへり。

吹よせよ清見うら風わすれ貝ひろふ名殘のなにしおはゝや

變らはやけふみるはかり清見瀉おほはし袖にかゝる涙ちは

海老はなみにおよぎ。愚老は汀にたゞよふ。ともに老て腰かゞまる。汝はしるや生涯うかべるいのち今いくほどと。我はしらず幻中の一瞬の身。かくておきつのうらをすぐれば。しほがまのけぶりかすかに。うら人の袖うちしほれ。邊宅には小魚をさらして屋上に鱗をふけり。松のむら立なみのゆるいろ。心なき心にもこゝろあらん人に見せまくほしくて。

たゝぬらせゆくての袖にかゝる波ひろまのほとは浦風も吹

岫崎といふ所は風飄々と飜て砂をまはし。波浪々とみだれて人をしきる。行客こゝにたゞさはりて。しばらくよせひくなみまをうかゞひていそぎとをる。左は嶮岳の下と岩のはざまをしのぎ行。右はかすかなる浪のうへをのぞめば眼うげぬべし。はる〴〵とゆくほどに。大わだのうらに來て。小船の沖中にたゞよへるをみる。飄帆飛で萬里風便をたのみて白煙にいり。艫波うごきて千雲夕陽をあらひて紅藍にそむ。海舘のうちに此所をのみとめて身をばとゞめず。

わすれしな波の面影立そひてすくるなこりのおほわたの浦

湯居の宿を立てはるかに行ば。千本の松原といふところあり。老のまなこは極浦のなみにしほれ。朧なる耳は長松のかせにはらふ。晴の天の雨には翠蓋のかさあれば袖をたくらず。

砂の濱の水には白花ちれども風をうらみず。行々あとをかへりみれば。前途いよ〳〵ゆかし。

聞わひぬちゝの松原吹風の一かたならすわれしほるこゑ

蒲原の宿にとまりぬ。すがごものうへにふせり。十四日蒲原を立てはるかに行ば。前路にすすみさきだつ賓は。馬に水かひて後河にさがりぬ。後程にさがりくるをのれは。野に草しきてまだこぬ人をさきにやる。先後のあはれは行旅のならひにもおもひしられてうちすぐる程に富士川をわたりぬ。此河中にこそ石をながす。巫峽の水のみなんぞ舟をくつがへさんや。人のこゝろは此水よりさかしければ。老馬をたのみてうち渡る。老馬老馬。なんぢは智有ければ。山路の雪のみにあらず。川のそこのこころもよくしりにけり。

音にきゝし名高き山のわたりとてそこさへ深し富士川の水

うきしまが原をすぐれば。名はうきしまときこゆれど。まことは海中とは見えず。野徑とは見つべし。草むらあり。木の林あり。はるかに過れば人煙片々と絕て又たつ。新樹程をへだてゝ隣たがひにうとし。東行西行の客はみな知音にあらず。村南村北のみちにたゞ山海を見る。山の頂に二泉あり。湯のごとくわくといふ。むかしは仙女が此みねにあそびて常にあり。ひがしふもとに新山と云山あり。延曆年中に天神くだりてこれをつくといへり。すべて此みねは。天漢の中に沖て人衆の外にみゆ。眼をいたゞきて立。魂恍々とほれたり。

幾としの雪つもりてかふしの山いたゝき白き高ねなるらん

問きつるふしの煙は空にきえて雲になごりの面かけそたつ

むかし採竹翁と云ものあり。女を赫奕姫といふ。おきなが家の竹林に鶯の卵子の形にかへりて巣の中にあり。翁養て子とせり。ひととなりてかほよき事たぐひなし。光ありてかたはらをてらす。嬋娟たる雨鬢は秋のせみのはね。

婉轉たる雙娥は遠山の色。一たび咲ばもゝのこびなり。見きく人みなはらわたをたつ。此姫は先生に人として。翁にやしなはれたりけるが。天上にうまれて後は。宿世の恩を報ぜんとて。しばらく此おきなが竹に化生せるなり。あはれむべし父子のちぎりの他生にも變ぜざる事を。これよりして青竹の世の中に黄金出來て。貧翁たちまちに富人となりにけり。其間英花の家。好色のみち。月卿ひかりをあらそひ。雲客色を重して。艶言をつくし。懇懷を抽て。つねにかくや姫が室屋に來會して。絃をしらべ歌を詠じてあそびたりける。されども翁姫難詞をむすびてうちとくるこゝろもなし。時のみかど此よしを聞しめしてめしけれども參らざりければ。みかど御狩あそびのよしにて。鶯姫が竹亭に御幸し給ひて。鴛のちぎりをむすび。松のよはひをひきたまふ。翁姫おもふところ有て。後日をちぎり申ければ。みかどむなしくかへり給ひぬ。かたへの天これを知て。玉のまくら。金の釵。たまきはまだ手なれざるさきに飛車くだりて天にあがりぬ。關城のかためも雲路にゑきなく。猛子がちからも飛行にはよしなし。時に秋の半。月のひかりくまなきころ。夜半のけしき風をとづれ。ものをおもはぬ人もものおもふおりふし。きみのおもひ臣の懷舊。おなじく袖をうるほす。彼雲をつなぐにつなぎ得ず。雲の色慘々としてくれのおもひふかし。風を追ともおはれず。風の聲颯々としてよるのうらみふかし。花民は奈木の孫枝なり。藥の君臣として萬民やまひをいやす。鶯姫は竹林の子葉なり。毒の化女として一人の心をなやます。方士が大眞院をたづねし。貴妃がさゝめごと。二度唐帝のおもひにかへり。使臣の富士のみねにのぼり。仙女がわかれの書。

なか／＼和君の情をこがせり。翁ひめ天にあがりける時。帝の御ちぎりさすがにおぼえて。不死のくすりに歌をかきぐして。とゞめをきたり。其歌に云。

今はとてあまのは衣きる時ぞ君をあはれとおもひ出ぬる

みかどこれを御覽じて。わすれがたみは見るもうらめしとて怨戀にたへず。青鳥をとばし鴈札をかきそへてくすりをかへし給ひけり。其返事。

あふことの涙にうかぶ我身にはしなぬ藥もなにゝかはせん

使節智計をめぐらして。天にちかきところは此山にしかじとて。富士山にのぼりてやきあげければ。くすりも文もけぶりとむすぼほれて空にあがりけり。これより此みねに戀の煙をたてたり。何この山をば不死の峯といへり。しかるを郡の名に付て富士とかくにや。彼も仙女なり。これも仙女なり。ともに戀しき袖にたまれる。彼は死てさり。これはいきてさる。おなじく別てよるのこころもをかへす。すべてむかしも今も好女は國をかたぶけ人をなやます。つゝしんで色にふけるべからず。

あまつひめ戀しおもひのけふりとてたつやはかなき大空の雲

車返といふ所をすぐ。此ところは。もし蟷螂がみちにあたりて行人をとめけるか。又若遊兒が土城をつくりて孔子に答けるか。昔小童部の路中に小家を造て遊びけるに。孔子のとをるとて。車にあやうしそこのけといさめられけるに。小童部の云。車は家の有所をよぎて過べし。いまだ聞ず家の車にさる事をと。孔子これを聞て。くるまをめぐらしてかへりにけり。若又勝母の閭ならば。曾子にあらずとも誰もいかゞとをらん。曾子は孝ふかき人にて。不孝の者のゐたる所は。車をかへしてとをらず。嶮岨の地なれば大行路といひつべし。よの道はさかしくてよくくるまをくだく。されども騎馬の客なればうちつれて通りぬ。

むかしたれこゝに車のわつらひてなかえを北にかけはじめけん

木瀬川の宿にとまりて萱屋の下にやすむ。又彼中納言和歌一首よみて。一筆の跡をとゞめ

られたり。

けふすくろ身を浮嶋か原にきてつゐの道をそきゝ定めつる

これを見る人心あればみな袖をうるほす。夫北州の千年はかぎりを知て壽をなげく。南州の不定は期をしらずして命をたのむ。誠にけふばかりとおもへどもこゝろのうちを推すべし。おほかたはむかしがたりにだも。あはれなるにはなみだをのごふ。何ぞいはんや。我も人も見し世のゆめなれば。おどろかすにつきてあはれにこそ覺ゆれ。さてもみねの梢をはらひしあらしのひゞきに。およばぬ谷の下くさまでもふきしほられて。かずならぬ露の身もをき所なくなりにしより。かくいひて命を惜みて。うせにし人のこと葉を存す。厭身は今まではありてよそにみるこそあはれなれ。此歌の心をたづぬれば。納言浮嶋が原を過とて。ものをかたにかけのぼるもの逢たりけり。とへば按察使光親卿の僮僕主君の遺骨を拾て都にかへるとなく〳〵いひけり。それをみるに。身のうへの事なれば。魂はいきてよりさこそはきえにけめ。本より遁まじきとは知ながら。をのづから虎口より出て龜毛の命もやうると。なをまたれけんこゝろに。今は終にときゝさだめて。げにうきしまが原より。我にもあらず馬の行にまかせて此宿に落つきぬ。こよひばかりの命。まくらの下のきり〴〵すとともにちぎりあかして。かく書留て出られけんこそあはれをのこすのみにあらず。無跡まで情もふかく見ゆれ。

さそなけに命もおしのつるき羽にかゝるあはれは浮嶋か原

十五日。木瀬川を立て遇澤と云野原をすぐ。此野何のさとともしらず。遙々とゆけば。納言はこゝにてはやく暇候べしと聞えけるに。心中に所作ありとしばらくとこひうけられけれ

ば。なをはるかに過行けん。まことに旅の空はいかゞものあはれなるべき。况や馬嵬のみちに出て。牛頭のさかひにかへらんずる涙の底にも。都におもひをく人々や心にかゝりて。ありやなしやのことの葉だにも。今一度きかまほしかりけん。されどもすみだ川にもあらねば。ことゝふ鳥のたよりだにもなくて。此原にてながく日の光にわかれ。冥道にたちかくれにけり。

都をはいかに花人はゐたえてあつまの秋の木の葉とはちる

やがて按察使左兵衛督有雅卿。おなじく此原にてすゐの露もとのしづくとをくれさきだちにけり。夫人つねの生なし。家つねの居なし。これは世のならひ事の理なり。されども期來て生て謝せば。理をのべて忍つべし。緣つきて家をわかれば。ならひを存してなぐさみぬべし。わかれし所はうき世なり。城の外の荒々たる野原のたびのみち。沒せん時はいまだしき時なり。うらみをふくみし悄々たる秋の天の夕の空。誠に時の災孽の遇にあへりといへども。こゝにこれ先世の宿業のむくゆる酬なり。抑かの人々は官班身を名譽のきゝをあぐ。君恩あくまでうるほして降雨のごとし。人望かたかたにひらけてさかりなる花に似たりき。中に黄門都護は家の貫首として一門の間に捷をおしひらき。朝の重臣として萬機の庭に線をとゝのへき。誰かおもひし天俄に災をくだして天命をほろぼし。地たちまちに天をあげて地望をうしなはんとは。あはれなるかな人木のとりの跡は千とせの記念にのこり。歸泉の靈魂は九夜のゆめにまよひにき。されども善惡こゝろにつよくして生死はたゞ恨なりとおもへりき。つゐに十念相續して他界にうつりぬ。夏の終秋のはじめ人醉世にごりし。其間の

妄念はさもあらばあれ。南無西方彌陀觀音。そのときの發心なをざりならずは來迎たのみあり。これやこの人々の別れし野邊とうちながめてすぐれば。淺茅が原に風たちて。なびく草葉に露こぼれ。無常の郷とはいひながら。無慚なりける別れかな。有爲のさかひとおもへども。うかりける世中かな。官位は春の夢。くさのまくらにながく絶ぬ。樂榮はあしたの露。苔のむしろにきえはてぬ。死出山路には隨はぬならひなれば。後世のうらみもいかゞせん。東のみちにひとり出て。あやうき武士にいざなはれ行けんこゝろのうちこそあはれなれ。かの冥吏呵責の場には。ひとり自業自得の斷罪に否をまき。此妻息別離の跡には。各不意不慮の横死に涙をやる。生てのわかれ死てのうらみ。ふたつながらをいかゞせん。眞をうつしてもよしなし。一生いくばくならぬ。魂を訪て足ぬべし。二世のちぎりむなしからじ。

おもへばなうかりし世にもあひ澤の水の泡とや人のきゆ覽

けふ足柄山をこえて關の下の宿にとまるべき日。暮鳥むらがりとんで。林頭に鷺ねぐらをあらそへば。山の此方竹の下といふところにとまる。四方は高山にて一川谷にながれ。嵐落て枕をあらふ。聞ばこれ松の音。霜さえて袖にあり。はらへばたゞ月のひかり。ね覺のおもひにたえず。ひとりおきゐてのこりの夜をあかす。

見し人にあふ夜の夢の名殘かなかけろふ月に松風の聲

更る夜のあらしの枕ふしわひぬ夢もみやこに遠さかりきて

十六日。竹の下を立て。林中をすぎてはるぐと行ば。千束のはしを獨梁にさしこえて。足柄山に手をたてゝのぼれば。君子松いつくしくて。貴人の風過る笠をとがめ。客雲簷にかさなりて故山のいたゞきあらたに高し。朝の間雨ふりて松のかぜ聲の虚名をあらはす。程なく

日岳□の東にのぼりて雲はやく驛路の天にはれぬ。彼山祇のむかしのうたに。遊女が口につたへ。嶺猿の夕のなきは。行人の心をいたましむ。昔青墓の宿の君女此山をこえける時。山神翁に化してうたをなしへたりけり。あしがらといふはこれなり。時に萬仭みねたかし。樹根にまとふてこしをかゞめ。千里巖さかし。苔の鬚をかなぐりて脛をのゝく。山中を胡馬がへしといふ。馬もしこにとゞまらましかば。此山をば鞍馬とぞいはまし。これより相摸國にうつりぬ。

秋ならはいかに木葉のみたれまし嵐そおつるあしからの山

關下の宿をすぐれば。宅をならぶる住民は人を宿して主とし。窓にうたふ君女は客をとゞめて夫とす。あはれむべしちとせのちぎりを旅宿の一夜のゆめにむすび。生涯のたのみを往還の諸人の望にかく。翠帳紅閨萬事の禮法ことなりといへども。草庵柴戸一生の觀念これおなじ。

さくらとて花めく山の谷ほこりなのか匂ひもはるは一とき

道は順道なれども。宿を逆川と云所にとまる。鹽のさすとき。水の上ざまにながるれば。さかはといふ。北は片岡田畯うちすきみて薄の燒おれ青葉にまじり。南は滿海蒼波わきあがりて。白馬ならびわたる。しかのみならず。前汀東西素布を長疊の浪にあらそひ。後園町段綠衫を萬きやうの竹にかり。時に暮行日脚は景を遠嶋の松にかへし。來宿踈人は契を同驛のむしろにむすぶ。彼草につなぐ疲馬は胡國を忍びて北風に嘶へ。野にやすむ群牛は呉地にならひて夜の月に喘。棹歌數聲舟船を明月峽のほとりによせ。松琴萬曲琵琶を尋陽江の汀にきく。一生のおもひ出今夜の泊りにあり。

行とまる磯邊のなみのよるの月旅れの袖にまたやとせとや

十七日。逆川を立て平山を過て。高倉宰相中將範茂。笞峯山のうみじり急河と云淵にて底の

みくづとしづみにけり。つら〳〵其むかしをおもへばあはれにこそおぼゆれ。日本國母の貴光をかゞやかす光の末に身をてらし。天子聖皇の恩波をそゝぐ波の雫に家をうるほす。羽林のはなあらたにひらけ。はるにあへるにほひ天下に薫じ。射山の風あたゝかにあふぐ時にあたるひゞき遠近にふるふ。圓らざるや榮木山風たゝきて其はなちりとなり。逝水ながれ急にして其身泡ときえんとは。連枝の契かたえはやくおれぬ。家苑の地あとむなしくのこれり。紕緺のむつび一類をならべず。他郷の水おちてかへらず。一生こゝにつきぬ。此河は三家の水口たるか。いふことなかれ水こゝろなしと。なみの聲鳴咽して哀傷をなす。

なかれ行てかへらぬ水のあはれにも消にし人の跡と見ゆ覽

此つぎにあひ尋れば一條の宰相中將信能卿。美濃國遠山といふところにて露の命をかしてける。夫洛中にわかれて維し日。家をはなれしうらみいよ〳〵惡業のなかだちたりしかども。たびのみちに手をひらけしときに家を出しよろこび還て善縁のすゝめにあへり。たなごころをあはせ念をたゞしくして。魂ひとり去にけり。臨終の義を論ぜば往生ともいふべし。西方には聖衆定て九品の寳蓮にみちびくらん。彼羽化をえて天闕にあそびしは。八座のむしろ家門のちりをうちはらひ。虎賁を兼て仙洞にわしる。累葉の花賓枝の風に綻びき。傷哉平日のかげ盛にして。未西天の雲にかたぶかざるに。壽堂の扉ながくとぢて。北邙の地にうづむことを。花の床をなにかざりけん。跡にとまりて主なし。親族はかなしめどもよしなし。旅に出てひとり心ざしぬ。楊國忠が他界にうつりし。しらず人のうらみをなすことを。平章事の遠山にほろびし。おもひやりき身のかなし

みをふくみなんことを。彼東平王の舊里をおもふ墳上の風雨になびく。誠にさこそとあはれにこそは覺ゆれ。

おもひきや都を夜半にわかれ路の遠山野へに露きえんとは

夫人のうまれたるは。庭におつる木葉の風にうごくがごとし。風やみぬればうごかず。死と思へば旅に出る行客のやどにとまるがごとし。こゝにわかれぬといへども。かしこにはうまれぬ。たゞ煩惱のうらみのみさる事をかなしみ。愚痴の心をしらざる事をうらむべし。はやく別れをおしまん人は。再會を一仙の國に約し。恩をこひんひとは。追福を九品のみちに訪べし。

今更になになけく覺未の露もとよりきえん身とはしらすや

大磯のうら小磯のうらをはるぐ〵とくれば。雲のかけはしなみのうへにうかみて。かさゝぎのわたしもりあまつ空にあそぶ。あはれさびしきたびの空かな。ながめなれてや人はゆくらん。

大磯やこいそのうらのうら風にゆくともしらすかへる袖哉

さがみ川をわたりぬれば懷嶋に入。砥上が原を出。南のうらを見やればなみのあやをりはへて白き色をあらひ。北原をのぞめば草の綠そめなし淺黄さらせり。中に八松と云所あり。八千歲のかげにたちよりて。十八公の榮をさかりにす。

八松のやちよのかけに思ひなれてとかみか原に色も變らし

固瀨川をわたりて江尻の海汀をすぐれば。江の中に一峯の孤山あり。孤山に靈社あり。江尻大明神と申。威驗ことにあらたにして。御前を過る下り船は上分を奉る。法師はまいらぬときけば。そのこゝろをたづぬるに。むかし此邊の山寺に禪僧有て法華經を讀誦して夜をあかし日をくらす。其時女の形出來て夜ごとに聽

聞して。あくれば忽然としてうせぬれば其行方をしらず。僧これをあやしみて糸を搆てひそかに裾につけにけり。あくる朝に糸をたゞしてみれば。海土にひかれてかの山にいたりぬ。巖穴に入て龍尾につけたり。神龍顯形して後。僧にはぢてこれを入ずといへり。夫權現は利生のすがたなり。化現せば何ぞすがたにはばからん。弘經は讀誦の僧なり。經を貴みば何ぞ僧をいとはんや。ふかきちかひはうみにみてり波にたるゝあとは慈悲。跡は天に知れたり雲にひゞくこゑ。されども神慮は人しらず。きねがならはしにしたがひて。ふしおがみてとをりぬ。

江のしまやさして鹽路に跡たるゝ神は誓ひの深きなるへし

路の池に高き山あり。山のみねかぶろにて貴からずといへども。恠石ならびゐて興なきにあらず。歩をおさへて石をみればむかしかの堀うがちたる磐どもなり。うみも久しくなればひるやらんとみゆ。腰越といふ平山のあはひを過れば稲村といふ所あり。さかしき岩のかさなりふせる濱をつたひ行ば。岩にあたりてさきあがる浪のはなのごとくにちりかゝる。

うき身をはうらみて袖をぬらすともさしもや波に心ゝたかん

申の斜に湯井の濱に落着ぬ。しばらく休みて此所をみれば。數百艘の舟どもつなをくさりて大津のうらに似たり。千萬宇の宅軒をならべて大淀のわたりにことならず。御靈の鳥居の前に日をくらして後。若宮大路より宿所につきぬ。月さしのぼりて夜も半に更にければ。をきたる老人おぼつかなくおぼえて。

都には日をまつ人を思ひをきてあつまの空に月を見る哉

鷄鳴八聲のあかつき。旅宿一寢のゆめさめて。たち出見れば。月の光屋上の西にかたぶきぬ。

思ひやる都は西にありあけの月かたふけはいとゝこひしき

十八日。此宿の南の軒ばに高き丸山あり。山の下に細き小川あり。峯のあらしこゑ落て夕の袖をひるがへし。瀞水ひゞきそゝぎて夜の夢をあらふ。年比ゆかしかりつる所か。いつしか周覧相もよほし侍れども。いまだ旅なれば今日はむなしく暮しつ。相知たる人は一兩人侍るを頼て。物など申さんとおもふ程に。たがひてなければ。いとゞたよりなくて。

頼めつる人はなきさのかたつ貝逢ぬにつけて身を恨みつゝ

さらぬ人はおほけれども。うとければ物いはず。其中にふるき得意ひとりありて。不慮の面談をとぐ。往事の夢に似たる事をあはれみて。次にむかしにかはる事をなげく。たがひに心懐を述て暫相語る。其後立出てみれば。此ところの景趣は。うみあり山有水木たよりあり。廣きにもあらず狹にもあらず。街衢のちまたはかた／＼に通ぜり。實に此聚おなじ邑をなす。郷里都を論じて望まづめづらしく。豪をえらび賢をえらぶ。門揶しきみをならべて地又賑り。をろ／＼將軍の貴居を垣間見れば。花堂たかくおしひらいて翠簾の色喜氣をふくみ。朱欄妙にかまへて玉砌のいしずへ光をみがく。春にあへる鶯のこゑは好客堂上の花にあざけり。あしたををくる龍蹄は參會門前の市に嘶ゆ。論ぜず。本より春日山より出たれば。貴光たかく照て萬人みな瞻仰。士風塵をはらふ威驗遠く誡て四方こと／＼く聞きにおそる。何ぞ況や。舊水源すみまさりて。清流いよ／＼遺跡をうるほし。新花榮鮮にひらけて。紫藤はるかに萬歲をちぎる。凡座制を帷帳の中に廻て。徵集郡國の間につゞめたり。しかのみならず。家室は扃をわすれて夜の戸をおしひらき。人倫は心を調てほこるともほこらず。愚政の至

り治りて見ゆ。
夜の戸ものとけき宿にひらく哉曇らぬ月のさすにまかせて
此緣邊に付ておろ〳〵歷覽すれば。東南の角一道は舟檝の津。商賈の商人百族にぎはひ。東西北の三方は高卑の山風のごとくに立廻て所をかざれり。南の山の麓に行て大御堂新御堂を拜すれば。佛像烏瑟のひかり瓔珞眼にかゞやき。月殿畫梁のよそほひは金銀色をあらそふ。次にひがし山のすそに臨て二階堂を禮す。是は餘堂の踔躒して感歎をよびがたし。第一第二の重檐には。玉のかはら鴛の翅をとばし。兩目兩足のならび給へし臺は。金の盤鶴燈をかゝげたり。大方魯般意匠窮て。成風天に望むにすゞしく。毗首手功をつくせり。發露人の心にもよほす。見れば又山に曲木あり。庭に恠石あり。地形のすぐれたる佛室と言つべし。三壺雲に浮べり七萬里の浪池邊によせ。五城霞に峙り十二樓の風階の上にふく。誤て半日の客たりうたがふらくは七世の孫に逢ん事を。夕にをよんで西に歸りぬ。鶴岡にとて鳩宮にまいらず。あけの玉がき金鏡に映じ。白妙のにしき幣風にそよめき。銀の鐺は朱檻をみがく。錦のつゞれははなにひるがへる。しばらく法施奉て瑞籬に候すれば。神女がうたの曲は權現垂跡の隱教にかなひ。僧侶の經のこゑは衆生成道の因緣を伸。彼法性の雲のうへに寂光の月老たりといへども。若宮の林の間に應身の風あふぎてあらたなり。
雲のうへにくもらぬかけをおもへとも雲より下に曇る月哉
月のひかりにたゝずみて。石屋堂の山のこなゑはるかにながめていぶせくかへりぬ。適下向なれば遊覽のこゝろざし切々なれども。經廻わづか一旬にして。上洛すでに五更になりぬれば。なごりのむしろをまきて出なん事を

いそぐ。時に晩鐘のうちおどろかせば。永しとおもひつる夏の日もけふはあへなく暮ぬ。一樹のかげの宿緣あさからず。拾謁のむつび芳約ふかき人あり。

きてもとへけふはかりなる旅衣あすは都にたちかへりなん

返し。

旅衣なれきておしき名殘にはかへらぬ袖もうらみをそする

五月のみじか夜。時鳥の一聲の間にあけなんとすれば。菖蒲の一夜のまくら。再會不定のちぎりをむすびて出ぬ。

かりふしのまくらなりとてあやめ草一よの契思ひわするな

湯非の濱をかへりゆけば。なみのおもかげ立そひて。野にも山にもはなれがたき心ちして。

なれにけりかへる濱路にみつしほのさすか名殘にぬるゝ袖哉

人をたのみてくだるほどに。たのむ人にはかにのぼりなんとすれば。身を無緣のさかひにすてゝ。こゝろざしを有緣のうちに便宜あらば善光寺へ參るべきよしおもへり。とげばやと存れども。花京に老たる母あり。嬰兒にかへりて愚子をしたひ待。異鄕にうかれたる愚子は。萬里をへだてゝ母をおもひをく。斗藪のためにいとまをこひて出しかども。我をすつとやうらむらん。無爲に入ば眞實の報恩なれども。有爲のならひはうときにうらみあり。本よりおもはず東部の經廻を。今はいよ／＼急ぐ西路の歸願。彼最後の今に逢事は先世の緣なれば。座したりとも逢ひなん。逢ともきたりなん。たゞちぎりの淺深に依てこゝろざしの有無にまかせたり。悲らくは親も老たり子も老たり。いづれかさきだちいづれかおくれん。たゞなげく所は母山の病木八旬の涯に傾て一房の白花いまだひらけざるに。子石のがれたる苦み。半白の波におぼれて一滴の雫いまだ汲ざることを。朝に看夕にさだむ。こゝろざしとげずしてやみなば。佛に祈

り神に祈る。功それいかゞせん。我きく佛神は孝養のために擁護のちかひをおこし。經論は報恩のために讃嘆のこと葉をのべたりと。壯齡のむかしは將來をたのみて天に祈りき。衰邁の今は先報をかへりみて身をうらむ。もしこれ不信の雲におほはれて感應の月顯れざるか。もしこれ過去の福因をうへずして現在の貧果を得たるか。先報によるべくは。佛のちかひたのむやいなや。誓願によるべくは。我孝なんぞむなしき。信否ともに感じて妄恨みだりにおこる。天眼あひなだめて哀みをたれ給へ。悲母の目前に中懐を謝して白髮をおとし。愚子が身のうへには本望をとげず黑衣をきる事を。夢の間の筭はたとひ一旦の雪にもとめうしなふとも。覺路の蓮はかならず九品の露にひらきをくらん。子養は子のこゝろざしにつくす。風樹は風の恨のこす事なかれ。

いかにせん結ぶ此身をまたずして秋にはゝそのおつる山風

東國はこれ佛法の初道なれば。發心の沙彌ことさらに修行すべき方なり。この故に本方朝發の因地より萠して。金剛極證の果門を開かんとおもへり。觀夫けがらはしき濱路を過行だにも。白砂なをおもしろく見ゆ。まして極樂金繩のみちにおもひやるもゆかしけれ。銀樹七重の風無苦のこゑをしらべ。紫蓮千葉の色に染。功德の池には水煩惱のあかをあらひ。善根のはやしには樹菩提のこのみをむすぶ。ゆゐたる宮殿は十方に飛て居ながらすぐ。ことに利生を約諾す。生る人はみな說法集會の場にまじはりて無量の命を延年し。來るむかしは悉見佛聞法の室に誇て不退の樂に快會す。久遠世々の父母は珍本覺の如來に顯れ。過去生々の妻子はなづかしくて新來菩薩にむすびたり。法喜禪悅の味は口のうちにみち。端嚴殊

妙のかざりは身のうへにそなはれり。をよそ三十一金の月胸にはれ。第一義空の水心にすめり。此故に無始來のねぶりはゆめながくさめ。六趣輪の冥は盲眼ひらけたり。彼無常念王の古郷を忍ぶちぎり娑婆にあつく。法藏因位の舊臣を顯れんこゝろざし我等にふかし。此に依て九品覺王の善政をたるゝ一念。奉公の輩ならびに平等引接の賞にあづかりて。諸天薩埵の僉議をなす。六賊重罪の犯却而皆空無漏の旨を奏す。七寶の高臺には四十八願の主五劫思惟のひかりをはなちて念佛のものをてらし。二脇片座には三十三尊大悲弘誓のあみをたれて苦海の沈沒をすくふ。故に三世の佛の濟度にもたれる五逆の罪人も。願海不捨の舟に棹さして彼岸にわたり。十方土の淨刹にすてられたる此界の惡從も。大雄起世翅にかかりて西天に飛ん。あはれとく生れてみちに入ばやな。

なみ風もみのりの聲なとく聞て見ゐめくるしき海な出はや

迷ひきて又まよひこんかりのやとになかくかへらん道にかへ覽

東國にさまよひ行子あり。本のみやこを別てかりのやどにふせり。西刹に訪尋る母います。あはれ〳〵もとめて彼國に導を其母といます。佛は三字の名號を子どもにさづけて。三因佛性のかくれたるをよび出し。十念の來迎を最期にちぎりて。十地證王の位につく。信力よはきものには他力をあたへてこれをすくふ。たをれふしたる赤子を親のいだくがごとし。念緖つよき願緖にすがりてみづからすゝむ。驥につく蠅の千里に翔るがごとし。されども具轉(纏カ)の浮身は一榮の肴にすゝめられて三毒の酒に醉ふす。世路の嶮難につかれて佛界の正道にまよはず。妻子をおもふ心冥にくらまされて心佛のひかりをへだてたり。菩提の鹿は

罪業の山にかくれて駈どもいまだ出ず。煩惱の虎は功德のはやしを別て追どもかへらず。睡眠の闇にはあかつきのかねの聲うちおどろかせども諸行無常の告をさとらず。遊戯の床には暮の日さしおどろかせども分段の有爲のことはりわきまへず。老少不定の悲は眼にさへぎりて雲のごとくにさはげども心空にしておもはず。先後相違のわかれは耳にみちて風のごとくにひらけども聞つれなくしてあはれます。老たるは老たればいよ／＼餘命をおしみ。わかきは若ければ實に將來を期す。其間山水邊にながれて倶に泉にかへる。風煙命滅て忽に冥途にまどひ。又貯持財はおしめどもになはず。養居僮僕は哭すれども隨はず。終に天使にめされて地獄に落ぬれば冥路山さかし。嬰兒のあゆみにたゞよひてひとり行黄泉水はやし。單己のわたりに溺て身をながす。かなしきかなかなしきかな。獄卒の呵責にかかりて後悔魂をくだき。琰王の斷罪にをのゝきて前非の舌をまく。惡行はぢをあらはす鏡の中の影。自業のむかへは陳じがたし机上の文。嗚呼十八猛鬼の忿怒といかれる聲。天雷のおちかゝるがごとし。六十四眼の睚眦とにらめる。熱鐵のほどばしるに似たり。逃とすれども逃るにむなし刄のふるところ。よけんとすれどもよけられず焰にむせぶとき。心うきかな猛火の薪となりて萬億歳罪根山の林夏ひさし。寒嵐の水に沈で無量刧業報池の水春に別たり。我等が前罪こゝに謝せずば。後悔またいかゞせん。こゝろあらん人たれかかなしまざらんや。

見れはにやいたき心もなかるらんきくも身にたつ劔はの枝

但極樂西方にあらずをのれが善心のますにあり。泥梨地のそこにあらずをのれが惡念の心

地にあり。彌陀うとき佛にいまさずみづからが本有の眞性にあり。獄卒しらぬ鬼にあらずみづからが所感の業亂にあり。雪つもりて山をなす春の日にあたればきえてのこらず。金くだけて灰にまじる水に入て汰はうする事なし。罪雪ならば善心あらはれぬべし。まよへる時は日をふさぎてわが身をだにも見ず。さとるときは眼をひらいて人の躰をみる。障子をへだてゝあなたは十萬億土とおもへども。ひきあけたればたゞ一間のうちなり。佛性の水煩惱の風に氷れども。おもひとけば水とは誰かしらざらん。貧とも嗟べからず。電泡の身にいくばくのなげきぞや。たのしめどもおごるべからず。幻化の世にはいくばくのあやまりぞや。たのしみは大憍慢のあだなり。あだはすなはち惡趣に引おとす。貧は又道心のさまたげならず則善所に引あげ。たのしみは先生の怨敵なり。貪着身をしばりて四生の牢獄にこむ。貧は今生の智識なり。愛欲心をゆるして三界の樊籠を出す。此故に世をいとふ人は沙門となづけてたのしめる人とす。我等八苦のやまひはおもけれども念佛のくすりにいへぬべし。名利の敵はうかゞふとも非人の身を敵とせじ。上界天人の快樂もこゝろにくからず。過去生々にいくたびかうけたる。國王大臣の果報もうらやましからず。流來世々のいくたびか得たる。六趣の栖はうとみはてたるところなり。九品のみやこぞいまだ見ねば戀しけれ。こひしくばたれか參らざるべき。たま〳〵人身をうけたるは梵天の糸に針をつけえたる時なり。佛法の敎木龜眼の語に信じ得る時なり。これだにもありがたしと思はゞ。十方佛土に又ふたつなき一乘妙法に生れあひて。十惡をうとまず引接をたれたまふ阿彌陀佛を念じ

奉るは。口のあればたゞにとなへゐたるか。耳のあればたゞに聞ゐたるか。あなあさましのやすさや。無始生死の間にちりの結緣つもりて泰山となる。露の功德たまりて蒼海とたゝへて。善根林をなし。機感時をえて。今生を生死の終りとし。當來を解脫のはじめとする人。此ときに生れて此緣にあひたり。故に慈父の長者は貧子どもの爲に福德の經を說て化一切衆生とこしらへ。みな皆令入佛道とよろこび。悲母の敎主はよはき子共のために誓願を發して此願不滿足と否をのごひ。誓不成正覺と口をはく。こゝに知ぬ此南浮は西方の出門なりといふことを。道心はたとひかたからずとも。慙悔の箒をつかねて常に心を淸めん。然ば則さくら花えだにこもり。春の候を迎て開なんとす。佛種胸にうづもれ。終のときに臨て宜くきざすべし。抑これは羇中の景趣にあらず。存外のあさき狂言なり。然而魚にあらずは魚のこゝろをしるべからず。我にあらずは我心ざしを悟るべからず。駿跡の千里にはするも。駑駘の咫尺に蹇くも。心ざしのゆくほどはいたる所たがはず。大風の雲にかけるをうらやみて。小鳥のまがきにあそぶばかりなり。此品家を出し始。道に入し時。身のあはれに催されて。人の嘲をかへり見ず。愚懐のためにこれを記す。他興のためにこれをかゝず。あざける人。あはれむ人。順逆の二緣ともに一佛土に生れて。一切衆生をすくはんとなり。

開くへき胸のはちすのたくひには春まつ花の枝にこもれる

かはらしな濁るもすむも法の水ひとつ流とくみてしりなは

南海流涙記

道範阿闍梨

仁治三年壬寅七月十三日。本寺訴詔經二年月一而不レ達。末院凶惡。忘二本末一而興盛之間。本寺衆徒企二發向一欲レ治二罰彼凶黨一之處。天火自然出。順風欻爾起。一院須臾成二灰燼一了。同月末。公家被レ召二當寺撿挍一。卽八月始企二上洛一。卽被レ召二其惡行張本一之旨。注二進彼骨張十人交名一了。此十人付二長者一悉被二召上一了。同年拾月末。任二傳法院注進交名一。本寺宿老等廿六人。召符被レ下レ之。十一月十八日。參二六波羅一之處。卽各被レ預二武士一了。同下旬。日々有二兩方對問一。傳法院巧言二龜毛一。條々構二申詐僞非論一。雖レ然空花濫訴故。一々無實之旨顯申。如二對決一者。不レ可レ及二罪科一之由令二謳歌一之處。仁治四年正月之比。三十餘人悉可レ處二配流一之由令二風聞一。爰宿老等都迷二子細一。忽亡二東西一。以二一兩惡行一口被二押懸一。宿老者不レ可レ及二一言問答一。就二兩方一理非可レ被二糺明一者。不レ可レ處二刑罪科一。是只所詮當二彼一院磨滅時運一。感二此宿老等最惡之業一歟。唯察二因果理一。勿レ生二怨恨思一矣。同四年正月廿五日。各被レ預二配流國武士一了。道範流二讃岐一。守護所不レ在二京一間。付二淡路守護所四郎左衞門尉一可レ令レ下二國一之由有二其沙汰一。卽正月卅日。出レ都宿二久我一。二月一日乘船。宿二神崎橋下一。過二淀渡一之時。遙花洛之方ヲ瞻望シテ。

都なは霞の餘所にかへり見ていつち行らん淀の川なみ

同二日。神崎ヲ立。筒井ニ至ル。路間五里。小屋福原ヲスグ。

同三日。筒井ヲ立。石屋渡ヲ渡テ宿二石屋一。路間六里餘。スマタルミヲスグ。スマノ浦ノ氣色。マコトニ月ノ名所トミエタリ。東南ノ氣色霽テ。出レ山之淸光可レ望。西北ノ海遠シテ。入レ浪之曉月可レ見。

なかれ行身にしあらすはすまの浦とまりて夜はの月は見てまし

同日。夕方巡ニ見石屋幷繪嶋。青巖之形。緑松之躰。碧潭之色。晩嵐之聲。其感興忘ニ愁緒ヲ一了。卽繪嶋ノ明神詣シテ法施法樂。

見るはかりいかゝ語らむ繪嶋潟むへしな神はこゝにすみける

四日。石屋ヲタチ乗船。瀧ノ口ニイタリテヲル。海路七里。海路之様。西ハ淡路嶋。臨行バ奇巖滑石宛モ如レ見ニ山水ノ東千里。青山ダモハルカニ遠シ。其中ニ眺望末ニアタリテ。幽ニ高野山ミユ。山門寺中ノコトナムドモオモヒヤラレテ。アハレニオボエテ。舟中ノ人々ニアスヨリハ高野ノミユル所ハ有間敷歟ト問バ。淡路山中ニ入候ナバ高野ノミユル所ハヨモ候ハジトイフヲ聞テ。

はなれくる高野の山の霞をもけふはかりやはなかめ暮さん

同日。船ヲ下テ。陸地三里行テ。淡路國府ニ至テ中一日ヲ經タリ。石屋宿ニテハ淡路配國人同道同宿之間。互世出世之事等相談シテナグサム事アリ。件人ハ瀧ノ口ニトヾマリヌ。又此八木ノ宿ヨリハ只同朋一兩輩許也。羇旅ノ思マコトニ心ボソシ。

さらぬたにねさめおほかる草枕まとろむ夢を吹嵐哉

六日。國府ヲ立三里行て。フクラノトマリニ至ル。風あしくして三ケ日逗留。西風ハゲシク時時雪フヾキスサマジク物アハレ也。

與津風ふくらかいそにひかすへてならはぬ涙にぬるゝ袖哉

行さきもわかふるさとにあらなくに爰を旅とは何急くらん

十日。フクラヲタチ阿波ノ戸ヲワタリテ佐伊田ニヲル。海路三里餘。シマ〳〵入江々々ノ有様。悦レ目養レ意。舟ヲヲリテ阿波國坂東郡大寺ニ宿ス。

十一日。大寺を立て。大坂をして。讃岐あいの中の山なる大津賀ニイタル。路間九里餘。

十二日。サヌキノ國府ニイタル。路間六里。廳

沙汰トシテ有ニ祗候ノ。次日六里傳馬。

十三日。國府ヲ立。讃岐ノ守護所長雄二郎左衞門ノ許ニ至ル。路間二里。次朝淡路使者カヘル。淡路ニ留る人ノ許ヘ。其國ヨリ以來。多ノ山海ヲ渡流浪之事。幷老後流刑之事。返々モ不レ計之由ナムド申テ。

天か下なとすみそめの袖ならんおひのなみにも流れぬる哉

十四日。守護所之許ヨリ鵜足津ノ橋藤左衞門高能ト云御家人之許ヘ被レ預。

十五日。在家五六丁許引上リテ。堂舍一宇僧房少々有所ニ移シスヘラル。此所地形殊勝。望レ東孤山聳ニ夜月ノ勸ニ月輪觀之思ノ。顧レ西遠嶋含ニ夕日ノ催ニ日想觀之心ノ。後松山聳ニ海中ノ。至ニ前潮滿時ノ砌近指入ル。

さひしさはいかてたへまし松の風浪も音せぬすみか也せは

サテ常ニ後ノ山ニ登リテ。海上嶋々ヲ眺望。爲ニ海中鱗類ノ作ニ自性能加持之法ノ。有レ時浦ニ出テ昔向山々ヲ問ヘバ。備前小嶋。備中。備後迄見え渡ル。小石ニ光明眞言等ヲ出テ海中ニ入ル。寶篋印ダラニヲ誦シテ鱗類ヲ離苦海ニ廻向ス。或時山ニノボリテミワタシテ。

うたつかたこの松かけに風立は嶋のあなたもひとつ白波

三月廿一日。善通寺ニ詣テ大師聖跡ヲ巡禮ス。金堂ハ二階七間也。靑龍寺ノ金堂ヲ被レ摸トテ。二階ニ各今少引入リテモ。コシアルガ故。打見バ四階大伽藍。是ハ大師御建立。于レ今現在せり。御作丈六藥師。三馬四天王像イマス。皆埋佛。後壁ニ又藥師三馬半出ニ埋作ラレヌリ。七間講堂ハ破壞後今新造營。五間常堂同新造立。大師御建立二重寶塔現存。本五間。今ニ修理ニ之間。加ニ前廣廂一間ニ云々。於ニ此内ニ奉レ安ニ置御筆御影ノ。此御影ハ大師御入唐之時自圖レ之奉レ預ニ御母儀ニ云々。同等身像云々。大方樣如ニ普通御影ノ。但於ニ左之松山ノ上ニ釋迦如來影現形

像有レ之云々。凡此善通寺ノ本ハ四面各二町。其内種々堂舍寶塔。灌頂院。護摩堂。嚴重羅列。今ハ皆破壞シテ纔礎石許在レ之。御筆之額二枚有レ之。皆善通之寺トアソバサレタリ。其外大寶樓閣ダニニアソバシタル額二枚有レ之。皆破損云々。抑善通之寺ハ。大師御先祖俗名。卽爲ニ寺號一云々。破壞之間。大師修造建立之時。不レ被レ改ニ本號一歟。金堂之西有ニ一直路一。一町七反許者。則自ニ寺中一參ニ御誕生所一之路也。則參詣拜ニスレバ之一。正御誕生所ニハ石高ク廣疊タリ。今如法經奉レ納レ之。七重石塔有レ之。大樹少々有レ之。拜見之間。戀慕恭敬。催レ淚拆レ膽。

高野山岩のむろ戸に澄月のこゝふもとより出けるかさは

此御誕生所ハ。西方ニ五岳山ト云テ。五佛之高山ノアル其麓也。同日午刻。於ニ講堂一有ニ法花講一大師御報恩云々。其後有ニ童舞一云々。其日及ニ晚景一不レ能ニ還向一。卽通ニ夜御影堂一云々。翌日宇足津ニ歸。寬元元年九月十五日。善通寺移住ノ寺僧等。兼テ大師御誕生所傍ニ庵室ヲ構テ〆マヘリ。同月廿一日大師至ニ御行道所ニ一。世號ニ世坂參詣。其路嶮岨嵯峨。老骨雖ニ攀昇一只人ニタスケラレテ登イタル。此行道ノ路ニハ于レ今草不レ生。淸淨寂寞タリ。南北諸國皆見テ眺望疲レ眼。此行道所ハ五岳中岳。我拜師山西岫也。大師此處ニ觀念經行之間。中岳靑巖綠松。已釋迦如來乘レ雲來臨影現タマフ。大師拜ミ玉フ故。云ニ我拜師山ト一也。此行道所ニ數剋。大佛頂寶篋印等陀羅尼ヲ滿眼ノ所レ及海生山獸等ノ養生ニアツ。如來影現事貴目出覺テ。

わしの山常にすむなる夜半の月來りて照す峯にそありける

十月之比南大門ニ出テ。南方名山等眺望。南大門前ノ路。弘三丈五尺。長八町。左右ニ率都婆多立レ之。其門東脇ニ古大松アリ。寺僧云。昔西行此松ノ下ニ七日七夜籠居テ。

ひさに経てわか後の世をとへよ松跡忍ふへき人もなき身そ
とよめるによりて。此松ヲハ西行ガ松ト申也
ト申ヲキヽテ。
契り置て西へ行ける跡にきてわれもおはりをまつの下風
寛元二年甲辰正月之比。當寺ノ童舞装束被レ調事
并會ノ日發願文事。同六月十五日夜。多度郡因
所入道號二堀池入道隨佛一夢想ニ云。御誕生所ノ石壇南邊
ニ大ナル蓮花生タリ。葉ノ長六尺許。大衆合
許。初ハ合テ漸開。其色其香美甚妙也。諸人集
會シテ拜二見之一。隨佛作二奇特之想一。問云。是何
ナル蓮花ゾ如レ是大ニ妙ナル。人答曰。是ハ高
野上人御房蓮花云々。合掌瞻得シテ夢覺了。同
八月之比。淡路國ナル人ノ許ヘ修行者ノ便ニ
文ツカハス狀ニ。此離山三年ニナリ。在國兩歲
ニナル事。本山戀慕。羈旅艱難。定同心歟。抑其
淡路嶋ハ。高野ノ大門マデチカ〳〵トミエ侍
レバ。其國ニテモ南山ハサハ〳〵ト見侍ラム。
浦山敷コトトテ。
君はなをみてやなくさむはなれぬるたかのの山の峯の白雲
サテモ又此居所ハ大師御誕生ノ座跡ナレバ。
御建立ノ伽藍于レ今少々現存。就中大師御眞筆
ノ御影常ニ拜見。是愁之中ノ喜ナル由申テ。
よに出てゝみつからとむる影よりそ入にし月の形をも見る
以上兩首の返し。淡路。
高野山みねの白雲跡たえてむなしき空に雨そこほるゝ
入月もひかりや共にならふらむみつからとめし影にうつりて
寛元三年十月廿一日。出雲國配學圓房阿闍梨
法性延白ザリ。已死門之命藉以二廿一日一爲二開
眼之期一。是大師引接炳然歟。同十二月十八日。
自二本山一告二遣之一。聞レ之周章悶亂。悲泣哀慟。
彼阿闍梨者自二少年一同學也。交如二芝蘭一。既同二
膠漆一。加レ之受二傳法灌頂於先師法眼和上位一。既
爲二祕密血脈一門一。顯密因縁旁以深。離別哀傷
豈以淺乎。仍自二同十九日一始二行阿彌陀護摩一
五十ケ日。泣資二彼菩提一。其後自行ニ念誦等ニ之

時。爲ニ廻向隨一ー。是爲レ蒙ニ彼還來引接ー也。彼安養無常。此出雲電光。哀傷一意。

かた〳〵のもとのしづくは散ぬ也いつか我身のすゑの白露

同年十二月十六日。高野淨菩提院阿闍梨覺尙禪房。者。十一月廿五日逝去之由。同月來テ告グ。未レ聞ニ終其詞ー。嗚呼悶絕。彼阿闍梨者。花王法水眞源禪林敎風傳心因之事。相敎相互間ニ蒙霧ー。世間出世俱無ニ內外ー矣。彼賢哲者愚質ニ紀之法弟也。而冥途前後。泣而有レ餘。凡一山學徒滅ニ法燈ー失ニ惠日ー。爲レ之如何々々。筆與レ淚相和記レ之。

たかの山流れし水もかれぬめり草木はいかゝたれなきさゝむ

寶治二年戊申四月之比。依ニ高野二品親王仰ー奉レ摸ニ當寺御影ー。此事去年雖レ被レ下ニ御使ー。當國無ニ淨行佛師ー之由依ニ申上ー。今年被レ下ニ佛師成祐ー。鏡明房。奉レ摸ニ寫之ー。所詣佛師四月五日出京。九日下ニ着堀江津ー。同十一日當寺參詣。同十三日作ニ紙形ー。當日於ニ御影堂ー佛師按ニ梵網十戒ー。其後始ニ紙形ー。自ニ同十四日ー圖繪。同十八日終ニ其功ー。所レ奉レ摸□御影。其御影形色毫釐モ無レ違ニ本御影ー云々。同十八日依ニ寺僧評議ー。今此佛師改押ニ本御影之裏ー加ニ御修理ー云々。已上此等間不レ出ニ御影堂ー。佛師下着之時。院主綱一定。三昧各淺黃一切給レ之。凡此御影者。當寺之古老相ー傳之ー。大師御入唐時。爲ニ御母儀ー自摸ニ置我影像ヲ一。爲ニ告面之孝ー御ス云々。

此御影堂上洛事。

承元三年隱岐院御時。立佐大臣殿當國司之間。依ニ院宣ー被レ奉レ迎。寺僧再三曰。上古不レ奉レ出ニ御影堂ー之由。雖レ令レ言ニ上子細ー。數度依レ被ニ仰下ー。寺僧等頂ニ戴之ー。上洛御拜見之後。被レ奉レ摸レ之。繪師御下向之時。生野六丁免田寄進云々。嘉祿元年九條禪定殿下攝錄御時奉レ拜レ之又摸ニ寫之ー。御下向之時。免田三丁寄進云々。

同年六月二日御上洛。同十五日高野參着。即御拜見御歡喜云々。同十八日御報書云々。御影無爲ニ奉レ渡事返々悅入候。宿善開發數及ニ落淚一。心中可レ被レ察レ之云々。

同年十月廿七日。伊與國寒川地頭小河六郎祐長。建ニ立一堂一。三尊供養導師勤レ之。彼路頭ニ比女ノ八幡ト云所アリ。讃岐ノ內。其所ニ大楠ノ木ノ本ヲ半出ノ阿彌陀佛ニ造テ堂ヲツクリオホヘリ。其木ノ末ハ大ニサカヘテカレヌ。

楠の木も本のさとりをひらきつゝ佛の身とも成にける哉

同廿八日舞樂。同廿九日。還向ノ次ニ琴曳ト云宮マウデ。讃岐內。此宮ハ昔八幡大菩薩筑紫ヨリ此處ニヲチツキテ。京ノ八幡ヘトワタラセ給。其御舟ノ船ト御琴トヲ宮內ニツクリコメタリ。サテ琴曳ト云。山ガラ京ノヤハタノ山ノ形也。三面ハ海也。殊勝地形。

松風にむかしのしらへかよひ來て今にあとある琴ひきの山

同年十一月十七日。尾背寺參詣。此寺大師善通寺建立之時杣山云々。本堂三間四面。本佛御作藥師。三間御影堂。御影幷七祖又天台大師影有レ之。同十八日還向。依ニ路次一參ニ詣稱名院一。眇眇松林中有ニ九品庵室一。本堂五間。彼院主念々房持佛堂。松間池上地形殊勝。彼院主他行之旨。追ニ送之一。

九の草の庵と見しほとにやかてはちすのうてな成けり
九つの草の庵もとめなきし心いさなへうみのにしまて

念々房返。

むすひおく草の庵のかひあれは今ははちすのうてなとそ聞
九つの草の庵にとゝめけん君か心をたのむわか身そ

稱名院への愚狀ヲ三品房ノ許ヘ相送タリケル。其返狀ニ云。

善通寺御札。加ニ拜見一令ニ返上一候。彼歷覽之時不ニ參會一候之條。生前遺恨候。猶々御光臨候。今我願充滿。衆望亦可レ足候者也。兼又二首御詠。萬感無レ極候。捧ニ五首之腰折一。述ニ千廻之心

緒二而已。

いかゝして君がみのりのともし火を晴きみ山の庵にてらさん
君がたのむ寺のむかしの塵こそ此山さとにすみかしめけれ
君ならで誰か覺りん草の庵やかて蓮の臺成とは
九品の蓮の露にやとりけん月の光を見ぬそかなしき
とゝめけむ心の底なしるへにて此山里にすむ人もかな

當寺者。弘法大師御建立舊跡云々。便宜之時。以二此旨一可下令二洩達一給上。恐々謹言。

十二月十四日　三品判

十一月十八日。參二詣瀧寺一。坂十六丁。此寺東向高山有レ瀧。古寺礎石等處々有レ之。本堂五間。本佛御作千手云々。

一誕生院緣起之事。

右當所者。弘法大師御誕生處也。昔定有二精舍一。宛如二釋迦如來淨飯王宮生處塔一。而五百廻ノ星霜相遷之間。唯遺二其跡一。倘無二礎石一。于レ爰行竝上人者。寛元三年本像御影建立之時。即與二寺僧一共許議シテ。於二此御誕生所一建二立一堂一。可レ安二置之一云々。因レ茲或勵二自力一。或唱二勸進一。以二今年建長元年己□月十日一手斧始。同二月二日棟上。大公沙彌陀佛。同年五月一日申戊寅時有二鎭壇一。阿闍梨道範。

以二我功德力一。大師加持力。及以二法界力一。
願我成二吉祥一。今此一伽藍。奉二慈氏下生一。
與二隆諸佛法一。利二益諸衆生一。

大勸進阿闍梨道範

建長元年五月廿一日。此諸國流人教免之宣下有レ之。同六月八日件院宣并六波羅下知狀及長者御房御書狀來着。仍卽可二歸洛一之處。自二同十二日一本病更發不レ能二出行一。經二四十餘日一。付二小減一臨二歸山之期一。七年之間。世出世之事無二內外一申談之人之許へ申遣云。

なゝとせのたえぬむくひの末の露同しにうすの上に逢はん

彼返報云。七ケ年之祇候。一生中之大幸也。唯賴者世々欲レ蒙二御引接一云々。

末の露思ひさためぬ身にしあれとゝふことの葉にかゝらさらめや

追申。御歸山之後。每年一度可レ令二登山一之志深し。

たのめなきし法のしるへの燈のかされて照す峯なたつれん

同七月廿二三日之比。癘病得二小減一。欲二歸山一之處。當國白峯寺院主靜圓備後阿闍梨。當年宿願入壇所望事。近々被二歎申一之旨。病後氣力雖レ不レ可レ堪二作業一。此寺國中清淨蘭若。崇德院法皇御靈廟也。此阿闍梨年記六十六。練行慈仁之器也。仍大師御門流於二此寺一永代流傳事。尤可レ爲二興法萬人方便一之故。同七月廿九日立二善通寺一到二彼白峯寺一。路五里。八月四日天宣房宿念云々。入壇傳法。色衆十八人云々。同六日 彼寺 本堂修理 供養曼陀羅供。大阿闍梨勤レ之。此間雖二尫弱一不レ虧二法則一。同七日立二白峯一至二白山一。路六里。同八日立二白山一至二引田一。路六里。同九日立二引田一越二阿波大坂一至二紀津一。路六里。即日酉始乘船。渡二牟野口村一移居。海路四里。卽子時許至二淡路國賀集一。一里。同十四日立二賀集一至二由羅一。七里。同十五日立二由羅渡戶一又云福良渡海路三里。至二大谷一。亥時。陸地十一里。同十七日登山。五里。即日沒後開二御影一拜二見慈顏一。頂二戴御物等一。拭二歡喜涙一。着二住房一云々。

同廿一日。奧院參詣。病身忘命參詣之處。上下無爲不レ可□云々。

此事寫之外種々事等多之。右筆不レ追。仍略之。殊以爲二肝要一之所許ヲ書脫ク。于レ時正嘉第二曆仲秋上旬之候。聊爲二後摸一之執筆了。巧披見候。可レ被レ唱二念佛一云々。

私云。建治三年二月十一日書寫了。

右南海流浪記以正智院道範自筆本書寫挍合畢

群書類從卷第三百三十一

紀行部五

東關紀行

前河內守親行

齡は百とせの半に近づきて。鬢の霜漸冷しといへども。なすことなくして徒にあかしくらすのみにあらず。さしていづこに住はつべしともおもひさだめぬありさまなれば。彼白樂天の身は浮雲に似たり首は霜ににたりと書給へる。あはれにおもひあはせらる。もとより金帳七葉のさかへをこのまず。たゞ陶潛五柳のすみかをもとむ。しかはあれども。みやまのおくの柴の庵までもしばらく思ひやすらふ程なれば。愁に都のほとりに住居つゝ。人並に世にふる道になんつらなれり。是即身は朝市にありて心は隱遁にあるいはれなり。かゝるほどに。おもはぬ外に。仁治三年の秋八月十日あまりの比。都を出て東へ赴く事あり。まだしらぬ道の空。山かさなり江かさなりて。はるばる遠き旅なれども。雲をしのぎ霧を分つゝ。しばしば前途の極なきにすゝむ。終に十餘の日數をへて鎌倉に下り着し間。或は山館野亭の夜のとまり。或は海邊水流の幽なる砌にいたるごとに。目にたつ所々。心とまるふしぶしをかき置て。わすれず忍ぶ人もあらばをのづから後のかたみにもなれとてなり。東山の邊なる住家を出て。相坂の關うち過るほどに。駒引わた

古今雑下 あふ坂のあらしの風のさむけれとゆくゑしられはわひつゝそぬろ

圓融院女御一條院母后法興院殿二女

拾遺 世中をなにゝたとへんあさほらけこき行舟のあとのしらなみ

る望月の比も漸近き空なれば。秋ぎり立わたりて。ふかき夜の月かげほのかなり。木綿付鳥かすかにをとづれて。遊子猶殘月に行けん函谷の有樣おもひいでらる。むかし蟬丸といひける世捨人。此關の邊にわらやの床を結びて。常は琵琶をひきて心をすまし。大和歌を詠じておもひを述けり。嵐のかぜはげしきをわびつゝぞすぐしける。ある人の云。蟬丸は延喜第四の宮にておはしけるゆへに。此關のあたりを四宮河原と名付たりといへり。

いにしへのわらやの床のあたり迄心をとむる相坂の關

東三條院石山に詣て還御ありけるに。關の淸水を過させ給ふとてよませ給ひける御歌。あまたゝひゆきあふ坂の關水にけふをかぎりの影そかなしきときこゆるこそ。いかなりける御心のうちにかと哀に心ぼそけれ。關山を過ぬれば。打出の濱粟津の原なんどきけども。いまだ夜のうちなれば。さだかにも見わからず。昔天智天皇の御代。大和國飛鳥の岡本の宮より近江の志賀の郡に都うつりありて。大津の宮をつくられけりときくにも。此ほどはふるき皇居の跡ぞかしとおぼえてあはれなり。

さゝ波や大津の宮のあれしより名のみ殘れるしかのふる鄉

曙の空になりて。せたの長橋うち渡すほどに。湖はるかにあらはれて。かの滿誓沙彌が比叡山にて此海を望つゝよめりけん歌おもひ出られて。漕行舟のあとのしら波。誠にはかなく心ぼそし。

世中を漕行舟によそへつゝながめし跡を又そながむる

このほどをも行過て。野路と云所にいたりぬ。草の原露しげくして。旅衣いつしか袖のしづくところせし。

東路の野ちの朝露けふやさは袂にかゝるはしめ成覽

しの原と云所をみれば。西東へ遥にながき堤

あり。北には里人住家をしめ。南には池のおもて遠く見えわたる。むかひの汀。みどりふかき松のむら立。波の色もひとつになり。南山の影をひたさねども青くして滉瀁たり。洲崎所々に入ちがひて。あしかつみなど おひわたれる中に。をしかものうちむれてとびちがふさま。あしでをかけるやうなり。都をたつ旅人。この宿にこそとまりけるか。今はうちすぐる たぐひのみ多くして。家居もまばらに 成行など聞こそ。かはりゆく世のならひ。飛鳥の河の淵瀬にはかぎらざりけめとおぼゆ。

行人もとまらぬ里となりしより荒のみまさるのちの篠原

鏡の宿にいたりぬれば。昔なゝの 翁[古]のよりあひつゝ。老をいとひてよみける歌の中に。鏡山いさたちよりてみてゆかむ年へぬる身は老やしぬるとといへるは。此山の事にやとおぼえて。宿もからまほしく覺えけれども。猶おくざまにとふべき所ありてうち過ぬ。

たちよらてけふは過なん鏡山しらぬ翁のかけはみすとも

ゆき暮ぬれば。むさ寺と云 山寺のあたりにとまりぬ。まばらなるとこの秋かぜ。夜ふくるままに身にしみて。都にはいつしか引かへたるこゝちす。枕にちかきかねの聲。曉の空にをとづれて。かの遺愛寺の邊の 草の庵のねざめもかくや有けむと哀なり。行末とをきたびの空。思ひつゞけられていといたう物がなし。

都出ていくかもあらぬこよひたにかたしきわひぬ床の秋風

この宿をいでて 笠原の 野原うちとをる ほどに。おいその杜と云杉むらあり。下くさふかき朝つゆの霜にかはらん行すゑも。はかなく移る月日なれば遠からずおぼゆ。

かはらしな我もとゆひに置霜も名にしおいその杜の下草

音にきゝしさめが井を見れば。陰くらき木のしたのいはねより流出る清水。餘り涼しきま

新古今雑
中
人すまぬふはのせきやの板ひさしあれにしのちはたゝあきの風

古今春上
そせい
みてのみや人にかたらん櫻はなてことにおりていへつとにせん

ですみわたりて。實に身にしむばかりなり。餘熱いまだつきざる程なれば。往還の旅人多く立よりてすゞみあへり。斑婕妤が團雪の扇。秋風にかくて暫忘れぬれば。すゑ遠き道なれども。立さらん事はものうくて更にいそがれず。かの西行が道のへに清水ながるゝ柳かげしばしとてこそたちとまりつれとよめるも。かやうの所にや。

道のへの木陰の清水むすふとてしはしすゝまぬ旅人そなき

かしは原と云所をたちて美濃國關山にもかゝりぬ。谷川霧の底に音信。山風松の梢に時雨わたりて。日影もみえぬ木の下道あはれに心ぼそし。こえはてぬれば不破の關屋なり。萱屋の板庇年經にけりとみゆるにも。後京極攝政殿の荒にしのちはたゞ秋の風とよませ給へる歌おもひ出られて。此うへは風情もめぐらしがたければ。いやしきことの葉をのこさんも中中におぼえて。爰をばむなしくうち過ぬ。くゐぜ川と云所にとまりて。夜更るほどに川端に立出てみれば。秋の最中の晴天清き河瀬にうつろひて。照月なみも數みゆばかりすみ渡れり。二千里の外の古人の心遠く思ひやられて。旅のおもひいとゞをさへがたくおぼゆれば。月のかげに筆を染つゝ。花洛を出て三日。株瀬川に宿して一宵。しば〳〵幽吟を中秋三五夜の月にいたましめ。かつ〴〵遠情を先途一千里の雲にをくるなど。ある家の障子に書つくるついでに。

しらさりき秋の半の今宵しもかゝる旅ねの月をみんとは

かやつの東宿の前を過れば。そこらの人あつまりて。里もひゞくばかりにのゝしりあへり。けふは市の日になむあたりたるとぞいふなる。往還のたぐひ手毎にむなしからぬ家づとも。かのみてのみや人にかたらんとよめる花

のかたみには。やうかはりておぼゆ。

花ならぬ色香もしらぬ市人の徒ならでかへる家つと

尾張國熱田の宮にいたりぬ。神垣のあたりちかければ。やがてまいりておがみ奉るに。木立年ふりたる杜の木の間より夕日のかげたえだえさし入て。あけの玉垣色をかへたるに。木綿四手風にみだれたることから。物にふれて神さびたる中にも。ねぐらあらそふ鷺むらのかずもしらず梢にきゐるさま。雪のつもれるやうに見えて。遠く白きものから。暮行まゝにしづまり行聲ごゑも心すごく聞ゆ。ある人のいはく。此宮は素盞烏尊なり。はじめは出雲國に宮造ありけり。八雲たつといへる大和言葉も是よりはじまりけり。其後十二代景行天皇の御代にこの御に跡をたれ給へりといへり。又いはく。此宮の本躰は草薙と號し奉る神劔也。景行の御子日本武尊と申。夷をたいらげて歸り給ふ時。尊は白鳥となりて去給ふ。劔は熱田にとまり給ふともいへり。六十六代一條院の御時大江匡衡といふ博士有けり。長保のすゑにあたりて當國の守にて下りけるに。大般若を書て此宮にて供養をとげける願文に。吾願已にみちぬ。任限又みちたり。古郷にかへらんとする期いまだいくばくならずとかきたるこそ。哀に心ぼそく聞ゆれ。

思ひ出のなくてや人のかへらまし法の形見をたむけをかずは

この宮をたち出。濱路におもむくほど。有明の月かげふけて。友なし千鳥とき〴〵をとづれわたれる。旅の空のうれへすゞろに催して。哀かた〳〵ふかし。

古郷は日をへて遠くなるみかたいそぐ汐干の道ぞくるしき

やがて夜のうちに二村山にかゝりて。山中などをこえ過るほどに。東漸しらみて海の面はるかにあらはれわたれり。波も空もひとつに

拾遺別部に源よしたれか三河介にて侍けるむすめのもとにはゝのよみてつかはしけるとありよしたれか歌にてはきこえかたけれは此紀行思ひあやまれるならん

て。山路につゞきたるやうに見ゆ。

玉くしげ二村山のほの〴〵と明行末は波路なりけり

ゆき〳〵て三河國八橋のわたりをみれば。在原業平かきつばたの歌よみたりけるに。みな人かれいゐのうへになみだおとしける所よとおもひ出られて。そのあたりをみれども。かの草とおぼしき物はなくて。いねのみぞおほくみゆる。

花ゆへにおちし涙のかたみとや稲葉の露を殘しをくらん

源義種が此國のかみにてくだりける時。とまりける女のもとにつかはしける歌に。もろともにゆかぬ三河の八はしを戀しとのみや思ひわたらんとよめりけるこそ。おもひ出られてあはれなれ。やはぎといふ所をいでて。みやぢ山こえ過るほどに赤坂と云宿あり。こゝにありける女ゆへに大江定基が家を出けるも哀に思ひいでられて過がたし。人の發心する道その緣一にあらねども。あかぬ別をおしみしまよひの心をしもしるべとし。誠の道におもむきけん。ありがたくおぼゆ。

別路に茂りもはてゝ葛のはのいかであらぬかたに返りし

ほむの川原にうち出たれば。よもの望かすかにして山なく岡なし。秦何の一千餘里を見わたしたらんこゝちして。草土ともに蒼茫たり。月の夜の望いかならんと床しくおぼゆ。茂れるさゝ原の中にあまたふみわけたる道ありて。行末もまよひぬべきに。古武藏の前司道のたよりの翟に仰て植をかれたる柳もいまだ陰とたのむまではなけれども。かつ〴〵まづ道のしるべとなれるもあはれなり。もろこしの召公奭は周の武王の弟也。成王の三公として燕と云國をつかさどりき。陝のにしのかたを治し時。ひとつの甘棠のもとをしめて政ををこなふ時。つかさ人よりはじめてもろ〳〵の

古今雜下　よみ人しらず
いさこゝにわか世はへなんすかはらやふしみの里のあれまくもおし

民にいたるまで。そのもとをうしなはず。あまねく又人の患をことはり。おもき罪をもなだめけり。國民擧りて其德政を忍ぶ。故に召公去にし跡までも。彼木を敬て敢てきらず。うたをなんつくりけり。後三條天皇（七十一代）東宮にておはしましけるに。學士實政任國に赴く時。州の民はたとひ甘棠の詠をなすとも忘るゝことなかれ。おほくの年の風月の遊びといふ御製をたまはせたりけるも此こゝろにや有けん。いみじくかたじけなし。かの前の司も此召公の跡を追て人をはぐくみ物を憐むあまり。道のほとりの往還の陰（蔭イ）までも思ひよりて植をかれたる柳なれば。これを見む輩皆かの召公を忍びけん。國の民のごとくにおしみそだてて。行すゑのかげとたのまむこと。その本意はさだめてたがはじとこそおぼゆれ。

植置しぬしなき跡の柳はら猶その陰を人やたのまん

豐河と云宿の前をうち過るに。ある者のいふをきけば。此みちをば昔よりよぐるかたなかりし程に。近比より俄にわたふ津の今道と云かたに旅人おほくかゝる間。いまはその宿は人の家居をさへ外にのみうつすなどぞいふなる。ふるきをすてゝあたらしきにつくならひ。さだまれることといひながら。いかなるゆへならんとおぼつかなし。昔より住つきたる里人の今更ゐうかれんこそ。かの伏見の里ならねども。あれまくおしく覺ゆれ。

覺束ないさ豐河のかはる瀨をいかなる人のわたりそめけん

參河遠江のさかひに高師の山と聞ゆるあり。山中にこえかゝるほどに。谷河のながれ落て岩瀨の波こと〴〵しくきこゆ。境川とぞ云。

（夫木）岩つたひ駒うち渡す谷川の音もたかしの山にきにけり

橋本と云所に行つきぬれば。きゝわたりしかひありてけしきいと心すごし。南には潮海あ

り。漁舟波にうかぶ。北には潮水有。人家岸につらなれり。其間に洲崎遠くさし出て。松きびしく生つゞき。嵐しきりにむせぶ。松のひゞき波のをといづれとき丶わきがたし。行人心をいたましめ。とまるたぐひ夢をさまさずといふ事なし。みづうみにわたせる橋を濱名となづく。ふるき名所也。朝たつ雲の名殘いづくよりも心ぼそし。

行とまる旅はいつもかはらねとわきて濱名の橋そ過うき

さても此宿に一夜とまりたりしやどあり。軒ふりたるわらやのところ〴〵まばらなるひまより。月のかげ曇なくさし入たる折しも。君どもあまたみえし中に。すこしおとなびたるけはひにて。夜もすがら床の下に晴天をみると忍びやかにうち詠じたりしこそ。心にくくおぼえしか。

言のはの深き情は軒端もる月のかつらの色にみえにき

なごりおほくおぼえながら。此宿をもうち出て行過るほどに。まひざはの原と云所に來にけり。北南は眇々とはるかにして。西は海の渚近し。錦花繡草のたぐひはいともみえず。白き眞砂のみありて雪の積れるに似たり。其間に松たえ〴〵生渡りて。鹽かせ梢に音信。又あやしの草の庵所々みゆる。漁人釣客などの栖にやあるらん。すゑ遠き野原なればつく〴〵とながめゆくほどに。うちつれたる旅人のかたるをきけば。いつのころよりとはしらず此原に木像の觀音おはします。御堂など朽あれにけるにや。かりそめなる艸の庵のうちに雨露もたまらず年月を送るほどに。一とせ望むことありて鎌倉へくだる筑紫人有けり。此觀音の御前にまいりたりけるが。もしこの本意をとげて古郷へむかはゞ御堂をつくるべきよし心のうちに申置て侍りけり。鎌倉にて望むこ

かひかねをさやにもみしかけゝれなくよこほりふせるさやの中山

とかなひけるによりて。御堂を造けるより。人多くまいるなんとぞいふなる。聞あへずその御堂へ參りたれば。不斷香の煙風にさそはれうちかほり。あかの花も露鮮なり。願書とおぼしき物計帳の紐に結びつけたれば。弘誓のふかき事うみのごとしといへるもたのもしくおぼえて。

たのもしな入江に立るみをつくし深き驗の有と聞にも

天龍と名付たるわたりあり。川ふかく流れはげしくみゆ。秋の水みなぎり來て。舟のさること速なれば。往還の旅人たやすくむかひの岸につきがたし。此河みづまされる時。ふねなどもをのづからくつがへりて底のみくづとなるたぐひ多かりと聞こそ。彼巫峽の水の流おもひよせられていと危き心ちすれ。しかはあれども。人の心にくらぶれば。しづかなる流ぞかしとおもふにも。たとふべきかたなきは世にふる道のけはしき習ひ也。

此河のはやき流も世中の人の心のたぐひとは見す

遠江の國府いまの浦につきぬ。爰に宿かりて一日二日とゞまりたるほど。あまの小舟に棹さしつゝ浦の有さま見めぐれば。しほ海湖の間に洲崎遠くへだたりて。南には極浦の波袖を濕し。北には長松の嵐心をいたましむ。名殘おほかりし橋本の宿にぞ相似たる。昨日のめうつりなからずば。是も心とまらずしもあらざらましなどはおぼえて。

浪の音も松の嵐もいまの浦に昨日の里の名殘をぞきく

ことのまゝと聞ゆる社おはします。その御前をすぐとて。いさゝかおもひつゞけられし。

ゆふたすきかけてそ頼む今思ふことのまゝなる神のしるしを

小夜の中山は。古今集の歌によこほりふせるとよまれたれば。名高き名所なりとは聞をきたれども。みるにいよ〳〵心ぼそし。北は深山

にて松杉嵐はげしく。南は野山にて秋の花露しげし。谷より嶺にうつるみち。雲に分入心地して。鹿の音なみだをもよほし。虫のうらみあはれふかし。

蔦かよふ峯の梯とたえして雲にあとゝふ佐夜の中山

此山をもこえつゝ猶過行ほどに菊川といふ所あり。去にし承久（順徳）三年の秋（後堀河）の比。中御門中納言宗行と聞えし人の罪ありて東へくだられけるに此宿にとまりけるが。昔は南陽縣の菊水下流を汲で齢をのぶ。今は東海道の菊川西岸に宿して命をうしなふと。ある家の柱にかゝれたりけりと聞をきたれば。いとあはれにて其家を尋るに。火のためにやけて。かの言のはものこらずと申ものあり。今は限とてのこし置けむかたみさへあとなくなりにけるこそはかなき世のならひ。いとゞあはれにかなしけれ。

かきつくるかたみも今はなかりけり跡は千年と誰かいひ劒

菊川をわたりていくほどもなく一村の里あり。こはまとぞいふなる。此里のひがしのはてにすこしうちのぼるやうなる奥より大井川を見渡したれば。遥々とひろき河原の中に一すぢならず流わかれたる川瀬ども。とかく入ちがひたる様にて。すながしといふ物をしたるににたり。中々わたりてみむよりもよそめおもしろくおぼゆれば。かの紅葉みだれてながれけむ龍田川ならねども。しばしやすらはる。

日數ふる旅のあはれは大井河わたらぬ水も深き色かな

まへ嶋の宿をたちて。岡部のいまずくをうち過るほど。かた山の松のかげに立よりて。かれいゐなど取出たるに嵐冷しく梢にひゞきわたりて。夏のまゝなる旅ごろもうすき袂もさむくおぼゆ。

（夫木）是そこのたのむ木のもと岡へなる松の嵐に心してふけ

宇津の山をこゆれば。つたかえではしげりて

むかしのあとたえず。かの業平がす行者にことづてしけん程はいづくなるらんと見行ほどに。道のほとりに札をたてたるをみれば。无縁の世すて人あるよしをかけり。みちより近きあたりなれば少打入てみるに。わづかなる草の庵のうちに獨の僧あり。畫像の阿彌陀佛をかけ奉て。淨土の法もんなどをかけり。其外にさらにみゆる物なし。發心のはじめを尋きけば。わが身はもと此國のものなり。さしておもひはなれたる道心も侍らぬうへ。其身堪たるかたなければ。理を觀ずるに心くらく。佛を念ずるに性ものうし。難行苦行の二の道ともにかけたりといへども。山の中に眠れるは。里にありて勤たるにまされるよし。ある人のをしへにつきて。此山に庵を結つゝあまたの年月をおくるよしをこたふ。むかし叔齋が首陽の雲に入て猶三春の蕨をとり。許由が穎水の月にすみし。をのづから一瓢の器をかけたりといへり。此庵のあたりには殊更煙たてたるよすがもみえず。柴折くぶるなぐさめまでも思ひたえたるさまなり。身を孤山の嵐の底にやどして。心を淨域の雲の外にすませる。いはねどしるくみえて。中々あはれに心にくし。

世をいとふ心のおくや濁らましかゝる山邊の住居ならでは

此庵のあたり幾程遠からず。峠と云所にいたりて。おほきなる率都婆の年經にけると見ゆるに歌どもあまた書付たる中に。東路はこゝをせにせん宇津の山哀もふかし蔦のした道とよめる。心とまりておぼゆれば。そのかたはらにかきつけし。

我も又こゝをせにせんうつの山分て色ある蔦のした露

猶うちすぐるほどに。ある木陰に石をたかくつみあげて。めにたつさまなる塚あり。人にたづぬれば梶原が墓となむこたふ。道のかたは

らの土と成にけりと見ゆるにも。顯基中納言の口ずさみ給へりけん。年々に春の草のみ生たりといへる詩思ひいでられて。是も又ふるきつかとなりなば名だにも殘らじとあはれ也。羊太傅が跡にはあらねども。心ある旅人はこゝにもなみだをやおとすらむ。かの梶原は將軍二代の恩に憍り。武勇三略の名を得たり。かたはらに人なくぞみえける。いかなることにかありけん。かたへの憤ふかくして。たちまちに身をほろぼすべきになりにければ。ひとまとものびんとやおもひけむ。都のかたへはせのぼりけるほどに。駿河國きかはといふ所にてうたれにけりときゝしが。さはこゝにて有けるよと哀に思ひあはせらる。讃岐の法皇（崇徳）配所へおもむかせ給ひて。かの志戸と云處にてかくれさせ御座しける御跡を西行修行のついでにみまいらせて。よしや君昔の玉の床とてもかゝらむのちはなにゝかはせんとよめりけるなどうけ給はるに。ましてしもざまのもののの事は中にをよばねども。さしあたりてみるにはいと哀におぼゆ。

あはれにも空にうかれし玉桙の道のへにしも名をとゞめけり

清見が關も過うくてしばしやすらへば。沖の石村々鹽干にあらはれて波に咽び。礒の鹽屋ところ〲風にさそはれて煙たなびけり。東路のおもひ出ともなりぬべきわたり也。むかし（六十一代）朱雀天皇の御時。將門と云もの東にて謀反おこしたりけり。是をたひらげんために民部卿忠文をつかはしける。此關にいたりてとゞまりけるが。淸原滋藤といふ者。民部卿にともなひて軍監と云つかさにて行けるが。漁舟の火のかげは寒くして浪を燒。驛路の鈴の聲はよる山をすぐと云唐の歌を詠じければ。民部卿泪をながしけると聞にもあはれなり。

清見かた關とはしらて行人も心計はとゝめをくらむ

この關遠からぬほどに興津といふ浦あり。海に向ひたる家にやどりて侍れば。いそべによする波の音も身のうへにかゝるやうにおぼえて。夜もすがらいねられず。

清見かた磯へに近きたび枕かけぬ涙にも袖はぬれけり

こよひはさらにまどろむ間だになかりつる。草の枕のまろぶしなれば。寢覺ともなき曉の空に出ぬ。くきが崎と云なるあら磯の岩のはざまを行過るほどに。沖津風はげしきにうちよする波もひまなければ。いそぐ鹽干のつたひみち。かひなき心ちして。ほすまもなき袖のしづくまでは。かけても おもはざりし旅の空ぞかしなど打ながめられつゝいと心ぼそし。

沖津風けさあら磯の岩つたひ浪わけ衣ぬれ〳〵そ行

神原といふ宿のまへをうちとをるほどに。をくれたる者まちつげんとてある家に立入たるに。障子に物をかきたるをみれば。旅衣すその庵のさむしろにつもるもしるきふしのしら雪といふ歌なり。心ありけるたび人のしわざにやあるらん。昔香爐峯の麓に庵をしむる隱士あり。冬の朝簾をあげて峯の雪を望けり。今富士の山のあたりに宿をかる行客あり。さゆる夜衣をかたしきて山の雪をおもへる。かれもこれもともに心すみておぼゆ。

冴る夜に誰こゝにしもふしわひて高ねの雪を思ひやりけん

田子の浦にうち出てふじの高ねを見れば。時わかぬゆきなれども。なべていまだ白妙にはあらず。靑して天によれるすがた。繪の山よりもこよなうみゆ。貞觀十七年の冬の比白衣の美女二人ありて山の頂にならび舞と。都良香が富士の山の記に書たり。いかなるゆへにかとおぼつかなし。

ふしのねの風にたゞよふ白雲を天津乙女の袖かとそみる

金葉雜下
天河なはしろ水にせきくたせあまくたりますかみならはかみ

わくらはの御法に云沈麝のにほひ閙薫のありかおもしろく庭上にみちみちて云々四十二物あらそひ

浮嶋が原はいづくよりもまさりてみゆ。北はふじの麓にて。西東へはる〳〵とながき沼あり。布をひけるがごとし。山のみどり影を浸して空も水もひとつ也。蘆かり小舟所々に掉さして。むれたる鳥おほくさはぎたり。南は海のおもて遠くみわたされて。雲の波煙の浪いとふかきながめなり。すべて孤嶋の眼に遮るなし。わづかに遠帆の空につらなれるをのぞむ。こなたかなたの眺望いづれもとり〳〵に心ぼそし。原には鹽屋の煙たえ〳〵立わたりて。浦かぜ松の梢にむせぶ。此原昔は海の上にうかびて蓬萊の三の嶋のごとくに有けるによりて浮嶋となん名付たりと聞にも。そのづから神仙のすみかにもやあらん。いとゞおくゆかしくみゆ。

影ひたす沼の入えにふしのねの煙も雲も浮嶋かはら

やがて此原につきて千本の松原といふ所あり。海の渚遠からず。松はるかに生わたりてみどりの陰きはもなし。沖には舟ども行ちがひて。木のはのうけるやうにみゆ。かの千株の松下雙峯寺。一葉の舟中萬里身とつくれるに。彼も是もはづれず。眺望いづくにもまさりたり。

見渡せば千本の松の末遠みみどりにつゞく波のうへ哉

車返しと云里あり。或家にやどりたれば。網つりなどいとなむ賤しきもののすみかにや。夜のやどりありかことにして。床のさむしろもかけるばかりなり。かの縛戎人の夜半の旅ねも。かくやありけむとおぼゆ。

是そこのつりする海士の笘庇いとふありかや袖にのこらん

伊豆の國府にいたりぬれば。三嶋の社のみしめうちおがみ奉るに。松の嵐木ぐらくをとづれて。庭の氣色も神さびわたれり。此社は伊豫の國三嶋大明神をうつし奉ると聞にも。能因入道伊豫守實綱が命によりて歌よみて奉りけ

に云みめのわろきとありかとかつらきの神はよるともちきりけりしらすありかなつゝむならひは

若紫吹まよふ深山おろしに夢さめてなみたもよほすたきのをとかな

るに。炎旱の天よりあめにはかにふりて。枯たる稲葉もたちまちに緑にかへりける。あら人神の御なごりなれば。ゆふだすきかけまくもかしこくおぼゆ。

せきかけし苗代水の流きて又あまくたる神そこの神

かぎりある道なれば。この砌をも立出て猶ゆきすぐるほどに。箱根の山にもつきにけり。岩がねたかくかさなりて。駒もなづむばかり也。山のなかにいたりて水うみ廣くたゝへり。箱根の湖となづく。又蘆の海といふもあり。權現垂跡のもとゐけだかくたふとし。朱樓紫殿の雲にかさなれる粧ひ。唐家驪山宮かとおどろかれ。巖室石龕の波にのぞめるかげ。錢塘の水心寺ともいひつべし。うれしき便なれば。うき身の行衞しるべせさせ給へなどいのりて法施奉るついでに。

今よりは思ひ亂し蘆の海の深きめくみな神にまかせて

此山もこえおりて湯本と云所にとまりたれば。太山おろしはげしくうちしぐれて。谷川みなぎりまさり。岩瀨の波高くむせぶ。暢臥房のよるのきゝにもすぎたり。かの源氏物がたりの歌に涙もよほす瀧のをとかなといへる。思ひよられてあはれなり。

夫ならぬたのみはなきを古郷の夢路ゆるさぬ瀧の音哉

此宿をもたちて鎌倉につく。日の夕つかた雨俄にふりて。みかさもとりあへぬほど也。いそぐ心にのみすゝめられて。大磯江嶋もろこしが原など聞ゆる所々をも見とゞむるひまもなくてうち過ぬるこそいと心ならずおぼゆれ。暮かゝるほどに下りつきぬれば。なにがしのいりとかやいふ所に。あやしの賤が庵をかりてとゞまりぬ。前は道にむかひて門なし。行人征馬すだれのもとにゆきちがひ。うしろは山ちかくして窓にのぞむ。鹿の音虫の聲かきの

うへにいそがはし。旅店の都にことなるさまかはりて心すごし。かくしつゝあかしくらすほどに。つれ〴〵もなぐさむやとて。和賀江のつき嶋。三浦のみさきなどいふ浦々を行てみれば。海上の眺望哀を催して。こしかたに名高く面白き所々にもをとらずおぼゆ。

さひしさは過こしかたの浦々もひとつなかめの沖のつり舟

玉よする三浦かさきの波まより出たる月の影のさやけさ

抑かまくらの はじめを申せば。故右大將家（賴朝）と聞え給ふ。水の尾の御門（清和）の九の世のはつえをたけき人にうけたり。さりにし治承（高倉安德）のするゑにあたりて。義兵をあげて朝敵をなびかすより。恩賞しきりに隴山の跡をつぎて。將軍の めしをえたり。營館をこの所にしめ。佛神をそのみぎりにあがめ奉るよりこのかた。今繁昌の 地となれり。中にも鶴岡の若宮は。松栢のみどりいよ〳〵しげく。蘋蘩のそなへ かくることなし。陪従をさだめて 四季の御かぐらをこたらず。職掌に仰て八月の放生會ををこなはる。崇神のいつくしみ本社にかはらずと聞ゆ。二階堂はことにすぐれたる寺也。鳳の甍日にかゝやき。鳧の鐘霜にひゞき。樓臺の莊嚴よりはじめて林池のありとにいたるまで殊に心とまりてみゆ。大御堂ときこゆるは。石巖のきびしきをきりて。道場のあらたなるをひらきしより。禪僧庵をならぶ。月をのづから祇宗の觀をとぶらひ。行法座をかさね。風とこしなへに金磬のひゞきをさそふ。しかのみならず。代々の將軍以下つくりそへられたる松の社蓮の寺まちまちにこれおほし。そのほか 由比の浦と云所に阿彌陀佛の大佛をつくり奉るよしかたる人あり。やがていざなひてまいりたれば。たふとくありがたし。事のおこりをたづぬるに。本は遠江の國の人 定光上人といふものあり。過に

し延應の比より關東のたかきいやしきをすすめて。佛像をつくり堂舍を建たり。その功すでに三か二にをよぶ。烏瑟たかくあらはれて半天の雲にいり。白毫あらたにみがきて滿月の光りをかゞやかす。佛はすなはち兩三年の功すみやかになり。堂は又十二樓のかまへ望むにたかし。彼東大寺の本尊は聖武天皇（一十五代）の製作金銅十丈餘の盧舍那佛なり。天竺震旦にもたぐひなき佛像とこそきこゆれ。此阿彌陀は八丈の御長なれば。かの大佛のなかばよりもすぐめり。金銅木像のかはりめこそあれども。末代にとりてはこれも不思議といひつべし。佛法東漸の砌にあたりて。權化力をくはふるかとありがたくおぼゆ。かやうのことどもを見聞にも。心とまらずしもはなけれども。文にもくらく武にもかけて。つゐにすみはつべきよすがもなきかずならぬ身なれば。日をふるまゝにはたゞ都のみぞこひしき。歸べきほどとおもひしもむなしく過行て。秋より冬にもなりぬ。蘇武が漢を別し十九年の旅の愁。李陵が胡にいりし三千里のみちの思ひ身にしらるる心ちす。聞なれし虫の音もやゝよはりはてて。松ふく峯のあらしのみぞいとゞはげしくなりまされる。懷古のこゝろに催されて。つくづくと都のかたをながめやる折しも。一行の鳫がね空に消ゆくも哀なり。

かへるへき春をたのむの鳫がねもなきてや旅の空に出にし

かゝるほどに神無月の廿日あまりの比。はからざるにとみの事ありて都へかへるべきになりぬ。其こゝろのうち水ぐきのあとにもかきながしがたし。錦をきるさかひはもとよりのぞむ處にあらねども。故郷にかへるよろこびは朱買臣にあひにたるこゝちす。

故郷へ歸る山ちのこからしにおもはぬほかの錦をやきむ

十月廿三日の曉。すでに鎌倉をたちて都へおもむくに。宿の障子に書付。

なれぬれは都を急く今朝なれとさすかなこりのおしき宿哉

右東關紀行上木行于世之本稱鴨長明所著今據夫木抄所載從古本定爲源親行作比挍已了

うたゝねの記

阿佛

もの思ふことのなぐさむにはあらねども。ねぬよの友とならひにける月の光待出ぬれば。例のつまどをしあけてたゞひとりみ出したる。あれたる庭の秋露。かこちがほなる虫のねも。物ごとに心をいたましむるつまと也けれぱ。心に亂れおつる泪をおさへて。とばかりこし方ゆくさきを思ひつゞくるに。さもあさましくはかなかりける契りの程をなどかくしも思ひいれけんと。我心のみぞかへすがへすうらめしかりける。夢現ともわきがたかりし宵のまより。關守の打ぬる程をだにいたくもたどらずなりにしや。打しきる夢のかよひ路は。一夜ばかりのとだえもあるまじきやうにならひにけるを。さるは月草のあだなる色をかねて。しらぬにしもあらざりしかど。いかにうつりいかに染ける心にか。さも打つけにあやにく

なりし心まよひには。ふし柴のとたに思ひしらざりける。やう〳〵色づきぬ。秋の風のうきみにしらるゝ心ぞうたてくかなしき物なりけるを。をのづからたのむる宵はありしにもあらず。打過る鐘のひゞきをつく〴〵と聞ふしたるも。いけるこゝちだにせねば。げに今さらに鳥はものかはとぞ思ひしられける。さすがにたえぬ夢のこゝちは。ありしにかはるけぢめも見えぬものから。とにかくにさはりがちなるあしわけ船にて神無月にもなりぬ。降みふらずみ定なき頃の空のけしきは。いとゞ袖のいとまなき心ちして。おきふしながめわぶれど。絶てほどふるおぼつかなさの。ならはぬ日数の隔るも。今はかくにこそと思ひなりぬるよの心ぼそさぞ。なにゝたとへてもあかずかなしかりける。いとせめてあくがるゝ心催すにや。にはかにうづまさに詣でんと思ひ立ぬるも。かつうはいとあやしく。佛のみ心の中はづかしけれど。二葉より参り馴にしかば。すぐれてたのもしき心ちして。心づからのなやましさも愁ひきこえむとにやあらむ。しばしば御前にともなる人々。時雨しぬべしはやかへり給へなどいへば。心にもあらずいそぎ出るに。ほうこんごう院の紅葉このごろぞさかりと見えて。いとおもしろければ。すぎがてにおりぬ。かうらんのつまの岩のうへにおりゐて。山の方をみやれば。木々の紅葉色々に見えて。松にかゝれるつたの心の色もほかにもことなる心地していとみ所おほかるに。うきふるさとはいとゞわすられぬるにや。とみにもたゝれず。おりしも風さへ吹て。物さはがしくなりければ。みさすやうにてたつ程。

人しれず契りし中のことの葉を嵐ふけとはおもはざりしを

とおもひつゞくるにも。すべて思ひざまさる

ことなき心のうちならんかし。歸りてもいとくるしければ。うちやすみたる程御ふみとてとりいれたるも。むねうちさはぎてひきひろげたれば。たゞ今の空の哀にひごろのをこたりをとりそへて。こまやかに書なされたる墨つき筆のながれもいとみそ有と。例の中々かきみだす心まよひに。ことの葉のつゞきもみえずなりぬれば。御かへりもいかゞ聞えけん。名殘もいと心ぼそくて。この御文をつくづくと見るにも。日比のつらさはみな忘られぬるも。人わろき心の程やとまたうちをかれて。これやさはとふもつらさのかず〳〵に涙をそふる水莖の跡例の人しれずなかみちちかきそらにだに。たどたどしきゆふやみに契たがへぬしるべばかりにて盡せず。夢のこゝちするにも。いてきこえんかたなければ。たゞいひしらぬ泪のみむせかへりたる。あか月にもなりぬ。枕に近き鐘の音も唯今の命をかぎる心ちして。我にもあらずおきわかれにし袖の露いとゞかこちがましくて。君やこしとも思ひわかれぬなかみちに。例のたのもし人にてすべりいでゐるも。返す返す夢のこゝちなむしける。彼處にはむきたの方わづらひ給けるが。つゐにきえはて給にければ。そのほどのまぎれにや。またほどふるもことはりながら。いひしにたがふつらさはしも。ありしにまさる心地するは。いかにおぼしまどふらんと。とりわきたりける御思ひの名殘もいと苦しくをしはかり聞ゆれど。あはれしる心の程中々聞えん方なくて。日數ふるいぶせさをかれ〳〵ぞ驚かし給つる。難面よの哀さもみづから聞えあはせたくなどあれば。例のうちゐる程の鐘の響に人しれずたのみをかくるも。おもへば淺ましく。よの常ならずあだなる身のゆくゑ。つゐにいかにな

りはてむとすらんと。心ぼそく思ひつゞくるにも。ありしながらの心ならましかば。うきたる身のとがもかうまでは思ひしらずぞ過なましなど思ひつゞくるに。今さら身のうさもやる方なく悲しければ。今宵は難面てやみなましなど思ひ亂るゝに。例のまつほど過ぬるはいかなるにかと。さすがめもあはず。みじろぎふしたるに。かのちいさき童にや。しのびやかにうちたゝくを聞つけたるには。かしこく思ひしづむる心もいかなりぬるにか。やをらすべり出ゐるも。我ながらうとましきに。月もいみじくあかければ。いとはしたなき心地して。すいがいの折殘りたるひまにたちかくるゝも。彼ひたちのみやの御すまゐ思ひ出らるゝに。いるかたしたふ人の御さまぞことたがひておはしけれど。立よる人の御面かげはしも。里わかぬ光にもならびぬべきこゝちするは。

あながちに思ひ出られて。さすがに覺し出でおりもやと。心をやりて思ひつゞくるに。はづかしきことも多かり。しはすにもなりぬ。雪かきくらして風もいとすさまじき日。いととくおろしまはして。人二三人ばかりして物語などするに。夜もいたく更ぬとてひとはみな寢ぬれど。露まどろまれぬに。やをら起出てみるに。宵には雲がくれたりつる月の浮雲まがはず也ながら。山のは近きひかりほのかにみゆるは七日の月なりけり。みし夜のかぎりも今宵ぞかしと思ひいづるにたゞそのおりのこゝちして。さだかにもおぼえずなりぬる御面かげさへさしむかひたる心ちするに。まづかきくらす涙に月の影もみえずとて。佛などの見え給つるにやと思ふに。はづかしくもたのもしくも成ぬ。さるは月日にそへてたへ忍ぶべき心ちもせず。こゝろづくしなることのみ増

れば。よしや思へばやすきと。ことはりに思ひ立ぬる心のつきぬるぞ。有し夢のしるしにやとうれしかりける。今はと物を思ひなりにしもといへば。えに悲しきことおほかりける。春ののどやかなるに何となくつもりにける手ならひのほんごなどやりかへすつゐでに。かの御文どもをとりいでてみれば。梅がえの色づきそめし初より冬草かれはつる迄おり／＼の哀忍びがたきふし〴〵を打とけて聞えかはしけることの積ける程も。今はとみるはあはれ淺からぬなかに。いつぞやつねよりもめとゞまりぬらんかしとおぼゆる程に。こなたのあるじ今宵はいとさびしく。物おそろしき心ちするに。爰にふしたまへとて。我かたへもかへらず成ぬ。あなむづかしとおぼゆれど。せめて心の鬼もおそろしければ。かへりなんともいはでふしぬ。人はみな何心なくねいりぬる程に。やをらすべり出れば。ともし火の殘て心ぼそきひかりなるに。人や驚かんとゆゝしくおそろしけれど。たゞしやうじひとへを隔たる居どころなれば。ひるよりようゐしつるはさみばこのふたなどのほどなく手にさはるもいとうれしくて。かみを引分るほどぞさすがおそろしかりける。そぎおとしぬれば。このふたにうち入て。かき置つる文などもとりぐしてをかむとする程。いでつるしやうじ口より火の光のなをほのかにみゆるに。文かきつくる硯のふたもせで有けるがかたはらにみゆるを引よせて。そぎおとしたるかみをおしつゝみたるみちの國紙のかたはらに。たゞうち思ふことを書つれど。外なるともしびの光なれば。筆のたちどもみえず。

なけきつゝ身を早きせの底とたにしらす迷はん跡そ悲しき

身をもなげてんと思ひけるにや。たゞ今も出

ぬべきこゝちして。やをらはしをあけたれば。つごもり比の月なき空に。天雲さへたちかさなりて。いとものおそろしうくらきに夜もまだふかきに。とのゐ人さへ折しも打こはづくろふもむづかしと聞ゐたるに。かくても人にやみつけられんとそらおそろしければ。もとのやうにいりてふしぬれど。かたはらなる人うちみじろぎだにせず。さき〴〵も。とのゐびとの夜ふかくかどをあけて出るならひ也ければ。その程を人しれずまつに。ごよひしもとくあけていでぬるをとすれば。さるは心ざす道もはか〴〵しくも覺えず。爰も都にはあらず北山の麓といふ處なれば。ひとめしげからず。木の葉のかげにつきて。夢のやうにみをきし山ぢをたゞ獨行こゝち。いといたくあやうくおそろしかりける。山びとのめにもとがめぬまゝに。あやしくものぐるおしきすがたししたるも。すべて現のこととともおぼえず。さてもかのところにし山の麓なれば。いとはるかなるに。夜なかより降いでつる雨の明るまゝにしほしほとぬるゝ程になりぬ。故里よりさがのわたり迄はすこしもへだたらずみわたさるゝほどの道なれば。さはりなくゆきつきぬ。夜もやう〳〵ほの〴〵とする程に成ぬれば。みちゆきびともこゝもとはいとあやしとゝがむる人もあれば。物むづかしくおそろしき事このよにはいつかはおぼえむ。たゞ一すぢになきになしはてつる身なれば。あしのゆくにまかせて。はや山ふかく入なむと打もやすまぬままに。苦しくたへがたきことしぬばかり也。いるあらしの山の麓にちかづくほど雨ゆゝしく降まさりて。むかへの山をみれば。雲のいくへともなくおりかさなりて。ゆくさきもみえず。からうじてほうりんのまへ過ぬれば。はては

山路にまよひぬるぞすべきかたなきや。おしからぬ命もたゞ今ぞ心ぼそく悲しき。いとゞかきくらす泪の雨さへふりそへて。こしかたゆくさきも見えず。思ふにもいふにもたらず。今とぢめはてつる命なれば。身のぬれとをりたること伊勢の白水郎にもこえたり。いたくまはりはてにければ松風のあら〳〵しきをたのもし人にて。これも都のかたよりとおぼえて。みのかさなどきてさえづりくる女あり。こわらはのおなじこゑなるともの語する也けり。これやかつらの里のひとならんと見ゆるに。たゞあゆみにあゆみよりて。是は何人ぞあな心う。御前は人のてをにげいで給か。またくちろむなどをし給たりけるにか何故かゝるおほ雨に降れてこの山中へ出給ぬるぞ。いづくよりいづくをさして おはするぞ。あやしあやしとさえづる。なにといふこゝろにか。したをたび〳〵ならして。あないとおし〳〵とくり返しいふぞうれしかりける。しきりに身のありさまを尋れば。これは人を恨るにもあらず。またくちろむとかやをもせず。たゞ思ふこと有てこの山のおくにたづぬべきこと有て夜ふかく出つれど。雨もおびたゞしく。山路さへまどひてこしかたもおぼえず。ゆくさきもえしらず。しぬべき心地さへすれば。爰によりゐたるなり。おなじくはそのあたり迄みちびき給ひてんやといへば。いよ〳〵いとおしがりて。手をひかへてみちびく情のふかさぞ佛の御しるべにやとまで。うれしくありがたかりける。ほどなく送りつけてかへりぬ。まちとる處にもあやしくものぐるをしきものゝさまかなとみおどろく人おほかるらめなれども。かつらの里のひとの情におとらめやは。さま〴〵にたすけあつかはるゝほど山路はなを人のこゝ

ちなりけるが。今はとうちやすむほどすべてこゝちもうせて。露ばかり起もあがられず。いたづらものにてふしたりしを。都人さへ思ひのほかにたづねしる便ありて。三日ばかりはとにかくにさはりしかども。ひとひに本意とげにしかば。一すぢにうちもうれしく思ひなりぬ。さてこの所をみるに。うき世ながらかゝるところも有けりとすごく思ふさまなるに。をこなひなれたるあま君たちのよひ暁のあかをこたらず。爰かしこにせぬれいのをとなどを聞につけても。そゞろにつもりけん年月のつみも。かゝらぬ所にてやみなましかば。いかにせましと思ひ出るにぞ。みもゆるこゝちしける。故里の庭もせにうきをしらせし秋風は。ほけ三まいの峯の松風に吹かよひ。ながむるかどに面かげと見し月影は。りやうじゆせんの雲ゐるはるかに心を送るしるべとぞなりにける。

捨て出しわしのみ山の月ならて誰をよな〳〵慕わたりけん

ゆたのたゆたに物をのみ思ひくちにしはては。うつゝ心もあらずあくがれそめにければ。さま〴〵世のためしにもなりぬべく。おもひのほかにさすらふる身のゆくゑをゝのづから思ひしづむる時なきにしもあらねば。かりのよの夢の中なるなげきばかりにもあらず。くらきよりくらきにたどらむながきよのまどひをおもふにも。いとせめて悲しけれど。心は心として猶おもひ馴にしゆふぐれのながめに打そひて。ひと方ならぬ恨もなげきも。せきやるかたなきむねのうちをはかなき水莖のをのづから心のゆく便もやとて。ひとしれず書ながせど。いとゞしき泪のもよほしになむ。いでやをのづから大かたのよの情をすてぬなげの哀ばかりを折々にちりくることの葉も有しにこ

そ。露のいのちをもかけて。今日までもながらへてけるを。うきよの人のつらき僞にさへならひはてにけることも有にや。おなじ世ともおぼえぬ迄に隔りはてにければ。ちかの鹽がまもいとかひなきこゝちして。

みちのくのつほのいしふみかき絶て遙けき中と成にける哉

日ごろ降つる雨のなごりにたちまふ雲まのゆふづく夜のかげほのかなるにをしあけがたならねど。うき人しもとあやにくなるこゝちすれば。つまどはひきたてつれど。かどちかくほそき川の流れたる水のまさるにや。常よりもをとする心地するにも。いつのとしにかあらん。此川の水の出たりしに。人しれず波をわけしことなど。たゞ今のやうにおぼえて。

思ひ出る程にも波はさはきけりうきよをわけて中川の水

あれたる庭に呉竹のたゞすこし打なびきたるさへ。そゞろにうらめしきつまとなるにや。

よとともに思ひ出れは呉竹の恨めしからぬそのふしもなし

をのづからことのつゐでになどばかりおどろかし聞えたるにも。よのわづらはしさに。思ひながらのみなん。さるべきつゐでもなくて。みづから聞えさせずなど。なをざりに書すてられたるもいと心うくて。

消はてん煙ののちの雲をたによもなかめしな人めもるとて

とおぼゆれど。こゝろのうちばかりにてくだしはてぬるはいとかひなしや。そのころこゝちれいならぬことありて。命もあやうきほどなるを。こゝながらともかくもなりなばわづらはしかるべければ。思ひかけぬたよりにて。おたぎの近き所にてはかなき宿りもとめいでてうつろひなんとす。かくとだに聞えさせまほしけれど。とはず語もあやしくて。なく〳〵かどをひきいづるおりしも。先にたちたる車あり。さきはなやかに おひてこせんなどこと

ごとしくみゆるを。たればかりにかとめとゞめたりければ。彼ひとしれず恨きこゆる人なりけり。かほしるき随身などまがふべうもあらねば。かくとはおぼしよらざらめど。そゞろに車の中はづかしく。はしたなきこゝちしながら。今一たびそれとばかりもみ送り聞ゆるは。いとうれしくもあはれにもさま〴〵むねしづかならず。つゐにこなたかなたへ行別れ給ふ程。いといたうかへりみがちに彼處にゆきつきたれば。兼て聞つるよりもあやしくはかなげなる所のさまなれば。いかにしてたへ忍ぶべくもあらず。暮はつる空のけしきもひごろにこえて心ぼそくかなし。宵ゐすべき友もなければ。あやしくしきも定めぬとふのすがごもにたゞひとり打ふしたれど。とけてしもねられず。

はかなしなみじかき夜はの草枕結ふともなきうたゝねの夢

ひごろふれど問くる人もなし。心ぼそきさまゝにきやうづとてに持たる計ぞたのもしきともなりける。せかいふらうこと有ところをしゐて思ひつゞけてぞ。うき世のゆめもおのづからおもひさまますたよりなりける。けふかあすかと心ぼそき命ながら。卯月にもなりぬ。いざよひの光まち出て程なき窓のしとみたつものもおろさず。つく〴〵とながめいでたるに。はかなげなる垣ねの草にまどかなる月影に。ところがらあはれすくなからず。

なく露の命まつまのかりの庵にこゝろほそくもやどる月影

いづくにかあらんかすかに笛の音のきこえくる。かの御あたりなりしねにまよひたるこゝちするにも。きとむねふたがるこゝちするを。

待なれし故里をたにとはさりし人はこゝまて思ひやはよる

さても猶うきにたへたる命のかぎり有ければ。やう〳〵心ちもをこたりざまになりたる

を。かくてしもやとてまた故郷にたちかへるにも。まつならぬ梢だにそゞろにはづかしくみまはされて。

消かへりまたはくへしと思ひきや露の命の庭の淺ちふ

なげきながらはかなく過て秋にもなりぬ。ながき思ひのよもすがらやむともなききぬたの音。寢屋ちかききり〴〵すのこゑの亂れも。ひと方ならぬねざめの催しなれば。壁にそむけるともし火のかげばかり友として。あくるをまつもしづこゝろなく。盡せぬ泪の雫は窓うつ雨よりもなり。いとせめてわびはつるなぐさみに。さそふ水だにあらばと朝夕のこと草に成ぬるを。そのころ後の親とかたのむべきことはりも淺からぬひとしも。遠つあふみとかや聞もはるけき道を分て。都のものもうでせんとてのぼりきたるに。何となくこまやかなる物語などするつゐでに。かくてつく〴〵とおはせんよりは。ゐなかの住ゐもみつゝなぐさみたまへかし。かしこも物さはがしくもあらず。心すまさんひとはすみぬべきさまなるなど。なをざりなくいざなへど。さすがひたみちにふりはなれなん都のなごりも。いづくをしのぶこゝろにか。心ぼそくおもひわづらはるれど。あらぬすまゐに身をかへたると思ひなしてとだに。うきをわするゝたよりもやとあやなく思ひたちぬ。くだるべき日にもなりぬ。よふかくみやこを出なんとするに。ころは神無月の廿日あまりなれば。有明の光もいと心ぼそく。風の音もすさまじく身にしみとをる心ちするに。人はみな起さはげど。人しれずこゝろばかりには。さてもいかにさすらふるみのゆくゑにかと。たゞ今になりては心ぼそきことのみおほかれど。さりとてとゞまるべきにもあらねば出ぬるみちすがら。先

かきくらす泪のみさきにたちてこゝろぼそく悲しきことぞなにゝたとふべしとも覺えぬ。ほどなく逢坂山になりぬ。をとに聞し關の清水もたえぬ涙とのみ思ひなされて。

越わふる逢さか山の山水はわかれにたへぬ涙とぞ見る

あふみの國野路といふ處より雨かきくらしふり出て。みやこの山をかへりみれば。霞にそれとだにみえず。隔りゆくもそゞろに心ぼそく。何とて思ひ立けんとくやしきこと數しらず。とてもかくてもねのみなきがちなり。

すみわひて立わかれぬる故里もきてはくやしき旅衣かな

道のほどめとゞまる所々おほかれど。こゝはいづく〳〵ともけぢかくとふべき人もなければ。いづくの野も山もはる〴〵とゆくを。とまりもしらず。人のゆくにまかせてゆめぢをたどるやうにて日數ふるまゝに。さすがならはぬひなのながぢに。おとろへはつる身もわれかのこゝちのみして。みのおはりのさかひにもなりぬ。すのまたとかやひろ〴〵とおびただしき河あり。ゆきゝのひとあつまりて舟をやすめずさしかへるほど。いとところせうかしがましくおそろしきまでのゝしりあひたり。からくしてさるべき人みな渡りはてぬれど。ひと〴〵もこしや馬とまちいづるほど。河のはたにおりゐて。つく〴〵とこしかたをみれば。あさましげなる賤の男ども。むづかしげなるものどもをふねにとりいれなどする程。なにごとにかゆゝしくあらそひて。あるひは水にたふれいりなどするにも。見なれずものおそろしきに。かゝるわたりをさへ隔はてぬめと思ふには。いとゞなみだおち增りてしのびがたく。かへらむほどをだにしらぬこゝろもとなさよ。過きつる日數のほどなきに。とまる

る人々のゆくすゑをおぼつかなく戀しきことゝもさま〴〵なれど。隅田がはらならねばことゝふべきみやこ鳥もみえず。

思ひいてゝ名をのみ慕ふ都鳥あとなき浪にねをやなかまし

此國になりてはおほきなるかはいとおほし。なるみのうらのしほひがた。音にきゝけるよりもおもしろく。濱ち鳥むら〳〵にとびわたりて。海士のしわざにとしふりにける鹽がまどものおもひ〳〵にゆがみたてるすがたども。みなれずめづらしきこゝちするにも。思ふことなくて都のともにもうちぐしたる身ならましかばと。人しれぬこゝろのうちのみさまざまくるしくて。

これやさはいかになるみの浦なれは思ふ方には遠さかる覽

みかはの國八はしといふところをみれば。これも昔にはあらずなりぬるにや。はしもたゞひとつぞみゆる。かきつばたおほかる所と聞しかども。あたりの草もみなかれたるころなればにや。それかとみゆる草木もなし。なりひらのあそんのはる〴〵きぬるとなげきけんも思ひ出らるれど。つましあればにや。さればさらんとすこしおかしくなりぬ。みやこいでてはるかになりぬれば。かの國の中にもなりぬ。はまなのうらぞおもしろきところなりける。波あらきしほの海路。のどかなる水うみのおちいたるけぢめに。はる〴〵と生つゞきたる松のこだちなど。繪にかゝまほしくぞみゆる。おちつきどころのさまをみれば。こゝかしこにすこしおろかなる家ゐどものなかには。おなじかや屋どもなどさすがにせばからねど。はかなげなるあしばかりにて結びをけるへだてども。かげとまるべくもあらず。かりそめなれどげにみやもわらやもと思ふには。かくてしもなか〳〵にしもあらぬさま也。うしろ

は松ばらにて前はおほきなる河のどかに流れたり。海いと近ければ。湊のなみこゝもとにきこえて。鹽のさすときはこの河の水さかさまに流るゝやうに見ゆるなど。さまかはりていとおかしきさまなれど。いかなるにかこゝろとまらず。日數ふるまゝに都のかたのみ戀しく。ひるはひめもすにながめ。よるは夜すがら物をのみ思ひつゞくる。あらいその波のをとも枕のもとにおちくるひゞきには。心ならずも夢のかよひぢたえ果ぬべし。

心からかゝる旅ねになけくとも夢たにゆるせおきつしら波

不二の山はたゞこゝもとにぞみゆる。雪いとしろくてこゝろぼそし。風になびくけぶりのするもゆめのまへに哀なれど。うへなきものはと思ひけつこゝろのたけぞものおそろしかりける。かひのしらねもいとしろくみわたされたり。かくてしも月の末つかたにもなりぬ。

都のかたより文どものあまたあるをみれば。いとおさなくよりはぐくみし人。はかなくも見すてられて。心ぼそかりし思ひに。やまひになりてかぎりになりたるよしを。とりのあとのやうに書つゞけておこせたるをみるに哀にかなしくて。よろづをわすれていそぎのぼりなんとするは。人のおもふらんことゞものさはがしくかたはらいたければ。とにかくにさはるべき心ちもせねば。にはかにいそぎたつを。道もいと氷とぢて。さはりがちにあやうかるべきを。たゞ今はか〴〵しきうちそふひともなくてなど。さま〴〵とゞむる人も多かりければ。思ひわびてねのみなかるゝを。みるひとも心ぐるしくとて。ともすべきものどもなど。誰かれと定めてのぼるべきになりぬ。いとうれしけれど。とにかくに思ひわけにしことなく。なにと又みやこへかへらんとあぢきな

くものうし。こゝとてもまた立歸らむ事もかたければ。ものごとになごりおほかるこゝちするにも。うちつけにものむつかしき心のくせになむ。つねより居つるはしらのあら〳〵しきが。なつかしからざりつるも。立はなれなんはさすがに心ぼそくて。人みわくべくもあらず。ちいさく書つくれど。めはやき山賤もやとつゝましながら。

忘るなよあさきのはしらかはらすはまたきて馴る折も社あれ

このたびはいと人ずくなに心ぼそけれど。都をうしろにてこしおりのこゝちには。こよなく日數のすぐるも戀しきこゝちするぞ。あやにくに我こゝろより思ひたちていでぬれど。われながら定めなく旅の程も思ひしられざれど。いとはずに日數もうらゝかにとゞこほる所もなかりけるを。ふはの關になりて雪ただふりに降くるに。風さへまじりて吹雪もかきくれぬれば。關屋ちかくたちやすらひたるに。關守のなつかしからぬおもゝちとりにくく。なにをがなとゞめんと。みいだしたるけしきもいとおそろしくて。

かきくらす雪まなしはしまつ程にやかてとゝむるふはの關守

京に入日しも雨降いでて。鏡の山も曇りてみゆるを。くだりしおりもこの程にて雨降出たりしぞかしと思ひいでて。

このたびは曇らは曇れ鏡山ひとたのみやこのはるかならねは

かくおもひつゞくれど。誠にかの人を都はちかき心のみばかりにて。いつを限りにと思ひかへすぞまたかきくらす心ちしける。日たくるまゝに。雨ゆゝしく晴て。しろき雲おほかる山おほかれば。いづくにかと尋ぬれば。ひらの高ねやひえの山などに侍るといふを聞に。はかなき雲さへなつかしくなりぬ。

きみもさはよそのなかめやかよふらん都の山にかゝる白雲

暮はつるほどにゆきつきたれば。思ひなしにや。こゝもかしこもなをあれまさりたる心ちして。所々もりぬれたるさまなど。なにゝ心のとゞまるべくもあらぬをみやるも。いとはなれまうきあばらやの軒ならんと。そゞろにみるもあはれなり。おい人はうちみえてこよなくおこたりざまにみゆるも。うきみをたればかりかうまでしたはんと哀も淺からず。その後は身をうき草にあくがれし。こゝろもこりはてぬるにや。つく〴〵とかゝる蓬がそまに朽はつべき契こそはと。身をも世をも思ひしづむれど。したはぬこゝちなれば又なりゆかむはていかゞ。

我よりは久しかるへき跡なれと忍はぬ人はあはれともみし

右轉寢記以扶桑拾葉集校合了

孔安國孝經序云。魯共王使人壞夫子講堂。於壁中石函得古文孝經二十二章

萬葉十二　水莖之崗乃田葛葉緒吹變面知兒等之不見頃鴨

群書類從卷第三百三十二

紀行部六

いさよひの日記

阿佛

むかしかべのなかよりもとめいでたりけんふみの名は〔をイ〕。今の世の人の子は夢ばかりも身のうへのこととはしらざりけりな。みづぐきのをかのくずはかへす〴〵もかきをくあとたしかなれども。かひなきものはおやのいさめなりけり。又けんわうの人をすて給はぬまつりごとにももれ。ちうしんの世を思ふなさけにもすてらるゝものは。かずならぬ身ひとつなりけりとおもひしりながら。又さてしもあらで。なをこのうれへこそやるかたなくかなしけれ。さらにおもひつゞくれば。やまとうたのみちは。たゞまことすくなくあだなるすさみばかりとおもふ人もやあらん。日のもとのくにゝあまのいはとひらけしとき。よものかみたちのかぐらのことばをはじめて。世をおさめものをやはらぐるなかだちとなりにけるとぞ。このみちのひじりたちはしるしをかれたり。さても又集をえらぶ人はためしおほかれど。二たび勅をうけて世々に聞えあげたる家は。たぐひなをありがたくやありけん。そのあとにしもたづさはりて。みたりのをのこゞども。もゝちのうたのふるほぐどもを。いかなるえにかありけむ。あづかりもたることあれど。

按將軍執權次第 將軍惟康親王 執權相摸守時宗

古今雜下 文屋のやすひてかみかはのそうになりてあかたみにはえいでたたしやといひやれりける返事によめる 小野小町 佗ぬれはみをうき草のねをたえてさそふ水あらはいなんとぞおもふ

後撰冬 よみ人しらす 神無月ふりみふら

道をたすけよ。こをはぐくめ。のちの世をとへとて。ふかき契りをむすびをかれしほそ川のながれも。ゆへなくせきとゞめられしかば。跡とふのりのともし火も。道をまもり家をたすけむおやこの命も。もろともにきえをあらそふとし月をへて。あやうく心ぼそきながら。なにとしてつれなくけふまではながらふらんおしからぬ身ひとつはやすく思ひすつれども。子を思ふ心のやみはなをしのびがたく。道をかへりみる恨はやらんかたなく。さても猶あづまのかめの鏡にうつさむは〔イモ〕。くもらぬかげもやあらはるゝと。せめて思ひあまりて。よろづのはゞかりをわすれ。身をようなき物になしはてゝ。ゆくりもなくいざよふ月にさそはれいでなんとぞ思ひなりぬる。さりとて文屋のやすひでがさそふ水にもあらず。すむべき國もとむるにもあらず。比は三冬〔建治三〕たつはじめのさだめなきそらなれば。ふりみふらずみ時雨もたえず。あらしにきおふ木のはさへ。なみだとゝもにみだれちりつゝ。ことにふれて心ぼそくかなしけれど。人やりならぬ道なれば。いきうしとてもとゞまるべきにもあらで。なにとなくいそぎたちぬ。めかれせざりつる程だに。あれまさりつる庭もまがきも。ましてと見まはされて。したはしげなる人々の袖のしづくも。なぐさめかねたる中にも。侍従大〔按相摸守〕夫などのあながちにうちくつしたるさま。いと心ぐるしければ。さま〴〵いひこしらへ。ねやのうちをみれば。むかしの枕さへさながらかはらぬをみるにも。今さらかなしくて。かたはらにかきつく。

とゞめおくふるき枕の塵をだに我たちさらば誰か拂はん

代々にかきをかれけるうたのさうしどものおくがきなどして。あだならぬかぎりをえりし

めすみさなきた時雨そ冬のはしめなりける　古今離別　源さね　人やりの道ならなくに大かたはいきうしといひていさかへりこん　爲相卿　公卿補任云文永二四十三従五下〔三品〕同五八廿四従五上同八四一侍従同十二正十八兼美作權守建治元八十六復任弘安二八十二正五下〔元格輔〕改一相同六五廿九復廿

だゝめて。侍従のかたへをくるとて。かきそへたる歌。

和歌の浦にかきとゝめたる藻鹽草是を昔のかたみともみよ

あなかしこよこなみかくな濱千鳥一かたならぬ跡を思はゝ

是を見て。じゞうのかへりごと。いととくあり。

終によもあたにはならし藻鹽草かたみをみよの跡に殘せは

まよはまし教さりせは濱千鳥一かたならぬ跡をそれとも

このかへりごといとおとなしければ。心やすくあはれなるにも。昔の人にきかせたてまつりたくて。又うちしほれぬ。大夫のかたはらさらずなれきつるを。ふりすてられなむなごり。あながちにおもひしりて。手ならひしたるをみれば。

はるゝゝと行先遠く慕はれていかにそなたの空をなかめん

とかきつけたる。ものよりことにあはれにて。おなじかみにかきそへつ。

つくゝゝと空なかめそ戀しくは道遠くともはや歸りこむ

とぞなぐさむる。山よりじゞうのあにのりし〔濟承〕もいでたちむとておはしたり。それもいと心ぼそしとおもひたるを。この手ならひどもをみて。又かきそへたり。

あたにのみ涙はかけし旅衣心の行てたちかへるほと

とは。こといみしながら涙のこぼるゝを。あららかにものいひまぎらはすも。さまゞゝ哀なるを。〔慶融〔承遍（系圖）〕〕あざりのきみは山ぶしにて此人〔ゝイ〕よりは兄なり。此たびのみちのしるべに従ひ下らむとて出たゝるめるを。この手ならひに又まじらはざらんやはとてかきつく。

たちそふそ嬉しかりける旅衣かたみにたのむ親のまもりは

むすめのこはあまたもなし。たゞひとりにて。此ごろちかきほどの女院〔新陽明〕にさぶらひ給ふ。院〔龜山〕のひめ宮一ところむまれ給〔レイ〕計にて。心づかひもまことしきさまにて。おとなしくおはすれば。宮の御かたのこひしさもかねて巾をくつ

古今離別　をのゝちふるかみちのくのすけにまかりける時にはゝのよめる
たらちねのおやのまもりとあひそふる心はかりはせきなとゝめそ

一代要記云新陽明門院信子建治元年四月　日院號關白左大臣基平公女龜山院女御

いでに。侍從大夫などのことはぐくみおは〔ほイ〕すべきよしもこまかにかきつけて。おくに。

きみなこそ朝日とたのめ古郷に殘るなでしこ霜にからすな

と聞えたれば。御かへりもこまやかにいとあはれにかきて。歌の返しには。

思なく心とゝめは古さとの霜にもかれしやまとなでしこ

とぞある。いつゝのこどもの歌のこりなくかきつゞけぬるも。かつはいとをこがましけれど。おやの心にはあはれにおぼゆるまゝにかきあつめたり。さのみ心よはくて〔はイ〕もいかゞとて。つれなくふりすてつ。あはだぐちといふ所より車はかへしつ。ほどなくあふさかのせきこゆるほどに。

さためなき命はしらぬ旅なれと又あふ坂とたのめてそ行

のぢといふ所はこしかた行さき人もみえず。日は暮かゝりていと物がなしとおもふに。時雨さへうちそゝぐ。

うちしくれ古鄕思ふ袖ぬれて行先遠き野路の篠原

こよひはかゞみといふ所につくべしとさだめつれど。くれはてゝゆきつかず。もり山といふ所にとゞまりぬ。こゝにも時雨なをしたひきにけり。

いとゝ猶袖ぬらせとや宿りけんまなく時雨のもる山にしも

けふは十六日の夜なりけり。いとくるしくてふしぬ。いまだ月のひかりかすかにのこりたるあけぼのに。もり山をいでてゆく。やす川わたるほど。さきだちて行たび人のこまのあしをとばかりさやかにて。きりいとふかし。

旅人はみなもろともにあさたちて駒打わたすやすの川霧

十七日の夜はそのゝしゆくといふ所にとゞまる。月いでて。山のみねに立つゞきたる松の木のま。けぢめみ〔がイ〕えていとおもしろし。こゝは夜ふかき霧のまよひにたどりいでつ。さめが井といふ水。夏ならばうちすぎましやとおもふに。

古今二十
みのゝくにせきのふち川たえすして君につかへん萬代まてに

かち人は猶たちよりてくむめり。

むすふ手ににごる心をすゝきなは浮世の夢やさめかゐの水

とぞおぼゆる。

十八日。みのゝ國せきのふぢ川わたるほどに。まづおもひつゞけける。

我ことも君につかへんためならで渡らましやはせきの藤川

ふはの關やのいたびさしは。いまもかはらざりけり。

ひまおほきふはの關屋はこの程の時雨も月もいかにもる覽

關よりかきくらしつるあめ。時雨に過てふりくらせば。みちもいとあしくて。心より外に。かさぬひのむまやといふ所に暮はてねどとゞまる。

旅人はみのうちはらふ夕暮の雨にやとかるかさぬひの里

十九日。又こゝを出でゆく。よもすがらふりつる雨に。ひらのとかやいふ程。みちいとわろくて。人かよふべくもあらねば。水田のおもをぞさながらわたりゆく。あくるまゝに。あめはふらずなりぬ。ひるつかた過ゆく道にめにたつ社あり。人にとへば。むすぶの神とぞきこゆるといへば。

まもれたゝ契結ふの神ならはとけぬ恨にわれまよはさて

すのまたとかやいふ川には。舟をならべて。まさきのつなにやあらん。かけとゞめたるうきはしあり。いとあやうけれどわたる。この川。つゝみのかたはいとふかくて。かた〳〵はあさければ。

かた淵の深き心はありなから人めつゝみにさそせかるらん

假の世のゆきゝとみるもはかなしや身を浮舟を浮橋にして

とぞおもひつゞける。又一宮といふやしろをすぐとて。

一宮名さへなつかしふたつなく三[つ]なき法をまもる成へし

廿日。おはりの國おりどといふむまやをゆく。よきぬみちなれば。あつたのみやへまいりて。

硯とりいでてかきつけてたてまつる歌。

祈るそよわが思ふこと鳴海がたかたひく汐も神のまに〳〵

なるみがたわかの浦かせ隔てすはおなし心に神もうくらん

みつ汐のさしてそきつる鳴海かた神やあはれとみるめ尋て

雨風も神の心にまかすらんわか行さきのさはりあらすな

なるみのかたをすぐるに。しほひのほどなれば。さはりなくひがたを行。折しも濱千鳥いとおほく〳〵さきだちて行も。しるべがほなる心地して。

濱千鳥啼てそさそふ世中に跡とめむとは思はさりしを

すみだ川のわたりにこそありと聞しかど。みやこどりといふ鳥のはしとあしとあかきは。此うらにもありけり。

こととはむ嘴と足とはあかさりし我住かたの都鳥かも

二むら山をこえて行に。山も野もいとゝをくて。日もくれはてぬ。

はる〳〵と二村山を行過て猶すゑたとる野への夕やみ

八橋にとゞまらんといふ。くらさにはしもみえずなりぬ。

さゝがにのくもてあやうき八橋を夕くれかけて渡りぬる哉

廿一日。八はしをいでて行に。いとよくはれたり。山もとゝをきはら野を分行。ひるつかたになりて。もみぢいとおほき山にむかひてゆく。風につれなき所々。くちばにそめかへてけり。ときは木どもゝ立まじりて。あをぢのにしきを見る心ちす。人にとへば宮ぢ山といふ。

時雨けり染る千入のはては又紅葉の錦色かはるまて

此山までは昔みしこゝちするに。ころさへかはらねば。

待けりな昔もこえし宮地山おなし時雨のめくりあふよを

山のすそ野にたけのある所に。かやゝの一みゆる。いかにしてなにのたよりに。かくてすむらんとみゆ。

ぬしや誰山の裾野に宿しめてあたりさひしき竹の一村

日は入はてゝなを物のあやめも分ぬほどにわ

西行法師絵詞云東のかたさまへ行ほとに遠江國天龍のわたりにまかりつきて舟にのりたれは所なしおりよと鞭をもちてうつほとにかしらわれてちなかれてなん西行うちわらひてうれふる色もみえておりけるな

たうとかやいふ所にとゞまりぬ。

廿二日のあかつき。夜ぶかき有明のかげにいでてゆく。いつよりもものがなし。

すみわびて月の都を出しかとうき身はなれぬ有明の影

とぞおもひつゞくる。ともなる人。有明の月さへかさきたりといふをきゝて。

旅人のおなし道にや出つらん笠うちきたる有明の月

たかし山もこえつ。うみ見ゆる程　いとおもしろし。浦かせあれて。松のひゞきすごく。浪いとたかし。

我ためや涙もたかしの濱ならん袖の湊の波はやすまて

いとしろきすざきに。くろきとりの　むれゐたるは。うといふとりなりけり。

白濱に墨の色なるしまつとり筆もをよはゝゑにかきてまし

はまなのはしより　みわたせば。かもめといふ鳥いとおほくとびちがひて。水の底へもいる。岩の上にもゐたり。

鴎ゐる洲崎の岩もよそならす浪のかけこす袖にみなれて

こよひはひくまのしゆくといふところにとゞまる。このところのおほかたの名[名をばイ]は。はま松とぞいひし。したしといひしばかりの人々などもすむ所なり。すみこし人のおもかげもさまざま思ひ出られて。又めぐりあひて　みつる命のほども。かへすがへすあはれなり。

濱松のかはらぬかけを尋きてみし人なみに昔をそとふ

その世にみし人のこむまごなどよびいでてあひしらふ。

廿三日。天りうのわたりといふ。舟にのるに。西行がむかしもおもひいでられて　いと心ぼそし。くみあはせたる舟たゞ一にて。おほくの人のゆきゝにさしかへるひまもなし。

水の淡の浮世にわたる程をみよ早瀬の小舟棹もやすめす

こよひはとをつあふみみつけのこふといふ所にとゞまる。里あれて物おそろし。かたはらに

新古今羇旅　定家卿
ことゝへよおもひおきつの濱千鳥なくなく出しあとの月かけ

水の井あり。
たれかきてみつけの里と聞からにいとゝ旅ねそ空恐ろしき
廿四日。ひるになりてさやの中山こゆる。ことのまゝとかやいふやしろのほどもみぢいとさかりにおもしろし。山かげにて。あらしもをよばぬなめり。ふかくいるまゝに。をちこちのみねつゞきこと山ににず心ぼそくあはれなり。ふもとのさとにきく川といふ所にとゞまる。
越くらす麓の里の夕闇にまつ風をくるさやの中山
あかつきにおきてみれば。月もいでにけり。
雲かゝるさやの中山こえぬとは都につけよ有明の月
河をといとすごし。
わたらむと思ひやかけし東路に有と計はきく川の水
廿五日。きく川をいでて。けふは大井川といふ河をわたる。水いとあせて。きゝしにはたがひてわづらひなし。かはらいくりとかや。いとはるか也。水のいでたらんおもかげをしはからる。
思ひいづる都のことは大井河幾瀬の石のかずもをよはし
うつの山こゆるほどにしも。あざりのみしりたる山ぶしゆきあひたり。夢にも人をなど。むかしをわざとまねびたらん心地して。いとめづらかにおかしくもあはれにもやさしくもおぼゆ。いそぐ道なりといへば。文もあまたはえかゝず。たゞやむごとなきところひとつにぞをとづれきこゆ。
我心うつゝともなしうつの山夢にも遠き昔こふとて
つたかえでしくれぬひまもうつの山涙に袖の色ぞこがるゝ
こよひはてごしといふところにとゞまる。なにがしの僧正とかやののぼるとていと人しげし。やどかりかねたりつれど。さすがに人のなきやどもありけり。
廿六日。わらしな川とかやわたりて。おきつの濱にうちいづ。なくなくいでしあとの月かげ

續古羇旅　安嘉門院右衛門佐
さてもわれいかになるみの浦なれは思かたにはとをさかるらん

白氏文集縛戎人云
朝湌飢渇費杯盤
夜宿腥臊汚牀席

など。まづおもひいでらる。ひる立いりたる所にあやしきつげのをまくらあり。いとくるしければうちふしたるに。すゞりもみゆれば。まくらのしやうじに。ふしながらかきつけつ。

なをさりにみるめ計をかりまくら結びをきつと人にかたるな

暮かゝるほど。きよみが關をすぐ。岩こす波のしろききぬをうちきするやうにみゆるいとおかし。

清見がた年ふる岩にこととはむ波のぬれ衣幾かさねきつ

ほどなくくれて。そのわたりの海ちかきさとにとゞまりぬ。浦人のしわざにや。となりよりくゆりかゝるけぶりいとむづかしきにほひなれば。夜のやどなまぐさしといひける人のことばも思ひいでらる。よもすがらかぜいとあれて。浪たゞ枕の上にたちさはぐ。

ならはずよ余所に聞こし清見潟あら磯浪のかゝるねさめ（まくらイ）は

ふじの山をみればけぶりもたゝず。むかしちちの朝臣にさそはれて。いかになるみの浦なればなどよみし比。とをつあふみの國までは見しかば。ふじのけぶりのするもあさ夕たしかにみえし物を。いつのとしよりかたえしととへば。さだかにこたふる人だになし。

誰かたになびきはてゝかふしのねの煙の末のみえずなる覽

古今の序のこと葉までおもひ出られて。

いつの世の麓の塵かふしのねを雪さへ高き山となしけん

朽はてし長柄の橋をつくらばやふしの煙もたゝずなりなば

こよひは浪のうへといふ所にやどりて。あれたるをとさらにめもあはず。

廿七日。あけはなれてのちふじ河わたる。あさ川いとさむし。かぞふれば十五せをぞわたりぬる。

冴わびぬ雪よりおろすふし河の川風こほる冬の衣手

けふは日いとうらゝかにて。たごの浦にうちいづ。あまどものいさりするをみても。

心からおりたつたこのあま衣ほさぬ恨と人にかたるな

とぞいはまほしき。いづのこふといふ所にとどまる。いまだ夕日のこるほど。みしまの明神へまいるとて。よみてたてまつる。

あはれとやみしまの神の宮柱唯こゝにしもめぐりきにけり

をのつからつたへし跡も有ものを神はしるらんしき嶋の道

尋きてわかこえかゝる箱根路を山のかひある知へとぞ思ふ

廿八日。いづのこふをいでて はこねぢにかゝる。いまだ夜深かりければ。

玉くしけ箱根の山をいそけとも猶明かたき横雲の空

あしがら山は みちとをしとて。はこねぢにかかるなりけり。

ゆかしさよ其方の雲をそはたてゝよそになしぬる足柄の山

いとさかしき山を。くだる人のあしもとゞまりがたし。ゆさかとぞいふなる。からうじてこえはてたれば。又ふもとにはや川といふ川あり。まことにはやし。木のおほくながるゝをいかにとゝへば。あまのもしほ木をうらへいださむとてながすなりといふ。

東路のゆさかを越てみわたせはしほ木なかるゝはや川の水

ゆさかより浦にいでて。日くれかゝるになをとまるべき所遠し。いづの大しままで みわたさるゝ海づらをいづことかいふととへば。しりたる人もなし。あまの家のみぞある。

あまのすむその里の名も白浜のよする渚に宿やからまし

まりこ川といふ川をいとくらくてたどりわたる。こよひはさかはといふ所にとゞまる。あすはかまくらへいるべしといふなり。

廿九日。さかはをいでて濱路をはるぐと行。あけはなるゝうみづら。いとほそき月いでたり。

浦路ゆく心ほそさを波間より出てしらする有明の月

なぎさによせかへる浪のうへにきりたちて。あまたありつるつりぶねみえずなりぬ。

あま小舟漕行かたをみせしとや浪に立そふ浦の朝霧

常盤井相國實氏公一女後嵯峨院中宮後深草龜山院母后

後高倉院姫宮四條院准母

みやことをくへだたりはてぬるも。なを夢のこゝちして。

立はなれよもうきなみはかけもせし昔の人の同し世ならは

あづまにてすむ所は月かげのやつとぞいふなる。浦近き山もとにて風いとあらし。山寺(極樂寺)のかたはらなれば。のどかにすごくて。浪の音松のかせたえず。都のをとづれはいつしかおぼつかなきほどにしも。うつの山にてゆきあひたりし山ぶしのたよりにことづけ申たりし人の御許より。たしかなるたよりにつけて。ありし御返しと覺しくて。

旅衣涙をそへてうつの山しくれぬひまもさそしくるらん

ゆくりなくあくかれ出し十六夜の月やをくれぬ形見成へき

都をいでしことは神無月十六日なりしかば。いざよふ月をおぼしめしわすれざりけるにやと。いとやさしくあはれにて。たゞ此(御イ)返事ばかりをぞ又きこゆ。

めくりあふ末をそ頼むゆくりなく空にうかれし十六夜の月

さきのうひやうゑのかみ(爲教)の御女。歌よむ人にて。ちよく撰にもたびたび入給へり。大宮のゐんの權中納言ときこゆ。(る人イ)歌のことゆへ朝夕申なれしかばにや。道のほどのおぼつかなさなどをとづれ給へる文に。

はるはると思ひこそやれ旅衣涙しくるゝほとやいかにと

返しに。

思ひやれ露も時雨も一つにて山路分こし袖の雫を

此せうと(爲家)のためかぬの君も。おなじさまにおぼつかなさなど(くイ)かきて。

古郷は時雨にたちし旅衣雪にやいとゝさえまさるらん

かへし。

旅衣浦かせさえて神なつきしくるゝ空に雪そふりそふ

しきかんもむゐん(式乾門院)(利子)のみくしげどのときこゆるは。こが(通光)の太政大臣の御女。これも續後撰よりうちつゞき二たび三たびの家いへのうちきゝ

にも。歌あまたいり給へる人なれば。御名もかくれなくこそ。いまは安嘉門院邦子に御かたとてさぶらひ給。あづまぢおもひ立しあすとて。まかり申のよし北白川安嘉門院御在所どのへまいりしかど。見えさせ給はざりしかば。こよひばかりのいでたちものさはがしくて。かくとだにきこえあえず。いそぎいでしにも。心にかゝりて。をとづれきこゆ。草の枕ながら年さへも暮ぬる。心ぼそさ雪のひまなさなどかきあつめて。

消かへりながむる空もかきくれて程は雲ゐぞ雪に成行

などきこえたりしを立かへり。その御返したよりあらばと心にかけまいらせつるを。けふはしはすの廿二日。文まちえて。めづらしくうれしさ。まづなに事もこまかに申たく候に。こよひは御かたたがへのぎやうかうの御うへとて。まぎるゝほどにて。おもふばかりもいかゞとほいなうこそ。御たびあすとて御まいり有ける日しも。みねどののもみぢ見にとて。わかき人々さそひにしほどに。後にこそかゝる事どもきこえ候しか。などやかくとも御尋候はざりし。

一かたに袖やぬれまし旅衣たつ日をきかぬ恨なりせば

さてもそれより雪になり行と。をしはかりの御返事は。

かきくらし雪ふる空のながめにも程は雲ゐの哀をぞしる

とあれば。このたびは又たつ日をしらぬとある御返しばかりをぞきこゆる。

心からなにうらむらん旅衣たつ日をだにもしらずがほにて

暁たよりありときゝて。よもすがらおきゐて。都の文どもかく中に。ことにへだてなくあはれにたのみかはしたるあね君に。おさなき人人の事さま〴〵にかきやるほど。れいの涙かぜはげしくきこゆれば。たゞ今あるまゝのことをぞかきつけける。

古今戀三　友則
しきたへの枕のしたに海はあれと人をみるめはおひすそありける

　夜もすから涙もふみもかきあへす磯こす風に獨おきゐて

又おなじさまにて。古郷には戀しのぶをとうとのあまうへにも。ふみたてまつるとて。いそものなどのはしぐ〳〵もいさゝかつゝみあつめて。

　いたつらにめかり鹽やくすさひにも戀しやなれし里の蜑人

ほどへて。このをとゝいふたりのかへりごといとあはれにて。みればあねぎみ。

　玉つさをみるに涙のかゝる哉磯こす風は聞こゝちして

このあねぎみは。中のゐんの中將と聞えし人のうへなり。今は三位入道とか（はイ）おなじ世ながらとをざかりはてゝをこなひゐたる人なり。そのをとうとのきみも。めかりしほやくとある返事さまぐ〳〵にかきつけて。人こふる涙の海はみやこにもまくらの下にたゝへてなど。やさしくかきて。

　もろともにめかり鹽焼浦ならは中々袖に波はかけしを

此人も安嘉門院にさぶらひしなり。つゝましくする事どもをおもひつらねてかきたるもいとあはれにもおかし。ほどなく年くれて春にもなりにけり。かすみこめたるながめのたどたどしさ。谷の戸はとなりなれども。うぐひすのはつねだにもをとづれこず。おもひなれにし春の空はしのびがたく。むかしの戀しきほどにしも。又みやこのたよりありとつげたる人あれば。れいの所々へのふみかく中に。いざよふ月とをとづれ給へりし人の御もとへ。

　朧なる月はみやこの空ながらまたきかさりし波のよな〳〵

など。そこはかとなきことどもをかきて聞えたりしを。たしかなる所よりつたはりて。御かへりごとをいたうほどもへずまちみたてまつる。

　れられしな都の月を身にそへてなれぬ枕の波のよな（るイ）〳〵

權中納言のきみは。まぎるゝことなくうたを

よみ給ふ人なれば。此ほどてならひにしたる歌どもかきあつめてたてまつる。うみちかき所なれば。かひなどひろふおりもなぐさの濱ならねば。なをなき心ちしてなどかきて。

いかにしてしはし都を忘貝濱のひまなく我そくたくる

しらさりし浦山風も梅かかは都ににたるはるの明ほの

花くもりなかめて渡る浦風に霞たゝよふ春のよの月

東路の磯山かせのたえまより波さへ花のおもかけにたつ

宮こ人おもひもいては東路の花やいかにとたとつれてまし

などたゞ筆にまかせておもふまゝに。いそぎたるつかひとて。かきさすやうなりしを。又ほどへず返しし給へり。日ごろの おぼつかなさも。此ふみにかすみ晴ぬる心ちしてなど侍り。

たのむそよ汐干に拾ふうつせ貝かひある波の立かへる世を

くらへみよ霞のうちのはるの月はれぬ心はおなしなかめを

しら濱の色もひとつに散にたる思ひやるさへおもかけにたつ

東路の櫻をみても忘すは都の花を人やとはまし

やよひの末つかたわか〳〵しきわらはやみにや。日まぜにおこること二たびになりぬ。あやしうしほれはてたる心ちしながら。三たびになるべきあかつきよりおきゐて。佛のおまへにて。心を一にして。ほくゑきやうをよみつ。そのしるしにや。なごりもなくおちたるおりしも。都のたよりあれば。かゝる事こそなど古郷へもつげやるついでに。れいの權中納言の御もとへ。たびの空にてあやうきほどの心ぼそさも。さすが御法のしるしにや。けふまではかけとゞめてとかきて。

いたつらにあまの鹽燒煙ともたれかはみまし風に消なは

と聞えたりしを。おどろきてかへりごととくし給へり。

消もせしわかの浦路に年をへて光をそふるあまのもしほ火

御きやうのしるしいとたふとくて。

たのもしな身にそふ友と成にけりたへなる法の花の契りは

九條廢帝姫宮

後鳥羽院皇女類聚大補任云建保五年熙子内親王（御年十三）九月十四日立野宮同十九日着

續後撰戀五

にこりに。にうきみこかるゝもかりふねはてはゆきゝのかけたにもみす

卯月のはじめつかた。たよりあれば。又おなじ人の御もとへ。こぞのはる なつのこひしさなどかきて。

見し世こそかはらざるらめ暮はてし春より夏にうつる梢も

夏衣はやたちかへて都人今やまつらん山ほとゝぎす

そのかへし又あり。

草も木もこそみしまゝにかはらねと有しにもにぬ心ちのみして

さてほとゝぎすの御たづねこそ。

人よりも心つくして郭公たゞ一聲をけふぞ聞つる

さねかたの中將（續後撰）の五月まで時鳥（りかイ）きかで。みちのくにより。都にはきゝふるすらん郭公 せきのこなたの身こそつらけれとかや申されたる事の候なる。そのためしとおもひいでられて。此文こそことにやさしくなどかきてをこせ給へり。さるほどにう月のすゑになりければ。ほとゝぎすの はつねほ のかにも おもひ たえたり。人づてに聞ば。ひきのやつといふ所にあまた聲なきけるを。人きゝたり などい ふをきゝて。

忍ひれはひきのやつなる郭公雲ゐにたかくいつかなのらん

などひとり 思へどもそのかひもなし。もとより東路は。みちの おくまで。昔より時鳥まれなるならひにやありけん。ひとすぢに 又なかずはよし。稀にもきく人ありけ るこそ人わきしけるよと心づくしにうらめ しけれ。又くは（[illegible]門院）とくもんゐむ（義子）の新中納言ときこ ゆるは。京極中（定家）納言の御むすめ。ふか草のさきの齋宮（熙子）ときこえしに。ちゝの中納言のまいらせをき給へるまゝにて年へ給にける。此女院は齋宮の御子にしたてまつり給へりしかば。つたはりてさぶらひ給なり。うきみこがるゝもかり舟などよみ給へりし民部卿のすけのせうとにてぞおはしける。さる人のこにて。あやしきう たよみて。人には きかれじとあながちにつゝみ給

帝王編年記云。弘安元年五月十二日巳時吉日。神輿三基入洛。是依ニ園城寺金堂供養ニ也。十六日日吉神輿各皈座。

しかど。はるかなるたびの空おぼつかなさに。哀なる事どもをかきつゞけて。

いか計子を思ふつるのとひ別れならはぬ旅の空になくらんと。文のことばにつゞけて。歌のやうにもあらずかきなし給へるも。人よりはなをざりならずおぼゆ。御かへり事は。

それゆへにとひ別ても蘆たつの子を思ふかた（爲家）は猶そ戀しき

ときこゆ。そのついでに。故入道大納言。草のまくらにもたちそひて。夢にみえさせ給ふよしなど。この人ばかりやあはれともおぼさむとて。かきつけてたてまつる。

宮こまてかたるも遠し思ひねに忍ふ昔の夢のなこりを

はかなしや旅ねの夢にまよひきてさむれはみえぬ人の俤

などかきてたてまつりしを。又あながちにたよりたづねてかへりごとし給へり。さしも忍び給へりしも折から成けり。

東路の草の枕は遠けれとかたれはちかきいにしへの夢

いつくよりたひねの夢にかよふらん思ひをきつる露を尋て

などの給へり。夏のほどは。あやしきまで音づれもたえておぼつかなさも一かたならず。都のかたはしがのうら浪たち。山三井寺のさはぎなどきこゆるもいとゞおぼつかなし。からうじて八月二日ぞつかひまちえて。日ごろよりをきたりける人々のふみどもとりあつめてみつる。じゞう（爲相十六）の君のもとより五十首の和歌をよみたりけるとて。きよがきもしあへずくだされたり。うたもいとおかしくなりまさりけり。五十首に十八首てんあひぬるもあやしく。心のやみのひがめこそあるらめ。その中に。

心のみ（こそイ）へたてすとても旅衣山路かさなるたちの白雲

とあるうたをみるに。旅の空を思ひをこせてよまれたるにこそはと。心をやりてあはれなれば。その歌のかたはらに。もじちいさく返事をぞかきそへてやる。

常楽記云、嘉暦三年十一月八日暁月房逝去終焉歌ムトセアマリヨトセノ冬ノナカキヨニウキヨノユメヲミハテヌルカナ是ニヨツテ按スルニ弘安元年ハ爲守十四也諸本十六ニ作ルモノハ非ナランカ

戀しのふ心やたくふ朝夕に行てはかへるなちのしら雲

又おなじたびのだいにて。

かりそめの草の枕のよな〳〵を思ひやるにも袖そ露けき

とある所にも。又かへりごとをぞかきそへたる。

秋ふかき草の枕に我ぞなくふりすてゝこしすゞ蟲のねを

又此五十首のうたのおくに。こと葉をかきそふ。大かた歌のさまなどしるしつけておくに昔の人の歌。

是なみはいか計かとおもひつる人にかはりてね社なかるれ

とかきつく。じゞうの をとうとためもり[爲守十四]の君のもとよりも。廿首[三十イ]のうたをゝくりて。これにてんあひて。わろからん事をこまかにしるしたべといはれたり。ことしは十六ぞかし。歌のくちなればやさしくおぼゆるも。返すぐ〳〵心のやみとかたはらいたくなむ。これも旅のうたには。こなたを思ひてよみたりけりとみゆ。

くだりしほどの日記をこの人々の許へつかはしたりしをよまれたりけるなめり。

立別れふしの煙をみても猶心ほそさのいかにそひけん

又是も返しをかきつく。

かりそめに立別ても子をおもふ思ひをふしの煙とそみし

また權中納言の君。こまやかに文かきて。くだり給ひし後は。うたよむ友もなくて。秋に成てはいとゞおもひいできこゆるまゝに。ひとり月をのみながめあかしてなどかきて。

東路の空なつかしきかたみたに忍ふ涙にくもる月かけ

此御返事これも古鄕の戀しさなどかきて。

かよふらし宮この外の月みても空なつかしきおなしなかめは

都の歌ども。こののちおほくつもりたり。又かきつくべし。

しき嶋や　やまとの國は　あめつちの　ひらけ初し
むかしより　岩戸を明て　おもしろき　かくらのことは[もイ]
うたひてし　されはかしこき　ためしとて　ひしりの御世の
みちしるく[すてられすイ]　人のこゝろを　たれとして　萬のわさを

ことのはに　なに神までも　あはれとて（なひくめりイ）　八嶋の外の
よつのうみ　波もしつかに　おさまりて　空ふく風も
やはらかに　枝もならさす　ふるあめも　時さたまれは
きみ〳〵の　みことのまゝに　したかひて　わかの浦路の
もしほくさ　かきあつめたる　あとおほく　それか中にも
名をとめて　三代までつきし　人のこの　親のとりわき
ゆつりてし　そのまことをは　もちなから　思へはいやし
しなのなる　そのはゝきゝの　そのはらに　たねをまきたる
とかとてや　世にもつかへよ　いけるよの　身をたすけよと
契りをく　すまとあかしの　つゝきなる　ほそ川山の
山川の（谷イ　にイゝ）　わつかにいのち　かけひとて　つたひし水の
みなかみも　せきとめられて　いまはたゝ　くかにあかれる
いをのこと　かちをたえたる　ふねのこと　よるかたもなく
わひはつる　こを思ふとて　よるのつる　なく〳〵宮こ
いてしかと　身はかすならす　かまくらの　世のまつりこと
しけゝれは　きこえあけてし　ことの葉も　枝にこもりて
むめの花　よとせの（弘安三）春に　なりにけり　行衛もしらぬ
なかそらの　風にまかする　ふるさとは　軒端もあれて
さゝかにの　いかさまにかは　なりぬらん　世々の跡ある
玉つさも　さて朽はては　あしはらの　道もすたれて
いかならん　是をおもへは　わたくしの　なけきのみかは
世のためも　つらきためしと　なりぬへし　行さきかけて
さま〳〵に　かきのこされし　ふての跡　かへす〳〵も
いつはりと（いふ人あらはイ）　おもはましかは　ことはりを　たゝすの森の
ゆふしてに　やよやいさゝか　かけてとへ　みたりかはしき
すゑの世に　あさはあとなく　なりぬとか　いさめをきしを
わすれすは　ゆかめることも　またたれか　引なをすへき
とはかりに　身をかへりみす　たのむそよ　その世をきけは
さてもさは　のこるよもきと　かこちてし　人のなさけも
かゝりけり　おなしはりまの　さかひとて　一つなかれを
くみしかは　野中の清水　よとむとも　もとの心に
まかせつゝ　とゝこほりなき　水くきの　跡さへあらは
いとゝまた　つるか岡への　朝日かけ　八千代の光
さしそへて　あきらけき世の　なをもさかへん

なかかれと朝夕いのる君か代をやまとこと葉にけふそのへつる

のこるよもぎとかこちけるといふ所のうらがきに。くはうたいこぐうの大夫しゆんぜいの卿の御むすめ。ちゝのゆづりとて。はりまのくにこしべのしやうといふ所をつたへしられけ

新勅雑二
平泰時
世中にあさは跡なく成にけり心のままのよもきのみして

るを。さまたげおほくて。武藏のせんじ（平泰時）へ。こ
となるそせうにはあらでまいらせられける
歌。しんちよくせんにも入侍とやらん。心のま
まのよもぎのみしてといふうたをかこちて申
されける歌。
君ひとり跡なきあさのみたしらは殘る蓬がかずをことはれ
とよまれければひやうぢやうにもをよばす。
廿一かでうの地とうのひはうをみなとゞめら
れけり。そののち野中のしみづをすぐとて。
續古　わすられぬもとの心のありかほに野中のしみつかけをたにみし
とよまれたるも。そのこしべのしやうへくだ
られけるときのうたにて候。[新勅撰に入て侍
し。永仁六年三月二日書之。」
このあぶつばうと申人は。定家の息爲家の室
也。きんだち五人まし〳〵候。はりまの國ほそ
川のしやうを爲家よりゆづりをかれ候を。爲
氏たふくたるによりて。をうりやう候。そしや
うのためにかまくらへくだられ候時の道の日
記にて候。爲氏もちんぢやうのためにかまく
らへ下向。兩人ともにかまくらにて死去せら
れし。そしやうは爲氏のかたへはつけられず
候しとかや。あぶつは安嘉門院の四條と申人
なり。爲相のはゝなり。

右十六日夜日記以岡山少將光政朝臣筆本書寫以夫木抄
扶桑拾葉集及他本挍合畢

都のつと

宗久

観応の比。一人の世すて人あり。みづから銀山鐵壁をとをる志なしといへども。古へ樹下石上をしめし跡をしたひて。いづくもつゐのすみかならねばとおもひなしつゝ。しらぬひのつくしをたちいでしより。こゝかしこまよひありき侍し程に。いさゝかしるたより有しかば。大江山の雲にふし。いく野の原の露に宿りて。さすらひ侍しほどに。丹波國はや山といふ所に行ぬ。身をかくすべき宿とまではたのまねど。其年をばそこにて過し侍りて。又の春やよひばかりに京へのぼりて二三日侍しほどに。清水北野の宮などへまうでつゝ。それよりあづまのかたへ修行におもひ立侍りき。まだ夜をこめて都をいづ。有明の月のかげ東川の浪にうつりて。なきのこれる鳥の聲〻を里の跡にきこえて。そこはかとなく霞わたれる空のけしきいとおもしろし。やがてあふさか山をこゆ。杉の下道いまだこぐらく。關の岩かどふみならすもたど〳〵しきほど。都のかたいつしかへだたり行も。三千里の外のこゝちして。ふるさとをわかれしよりもなを心とまり侍しにや。其日は石山につやし侍りても。一すぢに無上菩提心の願ひを祈申き。あくれば下向の人にともなひて。日出るほどに志賀の浦をすぎ。こぎ行舟の跡はるかにみわたされて。かの滿誓沙彌がなにゝたとへんと詠じけるふぜいも心にうかび侍り。えいざんれうごんゐ先德。和歌はけろんのもてあそびなりとてとどめられけるが。ある時惠心院にてあけぼのに湖水を見いだしておはしけるに。おきに舟の行をみて。人のこのうたを詠吟しけるをきき給て。觀念の助緣と成ぬべかりけりとて。そ

古今雑上
かゝみ山いさ立よりてみてゆかん年へぬる身は老やしぬると

新古今羇旅
年たけて又こゆへしとおもひきやいのちなりけりさ夜の中山

古今戀一　よみ人しらず
するかなる田子のうらなみたゝぬ日はあれともきみをこひぬ日はなし

ののち廿八品十樂の歌などおほくよまれけると申つたへ侍るも。さもやとおぼえ侍り。鏡山をすぐるとても。すみ染にあらたむるわがおもかげもはゞかりある心地して。いざたちよりてともおぼえ侍らず。

立よりてみつとかたるな鏡山名を世にとめむ影もうけれは

さてあづまぢのたびの日かずもやう／＼つもりゆけば。名だかきところ／＼。ふはの關。なるみ潟。たかし山。二むら山など過て。さやの中山にもなりぬ。かの西行がまたこゆべしとおもひきやとよめるも。あはれにおもひあはせられぬ。さやの中山さよのなかやまといふ説々あるにや。中納言師仲當國の任にてくだられけるに。土民さよの中山と申侍りけるとて。中古の先達などもさやうによまれて侍るにや。撰集の中にもみをよぶ心地し侍りし。源三位頼政は長山とぞ申ける。此たび一人の老翁のありしにたづね侍しかば。ことやうもなくさやの中山とこたへ侍りき。

こゝは又いつくとゝへはあまひこの答ふる聲もさやの中山

やがてするがの國うつの山をこゆ。蔦の下道もいまだ若葉のほどにて。紅葉の秋おもひやられ侍り。

もみちせは夢とやならんうつの山現にみつる蔦の青葉も

清見が關にとまりて。まだ夜ふかく出侍るとて。おもひつゞけ侍りし。

清見かた波のとさしもあけて行月をはいかによはの關守

たゝぬ日もありときゝし田子の浦なみにも。たびの衣手はいつとなくしほたれがちなり。ふじの山をみわたせば。いとふかくかすみこめて。時しらぬ山とも更にみえず。朝日のかげにたかねの雪なをあざやかにみえて。鏡をかけたるやう也。筆にもをよびがたし。

時しらぬ名をさへこめてかすむ也ふしのたかねの春の曙

伊勢物語
むさしのはけふはなやきそわか草のつまもこもれりわれもこもれり

ふしのねの煙の末は絶にしをふりける雪やきえせざるらん

それよりうき嶋が原を過。はこねにまうづ。げに權現のあらたなる御ちかひならずは。此山のいたゞきにかゝる水あるべしともおぼえず。いとふしぎ也。此所をばこの世ながらのめいどなりと申つたへたるにや。ところのさまもなべてにはかはりたることゞもおほかりし。いつとなく波かぜあれていとすさまじくみゆ。

箱根路や水海あらき山風に明やらぬよのうきぞしらるゝ

さてさがみのくにかまくら山のうちといふ所に行つきて。いにしへゆかりありし人をたづねしに。昔がたりになりぬときゝしかば。はやうすみける所のさまなど見侍りて。いとゞ世のはかなさもおもひしられ侍りき。

みし人の苫の下なる跡とへば空行月も猶かすむなり

そのあたりにかりのやどりをたづねとゞまり侍しに。あんぎやの僧などあまたありし中に。ひたちの國たかをかといふ所にやんごとなきちしきおはすとかたる人侍りしかば。やがてたづねまかりぬ。法雲寺といふ寺あり。宗巳庵主とて。空岩和尚の高弟にておはしけるが。在唐久しくし給ひて。天もくの中峯和尚などにもまみえ給ひけるとかや。世をすつるとならば。かくこそあらまほしくおぼえしかば。其山に三間の茅屋をむすびて一夏を過し侍ぬ。又甲斐國とくさ山に山ごもりひさしき僧ありときゝしかば。かのむろにもたづねまかりて。しばしありて。又ひたちの國へ歸り侍りしに。むさしのゝはてなき道に行くれて。その夜は道づれの僧などあまたありしも。みなかりそめの草の枕をむすびてとゞまり侍りしほどに。此野はむかしもぬす人ありてこそ。けふはなやきそともよまれけるときゝをきしかど。さ

までやはとおもひしに。苔の衣をさへひきてかへりし白波の。あらかりしなごりに。いとど旅の床もものうくこそ侍りしか。

いとはすはかゝらましやは露の身の憂にも消ぬ武藏のの原そのちなをかなたこなたへちしき知識偏參し侍りしに。ちゝぶ山といふ所に年久しくすみてかりにもさとなどへもいでぬひじりありけるを。村の人ひげ僧などなづけたるとかや。いづれの所のいかなる人ともさらにしられず。その所にふゆのほどは侍りて春になりしかばかんづけの國へこえ侍りしに。おもはざるに一夜のやどをかす人あり。やよひのはじめの程なりしに。軒ばの梅のやうやうちりすぎたる木のまに。かすめる月のかげもみやびかなる心地して。所のさまも松の柱竹あめる垣しわたしてゐ中びたる。さるかたにすみなしたるもよしありてみえしに。家あるじいであひて。心あるさまにたびのうれへをとぶらひつゝ。世をいとひそめける心ざしのほどなどこまかにとひきゝて。われもつねなき世のありさまをおもひしらぬにはあらねども。そむかれぬ身のほだしのみおほくて。かゝづらひ侍る程に。あらましのみにてけふまで過しはべりつるに。こよひの物がたりになむ。すてかねける心のをこたりも。今さらおどろかれてなどいひて。しばしはこゝにとゞまりて。道のつかれをもやすめよとかたらひしかど。するにいそぐ事ありしほどに。秋のころかならずたちかへるべきよしちぎりをきていでぬ。その秋八月ばかりに。かの行衛もおぼつかなくて。わざとたちよりてとひ侍りしかば。その人はなくなりて。けふ七日の法事をこなふよしこたへしに。あへなさもいふかぎりなき心地して。などかいますこしいそぎてたづねざりけ

オモフニムロノヤジマモスキテノ下脱文アルヘシ

ん。さしもねんごろにたのめしに。いつはりのある世ながらも。いかに空だのめとおもはれんと。心うくぞ侍りし。さて終のありさまなどたづねきゝしかば。いまはの時までも申出しものをとて。跡の人々なきあへり。有待の身はじめておどろくべきにはあらねども。無常じんそくなるほども今さら思ひしられ侍し。さてもこの人は萬にすける心のありし中にも。和歌の浦波に心をよせ侍しと人々かたりしかば。むかしのそいをたづねて。こゝろざしのゆくところをいさゝかやどのかべにかきつけて出侍ぬ。

過にしやよひの十日あまりの比。ひなのながぢのたよりに梅のにほひをたづね。あづまやの軒ばのほとりに月のなさけをもてあそぶことありき。宿のあるじ夜もすがらむかし今のことをかたり合せ。やまともろこしの歌をいひ出て。旅のおもひをなぐさめ侍しかば。心をかりのやどりにとゞめながら。先途を萬里の雲にいそぎ。後會を三秋の月にやくして立わかれにし後は。かさねて有しちぎりをたがへじとて。今この所にたづねきたれるに。かの人すでに世をはやうせり。一夜のおもかげ二たび見ることをえず。れんぼのおもひむねをこがし。愛執の涙袖をうるほす。是によりてかなしみのうちにうごく心ざしを種として。なげき外にあらはるゝことをしらず。たとひ綺語のあやまれるたはぶれ也といふとも。なを讃佛のはるかなるえむとならざらめかも。

袖ぬらすなけきのもとをきてとへは過にし春の梅の下かせ

夕風よ月に吹なせみし人の分まよふ覽草のかけたも

いとゞちりの世もあぢきなくおぼえて。ありかさだめずまよひありきし程に。むろのやし

まなどもすぎてみにしみ侍りき。春より都をいで侍しに。又此秋の末にこの關をこえ侍しかば。こそべの沙彌能因が。都をば霞とともに立しかど秋かぜぞふく白川の關と詠じけるは。まことと也けりとおもひあはせられ侍り。かの能因が此歌のために猶そのさかひにいたらでよめらんは無念也とて。あづまへくだりたるよしにて。しばしこもりゐて。此國にてよみけるとひろうしけるとかや。一度はうるはしくくだりけるにや。八十嶋の記などいふものかきをきて侍り。たけたの大夫國行が水ひんのきけんまでこそなくとも。此所をばいささか心けさうしてもすぐべかりけるを。さも侍らざりしこそ。こゝろをくれに侍しか。

都にも今や吹らん秋風の身にしみわたる白川の關

それより出羽國へこえて。あこやの松などみめぐりつゝ。みちの國淺香の沼をすぐ。中將實方朝臣くだられけるに。此國には菖蒲のなかりければ。本文に水草をふくとあれば。いづれもおなじこと也とて。かつみにふきかへけると申つたへ侍るに。寛治七年郁芳門院の根合に藤原孝善がうたに。あやめくさひくてもたゆくなかきねのいかて淺香の沼におひけんとよめるは。此國にもあやめのあるにやと。年月ふしんにおぼえしかば。此度人にたづねしに。當國にあやめのなきにはあらず。されどもかの中將の君くだり給ひし時。なにのあやめもしらぬしづが軒ばには。いかで都のおなじあやめをふくべきとて。かつみをふかせられけるより。これをふきつたへたる也とかたり侍しかば。げにもさる一義も侍るにや。風土記などいふ文にもその國の古老の傳などかきて侍れば。さる事もやとてしるしつけ侍る也。やがてこの人に道のあんないなどとひきゝて。山

田の里といふかたへゆきぬ。さる海づらにな
にのいたりもなくつくりたる草の庵なれど。
ゆへあるさまにしなしたる庵室ありしかば。
そこにとゞまり侍しに。長月十日あまりのこ
となり。うしろの山よりおろすあらしにたぐ
ひて。鹿のねちかくきこゆ。まへははるぐ〵
と見わたさるゝ波のうへに。ふけゆく月のか
げうかびて。友よぶちどりのしばなく聲もい
と心すみてぞきこえ侍し。あくればとをき野
邊をすぐるとて。その野の名をとへば。これな
んはしり井といふ。逢人もなくはるかなるみ
ちに。山だちなどいひて。人をあやまつたぐひ
おほければ。たび人もはやくゆかんことをの
みいそぎはしるゆへに。いひつけたるとかや
きゝ侍りしやらむ。ある時はみねのあらしを
かたしき。野原のつゆにふし。ある時は磯うつ
浪に夢をさまし。うきねの床に袖をしぼる。を
のづから草のまくらによはり行むしのこゑを
きゝて。秋のすゑばに成ぬることをおもひ。あ
まのとまやにふしなれて。月のでじほの程を
空にしる。かやうにいづくともなくあくがれ
まかりしほどに。しら川のせきをすぎて廿日
あまりにもなりしに。ひろき川のほとりにい
でぬ。これなんあぶくま川也けり。都にてとを
くきゝわたりし所の名なれば。かぎりなくと
をくきにけるほどもおもひしらる。わたしも
り舟さしよせて。みち行人どもいそぎのりて
出侍しに。水上とをくみわたせば。かさなる山
の中に煙のたちのぼるところありしを。ふな
こどもにとひしかば。後醍醐元弘のみだれにかまく
らのほろびしより此けぶりたちそめて。いま
にたえぬなりとかたりしこそいとふしぎなり
しか。舟よりおりてゆく道のほとりに一のつ
かあり。ゆきゝの人のしわざとおぼえて。あた

源氏物語まほろしの巻にうなかえたお乞松りると餘に花鳥漢情云交松と馬瀧うな青てつとおまみ侍はよだはりのさて馬のきこかみるきとくさとをすかたにうななるつつりいつたかそのうるに生よな松松りはゐへ二十い今からさうさ青みかせみまういひやきにとみの本の下つゆは南にほさかり

りの木に詩歌などあまたかきつけたり。むかしとうへいわうといひけるたう人のはか也。故郷をこひつゝこゝにて身まかりけるが。そのおもひのすゑにや。つかのうへの草木もみなにしへかたぶくと申ならはせりとかたる人ありしかば。いとあはれにおぼえて。彼昭君が青塚の草の色もことはりにぞおもひやられし。たれもたびの空にてはかなくなりなば。夜半の煙もなをふる郷のかたにやなびかましと。うき世のまうしうもあぢきなくこそおぼえ侍しか。つかのうへに松の木あまた生ならべるも。うなゐ松とはこれにやとあはれなり。物がたりのためしもおもひいでらる。

青塚はげにいかなれば夢となる後さへ猶も忘れざるらん

それをもなをすぎて。たけくまの松のかげにたびねして。木のまの月に心をつくし。名取川のわたりをすぐるとては。行水のかへらぬことをあはれむ。宮城野の木のしたつゆもまことにかさもとりあへぬほどなり。花の色々錦をしけるとみゆ。中にももとあらの里といふ所に色などもほかにはことなるはぎのありしを一枝おりて。

宮城のの萩の名にたつもとあらの里はいつよりあれはじめけん

とおもひつゞけ侍し。この所はむかしは人すみけるを。今はさながらのら山になりて。草堂一字より外はみえず。この花をも。いにしへにちるをや人のおしみけむとあはれにおもひやられ侍りき。そも〳〵もとあらの萩とは。春やきのこしたる去年のふる枝にさきたるをいふ也とき〵をき侍り。それをこ萩とも申なり。これは枝ざしなどもなべての萩よりもこはごはしく。あばらなるにや。もとあらの櫻などもよみて侍ればとおもひ給ひしに。いまきゝ侍れば。もしこのさとの名によりてもやよみ

拾遺哀傷 一條攝政
いにしへはちるをや人のおしみけん花こそ今はむかしこふらし

曾丹集
わかやとのもとあらの櫻さかれとも心たかけてみれはたのもし

けむと。はじめておもひあはせられ侍り。さてみちの國たがのこふにもなりぬ。それよりおくのほそ道といふかたを南ざまにすゑのまつ山へたづねゆきて。松原ごしにはるばるとみわたせば。げになみこすやう也。あまのつり舟どももさながら木ずゑをわたるかとみゆ。

夕日さす末の松山霧晴てあき風かよふ波のうへかな

その日くるゝほどに。しほがまの浦に行つきぬ。則神躰はやがてしほがまにて わたらせ給ふ。御前につやし侍りぬ。このうらの東にむかへる入海にかけはしたかくかけて。うらより遠にかよふみちあり。又磯のきはをめぐりて、山の陰を行道もあり。あまの家どもおほくつくりならべたるにけぶりのたちのぼるも。これや鹽やくなるらんとみゆ。浦こぐ船のつなでも。所がらにや心ひくすぢ也。更行月にからろの音たえだえきこえていと心すごし。わが御門六十餘國の中にしほがまといふところににたるなしと。いにしへの人のいひけんもことはりなりとおぼえし。

有明の月とともにや鹽がまの浦こぐ舟も遠ざかるらん

それより浦づたひに松嶋にたづね行。げにこころあるあまのすみかとみえたり。又此所に圓福寺とて寺あり。覺滿禪師開山の地也。信樂百人寺住すとかや。寺のまへ。みなみはしほがまの浦へつゞきて。千嶋などいへどもなをそのかぎりみえず。あるはおきの遠嶋とて。海をへだてゝはるか也。そのあひだにこじまおほくみえたり。松しまのひんがしにあたりて。はなれたるしまに橋をわたしてひとつの堂あり。五大堂といふ。やがて五大尊をあんちせり。みなみへむかへる山陰の磯ぎはに石をたかくたゝみてほそき道あり。海のきはをつたひ行てみれば。すさきに松おひかたぶきて。木

末を浪にひたせり。ゆきかふふねはさながらしづえのみどりをこえ行。それよりすこしへだたりて小嶋あり。これなんをじまなるべし。小舟につなをつけてくりかへしつゝかよふ所なり。此しまに寺あり。來迎の三尊ならびに地藏菩薩をすへたてまつれり。をじまより南一ちやうばかりさしいでて松竹生ならびて。苔ふかく心すごきところあり。此國の人のはかなく成にける遺骨をおさむる地也。その外發心の人のきりたるもとゆひなどもおほくみゆ。いとあはれに心すみておぼえしかば。二三日とゞまり侍りき。

誰となき別のかすを松嶋やをしまの磯の涙にそみる

いまはとてもとの道へと心ざし侍りしほどに。またむさし野にもなりぬ。こゝにておもひのほかに都の人のしきしまの道のことなどたづね申侍りしにゆきあひぬ。そのほかむかしじれりし人ひとりふたりありしかば。折からうれしくおぼえて。やがてともなひつゝ。ほりがねの井こゝかしこみめぐり侍りしかば。このたびのおもひでなる心地ぞし侍りし。素性法師がうつの山にて在五中將にゆきあひけるも。かくやとおもひやられ侍りき。さても末の松山はことに名だかき所なるを。たゞひとりみちゆきぶりにみすごさむもねんなきやうに侍りしかば。むかしもながらのはしのかなくづ。ゐでのかはづのひぼしをだにこそもち侍れ。わすれがたみにもし侍らんとおもひしかば。松の落葉などかきあつめて侍しなかに。まつかさといふ物のありしと。又しほがまの浦にてうつせ貝などやうのものをひろひあつめて侍しを。この人にとりいだしてみせ侍しかば。かく申されし。

末の松山まつかさはきたれとも波たにこさは又やぬれなん

返し。

涙こさぬ袖さへぬれぬ末の松山まつかさのかけの旅ねに

さらにくちせぬちぎりの程もおもひしられて。いとゞ旅の衣手もしほたれまさり侍りしに。またかの人。

ともなはて獨行けん鹽かまの浦のしほかいみるもかひなしかへし。

鹽かまのうらみもはては君かため拾ふ鹽貝かひやなからん

かくのみあくがれゆくほどに。日かずもつもりて。さすがふる郷のかたもおぼつかなくて。いづくを家路ともさだむるとしはなけれども。たちかへるべき道はいそがれ侍りしほどに。一夜のたびのやどにて老の眠をさまして。壁にむかへるのこりのともしびをかゝげそへて。道すがらの名だかきところ〴〵のこゝろにのこりしを。わすれぬさきにとて。おもひ出るまゝに。前後のしだいをいはず。これをしるしつけて。みやこのつとにとて持のぼりぬ。

僧に宗久といふ人あり。心を一枝の花にそめ。おもひを八重の風にかけて。よもぎふの跡さだむる所なく。うき草の露さそふ水にまかせてなん。まどひありき侍りけり。三芳野の花の春は。山のあなたをかくれがとたのみ。むさし野の月の秋は。草のゆかりをやどりにて。あかしくらし侍れば。六十餘州のとさう殘る所なく。三十一字の風情尋ねぬかたもなし。いにしへ賢かりし人も。あるは竹を愛する事をこのみ。あるは詩をつくりし事を身にそふやまふとなむしける。此人もかくのごとくなるべし。墨染の袖のうちにはとこしなへにちいさき硯をはなたず。むかしのつえのほとりには。文みじかき筆をなむとりそへ侍りける。剡溪の曉の雪をのぞまざれども。すきの友をたづねてはそこはかとなくあくがれ。廬山の夜の雨を

伊勢物語
くりはらのあねはの松の人ならは都のつとにいさといはましを

きかざれども。沈味のはらわたをくだきて心ざしをのべずといふことなし。觀應の比にや。大江山生野の道を分過て（侍けるイ）より。陸奥しほがまの浪にうかぶまで。名ある野山のすゑにはおもひの露をのこしをき。なさけおほき草木のかげには。言のは（イ无）をかきあつめて。あねはの松にはあらねども。都のつととなづけ侍りぬ（るイ）。誠にをろかなるもてあそびに似たりとは（イ无）いへども。などか心をつたふるをしへともなり侍らざらん。たちまちに嗟嘆のこゝろざしにたへず。いさゝか荒蕪の言葉をそへ侍るばかり也。

于時貞治六年春。再披見之次而記之而已。

後普光園攝政

開路老槐在判

右都のつと以扶桑拾葉集并古寫本挍合聊注愚案畢

歴代皇紀云文和二年六月六日壬寅臨幸山門同十三日赴美濃國着御垂井宿小島行宮九月三日還御土御門皇居

續神皇正統記云文和二年に南方の軍勢猛將如雲謀臣如雨とや云へき

群書類從卷第三百三十三

紀行部七

小島のくちすさみ　後普光園院攝政良基公

をぐら山の麓中院の草の庵を身のかくれがとたのみ侍りし比。わらはやみにさへわづらひて。いとゞ露のいのちもけぬべきこゝちして。ものこゝろぼそかりしかば。よろづにまじなひ。とし老たる大とこなとかたらひて。さるべきふんつくり。かぢなどせしかどなをおこたらず。けにしゝこらかしぬるよとおもひやるかたぞなかりし。關の東よりは。たよりの風につけて。かくばかりなさけなき世に。何のたのみにかしばしもやすらふとたびく\ありしかば。げに岩ほの中とてものがるまじげなる世の有さまに。おりく\聞えくる松の嵐のはげしさも。いづこを見えぬ山路とたのむべきならねば。七月廿日(文和二)あまり有明の月。まだ夜ふかきに草の庵をたち出て。あづまぢとをく思ひたつ。心のうちすゞろに物がなし。さるはかかる身に(良基)。關の外までいでたる事も例なき事なれど。報國の心ざしなれば。などか神佛もたすけたまはざらんとぞおもひなぐさめし。こよひは先坂本につきぬ。山法師はかひく\しきものにて。ことの外にまちよろこぶ。草のむしろ露うちはらひて。こよひのおましはこの

八幡山よりみたれ入間六月二日延暦寺に臨幸これより濃州に御下向あり

古今雑下　ものゝへのよしな
世のうきめみえぬ山ちへいらんにはおもふ入こそほたし成けれ

良基于時関白前左大臣従一位三十四

古今秋下
しら露も時雨もいたくもる山はしたはのこらす紅葉しにけり

坊にとけいめいせしかば。その夜はかくてあかしぬ。又の日もをこり日にて。いたづらにながめくらす。あくる朝舟さし出してむかひの岸につく。このわたりはほどなかりしかど。小舟のくり／＼とするやうなるに。のりたる心地いとむくつけし。けふぞからうじて。もる山につきぬ。名はこと／＼しけれど。さして見所なし。かのつらゆきが。時雨もいたくといひけるはこのわたりにやと。ふる事ぞ先思ひ出られし。

もる山の下葉はいまた色つかてうきにしくろゝ袖そ露けき

こゝちわびしくて。おもひつゞくるまでもなし。かくて行ほどに。野ぢしのはらなどいふ所あり。是歌枕にてみゝなれしかど。まことにはけふぞわけそめ侍りし。

露けさを思ひをくらん人もかな野路のしの原忍ふみやこに

又かゞみといふ山をすぐ。立よりてみま〔くイ〕ほしかりしかど。ゆくさきとをくいそぎしかば。ただ道行ぶりにて過ぬ。

はる／＼と行末遠くかゝみ山かけて曇らぬ御代そしらるゝ

人しれぬ心のうちのあらましも。ことふきめき〔イ无〕ていと物侘しきにや。おいその森といふ所は。たゞ杉のこずゑばかりにて。あらぬ木はさらにまじらず。山もとかけてながめのすゑいと見所おほし。道とをく行くれぬれば。こしかきすへてこよひ一夜の草のまくらもいづくにかと里とふに。としたけたるあまひとり出て。このあたりのさいかくありげなりしかば。このもりのけしきこそいとなさけふかくみえ侍れ。名をばなにと申にかとたづねしかば。このあまのいふやう。これなんふるき名所に侍りける。尼が年の名にて侍るよしをぞこたへし。かゝるもののなかにも。心あるもののいひ。さらにゐなかびたり共おぼえず。いとあはれにて。

今はこの老(身イ)その杜そよそならぬみそぢあまりもすぎの下影

みだりごこちなをむづかしければ。一夜はとどまりつゝ。ま日ばかりにてありし道のゆくさき。する〳〵ともあらで。ひかずのみぞつもりける。又やす川とかやをわたるとて。

いつ迄と袖うちぬらしやす川の安けなき世を渡りかぬらん

いぬかみ。とこの山。いさや川などいふ所は。いたくめにたつともなければ。いづくともおもひわかず。されど名ある所はたづねまほしかりしを。かゝる旅の空にすき〴〵しからんもうるさくてすぎ侍りし。ひなのおとろへは。げにのちまでもうき名もらすなと。この山人にくちかためまほしくぞ侍りける。伊吹のたけとかやは。雲ゐのよそながら。ちか〴〵と(にイ)ふもとをゆくやうにぞみわたさるゝ。小野とかやいふ所にて。三寶院僧正(賢俊)に行あふ。近江のかたへ急ぐこと有ていで侍るよし申しかば。もりの陰なる堂のかたはらにこしかきすへてたいめす。かゝるわづらひに。ひなのなが路のおとろへ。ことの外におどろきたるけしきなり。やがて都のかたへ過ぬ。このところのおなじ名は。ふるき歌などにもおほく侍れど。これたかのみこのすみかならねば。思ひやるももの淺き心地ぞせし。かくて行ほどに。松の陰そびえたるいはねよりわきいづる水のながれいときようすみて。まことに世にしらぬところとみゆ。こゝはこさめがゐなるべし。やがて又かけはしありて。ちいさきたうきよげなるに。これも岩ねよりいづる水たぐひなし。ひさごといふものめし出て。手あらひなどしてすぐ。いとめでたき水なり。

今よりやうかりし夢もさめがゐの水の流て末をたのまむ

ふはの關屋はむかしだにあれにければ。かたのやうなる板びさし竹のあみどばかりぞのこ

りける。げにあき風もたまるまじうみえたり。

昔たにあれにしふはの關なれは今はさなから名のみ成けり

關の藤川はそのなもなつかしければ。わきてことゝひ侍し。名はことぐしけれど。さしもなき小川にて。よろづ代までのながれともわかれず。されどたえせぬためしはいとたのもしくて。

さてもお猶沈まぬ名をやとゝめましかゝる淵瀬の關の藤川

みののおやまとかやは。はやかの小嶋のあたりちかく聞しかば。行さきもいまはほどあらじと。けふぞちと心地もおちゐ侍りし。名におふ一松もなをそのまゝにて。むかしの跡かはらぬよし。このあたりのしも(人のイ)べかたりしを。よくもたづねきかざりしぞ後までくやしかりし。

うかりけるみののお山のまつこともけに類なき世の例かな

かくて二三日のみちを五六日のほどにやうやうとからうじてをしまにまいりつきぬ。みもならはぬ所のけしき。左も右もそびえたる山に雲（いとイ）・ふかくかゝりてさらに晴まなし。げに又なうあはれなるものはかゝる所なりけり。時しも秋のみ山の有さま。たゞをしこめて。いひしらぬもののあはれいはんかたなし。鹿の音蟲の聲もかの松陰にて聞し秋はものの數ならずおぼえしは。たゞ所からの思ひなしにや。をばすて山ならねどいとなぐさめかねぬべき旅の空も。あまりによろづたどたどしかりしかば。二條中納言（良冬）のたちいりたる所へまづおちつきぬ。この宿の有さま。かやが軒端竹のあみ戸。まばらなるすのこより。風もたまらず吹あげて。一夜だになをやどりがたし。いま一日もといそぎて。けふぞやがて小島の（後光嚴）頓宮へまいりし。雨さへかきくれて。なをしの袖もいとゞしほれはてぬ。冠かげ（影）のめづらしきにや。山人

時光權大納言正三位日野大納言資名卿男

めくものおほく見侍りし。内裏のありさまはこのあたりにはまれなるいたぶきなれど。山はさながら軒ばにて。雲霧のはれまなし。やがて御前のめしありて。このほどの世のしきなど奏す。山よりの御みちのわりなかりし事など。さま〴〵哀なる事をぞ仰ごとありし。こよひは瑞岩寺とかやいふ寺尋出てとゞまる。此堂いと見所多し。山陰ふかう作りなして。岩木水のながれ。都にてもかゝる所はおかしかりぬべき山水のさまなり。又の日もなを日一日やみくらす。にが〳〵しくてその夜はあけぬ。たびねの心ぼそさいとやるかたぞなきや。

いとゞ又うきに憂そふ旅ねかなうかれ心ちの夢の紛れに

時光朝臣のさぶらふ所をあけて。やすみ所に給しかば。二三日ありてぞうちずみの心にてありし。賢俊僧正もて世のありさま身のしき。さま〴〵に奏しかば。是までまいりぬるうへは。床をならべし契りさらにかはり侍らじと仰ごとありしに。

しらさりき習はぬ山のかけまてもゆかなならへん契有とは

神代をかけたるふることどもとりいでたるもいとおこがましくや。そののちは朝夕なれつかへ侍事むかしにたがふ事なし。鎌倉大納言のぼり侍るべき。勅書の請文申侍るとて。たゞこれをのみまつことにて。おほやけわたくしなくさみ侍し。八月五日雨のうちに題を給はりて。

戀天象

侘な野山の末にのこせとや月なかたみに契置けん

旅曙

横雲の波こす峯もほの〴〵と頓てなしまのかけそ明ゆく

此所をばはじめてつかうまつりたるよし。人人申侍りしやらん。かず〳〵おほかりしかどみな忘ぬ。又たうざのいたづらごとは中々見

ぐるしうてみなもらしつ。御製などのみゝにたつもおほかりしかどみなかきとゞむる事もなくて。世の人は中々とりをきても侍らん。尋いだしてさらにくはふべきなり。八月十日比いつの日にてありしやらむ。時雨にさきだちて。いろふかき紅葉の枝にくれなゐのうすやうむすびつけられて。仲房朝臣もてくだされたりし。

　　またしらぬ深山隠に尋きて時雨もまたぬ紅葉をぞみる

御返し。

　故郷に歸るみゆきの折からや紅葉の錦かついそくらん

八月十日あまりは。日數のみふる雨の中。いとどはれぬ雲ゐは山たかき心地してものむづかし。軒はさながら雲霧にとぢられて。みねの松かぜあらましく吹おろして。よろづにすさまじかりし事のみぞおほき。かゝるところを百敷とたのみたるもありがたき世のためしなれど。むかし木の丸殿などいひけるもかくこそはありけめ。此國のみゆきのためしも。元正天皇などたび〳〵あとある事なれば。おどろくべき事ならねど。ならはぬ山の御すまゐ猶世づかぬ心ちして。都の戀しさぞあけくれの思ひにてありし。名だかきなかばの月をさへへだてがほなるあま雲はなをはれやらず。二千里の外の古人のこゝろもかくこそはととりあつめてものあはれなり。夜一よ吹つる風明方よりしづまりて。今夜の月はなをわするまじきにやとて人々に短冊たまはす。殿上の御遊などにはあらで。めなれぬえびす衣のうへ人どものけしき。ものゝふめきたれど。をの〳〵おもひの露をよすがにて。なをことの葉の花をあらそふなるべし。夕風又ふきたちてほどなくすみのぼり。月山陰までものこりなうさし入ていとくまなし。くもりなき御代のため

しとかねてしらるゝ心ちせしかば。行するかけていとたのもし。

名にたかき光をみよのためしとや最中の秋の月はすむらん

鎌倉大納言（尊氏）ののぼりけふ〳〵とのみ聞えしかど。たゞおなじさまにて日かず經しかば。心もとなしとて。度々御つかひをつかはす。今はほどあるまじきよし。おほやけわたくしへうけ文の有しにぞ。たれも〳〵あんどしたるやうに侍し。都よりあまたまいれる殿上人などは。をのがさま〴〵うちむれて。こゝかしこの名所などへ行てあそび侍りしかど。なを心に茂る八重むぐらの露けさに。さやうの友にだにさそはれず。あかしくらすも。たゞ我身ひとつの秋とのみおぼえて。いとなぐさめがたし。しんによやうらうの瀧などいふ所へ行て。かのながれにふれぬれば。やゝまひもやがていえ侍るよし人々申あひしかど。さやうの所へもさし出ず。夜ふかききぬたの音など聞えくるにぞ。人のすみか有とも覺え侍りし。ねざめの里とかやいふも此わたりぞかし。げにあかしかねたる草の枕は。ことはりすぎたる秋の夜なり。內裏の庭もさながら田面につゞきて。いなばの山も遠からねば。又かへりこむ都のたのみならでは侍事もなし。

思ひきや思もよらぬかりねしていなばの月を庭にみんとは

かゝるいたづら事をのみおもひつゞけてぞ心ひとつをばなぐさめ侍し。八月のするかまくらの大納言すでに尾張に着ぬと奏せしかば。同廿五日をしまの頓宮よりたるゐに行幸あり。そのありさま。非常の儀にて腰輿にめさる。朝衣の人はなくて。えびすごろもとかやのすがためづらしき事也。おもひ〳〵なりし出たち中々見所もありしにや。ほうれんのかたびらを腰輿にわたしてかけたりしぞはじめた

詞花集雑下
昔みしたる井の水はかはらねとうつれるかけそとしなへにける

る事なれど。かくもありぬべき事なり。ゐなかの民どもさながらみまいらせんもかたじけなき事なれば。かやうに申さたし侍りし也。たるゐの頓宮は當國の守護頼康うけたまはりてつくりまうく。黒木の御所こしばがきなどゆひわたしてかう〴〵しく。廻立殿大嘗宮などの心地ぞせし。入御のほどものみるものどもいづくよりかあつまりけむいとおほし。實澄朝臣御劔にさぶらふ。其儀常のぎにたがふ事なし。やすみ所は風もたまらねば。別の宿たづね出て。よに思ひなしへだたりたるやうにおぼゆ。さても此わたりは名所などにもいたくもてあつかはぬ所なれど。かのたかつねの朝臣の美濃の國司になされてくだりけるときに。うつれるかげはとよみけるこのたる井の水の事にや。かくいふほどに。廿六日の夜。あふみの凶徒ばらはちやとかや。この國へうちいるべしとてひしめく。都のみちはこのほどはやふたがりたると聞しだにこゝろぼそかりしに。こよひはにが〳〵しくひしめきて。すでにはや近づきたるよし申のゝしり侍しほどに。人々内裏へつどひまいる。いかなるべきにかといと物さはがしくて。かくて世をやつくさんと心ぼそさぞいはんかたなき。されど曉がたに別の事侍らぬよし人々申侍りしかば。夢のさめたる心ちしてをの〳〵まかでぬ。馬どもようゐし。臨幸もいづかたへかとまでさたありし。そのおりのさはぎ。申ばかりなかりしなどぞ。中々いまの思ひいでとも申侍りぬべき。さて九月三日に將軍(尊氏)たるゐにつく。そのありさまめでたういみじかりし事なり。まへ二三日は武士どももひまなくしゆく〳〵につく。もちつれたる旅のおもにども道もさりあへずぬのびきにつゝきて。よろづいまぞ心

地ひろ〴〵とおぼえ侍し。大納言は錦のよろひひたゝれに小具足にて。栗毛なる馬に乘さきうちは。ゆふき小田佐竹などいふものどもなり。いろ〳〵の具足ども。水のたるやうなるかぶとのくはがたさきにきらめきて夕日にかがやく。一日のまいりなどの心地して。そのをのきら〳〵しくぞみえし。後陣には仁木兵部大輔。小山などいふ東國の武士かずをつくしてのこるものなし。將軍の馬の先には。命鶴丸心詞もをよばず出たち。坂東第一と聞えしくろき馬にぞのりたる。其ありさま見所おほし。年たけたるあげまきのすがたもすべてあしくもみえず。まことにものにあひぬべきけしき人にすぐれたり。引馬十疋いづれも〳〵こゝろも及ばぬものどもなり。東國の名馬はのこりなくのぼりたるよしぞ聞えし。佐竹ぶちなどいひし大馬どもその數おほし。將軍やがてすぐに內裏へまいる。頓宮の外にめし具したる軍兵をばとゞめ置て。たゞ一人まいる。庭上に入。中門の前に立て。頭弁俊冬朝臣もて事のよしを奏す。西園寺左衞門督いであひて引導す。弓矢を取て堂上の御前のめしあり。ほどなくまかりいづ。宿所はたる井の長者が家也。此所ははじめ內裏になり侍しほどにおそれ申けるを。たゞさぶらふべきよし仰ごとうけ給はりてとゞまりけるとぞ聞えし。おほかた垂井へ臨幸の後は。しんでんをさりて遊興ものの音をもとゞめて。ふかくおそれ申けるとぞ聞えし。いと有がたき事也。げに仁義をもわきまへてこそこれほどの運をばたもち侍るらめと返々たのもしくぞうけ給はりし。鎌倉右大將建久にはじめて上洛せられけるもたゞかくこそは有けめ。都にてありしかば。主上晝の御座に出御。賴朝卿まごびさしの圓座に祗候のよ

し日記に見え侍る。さやうのしきも。御旅の御所なればにや。さたにもをよばざりしやらん。おなじき五日貢馬十ひき内裏へたてまつる。其外別して名馬などとてをくりたびたりしかば。かひある心ちぞせし。十五夜に。みちにてよみたりしうたとて點申されしかば。此みちにゆるされたる事もなくてはゞかりありしかど。いなみがたうて。おづ／＼ぞ墨をつけ侍し。おほかたこのたびの御旅のなぐさめは。たゞよるひる詩歌にてぞありし。ゐ中人は連歌などいふことをこのむものにて。點などかた／＼よりおほく申侍りしかど。みなむづかしうて返しぬ。いまは都のいでたちならでは何事かあらむ。九月九日は重陽の御會有べきとて。短冊をくり給はる。文人は右大臣（道嗣）以下四韵の詩をたてまつる。まづ詩の懐紙を講ぜられて。次に歌の短冊をかうぜられけるとぞ。

此日はまいらざりしほどに。あくる日一座を申いだすとて奏し侍し。

宮人の（けふみては）詞の玉のいかならん（もなにかせん）きのふはよそにきくの白露

やがて御返しをかきくはへ給はりたりし。あふむがへしなどいふは常のことなれど。これはことに心にしみておもしろくぞ覺え侍りし。けふにてありしやらん。にはかに風いみじう吹出て。くれ行まゝに物もみえず。おびたゞしくふきまどはして。山の木どももおほく吹たふし。よもの草むらはさらにもいはず。ひちかさ雨とか降出て。神なりひらめきおちかゝる心地していといみじ。雨のあしあたるところはみなとをりぬべうはらめき。かさもとりあへず。あはたゞしければ。こはいかなる事にかと。又こゝろまどひはむかたなし。すべて野も山もはや水になりはてゝ。内裏のみちもとぢめはてぬ。夜に入てなをおびたゞしく吹

まさる風たゞごとならず。頓宮はたゞくろ木のはしらなればつよからず。かくてわたらせ給べきならねば。民安寺といふ所へ臨幸あり。三寶院僧正もとよりやどり侍けるを。あけて御所になさる。いとあはたゞしき事也。この風のまぎれに。いとゞみだりごこちもわびしけれどをさへて内へまいる。たぐひなき雨風也。還幸をそくなる事あしき事なるよし奏せしかば。武家よりもやがてあす行幸あるべきよしをすでに申て侍ると仰事ありて。人々いそぎたつ。このほどはれの行幸とて都の人々めされしかど。是はまたにはかごとなれば。もとの非常の儀にてとさだまりぬ。おもひ〳〵にひしめきて。つぎのあしたもとの頓宮修理して還御あり。鎌倉宰相中將（義詮）たる井につくと聞えしかば。都の道もあきてめでたしともなのめならず。やがてこよひ宰相中將參內す。そのしき將軍まいりしにかはらず。こよひはことに月さへくもりなくて。馬くら物の具のかざりもいとゞみがゝれて。見所おほかりしとぞ見る人々もかたり侍りし。つぎの日御馬二疋まいらす。將軍いさゝか違例の事ありて。行幸延引す。同十九日還幸あり。公卿どもは朝衣にて供奉す。松殿中納言忠つぎ。四條中納言隆もち。左衛門督實とし。仲房朝臣などなり。御劔隆右朝臣。おなじく衣冠にてさぶらふ。其ほかはもとのすがた共色々にまじりたる。めづらしく見所あり。御みちのほど物みる山賤しはふる人さへたちこみて。所せきまでぞありし。權大納言今出川宰相中將などは。なをえびす姿にて行幸には供奉せず。御とまり〳〵にぞまいりあひける。これも二條中納言などともなひて。こよひはあふみの大覺寺といふ所にぞまいりあひ侍りし。夜にいりて雨いたう

續神皇正統記云大樹同相公羽林還幸のこと中沙汰ありて九月廿一日には御京着前陣に武家相公羽林後陣に大樹供奉し給ひて儼重の御儀式にてぞわたらせ給ひける

ふりて。次の日（二十日）の朝もなをやまず。出御もいかがとおぼえしかど。鎌倉の宰相中將すでに先行のよし申侍りしかば出御あり。今日人々みな戎衣にて供奉す。こよひは敏滿寺といふ寺にいらせおはします。又の日（二十一日）は空もはれて。人人みな朝衣にて供奉す。むさてら（武佐寺）に御つきあり。それより石山へつかせたまふ。本堂の前に御所をまうけたり。しほならぬ海こゝもとに見えていとおもしろし。觀音の利生方便もこのみゆきにはいとゞ光そふらむとめでたし。けふは洞院大納言（實夏）都よりまいりあひて供奉の人にくはゝる。近衞司どもゝ。雅朝實時隆さと隆家朝臣。朝衣にてまいりあひて御こしの左右に供奉す。えびす衣の次將どもは御後にうちかこみたり。義詮朝臣小具足にて先陣つかうまつる。尊氏卿同御後に供奉す。その軍兵二三万騎もありつらん。二日ばかりはつゞきたるとぞ聞えし。やがてもとの內裏へいらせおはします。宰相中將陣中にしきがは敷て行幸待奉る。還幸のしきは例にたがふことなし。されどなを戎衣の人々門外まではまいりたり。南殿に御輿よゐ。公卿朝衣の人々ばかり庭上に候す。雅朝朝臣御劍に候す。百敷もみしにかはらず。典侍內侍さぶらふ人々。ありしながらのおも影めづらしといふもなをよのつねなり。此ほどうかりつる旅ねの夢のこりなくて。いまはいはんかたなうめでたし。京にある人人もふしぎの事にのゝしる。ありがたかりける聖運なれば。行すゑもいとたのもしかるべきことにこそ。さても九月の還幸いかゞとさたありしに。元正天皇（四十四代）靈龜三年。當國（みのの國）。に行幸ありて。いまのやう老の瀧など御覽ありて。この瀧のめでたきゆへに。年號をさへあらためて。靈龜三年を養老になされて。還幸ありけ

たゝとを續神皇正統記云貴實に作る

るも。九月の佳例とかや。たゞとをの宿禰かんがへ申侍し。この度の儀にかなひたる勘例ことにめでたしとぞさたありし。かやうにためしすくなかりつる世のしき。後のものがたりにもと思ひて。ありのまゝの事を旅ねのつれづれにわすれじと。たゝうがみのはしなどひきやりて。書つけ侍ることもいとみぐるし。すぎ行かたはわすれがたきならひなれば。かゝる一筆のことのはもをのづからしのぶ草のたねとはなどか成侍らざらん。

此さうしは。をしまにて書たりしまゝなる。あまりにいふばかりなきことどもおほし。歌などひきなをすべし。めいは内の御かたの御手なり。

良基公御判

依ニ持是院法印（灌大僧都妙椿）。見索一不レ省ニ春蚓秋蛇之嘲一終ニ書功一矣。

右本者後普光園攝政殿述作也。以ニ彼眞筆之本一（將軍家御本）。臨ニ寫之一挍ニ合之一。尤可レ謂ニ證本一者也。

文明第二之曆蜡月上浣

左近衞權中將藤原朝臣判

かきをきし昔をきくも君かすむ國におさまる道はありけり

此一冊者於ニ西周之旅店一一覽之次所レ染ニ禿翰一也。依レ爲ニ急本一卒摸ニ寫之一。追可ニ淸書一而已。比興々々。

天文廿一年閏夏正十又九

戸部尚書郎藤判

右小島の口すさみ以横田茂語藏及元祿七年印板扶桑拾葉集本挍合畢

住吉詣

寶篋院贈左大臣義詮公

貞治三年卯月上旬のころ。津の國難波の浦みむとて。かの所にまうでけるに。淀より舟にのりて。こゝの河面かしこの山々をながめ行に。ころしも卯月のはじめなれば。ちり殘りたる岸の山吹を見れば。春のなごりぞ忍ばるゝ。夏山のねの雪か卯花に山郭公ぞをとづるゝ。垣しげみがすゑを見わたせば。これなん八幡山鳩の峯などふしおがみて。

いはし水たえぬ流をくみてしる深きめくみそ代々に變らぬ

山崎。たから寺。田邊の里などうち詠め行に。江口の里といひてしばし舟をとゞめてかなたこなたをながめありきけるに日もくれぬ。いにしへ西行法師この所にやどりせしこととおもひ出られて。

惜みしもおしまぬ人もとゝまらぬ假のやとりと一夜ねましを

夜明もてゆくほどに長柄といふ所につきぬ。いにしへは此所に橋ありて人のゆきかよひしが。今ははしの跡とてはわづかにふるくゐばかり也。まことや古きためしに人のひくめるはことはりにぞ。

くち果し長柄の橋の長らへてけふに逢ぬる身そふりにける

やう〳〵難波の浦につきぬ。聞しよりは見るはまされり。蘆屋のさとみつの浦などいふ。よせくる波にをしやかもめの水をもてあそびてたはぶるゝさまいとおもしろし。

難波かたあしまの小舟いとまなみ棹の雫に袖そ朽ぬる

みつの浦より舟に乘てこゝかしこを見るに。たみのの嶋にあがりてみれば。あまの釣する船共あまた岸のほとりにこぎよせてやすらひゐたり。つりのうけなはぬれたるあみを木の枝にかけをきたるを見て。

聞しより見るはまされりけふ社は初てみつの浦の夕なみ

雨ふれとふられとかはくひまそなき田蓑の嶋の蜑のぬれ衣

それより南にあたりて野田の玉河と云所あり。このほとりに藤の花さきみだれたり。

紫の雲とやいはむ藤のはな野にも山にもはひそかゝれる

是よりすみよしにまうでんとて天王寺にたちより見れば。聖德太子四天王ををさめをき給ふ。又みづからの御像をすへをき給ふ。石の鳥居龜井の水など心しづかにながめて。

万代をかめ井の水に結ひをきて行末長く我もたのまむ

それより住よしにまかりて。四社明神を おがみ奉りて。

四方の海深きちかひやひのもとの民もゆたかに住吉の神

この御神は和歌の道に心ざしふかき人をよくまもらせ給ふとむかしより いひつたへ侍り。ことに秀歌を好む人この神にまいりて祈誓申せば。かならずその道にかなひけるとぞ。

神代より傳へつたふるしき嶋の道にこゝろもうとくも有哉

濱べにくだりて 松の木陰にたちより見れば。まことに鳫なきて菊の花さくと在原中將が詠せしこともおもひ出て。

住よしの岸によるてふしら浪のしらす昔を松にとふらん

はるかに海面をみれば。西は淡路嶋 須磨明石の浦などいふ。舟にてわたり見ばや などおもへど。又世中の鉾楯により人のをそれもいかがなれば。一夜をあかし都にかへりぬ。

あはちかた霞をわけて行舟のたよりもしらぬ波のうへ哉

須磨の浦をみれば。しほやくけぶりの たちのぼるを見て。

立のほるもしほの煙徒らにたかおもひよりくゆるならむ

あかしのうらを見て。

よみをきしことの葉はかり有明の月もあかしの浦の眞砂地

また御前にまいりて。いとま申て 下向し侍りぬ。

みつかきのいく千代までもゆくすゑを守らせ給へ住吉の神

此一巻所々のさまを筆にまかせて書しるし侍り。又時の興にもなるべきかとなり。

卯月上旬　　義詮判

鶴ちよどのへ

右住吉詣以宮部義正藏本書寫以扶桑拾葉集挍合畢

道ゆきぶり

前伊豫守貞世朝臣

きさらぎ廿日の夜ふかく。かすみつゝ山のはちかき月かげに。中なる川うちわたすほど。袖のしづくいとところせきたびの衣のあさたちそむるだに。かくしほれぬるに。まいて行すゑの八重のしほぢのかいのしづく思ひしられたり。其日は山崎につきぬ。こゝはつねにめなれしところなれど。このたびの名殘にや。ことならぬ草木の色もいと物かなし。津の國のあくた川にいたりぬるにも。ちりの身のゆくすゑいかゞとおぼつかなし。せ川小屋野などいふところの下すどもののみ侍るとて。思ふ事なくいそがはしからぬけしきも。今はうらやましくおぼゆ。

かく計り苦しからすは蘆火たくこやの中にも世をや盡さん

川づらにそひて木ふかく物ふりたる山あり。鳥居たゝり。そのあたりの人に尋侍れば。これは昔足姫のもろこしの三の國したがへたまひかへりたまひける時。この山によろひかぶとなどうづみ給けるよりやがて武庫の山と申となん。

このたびもあらき波ちのさはりなく猶吹なくれむこの山風

古集にも入江のす鳥などよみ侍るとぞ。

むこの浦の入江のす鳥いかにしてたつ跡にしもとまる心そ

うちでのはまうちすぐれば。ざいご中將のわがすむかたといひけんあしやのさとになりぬ。それよりこなたに磯ぎはちかき松かげに玉垣神さびて鳥居などたてるところあり。北野の宮の此ところにやうがうしたまひてよりのち。御影のまつ原と申なるべし。

君かためくらかるましき心には神も御影をうつさゝらめや

ほどなくいくた川につきぬ。此川に鳥いしますらおのつかとて。道のべちかく村だちたる。松風かすかにをとづれしも。なにとなくきゝ

すぐしがたかりき。さてみなと川といふところに一夜とゞまりて。あけしかば。みやこよりしたひ來つるともだち ひとりふたり。今はとあかれ行ほどに。いとゞこゝろぼそくて。いきうしといひつべきほどなり。

旅衣あさたつ袖のみなと川かはらぬせにとなたやたのまむ

須磨になりぬ。ところのさまは あながちにこれぞと目とゞまる ばかりの ふしはなけ れども。山かたかけたる 家どもの 物はかなげなるに。しばがきうちしつゝ。竹のすがきのふしにくげにみえたるも。彼むかしの 御まし所のさまおもひよそへられたり。こゝぞ 關屋の跡とばかりいへど。このごろば あれたるいたやだになく。まいてもる人もなかりき。いそぎはちかく行めぐるあまのを舟みゆ。かのしはぢが明石のすみ所にさしわたしけん浦づたひもこなりけむかし。山もとの海づらをはる〴〵と行ほどに。おほくらたにといふところあり。松の木だちしらすの色までも心とゞまりぬべきを名のこと〴〵しげなるぞ心うきや。あまさへ。たび人の舟どもうかゞふなる。しらなみのよりくる 舟しげしなどいひおそりて。あはたゞしくいそぎすぐるなるべし。うたて。などしもかゝるおもしろき所にかやうのさはりの侍らん。明石の浦は。ことにしらはまの色もけぢめみえたる こゝちして。雪をしけらんやうなるうへに。みどりの松のとしふかくて。はま風になびきなれたる枝に手向草うちしげりつゝ村々なみたてり。岡邊の家居も所々に見えたり。住吉にては霞にまがひしあはぢ嶋もほどちかくてことにみどころおほし。はりまぢはすべていづくも心とまる所々ぞ侍る。いなみ野といふははるかにをしはれて四方にくまなくあさぢかれわたりて。やう〳〵下もえい

づるもいとけうあり。

勅なれは國治めにといなみ野のおさちの道も迷はさらなん

し水かながさきなどうちすぐるに。それより南にあたりたる所をとひしかば。しかまのさとといふ。かちぢはすこしへだてたれども。河なみのうみに出たるけしき。はるかにみわたされ。なにとなくおもしろし。又いさゝか行すぎて。川のほとりちかく石の塚ひとつ侍り。是は神のいます所なりけり。出雲路の社の御前にみゆる物のかたども一二侍りしをなにぞと尋しかば。此道をはじめてとをるたび人は。たかきもいやしきもかならずこれをとり持て。石のつかをめぐりてのち。おとこ女のふるまひのまねをして通る事と申しゝか。いとかたはらいたきわざにてなん侍しかな。まことや此神の本社はほどちかき所のうみの中に立たまひたるが。かやうにまなび侍るたびごとに。御社のゆるぎ侍となん申めり。あらたなる事なるべし。

傳へ聞神代のみとのまくはひなうつす誓のほともかしこし

愛をばいそぎとも。いそのわたりともいふにこそ。

それよりこなたに戀の丸といふさと一村侍る。いかなる人の物おもふとて名のりにし侍りつらむと覺えていとおかしく侍りき。

旅なれはとけてもねぬた春のよひ磯のわたりの遠くも有哉

夢とてもいもやは見ゆる旅衣ひもたにとかぬ戀のまろねに

かゝるところの名を聞侍るに。まづ思ひいづるかたの侍るかな。さてかづつといふさとは。家ごとに玉だれのこがめといふ物を作ところなりけり。山の尾ごしの松のひまより海すこしきら〳〵とみえておもしろく。其日はふく岡につきぬ。家ども軒をならべて民のかまどにぎはひつゝ。まことに名にしおひたり。それ

よりこなたに川あり。みののわたりといふ。
故郷も戀しからめや東路のみののわたりと思はましかは
から川とかやいふところにとゞまりて。つとめてはきびつ宮の御まへよりすぐる。みちのほとりちかき鳥居のもとにくちなし色の衣きたる神づかさども立なみつゝ。たびのぬさたてまつるなるべし。きびの中山とは備中と此備前との二の社の中なればなるべし。谷川はをとにきゝしより猶心ぼそげなり。うちつゞきたるいがきのさまは。げにぞかう〴〵しきや。この御社どもに上矢一づゝたてまつりぬ。さてかるへ川せいやまなどうちこえて。屋蔭といふさとにとゞまり侍ぬ。
もののふの猛き名なれは梓弓やかけに誰かなひかさるへき
備後になりては中々名高きかたよりも面白きところこそおほかりけれ。入海うちつゞきて磯ぎははるかに行めぐるに。あまのすみかどもの山もとちかきも。げにかたゞよりありと見ゆ。足引のやまわけくだりて。おのみちのうらにいたりつきぬ。この所のかたちは北にならびて。あさぢふかく岩ほこりしける山あり。ふもとにそひて家々所せくならびつゝ。あみほすほどの庭だにすくなし。西よりひんがしに入うみとをく見えて。朝夕しほのみちひもいとはやりかなり。風のきをひにしたがひて。行くる舟のほかげもいとおもしろく。はるかなるみちのくつくし路のふねもおほくたゆたひゐたるに。一夜のうきねする君どものゆきてはきぬるかこのうかびありくも。げにちいさき鳥にぞまがふめる。たゞ此むかひたゐかたによこほれる嶋山あり。むかし此所をらうじける人。和歌の道にすける心ふかきあまりに。おりたつ田子いりぬる海人までも。歌をなんよませつゝもてけうじけるより。やがてこ

のところを歌のしまといふとぞ。しほやどもかすかにて。やきたつるけぶりのするゑ物あはれなり。此嶋にしほやくたびに一日二日のほどにかならず雨のふり侍るといひならはしたり。げにもとおぼえき。猶この南にはれたるしまじまあまた見ゆめり。みちのくのしほがまの浦おぼえて心あるあまもすむべかめり。よろづに付つゝこゝろのひまもなくて過行うちにも。をのづから心にうかび侍るいたづらのもくづどもかきあつめ侍るなり。

うちかはす友れなりせは草まくら旅の海邊もなにかうからん

今更にしらぬ命をなけく哉かはらぬ世々といひしちきりに

中々に分れの際はともかくもいはれさりしそ今はかなしき

さても備後は鏡にすべき文もすくなく。たまたましみのすみかより尋いでたる國文も。それをしるべとするほどのことはりをさへしらぬ人の見侍れば。をろかなるこゝろにもあざむかれ侍るかな。かべの中石の函の中におさめける世もかばかりやは侍るべき。かなしくおぼえ侍るまゝにうかび侍る歌。

いかにして蓬の中の蓬たにあさににたるはすくなかるらむ

つく〳〵と緑の空にあふかすは世のうき旅にいかてすくさん

生まかる眞木のまろ木の弓とりは直なるよりも力こそあれ

みだれたる世にはとめるをはぢといふ事げに此頃ぞまこととも思ひしりぬべきや。五月十九日備後の尾道より安藝國ぬたといふ所にうつり侍。道は南東へ出たる山あり。ひかたをへだてたり。いぬゐにそひていそ路はるかにゆくに吉和といふ所あり。ほどなく夕になりぬ。

日も暮ぬ夕しほ遠く流れあしのよしわか磯に宿やからまし

其海中に木ぶかき小嶋二ならびたり。是なんくぢら嶋といふなり。年ごとのしはすにくぢらといふうを多くよりきつゝ。又のとしのむ月に又かへり侍るとなん。是はこゝにいます神の誓にてかく侍ると海人どもの申也。其よ

り猶南に大海に出るさかひをば。めかりの浦とぞいふなる。

たひ衣袖もぬれけりあま乙女めかりの浦の波のたよりに

北より南にさし出たる山さきに。松や檜原しげりていとおもしろきおのへあり。いとさきとぞいふ。

かつきするあまの手引の糸崎はしほたれ衣たゝるにそ有ける

むかひにひがたをへだてたる山をゐんの嶋といふ也。それ行過て。備後と安藝國のさかひをいづる。よこほれる山中にかやふけるだうあり。此ふもとまで入海つゞきて。沼田川のながれ落あひたり。此河づらにうき出侍るほどに。日暮はてゝ。夕やみのは山のかげもいとゞたづたづしきに。ほたるかすかに飛ちがひつゝ。なにとなく物心ぼそきに。この里へ松の火などともしてきむかふほ影。川なみにきら〳〵とうつろひて。鵜川だつ心地ぞし侍る。この所は壽永のむかしまでは海の底にて侍けるとて。石のかたはらなどにかきといふもののからうち付ためり。はなれたる山どもこゝかしこにしげりていとおもしろし。此川にそひて西に。としふるげなる松山の中に神の社一たてり。こしきの天神と申となり。これはかの御神つくしへうつされ給ひける時。こゝにてたびのかれいゐまいらせたりける物の具に。こしきといふものの殘とゞまりて今の世まで侍けるなるべし。やがてそのこしきをも社に祝たてまつりてかたはらにをき侍なり。又そこにめでたきし水あり。これはかの天神の御手づから堀いだし給けると申。

我祈るたのみもことにまし水の淺からましき惠みをそまつ

此山にならびて田面のすゑのみちのべにかた岡のやうなる所に松や竹などしげくて草のだう一たてり。平家の世に沼田のなにがしとか

やがこもりけるを。のりつねの朝臣のせめおとしける所と申めり。いまもしづが田返おりおりは。ふるきかばねなどほり出事も侍るに。矢のあな。かたなのあとさへみえ侍となん。そのあたりに草とるといひて田中に入あまたおりたてり。

袖ぬらす習ひも悲しあやめかる沼田の田草けふはとりつゝ

此南によろづの神々いはひたてまつる中に。おとこ山もいますと申。

たのむそよこゝも南の男山おなし宮居にかけしいのりは

ひとのひとよりとかやのみことのりは。をろかなるわが身までもなどかもれ侍べき。あまかけりてもみそなはし給ふらんを。如何してか心をもみがきて照し給らん。御こゝろにも叶侍らまし。七月七日手向にかぢの葉にかく歌七首。

紅葉葉のにしきの橋や渡すらむ七夕つめのまれのあふせに

西の海や我こそたのめ織女のけふ渡るせのさはりなければ

わかいのる心のすゑもとをらなんけふの手向の文字の關守

けふよりやなをたのまゝしつくし舟梶の七葉の神にまかせて

時きぬとはやまちわたせ彦星のいをはたをれる糸のしま人

あひみまくほしにやいとゝ祈らまし秋は花咲菊のたかはま

契ありて秋はかならすたなはたの松浦の河を渡るへきかな

つくしの名所を少々よみ入侍るなり。

はつきの廿九日。あきの國ぬたのさとをたちて。入野といふ山ざとをとをり侍るに。此所はむかし小野のたかむらの故郷とて。やがてたかむらとも。をのとも申侍るとかや。大なる山寺あり。今夜は高谷といふさとにとゞまりぬ。

又の日はおほ山といふ山路こえ侍るに。紅葉かつぐ\く色づきわたりて。はゝそ柏などうつろひたり。日影だにもらぬ山中に。谷川こなたかなたに流れめぐりて。岩たゝく音心すゞし。ふし木などのよこたはりつゝ谷ふかき上をさながらみちにする所も侍。

もみぢばのあけのまがきにしろき哉おほ山姫の秋の宮ゐは

此山こえすぎて瀨野といふさとあり。こゝもみなやまあひのほそ路なり。駿河の宇津の山のおもかげぞうかべる。

晦日はかひだとかやいふうらにつきぬ。みなみには深山かさなりたり。ふもとに入海のひがたはるぐ\とみえ。北の山ぎはに所々家あり。こゝに廿日ばかりとゞまりて長月の十九日の有明の月にいでて。しほひの濱を行程なにとなくおもしろし。さて佐西の浦につきぬ。廿日は嚴嶋にまうで侍。此嶋は峯三四ばかりそびえあがりて。み山木の年ふりたるうちにまじりて。老たる松の岩上に生かたぶきつゝ。磯ぎはまでしげりたり。東にさし出たる山の崎と此嶋のあはひは二十餘町ばかりへだてたる中に。小じまのさとぐ\しげにて見ゆるひとつ侍。これなんこぐろ嶋といふなるべし。此嶋のあたりをばあたとゝぞいふなる。

嶋守にいざこととはん誰爲に何のあたとと名にしおひけむ

その南にあたりてかすめる嶋々あり。まさかりのせとゝぞ申なる。此國と伊豫の國とのさかひにて侍るとかや。海のうへに國のさかひのみゆるこそめづらかなれ。彼御社のやうは。すこしいぬゐにむかひためり。らうのしたまでしほみち入たり。鳥井は海の中にたゝり。嶋の四方に入江どもあまた有て。見所かぎりなく侍るなり。百浦侍るとぞ申。あはれ心しづかにて。このあたりこぎめぐりつゝ。思ふ人どちみ侍らましかばと。先郡の友も故郷のおやも戀しく侍るかな。御仙瀧もとなどいふ所々の侍なれども。日暮ぬべしとていそがはしげにすゝめられ侍りしほどに見ずなりにき。さてまかり申し侍て。御前のはまこぎいでて。佛舍利二粒東寺。葉室。うみに入たてまつりぬ。このたび

の祈なるべし。夕日にむかひてわたるほどに。ひくしほに向てふねをそく侍ば。磯ぎはのぬるみにかけて侍しなど。ふなこどものいふを。などてかくはいふぞと尋侍しかば。かやうにしほのみちひのはやき時は。いそぎはしほのさかさまにながれ侍るほどに船のこぎよく侍るなり。ぬるみとはよどのことを申といふ。

いそきはのぬるみにかけて出し舟の早潮みちに向ふ程なき

この浦は四方に山々うちかさなりて。いづらをしほのみちひもかよひせんとおぼゆる海中に。この嶋も侍るなりけり。さとにうみの宮このあるじの御座所とおぼえて。此世の中ともみえ侍らず。かへりてすさまじきまでぞおぼえし。

廿一日は此佐西を出て。地の御前といふ社の西ひがたより山路に入ほどに。おほの山中といふところに来りぬ。長月の有明の月影しらじらと残りて。木の下露はまことに笠もとりぬべく。所せきもみぢの色こくみわたされたる中に。しゐのはの嵐にしろくなびきて。松のこゑ山川の音にひゞきあひたる朝ぼらけ身にしみておぼえたり。

とにかくにしらぬ命を思ふかなわが身いそちにおふの中山

昔たれかけにもせんとまくしゐのおふの中山かくしける覧

古集に侍るやらむ。むかひの岡にしゐまたでといふ事の。ふとおもひ出侍てよめるなるべし。此やま分くだりて又浦に出たり。こゝをもおふのうらといふなり。むかひの山はいつく嶋山の南のはづれなりけり。行めぐりてなを同所になりにたるかな。今朝さゝいの浦をいでつる友の大船どもゝ。今ぞ追風にほかげもみゆめる。ふねなる人も此方をゆかしとみをこすめり。

おほの浦をこれかととへは山なしの片えの紅葉色に出つゝ

此ふねどもの中に朝げのいとなみするとて。けぶりのたちのぼりつゝ。浪にうつろふけしき。心あらむ人にみせまほしかりき。

浪の上に藻鹽やくかとみえつるは蜑のをぶねにたく火也けり

それよりこなたはみな山路なり。津葉黒河こえ松やを松などいふも。うみかたかけたるみ山ぢなり。大谷とて岸たかき山河ながれ出て見ゆ。これより周防のさかひと申。今夜は多田といふ山ざとにとゞまりて。朝にまた山路になりぬ。これなむ岩國山なりけり。一ふたつある柴のいほりだになく。人はなれたる山中にみ山木のかげを行。誠に岩たかく物心ぼそき路なり。夕になりぬれど。きこりだにかへらず。鐘の聲もきこえぬ所なり。

とまるへき宿だになきを駒なつむ岩國山にけふやくらさん

たち返りみる世もあらは人ならぬ岩國山もわかともにせむ

たらちねの親につけはやあらしてふ岩國山もけふは越ぬと

ふるき歌にいは國山をこえん日は手向よくせよあらきその路とよみて侍るやらむ。それをかたよせてよめるなるべし。はるばると越過て。又海老坂といふさとに寺の侍しにとゞまりぬ。廿二日なるべし。又の日は遠石のうらとて。山本南に向て八幡の御社います。その御前のはまのしほひのかたはるかなるおきに大なる石のさきあがりてみえ侍。是をとを石とは申とかや。人こそしらねとぞいはまほしきや。此御神にも上矢一たてまつりぬ。その日は暮ぬほどに富田といふうらにつきたり。是も北西をかけて入海はるかにてこじまどもの名もしらぬがいくらもうちつゞきたり。其中に又いつく嶋といふも侍し也。つりするあまの舟ども嵐にむかひていそがはしげにくるもみゆ。雨げになりにたりとて。村雲のあしはやくきをひ來たり。

夕しほにつれてやきつゐいとゝしくあし早船のとたの入海廿四日。周防の國府につき侍。道のほども南はうすみいでたるすゑに嶺どもの墨繪にかきたるやうにみえたる。そのふもとに大なる嶋は。姫嶋とて豐後の國なるべし。高崎の城などいふも雲ゐはるかにうちかすみつゝみえたり。かのすみ所など思ひやらぬにしも侍らず。此海づらはなみいとたかし。是より外の海になりぬとぞ申める。やがて浦の名をも外の海といふ也。磯ぎはよりつゞらおりにのぼる坂有。橘坂とぞいふ。

あら磯の道よりもなを足曳の山たち花のさかそくるしき

此坂越過て西のふもとに入海有。東西に山さしめぐりて其前に嶋あり。西ひんがしのあはひに二のわたり有て舟ども是を出入なめり。猶おきのかたにあたりて。木しげりたる小嶋ども七八ばかりならびてみゆ。北のいそぎはに人の家ゐありて。爰を國府と申也。猶北のみ山にそひて南向に天神の御社たてり。御前の作道は廿餘町計はまばたまでみえたり。其うちに鳥居二立り。みたらし川は路にそひて流てけり。橋などかけたり。そのにし南にさしむかひて一重なる松山の侍るをくはの山とぞいふ。ふもとに松原とをくなみ立て。あたりはかたはまとてしほやく所なり。

花すゝきまそをの糸をみたす哉しつかかふこのくはの山風

長月は此國府にて暮て。神無月の七日の夜ぶかくたちて。なをひがたの路を行に。しま〳〵入江々々どもいふばかりなく目もあやなる所所うちつゞきたり。大さきの濱田嶋といふかたは。うちけぶりたるやうにて。あけぼののそらのどかにて。浪の音もきこえぬほどなり。あしべのたづの明ぬとなくこゑのどかなり。

大さきのうら吹風の朝なきに田しまをわたるつるのもろ聲

そのこなたは村のけぶり立ならびて。梅やさくらのときならぬ花さへさきそひつゝ。朝げの風に匂ひ來るも。春秋をならべたらん心地して面白し。ひがたを行かゝるほどに。しほみちぬべしとて。北にそひていさゝかなる山路になりて岩淵といふところに出たり。此方も猶なた嶋がたとて遠きひがたなり。今夜は香河とかや申所にとゞまりぬ。竹の一村侍る。みこしに嶋のちか〴〵と見えたるをこのさと人にとへば梅が崎といふ。

立かへり春や來ぬらん梅か崎ちりにし花とみゆるなみかな

まことやこの月はすくなき春といふなるもことはりとおぼえて。山梨李などまでも咲たり。八日は雨ふりながらいまだ明たゝぬほどにいでて。みねへのぼり行などいふばかりなし。いさごだにもなくて。さながら岩をのべしけるうへに山川のながれきつゝ。底もあらはにみゆる岩淵にたゞよふ木のはの色も。げにぞ秋はかぎりとみえぬる。大方のやまのたゝずまひは。あづまぢのさやの中山おぼえて。其よりは今すこしかげふかく。物ごゝろぼそき山路なり。日中ばかりこの山をこえて。あさの郡といふさとにつきぬ。むかし板がきの城と申ける山ぎはに。寺の侍に今夜はとゞまりたり。此寺の本尊は信濃國善光寺の如來をたしかにうつし奉りけると申。

雨にきる我身の代にかへななんころもたるてふあさの里人

あけぬれど猶雨風やまず。よもすがらあられうちまじりてふりあかしつるを今朝み侍れば。昨日わけこし山の梢どもに雪のふりかゝりて。里近きふもとの梢はなをのこりの紅葉どもの色こくて立まじりたり。まことにめづらかなり。それよりは山に分入て海のへたにうち出侍ぬ。こゝを羽ふとかや申なり。南はう

ら浪たかく立て。雲ふかき絶間に山ちかくみえたり。豐前國なるべし。北のやまは松しげりて其前に社あり。八幡とぞ申なる。御垣の前に西東へつながれてしほもかよひ侍りけり。橋わたして大なる鳥居立たり。松ばらむらだちたり。住吉の御前のはまおぼえたり。此御前うちすぐるより俄に霰かきみだれて西ふく風あらましく吹おちつゝ。笠をだにとりあへぬほどなり。とかくしてうすは潟といふひがたにうちいで侍き。霰はすこしやみて又雪ふりきつゝ。ひがたの砂のいろもことに見ゆ。磯ぎはの岩のうへに鵜のむらがれゐたるも。おりからみどころ侍しほどに。

似ぬ色もことにそ有ける鵜つ鳥うすはのかたに雪は降つゝ

鹽みちきつゝひがたはえなんとをるまじく侍とて。又山路になりて。小嶋といふうらざとに出たり。松原をはるかに行過て長門國府になりぬ。北はまとて東南にむきて家居あり。このさと一むらすぎて神功皇后宮の御社の前に出たり。御やしろは南に向たり。それより山のうしとらに出たる尾上をば御かり山といふなり。このはまのわたにすさきの樣に出たる山侍き。くしさきといひて若宮のたゝせたまひたる所なり。其東の海の中に十餘町ばかりへだてゝ嶋二むかへり。古の滿珠干珠なるべし。今はおいつへいつとかや申めり。此うらを壇のうらといふ事は。皇后のひとの國うちたまひし御時。祈のために壇をたてさせ給ひたりけるより。かく名付けるとかや申なり。其時の壇の石にて侍るとて。御社の前のみちの邊にしめ引まはしたる石あり。此御社はあなと豐浦の都のおほ内の跡にて侍るとかや。此時御船つくらせ給ける木とて。ふな木の松などいふも侍るなるべし。

長門國あなと豐浦の舊都に御社たゝせ給たり。これなん神功皇后と申。御神は昔西のえびすのためにかたじけなき御ちかひ侍るをあふぎたてまつるに付ても。つくし路や松浦におもむき侍るべきいくさの舟の追風侍わび侍るほどに。古の御船出の四十八艘の事をなずらへて。三四の和歌を奉るなるべし。

西の海や安くわたらん千早振神のあつめしふなかずもがな

豐國のおきつ嶋山えてしかなこゝろのことき珠と見るへく

稚さくら花にさかへし都より猶このうらを神やしめけん

此國の一宮住吉明神にたてまつる歌四首。御社の數になずらへてよめるなり。

うき雲のなひ風まちて天の原神代にてらせ日のひかりみむ

末の代のまほりもしるし千早振神の中にもひさにへぬれは

やはらける光もらすなしらなみのあはきの原をいてし月影

神垣の松の老木はわかくにのやまとことはの種やなりけん

ねがはくは此歌の心をみそなはし給ひて。あまがけりてもまぼりたまへ。このたびかくをろかなる身に二心なく君につかへたてまつる事。あきらかなる神の道を一すぢにたのみ侍てなるべし。

霜月十三日は住吉の御日にて侍れば。彼一宮に詣侍るに。本社よりも猶かう〳〵しく神さびていみじく見えさせたまふなり。此御前より西にあたりて西の海のはるかにみわたされたり。松浦への船どもゝみなこのちかき海のへたにふくら嶋といふところにかゝり侍るを。今一しほ此御神の御前にて祈たてまつりて。又一首よみてたてまつる歌。

夢のうちにみえけん神の御そきぬの袖のは風は猶そ吹へき

此歌のこゝろは。今年九月に豐後の高崎の城より宗久といふ僧。此方にわたり侍らんとて。舟にのりはべりながら。順風なかりける夜の夢に。よはひ八十ばかりの翁のかみひげしろきが。ゑぼしに淨衣きたる一人出來て。左の袖

をひろげて。これに乘て舟出せよといひて。袖をうちふり給ひければ。をひ風吹てこなたにわたりぬとおぼえけるを。夢心地に住吉の大明神よと思ひてさめ侍るに。やがて其曉風よくなりぬとて舟いでて。日のうちに周防のくた松といふところにつきぬとかたられし事をふと思ひ出て侍りしほどに。この歌もその心をかたかけてよめるなり。此舟どもけふも出侍らずとて。ふくらの嶋よりつかひきたり。小舟にて天川といふわたりをして參たりと申ししかば。こゝにもかゝるわたりのありけるよと思にも。あはれ星逢のはまのつゞきに此渡のあらましかばとぞおぼえ侍る。このついでに又歌二首。

秋にしもかきらさらなん天の川あまのを舟は今もかよふを

松浦ふねはやこきつけよ天の川まれなる中の渡りなりとも

諏訪明神とたなばたは同躰とかや申ければ。殊にこの諏訪住吉の二の御神は。いくさの船のまぼりにてわたらせ給ふぞかしとおぼえてよみ侍也。霜月十八日この歌たてまつりて。七日になり侍るほどに。けふ皇后宮の御まつりとて。神供などたてまつる日しも。朝より東風吹出て。松浦ぶねはや出ぬと申。ひとへに神々に祈申しるしとかたじけなくおぼえて。重て詠歌二首。

神祭るけふぞ吹けるあさこちのたよりまちつる旅の舟出は

勝事は千さとのほかにあらはれぬ浦ふく風のしるへ待えて

此うたども神の御こゝろにかなひけるやらん。かく舟出もおもふまゝに侍るに。十二月五日まつらよりの使に僧たち來り給ひて語たまふを聞侍れば。是よりの舟どもあまりに待久なりけるほどに。松浦のをのこどもうちよりて。とかく又心ごころの議定どもし侍ける折節。此浦のおきに大船四十よそう通けるを。は

やこの方のふねのつきぬとおもひて。人々何の定もなくたちあかれてまちけるほどに。又舟はよしもなきしらぬ舟どもにて行ゑなくきこえける。又の日此ふねども付侍るとかや。ひとへに松浦のいくさのさだめを又あらためさせじと神々のはからはせ給けるなるべし。こなたの舟出の日しも。かゝるふねの松浦をとをりける事うたがひ侍るべくもなき神道の御計なるべし。歌は必神に通ずる事と申せば。かくをろかなる詞の花も。神々の手向にうけひき給ふにこそ。此しらぬ舟のとをりける日は霜月十八日なるべし。こなたのふねは十九日松浦には着ける也。

霜月の廿九日長門の國府を出て。赤馬の關にうつりつきぬ。ひの山とかやいふふもとのあらいそをつたひて。はやともの浦に行ほどに。向の山は豐前の國門司の關のうへのみねなりけり。海の面は八町とかやいふめり。しほのみちひのほどは宇治の早瀬よりも猶おちたぎりためり。さても穴戸豐浦の都と申侍る事は。今の赤間の關と門司の關とのあはひは山のひとつにて。其中にわづかにしほのみちひの道ばかり穴のやうにて侍るに。その岸の東西に人家しげかりけり。あなととはさていふなりけり。其を皇后のいくさの御舟とをりがたかりけるに。御舟よそひてのち一夜のほどに。此穴戸の山引わかれて。今のはやとものわたりになりぬ。このやまさながら西の海中によりて嶋となれり。此嶋のむかひは柳の浦とて。むかしさと內裏のたちたりける所なるべし。今はそこをやがてだいりのはまともいふなり。赤まの關のにしのはしによりてなへの崎とやらんいふめる村は。柳のうらの北にむかひたり。此關は北の山ぎはにちかく。家とならびて閻

のやうなる山あり。かめやまとて。おとこ山の御神のたゝせたまひたり。其東に寺あり。阿彌陀だうといふ。安德天皇このうらにてかくれさせ給て後に。知盛の卿女の少將のあまとかやいひける人こゝにのこりとゞまりて。平家の跡問けるを。のちにかの御菩提所になされて。安德天皇の御尊影おはします。本尊は淸盛公のふく原の持佛堂の阿彌陀佛と申なり。又小松のおとゞの本尊とて。さか佛もたゝせたまひたり。このたび安德天皇の御事いつかゆめにみえさせ給ふことの侍しほどに。たびたび御菩提をとぶらひたてまつり侍りき。いかなる世々の契にてか侍つらんとぞおぼえ侍る。門司の關はこの寺にむかひたり。そのつゞきに山どりのおとて山寺ありと人のかたり侍し。いとえんなる所の名なり。

海をさへへだてゝけりな山とりの尾上の寺の入あひのこゑ

まことやこのひくしまと穴戸の江のはやとものわたりのあはひ。まことにひきわかれて侍らば。しまの長さとはやとものわたりのひろさは同ほどぞ侍らん。おぼつかなしとて。いづれの代にて侍りけるやらん。國司出て引嶋の長さを繩してとりて。はやとものわたりにをしあてがひて侍りければ。ちりばかりも寸法たがはず侍りけるとなん。いと興ある事なるべし。此事は此皇后宮の宮司として老て侍るが語侍る也。十二月の一日より十五日まで一宮の御神此皇后宮におはしまして。神事侍るほどはこのさとの人門に侍らず。足手をもあらはず。女おとこのわざもせぬ事とぞ申。神の乙女などもかねをだにつけず。かみをもときわけぬ事なり。いとあらたなることなり。しはすの晦日はこのはやとものの浦のしほさながらひつゝ。わだつみの底もあらはになり侍る

時。おきの石にわかめの侍るを一ふさ神主かりとりて歸れば。やがてしほみちき侍とぞ。此わかめをとりて神供にそなへ侍る事。むかしよりいまだ絶侍らずとなん。もし其比まで此ところに侍らば。行するの物語にもし侍てまし。

鹿苑院殿嚴嶋詣記　同

左のおほいまうち君(義滿)安藝の國嚴嶋まうでのことあり。此たよりにさすらひ給て。いそのかみふるき都のあとなれば。つくしの國をも御覽ずべきなるべし。かつは浦づたひのめづらかなる所々をも御覽じ。かつは四の國にいたりて。やまと言の葉歌つといふ處をも御らむじ。又は武藏入道(賴之朝臣)。ふるき好をもとぶらはせ給べきにや。御舟よそひの事は。やがてかの入道うけたまはりて。百餘そうたてまつるなるべし。舟のうちにてのさうやく。みなこの人のまうけなり。むかしもいつくしまには高倉院(八十代)御幸なり。平のおほきおほいまうち君(淸盛)も。たびたびまうでられしためしも侍けめども。此たびはひきかへてめづらしき御すがたどもにて。はなだ色にめゆひとかやいふもむをそめて。袖口ほそくすそひろきうちかけといふものを

おなじすがたにき給。赤き帶に青色のはゞき赤色のみじかき袴也。御ともの人々みなみさきばかりなる金がたなどもさゝせらる。かたはらの人はそしり侍りけめども。かやうのことはあながちに法も式もさだまらず。たゞ時代にしたがふことぞかし。いまやうなどとてさだまりたる器などをだにも。はじめてしいだして用らるゝためし。古もなきにしも侍らねば。そしりはかへりて道せばきなるべし。旅の衣のたつ日さだまりて。康應（後小松）元年三月四日夜ふかく都を出させ給ふ。東寺の南の門うち過程に。かの寺のかねの聲もきこゆめり。桂川のほとりとおぼえて。火の影所々にみゆ。こあゆとるなりけり。げに瀬にひかるらむかし。その日のむまの時ばかりに攝津國兵庫の津につかせ給ぬ。御ましの舟にまいるべき人々かねて定らる。

修理大夫。　右京大夫。
日野弁。　畠山左近大夫將監。
同七郎。　（關口）今川修理亮。
眞下。　古山十郎。
このほかはをの〳〵の舟にて參侍り。
畠山右衛門佐。　山名播磨守。
細川淡路守。　土岐伊豫守。
探題。伊豫入道。　今川越後入道。
同右衛門佐。　同中務大輔。
伊勢右衛門入道。　曾我美濃入道。
朝倉因幡守。　若王寺別當。
古山珠阿。　松壽丸。
士佛。

かやうの人々也。侍二三人しもべ三四人ばかりめしぐすべしと定下さるれば。舟數よりも人かずはすくなかりき。兵庫にては赤松の千菊丸。此ところのあるじ申侍けり。まことにこ

ゆるぎのいそぎありくさま。ことはりとみゆ。其夜の曉に御舟にうつらせ給。百よそうの舟どもみなともづなをとくめり。人々は兼て舟に乘て夜をあかし侍けり。

浪枕かゝるね覺のありけるを老のならひと何かこちけむ

波の上やう／＼しらみ行ほどに。和田のみさき。明石のせと。淡路のせと。とがり崎などいふ浦々過させ給。げにも山水のたゝずまゐ。繪にかゝまほしくみゆ。けふ五日。雨風はげしくなりて。あまのをしてもいとゞたゆきにや。夜中ばかりになりて。たて崎とかやいふ海中にいかりをおろして御舟をとゞめらる。四方の空くらかりしかば。御舟を洲にこぎかけしかどもわづらひなかりき。御座のふねばかりにかゞりを二たてらる。是をことふねどものしるべとせり。

六日。御舟いでて。うしまど。まヰのすなどにいたりぬ。まことや此うしまどといふ所は。むかしおきながたらしひめの御舟出のとき。けしかるうしの御舟をくつがへさむとしけるを。住吉の御神のとりてなげさせ給しかば。かの牛まろび死けるが嶋と成て。それよりうしまどといふ也けり。牛まろぶと書て。うしまどとよむとなむ聞侍しなり。まヰのす。つちのとなどといひてかたき所々いまぞとをらせ給。此所はしほのかなたこなたに行ちがふめり。宇治の早瀬などのやうなり。しほの落合て。みなはしろく流れあひて。しほさい早くのぼればくだるなり。稲舟ならましかばさほとりあへじかしとみゆ。つちのとといふは。大づちこづちとて嶋山ふたつ北南にならびたるあはひをとをるせとなるべし。早しほにをし落されじと。舟子ども聲をほにあげてこぎなめたり。ゐの時ばかりにおきの方にゐたりてあし火の

かげ所々に見ゆ。これなむ讃岐國うた津なりけり。御舟程なくいたりつかせた給ぬ。七日は是にとゞまらせ給。此處のかたちは。北にむかひてなぎさにそひて海人の家々ならべり。ひむがしは野山のおのへ北ざまに長くみえたり。磯ぎはにつゞきて古たる松がえなどむろの木にならびたり。寺々の軒ばほのかにみゆ。すこしひき入て御まし所をまうけたり。かの入道こゝろをつくしつゝ。手のまひ足のふみ所をしらず。まどひありくさま。げにもことはりとみゆ。いかめしき御まうけとは見ゆめれども。心ざしの程にはなををよび侍らぬとやおもひけむありがたかりき。奉るくさぐさいかめしき事也。人々に給ふ物も御はかし。よろひ。みなよのつねならずみがけるならし。八日の朝御舟出也。此かしこまりとて。武藏入道おや子。これより御とも舟にまいれり。海の上三里あまりこぎて。さなきといふ所にて。雨風けはしく波いとたかゝりしかば。此嶋わに御泊有。いかりおろしたる舟ども夜もすがらたゆたふさま心ぼそかりき。

名にしおはゝさてしもあらて浦風のさなきはなとかはけしかるらん

九日。またこぎいださせ給ふ。備後國おの道といふ處の西に。くぢら嶋。いとさき。いくらの嶋などいふ浦々北にあたりてみゆ。この所々はいにし比つくしへ下り侍し時通侍しなりけり。此南にいよの三嶋はるかにかすみたり。今夜は安藝國高崎といふ海べたに御舟をかけらる。

十日。またこぎ出させ給。たかはら。みつかさ。はや山。地内の海。かうしろ。ひろくれ。はたみ。かまかりのせと。かやうの浦々過させ給へり。此國のたか谷といふもの舟にて參りたり。大内左京權大夫をそくまいるよしおほせらる

と聞ゆ。おむどのせとといふは瀧のごとくにしほはやくせばき處なり。舟どもをしおとされじと手もたゆくこぐめり。

船玉のぬさも取あへずおち瀧つ早きしほせを過にけるかな

とよ嶋などをしすぐる程に。又夜に入て子の時ばかりに嚴嶋につかせ給。御社のうしろに黑木の御旅所をつくれり。今夜は舟のまゝにとまりたる人もおほかるべし。

十一日。御社ふしおがませ給て。御前の濱の鳥井のほとりよりかごにて御舟にうつらせ給へり。御社のらう〳〵拜殿などにみこ内侍やうのかむづかさ女どもたちこみたり。かもめのむらがれ居たるにいとよくにたり。それよりおかだとかや云は。おほたき川とて。安藝と周防のさかひの川の末の海づら過て。周防の國岩國ゆふむろ岡などいふ所々きたにみゆ。しろの嶋。伊豫の國道別の山など南にあたりて霞つゝ浪の上もうちけぶりたり。夜舟は心もとなかるべしとて。かうしろといふ海上に御とまりなり。

十二日。大畠のなるととて。しま〳〵あまたある中をかなたこなたに舟どもこぎわかれて。末にて又めぐりあふめり。

高しほになるとこぐめる友舟の蚕の手棹はまなくとらなん

あひの浦すぎて。むろづみと云所に至ぬ。むかし生身の文殊のみかほおがまむとちかひける人につげ有て。これこそ生身の文殊よとて。此所の遊女ををしへける所ぞかし。所のさままことに面白し。岩は高くきりしきてそびえたる峯三四ならびつゝ。松柏むろなどいふ深山木苔おひさがりて。うき雲うすくかゝれり。此山のひんがしにしの脇に舟の泊あり。その西北になぎさにそひて松原ひとすぢ霞につゞきて。白濱も浪もひとつにみゆ。にゐの湊こぎ過

て。くだ松といふとまりにつかせ給ふ。大内左京大夫はこゝにぞまいりためる。御旅のかれ飯みきなどさま〴〵まいる。

　あま乙女しつはたならぬくた松も浪の白糸よりやかく覧

十三日。この國の國府の南。たかはまといふ浦ばたのみたじりといふ松原に御旅所をたてたり。此松原はいそのかみ嚴嶋の明神こゝにあまくだりまして。今のいつくしまにはうつらせ給ければ。げにぞ神さびたるや。銀をしけるやうなるいさご。西東のすさきの中を入江のやうに二すぢばかりしほさし入て。浦松のいたくこだかゝらで枝ざし老かゞまりて木だちつくろへるやうなるむら〳〵おひて。其中にちいさき社のふりたるぞおはします。

　松原や高すの梢こゆるまて月のてしほの更にける哉

猶人々は舟にぞとゞまりたる。

十四日。さるの時ばかりに御舟出なり。四里ばかりこぎいでて。大江などいふ過て。おとまりといふ泊ちかくなるほどに。西風吹おちて。浪たかく打かけ侍る程に。又御舟をしなをして跡のたかすのむかへ嶋といふうらに御舟を懸たり。

十五日にぞこぎ出し給。此たびは五里ばかり行て。赤崎と云浦にて。又大風むかひて更に御舟ゆかず。是よりこぎかへさせ給て。岩やどといふ浦にとゞまらせ給ふ。夜に入てなを大風はげしくて。神なり浪すさまじければ。はし舟にてたゞ御一所ばかり。田嶋といふうらばたの海人の家に。草のおましをよそひておはします。舟どもは海上になをとゞまりぬ。大内も御ともにまいれり。

十六日の朝。武藏入道や探題などに仰含らるる事あり。浪風かうやうにあるゝによりておぼしめすやう有。此たびは是より歸のぼらせ

給て。しづかにかちぢをこそくだらせたまはめ。いかゞ侍べきと仰らるゝ。探題は我かたにいらせたまふを申とゞめむこと世のそしりもやとおもひけめども。此たびの浪風のさはりたゞごとともおぼえ侍らず。かつは都にもいそがせ給べきことのわたらせ給にこそと思に。人のそしりを忘つゝ歸り上らせ給べきよしを申けり。武藏入道もおなじ心に申めり。是はなを御のぼりにもうたつによらせ給べきことをことぶき申さむの心もや侍けむ。此こと定て。けふは又たかすにかへらせたまひぬ。十七日は是にとゞまらせ玉ひぬ。今河越後入道は是よりまかり申て。かちぢよりつくしに下りしかば。御はかしなど給りて。かたじけなきおほせどもうけたまはりしかば。うれしなきの涙袖もしほゝに見えしなり。此たよりにつくしの人にもみせよとにや。御みづからさまざまの事どもかゝせ給て。御文一くだり探題にたまはりけり。老の後のめいぼくなるべし。やがてつくしにつかはしけるとなむ。今日備後より山名宮内少輔まいれり。御のぼりに尾の道を御覽ぜさすべきよし申。父の左京大夫伊豫守は。やまひによりてまいらず。

十八日。かまどの關に御かへり有。これにて大内一ぞくども伊與の河野など御目にかゝりきときこゆ。今朝をひ風有とて出させ給。

十九日。かまどの關より周防國やしろの嶋。よこみ。いつゐ。あき。ふなこしなどいふ浦々嶋嶋とをらせ給。此南のかたにあたりて。伊豫國まさきがふろ。いほたうのうらのせと。ふたかみまさかりのせと。はしかみのせと。ぬわとつなつわなどいふ所には。嶋々いくらも四方にならびたり。

あさなけに煙のかゝるてふ藻鹽草たゝやかまとの關といふ覽

夜な寒みかさねやせまし旅衣はるたにあらきあきのうら風

今夜は廿五里ばかりこぎて。安藝國かまかりに御舟とゞめらる。墨嶋とかいふ所也。

廿日。いかりをとりて。内の海。たかみ。たかさき。ひきしま過て。にふの浦と云所にとゞまらせ給。東風むかひて浪あらければ。しばらくかゝらせたまふ。日の入ほどに風すこしなぎたり。又御舟をこがせらる。夜に入てなを雨風おどろおどろしく成しかば。舟ども思ひ〱にこぎわかれて御ふねははるかにさかりけるをもしらず。御舟を洲にをしかけてゆかざりければ。はし舟をめしてたゞのうみの浦と云所のいそぎはにあしふける小屋にやどらせ給ひける程に。しほみちきて御舟おきぬとてまいれり。又めしてこがせ給。

うきねする沖つ泊ないそけとや明ぬ夜しほに船のおくらん

しほのひてゐたる舟の。しほみちてうかぶをば。おくるといふにこそ。

廿一日。御舟出。風なを吹はりて。御ふねのやほの杜吹おりにけり。いまだ朝のほどに備後國尾道につかせ給ぬ。御座は大寧寺とて天龍寺の末寺なり。海中までうき橋かけて御道とせり。なにとなくめづらしかりき。

古へにこりかたまりし跡なれやもしほくむてふあまの浮橋

かのほこのしたゝりの事思ひよせられてよめるなるべし。

廿二日。卯時に御舟出。あふとゝいふせとあり。をひ風はげしく浪高かりしかば。船どものほをおろしてこぎかさねしかば。手ざほどもきびしくとりてこぎ過たり。此處は嶋一南方へさし出て。北の山々のあはひのほそき所ををしまはす所なり。海賊とて白浪のたち所なりとぞ。ともの浦の南にあたりて。宇治は□りなといふ嶋々有。箱のみさきといふも侍り。

へたて行八重のしほちの浦嶋や箱のみさきのな社しるけれ

讃岐國にもなりぬ。やつまといふ嶋わあり。此しまは人の家のつまむきに似たるゆへにいふとなり。二面といふこじまも侍り。松がえなどおひたり。などやこのてがしはのなかるらむとおぼゆ。そひ風ことのほかにはげしくて。ただつといひて。うた津より南なる浦に御舟をよせてあがらせ給。御むかへとて。馬はあれどもかちよりなぎさのひがたにそひてあゆませ給て。いさゝかなる山路を越させたまひて。うた津に又いらせ給。二里ばかりあゆませ給けり。とりの時ばかりにぞいたらせたまひし。この西北のかたにみえたる山は。かのさぬきの院のおはしましけむ松山しろみねなど云めり。

流れけんなしき舟の名殘とてたゞ松山の陰そふりぬる

廿三日はこゝにとゞまり給て。武藏入道めされて遙に御物がたり有けるとかや。何ごとにか有けむ。涙をさへてまかでけるときこゆ。

廿四日。出給て。かのやしまといふかたなど見わたして。備前國よもぎ嶋といふ所になりぬ。

いく薬とらましものをよもき嶋をよふはかりに漕わたる哉

今夜はうしまどに御とゞまりなり。赤松右馬助まいりてあるじつかうまつるなるべし。夜になりてまたかみなりあられふり大雨風になる程に。舟のいかりをとりて此泊のすこしひむがしのわきに舟をなをしき。其ほどのさはぎのゝしる船こどもの聲々。神なりさはぐにもをとらず。まうちぎみばかりは寺の侍しにうつらせ給ひけり。

廿五日。出給て播磨國室の泊につかせたまふ。赤松まいれり。こゝにもうき橋かけて。磯ぎはなる寺にいらせ給ふ。こぎ入程。風あらく浪高くて舟どももあらそふ程に。人々もみな家々に

うつれり。かれ飯さけなどもさまぐ\にあり。赤松まかなひ侍りけり。いかめしかりき。一時ばかりありて。やがて是よりかちぢをのぼらせ給ふ。御ともにはたゞ御ふねに侍し人々ばかりなり。

僧たち。絶海和尚。　修理大夫。
右京大夫。　日野辨。
畠山七郎。　關口修理亮。
赤松。　眞下。
古山珠阿。

などばかり也。しもづかへのものまでもみな馬にのせらる。さても武藏入道は。つちのととといふあたりよりいとま申てとゞまりけるにや。御所はけふこの國に常住寺といふ寺にとどまらせたまひて。とらの時ばかりに出給て。攝津國兵庫津にて朝の御物まいりて。其日都にいらせ給ふとなむ。廿六日なるべし。舟なる人々は。けふ廿六日兵庫につきけり。細川淡路守。大内左京權大夫などなるべし。かちよりをひをひにまいりし人。

畠山右衛門佐。　同左近大夫將監。
山名播磨守。　土岐伊豫守。
探題。　同右衛門佐。
同中務大輔。

などきこゆ。みな廿七日八日などにぞ京に入ける。

群書類従巻第三百三十四

紀行部八

なくさめ草

正徹

いにしやよひのすゑかとよ。ねにかへり古巣をいそぐ花鳥の身さへ。跡とゞむべきかたなく成ぬれば。さそふ水のあはれむよすがに任せつゝみやこをさすらひ出て。關のこなたまでまよひこしかな。もとよりかゝるよすて人は。いづくかは爰とさだむべきやどもあらましを。すみの衣あさはかにて。えびすのすがたにあらざるばかりにて。かうほりの鳥にも。ねずみにもあらぬがごとくにして。あるひは玉のみぎりの貴にのぞみ。あるひは民屋のいやしきに至つゝ。世のことわざにしたがひきぬれば。四十年のなみ身にかゝるまで。都のうちをさらぬことに成ぬるなるべし。しかあれば。四方の國の境とをき里には。しれるたづきもなくして。ゆくすゑこゝろぼそしともいひぬべし。關の岩かどけふぞふみならし侍る。

こゝろこそ跡にひかるれ旅人のこまたになつむ關の岩かと

しがのうらはにうち出てみれば。ひえの大嶽。ながらの山。たゞ此ふもとの霞につゞきて。煙わたれる四方のこのめのあらしよりゆきとちりくるはなも。はるをさそひがほになみのうへにちりしきたる。まことにこぎ行ふねの跡

みゆる計也。

山風も櫻はよきよにほの海に春行波の花はありとも

もるやまといふ所はいたく心もとゞまらず。森の陰の一村里にて。市め商人の物さはがしきのみなり。時雨もいたくなどおぼゆるも。今は時ならずや。

君か代に身こそもれぬれもる山の下葉のこらぬ春の惑を

こよひは鏡の山ちかくやどり取ぬ。ならはぬ旅とにや。おもふ方の夢だにもなし。

鏡山春の旅れの有明に月もおいぬる影そ霞める

むさの宿とかやを過て。ゑち川にかゝり侍るに。道のかたはら氣色木だかき杉村にかうがうしき鳥居などたてる有を。田がへす賤のおにとへば。おいそのもりといふに。げに四十年の坂もくるしきみちなれば。しばしうちやすみつゝ。

なを聞も袖こそぬるれ今は身にかはるおいその森の下つゆ

いぬかみ。とこの山。いさや川など。道行ぶりに尋てぞ見侍りし。

日かすふる花は塵ともつもらしなありとや拂ふとこの山風

いさや川いさや我名をもらすとも誰かはしらん知人もなし

暮ぬ間に人なとかめそいぬかみの里はあり共宿はからしな

などざれごとになりぬ。をのといふ所を過るに。故新大納言爲尹卿は和歌の道の長者にていませしかども時うつり世くだりぬるにや。この道もすたれはてぬるを。內大臣家より千首のうた奉らしめ給べきよし仰られたるに。述懷の歌の中に。

いかにせんをのの山柴ことたえてなをたてかぬる宿の煙を

おほけなき身の願にはあらしかしいつかむすはん細川の水

近江の小野庄。播磨の細川は和歌所の永領にて。五條の三品よりかはらざりしかども。道のおとろへにしたがひて。武家のわむせ非などいふことに成つゝ。家の風もよはり行さまな

るを。此次でに聞えあげ給ひけるなるべし。其年の冬。彼細川庄を返しつかはされて。やがて小野をもわたさるべしなどの御有増ありと聞えし。誠に萬を惠給ふ御志忝承し也。時の管領右京兆入道殿より知行にそへて贈答などの有しを此方彼方取つぎ奉しかども。歌の かたちも覺ずなりぬ。やがて 正三位大納言にあがりなどし給て。和歌の道を ふたゝびおこし給かとみしほどに。明る年の春の花の夢に先立て。雲ときえ霞とへだたり給ひしこそあはれにかなしかりしか。今此手ずさみに書くは へ 侍るに付ても。懐舊の涙水ぐきにそひ侍るなり。すり針を越しにぞ。都の山もかくれはてぬる。

今ははやめにもかゝらす古郷の都の山はくもかくれつゝ

番馬さめが井などいふ所より山ぶところなる里つゞきにて。水のながれ心細く。常盤木にみどりそへたる若葉のかげこぐらく。松の藤波。岸の山吹。えもいはぬ春を殘しがほなり。

岩ねもるしみつに春の面影をとめてやかへる松の藤浪

今夜は山中にとゞまりぬ。彌生の末なれども。所がらにや。山風も猶あらましく。そゞろさむき心地してまどろまれず。

春なからいふきおろしはよ寒にてましは折たくみのの山中

關の藤川朝わたりしつゝ。ふはにつく。

むかしたにあれぬと聞し宿なからいかてすむ覧ふはの關守

野上などいふ所はさともかすかにうかれめもなし。あをのがはらに出たれば。國の境はるかに。南の方はる〳〵と山も見えず。

命あらは花にかへらむ青くさの青野か原をけふは行とも

墨股河は美濃尾張の 境とかや。岸に打望たれば。船はむかひにあるほどにて。時うつるまで誘ひゐぬ。と計ありて 里の子せりかなにかかたみにつみもちたる三四人。おきなの 老かゞまりたるなどぞ乘ぐして來る。童部の 船より

おりかね侍るを。こにや。むまごにや。たすけおろしなどして。我もいみじうくるしげなるも。何となく哀にぞ見侍りし。水鳥どもの河洲にむらがりゐたるいとおもしろし。

船人も猶子を思ふ水鳥のすのまた川は波こゝろせよ

あしかをよひなども おなじやうにこえ過ぬ。くろだといふ所にいにしへみどり子のほどよりはぐくみにし人の。今はまことの親のよすがにてありと聞し。みちよりもたづぬべき所。人に問などしてあないしたるに。限なく聞よろこびつゝ。さるはおやめく人も都にあるほどなりしを。若心にとかくいたはりなぐさめなどし。ありふるにたづき出きぬる心地して。みやこの物がたりなどしつゝ明しくらし侍りしも哀なり。かくてやう〳〵卯月になりぬ。此所のさま。まへもうしろも田面にて。林は軒ちかく。いさゝ村竹めぐれり。民の家所々。かやがのき蘆のかきほさへさながら夏そのかげにかくされ。蓬葎に門をとぢたり。都よりあづまへ行かふ旅人の過る堤の道もたゞ此かきほの外なれば。むらがりとをる駒の足をとも。ものさはがしき折も有べし。わさ田に おりたつたごのこゑ〴〵にうたひ。夜は蛙の耳かしがましきなどめづらしき心地ぞせし。庭の木下に卯花のほのかに咲たるを。

夜もすから光はみせよむはたまの黒田の里にさける卯の花

すみ染のくろたのさなへとる賤や夕をかけて袖ぬらす覽

此所はふるき歌枕などにもよめる歌みえず。くろだ川はあれども美濃國とかや、尋べし。都の風の便に此方彼方より文など言傳て侍し。哀知る計の歌などもありしかども態かきいれず。つれ〴〵なるまゝに。近寺におはします地藏にまいり。老僧のむかし物がたりするなどかたらひよりて日をくらす。此たのもし人と

思つるやどもりさへ。とみの事とて京へのぼりにしかば。すべてしる人もなし。さらばこゝより伊勢のかたへと心ざして。大神宮に參詣し侍しぞかし。道すがらひなの長路におとろへしありさまは。海士のたくなはなが〳〵しければ。心しづかに又かき候べし。十日あまりにて本の所へ歸りきぬ。かくてもたづきなきにてあかしくらす。卯月のしもの四日。例の御堂に參りたるに。夕つかたなればにや。人もいたくまいらず。灯明かゝぐる人もなく。不斷の香の煙かすかにこゝろぼそし。此佛の御事は都にても聞侍奉しに。いにしへはあゆみをはこぶ人もおほく。御堂のかざりもきら〳〵しかりしとかや。明德の比。軍のばになりてより。形もなくなりぬるとぞ人も語し。世の中の盛衰は佛の御上にも。いましけりと哀になん。正面の東のまに心靜に念ずし居たるに。年のよはひ六十にちかかるらむとみゆるおきなすがたのかみひげしろく。いたくからめきたるが。こまのしろき衣にきなるぼうし引入て。末二股なるかせ杖にかゝりつゝ。庭の灯爐の本に立てふしおがむあり。此あたりにてはみならはず。あやしう。もろこし人などにやとおもひながら念ずしはてゝ。御堂よりおりて。何となくあゆみちかづきてみれば。都にてたびたびあひ奉りし優婆塞也。宗旨の志ふかく。處々參禪の年久して。一心の本源明なりとかや。今互に手を打て大咲す。さるにてもいかにして爰には住かと問給に。みやこをうかれ出し樣あら〳〵こたふ。ひなの住居のならはずしてはいかにしてかなどなのめならず訪ひ給に。かつ嬉しき心地す。爰にて事つくべうもあらざれば。此旅のやどりにいざなひつゝ歸きてかたらひくらす。されどもつたなき身のあり

さま。もとより學せざれば一文二道を論せず。道心なければ一句の法文の心をうかゞひしる事もなし。たゞ一向に世上の物語のみして。今夜はまくらをならべて。いたづらにふしぬ。いかばかり彼心にも慚愧ありけんとはづかしかりき。さるはそれよりのちひたぶるにそひ奉りぬれば。いまは中々明暮に付て不善の心をも。かつうは病におかされて。おきふしの煩あるをも。かへりて哀み給ふらんと心易くぞ侍る。そのつぎの日より此人にさそはれ奉て。田面の中なるやうの所にいたれり。爰は家居もさる方に類ひろく。國郡の政を行ひ。百姓のかへりみ朝暮にすたれざりしかば。門前市をなせるやうにて。みやこの外の心地もせず。十日計や侍りけん。かゝる賤き非人の身にあまるまでのめぐみにあづかり。情のかずを見奉事。かたはし申さば。中々かたはらいたくなむ。

それより此所にうつろひぬ。こゝは玉鉾の道遠からぬほどながら。さすがに人音しげからず。東には江川はるかにながれ出て。緑竹浪おほひて。朝日かげをうかべき。南には眞砂山所々みえわたり。松風夢をやぶり。よるの月霜をかさぬるかとおぼゆ。西は野澤だん／＼に一むらざとにつゞき。蘆しげりぬ。なはひろごれる池北にめぐり。鴛鴨鴻どりなどこゝを栖とせり。堤の柳岸の杉むら／＼しげりて。寢ぐらとするかさゝぎむらがれり。はちすの花みだれさきて。此ころおもしろし。家居のさまはさながら山中の心地して。万木四方につらなり。流水左右にたゝへたり。岸たかくして又くだれり。すゞの下道すゞろに遠し。やぐらあり鹿垣あり。暫つはもののいくさをふせぎ。しら浪のをそれあらせじとなり。すべて弓の庭鞠のかゝりなど。うち入てはなを寬意なり。寢

殿の西にらうつゞきたる方に一字あり。號ニ竹陰ニ補陀大士おはします。南方に床あり。會下久參の衲僧をこゝにあつめて坐禪參學をはげまんとなり。此比夏中なればにや。さやうの人も爰にはおはしまさゞりしかば。彼翁など兩三人こゝをしめたり。予が躰たらく。禪錄をあがめをくべき机には和歌の抄物を重ね。ふとんに座すべき床のうへにに〔衍歟〕は枕双子をたづさへてよこたはりふせり。炎天にたへずして袈裟衣を忘。日々しぎをほしきまゝにして酒にくの中にたはぶる。是のみに限らず。無慚放逸の科二六時中にたゆる事なし。しかあれども。よきをえらばずあしきを捨ざる慈悲のあまり。これを事ともし給はず。ひたぶる心にあはれみをはぐくみ給ふほどに。かゝるなさけのかげをたのむ木のもとにて。露の命を待がほなり。かくて五月の半に成ぬるに。日いよ〳〵ながくつれ〴〵にて。何となくらうの方に立出て。寢殿の南面をかいまみすれば。此ほどはみえもならはぬ俗四五人わらは姿のきよげに。あげまきのほどもたゞならぬ二人計みえ侍るに。都思出て床敷に。このらうの戸に出來る人に問侍しかば。あづまのかたよりこしの國へまかる旅人のこのあたりにしばしとどまるべき事ありてなんとこたふるに。旅人と聞も身にしられ。ひなの長路はいかゞと問まほしけれど。うちつけなる心地して。この戸口よりかへりぬ。かくてある時。このあるじ聞る樣。さても光源氏の物がたりといふこと。よく〳〵人に尋しりたるとなむきゝをよびたまひぬる。年久愁連歌の道にすき侍にしを。あるときは世の中にさはり。ある時はすきごとならずして。詞の花色すくなく。心のいづみみなもととぼしきのみにて。ちかくは是をとゞまりに

き。さはあれどもこの物がたりのゆへ聞侍りたき。ひまあらば片端にてもいかゞなどあり。予がいはく。まことに連歌の道の事。近年天下一同に此ことわざとなりぬとなり。しかれども先達みなうせて後。みち邪に成行つゝ。今は風雅の直なるまじろひにあらず。諍論のかまびすしきをこととし侍とかや。しかあればまじろひにくゝさし出がたき事おほかるべし。此事灯上人朝夕うらみかたられ侍し也。予も若年の時。もしまなびうることもやとおもし〔衍歟〕ひしかども。生得の不堪のうへ。此をそれあるによりて斟酌をくはへき。されども老後の友たるべき物かな。抑光源氏の物がたりは。五條の三品入道釋阿。河内守光行等専是をもてあそばれけるとかや。此人々よりふたつのながれに成りて。あるひは定家卿の青べうし。河内守が本などいふことになりぬ。たゞ聯註を存る事のかはれるばかりか。むらさき式部がことの葉として。藤氏の長者御堂關白殿筆をくはへたまひける也。きはめて義ふかく理あさし。物語の詞は其時世にいひしれる事を有のまゝに書たりしかども。世末になりゆけば。人の詞もしたがひてかはり侍るにや。今は人のなべてはしらぬ事のやうになりぬ。されども和歌道は詞人のみゝにたゝず。心田夫の賤もきゝうる様にとこそ先達も侍れ。殊更此物がたりは心の用ふかければ。是を心底にうかべばをのづから風骨と成て。詞の外に志みえぬべきかなと愚意に存る計也。故伊豫守入道了俊在世の時。此ものがたりのよみとかず。しらざる事のみおほかりしかば。十餘年がほど近付尋奉しかども。本より心はものごとにとゞまらずして。風の樹頭に過るがごとし。況人なみに釋門にいりし後は。流石に人めをかざる

方ばかりにてもさのみ事とする事なければ。かたの樣にも覺ず。かたはらいたき事おほかるべしとて。いなみ侍しかども。片端よりすゝめ給人などもありて。のがれがたくして。たゞつれ〴〵なるまゝに。互の暇をかたりつゝしり讀侍るほどに。此秋までになりて。やう〳〵事はてぬべし。さるは彼註とてしるせる物の一帖もなく。つゞきをだにおぼえずして。聞人よりもたどれるなり。されども立まじる人もなく。ひろく世のきゝみゝ有まじきを方人にて。いかに空事おほく侍らん。我はづかしきかな。まことや彼旅人の童形也。連歌の道をたしなみ。手跡も行末たのもしなど聞しに合て。こなたに立出て。たえず問聞などせられ侍るに心はづかしくなむ。大和うたの心得なきをも常にいかにぞとあるに。をろか成心のをよぶ計は物がたりなどするほどに。樣々眞をもあだ事をも隔なくなり行に。をのづからぬれぎぬ立出る人も有べし。さるは狩場のなら柴のなれのみまされば。和歌のうらはの捨舟も。終にいかなるところにかひかれけん。關守のうちぬるよひの月かげ。又身をしる雨の夕暮を訪ふに。をのづから夏衣かさねぬ夜半を恨。菅筵ながからぬ時をかこち侍ぬべし。さばかり身を雲水に任せ。山林になをかくすべきほどならずとも。なにぞは露のあだし心の色にそむべきぞや。くつるたづなは龍田の川のにごりにすまぬ名をやながさむと思かへすも。心と心のもよほしなりや。

涙川はやくうき名やながれまし人めつゝみも朽果ぬ間に

なみた川淺きもしらす賴來てうきたる名たやともに流さむ

とかこちぬべし。

かくて猶鹽燒衣なれぬれば。あるひはけはしき道に駒なべてゆき。あるひは遠きながれに

船のうちをおなじくす。又ゆくゑなき野原の露にみじか夜の月をおしみ。涼風の曉ともなひて木の下やみのほたるをあはれむ。あしたになれ行夕にむつれて。五月六月を送る。ある夜の月に川ちかくさそひ出て。

更にけりなかるゝ月も川波もきよすにすめる短夜の空

此所をきよすと申なるべし。彼歌。

夏の夜の月の清洲にすむ鵆の霜のふりはの色のさむけさ

みな月はじめになりて。あはれしらるゝ夕月夜に。まきの戸口にやすらひつゝ。かりそめの物まうでとかやとて。

立かへりあひ見む中と思へとも世のならひ社定めかたけれ

とあるを。いなばの山のとだにとひあへず。あはたゞしきほどなり。

限りある命なりとも旅衣かへらん迄の身をやいのらん

みな月御祓の日ゆふにかきて。

君か爲神しうけよと水無月の御祓にはあらぬ御祓をやせむ

返し。

神に今うけよといのる御祓こそうきをしらるゝ契也けり

又衣手かれし夜を重て。かれより。

よそなから音はかはらぬ松風をうはの空とや人のきくらん

おもひなぐさむもはかなし。今一かたは少遠けれど。あはれしれる夕ぐれえんなるあけぼの。月の夜ひるまに言傳へていひかはすに。ひともしらずうき名もながれずと。ほのきゝはべるもうらやましく。さりとてひとにはわれしりがほにかたるべき事かは。天にくちなしといへども。ひとのいはざるはとくなるべし。

返し。

身の上に露をはかけきたか方に今宵は松のねをかはしけん

しかのみならず。あるときはまつ夜ながらのありあけに鴫の羽がきをかぞふ。みしよのまくらのうへにおもひねの夢をたどり。明るをつぐるかねのこゑに。夕をしらぬ契りをうたがひ。空蟬のむなしきねをなき。夏むしの身を

いたづらになすことをかなしみ。夏も過秋にもなりぬ。いとゞしく一葉ちる風のころになみだの玉をくだき。二のほしの行あひにねがひのいとの心をひく。夕の空におもひつゞけて予ずさみに。

墨染に年経る袖の色なればかすともうけしあまつひこほし

筆をとりておなじ番に。

ほすひまは秋の一夜のあまつひれ古き涙とまたやならまし

など。なをざりごともありしなり。かくてやうやう歎ながらの月日をかさねき。此まゝもひたふるに。しらぬ山路を尋ても。跡たえなまほしけれども。もろこしのよし野の山にこもるとも。をくるべき心にもあらず。後の世を歎なみだといひなすとも。しぼらむ袖の色みえぬべし。いかゞせんにて又しれるようすがへ思たち侍るに。かれはたこしのたびにいそぐ日かずのまぢかきをいへり。ある時かれいはく。ま

ことやこの光源氏の物がたりは。うたにも連歌にも詞を取て心をとらずと申人あり。此事いかゞと。予がいはく。此物がたり。心詞幽玄をきはむ。ことには和歌の難題。連歌の付にくきは。ふるき物がたりの心をまはす事一躰なるべし。いはゆる生田の川に鳥のゐはといひ。しちのはしがきかきつめてといふがごとし。源氏の心をよめる歌古來おほし。證歌所々におぼえず。後京極攝政。

白露の情おきけることのはやほの／＼みえしゆふかほの花

ちかき世には。等思兩人戀といふ題にて。大膳大夫高秀。

おやにくに雲井の鴈の來る秋やおちばの露も袖ぬらす覽

如此なるべし。

故法音寺入道殿。勘解由小路殿。法名道將。

つかふひとにそはしたものある

といふ句に。

はつ瀬路やおなしやとりの中へたて
といふ句やらんに。

夕霧のうへに雲井のかりなきて

これ皆心をまはせりと申ぬべし。唯今おもひいだす計也。證歌いくらもありぬべし。又彼物がたりの歌をとれる歌もあり。おく山の松のとぼそを稀にあけてといふ歌を。定家卿。

足引の山櫻戸を稀にあけて花こそあるし誰を待らむ

如此一首を申さば。なずらへてこゝろえ給ふべしなど語り侍るに。さては不審はれぬ。さるにてもけふ翌は。よの中すゞしからぬほどにて。なやましかるべけれども。此物がたりの歌をなむうつしとゞめて見侍りたく。かう〳〵も筆とりなんやとあるに。いなびがたく。しのばるべきふしにはあらずとも。かくばかりわかき心にすける人も世に有がたく成ぬれば。いとゞ歎すゝみても申侍り度事ぞかしとかゝまほしけれども。鳥の跡面にきえ。水莖のながれうたかたにあらしをとおもひたゆたひ侍りしかども。よしや筆の海はあさくとも。ふかき志はみえぬべしと。これをかごとにてしるし侍るなり。抜書の歌は所々におほかべきを。さやうの本もなければ。歌計をとおもひ侍ながら。あまりにゆへ知がたきなるべければ。あるひは彼物がたりの言葉をひろひ。あるひは十が一の心をあらはしてしるし付ぬ。本より病をもき身にいとゞしきあつさも一かたならず。みだれごゝろにて。吾みるうちにだにひがめる事おほく侍るかな。よく〳〵なをし付て。うるはしきてあらば。かならずきよめかゝせられさぶらふべし。

わすれしよ忘るなとたに言のはのいはぬを殘す水莖の跡

いきてよにめくりあはすは幾秋か空しき空の月に憂へん

はかなしと見るに涙も浮ふ泡のうたかた消るもしの浦浪

さてもかやうのあだごとども書付侍事。かたはらいたく憚なきにしもあらず。然はあれども。此源氏物語の歌双帋の奥にことはりを一筆のせてとのぞみあるに任て筆をとり侍るつゐでに。都よりうつりかはりし身のありさま。寤覺のなぐさめぐさとも成ぬるをおぼえずしるし侍なるべし。いまは彼志にはあらず。丙丁童子に傳へ侍るべし。應永廿とせあまり五の年秋七月十八日これを書事しかなり。

かゝ計なきさめ草の種よりはいかてさくらんもの思ひの花

花洛清巖山科正徹卅八歳

敷嶋の道をつたへてひさしかれ千代のしら菊松のよろつ代

右なくさめ草以扶桑拾葉集書寫依無類本不能挍合

伊勢紀行

権大僧都堯孝

永享五の年彌生中の七日。大神宮御參詣の事侍り。明らけき日のおほむ神。御たびのよそほひに光をそへ。のどかなる風のみや。御道すがらのちりひぢをはらはせ　おはしますにや。御進發の日より清くうらゝか也。

長閑なる御代にも高き神風は君か光りに立やそふらん

河原過侍りて。

みそきして朝立袖にかけてけりかつ白河の浪のゆふして

逢坂こえ侍るに。去年の秋富士御覽の御ともに侍りし事も思ひ出られて。

此春も又こそむすへあふ坂や去年みし秋の關の清水を

惠ある代にあふ坂はみにこえて嬉き關のゆきゝ也けり

うち出のはまを。

朝にらけ日も打出の濱風に霞をこゆる春のさゝ波

松もとのあたりにて。

名に立る千世の松もと待かひもありふる影に靡くとそみる

勢田のはし渡り侍るとて。

あふみ路や勢田長橋日もなかしいそかてわたれ春の旅人

そこはかとなく霞わたれる朝氣の程。畔を過侍るに。うねのなどはいづくなるらんと覺えて。

春の田のうねのやいつこほの〴〵と霞にこめて明ぬ此よは

野路と申所にて。

いつれにも春行旅の袖ふれん霞もふかき野路の朝露

草津を過侍るとて。

分きつる春の草津の草若みかるまてもなく駒もすさめし

みな口の御とまりにて。

水無口やけふの御影をやとすより行末遠き名に流つゝ

十八日。夜をこめての立侍りしに。殘月朧々たるに川音さやかに聞ゆ。

行水の音はさやけき川せにも霞てよとむ有明の月

いはむろと申所あり。

君もみよ千代をこめたる岩室の岩に生そふ松の齢を

土山といへる所あり。

うこきなき名に顯るゝあらかねの土山こゆる御代の畏こさ

かどや坂とかやにて。

心せよ關路の岩のかとや坂こえはかぬへき旅ならすとも

坂の下にて。

神も又幾万度むかふらん君か八千世のさかの下みち

鈴か山こえ侍るに。春深く明ていたれる中に。殘花一樹盛にて雪のやうにみえ侍りしを。

鈴か山春もやすらふ關路とやふりはへ花の雪そ殘れる

とよく野はる〴〵とわけ侍るとて。

君か代を先こそあふけ廣きのへ末遠なる道に出ても

あのゝつ近く成て。そこともわかぬ遠山。霞の隙々よりみゆ。

いせの海の浦にはしほや滿ぬらん霞引たるあのゝ遠山

十九日。此御とまり夜ふかく立て。海の邊過侍るにうら風はげしくて。

春ながらいせのあまのぬれ衣猶ひやゝかに浦風そ吹

雲津の里と申侍りし所にて。

明やらぬ雲津の里の夕霞よそさへ深き春の色かな

星合の里とかやにて。

里の名に絶ぬ星合あひかたゝたなはたつめの契ともかな

かさ松と云あたり過侍りしに。

おのつからゆきゝの宿やかさ松のかけに立よる旅の諸人

見わたりの程。朝和のうら氣色いとみ所多かり。餘て撥棹歸纏去浪疊朝霞繡纈といへるふる事も。めのまへにぞうかび侍るや。

こゝ船も霞わたりて朝和の浦半のみるめあかすも有哉

たてり縄手と申所に賤の女などのひなびたるおほくぞ立ならびて行客をみる。

都人みるそとみえて賤の女もたてる縄手に立ならひつゝ

あやひがさと云所をかくして。

飛鳥のおりし色よりくれは鳥あやひかさまに春なしたはん

くし田川わたり侍るとて。

しめはへるくしたの川の水清みわたる心のあかものこらす

齋宮と申あたり過侍るに。昔覺ゆることも侍りし中にも。天暦の御時かとよ。齋宮下り給ふけるに。朝忠中納言長奉送使に侍りて。万代のはじめと今日を祈り置て今行末は神ぞしるらんと詠ぜし事おもひ出られ侍りて。

万代といのる心はけふそへんいつきの宮の跡をたつれて

あけ野とかやにて。

分ゆかん花にあけのゝ佛も霞に殘るしのゝめの空

さむ風といへるは富士の根みゆる所なめりと聞侍りて。

ふしのねの雪をほのみてたかせより寒風としも爰をいふ覽

土大佛と申は。俊乘上人とかやきこえしひじりの。東大寺再興の事を祈請のため大神宮にまうで侍りしに。夢の告ありて。あやしき牧童の現じてつくりなせる毗盧遮那の御かたちなるべし。是又應化利生の御ちかひは靈山淨土の生身。よもへだてあらじかし。

此山はわしの高ねか更に又遮那の姿を仰きみるかな

みや川御祓など嚴重におぼえて。

我君の高きみそきを宮川や波の白ゆふ千世もかけこせ

山田に御着のほど。

契りある千木高知て神もさそ君待えたるけふの嬉さ

廿日。御參宮の日也。夜もすがら雨ふり風さはがしかりしが。辰の刻計空こゝちよく晴て。御出の儀ことにありがたくぞみえさせおはしましける。公卿殿上人馬くらをかざり。衞府御隨身あざやかなる袖をつらねて供奉し侍るよそほひ。きら／＼しくぞ侍りし。抑御神五十鈴の川上に宮所をしめ。高天の原に千木高知。下つ磐根に大宮柱廣敷たてゝしづまりまします事は。世を守り。國をたもち。人をはごくむ御ちかひ成るべし。今我君豊蘆原千五百秋瑞穂國をつかさどりおはしまして。神をあがめ。政をたすけ。民をなで給ふ御めぐみも。神慮に隔なくおはしますは。太田命の八万歳をたもちましまして。御子孫萬世ならん事のいともかしこく覺侍るまゝに。詠進三首。

今朝は又天の八重雲晴にけりよのまの雨や道清むらん

およふへし君か齢も万とし八度重し神のむかしに

君も猶幾世々かけて仰かまし高天の原の神のしめ縄

同じ夜法樂になぞらへて。心ひとつによみ侍りし六首。

春

言の葉の花に殘れと祈る哉高き神代の春の匂ひを

夏

あふきみる心も涼し神風やなひく千枝の松の村たち

秋

名に高き神路の山の秋の月嘸よゝ越て君照すらん

冬

年つもるかけをもみよと朝熊やかゝみの宮にふれる白ゆき

戀

さのみやはつれなかるへき絶て猶思ふ御祓の數を重ん

雜

たのむそよ内外の森のゆふたすきかけてを惠め此世後の世

廿一日。つとめて山田を御立の時。

五十鈴川名に流けり我君のいのるてふことなるにまかせて

宮川渡り侍るに。明方の月さやかにいと神さびけり。

わすれめや殘る廿日の月かけなほのみや川の春の曙

うへ川の橋と申所にて。

旅人のかけさへみゆるわたり哉春行水の上川のはし

よひのもりを。

此比の月見る宵の森ならは猶旅人の立やよらまし

うら／＼と過侍るに。あまどものしはざさまざま也。汐干にまでと云ものさしとるを見て。

いせの海のあまのまてかきまてはし都のつとに我も拾ん

あこぎがうらにて。

あひきするあこきか浦の沖つ浪かへりみるめや旅も重つ

あふのうらはいづくなるらん。

春深みあふのうらなし時きぬとかたえの外も花や咲らん

みぎはにつのぐみたる蘆なども見え侍り。

かりねにも春やは人のおりしかんまたうら若きいせの濱荻

けふの御とまりはあのゝつ也。日高く着て。三條の宰相中將家歌よませられ侍りしに。

春月

有明の比にも成ぬさらてたに春は霞をいてかての月

待戀

たか爲に催すかれそたのめしも我は忘ぬ夕暮の空

旅行

敷嶋の道廣き世の旅なれは言の葉草や枕にもせん

廿二日。しらつかの松を見やりて。

霞立緑の末とひとつにて明行空のしらつかのまつ

とよく野にて。

なひくてふ民の草葉の末なれや年もとよくののへの道芝

野澤邊のあたりに。野飼の牛あまたみえ侍る。

澤邊なる野飼の牛もおのつからつのくむ［　　　　］

くるまやといふ所あり。

日そ永き道は遙々めくれともまた車やのめくるとはなし

關川とかやを。

君か代は流れ久しき關川の千年にこゆる浪のまに／＼

野せの町やと申わたり。すみれ咲たるをみて。

春深き野せの町屋つほ菫色に染てふ人やつむらん

坂の下過てすゞか山こえ侍るに。つゝじ咲。藤匂ひて。暮春の興をつどへたるに。鶯さへしきりになく。

咲にけり坂の下てる姫つゝし遠き神代の春を殘して

是も又袂にかけつ鈴か川八十瀬の外の春の藤なみ

鶯も音をこそ盡せ鈴か山ふり捨て行春を恨て

山中の宿と申所にて。

蘆引の山の山中行道も猶あふ人のしけき旅かな

野を分侍るに。すみれわらびなど生まじりていど興あり。

紫のちりにましはる菫草つむ手もぶるゝ程とこそみれ

雲雀ある聲聞ゆ。

分くるゝ春の野もせのかり枕こよひ雲雀に床やならへん

水口に御着の時。

春は猶かへすあら田にせき入て水のみな口かすも有かな

廿三日。かしは木の里と申所過侍るとて。

今よりは葉守の神も宿しめん春の綠の柏木の里

うへ田川原にて。

今幾日あらは早苗もうへ田川せきいるゝ水の春深き比

かなやまとかやを。

神代より岩ねこりしくかな山を［　　］君か爲かと

大津の濱にも歸り至り侍ぬ。天智の昔皇都をひらかれし。中興の祖にて万の道を越［させ玉ひ］しことなど思ひ出奉りて。

ふりにける大津の宮となきてみれはあめの帝の昔おもほゆ

なきた水海のかぎりなくかすめり。みぎはに氣色ばかり立くる浪のかへるも。千代をかぞふるにやと聞なされて。

長閑なるしまのうらはの小波もかへるゝ千世の音そ聞ゆる

御道中一日も雨のさはりと申事さへ侍らで。［　］なりぬ。まことに天道にも神慮にもかなはせおはしましける事。有がたく目出度覺侍りて。

我君の心の儘に照すより天津日の神光のとけし　堯孝

十月十三日。今度御道中詠進の和歌。勒二一卷一可レ進覽之由被レ仰下。仍馳レ筆。翌日令レ持參一者也。

右普廣院殿御參宮之時記云々。

右伊勢紀行平山等山藏本書寫挍合了

紀行部九

富士紀行

贈大納言雅世卿

永享第四の年長月十日。公方様富士御覽のために東國へ御下向あり。可レ供二奉之一旨兼日より被二仰下一。今曉まかり立侍りしに。相坂の關をこえ侍とて。

思ひたつ心もうれしたひ衣きみか惠にあふさかのせき

今曉より雨はれて。空も心よくみえ侍しかば。

秋の雨の遥々思ふふしのねはけさよりやかて空もへたてし

草津と申所にて。

枕にはむすはてすきつ旅ころも草つの里の草の袂を

やす川にて。

我君の御代にあふみちけふもはや渡る心ややす河の水

守山のほとり田のもはるかにみわたされて。

しつのめか田面のいれたもる山の梢も今そ色付にける

かゞみやまをみて。

老の坂はやこえかゝるかゝみ山今さらなにか立よりてみむ

十一日。いまだ夜ふかきに。老曾杜はこゝのあたりと申侍りしかば。

明やらぬおいその杜の薄紅葉いまは夜ふかき色かとぞ思ふ

山のまへとかや申所にて。

しつのめか通ふいへゐも稀なるや麓は山のまへのたなはし

犬上と申里にて。

なのつからとかめぬ里の犬上やとこの山風おさまれる世に

二本杉と申所にて。

ふたもとの杉とて又もあふみちにふる河のへた思ひ出らし

不破のせきは苔むして。板びさしもしるしば

かりみえ侍りければ。

板ひさし久しき名をは猶みせて關の戸さゝぬふはの中山

たる井と申所につき侍て。

里人もくみてしらすやけふ爰にたるゐの水の深き恵を

十二日。夜をこめて。あをのが原と申所を過るとて。

草のはの青野か原もみえわかて夜ふかく分る露そ寒けき

赤坂と申所にて。いまだ夜も明侍らず。友なひ侍る人々も跡におくれ侍を。しばしまち侍しほどに。

行つれぬ友さへ跡に殘るよをしはしやこゝにあかさかの里

なか橋と申所を過侍るに。あたりの田のもゝ遠く見わたされて。

秋ふかき田面に續くなか橋はほなみをかけて渡すとそみる

中川と申所にて。

都より流れ出ける末なれや今はた渡る中川のみつ

むすぶのまちやとかや申所にて。

朝露の結ふのさとのたひ衣わくる草葉も色かはるらし

十三日。尾張國おりつと申所を夜ふかくたち侍るとて。

夢路をも急ききにける旅なれや月に假れの夜をおりつまて

あつたの宮を過侍るほどにかの社頭の鳥井の前にて。

神垣も光そふらしうこきなきよもきか嶋に君を待えて

なるみがたのほとり海づらにつゞきて野あり。これぞうへ野なるらむとおぼえ侍て。

あさ日さすなるみの上野鹽こえて露さへ共に干潟とそなる

又おもひつゞけ侍ける。

道の爲我思ふことのなるみ潟願ひみちくるしほせともかな

星崎と申所にて。今日は名月なり。空も心よく晴て。月もなをえ侍ぬとみえしかば。

ほし崎や熱田の方の空はれて月もけさよりなこそしらるれ

夜さむの里と申も此國と聞侍しかば。

よしさらは宿りとらしと旅衣よさむの里をよきてこそゆけ

さかひ川をみて。

それときくしるしはかりか堺川ほそき流れは名に流れても

参河國八橋にて。

八橋のくもてに渡るひまもなし君かためにといそくたひ人

矢矧の里近く成て。道のかたはらにまゆみのもみぢしたるを見侍て。

道のへのまゆみのかた枝紅葉して爰や矢矧の里とみゆらむ

我君の治れる代はあつさ弓ひかぬやはぎのさとにきにけり

今夜の良辰月もことにくもりなく晴て。名をあらはし侍ぬること。千載之一遇。万秋之芳躅。めでたくおぼえ侍ければ。

君か代はなたなかつきの月の名も所からにそ光りさしそふ

おなじく此處にて三條相公羽林續歌十三首を講じ侍しに題をさぐり侍て。

名所山月

雲もきえ霧もはれ行秋のよになのみ二むらの山のはの月

名所里月

秋ふかき夜半のころもの里人は月にめてゝも月や寒けき

名所浦月

さそなけに今宵の空の清みかたみぬ俤も波の上の月

名所潟月

過きつる跡になるみの鹽ひかた心をさそふ夜半の月かな

寄月忍戀

やとさしな涙の露もよろこそとおきゐて思ふ袖の月かけ

十四日。こゝの御とまりを立侍しに。河あり。これや豐川と申わたりならむとおぼえて。

かり枕いまいく夜有て十よ川やあさたつ涙の末をいそかむ

衣の里ときゝ侍しも。此あたりやらむと覺えて。

暁のめかうつや衣の里のなた吹秋かせのつてにしらせよ

山中と申所あり。折ふし鹿のこゑほのかにきこえければ。

おほつかなこの山中になく鹿のたつきもしらぬ聲の聞ゆる

花ぞの山はいづくにてか侍らむとおぼえて。

旅衣いさ袖ふれん秋の草の花その山の道をたつねて

引馬野も此國ぞかし。いづくならむと分明ならねど。

たひ人ののるより外もひく馬のゝ野への秋萩花やみたれむ

いづくの程にて侍しやらん。社壇あり。人にとひ侍れば。八幡宮と申。鳥井の前にて。今度の御旅のめでたさ。御神慮も殊に掲焉におぼえ侍て。

いはし水君か旅行すゑも猶まもらむとてや跡をたれけん

國々所々の御路次。兼日用意のほどもみえて。いづくもさはる所なく。御路つくらせ侍りけるとみえしかば。

民やすく道ひろき世のことはりも猶末遠くあらはれにけり

高師山と申も此あたりにてやとみえて。

富士のねに及はぬ名のみたかし山高しとみるも麓なるらし

十五日。遠江國鹽見坂にて御詠を下され侍しに。

しほ見坂さか行君にひかれてそさらに名高きふしを眺むる

又今日二子づかと申所にての御詠とて。同下され侍し次に。

富士をみる此ことの葉に顯れて名に立のほる二子つかかな

十六日。橋もとの御とまりを夜をこめて立侍しかば。濱名橋をうちわたして。

忘めやはまなのはしもほの〳〵と明わたる夜のすゑの川浪

濱名河夜みつしほの跡なれやなきさにみゆる海士の小舟は

時雨けしきばかり過侍しかば。

旅衣しほれたにせぬしくれ哉もみちないそくけしき計りに

さき坂山と申所にて。

遠くみるふしの高ねもしら鳥のさき坂山なけふそこえぬる

十七日。此國の府中を立侍るほどに。かけ川と申所にてあめふり侍しがば。

たひ衣袖になみたなかけ川やぬれていとはぬけふの雨かな

菊川と申所にて。

汲てしる君か八千代も末とをき名にきく河の花の下水

さやの中山を越侍とて。

なをさりにこゆへきものか我君のめくみも高きさやの中山

こまがはらとかや申所にて御詠を拜見し奉りて。

たくひなくあすみよとてや秋の雨にけふ先ふしの搔曇るらん

かくて駿河國藤枝と申所に御つきあり。十八

日のあした。所をまかり立侍に。岡部の里を過て。やがて宇津山にわけ入侍る程。所の名も其與有ておぼえ侍り。曩祖雅經卿ふみわけし昔は夢か宇津の山跡ともみえぬつたの下道と詠侍し事までおもひ出られ侍て。

昔たにむかしといひしうつの山越てそしのぶつたの下みち

さと過て又こそかゝれうつの山なかへのまくすつたの下道

斯て此國の國府につき侍り。富士もことにさだかに見え侍しかば。

富士のねの山とし高き齢なも君まちえてや今ちきるらむ

此國の守護上總介範政に御詠を被レ下侍し次に。

此宿にかゝること葉の玉しあれはふしのみ雪も光そふらし

十九日のあした。猶此所。又御詠を數首拜見し奉りて。

ふしのねの月と雪とに明す夜や君かことはの花をそへけむ

忘れめやくもらぬ秋の朝日影雪ににほへるふしのなかめを

朝明のふしのねおろし身にしめて思ふ心もたくひやはある

富士の高根に雪のかゝり侍るが。綿ぼうしに似侍るよし。御詠にあそばされ侍しかば。

雲やそれ雪ないたゝく富士のねもともに老せぬ綿ほうし哉

又御詠を被レ下侍しほどに。

都よりはる〳〵來てもふし川や行としなみは猶そかされむ

廿日。清見寺へ渡御に供奉して於二彼寺一御詠を拜見し奉りて。

けふかゝること葉の玉な淸みかた松によせくるみほの浦波

吹風も猶おさまりてたゝぬ日はけふとそみゆる田子の浦波

やがて府中に還御あり。廿一日早旦に又持參。又御詠を下され侍しかば。

富士のねは名高き山と言のはに君のこしてそ幾千代もへん

數々のことはの花をみやこ入ふしより高く猶やあふかむ

かくて此所をまかり立侍しほどに。私の宿に一首よみをき侍る。

雪に暮し月にあかして富士のねの面影さらぬ宿やしのはむ

今日又宇津の山をこえ侍るとて。

立かへりうつの山ちのつたひきて夕露分るたひ衣かな

てごしとかや申所に。遊女とおぼしくて門に立侍をみて。

おほけなくよその袖迄引はやと見ゆるてごしの里の浮れめ

又藤枝の御とまりにつき侍て。

秋の露もわかむらさきの色に出よ松にかゝりし藤枝の里

範政詠進につきて。御詠をくだされ侍しついでに。

誰もみなひかりにあたる日本の神と君とをさそてらす覧

廿二日。夜をこめて立侍るに。せとやまとかや申所にて。

都にと又こそいそけをひ風も船路にはあらぬせとの山こえ

嶋田川と申所にて。

しま田川はしうちわたす駒の足もはやせの浪の音そ聞ゆる

大井川と申所にて。

思はすよみやこの西のおほ井河東路かけてなかれこんとは

又さよの中山にて御詠を拜見して。

君よりも君をやしたふ今日さらに又あらはるゝ富士の高根は

廿三日。此國の府中をたち侍るに。あけぼのゝ空霧わたりて。鴈の鳴侍るを聞て。うへ松と申所にて。

行末のちとせをかけて君か爲けにうへ松の里とこそみれ

ひくま野と申所も此あたりときゝ侍て。

惠ある君にひかれてひくまのや旅としもなき旅のみち哉

又みちのかたはらにふるき松あり。木だちの拈比類なく。其興ある松也。人に問侍れば。八百年ばかりの星霜をも送侍るらむ。名をばせうらが松と申侍しかば。

翁さひうへけるのへの松か枝はさていく秋の霜をへぬらん

はまなの橋もやう／＼ちかく成しかば。

けふは又めにかけてのみいそくかな濱名の橋の遠き渡りを

廿四日。橋下の御とまりを立侍しに。雨ふり出侍しかば。

旅人のみのゝうは毛もしらすけの湊やいつく雨はふりきぬ

いまばしと申所にて。

君かためわたす今橋今よりはいく萬代をかけてみゆらん

矢はぎのとまりちかくなりて。

梓弓かへるさ近くなりにけりおなしやはきの宿をとふまて

廿五日。此御とまりを立侍て。なるみのほとりを過侍とて。

〔一行闕〕

廿六日。濃州すのまたと申所にて。

をのつから名になかれすの又瀬あらしとみゆる浪の上哉

なが橋と申所にて。

立かへる此長はしも長月やすゑになるまて日數へにけり

廿七日。たる井の御とまりをつとめて立侍しに。山田の面にいねほしたるをみて。

朝日さす山田のをしねかりつみて夜をく露を先やほす覽

かしは原と申所にて。

秋さむみ下葉いろつくかしは原露のみもろく風渡る也

さめが井と申所にて。

君か代は流れも遠しさめか井のみつわくむ共盡しとそ思ふ

をのと申所にて紅葉を見侍て。

たひ衣もみちのぬさもとりあへす都のにしき又やかされん

あつさの關にて。

もろ人も此せきの名の梓弓手にふれぬ代はのとか成らし

武者の宿につき侍て。

わか君の御代をおさむる武者の名を關里もしつか也けり

この御とまりにて御詠を被レ下侍しに。

若枝のみそふへき千世の秋かけて何か老その杜の紅葉は

覽富士記

堯孝法印

七の道風おさまり。八の嶋なみ靜にして。よもの關守戸ざしをわすれ侍れば。旅のゆきゝさはることもなく。万の民くろをゆづるこゝろざしをなむもととしければ。いづくにやどりとるも心とけ。たのしびおほかる御代にぞ侍ける。爰に富士御覽の御有增するゑとをされ侍て。永享四のとし長月十よ日の程におぼしめし立れ侍り。折しも秋の雨日來ふりつゞきて。はれまもみえ侍らざりしが。御立の曉よりいつしか空のけしきすみわたり。のどやかなりしぞかつ〳〵有がたくおぼえ侍る。

あふきみる御代の光もけふは猶空にしられて晴る雨哉

逢坂越侍とて關の明神のあたりにて。

君か代にあふやうれしき相坂のせきに關守神のこゝろも

あけぼのゝ雲まより三上山ほのみえ侍り。ふじのね思ひやられて。

思ひ立ふしのね遠きおもかけは近く三上の山の端の空

草津の宿にて。

近江路や秋の草つはなのみして花咲のへそいつくともなき

やす河のあたりに御よそほひを見奉らむとて。そこらつどひゐたり。

なのつから民の心もやす河になみゐて君の光をそまつ

今日の御とまりはむさの宿とかやなり。都より十三里。つぎの日夜ふかく。山のまへと申所すぎ侍るとて。

月もかな秋霧ふかきあし曳の山のまへのゝしのゝめの道

四十九院の宿を。

四十餘りこゝのあたりの里の名は大和ことはにいかゝ殘さん

犬上と申あたりにて。いさや河はいづくにてかとたづね侍れども。さだかにこたふる人もなし。里のゆくてに。山川のすゑかすかに見えたる所あり。是ならむかしとをしはかりて。

いさといふなになかれたる川音やとへといはれの水の白波

小野の宿にて。

吹にけりわけ行袖の露霜もみにしむ秋のたのゝ山かせ

すりはり峠をかすもしらすこえ侍る人のたゞ一かたにいそぐも。山みちつゞらおりにて。行ちがふやうにぞ見え侍し。

心せよ行かふ旅のもろ人もそてすりはりの山のかけちそ

不破の關すぎ侍りしに。もるとしもなきせきのとぼそ。苔のみふかくて中々みどころ有。

戸さしなは幾世忘れて斯く計苔のみとつるふはの關やそ

たる井の宿ちかくなりて。

むかしみし影をしるへに又やわれ思ふたるゐの水を結けむ

おなじ御とまりにて。むさより十四里。

みの山や松は一木のかけにしも旅れかさなる千代の秋かな

十二日。夜をこめて。あひ川と申所過侍しに。

末となき世にあひ河の岩浪のちとせを越る音のさやけさ

青野が原とかやにしかのねかすかにきこゆ。

鹿そ鳴青野か原のあなつゝらくるもしられぬ妻をうらみて（妻もしられよイ）

赤坂の宿にて。

おりに逢あきの梢のあか坂に袖ふりはへていそく旅人

道すがらともなひ侍る人のもみぢしたるつたをいかざみるとてをくり侍りしに。

かつみても袖にそあまたまたこえぬうつの山路の露の行ゑは

いづくにて侍しやらむ。霧わたれるひま〳〵よりいなばほのかにみえて。秋の空さへえむなるに鴈つれてとぶ。

秋寒く田のものいなは鴈そ啼霧の朝けの空もほのかに

くゐせ川わたるとて。

夕されは霧たと〳〵し河の名のくゐせもとめて舟や繋かん

かさぬひ（笠縫）つゝみといふ所にて。

手にもてる笠縫つゝみ行つれてことひかはすけふの旅人

ながはしときこゆるは。げにぞはる〴〵とみわたされたるにや。

数ならぬみのゝ長橋なからへて渡るも嬉しかゝるたよりに

むすぶの町屋と申所にて。

露霜のむすふの町や夜なこめて立あき人も袖や寒けき

すのまた川は興おほかる處のさまなりけり。河のおもていとひろくて。海づらなどのこゝ

ちし侍り。舟ばしはるかにつゞきて。行人征馬ひまもなし。あるは木々のもとたちゆへびて。庭のをもむき おぼゆるかたもあり。御舟からめいてかざりうかべたり。又かたはらに鵜飼舟などもみえ侍り。一とせ北山殿に行幸のとき。御池に鵜ぶねをおろされ。かつら人をめして。氣色ばかりつかふまつらせられ侍し事さへに。夢のやうに思ひ出され侍る。それよりほかにかけても見及侍らぬわざになむ。

嶋つとりつかふうきすのまたみれはしらぬ手繩に心ひく也
おもひ出る昔も遠きわたり哉その面かけのうかふ小舟に

尾張國をよび河にて。

わか君のめくみや遠くをよひ川ゆたかにすめる水の音かな

おり津の御とまり。たるゐより十里。かいつなど過て。熱田のみやの神前にまうでて。御道すがらの御祈など申侍き。むかし日本武尊 東夷征伐のため。このさかひにをもむきたまひし時。よぎり道し。伊勢太神宮にして 大和姫命にまかり申したまひしに。命のさづけたまひし靈劍も此神殿にとゞまらせ おはしますとかや。いとやむごとなき神明。鎭護國家のちかひもたのもしくおぼえ侍りて。

なをまもれめくみあつたの宮柱立ことやすき旅のゆきゝな
あつまのゝ草葉をなきし秋の霜ふりていく代の君か守りそ

蓬萊の嶋をみて。

君かため老せぬ藥ありといへはけふや蓬か嶋めくりせん

なるみがたにて。

忘れしな浦かせさむくなるみかた遠き鹽ひの秋のけしきは

夜寒の里はこの國ぞかしとおもひ出侍て。

うき身にはいつもよ寒の里なれて今更秋の旅ねともなし

參河國八はしにいたり侍て。はる〴〵きぬるとながめ侍し 往躅もおもひ出されて。そゞろに過がてにぞおぼえ侍し。

聞わたるくもてゆかしき八橋をけふはみかはす旅にきに見

今夜は十三夜なり。名におふ月のひかりさや

かなるにも。富士のねさこそといそがれて。

ふしのねに待みむかけそ急かるゝ今宵な高き月をめてしも

けふすぎきつるほし崎など思ひ出らる。

月影のわか住かたもはるゝよにほしさき遠くおもひ出つゝ

やはぎの宿御とまり。おりつより十二里。三條相公羽林のやどにまうでて。飛鳥井黄門など題をさぐりて歌よみ侍しに。名所野月を。

あはつの〻露わけ初てあつまちやいく草枕月になれ劔

名所關月

忘れしよ苫ふかかりし軒端にも月やみるらんふはの關守

名所橋月

戀わたる昔をかけて八橋にはるゝきてもみつる月かな

寄月祝言

いく秋か我君か代も長月やなにふる月の霜をかさねん

つとめて此御とまりを立侍とて。

のとかなるやはぎの里は日の光出入までの名にそ有ける

宇治川のさとゝ申所にて。

誰か住みやこのたつみしかはあらてこは東路のうち川の里

山中の宿にて御ひるまのほどにぎはゝしさもかぎりなし。

旅ころもたつきなしとも思はれす民もにきはふ山中のさと

此つゞきに關口と申所あり。

道ひろく治まれる世の關口はさすとしもなく守としもなし

今八幡と申鳥井の程にて。

君まもる契しあれは今やはたいまゝてこゝに跡やたれけむ

いまはしの御とまりにて。やはぎより八里。あかず明行月をみて。

夜とゝもに月すみ渡る今橋や明過ぬまて立そやすらふ

十五日。大いは山とかやのふもとを過侍るに。ふりたる寺みえ侍り。本尊は普門示現の大士にておはしますよし申侍しかば。しばし法施などたてまつりし次。

君か代は數もしられぬさゝれ石のみる大岩の山となるまで

二むら山越侍るとて。

けふこゆる二むら山の村もみちまた色うすし歸るさにみむ

衣のさと此あたりにぞ侍らむ。

名にたてるたひの衣の里ならは露わけきつる袖やかされん

今日なむ遠江國鹽見坂に至りおはします。彼景趣。なをざりにつゞけやらむことのはもなし。まことに直下とみおろせばといひふるしたるおもかげうかびて。雲のなみ煙の浪そこはかとなき海のほとり。松ばらはる〴〵とつづきたるすさき。かずもしられずこぎつらねたる小舟。いとみどころおほかり。雲水茫々たるをちかたに。富士のねまがひなくあらはれ侍り。これにて御筆をそめられ侍し御詠二首。

今そはやねかひみちぬる鹽見坂心ひかれしふしをながめて

立かへり幾年なみか忍はましゝほみ坂にてふしをみし世を

かたじけなく御和を奉るべきよし仰ごと侍しかば。

ことのはもけにそ及はぬ鹽見坂きゝしに越るふしの高根は

君そなほ萬代となくおほゆへき富士のよそめのけふの面影

二子づかと申侍し所にて富士を御覽じそめられたるよし仰られて。

たくひなきふしをみ初る道の名を二子塚とはいかていはまし

これについで又申入侍し。

契りあれやけふの行手の二子坂爰よりふしを相みそめぬる

橋もとの御とまり今橋より五里。ちかくなり侍り。濱名のはしも此あたりにこそと申をきゝて。

暮わたる濱なのはしは霧こめて猶すゑとをし秋の河なみ

十六日。はしもとを立て。引馬の宿にもなりぬ。ひくま野は三河國とこそおもひならはし侍るに。遠江に侍るはいかなることにか。あしたの程野を分侍しに。虫のねいとしげし。

あかなくにわけこそきつれ虫の音の袖を引馬の野への朝露

鷺坂山にて。

打はふき飛や立けむ白鳥のさき坂山そやすくこえぬる

十七日。遠江府橋もとより六里。をたちて。雨いたくふり侍しに。懸川と申所にて。

うちわたす濱さへ袖にかけ川やいとゞぬれそふ秋のむら雨

さやの中山にて出され侍し御詠。

名にしおへは晝越てたに富士もみす秋雨くらきさよの中山

おなじく奉りし御和。

秋の雨もはるゝ計のことのはをふしのねよりも高く社みれ

おなじ所にて。

天雲のよそに隔てゝふしのねはさやにもみえすさやの中山

十八日。藤枝の御とまり（みつけの府より十一里。）を立て。宇津の山こえ侍れば。雨の名殘いとつゆけかりしに。

うつの山しくれも露もほしやらて袂にかゝるつたのした道

ゆき／＼て。けふぞ駿河府（藤枝より五里。）にも至り侍りぬる。千里始㆓足下㆒高山起㆓微塵㆒ためし思ひしられ侍り。この國の守護今川上總介。（範政。）御旅のおまし。かざり。ゐたち。けいめいし侍るうちにも。雪のつもれらむすがたを上覽にそなへ侍らばやとねんじわたりけるに。昨日の雨彼山の雪なりけり。今日しも白妙につもれるけしき。富士權現もきみの御光をまちおはしましけるとみえて。あやしくたうとくぞおぼえ侍る。山また山をかさねて。たなびきわたれる雲より上にかゞやきみえたる遠望たぐひなくこそ。

白雲のかさなる山ゝ麓にてまがはぬふしの空にさやけき

わが君の高き惠みにたとへてぞ猶あふきみるふしのしは山

これにてあまたあそばされ侍し御詠のうち。

見すは爭て思ひ知へき言のはもおよはぬふしと兼て聞しな

この御和。

言の葉を仰かされて富士のねの雪もや君か千代たつむらし

夜もすがら。月にかの山を御らむじあかして。

月雪の一かたならぬながめゆへふしにみしかき秋のよは哉

おぼろげに御和など奉るべき御詠にし侍らねど。また仰ごとのいともかしこくて。

富士のねや月と雪とのめうつり（しイ）もあかす珍し君かことのは

翌朝の御詠。

朝明のふしの根おろし身にしむも忘れはてつゝながめける哉

あさ日影さすより富士のたかねなる雪も一しほ色増るかな

又御和。

雲はらふふしのねおろし吹やたゝ秋の朝けのみにはしむとも
なをさりのけしきならすよ朝日影雪に移ろふふしの高ねは

あさざむなるほどにて御わたぼうしをせられ侍しに。おりしも富士の根にくも一むらかゝりて。さながらぼうしのやうに見えけるを。御わたぼうしにおぼしめしなずらへて。

我ならすけさはするかのふしのねに綿帽子ともなれる雲哉

御和。

富士のねにかゝれる雲も我君の千世を戴く綿ぼうしかも

又御詠。

いつゆくと忘れやはする（イ无）ふし河の涙にもあらぬけさの眺は
嬉しさも身に（こイ）そあまれる富士のねを雲の衣の外になかめて

同御和。

富士川の涙もいく世かかけまくもかしこき影を仰き渡らむ
ふしのねや心にこめむつゝみえぬ雲のま袖はかきり有とも

此山の由來たづねきこしめしけるに。そのかみ壬子年とかやに出現の由。守護注申侍しに。ことしの支干相應。奇特におぼしめされて。

かゝる身も神はひくかと白雲のふしのたかねを猶や仰かむ
敷嶋の道はしられと富士のねの眺にをよふことのはそなき

御和。

君かへむやをよろつ代の（高きイ）坂までもふしのね高き神そしる覽
富士のねの雪さへ道の光にていやましく（しきしきイ）に積るとそみる

ひねもすになかめくらさせおはしまして。

こと山は月になるまて夕日影なをこそ殘れふしのたかねは（にイ）

たゞいまのおもかげをつかふまつるべきよし仰ごと侍しに。

白妙の高根はかりはさたかにて日影のこれる山のはもなし

廿日。清見寺府中より四里。にてあそばしをかれし御詠。

關のとはさゝぬ御代にも清みかた心そとまるみほの松原

御舟にめされ。海人のかづきするなど御覽せられて還御なり侍き。仁行如レ春威行如レ秋なる御よそほしさみたてまつる貴賤。御道すがらさりもあへ侍らず。入江の宿たかはしなはてなど過て。廣き野やま。こゝやかの草薙の神劔

靈瑞をあらはし侍りしあたりならむといとかしこくぞおぼえ侍る。此所に草薙の御社九万八千の御社などと申て。むかし神々進發の御陣の跡に社あまたおはしますと云々。海道よりは見えず。 清見寺にておもひつゞけ侍し三首の中。

清見がた關もる波もいとまあれやみほの松原風たゝぬ世に

袖しの浦は出雲國とこそきゝ侍しに此うらはに同名侍りけり。于レ時白雲重疊。彼山不レ及ニ瞻望一

雲深くおほふ袖しの浦人よいつくにふしをみるめからまし

御舟よそひ侍し程。

漕出てみほのおきつの松の千世都のつとに君そつゝまん

廿一日。あした駿河府にて御詠。

旅衣たちそかれぬる雲たにもかゝらぬ富士の名殘おしさに

此外御詠かず／＼侍りき。いまだ拜見ゆるされざるをばかさねて申出し。万代の佳〔代歟〕代に仰ぎたてまつるべし。同府還御のとき申入侍し。

末となく君かへりみよふしのねの年月かけて高き契りな

手ごし河原にて。

たひ人のてごし河原なのる駒も足なみはやしいそく朝立

宇津の山にて感夢のこと思ひ出侍りて。

うつの山うつゝに越てみしふしに見しよの夢そ思ひ合する

範政

すなほなる君にまかせて日本をこゝろやすくや神もみる覽

と申侍しとき。おなじく詠進申べきよし仰ごとにて。

神もしれ天津日本あきらかに照す惠みもすなほなる世そ

藤枝の御とまりにて。

春ならは花そ匂はむ秋とてやうらは色つくふち枝の里

廿二日。せと山と申所にて。

うらかるゝお花の浪にかへる也しほちは遠きせとの山風

かまづかと申あたりにて。

駒とめよ草かるなのこ手もたゆくとる鎌塚も此わたりとて

さ夜の中山にて富士のねほのかに見え侍しに。歌よませられしとき。御詠。

富士のねも面かけはかりほの／＼と雲より白むさよの中山

詠進のうた。

それなみる面影うすし富士のねの雪かあらぬかさよの中山

遠江府ちかく成て今のうらと申入海あり。湖水也。

残る日もいり海ちかくみえてけりこの夕暮のいまのうら浪

廿三日。池田宿すぎ侍とて。

ゆたかなる池田の里の民までもすみよき御代に逢や嬉しき

うへ松のはらとかやにて。

千代ふへきたれなは君に譲らなむけふ分過るうへ松のはら

せうらが松とて。いとふりたる木のねざしなど見どころあり。かげに立やすらひて。

たか世にか植ておきなの松かれにけふ顯るゝ君のちとせは

うら〳〵過侍るに。いなさほそ江いづくならむとおぼえて。

いつかたかいなさほそ江のあま衣浦を隔てゝ定かにもなし

廿四日。雨ふり侍りしに。鹽見坂こえければ。いづかたもくもりて。松原一むらぞ輿をのこし侍る。

松原の一村しくれすきやらてふしのねたくもくもる今日哉

やはぎに御着のほど夜に入侍しかば。

あきらけき御代の光にひくるれは暗さやはきの里も迦らす

廿五日。參河と尾張とのさかひ河をわたるとて。

今日はまた千代万代のさかひ川二つの國のわたりのみかは

なるみにて。

祈ることなるみの浦に御祓せむちかきあつたの神を仰きて

爰彼に侍し海士の家居をみて。

鳴海潟しほひにあさる蜑の子のさためぬ宿か爰もかしこも

ふるわたりと申所にて。

都人袖をつらねてふる渡り古き世はちぬかけやとゝめし

おりつの御とまりにて。

暮にけりのるてふ駒を引とめて今やおりつの宿をたつねん

御道すがらの御まうけ。治世安樂[民イ]の恩澤。かぎりなくぞ見え侍る。

山につみ野にもみちぬる惠み哉遠きあつまの道もすからに

廿六日。うし野を過て。黒田ちかくなり侍しに。あしはらおほくみゆ。

なのか毛の黒田もちかく成にけり分る牛野につゝくあし原

すのまたにて。

河舟のさすや日影ものとかにて立としもなき秋のさゝ波

廿七日。くろち川と申所にて瀧のおちたるをみて。

立よりてみれは名のみそ黒地川くろきすちなき瀧の糸哉

うぐひすがはなと申所にて。羇旅のうちに抄秋已闌小春漸近づきぬる風光に嘯侍て。

里の名に聞鶯のはなかつら秋はすくなし春かけてなけ

さめが井の水をむすびて。一切智清淨無二無別とぞ觀じ侍し。

くみてこそうき世の夢もさめか井のみつから淸き心知るれ

かどのと申所にて。

百草の花のかとのゝあきの露ゐかぬ袂にうつしてそこし

野山のこずゑ色づきわたれるをみて。

色ならぬたびの心も染てけり分る野山の秋の錦に

むさの御とまりにてみせられ侍し御詠二首。

若枝たにまた染出ぬみの秋のおいその杜の陰そきひしき

ふり出て時雨も露も猶そめよくれなゐ薄きよものもみちを

二のうち。老その杜の御詠を和し申入侍し。

名にたかき老その杜の松のかけやかてさしそへ千代の若枝

かゞみ山をみやりて。

たれも今君なかゝみと仰みる世にあふみちの山もかしこし

御所に還御のとき。

分きつる東路よりもはるけきはかへる都の千世の行すゑ

富士御覽日記

永享四年壬子九月。富士御覽の御下向に初の十日京都出御。同十七日駿河國藤枝鬼巖寺に御下着。雨すこし時雨て。曉方より晴て。月はあり明にて。いそぎ御立。同十八日府中。先小野繩手にして御輿たてられ御覽じて。前後左右とよみあひ。御跡はいまだ藤枝。五里のほど何とはなく。つたへ〳〵山も河もひゞきわたりけるとなん。御着府。すなはち富士御覽の亭へすぐに御あがりありて。

みすはいかに思ひしるへき言のはも及はぬふしと豫て聞しも

御返し　　従四位源範政

君かみむけふのためにや昔よりつもりはそめし不二の白雪

十九日のあした御詠。

朝日かけさすよりふしの高ねなる雪もひとしほ色まさる哉

御かへし　　範政

紅の雪をたかねにあらはして富士よりいつる朝日かけ哉

又御詠。

月雪の一かたならぬ眺ゆへふしにみしかき秋の夜半かな

御返し　　範政

月雪も光をそへてふしのねのうこきなき世の程をみせつゝ

同廿日御詠。

朝あけのふしのね颪身にしむも忘れはてつゝ眺めける哉

御かへし　　範政

吹さゆる秋の嵐にいそかれて空よりふらす富士のしら雪

實雅三條殿

我君のくもらぬ御代に出る日の光に匂ふふしのしらゆき

おなじあした。御わたぼうしまいらせらるべきよしありて。やがて御ひたひにうちをかせ給て。

我ならす今朝は駿河のふしのねの綿帽子ともなれる雪かな

嫻眞居士山名金吾

雲やこれ雪を戴くふしのねはともに老せぬわたほうし哉

雅世朝臣飛鳥井殿

富士のねも雪そ戴く万代によろつよつまん綿ほうしかな

堯孝常光院

白砂の高ねはかりはさたかにて日かけ殘れる山のはもなし

跡たれて君まもるてふ神も今名高き富士なともに仰かむ

持信 一色左京大夫

君かなをあふけは高き影とてやいとゝ見はやすふしの白雪

持春 細川下野守

富士のねも雲こそなよへ我君の高き御影そ猶たくひなき

持賢 同右馬頭

あきらけき君か時代なしら雪も光そふらし富士の高ねに

熈貴 山名中務大輔

露のまもめかれし物なふしのねの雲の行きにみゆるしら雪

同日に御詠。

こと山は月になるまて夕日影なをこそ殘れふしのたかねに

御返し　範政

ゆふへたに猶やなよにぬ入やらてそむる日影のふしの白雪

又御詠。

いつ行と忘れやはする富士河の波にもあらぬ今朝の眺めは

御かへし　範政

富士河の深き惠みの君か代に生れあひぬることのうれしき

清見か關御覽。

せきのとはさゝぬ御代にも清みかた心そとまる三保の松原

御返し　範政

吹風もおさまる御代はきよみかた戸さしなしらぬ浪の關守

雅世

こきいてゝ三保のおきつの松の千代都のつとに君そ包まん

蝸眞居士

けふかゝることはの玉な清見潟松にそよするみほの浦なみ

又御詠。

富士のねににる山もかな都にてたくへてたにも人に語らむ

御かへし　範政

仰きみる君にひかれてふしの根もいとゝ名高き山と成らむ

雅世

わすれめやくもらぬ秋の朝日かけ雪ににほへるふしの詠は

御前にして一折御連歌御發句。

いく秋のやとのひかりそふしの雪

御脇　範政

霧もなよはぬ松のことの葉

御第三

有明の月なあふくや朝ほらけ

又御詠。

なかめやる時こそ時をわかれともふしのみ雪は初め也けり

御かへし　　熈貴

御心にかなふ時代のなかめ哉袖にもふれるふしの白雪

又御詠。

敷嶋の道はしられと富士のねの詠にをよふことのはそなき

御返し　　範政

敷嶋の道ある御代のかしこさに言葉の玉の數そかさなる

熈貴のかたへ御詠。

我爲はあたらなかめのふしの雪都のつとになすかうれしき

時ありてみはやす君か御代なれやふしの高根も猶重れつゝ

御返し　　熈貴

今ははや君そみはやす時しらぬ山とはふしの昔なりけり

みてたにも心およはぬ不二のねを都のつとにいかゝ語らむ

還御。遠江鹽見坂にて御詠。

いまそはや願みちぬるしほみさか心ひかれしふしを眺めて

嬉しさも身にあまるかなふしのねを雲の衣の外になかめて

御かへし　　範政

折をえてみつの山風ふくからに雲のころもは立もおよはす

鹽見坂にして御發句。

あきさむみふしのねもみつ鹽見さか

御詠。

秋寒きふしのねおろしみにしみて思ふ心もたくひやはある

御かへし　　雅世

富士の根の雪と月とに明す夜や君かことはの花をそへけむ

堯孝

雲拂ふふしのね嵐ふけやたゝ秋の朝けの身にはしむとも

ふしのねの月と雪とのめうつりにあかす珍し君かことのは

嫻眞居士

ふしのねは名高き山のあかすみるこのことのはや類なかれ覽

此記いづこも／＼次第ならずみえ候て。然本尋出候て御なをし候て可レ然存候。

諸大名御供衆。其外の外樣衆。奉公奉行衆。旅着。雨がさ卅本づつ。人夫三十人。下男已下白米雜事雜具各同じ。如レ此味細の事しるし候事いかゞにては候へども。昔の御太儀をもしろしめさせむためにて候。御分國は當國までにての御事にて候ける。其内寺社本所領御成敗にあらず。いかゞ如レ此の御まかなひ御申候け

るや。諸大名宿所には御風呂湯殿の御用意。御樽卅荷。卅荷。美物已下毎日の事共を臨川坊海什具に物語候し。かたるやうにおぼえ書にて候。只昔のことをくはしく御しり候へば。自他の忠の程をもしろしめすべく候。委細に御知候て。扨御しり候はぬやうに何事も又大やうにや候べからん。大名にも高下しなく〳〵御わたり候へば。げにも御供衆外様奉公衆どもの次第わけ〳〵御知候て肝要候。此一冊にも細川下野守同右馬頭山名中務大輔などは御供衆とみえ候。こゝもとむまれかはり候て無案内のみにて有げに候。都鄙みだれはてんことはの何事も〳〵差異候はぬやうには候得ども。昔よりの次第は御存知候ではよく候はむずらむと注候ではよく御座あるべきと存任申上候。返々物しり顔。一笑々々。

八旬有餘宗長

富士歴覧記

入道中納言雅康卿

明應八年五月三日。富士歴覧のために都をおもひ立侍りて。江州柏木郷にとゞまりて。四日の朝にたち侍るに。社頭をふしをがみ奉りて。

柏木に跡たるゝよりも里のうちにさここそ葉守の神も守らめ

内白川。外白川。きのふの雨に水まさりて人々わたりかね侍れば。心のうちに祈念侍りし。

我たのむうちとの神にまかすればこの白川もやすく渡らん

山中と申所にてほとゝぎすをきゝて。

よふこ鳥それかと聞は山中におほつかなくも鳴ほとゝきす

闕民部大輔盛貞在所につきて。先在所の寺にとゞまりけるに。今夜はあやめのまくらしく夜なりとて。しき侍りて。

都にも思ひはいつやかりねしてあやめの枕ひとりしくよな

七日。雨によりて逗留し侍りしに。民部大輔の(守護カ)もとよりよみてをこ侍りし。

みやこ人さここそ心のうかるらむいふせき里に雨やとりして

返し

五月雨は心ありけり雨宿りたよりしなくはことのはもなし

八日。宿所にまかりて。歌まり張行し侍りしに。十五首の題をさぐりて。初春。

道をおこし世はまつりことすなほにて國樂める春はきに見

柳風

これもやはふくとはいはむ春風に朝つゆゆらく玉のを柳

秋田

をのつから神や心を作る田のしめをはこえぬさを鹿のこゑ

逢戀

猶のこる恨とや思ふきぬ〳〵をかれてなけきのよはの涙そ

松

名にしおへはかめのうへなる山風も松にこたふる萬代の聲

此在所かめ山といふ也。十三日國府。佐渡入道誠泰在所にまかりて。兩道あり。一續の中に。

郭公

みやこをはきかて出しにほとゝきすいせまて誰か待と思はむ

納涼

結ひあくる岩井の水のすめる世を思へはひさこくみも盡さす

恨戀

いつのまにとはれぬ身とて恨むらむ交す契りも一夜二夜を

十六日。太神宮に代官の人をまいらせけるによみてたてまつりける。

五十鈴川深くいのらは四の海かへりくまてに浪たつなゆめ

十七日。尾州大野に着侍りしに。伊豆の早雲菴もとより飛書有。今度ふじ一見の次に駿州今川宿所にたちよるべきさた有。國もての外にそうげきの事侍り。來年に延引すべきよし申をこせ侍しに。はやおもひたち侍れども。かの宿所にはまかで侍るまじきよし返札の序によみてつかはしける。

今そしるするかの海のはまつゝらくる人厭ふうきなと見

十八日。うたの郡緒川水野右衛門大夫爲則が在所に着侍り。まづ此處にしばらく休足すべきよし懇切に申ければ。心しづかに閑談し侍る。數日の間種々の興遊あり。廿首つらぬる歌

に。山霞。

春にあけていくその人のことのはのはたその山は霞そむ覧

旅

けふいくか宮こをうつす旅の宿は道の外なることわさもなし

祝

たてそむる軒はの松は鶴の子のすくふ後まで影さかへとそ

けふ。かゝりの切立をし侍り。又各二首の歌よみ侍しに。

夏月

朝かほの花と月とをくらふれは盛みしかき夏のよの月

祝言

松のうへにくるてふ糸のいく結ひ玉のを川の末かけてみむ

十九日。八はしを見に。人々さそひまかりてみ侍れば。きゝをよびしよりかたちもなくあれはてゝ。かきつばたなども心うつくしくみえ侍らず。あはれなるこゝちしてよめる。

かつらきの神は渡さぬ八橋もたえてかすなきくもて也けり

かきりあれは思ひわたりしやつ橋を七十ちかき齢にそみる

杜若みなからたえてむらさきの一もとのころ花たにもなし

廿四日。を河より舟にて三河へ行侍しに。風かはりてしま〳〵にとゞまり侍るに。ある所にて手づからみるをとり。いせなる人のもとにつかはしける。

君をいつかみるめかるとて袖ぬれぬいせおの蜑に有ぬ我身も

かへし。後日によみてをこせ侍し。

君はいかにみるめもからぬ我袖は誰ゆへぬるゝ心とかしる

大濱といふ所へ舟よせてある堂舎にしばらくやすみて。本尊の御前にてよみし。

おほ濱の波ちわけぬと思ひしにはやかの岸に舟よせてけり

こよひは船中にてあかし侍りて。夜一よ船子ども枕のうへをわうへむし侍れば。おもひつづけ侍る。

難波江にあらぬ舟路もあま人のあしの下にそ一よあかせる

廿五日。又佐久嶋といふ所へ舟よせて。八徳菴といふ小庵にやどりてみるに。山水のたえだえなるをうけて。まことに山の井の躰もさびしく見え侍れば。

斯しても世はすまれけり山住の雫なさへにまたてやはくむ

廿八日。船をいだし侍るに。右のかたにあたりてたかし山なりといふをみれば。山としもなき岡のはるかに見わたされて。

昔よりそのなはかりやたかし山いつくな麓峯としもなし

漸順風になりていよ〳〵やほなどいふをかけそへて。ふねのはしりければ。

今こそといゐるかことくに梓弓やほかけそへて舟も出けり

六月一日。今橋のさとをたちぬるに。二村山のふもとをとをりけるに。くれはとりあやに戀しくとよめりしなどおもひいでられて。

なそくとくうへなく苗も二村に山のなうつすなたの面かも（なイ）

こよひは遠江國わしづといふ所につきて。本興寺といふ 法華 堂に一宿し侍り。堂の柱によみてをしつけ侍りし。

たび衣わしつの里なきてとへは靈山說法の庭にそ有ける

二日。寺をいでてうぶみのわたりをし侍らむとて。舟まつほど。ひだりかたにいなさほそえをみやりて。

いつくにかいなさ〔江脫カ〕そえの渡守我身なつくし待としらすや

引馬の宿につきて。あしたに野のあたりをみにまかりて。

眞萩はら花さく秋にならさせはなや心な引まのゝ露

八日。さ夜の中山につきて侍る。日坂といふ所を。よに入てたど〳〵しくも越侍るとて。

日の坂はたゝくれぬまのなりけり道ふみ迷ふさ夜の中山

おなじ夜のね覺に。曩祖雅經卿歌に。ふる里をみはてぬ夢のかなしきはふすほともなきさよの中山とつらね。續古今集に入侍しことを思ひいでて。

かくやありしみ果ぬ夢とよめりしな思ひね覺のさ夜の中山

九日。さ夜の中山にてふじを一見のほどに。雲のみかゝりてさだかに見え侍らねば。はるゝまをまちて一日とまりける間に。十首詠侍る。

大方にきゝしは物かみてそしる名よりも高きふしの高根は

遠きたにふりさけあふく富士のねな麓の里にいかゝみえ覽

四方の山を麓の塵に重ねてもなひ登るふしに較へやはせむ
こゝにきていよ／＼高し都人みることかたき不二の高ねは
上をみむせめてことはの花もかな月と雪とのふしの詠に
ふしをみむと高き頼をかけ川や遠きわたりに今そきにける
たかくみしふしを都にかたるともさやは思はむさやの中山
郭公さよの中山なか空におよはぬふしのねをや鳴らん
定めなくもちのみ雪は遮莫けふまつきえぬふしの白雪
ふしのねは雲のいつくそ我にけふ忍ふの山の名をやかる覽

十三日。ひくまをたちてのぼりけるに。吉美妙立寺にて。あけぼのゝ富士。有明の月にさだかにみえ侍るに。

よこ雲の引まの里をへたてきて又たくひなきふしの曙

十五（六イ）日に。しほみ坂をみてよめる。

鹽見坂こゝろひかれし富士もみつ今は都とさしにこそさせ

こひの松原といふ所にしばしやすみて。

むかし誰戀の松はら待人のつれなき色に名つけそめけん

やはぎのさとを遙にみやりて。

ものゝふやおさむる國の軍みてやはきの里とこゝをいふ覽

十七日。又みづの右衛門大夫宿所に止宿侍り。

やがて上洛のかくごにて侍れども。數日のきうくつをらうす（可訟之由イ）べきよしふかくとゞめられければ。もだしがたくて。十八日蹴鞠あり。逗留のあいだ猿樂已下種々の興遊侍り。廿二日。二首の懐紙をとりかさねて披講之。

朝蟬

旅にしてほすひもあらし薄く共蟬のは衣けさはかさなん

忍戀

さきにたつ涙のしらぬ戀ならはさすか心の色はみえしを

道のこと相傳し葛はかまなど着し侍しに。よみてつかはしける。

契るそよ君思ふより我もさは道も（にイ）心も（をイ）殘しなかしと

七月七日。關民部大夫宿所にて。人々題をさぐりて。

七夕枕

いはまくら今宵かはしてね一つのうしひき歸るあまの河波

惜月

なれぬれは人にもかゝる名殘そと更てかたふく月にしる哉

寄露戀

我命きえすはありとも何かせむ心をかるゝ露の契に

述懐

はつかしな哀むかしへありきてふ身の世かたりの一節もなし

いまだ都に中納言入道宋世ありしとき。するがの國へ下り侍るよしきこえしかば。侍從大納言實隆卿申つかはされける。

こえはまたいかに忍はむうつの山とをき昔も近きむかしも

返し

今はまた夢はかりなるあらましのうつゝになれは宇津の山越

これはむかし曩祖雅經卿ふじみ侍らむとてくだり侍りしに。宇津の山にて路分し昔は夢かうつの山あとともみえぬつたの下道とよめり。また父雅世卿かの山をとをり侍りしに。雅經卿の歌をおもひいで侍りて。むかしたにむかしといひしうつの山こえてそ忍ふ蔦の下道とつらね侍りしことを。遠きむかしもちかき昔もとよめるなるべし。

宗祇法師。たちばなといふたきものをむまのはなむけに送り侍るとて。よみてつかはしける。

末とをく立よりやかて思ひやるきみになひかむふしの煙な

返し

おもひたつふしの烟もたち花のなひく烟にまつやしるらん

三井寺のほくりむばうといへる人の本よりつかはしける。

うへもなき二の道にふしの山ならへて三のたかねならまし

かへし

ふしの山をよはぬ道は遮莫れかひはみつのたかねならまし

紀行部十

善光寺紀行

堯恵法印

寛正六年七月上旬のはじめつかた。とし比誓願し侍し善光寺へおもひたちぬ。金劔宮より羇旅におもむきいで。里中の草庵に休らひ。旅の事などものして。又四日の曉に立て。明れば利波山をこえ侍とて。

明にけりほのめくあまのとなみ山わかるゝ雲や秋の初風

おなじ日。二上川を過ぬ。

ひとつせに流れての名はいかなれや二上河の水のしら濱

やがてふせの海のあたりになり侍り。はるばると湖水をみわたせば。鴟鵶飛盡て夕陽西山にかくれり。

しつみこし夕日の影は跡もなくにほてりよはるふせの海哉

彼家持卿興遊をのべ侍し田子のうらはいづくならんと尋侍れどもさだかにこたふる人も侍らず。

花とやはかさしてもみむ田子浦やそこともしらぬ秋の波たは

その夜なこといふ所に着ぬ。楓橋のよるのとまりもやと思ひつらね侍て。

曙や夢はとたえし波の上になこの繼橋のころとそみる

明ればほどなく水橋といふわたりにうつりぬ。

徒に人たのめなる水はしや舟より外に行かたもなし

かくて立山の千巖に雪いと白くみえたり。

あきのきる衣や寒き雲のぬき雪の立山やま風そふく

有磯海は。此國の海畔の惣名と聞え(侍イ)けるうへは。わきて尋ぬるに及ばず。折節天氣心よく晴て。四十八ヶ瀬も名のみして侍り。一人の爲(ぞイ)に其光をくらふせずとは云ながら。身もすゞろにうれしくこそ侍れ。

おさまれる聲さへ波に有磯海の濱の眞砂に道の數そふ

ゆき〳〵て越後國の海づら。山陰の道嶮難をしのぎ。淨土といふ所に至りぬ。四種の佛心も衆生の一念に發する所なれば。是ぞすみやかに西方同居土のさかひにて侍るならむかし。

今そ知いたれはやすきことはりも唯遠からぬさかひなりとは

爰を去てゆけば。すなはち親しらずになりぬ。磐石千尋にそばだちて。のぞむに心性をわすれ。波濤万里にかさなりて。瀧漲下る事かぎりなし。片々たる孤影より外はたのむ友侍らず。只不退の願力にまかせ侍るなるべし。然ば彼如來の報土を出て。輪廻迷暗のおもひ。子をもとめたまふといへ共。是しらざる有様もやと覺え侍りて。

波分て過行ほとはたらちねの親のいさめもわすらるゝ身よ

やがて歌のはまにうつり侍。此日七夕にあひあたりぬ。星の手向も便有て。是ぞ奇異の値遇にて侍るなどおもふに。あまたの舟よそひしてつどひゐたり。

舟人も心有とや手向する歌のはま梶とりあへすして

また程へて。いといふ川といふ河あり。

世中はいかゝ有けむいとい河いといひし身さへ行ゑしられす

明れば八日になり侍りき。御縁日にまかせて。朱山へこゝろざしぬ。はる〴〵とよぢのぼりて。絶頂より瞻望するに。煙水茫々として。山また天涯につらなる。

雲のはのきゆれは山もかさなれる波の千里に秋かせそ吹

漸よろぼひ下り侍るに。雲の底に蕭寺の鐘の聲うづもれ消て。夕の雨もいと身にしみかへり。打はらひ行袖もしほたるれば。漸麓の旅館

に蘇息し侍れども。明る夜の空さへ殘雨なを暗うして。又立出侍る道に。花笠の里と云幽村あり。愚暗のなぐさめがたきあまりに。

鶯のこゑも聞えぬ秋の雨にしほれそきぬる花かさの里

限なき行ゑの隔に聞えし關の山も是ならんとわけ入て。むかし西塔に侍し快藝法師にあひぬ。拙者尊師隆運法師道のしるべにとて文書てたびしを。往事の夢にあらずやなどみるがごとくに打かたらひて。明る日信濃國へうつりき。道すがらに淺間山はいづくぞと尋侍れども。おなじ國ながら山端はるかにして。野行の人も轉こと葉にまどへり。

淺間山里とひかれし煙たにそこともいはぬ岑のしら雲

酉の刻の斜なるに御堂にまうで侍り。思はざるに引導する人有て内陣に通夜せり。剎本尊の瑠璃壇をめぐりき。まことに多劫の宿縁淺からずおぼえて。歡喜の涙せきあへず。如來本朝御瑞現の往昔までおもひつゞけて。

てらせ猶濁りにしまぬ難波江のあしまにみえし有明の月

曉に及ぶまでに。月いと淸らかに侍り。姨捨山をおもひやりて。

行やらて心そかよふ更級や姨捨山のあきの夜の月

十五日につとめて宿坊を立かへり。土圭の影うつるばかりに戸隱山へいたりぬ。二重の瑞籬を拜して奥院へのぼるに。疊々たる山の上にすぐれて。中臺に南北ふたつの嶺あり。その峯の重々に岩をかさねあげて八色をまじへたり。千峯万山のかたちのうちに異木異草ふさがりて。或は佛菩薩の來化の姿もあり。或は天人聖衆の妓樂をとゝのへたる所も有。併觀音薩埵の勝地にてぞ侍らむ。社頭は北の嶺の半にさしあがりて東に向ひ。大なる岩屋の内へ作り入たり。彼御神は多力雄にてまします。そのこゝろを。

瑞籬やしたつ岩ほに松かれのたてるも神の力とそみる

おなじ所にて。

吹おろす嶺のあらしもまきれ行ひゝきや谷の戸かくしの山

十六日に。又快藝の山室にとまりぬ。あるじの志も打をきさまならず。いよ〳〵懇にみえ侍ければ。

木のもとの露の情もほさぬまにおなし宿かる旅衣かな

十七日の夜のとまり。府中の海岸になれり。あまの笘屋のあばらなる月。隈なくさしのぼりぬ。五更の西の空うつろふ末は。古郷の空にやかゝりきと思ひ送りて。

契りをけおなし越路の末の露月もやとれる草の枕に

おほくの雲霧を過(ケイ)て。越中東北の海陸までさすらひうつりき。廿一日にはことに蒼穹高くはれて。曉より起ゆく。路の有にぞ任はべりぬる。早槻川はいづくぞと云に。いひ明らむる人もなくてやみぬ。今此所をとふに。大河と見えし河原有て。水ほそく海中にながれ落て。殘る月あはれにしづむ。

やとる影きゆれはなのみ有明のはやつき河の波の上哉

遠き所も限あれば。いつしかと本國の境地になりぬ。他鄕のいづくはありとも。我常にあふぎ奉る白山の御影よりいや高き所はあらじかしとおぼえ侍るに付て。雲のうへにうかびて碧落のはだへあざやかに見え(侍イ)しかば。

立かへりあふきてそみる忍ひこし程は雲ゐのうへの白山

右一卷以續扶桑拾葉集挍合畢

ふち河の記

後成恩寺關白兼良公

胡蝶の夢の中に百年の樂を貪り。蝸牛の角のうへに二國の諍を論ず。よしといひあしといひ。たゞかりそめの事ぞかし。とにつけかくにつけて。ひとつ心をなやますこそをろかなれ。應仁のはじめ世の亂しより此かた。花の都の故郷をばあらぬ空の月日のゆきめぐる思ひをなし。ならのはの名におふやどりにしても。六かへりの春秋をおくりむかへつゝ。うきふししげきくれ竹のはしになりぬる身をうれへ。こひぢにおふるあやめ草のねをのみそふる比にもなりぬれば。山の東みのゝ國に。むさしののくさいゆかりをかこつべきゆへあるのみならず。高砂の松のしる人なきにしもあらざれば。さみだれかみのかきくもらぬさきにと。みのしろ衣思ひたつ事ありけり。この月はよろづにいむなる物をといふ人ありけれど人の事はしらず我身にとりては。この七日にむまれたれば。かへりてよき月と思ひ侍る物をと有しかば。きく人ことはりとやおもひけむ。さるほどに二日のあけがたに。ならの京を立て。般若寺さかをこえ。梅谷などいひて。人はなれこころすごき所々をへて。かものわたりをすぎ。三日の原といふ所に輿をとゞめて思ひつゞけ侍り。

かぞふればあすは五月のみかの原けふまつならの都出つゝ

泉川を舟にてわたりて。

渡し舟棹さす道に泉川けふより旅の衣かせ山

これよりして。新關共を世のみだれにことよせておもふさまにたてをきつゝ。旅行のさはりと成にけり。仁木などいへる領主のかたがたをこしらへて。事ゆへなくはとをり侍れど。心ぐるしき事のみありけり。

さもこそはうき世の旅にさすらはめ道妨のせきなとゝめそ

伊賀の國あこ宮といふ所にいたりぬれば日もやう／＼くれがたになりぬ。雨そぼふりて前路もとけがたく行かゝりてやどりもなくば中々あしかりぬべしと人々申侍れば。そのあたりに小家のあるをかりて一夜をあかし侍りぬ。

行暮て雨は降きぬ朝宮なあさたつまでの宿やからまし

三日。あさみやをたちて。野じり。とひかは。くらほねなど。きゝもならはぬ木こり草かりならではかよはぬ所々を過て。道のゆくてに石山寺にまうでて。大悲者を禮し奉る。

さはきたつ世にも動かぬ石山はけにあひかたき誓ひ也けり

濱の關とかやは青蓮院の座主に申てとをり侍りぬ。松本をすぎ大津にいたりて。過こしかたをかへりみて。俳諧の躰をおもひつゞけ侍り。

くらほれは早く過てき荷かけ駄な大津の里にしはし休まむ

かくてその夜は坂本の宿にとまりぬ。七のやしろはそなたとばかりおがみ奉りて。

老か身もこえな千とせの坂もとに杖とそ頼む七の神かき

四日。坂本を出てゝ舟にのるとて。

さゝ浪やけふな日よしの船出せむなひ風なくれから崎の松

されども順風なければ。ひねもす艫をおしてゆく。堅田の浦に船をよせて。

こし方は堅田の浦にほす網のめにかゝりつる山のはもなし

山あひを過る時。あらしはげしければ。かた帆にかぜをうけてはしらしむ。時の程に三四里ばかり過ぬといふをきゝて。

舟人の心つかひはみえてけりまほもかたほもかせに任て

よるの四時にはつさかといふ里に舟をよせて。しばらく休息す。これより夜舟をいだして。五日のほの／＼にあさ妻につきぬ。

ほの／＼とあさ妻に社へきにけれまた夜な罩て舟出せし路

さめが井といふ所。清水いはねよりながる。一すぢは上より。一すぢは下よりながれて。末にてひとつにながれあふ。まことやらむ。みのの養老の瀧につゞきたりといへり。しばらくこ

ここにすゞみて。

夏の日もむすへはうすき氷にて暑さやゝかてさめか井の水

岩かねを別れて出るさめかゐの流れや終にあふみちの末

かしは原にて。

吹風やまたこぬ秋を柏原はひろかしたの名にはかくれす

たけくらべといふは。あふみとみのとの山を左右に見て行所なり。

右ひたりみて過行はあふみちの二の山そたけくらへする

伊増たうげといふはみののさかひにて堅城とみえたり。一夫關にあたれば万夫すきがたき所といふべし。

此山に神やいますと手向せむ紅葉のぬさはとりあへすとも

鶯の瀧といふ所を。

夏きてはなくねをきかぬ鶯の瀧のみなはや流れあふ覧

藤川のはしのけたのおちたるをみて。

たへれはやいくとしなみを渡れはかなかは絶ぬる藤河の橋

思へ君おなしなかれのたえすして万代ちきるせきの藤かは

くろちのはしといふ所を。

白浪はきしの岩ねにかゝれともくろちの橋の名こそ變られ

野上の茶やにこしをたてて又ざれうたを。

旅人にめさまし草をすゝめすは野上の里にひるねやせん

むかしきよみはらの天皇東宮の位を辭し。出家して吉野山にいられしかども。なをゆるしなくて大友の皇子にをそはれ給ひしとき。ひそかに山をのがれ出て。伊賀伊勢の國をへて。みのの野上に行宮をたてられし事は。日本紀などにしるし侍れど。事遠き事なれば。宮の舊跡などたしかにしる人は有がたかるべし。いまは草かりわらはのあさゆふふみかよふみちとなりにたるをみ侍りて。

あけまきは野上の草をかり宮の跡ともいはす分つゝそ行

山中といふ所を過て。

ほとゝきすをのかさ月の山中におほつかなくも音を忍ふ哉

不破の關屋をみ侍るに。なにとなくむかしおぼえて物あはれなり。中御門攝政のあれにし後はたゞ秋の風とよみ給し事など思ひあはせ

られて。

あれはつるふはの關やのいた庇久しくも名なとゝめける哉

關屋の中にちいさきほこらのあるを里人に尋ね侍れば。これなむきよみはらをいはひ奉るといふ。まことやかの御代にいくさをふせがんとてたてられし事なれど。今は關のやうにもあらぬをみ侍りて。

清み原遠きまほりの名なとめは關の固めはさもあらはあれ

五日のさるの時計にたる井のしゆくにつく。けふは南宮の祭とて。見物のともがら物さはがしくたちさまよひけり。風流の山かさなどありとかや。むかしのごとくならば。此所に遊女などあるべきにや。杜牧が珠簾十里揚州路といへる事をおもひなずらへ侍りて。

あさはかに心なかけそ玉簾たる井の水に袖もぬれなん

又軒にあやめをふきわたすこと都にもかはらざりければ。

我宿の妻にはあらぬあやめ草今夜かりねにかたしきの床

六日の早朝たる井をたちぬ。みちすがらの名所どもおほくはわすれ侍り。あをのが原を過侍れば。むかしものゝふのありしが。うちじにしたる所とかやいへり。

分行は四方の草木の色も猶あをのか原の夏の一ころ

あかさかをこゆとて。

たゝかひの昔の庭もには鳥のあかさか越て思ひ出つゝ

くゐせ川といふ所を舟にてわたりて。

渡し守ゆきゝにまもるくゐせ川月の兎もよるや待らん

江口といふは攝津國にあなる同名也。されど遊女などはなくて。夜になれば鵜飼のくだると云をきゝて。

うかひ舟よるを契れは是も又おなし江口のあそひ也けり

七つ打ほどに鏡嶋の小庵につく。院主かたらく。此ほどの庵はさはる事ありて この二日こゝにうつり侍り。こゝをば長寧院といふ僧の所をかれるとなむ。むらさきのゆかりともす

だく所なれば。よろづにまづ心やすし。
七日。かはでの持是院にかくくたりたるよしをつぐ。三位の大僧都妙椿すなはちきたりて。思ひよらざるよしをいふ。さらばあすよりは正法寺に休所をかまふべきよしをしめす。旅のつかれなどねむ比に下知をくはふ。くだくだしければもらしつ。八日正法寺にうつる。此寺は禪刹の諸山也。由良門徒にて。山號をば靈藥山といへり。國中最初の禪林なり。かたはらに新造の一寮あるを休所にかまへてうつりすましむ。朝夕のまうけなどくだく／＼しければしるすにをよばず。さりながら鳳のあぶり物麟のほししのなきばかりにや有けむ。
九日。歌の披講あり。
十日。連歌百韻あり。
十一日。正法寺のむかひに城をつき池をふかくして軍壘のかまへをなせり。すなはち舟をうかべてほりのうちにいたる。僧都つねに居庵あり。山居のすまゐをまなび後園などあり。持佛堂は淨土の三昧をもとゝせるとみえたり。名作の本尊どもおほし。此たび庵號をもとめしかば。法城と云二字をかきつかはし侍り。齋藤新四郎が國に僧都の姪ながら猶子にせり。その人の館に行てみ侍れば。いづくもかきはらひて。武具どもとりならべ。なに事もあらばすなはち打立べき用意也。さりながら又風月歌舞の道をもすてざると見えたり。此所にして酒宴の興をもよほす。美伊法しといふ土岐美濃守源成頼の息男生年九歳なり。同聖の袖をひるがへす。むまれながらにして天骨を得たり。むかし長保の比。東三條女院の御賀の試樂に。御堂關白の長男宇治關白也。十歳のわらはにて陵王をまひ。次男堀川右大臣也。九歳にて納蘇利を舞し事思ひ出され侍り。古の舞と今の舞と

は手づかひあしふみなどかはるべけれども。少年の人その骨をえて人を感歎せしむる事は。異曲同工といふべきにや。

十二日。猿樂あり。彦春（松イ）といふ猿樂也。一場はてて後。美伊法師又舞臺にして袖をかへす。猿樂にははるかにまされるよし人皆感じけり。僧都も興に入。ことはりと覺えたり。

十三日。正法寺にて短冊の評あり。詩の題は龍瓦硯也。この硯は東坡が詩集にみえたるにや。さる硯のありしゆへなり。抑作文の事久しく筆をさしをきてあとかたもなく韻聲などもわすれはてぬれど。僧都しきりにすゝめ侍れば。廿八字をやう〳〵かきつらねたるばかりなり。又方丈の前に二株の松をうへて。みたび鋤をくだす事有き。追述二一偈一云。

鷲峯正法遍塵々　靈藥毒レ人還活レ人

五祖山中誰作レ主　栽レ松道者是前身

十四日。かゞみしまへかへる。たま〳〵下向の次。國中の名所舊跡をも歴覽したくは侍れど。此十一日に細川右京大夫勝元朝臣卒去の聞え有。東軍の棟梁かくのごとくなれば。此きざみに國ざかひまた蜂起することもやあらむ。しからば通路思ふやうなるまじきうたがひあるによりて。後會期遙といへども前路ほどとをかるべければ。いそぎ僧都にこのをもむきをしめして。歸馬にむちうつものならし。

十五日。ことなることなし。

十六日。竹の内の僧正のあくたみの庄を一見すべきよししめす。よて江口より舟にのりて。二里ばかり川づたひにさかのぼる。因幡山のふもとをすぐる路なり。此山は奥州より金の化來せるよし。因幡社の縁起に有とかや。

峯に生る松とはしるやいなば山こかれ花さく御代の榮なさなへとる麓の小田に急くなりそよくいなはの峯の秋かせ

けふは小雨そゝぎて風いさゝかふく。日入てかしこにいたる。ふねの中の窮屈たへず。すなはち偃臥す。前後をしらず天明に及す。あくる日僧正申（侍イ）けるは。昨日は涯分奔走いたし。谷の底までほりもとめしかひもなく。つゐにおどろかでとありしかば。睡眠のきざしゝに。やがて枕をかたむけし心よさは。邯鄲遊仙のたのしびもかくこそと覺し也。それにまさるほどのもてなしは。こゝろにくゝもおぼえぬとてわらひ侍りき。

十七日。又かざみしまへかへる。月出ぬほど江口にいでて鵜飼をみる。六艘のふねにかゞりをさしてのぼる。又一艘をまうけてそれにのりて見物す。おほよそ此川ののぼりくだり。やみになれば獵舟數をしらぬといふをきゝて。

ゆふ暗に八十とものおの篝さしのほる鵜舟は數もしられす

鵜の魚をとるすがた。鵜飼の手繩をあつかふ躰などけふはじめてみ侍れば。ことのはにものべがたく。あはれともおぼえ。又興を催すものなり。

鵜飼人くるや手繩の短夜もむすほゝれなはとくはあけしを

すなはち鵜のはきたる鮎をかゞり火にやきて賞翫す。これをかざりやきといひならはしたるとなん。

とりあへぬ夜川のあゆの篝焼めつらともみつ哀ともみつ

十八九日。ことなることなし。僧都しば／＼來る。

廿日。歸南せんとす。けふすなはち鐃嶋をたちて。もとの路をへてたる井にいたる。民安寺といふ律院にとまる。獻餉などは僧都の被官人たかやのなにがしにおほせつけてねむごろなる事どもあり。くだ／＼しければもらしつ。まことや文和の比。後光嚴天子。南軍に（のイ）おそれまししまして小嶋に行幸のありし次に。此寺にも

わたらせ給けるとなむ。行宮のいしずゑなど今にあり。そのとき身づからうへさせ給へる松の老木となりてあるをみて。

世におほふ君か御かけにたくふらし民やすかれと植し若松

あふはかといふはたる井よりこなたなり。名寄に青墓里といへるこの事にや。

契あれは此里人にあふはかのはかなからすは又もきてみむ

美江寺といふはかゞみしまより五十町ばかりをへだてたるといへり。本尊は十一面観音計。帳などの中にもましまさず。うちあらはれて人におがまれさせ給ふ。利生をかうぶるものおほしとなむ。往來のたよりに二度まうでて禮拜をいたす。えんぎなどくはしくたづぬるにいとまあらず。

たのもしな佛は人にみえ寺のとはりをたれぬ誓おもへは

廿一日。たる井をたちての道すがらの名所おろおろききにしるしをはりぬ。いぶきの明神の鳥井は北にあり。南宮の鳥ゐは南にあり。をのをのそのまへをすぐ。

又こむといふきの山の神ならはさしも契りし事な忘れそ

名も高き南の宮のちかひとて山のひかしの道そたゞしき

みのの國の歌枕の名所。その所はいづくともしらねども。こゝろにうかぶ事どもを筆のつゐでにかきあつめ侍るべし。

まれにきてみののお山の松のうれの嬉しきみにも天のは衣

あま衣みのの中山こえ行はふもとにみゆる笠ぬひの里

いのるそよお（マヽ）さまる世をまつことはみののお山の一つ心に

時鳥ね覺の里にやとらすはいかてか聞む夜半の一こゑ

はゝきゝの梢有ともみえなくにたれをも山となつけ初けん

明くれはしけきうきみのわさみのに猶分まよふ夏草の露

五月雨のもみちを染る例あらは舟木の山のいかにこかれん

七夕の逢せは遠きかさゝきのおふさのはしをまつや渡らむ

東路のうるまのし水名をかへはしらしな旅にたつの市人

鳴鳥のすのまた川に月すめはあらはれわたる浪の下道

わかえつゝ見るよしも哉瀧の水老を養ふ名にながれなは

席田を織物ならはしき浪やいつぬき川のたてとならまし

いく千歳かきらぬ御代は席田のつるの齢もしかしとぞ思ふ

蘆かきのまちかき跡を尋ても小嶋の里にみゆきやはせぬ

世の人のあたゝ結ふの神なりといのらは心とけさらめやは

近江の國に番馬といふ所より路をかへて南へ行。番馬を物の名にとりなして。

わくるのゝまた末遠きくさはには日影の駒よ暫しとゝまれ

すりはり峠を南へくたるとて右にかへりみれば。筑夫嶋などかすかにみえて。遠望まなこをこらす。ふもとには神田といふ所の一つなき田などみゆ。又左のかたにはそびえたる岩に松一木ある。その下に石塔あり。西行法師がつかといひつたへたるとなん。

南行數里下二陽坡一　西望平湖遠不レ波
孤嶋屹然何所レ似　琉璃万頃一青螺

旅衣ほころひぬれやすり針の峠にきてもぬふ人のなき

西行が歌に。ねかはくは花のもとにて春しなむそのきさらきのもち月の比とよめることをおもひ出て。

いかにして松の蔭には宿るらん花のもとゝかいひし言のは

かねてはかのむらにとまるべしとさだめしかども。とかくして日もくれがたになりぬれば。小野といふ所まで行て。その夜はさる小庵に一宿しぬ。今春大夫來逢て。一聲を出して羇愁をなぐさめ侍り。

枕ゆふたのゝをさゝの短かよも旅にしあれは明しかねつゝ

廿二日。小野をたちて。たがといふ所をすぐ。やしろあり。

ふりはてゝ神さひにけりたかの宮誰世にかくは祝ひ初けん

四十九院を物の名にあらはす。

かり人は山にしゝふくいむ事もしらぬ爲には我そ音をなく

亂れ行世にあふみちのおのかしゝうくいむへきは此身也見

たがみやかはらは水のあとばかりなり。

過行はたかみやかはら水もなしことしはたそき五月雨の比

えち河をすぐとて。

えち川のさてさす瀬々に行水の哀もしらぬ袖もぬれけり

觀音寺といふ山寺をみやりて。この名は諸國

にあるにや。いさゝか聖廟の御詩を思ひ出て。
あふみちも心つくしの旅なれやたゝ鐘を聞古寺の前
おいそのもりにて。
我袖よ駒もすさめぬたくひにておいその杜の雫をそしる
われこそは老その杜の郭公をのかさかりの聲なおしみそ
其日は武佐といふ所にやどる。
ものゝふのゆかけはたてそ靡くなるむへ社むさの名は殘けれ
廿三日。猶むさにとうりうす。うちをくりの事。法印(僧都イ)かたより伊庭に申つけ侍るが。三里ばかりをへだてたる所へつかひにいでて留守なりければ。伊庭かたへつかひの行かへるあいだ。時刻うつるによりて也。その日は雨ふり風はげしくて。はにふの小屋のかりふし。ならはぬ旅のものうさ。いはずともしるべし。
南來北望漢宮天　一夜江邊聽レ雨眠
白髮更添二新白髮一　靑氊不二是舊靑氊一
廿四日。伊庭かたより兵士きたる。その日も雨風やまず。水口をいそぐとて。
雨ふれは小田の水口せきもあへすすたく蛙の聲そあらそふ
からうじて五十町ばかり行て。宿す。新宮の馬場にいたる。禪侶の庵をかりて宿す。新宮は山王にてましますとかや。所のこほり司などきたりて警固をいたす。終夜雨風はなはだし。
廿五日。馬場をたつとて庵室にかきをく。
憶得三生石上緣　一庵風雨夜無レ眠
今朝更下二山前路一　老樹雲深哭二杜鵑一
契りあらは又あふみちのかり枕結やすてん一夜はかりに
かねては水口より伊賀のはとりにつくべき支度なれど。洪水に路とをる事やすからず。おなじ國のうち玉瀧寺といふ律院にとまる。本尊は藥師如來にてましますといへり。
なかめはや玉瀧寺の空はれて瑠璃の光にうつる朝日を
廿六日。けふは日のけしきなをれり。玉瀧をたちてかは井といふ所をとをる。ひとつはしありて。高松宮は右のかたにありてみやる。牛頭天王にてましますとかや。

渡りえぬうき世の波におほゝれてかはゐの橋をふむぞ危き
ゆふかけて猶こそきかめほとゝきす手向の聲の高松のみや

北川といふ川はた水落す。法印伊賀の住人におほせつけたるによりて。藤長などいふ者どもきたりて。こしをかたにかけてわたす。

いかゝせむ此五月雨に北川のあさ瀬ふみ渡る人なかりせば

又服部川をわたりて菩提寺にいたる。是も招提門徒の律院なり。まうけの事は法印申つけて。伊賀のともがらさたせしむとなん。

廿七日。なを菩提寺に逗留す。伊賀のものどもさりがたく抑留する故也。

菩提樹下古精藍　殿閣徽涼來レ自レ南
暫借二藤床兼二瓦枕一　齁々一睡味方甘

活計のうちにも故郷の心は又わすれがたきにや有けむ。

旅衣きのふも今日もくれはとりあやに戀しきならの古郷（イニナシ）

廿八日。菩提寺をたちて上野小田寺など云所をとをる。たやまごえは川の水いまだわたりがたかるべしとて。かさぎどをりにおもむく。嶋の原川といふ河をわたりて。

嶋の原川せの浪のかち渡りたやまこえたはよそになしつゝ

大河原といふ所は伊賀と山城とのさかひなり。河原の木石さながら前栽などをみるごとくなれば。

苔むせる岩ねに松は大河原かはらさりけり庭のすさきに

笠置川をば舟にてわたる。ならよりむかへのものきたるによりて。いがのをくりをばこれより返しぬ。歸洛をいそぐによりて。山をば見やりたるばかり也。ことさらにこそまうでめとおもひ侍り。きのふけふは雨ふらず。

ゑそしらぬみの山過て降し雨の笠置にきては又はれにけり
雲の上にその曉を待ほとや笠置のみねに有明の月

秉燭の時分南都の宿坊につく。この後雨はなはだくだる。よくせずば笠置にとまるべかりけり。

正廣日記

世中みだれて後は。宮古に跡をとゞむべきさまにもあらで。大和國泊瀬寺にしる所ありて年月をゝくり侍るに。文明五の年八月七日につとめておきはべれば。觀音へまいる人の尋はべるとあるをみれば。攝津修理大夫之親（元イ）にて。對面し手をうちて代のかはり侍るに久見參にも入侍らぬなどかたりて。不思議のごとく思はべる。さていづくへと問侍れば。駿河國にしる所有てくだり侍るとあれば。さては富士をこそ見給はめとうらやみ侍れば。さらばいざかしとあるに。とてもすてはつる身にて。いづくに跡をとゞむべき事にもあらねば。さいはひのことゝおぼえて。そのまゝ出て。行すゑのことなど思ひたどり侍らでくだりぬ。伊勢の山田といふ所に四五日やすらふ事ありて。十五日大江といふ所より舟にのり。いらこのわたりとてすさまじき所をこし侍るに。こよひは十五夜なりけり。むかしは所々にて歌などよみ侍に。思ひの外なる心ちして。かぢの枕に逢もる月をわづかにみて。

　いにしへを思ひいらこの月みればかいの雫ぞ袖に落そふ

十六日。舟よりあがりて。潟濱とて浪のあらあらしき所を越はべるに。名所などおほくありと聞しかどもとふべき人もなし。しらすかといふ所のあさましきあまのとまやに一夜浪のをとを枕にてあかし侍に。歌などよむべきさまにもあらず。人々立さはぎ出行に。見つけのこ※うちすぎ。さ夜の中山をこえ侍るに。彼西行上人。年たけてなど詠じ侍もあはれに思ひ出られて。

　月ひとり都の友ぞわれにかせ雲の衣なき夜の中山

それよりくだり侍に。心のうちに歌などよみはべれども。かたるべき友もあらでよみすて

侍る。さて十九日に駿河國藤枝といふ所は彼領知にて。長樂寺といふ寺にをの〳〵かりそめにすみ侍る。さても今日まで空くもらはしくて。富士をみはべらぬと人にかたり侍れば。小川といふ所は殘なくみゆるとて。廿六日人人友なひてをもむき侍るに。おりふしはまかせあら〳〵しく。雲など立さはぎて富士もみえず。むなしくかへり侍るに。其夕より桂厚とてつれはべる僧。おこりとかことの外煩てふし侍。なに事も心にいらであつかひしに。長月一日の比。なをざりにて心をのべ侍るに。そのあたりにおに岩といふ山よりこそ富士はみゆる所なれとて。人のいざなはれしほどに。うれしくて。老のさかくるしけれども。あがりてみれば。東にたか草山といふ山の上より雲などことにはれてさだかにみえはべれば。年月ののぞみもはるゝ心ちして。

富士はなをうへにそみゆる藤枝やたか草山の峯のしら雲

さて立かへりて。筆にまかせて十首よみはべる。

尋ねてもなとかみさ覽富士ならてそれも名高きさよの中山

富士やこれ雲まの嶺に顯れて先めつらしき秋のはつ雪

同しくはふしのみ雪を分みはや身はひるの子の老そ苦しき

清見かたふしはうしろの山颪みぬ雪ちらす浪のあらかき

ふしのねは雲ゐに高し大ひえやはたちあけてゝ爭て及はん

時しらぬ山こそあらめふし川やそれさへ雪のたかき波かな

夜や寒きつるか岡への鶴のこゑつはさの霜にふしのしら雪

嶺くつすうきしまなくは足高や雲まにふしを竝へてそみん

わきも子か黒かみ山はふしのねのいたゝく雪を哀とやみむ

ふしはみつ又もそ思ふ秋の風きかはやゆきてしら川の關

かやうによみて富士淺間に奉りし。此寺の本尊藥師如來にてまします。さいはひのことと覺えて。桂厚祈禱のため。筆にまかせて詠じ侍る歌。

春

なそへなき君か惠みを日の光四方にてらして春やきぬ覽

むかふよりうき世のさかと厭ふ身をよしやと許す花の蔭哉
彌生山くれ行空に契るらん春もとまらぬ人あひの聲

夏

汲たえし野中の清水いつしかに又尋ぬへき夏はきにけり
しきたへの袖の涙をむつましとなれも昔に匂ふたちはな
るりとみる人と魚との心にもまさる御祓やそてのうは涙

秋

りうのすむ都も秋やしら涙の立そふおきつはつかせのこゑ
くり返しむかしを今にすむ月のめくる光やしつのをた卷
わくらはにそめし梢を初にて時雨につくす秋の色かな

冬

うき世とて誰も朝夕なけく身をしらていつくと冬のきぬ覽
庭の松をしのふすまはしられ共先あたゝかに積る雪かな
世中の人の心をさく梅のいそくと年やくれてゆくらん

雜

らむとなる關の東もこゝのへも皆おさまりて道そたゝしき
いまははや雲霧はれてふしの雪都にみつと人にかたらん
かくよみ侍るしるしにや。少取なをし侍る。神な月にもなりぬ。むかしは今川上總介範政老僧歌の友にて朝夕ともなはれしかども。今は世中うつりて知人もなし。中頃臨川坊とて都にてみし人府中に住侍るが。くだりたる由きゝて。せうそこありて。ふしぎなる草庵を結び侍る。又うつの山をもみよかしなどありて。迎をたびたるに思立侍る。まことにうつの山は逢人もなし。夢にも人にとか業平の詠せしことなどおもひいでて。蔦のはを分侍るにも。ききしにまさる心ちして。

老ぬれはさなから夢そうつの山蔦の葉くらき霜のふる道

さてかの草庵につきて。昔の物がたりなどし侍るに。彼範政の孫上總介義忠よりくだりたるよしきゝ給て。

萩かえのもとのはこそはちりぬとも梢也とて忘れさらめや

これはかの範政老僧愚身など參會せし昔の事おぼし出てかくよみ給にや。返。

萩かえのむかしをとへは月までも先玉ちらす露のことのは

又かれより。

ゝはきかえの昔なれにしゆへしあれは月まて照す光そふ覽

かくしてあくる十三日清見が關みむとて人々ともなひて行侍るに。ことに空はれてうら浪もなぎ。ふじも手にとるばかりにて。關のあたりをみるに。心もこと葉もをよばずおもしろく。聞しよりはみるはまさり侍る。せきのあらがきの杜を少けづりて。

月なからいく世の涙を清見かたよせてはあらす關のあら垣

舟をこぎいださせて。三保の松ばらのほとりまでこがせ。みれば。すこし隔つる山をいでて。浪のうへより又富士を見侍るに。老の後の思出これに過はべらじとおもひ侍る。さてかへるに。つれたる人にざれごとに。

歸るさはふしをうしろに老の身のくるしやをくれ跡の濱風

彼草庵にかへりぬれば。上總介殿對面ありて。さかづきのつゐでに。

知しらす立とまれとも清見かたみる人からの關の名なれや

返し。

かへりみることはの花と清見かたけふにかひ有老のなみ哉

十六日。彼草庵をいでてかへるに。弘濟とてわかき法師の歌など稽古ありたきよし有て。古歌などの心少々尋られはべるが。歸るさをしたひて。うつの山を送られはべるも心ざしありがたく覺えて。

忘れめやうつの山路をいさよひの月に越つる蔦の下陰

彼弘濟立歸とて。上總介殿へ一首よみつかはしはべらば可レ然之由あるに。又筆にまかせて。

天津人君にみよとてその色の山をわけてや富士となしけん

返々かたはらいたき事也。遠江國埴谷備前入道常純と云人。昔老僧に逢て歌など稽古せし人の遠江より武藏國へ越侍るが。我藤枝にありと聞て。旅なる所へたちより。むかしのことなど語てかへられしが。うつの山より人をかへして。彼蔦の葉を送られしに。

うつの山うつゝの夢にあふ世かとこのたひたとる蔦の下道

やさしく覺えて。其つかひにかへし。
あひみるを夢とたとれはうつの山うつゝ定むる蔦のはの露
さて十九日。又上總介殿よりかの清見關のあらがきを少しとらせて。都の家づとにとて。歌をそへて送賜し。
尋つと都にかたれ清見かたこれそまことの關のあらかき
此あらがき短册箱になどおぼえて。所望にありしかども。とらせ侍らば。關守のしら波とやとがめ侍らむと はゞかりてかへりしに。うれしくもおぼえ侍る。返し。
人ならて都のつとそ清見潟せきのあらかき松のことのは
廿一日。かへりのぼり侍るとて。埴谷遠江の相良といふ所に子に左近將監重治といふ人の所へ行侍るに。老僧その昔此あたりへ下給て。かさはらよりかつま田と云所へ文などつかはさるゝ事有とて。其文など取いだしつゝ物がたりなどせし人のあるにも。いとなつかしく覺え侍る。こゝにしばしとゞまるべきなどあるにやすらひて。其あたりちかき所に西山寺とておもしろき山寺のあるに行はべるに。御堂のかたはらに櫻の木あり。其木のもとに此二三年の程空はくまなくて雨ふり侍るとあれば。ふしぎのおもひをなしてたちいでてみるに。まことにくまなき日の光に雨ふり侍り。きどくのこととおぼえて。
はるゝ日にいかなる雨そ花の雪空にしられぬ櫻木のかけ
玉泉坊と云所に二三日とゞまり侍るに。その坊主興衛。又彼重治などのすゝめにて。續歌たびたびありしかども。書とゞむるにをよばず。此みちをの〳〵すきにて。日比よみをかれ侍る歌ども書あつめ。そのうちなをざりなるに墨など付べきよし侍り。今は都にだに此道すたれたるさまなるに。ありがたくおぼえて。
しるへする人はなくとも此道に心をかけよ和歌のうら舟

と申侍る。さて遠江の府中より人ののぼりぬる便あるにいそぎ立出侍る。さてもあとさきもなき事を非中文のやうに書付はべる也。とくやぶるべしと申き。

文明五年霜月　日　　釋正廣

此一帖。以他本書寫之處。晴雲有後見。尤可寫證本歟。

正因在判

平安紀行

源持資

文明十あまり二とせのころ。水無月のはじめつかた。土さへさけてとか旅人のぬしのもの〔衍〕せせし避暑の床をはなれて。都にまうのぼりぬ。すべて氷にかたしきほのほに身をとらかす事は。もののふの本意として常の產なればおほやけ事のかしこまりに國のかたへにとてなんおもひ立ぬるは。かはらぬわざなるべし。結城三郎兵衞藤原重純。小笠原九大夫源忠貞を城に殘し置て。日漸たけば。從兵もあへかならむとて夜をこめて馬のはなむ〔け〕したり。海の名ごり山のたゝずまひも。ふし柴のしばし計の旅の行ゑ。立かへるべきもこの秋すごさぬことながら。心ときめきてよろこびは人毎にものすれば。悲しきにも心ひかれぬべし。いときなきむまごの門にまてると。むかし有けむ人のものせしもをもむきはかはりたるべ

し。芝といふ所をすぐるとて。

露しげき道の芝生をふみちらしこまにまかする明暮の空

大森といふもりのかげにやすらひて。

大森の木の下かげの涼しきにしるもしらぬも立とまりけり

河崎といふ海ちかき宿にて。使など跡にやりて。こゝにてしばしやすらへば。長光寺日耀上人くだものなど僧にもたせてをくりたまひぬ。馬むけんと立物するに。洲崎にかさゝぎのたてりければ。

朝朗かすみうなかす川さきに波とみるまでたてるしら鷺

いさごといふ所にて。

鳴るいさこの里をきて見ればはるかにかよふ沖津うら風

かの川にて。

蜑小ふね軒はによする心ちしてなかめえならぬかの川の里

かたびらと名づくる所にて。

日さかりはかたはたぬきて旅人の汗水になるかたひらの里

平塚にて。

あはれてふたか世のしるし朽はてゝ形見もみえぬ平塚の里

このかたびらのかたへにて。そのかみ三浦遠江入道定可世を遁れて身まかりしといひつたふばかりにて。しれるものなかりけり。大磯にいたりて。

草枕なき行露も大磯の涙かけ衣ほしそわひぬる

こゆるぎの磯にて。

浦風にまたしき秋はこゆるきの磯立ならしけふや暮なん

庚申といふ所とをしふるに。夜もすがら月をみて。

名にしおへはれぬよの里のかり枕傾くまての月をみむとや

梅澤といふ里にて。

春ならは旅行袖もつらからし名のみは匂ふ梅澤の里

車坂といふ里にて。夕立頻にふりきそへば。

鳴神の聲もしきりに車坂とゞろかしふるゆふ立の空

小田原といふ所にて。

なる子引賤かをた原みわたせは稲葉の末にさはくむら鳥

板橋といふ處にて。

朽にける横のいた橋苔むしてあやうなからも渡るかち人

箱根の山によぢのぼるに。従兵にひやし酒のませ。水粉みづからも喰してなん。心をやる事しばし計なり。

箱ね山あくる雲ゐの郭公みちさまたけの一聲もうし

山中と名づくる所にて。

越わひぬ岩かれつたふ足引の山なかくらきならの下道

ふしみといふ所にて。

夜をこめておきにけらしな呉竹のなひくふしみのけさの白露

黄瀨川の里にて。

山姬のいかにさらして白妙の浪の衣やきせ川のさと

富士の山雲かゝりてさらに見えず。

心あてにそれかとそみるしら雲の八重かさなれる不士の芝山

慕景樓の午夢のたやすきにはと。故郷ゆかしうもまたことやうにおぼえぬ。程なく雲のはなれぬれば。

みるたひにおもしろけれはふしのねの雪は浮世の姿也けり

岩淵にて。

なちかへりみなはさかまく岩ふちのみとりを分て渡す舟人

關澤といふ所にて。

とりすてゝおくての早苗せき澤の井杭も今は波の埋木

沖津の宿にいたりぬ。庵原民部入道禪道篤をまげてからうたふたつつくりこされしに。みづからにかはりて。僧昌首座これも詩にて心ばへあはれに旅のこゝろばへうつしやりぬ。見わたす景色そのかみみしにもはるかにまさりたり。

藻鹽やく煙もたえてたひ人の袖ふきかへす沖つうら風

清見潟にて。

きよみかた浪の關守ゆふ暮にとまるは月の光成けり

長沼にて。

なか沼に生る眞薦をかる賤の袂もかくやぬれはまさらし

手越にて鶯の聲をとづれぬ。折ならぬ音。これもおかしかりけり。

鶯の鳴し垣ねを過やらてこしの旅人しはしやすらふ

宇津山をこえ侍るとて。

夏深くしけれるつたのうつもれて道たと〱しうつの山越

岡部にて。

ゆふまくれ岡へにかゝる葛のはのうら吹かへす風そ涼しき

かなやの驛にて。

思ふかな八重山こえて梓弓はろけき旅の行末の空

菊川を過るとて。昔の人世途おもはずもなし。

二代までしつみし人のいにしへを思ひやるたに涙そたつ

日坂といふ山中にて。

はなにつさかしき山の夏木立青葉をわけてかゝるしら雲

濱松といふ驛にて。

涙かゝるはま松かねを枕にて幾度さめぬ夏のよの夢

あらゐの濱にて。

吹風に波もあらゐの磯の松木陰涼しき旅の空哉

鳴海のうらにて。

かへりみる里ははるかになるみかた沖行舟も跡のしら浪

なく露に思ひ亂れてよもすからあはれなるみの鈴虫のこゑ

鶯の原といふ所にて。

聞まゝにかすみし春そしのはるゝ名さへなつかし鶯の原

番場の宿にて。

やすらはゝ馬立すへて番場つかひせこか心も妹にみせんかも

赤人のばゞつかひしてと物せし事おもひ出す

もあらざりけり。青野が原にて。

色わけて千種の花も咲ぬれはあをのか原も名のみ成けり

寢物語といふ所にて。

ひとり行旅ならなくに秋のよのねもの語も忍ふはかりに

守山にて。

有明の月の光ももる山は木の下露もかくれさりけり

老曾のもりにて。

きえれたゝ老曾の杜の秋かせも心にかよふ袖の上の露

かゞみ山をみやりて。

かはり行かけもはつかし鏡山くもれ中々みえぬはかりに

年月のうつりきぬれはかゝみ山昔にもあらぬ陰やみゆらん

都にのぞむ日は。山あひ霧立ふさがりて侍り

ぬ。逢坂山をこゆるとき。

旅人にあふさかやまは霧こめて行もかへるもわかぬころ哉

それより三條銅陀坊のかりやにいたりつき

ぬ。

右之紀行者。太田道灌入道平安之筆記也。以二舟橋二位之本一寫レ之畢。

元和二年二月中旬　　沙門尊證

筑紫道記

宗祇法師

二毛のむかしより六十のいまにいたるまで。をろかなる心一すぢにひかれて。いり江のあしのよしあしにまよひ。身をうき草のうきしづむなげき絶ずして。移りゆく夢うつゝの中にも。時にしたがふ春秋のあはれ思ひ捨がたく侍るまゝに。國々の名ある所みまほしく侍る程に。筑波山もおもひ入さはりなく。白川の關の越がたきさかひをも見侍しかば。今は松浦箱崎のあらましのみふかう侍りながら。近き世となりて。都のうちも波の音たえず侍れば。草の庵いとゞ住がたく侍を。思はざるに左京兆のかくはしき契ふかうして。西の國の礒の上までをたのめをき給へることとありき。程もなく博多の海も浪おさまりて。岩國山いとゞうごきなきかくれがとなりぬれば。文明十二の年水無

月のはじめ。周防國山口といふにくだりぬ。木高き一本たのむしるし有て。陰の草木の露のなさけもしげくなりて。おり〳〵時々のあそびなどゆくこと數そふまゝに。月日うつりて長月にもなりぬ。香椎の杉生の松につけて。言のはしげき催しかたじけなきをしるべにて思ひ立ぬ。こゝに相良遠江守正任國々所々のたよりなるべきことこまやかにとりなせり。今明に應ずることはりをもとにて。この道の心ざし侍るゆへなるべし。あすとてのくるゝほどに三條殿より御使あり。思ひかけざる御心ざし。これやあまの羽衣ならむとかほりみちて。墨染にかさねんは身におはすなむ。彼優婆塞の宮になにとかやいひて。よぶかき月に琴の音しるべせしものに宰相の中將かづけ給ひけむを。人々とがめいひし匂ひ思ひ出侍るにも。なを御なさけの色はたぐひなかるべし。夜すでに明行程に。くもらはしき空のけしきも哀かけけるにや。日いとよくはれてのどかなり。宿坊の院主あるじこまやかにして。ことぶきさへとりそへてなさけさま〴〵なり。すでに打出るおり。陶尾張守弘護。内藤孫七護道。もろともにさぶらひを添ふる。いとゞ行末たのもしくなむ。かくて過行程に民屋一むら有。津の市といふ。左に河ながれ。海づらはやゝいりて物さびし。かつまたの池もかくこそはと堤くづれてあやうきわたりなれば。うちおろしみなと川を越行程に。門司下總守能秀跡より立はやめ。言の葉をかはす。折しも空かきくもり。時雨めきて打そゝぎ侍るあひだ。賤屋のうちに駒引かくし。かみしもの人家々に宿り侍る。程もなく降過れば。打つれつゝこの道の物語たがひにして。はるかに過行ば。けはしからぬ程の道のほとりに小松むら立て。手向の

神にやと大なる石に木綿かけたる有。こゝなん周防長門の境といへり。夫より山中といへる所にやすらひて。かれ飯のまうけせさせて過行まゝに。聊なるやしろ有て。木深きかたはらに夕日がくれのほど松虫の鳴からしたるもあはれあさからず。今日は長月の六日なれば。彼野の宮の曉に音な鳴そへそなど侍りしもおもひ殘す事なし。あるは山ふかく水流れ。あるはひだ引ならす賤の山田に鴈のうち啼などする所々を過て。船木といふ所に昔都相國寺にして折々たのみ侍る人此山里をしめて吉祥院とて有。今雨夜のちぎり万年のむかしのかたらひにもをとらず。さまぐ\の心ざしせばき袖にはつゝみがたくなん。此船木といへるは。神功皇后御船を作り給ひけむ所となん。又秋は過れどこがれざる覽といへる船木の山の紅葉は此ごろにや。發句さたすべきよし侍れば。

ふきしくはいなはの雲の山おろし

舊友のよしみは中々にて。唯所のさまを思ひよれり。曉天に皆人わかれ惜み立出。はるかに行てその里をとへば。今宿とかいひて。左に塔婆のなかばみゆる寺有。うち過入もて行ば。深山にいとゞ木深く。鳥のねも絕たるわたりにて舟にのれといふ者あり。あやし。天の岩船にやと思ふに。此山の末の浦人。旅人をむかへて世のいとなみにする。海路のわたし守成べし。やゝうつり來てはふといふ浦にいたりぬ。嶋おほくつらなりて浪の上風靜なり。船もよひするほど此地をしる人の家にやすらふさま驛館の心ちす。水むまやにはあらぬ雜事をろかならず。かくて船出し侍るに風あらくなりて。いかにと侘あへるに。蜑の釣舟の波なれたるを見るもあはれなり。篁朝臣の人には告よといひしなど思ひ出て。

心行道たにうきな漕いてゝ八十嶋かけし人をしそ思ふ

跡のしら浪をかへりみれば。汀の松遠ざかりつゝ。潮風にけぶれるも心ぼそし。舟子共のうら悲しげにからろをしわたりつゝ沖中過るほどに。滿干る玉とかやいへる二の嶋をみるにも。からくにの人さへしたがひけん昔ありがたし。いとゞ祈念をこらし侍るに。すでに着岸す。仲哀天皇の皇居は豐浦といふうら成べし。當社は稚櫻宮天皇におはします。神主則對面して神宮の物語す。齡はや六十に及ぶやと見えて。何となく神德のふかさもあらはるゝ心地して。殊勝にぞ覺え侍る。社參は幸あす九日の節なれば。此日は打休みぬ。夕月夜のかげおかしき程に。海の上もなぎわたりて心すめり。取あへず。

月にみつ夕しほさむし秋の海

明れば折ふし神わざ有て。神司のものおほくうちみだれ。御供などまいらするほど也。社頭は樓門回廊ひろうつゞきて。い垣に高き松の色は青海の翠をふかめ。渚になびく眞砂は雪をしけるかとあやまたる。垂跡の御神は第一神功皇后。仲哀天皇。應神天皇。仁德天皇。以上四座ましますす。神事過て廊にして一座あり。發句は昨日の秋の海なり。今日の菊花當社にいはれなきよし侍れば也。つとめて住吉に明猷律師諸共にまいり。これも社中神さびて。木深き松のひゞき身にしみいふよしなし。神主回廊にむかひて對面す。發句すべきよし侍れば。

松かせやけふも神世の秋のこゑ

このけふといふ詞。二つにかよふべきや。鎭座の御神は西の第一住吉明神。次八幡大菩薩。高良大明神。神功皇后。諏訪明神。以上五柱なり。和光のちかひ何れもをろかには侍らねど。わきて住吉明神は文武を守り給へり。此道は兩

輪のごとし。國家を治めむ人は。此御神の心を觀ずべき事とぞ覺え侍る。かくて赤間關はやとものわたりにいたる。鹽のゆきかひ矢のごとくして。音に聞しにかはらず。二の迫門を隔てむかひは豐前の國なり。そのあいだ十餘町と見ゆ。此地のやどりは阿彌陀寺といへり。うしろに山高く巖そばだちて。落くる水いさぎよし。せきいるゝ砌のさまをのづからの境致にて。岩に生たる松のねざしも物ふりて。水におほひ軒にめぐり。御堂は星霜積りて檜皮所所破れたるも中々あはれふかし。鎮守の社の作りざまこまやかに。しかも風景を思へるにや。門司の松山ぞ向にみえて前に海水をながむ。次に安德天皇の御影堂を見侍れば。御かたちみづらふたつにゆひわけて。御よそひさる事とみえて。紅の袴に笏を持給へり。御顏のにほひあひぎやうづき。うちゑみ給へるさまして。唯その代の御かたちとおぼえて。なき世のかげはわすれ侍る事也。あやしの身にも見奉るほど。涙をさへがたし。次に平家の人々の影有。新中納言知盛。修理大夫經盛。內藏頭信基。宰相敎盛。中將資盛。能登守敎經等なり。女房には大納言のすけの局をはじめて四五人あり。中にも敎經武勇の道すぐれたりけんもふしぎに覺えて。

梓弓八重の汐合に消ぬ名もあはれはかなき跡のしら波

君の御事はその哀ことのはに及び侍らでさしをきぬ。彼二位の尼君の波の下に極樂侍りとおしへ奉りけむも悲しさ淺からず僞のことのはに侍れど。唯心己身のこゝろをおもへば。いづれか淨土にあらざる。誰か佛躰にあらざらむ。此詞ぞ誠の道には侍べき。暮行ほどに門司助左衞門尉家親あるじすべきよし侍れば。皆ともなひ行たゞしきものなし。夜に入ぬれば

月さやかになりゆくに。あまの漁火たき添てうかべる船の數多き中に音高く聞ゆる聲有。これや叩レ舷來ニ往月明前一といへるならんと聞すてがたきに。磯がくれの家々に打添る碪の音。取集たる折ふしも。空飛鴈の鳴わたるにも。誰玉章のもじの關守とよめる。唯今のあはれなり。明るあした道場にて會有。發句。

舟みえて霧も追門こすあらしかな

翌日又門司下總守能秀の舍りにて會有。

戸さしせぬ關にせきもるもみちかな

歸るさ暮かゝる程に龜山の八幡へまうづ。苔の道石の橋をのぼりてみれば。數多の人家海づらにつらなり。大小の客船山陰にうかべり。御社みやびやかにして。常盤木たかう茂りあひ。夕露しろくうちなびくさま。むかしかぐや姬の願けん蓬萊の玉のえだにかよひぬべし。又爰にても神主發句を乞。いなびがたくて。

あきとなし龜の上なる峯の松

つとめて下總守能秀の許にあるじごとねむごろにして。やがて一葉に乘じて漕出。安德天皇行宮の跡をあはれみ。柳が浦を過。菊の高濱をながむ。同行のすゝめ侍れば。舟の中にて一折有。

花ならぬ眞砂もきくの濱路かな

移り行て筑前國若松の浦といふに着ぬ。この所を知人麻生のなにがし兄弟ある寺にむかへとりぬ。かた山かけて植木高き陰よりうちとの海をみるに。鹽屋の煙暮わたり。入日かげに移ふほどまたいふかたなし。この二人は將軍家奉公の人に侍れば。都の物語こまやかにして。色々の肴求め出たるほど。こよろぎのいそがはしきも思ひやられ。盃かさなりさし。更る月の光もたゞならず。今夜は十三夜なればとて發句を。

名やおもふこよひ時雨ぬ秋の月

明ればば海陸の間侍添てをくりこまやかなり。こやの關といふ所にして草の枕を結ぶ。曉ちかき夢に誰となきおとこ天神と名乘て扇を予に給はるとみ侍りて夢さめぬ。則同行に語れば。皆ことぶきあへり。誠に神の冥助あるにこそとたのもしくなむ。是より守護所陶中務少輔弘詮の舘に至り。傍の禪院にやどりして。又の日彼舘にてさま〴〵の心ざし有。折ふし千手（年イ）治部少輔。杉次郎左衞門尉弘相など有て。一折あり。

ひろくみよ民の草葉の秋のはな

此國の守代なれば。万姓の榮花をあひすべきのこゝろなり。ひねもすいろ〳〵あそび暮し侍るに。此あるじ年廿の程にて。其樣艶に侍れば。おもふことなきにしも侍らで。おぼえず勸盃時移りぬ。十六日。杉の弘相の知所長尾といふに行。都より志淺からねば。爰にても又をろかならんやは。やがて百韵をはじむ。山ふかきわたりなれば。

もみぢしてなたみとりそふ深山かな

是より宰府聖廟へまいる。陶弘詮より侍二人添らるゝ心ざしいはむかたなし。かくてあしき山といふ驛路にかゝりぬ。水の緑。紅葉の色色。おもしろきわたりなれど。谷嶺けはしく。ふむ所みな岩の棧路なり。心ぼそさまさりて。進退の事さへ思ひ歎て。

世中はあしき山路に乘駒のふみもさためぬ身にこそ有けれ

とかく過行程に。御社ちかく塔婆などみゆるより。おりて神前を拜して宿坊滿盛院に至りぬる程暮はてぬ。今夜は當社の縁起などよませ奉るほどに。深野筑前守といふ人來る。この郡の郡司也。扇をたづさへて。心ざす當社にて此扇をうる事。夢の告思ひ合ていとゞ神慮有

がたくなむ。つとめて社僧一人を友なひ神前にまいる。おもての鳥居さし入より。地廣く松杉數そひて。さらぬときは木やゝしげし。反橋たかうして二有。又うちはしたつ其中にあり。池のめぐりには千万株の梅のはやしをなせり。覺えず西湖のさかひに來るやとおぼゆ。樓門に入ほどかう〴〵しくて。左右の回廊いさぎよし。名におふ飛梅苔むして。老松のよはひにもあらそへり。抑當社は延喜五年乙丑に草創有となん。則拜し奉るも。いにしへの御憂まで思ひやられて。君經おぼえず聲やみて。只袖のうるほふより外の事なし。西行がしでに涙のといひけむもかゝる折にや。等閑のことはいかゞ思ひ侍れど。たゞ敬神の心一すぢにまかせて。

曇りなき跡をしたひて我みるやたゝこれにしの秋のよの月
うら風の吹上の秋のおもかけも波にたちそふ池のしら菊

神やしろ又生れてもうることのあらはとおもふ敷しまの道

經藏寶塔諸堂末社みな星霜ふりたる中に。安樂寺いたう廢して。かはら落軒破れて。忍ぶ草もたよりなきにやとみえて。みだれそふあらしにも。俊賴朝臣のちるもみぢ葉と讀るもいとゞ哀なり。次に人丸の木像おはしますを拜す。この所則當社の會所なりと聞て。

菊はたゝむめにしたしき句ひかな

此日宿坊にて會有。

とりもあへぬ幣はあらしの紅葉哉

翌日又きのふの菊にて一座有。杉弘相會席に來合ていとゞ其興有。會過ぬれば觀音寺に入ぬ。此寺は天武天皇の御願なり。白鳳年中の草創なり。沙彌滿誓が歌に。とふさたてあしから山に舟木きりとよめるも。此所を讀るよし万葉集に侍るにや。諸堂塔婆同廊みな跡もなく。名のみぞむかしのかたみとはみえ侍る。觀音

の御堂は今に廢せる事なし。さては阿彌陀佛のおはします堂又戒壇院かたのごとく有。結緣してのち。ある坊に立寄。當寺は南都東大寺の末寺也。彼衆徒此坊のあるじなり。古き都の人なればにや。花立空燒してえむなるさまに。盃の心ばへ何となく心ざしの等閑に見えずなむ。暮る程に名におふ鐘の音も聞捨がたく。歸りゆくあたりなれば。思川染川などをみつつ宿坊に至る。又の日弘相の宿り花基坊といふにて又一座あり。

染川はしくれし山の雫かな

會過ればまだひつじくだらぬ程なり。やがて立わかれ侍るに。兵部の君とて侍る法師。あたりの名所のしるべをもせむとて相伴ふ。かまど山は跡遠くなりき。思川の俤は袖の上に留りぬ。染川にてふて下るに。天智天皇の皇居木の丸どのの跡に馬をとゞむ。境内皆秋の野らにて。大き成礎の數をしらず。都府樓の月いにしへを思ふに。きのふの觀音寺の鐘又聞がごとし。天拜が嵩をはるかにみて。なを御神の名殘も淺からず。かるかやの關にかゝる程に。關守立出て。我行すゑをあやしげに見るもおそろし。

數ならぬ身をいかに共事とはゞいかなる名をかかるかやの關

越過るまゝに大成堤有。いはゞよこたはれる山のごとし。尋れば是も天智天皇のつかせ給ひけるとなん。民の愁いかばかりにかと思ふも悲し。すべて國家を守る人は唯民のついえを思ふべき事とぞ覺ゆ。倩世のことはりをおもふに。一天の君万國の民。いづれか終の限りなからまし。此わたりの舊跡を見るにも。只常なるものは山川土石のみなり。我既よはひたけて行末を期するたのみなし。二度こゝをみむ事あるまじき事と思ふにも。倚なきなごり

の程は神ぞしらむなどおもひつゞけつゝ。三笠の杜のかげを過て又染川のすゑをわたる。老波の立かへり色に成心もやとあさまし。おくりの法師名殘をおしみてたがひに引わかるるも。今はの別めきて心ぼそくぞ侍る。夫より誰にいそぐ心ともなく駒打はやめ。夕陽のほのかなるに博多といふに着ぬ。宿りは龍宮寺といへる淨土門の寺なり。此所つかさどる山鹿壹岐守。とかくのことわざす。常のごとし。奥深きかたに方丈餘りの所有。うちのかざりあるべきやうにして。庭の草木みどころ有。萩の下葉かれ〴〵成うち散。吳竹の葉風あらあら敷吹て。ひとりぬべき心ちもせぬ旅枕なり。此院主道にすける人にて心ざしをつくさむと見えたるもかたじけなく。明ぬれば此所のさまを見侍るに。前に入海はるかにして。志賀の嶋をみわたして。沖には大船おほくかゝれり。もろこし人もや乘けんと見ゆ。左には夫となき山どもかさなり。右は箱崎の松原遠くつらなり。佛閣僧坊數もしらず。人民の上下門をならべ軒をあらそひて。その境四方に廣し。爰より船出して志賀の嶋にをしわたる。思ふかたの風さへ添て片時の間と覺ゆ。嶋近くさしよする程に。明神の宮司の坊よりとて。禪衣の人むかへに來れり。心得がたき名乘どもなり。伴ひ行に山かげなる海づらにむね〳〵しからぬ家々さしつどひて。かすかに煙などもみゆ。これやめかり鹽汲海士のやどりならむと哀なり。社は高き所にて其道遠からず。御殿の大にはあらで。物ふかき方はみえず。にぎはしく御垣の內塵のくもりもなし。拜み奉る程。老たる社人寶殿に入緣起取出したるぞ神さび有がたう見え侍る。社中社外の盃酒たびかさなりて心空成に。立出て詠わたせば。万葉によめるお

のころ嶋もまぢかくみえて。筥崎の松まつら潟香椎の浦まで遥にみやらるゝに。海の面なぎわたり平地のごとくして。木のはよりしげくうかべる釣ぶねいはむかたなし。海の道遠くつゞきて。波の上霧はれわたる。いとゞかへさも忘れぬれば。

浪風をおさめて海のなかはまて道ある國やまたもきてみむ

など打ながめ漕かへる。船のうちには老もわすれ齢ものぶる心地して。生薬も只此邊に有けりとぞ覺ゆ。寺に歸りて此所にたち給ふ住吉の御社に參てみれば。あらがきのめぐりはるかにして。つらなれる松の木立神さびたり。樓門なかばはやぶれて社壇もまたからず。いかにとゝへば。此十とせ餘りの世中の亂ゆへといへるも悲し。神前のいのり此道の外の事なし。社中をめぐりみれば。大木の松いがきしてゆへあるとみゆる有。問ば。この松もとは御社にかたぶきて造營のさはりなりける。行末も御社あやうければきりぬべしとて勸進の僧の定めけり。二三日の間にすこしづつおきなをりてすぐになりぬ。夫よりこのいがきなどはしけるよしこたふ。そのとし永亨十一年の歳といへり。ことし四十二ケ年なり。その時松をきらむといひし勸進の僧凡公幸と申きとて。はし〴〵かたるも有がたく。道の正道のねがひいよ〳〵たのもしくて。

神垣の松にそたのむことのはもすくなる道に立やなをると

かくて廿三日のあした。中書弘詮のもとへ文つかはす。その次のひとりごとに。

はかなしや袖より外にみし月を面影ならていつかやとさん

しるしなき事はまことにはかなくなん。昔四日より杉の弘相宿願の千句有。第十番暮秋のこゝろを。

夕浪にかへるもあきやにしの海

千句は三日に過て。明れば廿七日雨いたくふりて。道の空もいかゞと思給ふれば。生の松のあらましけふも又過ぬ。やどりの院主一折とあやにく侍れば。又の日。

秋ふけぬ松のはかたの奥津風

明れば廿九日。生の松原へと皆同行さそひて立出侍るに。大なる川をうちわたりみれば右に一村の林有。則聖廟の御社なり。法施まいらせ。それより姪の濱まで鹽屋おほく。所のさまもさびしげなるを過て。汀におもしろき山有。浦山といへり。汐みつときは山をめぐりて嶋のごとし。折ふし引しほあらくてかへる浪もいそがしくみゆ。うらやましくもといひけむふるごとにはかはりて。行かたに心すゝみてやがてかの松原にいたる。大さ一丈ばかりにて皆浦かせにかじけたるもあはれなり。引入て社有。御神は熊野にておはしますとなむ。社のめぐりには古木あまたむら立、木の下は茅原なり。夜の時雨の名殘にや。むら〳〵をける露のすゑ葉うちしめりて。色こき中にしら洲は初霜のまがひたらむやうにて。見過しがたきおりになむ侍る。御神のいきよとてさし給ひけん松ははやう朽て。その根を入守りにかけしなどかたるもむかしこひしきもよほしなり。社壇の右のかたに大き成松のしかもすがた常ならずかみさびたる有。是は末遠くいきの松ともいふべかりけるとみるに。我齢の程たのむかげなきも心ぼそくて。又はかなしごとを。

あすしらぬ老のすさみのかたみなや世をへて生の松にとゝめん

かゝるほどにやどりせし龍宮寺の院主その外老たるわかき跡よりきたる。これ皆道にすけるもの成べし。愚詠に皆涙おとしぬ。まして老の衣手つれなからんや。かくて此所海ぎはな

れば。打出みるに。若侍のおのこどもよしあるさかなもたせて。汀なる木の下に草をむしろにて。たび〳〵すゝめあへるも情とり〴〵なり。いそぐとなき道ながら。暮かゝる程に又博多にかへりぬ。あすは筥崎などいへるに。同行の内宗作といへる。すこしあやまちしてとゞまりぬ。かなしびいはんかたなし。けふはしかも晦日にて。秋のかぎりとり添て。いとゞしき袖の雫よそふかたぞなきや。

思ひやれ馴こし道に君をおきて行そらもなき秋の別を

かへし。

君にのみ心はそひて行跡に誰かためのころ涙なるらん

又の日神無月の朔日。いつしか時知がほにうち時雨。道の空いかゞとおもふに。とりもあへず又はれぬれば。立わかるゝ程。こゝの名殘もさすがなり。いたはり有同行を輿にのせて此松原を見す。みなかちにて。松原に入よりことのはおよびがたくなむ。左右に五六町の程を移りつゝ又過がてに伴ひゆく。大木などは稀にして唯百年ばかり夫よりこのかたの木なり。むかしの木は朽ゆきけれど。あひつぐ木末かくのごとし。木のもとをみれば五尺六尺一尺二尺。又は二葉の如く生るなど。春の野の若草のとし幾萬代も絶ざらんとみゆるは。たゞ神明のかげなればなり。

一木にはいかに定めし筥崎や松はいつれも神のしるしを

爰かしこの陰に一村薄かるかやなどの有は哀なれど。けふは松より外に心うつるべくもあらず。御社に参ればい垣したる松有。是なんしるしの松なるべし。先松に立より一ふさを取。しばし祈念いたし。

いにしへの法のためしに秋の霜を陰におさめよ筥崎の松

是はたゞ國家安全の願ひ事成べし。かくて神の前にまいる。御殿の大なる事世にこえ。しか

も造營遠からで玉をみがけり。末社などはなかばなるも侍り。御殿のめぐりより渚に出るまで。大木左右にたかうして地はいさごあきらかなり。御社の正方は戌亥にて志賀の嶋にむかへり。海の中道はるかにめぐりたるさま茅の輪のごとし。遠近の嶋々所々の山々など手にとるばかりにて。いづれも名所ならずといふ事なし。住吉の松。海邊などはさる事ながら。日に近き風景はいかにも增るべくぞ侍る。社頭のあたりなどの神さびおもしろき事は又すみよしにならぶは侍りがたくなむ。此浦のやどりは極樂寺といふ。則當社の神宮寺也。やがて神主の所へいたりたいめす。先御神の事を尋るに。中は神功皇后。左は寶滿。皇后御妹也。右大菩薩におはしますよしいへり。しるしの松の囘祿の時やけ侍しは。其跡に生出たる不思議などを物しづかにいへるもかたじけなし。暮る程に海づらのけしき又ゆかしうて。立出みれば夕日の遙々とかゝる方に富士に似たる山有。みことゝいふ山なり。その外の所々。ゆふ暮の色にもてはやされて。いとゞたぐひなくなん。俄に時雨めきてあはたゞしき雨風に立さはぎ。木のもとを賴む墨の袖などもただならずみえ侍るも。折にひかるゝ哀なるべし。翌日の會に。

松の葉におなし世をふる時雨かな

杉弘相もおなじく此會にあへり。いたはり有同行の事など弘相をたのみ侍り。もとより心ざしふかく侍ばたのもしくなむ。夜にいればわかき男おほく酒もたせなどして。いかゞと思へるさまもわすれがたき事多くなむ。夜更行ば雨いとゞ降て寢覺もいとゞ數そ。明行ばはれ行て立出るさはりなし。柱がたなどを過つゝ香椎宮にまいりぬ。爰はいづくにも引か

へ物さびしく。社のめぐり木ぶかく草たかう。山水に懸置る橋のさまも跡ふりて。むなしき昔のみ道をのこすとみゆ。御殿は造營なかばにもならでかりどののさまもをろそかなり。かんづかさのものどもすさまじげにて物いひかはすも哀なれば。いとゞむかし覺えて神の御祓にといへる杉のみさかへて。い垣の外にひろごりたるぞ御祓に何かはせんとめでたき。此枝を少し折て。

行末の身を二たひと思はれと香椎の杉に猶や契らむ

御神は聖母又八幡にておはします。同じ御神ながら筥崎にては神功皇后と申。爰には聖母と號し奉る。神木も筥崎はまつ。こゝは杉なり。これみなひとの心さま〴〵なるゆへ。隨機の和光又かくのごとし。海づらに出れば則香椎潟なり。磯菜摘あまの子どもも。時ならねばや人かげも見えず。物さびしきわたり也。是より野山の中をわけ過又海際に出。はる〴〵とみわたしたる程。千里の濱ともいひつべし。風はげしく浪たかうして物心ぼそきに。ちいさき魚のこゝろよげに飛をみるに。是も又波い下には我より大なる魚のおそるゝおほからむと。みるにうらやましからず。又貝のからの浪にしたがふをみれば。うちよせられて海にはなるゝも愁なし。ひかれて海に歸るもよろこびなし。すべて生をうくるたぐひほどかなしき物はなし。世はたゞ苦樂ともに愁也。此ことはりよく身にしられ侍れば。うらやましとはたゞ此貝のからをやいふべからん。此浦をとへば簑苧の浦といふ。ふるくもうつせ貝をよめれば。

けふそしる此うら波のうつせ貝身のうしとてやかくも成ん(マヽ)

はかなしごとに時うつりて宗像にいたりぬ。神主にたいめして。今夜はある禪院にやどり。

明れば社參す。所は深山のかたはらに。地は平にして。木立しげき中に御社有。廻廊はいたう破れて雨露もたまりがたけれど。御殿は廢せる所なし。右に川ながれて汐遠く滿。前は反はしたかう懸りて。さる故迹とみえたり。御神は田心姫と申。湍津姫市杵嶋姫も一所に垂跡し給ふ。皆兄弟の御神也。是則すさのおのみことの御娘にておはしませば。又道のことを祈奉りて。

人の代の末まで守れ千早ふる神のみおやのことのはの道

その八重垣の心を思ひて。人の代とはいへる成べし。誠に此尊を歌道の元祖とは申べきものなり。そうじて我國の建立は只すさのおの尊にきはまれり。天照御神の御心といふも此みことの御心也。神道の極意と仰べき事にや。神主家居などさる所と見ゆ。あるじのことなど物きよくして。心ざし又こまやかなり。かつら潟といふにかゝれば。鐘のみさき大嶋などいふもみゆ。我は忘れずとよめるむかしをおもふにも。猶志賀の嶋のおもしろかりしなど思ひ出侍るに。彼小貳の娘どものあはれいづらにといひ。誰をこふとか大嶋のなどいへるも。いかばかりかなしかりけむ。今日も浪風さはがしく袖の雫もいとゞしげきに。千鳥のひとつふたつ四五など啼行も。いかなる事をおもふかと哀なれば。

濱千鳥こゑうちわひて大嶋の波のまもなく誰をこふ覽

旅の空はいつとなく世のことはりの物うきながら。世々のふるごとなどにも思ひなぐさめ侍るを。あひぐしたるものどものひとへに浪風の愁をのみうちなげくを聞ても。我ゆへにこそと思ふもあぢきなし。松原遠くつらなりて。箱崎にもいかでをとり侍らむなどみゆるはたぐひなけれど。名所ならねばしゐて心と

まらず。やまとことのはの道も。その家の人又は大家などにあらずばかひなかるべし。然るをこのたび所々にして瓦礫をつらぬる事廿首にをよべり。あるは敬信の心。あるは此道のねがひ。あるは我身の思ひをのべ。或はいにしへのなき世の跡をあはれび。又は所につけて俤忘れがたきにもよほさるゝ成べし。俊成卿の筆跡にも。此國にきたりときたれるものは此歌をながめ亦此國にむまれと生るゝものは此歌をよめりといへり。又いきとしいけるものいづれか歌をといへる事侍れば。しゐて身のいやしきをはづべきにあらずや侍らむ。かくて程もなくあしやになりぬ。眞砂たかうして山のごとくなるに。松たゞむら立て。寺々あまた見えわたる。民の家居甍の笘や數ならず。川のむかひは山つらなりて。さま〲みすてがたき折から。時雨いさゝかうちそゝぎ。夕月夜さやかにさしのぼりたるなど。つくり合せたるやうなり。なだの鹽やきといへるわたりよりは。立かはりてあはれまされり。

鹽やかぬあしやの秋そ哀なる月やけふりをいとひそめけん

神無月を秋といへる事源氏物語にも侍るにや。爰にて麻生兵部大輔まうけして。いろ〲の心ざしこしかたにかはらず。發句をと侍れば。

追かぜもまたぬ木の葉の舟出かな

又ある人所望に。

いつきかむあしやの月の夕しぐれ

又の日弘詮の侍かへして舟にて山中の堀江を遙々とさしのぼるに。汐がれの比にてとかくたゆたひ。日も暮行ば。月の光計をしるべにて。菊の長濱などはさやかにみえず。嶋がくれの海士のいさり。山陰の礒の燒火などえもいはれぬ哀なり。夜いたく更ぬほどに船さしよ

せて彼阿彌陀寺にいたりぬ。月は入かたの空きよく澄て。うしろの山の松風などとり〴〵に心とまりぬれば。一日を過し。七日のあした舟に乘。隼人の迫門をのぼるに。平氏の人々のしづみけむ所ぞと舟人のおしへ侍るも。いとどかひの雫たえがたくなむ。豐浦の渚に舟よせて二宮の神主のもとにしばしやどり。やがて龍泉院明猷律師の坊にいたりぬ。日頃の旅のさま又都の事などもろともに物語して。朝に會有。

なくりきてとふ宿過ろしくれかな

會過れば彼神主。又良性といへる都にてなれしなどとゞまりて。色々あそびども有て明ぬ。けふは諸ともに。杉美作入道の山家大嶺といふ所につきぬ。山里のあるじ風流にして。もとよりおもしろきわたりをやさしく住なし。庭には梅櫻をつくし。色草を集て心をやれるさま。都にもかゝる所侍らむやは。霜置まよふ菊の籬。まして此頃盛なれば見所おほきに。散まがひたる木の葉の色もえむなり。つとめて一座有。おもしろく繪かけ花たて空燒して。下繪よきほどに書たる懷紙など。いづれも心ある所に。發句のつたなきぞ本意なく侍るにや。

木からしな菊にわするゝ山路かな

一巡過る程に。竹林亭とて道にすける人。兼て契りしをたがへず來らる。去人なればいとゞ會の興一入なり。又の日は碁うち物がたりなどして。夜にいり香などたがひに聞合て。かはらけよき程に取かはし。いとゞ心とゞまり侍れば。つとめて心空に立出るに。道あしき山なればとて。輿の用意又あさからぬ心ざしになむ。立出し日より今日まで三十六日にや成侍らん。此間にはるか成さかひを經るに。山川の道かたき所なきにあらず。しかれども國治り

人の心のどかなればにや。巫峽の水わたるに障なく。大行の路過るに恐れなくして。萬に心をのぶる旅になん侍る。けふは神無月十二日。山口のやどりに歸りて。此たびの日記はしるしとゞめ侍る事しかり。

右此記行者。兼載法師所持之本令ニ書寫一者也。

永祿四年長月念日　昌叱

右筑紫道記以昌叱筆書寫以續扶桑拾葉集及伴光淳本挍合畢

北國紀行

堯恵法印

文あきらけき年の十七の秋。みのの國平賴數しる所の山亭に下り蘇息せしに。秋風の催す比都を思ひ出侍て。

雲路こす都は西のをとは山せきのこなたも秋かせそ吹

かくて明るとしの十八のさ月の末に。飛驒の山路をしのぎ。あづまの方へをもむき侍りぬ。位山をみるに。千峯万山重りて。いづこをかぎりともしらず。

こすゑ吹あらしも高き位やまひはらか下にかゝる白雲

名にきくほそえの方を遙にみやり侍りて。

峯こゆる月もうつりぬ夏山やひたのほそ江の夕闇の空

立山のふもとを過て越中の國にうつりぬ。

むかし誰なつより道たたて山の雪に消せぬあとは殘れる

田子の浦はいづちなるらんと思ひやり侍り。

行方をたちへたつなよみぬ人の爲とそきゝし田子のうら波

とをきわたりにふせの海ありときゝしかば。

夏草の茂れるすゑもふせのうみを吹こす風の色かとそみる

早槻川をすぎて霖雨いまだはれず。
たひの空晴ぬなかめにうつろ日もはやつき河をこゆろ白浪
長雨なをはれやらず。四十八ヶ瀬とやらむをはるばるとみわたせるに。をつと云所に侍りて。
四十あまり八のせなから長雨にひとつうみともなれろ比哉
六月十三日越後府中海岸につきぬ。京路にして相なれし正才法師を尋てあまのとまやによをかさぬ。此なぎさちかき所に神さびたるやしろあり。參詣しておがみ侍りしにかの社務はながきさといふ老翁出てこの御神はむかし三韓御進發のときより北海擁護の神たり。居多明神と申奉る。手向すべきよし申侍しかば。
天の原雲のよそまて八嶋もろ神や凉しきおきつしほ風
此國の太守相摸守藤原朝臣上杉房定のきこえに達せしより後は。旅泊の波の聲をきかず。剩旅館を宸勝院といへるにうつされ。樹陰の凉風袖にあまるほどなり。七夕にいたり。星の手向せしに。當國の歌の濱の名も。梶のはをかさぬべきかずの秋。かぎりしられず覺えて。七夕祝。
手向せむ幾万代かこしのうみにとろかちのはの歌のはま風
十四十五夜には善光寺に詣て御堂に通夜し侍る。則彼寺務の宿老。內陳へ導き侍しかば。此身をかへずして淨刹にいたれるかと覺ゆるに。彌陀本願のこゝろを。
ふり分ぬ草木の雨のすゝしさもむかふろかたの秋の初かせ
をば捨山はいづれの嶺を隔て侍るぞとたづね侍るに。いたりてとをくは侍らねども。山川雲霧かさなりて。此ごろいとあやしき事の侍る道にてなど聞えしかば。只堂前の峯の上よりはるかにながめ侍りて。
よしさらはみすとも遠くすむ月をおもかけにせん姨捨の山
ちくまがはは御堂の東に流れたり。
やとり行浪のいつくかちくま河岩まも淸き秋のよの月
明ればば越後の府中にをもむきて旅情をなぐさ

むる事數日になりぬ。八月の末には又旅立。柏崎といへる所まで夕こえ侍るに。村雨打そゝぎぬ。

消もろ露は聞ともかしは崎下はに遠き秋のむらさめ

かくて重れる山つらなれる道を過行程。曠絕無人ともいふべし。越後信濃上野のさかひ三國峠といへるを越て侍るに。諏訪のふしおがみあり。

諏訪の海にぬさとちらさは三國山よその紅葉も神や惜まむ

重陽の日。上州白井と云所にうつりぬ。則藤戸部定昌旅思の哀憐をほどこさる。十三夜には一續侍しに。寄月神祇。

越ぬへき千とせの坂のひかしなる道まもろ神も月やめつ覽

是より棧路をつたひて。草津の温泉に二七日計入て。詞もつゞかぬ愚作などし。鎮守の明神に奉りし。又山中をへていかほの出湯にうつりぬ。雲をふむかとおぼゆる所より淺間嶽の雪いたゞき白くつもり初て。それよりしもは霞のうすくにほへるがごとし。

なかはよりにほふかうへの初雪なあさまの嶽の麓にそみる

一七日いかほに侍りしに。出湯の上なる千巖の道をはるぐ\とよぢ上りて大なる原あり。其一かたにそびえたる高峯あり。ぬのたけといふ。麓に流水あり。是をいかほのぬまといへり。いかにしてと侍る往躅をたづねてわけのぼるに。からころもかくるいかほの沼水にけふは玉ぬくあやめをそひくと侍りし京極黄門の風姿まことに妙なり。枯たるあやめのね霜を帶たるに。まじれる杜若のくきなどまで。むかしむつまじくおぼえて。

種しあらはいかほの沼の杜若かけし衣のゆかりともなれ

神無月廿日あまりに彼國府長野の陣所に至る事晡時になれり。此野は秋の霜をあらそひし戰場いまだはらはずして。軍兵野にみてり。かれたる萩われもかうなどをひきむすびて夜を

かさぬ。定呂の指南によりて。藤原顯定（關東管領）の旅。哀のこゝろありて。旅宿を東陣にうつされし後は。嚴霜もをだやかなり。平顯忠（長尾修理亮）。陣所にて會。霧中雲。

むさし野や何の草はにかゝれとてみはうき雲の行末の空

十一月五日には佐野舟橋にいたりぬ。藤原忠信をしるべとせり。彼所を見るに。西の方に一筋たいらなる岡あり。うへに白雲山ならびにあら舟御社のやま有。其北にあさまのたけ崔嵬たり。舟ばしはむかしの東西の岸とおぼしき間。田面はるかに平々たり。兩岸に二所の長者ありしとなり。此あたりの老人出てむかしの跡をおしふるに。水もなくほそき江のかたち有て。二三尺ばかりなる石をうちわたせり。かれたる原にみわたされて。そことおもへる所なし。

跡もなくむかしをつなく舟橋はたゞことのはのさのの冬原

十二月のなかばにむさしの國へうつりぬ。曙をこめてちやうのはなといふ所をおき出。ゆくゑもしらぬかれ野を駒にまかせて過侍るに。幾千里ともなく霜にくもりて。空は朝日の雲もなく。さしあがりたる風景肝にめいじ侍しかば。

朝日かけ空はくもらて冬くさの霜にかすめるむさしのの原

其夜は箕田といふ所にあかして。武藏野を分侍るに。野徑のほとり名に聞えし狭山有。朝の霜をふみ分て行に。わづかなる山のすそにかたち計なる池あり。

氷ゐし汀の枯野ふみ分て行はさ山の池のあさかせ

其日の午より漸々富士はみえ侍りぬべきを。よるのしもなごり猶かきくもりて。かぎりもしらず侍り。からうじて鳩が井のさと滋野憲永がやどりにつきぬ。廿日のよの殘月ほがらかにかれたる草のすゑに落かゝりて。朝の日

又東の空より光計ほのめきたり。富士蒼天にひとしくして雪みどりをかくせり。唯それならむとおもふに。忙然として大空にむかへり。

けさみればはや慰みつふしのねにならぬ思ひもなき旅の空

廿三日には角田川のほとり鳥越といへる海村に善鏡といへる翁あり。彼宅に笠やどりして。閑林にあがめ置る金光寺に在宿し侍。同十九年元日に。

おさまれる波をかけてやつくはねの大和嶋根に春の立らん

五日立春。

春はけふたつともいはしむさしのや霞む山なき三吉野の里

同月の末。武藏野の東のさかひ忍岡に優遊し侍。鎮座社五條天神と申侍り。おりふし枯たる茅原を燒侍り。

契り置て誰かは春のはつ草に忍ひの岡の露の下もえ

ならびに湯嶋といふ所有。古松はるかにめぐりてしめのうちにむさしのの遠望かけたるに。寒村の道すがら野梅盛に薫ず。これは北野御神と聞えしかば。

忘れすは東風吹むすへ都まて遠くしめのゝそての梅かか

二月の初。鳥越のおきな艤して角田川にうかびぬ。東岸は下總西岸はむさしのにつゞけり。利根入間の二河おちあへる所に彼古き渡りあり。東の渚に幽村あり。西渚に孤村有水面悠々として兩岸にひとしく。晩霞曲江にながれ。歸帆野草をはしるかとおぼゆ。筑波蒼穹の東にあたり。富士碧落の西に有て絶頂はたへにきえ。すって野に夕日を帶。朧月空にかゝり帰雲行盡て四域にやまなし。

涙の上のむかしをとへはすみた川霞やしろき鳥の涙に

廿日過る比鎌倉山をたどり行に。山徑の柴の戸に一宵の春のあらしを枕とせり。

都思ふ春の夢路もうちとけすあなかまくらの山のあらしや

あくれば鶴岡へまいりぬ。靈木長松つらなり

て森々たるに。玉をみがける社頭のたゝずまゐ。由比の濱の鳥居。はるかにかすみわたりて誠に妙なり。

吹のこす春の霞もおきつすにたてるや鶴か岡の松風

かくて疊々たる巖をきり山をうがち。舊跡の雲につらなれる所を過て。三浦が崎のとをきなぎさを扁々として行に。蒼海のほとりもなき上に。ふじたゞ太虚空にひとりうかべり。東路のいづくはあれどけふこそ眞實ふもとよりなり出けんすがたもみえ侍るかとおぼえて。

春の色の緑にうかふふしのねはたかまの原も雪かとそみる

此浦のあしなといふ所の磯の上に平常和（東下野守常縁二男。）侍り。こゝにかさなれる岩を枕としておほくの浪のこゑをきゝあかす。

難波なるあしなはきけとかけもみす三浦かさきの浪ゝ下草

やよひ半になりぬ。常和にいざなはれて。扁舟に浦づたひし。又かまくらにいたり。建長圓覺兩寺巡見して。雪の下といふ所を分侍るに。門碑遺跡かずしらず。あはれなる老木の花。苔の庭におちて。道をうしなふかとみゆ。

春ふかき跡あはれなり苔の上の花に殘れる雪の下道

日暮てみなの瀬川近き所にやどり侍しに。巖頭波しきりにしてよるの雨をきゝあかす。

水あさき濱のまさこを越浪のみなのせ川に春雨そふる

是より三浦が崎にかへりて又姑洗の過るほどなるに。常和と同じく孤舟に棹さして江嶋へ詣で侍り。西のかたの渚ちかく下りて。はるかなる岩屋有。内に兩界の垂跡功德天まします。則こゝをも蓬萊洞といへる。深祕ありときこゆ。いはほの苔をしきて手向し侍りしに。嶋花。

ちらさしと江の嶋守やかさすらんかめの上なる山さくら花

其暮澳中より風はげしく海あれて。舷をこす浪大山をかづくがごとし。大悲の弘誓をたの

むこゑしきりにして。又光明寺のなぎさへよせ侍り。そのよも猶風雨やまず。

たのますよ三浦が崎の浪まくらさらでもあたの春のよの夢

翌日淨妙寺に入てみるに。臺あれて春の草にかたぶき。ひはだ朽て苔のみどりにひとし。今は少室一花開。五葉の遺薫もきぬるかとおぼゆるに。宿智のまゆ白き出てかたる。此山に杉の木だかき社は稲荷明神也。白狐あらはるゝ時は寺家に佳瑞あり。門外の叢祠は鎌を手向せり。往古の縁起うせて何の御神ともしらずといへり。さては此御社は大織冠の御鎮座也。やまなる鎮守は彼靈劔の鎌を治められし鎌倉山是なりとおぼえて。

つかとりし神もますなり杉のはのときかまうつむ山の麓に

極樂寺へいたるほど。いとくらき山あひに星月夜といふところあり。むかし此みちに星の御堂とて侍りきなど古僧の申侍しかば。

今も猶ほし月よこそのこるらめ寺なき谷のやみのともしび

又三浦がさきにこぎかへり。巖の浪の聲を枕として。いくよともしらずきゝあかす。

聞わびぬみうらがさきの岩たかき枕の下のうみのなみ風

雲にまぎれ浪にきゆるかと思へる大嶋をおもひやり侍り。

住人もありとこそきけ大しまの山もうきたる五月雨の空

五月の末伊豆の海よりかさなれる山湧々として。ふじの空までもひとつうみのやうにみえ侍。このころより漸夕立のけしきなり。

かさなれる雲わきかへりいつの海の山よりうかふ夕立の空

同じ比六浦金澤をみるに。亂山かさなりて嶋となり。青嶂そばだちて海をかくす。神靈絶妙の勝地なり。金澤にいたりて稱名寺といへる律の寺あり。むかし爲相卿。いかにして此一もとに時雨けむ山に先たつ庭の紅葉葉と侍りしより後は。此木青はかは玄冬まで侍るよし聞ゆる楓樹くち殘て佛殿の軒に侍り。

さきたゝは此一もとも殘らしとかたみの時雨青葉にそふる

六月の末角田川のほとりにて。遠村夕立。

雲わくるひかけの末も夏草にいろまの里やゆふ立のそら

同廿八日。むさしののうち中野といふ所に平重俊といへるがもよほしによりて。眇々たる朝露をわけ入て瞻望するに。何の草ばのするにも唯白雲のみかゝれるをかぎりと思ひて。又中やどりのさとへかへり侍りて。

露はらふ道は袖よりむらきえて草はにかへるむさしのの原

漸日たかくさしのぼりて。よられたる草の原をしのぎくる程。あつさしのびがたく侍りしに。草の上にたゞ泡雪のふれるかとおぼゆる程に。ふじの雪うかびて侍り。

夏しれる空やふしのれ草のうへの白雪あつき武藏のの原

ほりかねの井ちかき所にて。

そことなく野はあせに鬼紫もほりかれのゐの草はなられと

七日に鳩が井の里滋野憲永がもとにて。秋増戀。

きのふかは思ひし色のあさは野も木からしになる秋の夕暮

初秋の比。よふかき道をくるに。入間の舟渡りまでみをくる人あまた侍りしに。角田川の朝ぎりいづこをほとりともしらず。小舟の行ちがふかひの音のみ身にしみて哀に覺え侍しかば。彼翁かたへ申送り侍し。

おもかけそ今も身にしむ角田川あはれなりつる袖の朝霧

九月十三夜。白井戸部亭にて。松間月。

すみまさるほとをもみよと松のはの數あらはなる峯の月影

九月盡に長野陣所小野景賴が許にて。暮秋時雨。

誰袖の秋のわかれのくしのはの黑かみ山そまなくしくるゝ

十一月の末に上野のさかひ近き越後の山中石白上杉相摸守房定于時法名常泰旅所。といふ所へ源房政にたぐへて歸路をもよほすべきよし侍りしかば。白井の人々餞別せしに。山路雪。

かへるとも君かしほりに東路の山かさなれる雪やわけまし

廿七日。山雪にむかひて朝立侍。利根川をはる

かにみ侍りて。

ふりつみし雪の光やさそふらん涙よりあくるあまのとれかは

あくれば三國山を越侍るとて。木曾路の空も此かさなれる嶺よりつゞき侍らむとおぼえて。

ふみ分てなか〳〵みちや殘る覽雪にむもるゝきそのかけ橋

右北國記行以高井大隅守實尹本挍正

群書類從巻第三百三十七

紀行部十一

廻國雜記

道興准后

文明（後土御門）十八年六月上旬の頃。北征東行のあらましにて。公武にいとまのこと申入侍りき。をのをの御對面あり。東山殿（義政）ならびに室町殿（義尚）において數獻これあり。祝着滿足これに過べからず。翌日東山殿へ一首の瓦礫をたてまつる。

千さとまて思ひへたつなふしのねの煙の末に立別るとも

旅衣たつよりしほるむさしのの露や涙をはしめ成らん

御返し。

思ひたつふしの煙の末まてもへたてぬ心たくへてそやる

立かへる程をそ（またイ）たのむ武藏のの露分衣はるかなりとも

室町殿此御贈答を聞しめしをよび侍りて下されける。

思ひやれはしめてかはす言のはのふしの煙にたくふ物とは

御使をまたせてとりあへず。

ふしのねの雪も及はす仰きみる君かことはの花にたくへて

禪閤（房嗣）ことしは八十五にてまし〳〵けり。此度の行すゑさま〴〵とゞめさせ給ひけれども。我身すでに耳したがふ齡にをよび侍れば。行歩もいよ〳〵かなひがたし。かくていたづらにあかしくらさむこともそらおそろしく侍れば。嚴命に應じ侍らぬことのみ心ぐるしく侍れども。すでにあひ定侍るうへはちからをよばず。さるほどに馬のはなむけとて。骨肉みなみな來りあつまり給ふ。禪閤より使をたまは

りて。老屈のしきにて合期しがたく侍れども。あまりになごりもせちに侍れば。これまでみなみなの跡をしたひ侍るよしうけ給はりて。盃酌の席に出給ふ。やゝありて盃のひまによみて給ひける歌。

身は老ぬ又あひみんもかたければけふや限の別成らん

あはれさ肝にめいじて。満座の老少感涙にたへず。返歌すべきよし侍しかば。かの在中將が老母長岡にてのふるごとふと心にうかび侍れば。

君かため千世もといのるしるしあらはさらぬ別を神も憐め

同十六日早朝になか谷の蓬蓽をたち出て。大原越におもむきけり。とし月馴し柴の庵。しばしばかりの名殘さへ立わかるゝは心ぼそきを。あだしよのならひといひ。身すでに老後のことなれば。立かへり住居すべしともたのまれず。池の邊にたゝずみて。

住なれしこの山水のあはれわかさそはれ出る行ゑしらすも

大原までみなみなうちをくり來侍る。中に乘乘院法印經親、神明の拜殿にてわりごなど携侍りて。數刻興をもよほし侍りき。此社頭は伊勢にてわたらせ給ひけるとなん。西山の大原をおもひ出て。神殿に法樂し奉りける。

大原の神は天てるかけなからたのむはる日もおなし光りな

葛川を一見してよめる。

白露の玉まくくすのかつら川くる秋にしも我はかへらん

このひは朽木にとまりて。いつしかふるさとも遠ざかりて。われ人心ぼそく侍れば。

浮世をはわたりすてゝも山川や朽木の橋に行かゝりつゝ

これより若狹國小濱にいたる。曹源院といへる禪院に宿す。かねてより武田大膳大夫入道申つけられしとなり。かの寺は先年順禮の時も立よりけるよし申入あり。よくもおぼえ侍らず。爰に老僧侍り。いさゝか文才などあるよし見えければ筆にまかせて。

遠去二城門一成レ客來　嵩房何處擁二蘿苔一

曾遊二此地一都如レ夢　　老衲相迎攀二小臺一

翌日未明に出侍るあいだ。和韻を見るにをよばず。無念の至也。行印法印といへる法師侍り。專順法眼が同朋なり。いにしへ連歌の席にて度々逢侍りき。朽木より供し侍るが。善光寺參詣ののぞみ有となん。小濱にしばらく休て。波をながめてかの法印に申かけける。

かけ涼し立よる波の濱ひさき

まさご露けき夏のむらさめ　　行印法印

同じ國三方といへる所にて渺々たる海路をながめやりて。

あま小舟渡なかの涙に漕いてゝみかたの海を四方にみる哉

かくてこひの松原うち過て。うら見坂といへる所にて思つゞけける。

とはゝやなたか世に誰をうらみ坂つれなく殘る戀の松はら

此所々をうち過て。はたをりの池といへる所にやすみて。

蟬のはの衣に夏は殘れとも秋の名にたつはたをりの池

越前國敦賀につきけるに。浦のけしきおもしろく侍れば。しばしながめ侍りて。

はるは又たちそかへらん梓弓つるかの浦のおきつしらなみ

しらきどの橋といへる所にて里人に尋侍れどもこたふるものも侍らずして。

里の名もいさしらきとの橋はしら立よりとへは波そ答ふる

又おなじならびにたかぎの里といへる所に柳の侍りけるかげにわれ人すゞみて物がたりし侍りける間に。

里のなを名のるたかきの柳陰秋かせしのふ夕すゝみかな

加賀國にいたりたちばなといへる所に宿をかり侍りて。

旅立もさつきの後の身也けり我に宿かせ橘のさと

すはま川といひてそのすがたさながら庭などにつくりたるすはまに。すこしもたがひ侍らず。そのまはり四五町にもあまりぬらんか。奇妙なるすがた也。里人の申侍りしは相馬の將門作りたりしなど語り侍りき。信用にたらず。

すはま川誰すみすてし遺水の跡とかみまし庭の俤

これよりしきちいみなみうち過て。いぶり橋とてあやうくいぶせき橋に行かゝりぬ。

行暮てふめはあやうきいふり橋命かけたる波の上哉

同じ國もとおりを通り侍りけるに。人のきぬをとりけるを見侍りて。

たれかもとなりそめつらん喜を加ふる國のきぬのたてぬき

汐こしの松を尋侍りて。

年波の外にもたかき汐こしの松の昔そ汲てしらるゝ

ほとけの原といへる所を過侍るとて。

わかたのむ佛の原に分きてそをこなふ道のかひもしらるゝ

吉野川といへる所にいたりてよめる。

妹背山有とはきかす爰にしもよしのの河の名に流つゝ

白山禪定し侍りて三の室にいたり侍るに雪いとふかく侍りければ。おもひつゞけ侍りける。

しら山の名に顯はれてみこしちや峯なる雪の消る日もなし

下山の折ふし夕たちし侍りければ。

ゆふたちの雲はしられの雪けかな

これより吉岡といへる所にしばらくやすみて。

旅ならぬ身も假初の世なりけりうきもつらきもよしや吉岡

下しら山といひて本のしら山のふもとにつるぎといへる所侍り。そのかみ劒飛來しより此名をのこしけるとなん。

しら山の雪のうちなる氷こそ麓の里のつるき成けれ

こよひは矢矯のさとといへる所にやどりけるに。曉の月をながめて。

こよひしも矢はきの里にゐてそみる夏も末なる弓張の月

あくれば野の市といへる所を過行けるに村雨にあひ侍て。

風をくる一村雨に虹きえてのの市人はたちもやます

つばたといふ里にやどりけるに。すむ人もまれにてことのほかに閑素に侍りければ。

旅人の枕の上にをくたちのつはたの里はさひわたりけり

おなじ國高松といへる所に行くれて煙のたつをながめやりて。

すむ人のたのむ木陰やそれならん畑にくろゝ高松の里

これより能登國にいたり侍りて菅原といへる所にて。

ふしみにはあらぬ野山を分過て今宵かりねをすかはらの里

又杉の屋といへる所を通るとて。

待人の思ふしるしはみえれどもとはてはいかゝ杉のやの里

よつ柳といへる所に柳のあまた侍りければ立よりて。

里人の鞠の庭にはしめれどもいとなつかしきよつ柳かな

小金森といへる所にしばらく休て。

みちのくの山に花さくこかねもり此里までも種やまきけん

藤井といへる所は浦ちかき里也ければ波をみてよめる。

浦ちかきやとりをしめて春ならぬ藤井の里も波になれつゝ

くゐのやちといふ所にてよめり。

心からうきすまひにも馴ぬらん八千たひ何をくゐの里人

石動山に參詣して法樂し奉れる。

うこきなきみよに變りて石動の山とは神や名つけそめけん

かくて越中國にいたる。ながれの森といふ所にて。

年なかはなかれの杜に立よれは老の涙もその名なりけり

ねりあひといへるさとに野人ども物語しけるを見て。ある同行にざれごとうたを。

足よはき老の力にともなひておきなもこゝにねりあひの里

岩藏川といへる大河侍り。ふる里なる谷近きその名を思出て。

故郷の山にちかしとこひわたる岩くら川のかけもなつかし

大森といへる所をすぎけるに殘暑いまだ散じやり侍らねば。われ人木陰にすゞみとりて。

風はもりてる日はうとき大森の陰にたちよる初秋の空

かくて立山禪定し侍りけるに先三途川にいたりて思ひつゞけらる。

此身にて渡るも嬉しみつせ川さりとも後の世にはしつまし

翌日下山のついでにもろ〳〵の地獄をめぐりけるに。熱湯の躰火炎などとり〴〵にあさましかりければ。

しての山そのしなくや湧かへる湯玉に罪の數をみすらん

禪定するくとゝげて下向し侍る道にて。

都をはとなくこしちにかへる山ありとなくさむ旅の空かな

宮崎を立て。さかい川。たもの木。かさはみ。砥なみ。黒岩などいふ所をうち過。駒がへりといへる所にて。

行末をいそくとすれと跡にのみ心をかくるこまかへりかな

やまと川にてよめる。

漕舟のさほの山へは遠けれと名に流たる大和川かな

七月十五日。越後の國府に下着。上杉かねてより長松寺の塔頭貞操軒といへる庵をてんじて宿坊に申つけ。相摸守路次まで迎に來たり。七日逗留。毎日色をかへたる遊覽ども侍り。爰を立侍るとて二首の詠をのこしとゞむ。

千とせへんしるしをみせて此やとの軒端に高き松の村立

日かずへてなれぬる旅の中やともなこりは盡し都ならねと

府中をたちて長濱といへる所にやすみて。

行末の道をおもへは長濱の眞砂を旅のうき數にして

柏崎を過けるに秋かせいとはけしく吹ければ。

なしなへて秋かせふけは柏崎いかゝ葉もりの神にすむらん

あふみ川。かさ嶋などうち過てくじらなみといへる濱を行けるに。折ふし鯨のしほをふきけるを見て。

わきてこの浦の名にたつくしら波曇るうしほを風も吹也

やすだ。山むろ。みをけ。しぶ川。大・井。きおとしなどうち過て。うるし山をこゆとて。

初秋の露にぬるてふうるし山今一しほそ風も涼しき

壺池といへる里にしばし休て。ある人につかはしける誹諧うた。

あち酒をすゝむる人もなき宿に水のみわくや壺池の里

これよりくつぬきといへる里を過侍るとて。

我も又あしをやすめて立そよる水かふ駒の沓ぬきの里

ふくろふといへる里にてねざめにおもひつゞけける。

此里のあるしかほにも名のる也深き梢のふくろふの聲

あひまた。湯の原。池の原などいふ所を分行侍けるに。みちのほとりの おばなをながめやりて。

すむ水はありともみえぬ池の原尾花さはきて高き波かな

此原をうち過て。なぎなた坂といへる所をこえ侍るとて。又ある同行にいひかけつかはしける誹諧歌。

杖をたにおもしといとふ山越て薙刀坂を手ふりにそ行。

上野國大藏坊といへる山伏の坊に十日あまりとゞまりて。同國杉本といふ山伏の所へうつりける。道にからす川といへる川に鵜からすなどあひまじはりて侍りけるを見て。又誹諧。

とりもえぬ魚の心を耻もせてうのまれしたる烏川かな

大が松といへる所を過侍るとて。

名のみして宮木にもるゝ大か松ひく人なしに年やへぬらん

この所より信濃のあさまの嶽ちかぐ〳〵と見え侍ると聞しにもすぎて。その風情すぐれ侍りき。

今はよに烟をたえてしなのなる淺間のたけは名のみ立けり

杉もとに十日ばかり逗留し侍りき。八月十五夜淡雨茫々として。いとゞ旅店の物うさもひとしほのこゝちして。

身こそかく旅の衣に朽はてめ月さへ名をもやつす雨哉

この坊を立て宮の市。せしもの原。しほ川。しろいし。いたづら野。あひ川。かみ長川などさまざまの名所を行々て。おしまの原といへる所にやすみてよめる。

けふ爰におしまか原をきてとへはわか松しまは程そ遙けき

むさし野にて殘月をながめて。

山遠し有明のころひろ野かな

おなじ野をわけくれてよめる。

草の原分もつくさぬむさしののけふの限はゆふへなりけり

この夜はこの野にかりねして。色々の草花を枕にかたしきて。すこしまどろみ。夢のさめければ。

花散し草の枕の露のまに夢路うつろふむさしのの原

武藏のの草にかりねの秋の夜は結ふ夢うもはてやなからん

此野の末にあやしの賤の屋にとまりて雨をききて。

旅まくら都にとをきあつまやを幾夜か秋の雨になれけん

岡部の原といへる所はかの六彌太といひしものゝふの舊跡なり。近代關東の合戰に數萬の軍兵うち死の在所にて。人馬の骨をもて塚につきて。今に古墳あまた侍りし。しばらくゑかうしてくちにまかせける。

なきをとふをかへの原の古つかに秋のしるしの松風ぞふく

むら君といへる所をすぐるとて。

たが世にか浮れそめけん朽はてぬ其名もつらきむら君の里

淺間川をわたるとてよめる。

名にしおふ山こそあらめ淺間川行せの水もけふりたてつゝ

古川といふ所にて舟にのりて。

こかくれにうかへる秋の一葉舟さそふ嵐を川おさにして

河舟をこかのわたりの夕浪にさしてむかひの里やとはまし

なり田(かた)といへる所にてはじめてふじをながめて。

言のはのみちも及はぬふしのねをいかて都の人にかたらん

夕あけぼのにながめのかはれることを。

俤のかはるふしのね時しらぬ山とは誰かゆふへあけほの

かの嶽は遠く行にしたがひて空にもをよぶばかりに侍ければ。

遠さかりゆけはま近く見えて皃外山を空にのほるふしのね

下總國こほりの山といへる所に伊豆の三嶋を勸請し奉りて大社ましましけり。かの別當の坊にしばらく逗留し侍けるうちに歌など度々いひすてども。少々しるしをき侍ける。

尋來てこゝにみしまのおなし名を思ひそいつの國つ神かせ

ある夜皎わたるに士峰の雪嬋娟たりければ。

富士のねの麓に月は影しろし空に冴たる秋のしら雪

虫のね物すごき夜。ねざめがちにて。

かりねとふ草の枕の虫のねに催されてもなきあかしつゝ

ある夕つかた。はつかりの聲をきゝて。

なくれゐて聞こそわふれ初かりの都にいそく夕暮の聲

おなじとき發句。

かりなきて秋かせたかき雲路かな

色こき蔦の夕日に映じけるを見て。

色うすき秋の日かけは紅のなかめもかはるつたかつらかな

野外の萩やう〳〵ちりかたにみえければ。遠山には木々のこずゑ色づきわたりけるをみて。

のへの萩ちれはとやまの錦かな

旅館の萩をながめ侍りて。

萩みれはふるさとちかき軒端哉

かくてこほりの山を立いでてゆく道に葛のいとしげく侍りけるを見て。

わかかたに歸らんことも遠きののまくすうらやむ秋風の暮

又すゝきを分はべりて。

思ひいつゐ故郷人の心かとまねくおはなか袖もなつかし

おなじ野を分過けるにしをにといへる花を見て。

尋ねみんあたちか原のしろへかも此野にあへる鬼のしこ草

宮城野の萩とて人の見せければよめる。

みやきのの木のしたふしのかり枕まはき折しき獨かもねん

ある旅宿にて明がたに鴈のなきけるをきゝて。

しのゝめの横雲まよふ峯こえてともにたなびく天つ鴈かね

ある人すゝめ侍けるに。旅天月。

よな〳〵の月は都のかけなからやつるゝ袖におも變りして

夕鹿

我かたをこひつゝきけはさをしかの妻とふ聲もうき夕かな

旅店にて愁懷のあまり夜ふくるまで短檠に對して。

孤舘殘燈欲二五更一　暗蛩切々夢難レ成
故人記取二不平事一　日々寒垣想二洛城一

山をこえ過て浦ちかくながめやりけるに。遠景限なくみえ侍ければ。感興に堪ず。和漢兩篇口にまかせける。

客旅尙添雙鬢花　江山阻レ跡故人遐

新古今春上　後徳大寺左大臣
なこの海の霞のまよりなかむれは入日をあらふおきつしらなみ

孤帆明滅暮煙外　落日天邊雁陣斜
からろをす船を友とや聲をほにあけておちくる天つ鴈かね

上總國千種の濱といへる所にて色貝をひろひて。

野路つゝく千くさの濱のうつせ貝海さへ秋の色に出けり

櫻井の濱といへる所にて櫻貝をひろふとて。

春はさそ花おもしろく櫻井の濱にそ拾ふおなし名の貝

吉野郷といへる所あり。宗尊親王よしのの花をこゝにうつしてうへさせ給ふといひつたふ。

花さかり思ひやられてみよしのの櫻のもみちこれも名殘と

ふと。きさらづ。あづまなどいへる所をうち過るとて。思ひつゞけしこと口にまかせて誹諧。

爰にふと木更津の郷過れとも猶もあつまのうちとこそきけ

神野山といへる道場にまうでて。

なく鹿の野にも山にも聞ゆ也妻こひわふる秋の夕暮

安房國淸澄山にもうで。通夜し侍るあかつき。

曉のたれときはしもきよすみの海原遠くのほる山かな

東のかたへ下山し。天津といへる所にて。

昔もし雲のかよひち吹とちは乙女の姿今もみましを

まへ原といへる所にて。

まへはらの里のうしろの山おろし舟にもみちの錦つむ也

磯村といへる所は名にしおひていそづたひの村なれば。

海ちかく磯つたひゆくいそむらに村々みゆるあまの釣ふね

那古の觀音にまうで。ぬかづきをはりて。夕の海づらをながめやるに。寺僧のいで來て。あれ見給へ。入日をあらふ沖津白浪とよめるは此景也といへり。されどそれは津の國住吉郡なごの浦をよめるとかや。そのなごの浦に難波津をまもれる人の住しによりて。其浦を津守の浦といひ。又其子孫の氏によびて津守氏有とかや。今はなごの浦の所にさだかにしれる人なしとなむ。此歌いづちにしてよめるもしりがたけれど。寺僧のいふにまかせてしるす

もの也。まことに今も入日をあらふ沖つ波。眼前の景色えもいひがたし。

なこの浦い霧のたえまになかむれは夏も入日を洗ふ白波

こよひはこゝに通夜し。あくるあした名にしおふ野嶋が崎をみれば。朝ぎりこゝかしこに立消るさまたゞならず。

あまをふれみえつかくれつ朝あけの野しまか崎の霧の村々

かち山といへる所にて。

駒はあれとかちよりそゆくかち山の里にこはたそ思ひやらるゝ

河名といへる所にて里人の菜をあらふをみて。

つみためて洗ふ河なの里人よたかあつものの供へにやなす

此所より右の方にのこぎり山といへる山あり。峯の嵐に雲晴てあからさまに其嶺みゆ。段段有て誠にのこぎりの様になん侍れば。誹諧。

宮木ひく峯の嵐に雲はれてのこきり山はかゝりとそ見ゆ

是より舟にのりてみさきといへる所にあがりて。

あはれとも誰かみさきの浦つたひしほなれ衣旅にやつれて

浦川のみなとといへる所にいたる。こゝは昔頼朝卿の鎌倉にすませ給ふとき。金澤。榎戸。浦河とて三の湊なりけるとかや。

えの木戸はさしはりてみすうら川に門を並へてみゆる家々

鎌倉にて第三まで獨吟。

霧ふかしかまくら山のほし月夜
あさなく鶴か岡のまつかせ
葛の葉の色つく野澤水かれて

鳥はみといへる所を過行けるに日暮侍ければ。

さそはれて我もやとりにいそく也かへる夕のとりはみの里

九月九日。野を分つくして山にいたりけるに。菊いとおもしろく咲て感緒きはまりなし。重陽宴には菊を擬し侍りて。

けふは又のを分過て仙人となりてやきくの花をかさらん

長月のこゝのかされを思ひ出て衣にうつす菊のしら露

さのの舟ばしをよめる。

蜻蛉日記
しもつけ
や橋のふ
たらなあ
ちきなき
かけもう
かはぬか
かみとそ
みる

かよひけんこひちを今の世語りに聞こそわたれさのの舟橋

日光山にのぼりてよめる。又昔は二荒山といふとなん。

雲きりもをよはて高き山のはにわきて照そふ日の光かな

此山にやゝますげの橋とて深祕の子細ある橋侍り。くはしくは緣起にみえ侍る。又顯露に記し侍るべき事にあらず。

法の水みなかみふかく尋すはかけてもしらし山すけの橋

瀧の尾と申侍るは。無雙の靈神にてまし〱ける。飛瀧のすがためをおどろかし侍りき。

世々をへて結ふ契の末なれや此瀧の尾の瀧のしら糸

この山の上三十里に中禪寺とて權現まし〱けり。登山して通夜し侍る。こよひはことに十三夜にて月もいづくに勝れ侍りき。渺漫たる湖水侍り。歌の濱といへる所に紅葉色をあらそひて月に映じ侍れば。舟にのりて。

敷嶋の歌の濱邊に舟よせて紅葉をかさし月をみる哉

翌日中禪寺を立出ける道にかつちりしけるもみちの朝霜のひまに見えければ。先達しける衆徒長門の竪者といへるものにいひきかせ侍りける。

山深き谷の朝霜ふみ分てわかそめ出す下もみちかな

かくしつゝ下山し侍りけるに。黑髮山のふもとを過侍るとて。われ人いひすてどもし侍けるに。

ふりにける身をこそよそにいとふとも黑髮山も雪をまつ覽

おなじ山の麓にて迎とて馬どもの有けるを見て。

日數へてのる駒の毛もかはる也黑かみ山の岩のかけ道

又本坊坐禪院にかへりつき侍りて。さま〲遊覽あり。或夜時雨をきゝて。

越ゆかんおのへの雲もさきたちて山めくりする初時雨かな

軒ちかく瀧おち侍り。さながらねざめのしぐれに聞まがひ侍りければ。

山水の音なれさめの時雨にて老の泪はいつはりもなし

ある夜月いとおもしろかりけるに。別當坐禪院法印昌深かたよりよみて給ける。

さても猶思はぬ袖のかりねゆへこよひや都月の山さと

とりあへずかへし。

ことのはの光をそへてみる月によしや都の秋もしのはし

一山の老弱酒宴を興行して。兒わらは數輩あつまりて。色々曲を盡し侍りき。宴席終て。藤乙丸といへる少人休所へ禮に來りてしばらく物語し侍りてかへり侍りけるが。次の日いひつかはしける。

なとにそといひしもさそな相みての心盡しを誰かしらまし

藤乙丸かへし。

あひ見しは夢かとはかりたとれるを現にかへす言のはの末

ある夜又かの兒をとづれ侍りて。あまりに月のおもしろさにさそはれ侍るよし申て。しばし物語し侍けるに。一首よみ侍るべきよししゐて所望しければ。とりあへず。

月見つゝ思ひいてなは諸共にむなしき空やかたみならまし

なごりもけふあすばかりにて侍れば。更行をもしらずあそびけるに。五更の鐘すでに告わたりければ。歸りて長門の堅者して申をこせける。

いかにせん又たのみある世なりとも秋の別は悪ならめや

藤乙丸

かへし。

別路の露とも消ん時しもあれ秋やは人にとのみなけきて

そへてつかはしける歌。

忘めや一夜の夢のかり枕人こそかりに思ひなすとも

おなじ國宇津宮につき侍り。粉川寺といへる所に聖道所あり。かの坊にとゞまり侍りき。此寺の稱號いかなるゆへにかと思ひ侍りければ。紀伊國粉川寺をうつし侍るとなん。彼本寺門跡管領の在所なれば。ふしぎなる機緣にて侍よし申きかせて。短尺をつかはしける。

契あれや東路となく紀の國にあらぬこかはの寺に宿れる

ある夜きぬたの音を聞て。

れさめうき旅のよとこを思ひやれ衣をうつの宮の里人

この旅宿にて人々月のうたよみける中に。

めかれせす月にかゝるは心にて空に雲なき秋の夜半哉

宇津宮を立てきぬ川といへる所にてよめる。

もみち散山はにしきをきぬ川にたちかされたる波のあや哉

常陸國にいたりぬ。小栗といへる所に熊野御社おはしましけり。法施の序によみて奉る。

たちそひてまもる心の道なれやいつくにきてもみくまのの神

さくら川をわたり侍ければもみぢうつろひて波に映じけるを見てよめる。

秋の色にうつろひきても櫻川紅葉に波の花をそへつゝ

おなじ國山田慶城といへる山伏の坊にやどりてよめる。

めくり來てけふは吾妻のひたち帶結そへてや草枕せん

この坊に逗留の間。歌あまたよみける中に夕時雨といへる題にて。

もみち葉を染るのみかは夕時雨我さひしさも色まさりけり

又夜時雨といへる心を。

色みえぬ時雨のいとや山姫のよるの錦をなり亂すらん

九月廿三日。欲レ詣ニ築波山一疾風迅雨太矣。仍龜ニ居草廬一而口ニ號一絶一。

蕭條竟日鎖ニ柴門一　風雨似レ憐ニ吾脚跟一
還恨楓林斷ニ秋色一　明朝山上祭ニ吟魂一

翌日築波山に參詣し侍りけるに。初雪ふりてもみぢはうすくれなゐに見えければ。

いつれをか深し淺しとなかめましもみちの山のけさの初雪

神前にして詠じて奉りける。

さはりなくけふこそこゝにつくはれや神の惠のは山しけ山

まことにこのもかのもと詠ぜしもことはりにて。山々のもみぢたとへんかたも侍らず。道すがらくちずさびける歌。

築波山このもかのものもみち葉に時雨も繁き程そしらるゝ

みなの川はこの山のかげにながれ侍り。こひそつもりてと詠ぜし歌をおもひいでて。

築波ねのもみちうつろふみなの川淵より深き秋の色かな

又山に八重かさねといへる靈石侍り。いひすての發句。

きてそ見るもみちのにしき八重かされ

旅宿にて夕鹿といへることを人々によませ侍りける次に。

山陰や木のは時雨て暮る日に忍ひかれたるさをしかの聲

雁のわたりけるを聞てよめる。

萩か葉に有としらてや玉つさを翅にかけて渡る雁かね

曉虫といへることを。

きり〳〵すよはるねさめの有明に枕さひしき床の上かな

旅の宿さびしさのあまり。これかれ題をさぐりて歌よみけるに。鹿。

なるこには驚く鹿も妻戀のきつなになとかはなれさるらん

つくはねのふもとをたちて。他國へうつりける道にて。きくもみちおもしろき所にいたりて。

旅の空うつろひかはり行道に紅葉も菊もおりをしれとや

つくば川をわたりけるに。いさゝのはしを過とて。

わたりきてすゑたと〳〵し築波川いさゝの橋にかゝる夕暮

愛を過てうがひ川といへる所に紅葉盛にみえければ立よりて。

篝をはもみちそてらす鵜かひ川水すさましきせゝの秋風

ある野徑を分行けるに淺茅いとふかかりければ。

ふるさとの庭の淺ちもかくやとて分わふる野を哀とそみる

九月廿八日。稲穗の別當が坊にて湖水をながめて。

山色湖光秋又窮　鄕書曾不ㇾ託㆓飛鴻㆒
砧聲近報孤村晩　旅懐何堪憂患躬

しもつふさの國兒の原といへる所あり。いかなるゆへにかゝる名の所は侍るぞとさと人に尋ければ。この在所白波靑林横行の地たるによりて。ある少人のとをりけるに。衣裝など剝とるのみならず。剝へ殺害し侍りき。夫より此

をかやうに號し侍るよし語侍れば。今更のここちして。塚のほとりに立よりて。おもひつゞけて廻向し侍ける。

佳人落命藤原上　　蕣底古今空刻名
句恨骨秋泥三花影　浮生有限草兼葉

白濱に浮名たなかす兒の原戀うにすつる身とも聞はや

草の原さま〴〵枯わたりて。むしのね所々に殘りけるを。

虫のねの稀に成行のへみれは露はかれぬ霜の下草

或とき題をさぐりて歌よみけるに。菊。

葉にうつろふ菊の花はまたあらぬ種より咲かとぞ見る

又砧を。

秋風に人の夜さむをうちそへて砧にあやなねさめをそする

ある少人のもとより暮秋紅葉といへる題をたびて歌よみてよと侍りしかば。其使をまたせて。

歸るさを思ひたつ田の秋とてや山も錦のおりたしたらん

ある夕ぐれに膓なきて秋かせ物すごく吹なしければ。

雲路行かりかねさむみ秋更てゆふへの山に風わたりつゝ

國々あまた過行侍りけれども。ふじの高ね斗おなじさまに見え侍りしかば。

身にそふる佛なれやいつかたにゆけとも近きふしの高ねは

晴曇る時雨の空にむかひて旅客の涙に思ひよそへてよめる。

憂秋の涙の袖は際そなき時雨は空にはれくもれとも

九月盡にある旅宿にて。

いかにせむけふを限の秋ながらわが歸るさの行ゑしられは

旅の空我はいつとも白露をかたみに置てかへる秋かな

十月朔日よみて人につかはしける。

春といふ名にはふれとも神な月時雨てかすむ山端もなし

けふよりは春と冬とや神無月けにさためなき初時雨哉

けふ小春のしるしにや。いさゝかのどかに侍ければ。みな〳〵いなほの湖水にうかびて舟のうちにて酒など興行し侍りき。富士のね湖にうつれる心をみな〳〵よむべきよし申ければ。

水うみの波まにかけたやとしきて叉類ひあるふしを見る哉

稲穗をたちて行ける道にいろ〳〵の名所ども侍。いひ捨の發句歌などあまた侍りしかども。途中のことなれば記すにをよばず。あやしの橋といへる所にて。

川かせの渡る霧まにほのみえてあやしの橋の末そあやうき

岩つきといへる所を過るに富士のねには雪いとふかく外山には殘紅葉色々にみえければ。よみて同行の中へ遣しける。

ふしのねの雪に心をそめてみよ外山の紅葉色深くとも

淺草といへる所にとまりて庭に殘れる草花を見て。

冬の色はまた淺草のうら枯に秋の露をものこす庭かな

此里のほとりに石枕といへるふしぎなる石あり。そのゆへを尋ければ。中比のことにや有けん。なまさぶらひ侍り。むすめを一人もち侍りき。容色大かたよの常也けり。かのちゝ母むすめを遊女にしたて。みちゆき人に出むかひ。かの石のほとりにいざなひて。交會のふぜいをことゝし侍りけり。かねてよりあひ圖のことなれば。おりをはからひて。かの父母枕のほとりに立よりて。友ねしたりける男のかうべをうちくだきて。衣裝以下の物を取て一生ををくり侍りき。さるほどにかのむすめつや〳〵思ひけるやう。あなあさましや。いくばくもなきよの中に。かゝるふしぎのわざをして。父母もろともに惡趣に墮して。永劫沈淪せんことの悲しさ。先非におきては悔ても益なし。これより後の事樣々工夫して。所詮われ父母を出しぬきて見むと思ひ。ある時道ゆく人ありと告て。男のごとくに出たちてかの石にふしけり。いつものごとくに心得てかしらをうちくだきけり。いそぎものどもとらんとてひきかづきたるきぬをあげてみれば人ひとり也。あ

梅花無盡藏云河邊有柳樹蓋吉田之子梅若丸墓所也其川北白河人

やしく思ひてよく〳〵見れば我むすめ也。心もくれまどひてあさましともいふばかりなし。それよりかのちゝはゝすみやかに發心して。度々の惡業をも慙愧懺悔して。今のむすめの菩提をもふかくとぶらひ侍りけると語傳へけるよし。古老の人申ければ。

罪とかのくつろよもなき石枕さこそはおもき思ひなるらめ

當所の寺號淺草寺といへる。十一面觀音にて侍り。たぐひなき靈佛にてまし〳〵けるとなん。參詣のみちすがら名所ども多かりける中に。まつち山といふ所にて。

いかてわれ賴めもなかぬ東路の待乳の山にけふはきぬらん
しくれてもつゐにもみちぬまつち山落葉なときと木枯そ吹

あさちが原といへる所にて。

人めさへかれてさひしき夕まくれ淺茅か原の霜を分つゝ

おもひ川にいたりてよめる。

うき旅の道になかるゝ思ひ川涙の袖や水のみなかみ

かくて隅田川のほとりにいたりて。みな〳〵歌よみて披講などして。いにしへの塚のすがた。哀れさ今のごとくにおぼえて。

古塚のかけ行水のすみた川聞わたりてもぬるゝ袖かな

同行の中にさゞえを携へける人ありて。盃酌の興をもよほし侍りき。猶ゆき〳〵て川上にいたり侍りて。都鳥たづね見むとて人々さそひけるほどに。まかりてよめる。

こととはむ鳥たに見えよすみた川都戀しと思ふゆふべに
思ふ人なき身なれとも隅田川名もむつましき都鳥哉

やう〳〵歸るさになり侍れば。夕の月所がらおもしろくて。舟をさしとめて。

秋の水すみた川原にさすらひて舟こそりても月をみる哉

次の日淺草を立て。新羽といへる所におもむき侍るとて。道すがら名所どもたづねける中に。忍の岡といへる所にて松原の有ける陰にやすみて。

霜ののち現れにけり時雨をは忍ひの岡の松もかひなし

こゝを過て小石川といへる所にまかりて。

我方に思ひふかめて小石河いつなせにとかこひわたるらん

とりごえの里といへる所に行くれて。

暮にけり宿りいつくといそく日になれもれに行鳥越の里

芝の浦といへる所にいたりければ。しほやのけぶりうちなびきてものさびしきに。しほきはこぶ舟どもを見て。

やかぬよりもしほの煙名にそたつ舟にこりつむしはの浦人

此うらを過てあら井といへる所にて。

蘆ましりおふるあらゐのうちなひき波にむせへる岸の松風

まりこの里にてよめる。

東路のまりこの里に行かゝりあしもやすめすいそく暮かな

駒林といへる所にいたりて宿をかり侍るに。あさましげなる賤のふせやに落葉所をせき侍るを。ちとはきなどし侍りける間。たゝずみて思ひつゞけける。

つなかれぬ月日しられて冬きぬと又はをかふる駒はやし哉

新羽を立てかまくらにいたる道すがら。さまざまの名所どもくはしくしるすにをよび侍らず。かたびらの宿といへる所にて。

いつ來てか旅の衣なかへてまし風うらさむきかたひらの里

岩井の原を過るとて。

すさましき岩ゐの原なよそに見て結ふそ草の枕成ける

もちゐ坂といへる所にて。誹諧の歌。

行つきて見れともみえすもちゐ坂たゝ藁靴に足なくはせて

すりこばち坂といへる所にて。又誹諧歌をよみて人に見せ侍りける。

ひたるさに宿いそくとや思らん路より名のるすりこはち坂

はなれ山といへる山有。まことにつゞきなる尾上もみえ侍らねば。

朝またき旅立さとのをちかたに其名もしるきはなれ山哉

鎌倉中かなたこなた順見し侍りて。先やつやつを人に詣侍り。龜がゐのやつにてよめる。

幾千とせ鶴かなかへに伴ひてよはひあらそふ龜かゐのやつ

扇が谷にて。

秋たにもいとひし風な折しもあれ扇か谷は名さへすさまし

うつし繪の扇かやつやこれならん月はうな原雪はふしのね

さゝめがやつ。

霜さやくさゝめか谷のふしのまに一夜の夢も嵐ふく也

梅が谷。

冬枯の木立さひしき梅か谷もみちも花もおもかけそなき

うりが谷。

ひと夏はとなりかくなり暮過て冬にかゝれる瓜か谷かな

霧がやつ。

此里のふる井のもとの胡桃かやつおちはの後は汲人もなし

胡桃が谷。

住なれし鎌倉山のやまからやくろみか谷に秋をへぬらん

べにが谷をとをりて。化はひ坂を越とて。誹諧。

顔にぬるへにかやつよりうつりきて早くも越るけはい坂哉

鶴が岡の八幡宮に參詣し侍れば。傳聞侍りしにもすぐれたる宮たち也。まことに信心肝にめいじて尊くおぼえ侍る。抑當社別當祖師隆弁僧正經歷年久し。その階弟道瑜准后號をば大如意寺といひ。兩代彼職に補し侍りき。由緒無双なることを思ひ出て。神前に奉納の歌。

神もわか昔の風をわすれすは鶴かをかへのまつとしらなん

由井が濱にまかりて鳥居など見侍りて。しばらくみな／＼あそび侍りけるに。

朽のこる鳥居の柱あらはれてゆゐの濱へにたてる白浪

このついでに建長圓覺以下の五山を順見し侍りて。是より瀨戸金澤といへる勝地の侍るを尋ゆくに。瀨戸の沖に漁舟あまた見えけるを。

よるへなき身のたくひ哉波あらき瀨戸の汐あひ渡る舟人

磯山づたひ。殘のもみぢ。見所多かりければ。

冬されはせとの浦はのみなと山殘しほみちて殘るもみちそ

金澤にて時宗の庵の侍りけるに立よりて茶を所望しけるに。庭に殘菊の黄なるを見てよめる。

誹爰にほりうつしけん金澤や黄なる花さく菊の一本

この在所に稱名寺といへる律院侍り。ことのほかなる古所にて。伽藍などもさりぬべきさ

まなる所々順禮し侍けり。三重の塔婆にまうでけるに老僧に行あひぬ。この塔の由來などたづねければ。これにこそ楊貴妃の玉のすだれ二かけ安置し侍れ。我はからひにて侍ましかば。一見させ侍るべき物をとて。懇切なる芳志ぞ見え侍りき。既に下向せんとしけるに。この僧いろ〳〵に思案して申やう。しばらくあひまち侍れ。住寺に申こゝろみんとて僧立入ぬ。やゝありて立歸りていふ樣。此玉すだれ當寺の靈寶として毎年三月十五日に取出すよりほかにはかたく禁制し侍ども。拙老經廻の義。前後其例有がたく侍れば。衆僧談合し侍りて。一見をゆるし侍るべきよし申す。まことにふしぎなる機縁なり。簾の長さ三尺四寸ひろさは四尺ばかりにて。水精のほそさ世のつねの簾よりも猶ほそく。かたちは見え侍らず。玉妃のそのいにしへに九花帳に掛侍りけんことなど思ひやり侍れば。千古の感緒今更肝に銘じて。皆人袖を濡し侍き。

遠き世のかたみを殘す玉簾思ひもかけぬ袖の露哉

藤澤の道場。聞えたる所なれば一見し侍き。ある寮にて茶を所望し侍り。しばらくやすみけるに。池にもみぢのちりけるを見て。

澤水もかけは千いろの木のはかな

道場の前にふりたる松に藤のかゝりければ。

紫の色のゆかりの藤さはにむかへの雲をまつそ木たかき

こゝをたちて小田原といへる所へまかりける道に。花水川といへる河をわたりて。

吹とみえちるとみゆるや風わたる花水川の波のしら玉

大磯の宿といへる所はいにしへとらといひける好色のすみける所となん。ある同行にたはぶれに申きかせける。

今は又とらふすのへとあれにけり人は昔のおほいその里

鳴たつ澤といふ所にいたりぬ。西行法師こゝ

にて。心なき身にもあはれはしられけりと詠ぜしより。此所をかくは名づけるよし里人語り侍りければ。

哀しる人の昔を思ひ出て鴫たつ澤をなく／＼そとふ

梅澤の里を過侍るとて。

旅衣春まつ心かはられは聞もなつかし梅さはのさと

まりこ川にて。誹諧。

鈴かけの揺りをあけて鞠子川おひつなかいつけふは暮さん

小田原につき侍れば早川の浦とて。水上は大河にて海邊につゞきたるによりて。かやうに申侍るとなむ。

末となく流出たるはや川のうらや千尋の波路成らん

一夜この所にとゞまりて。旅泊の愁緒かへりてその興も多かりけり。夜もすがらまどろまんひまも侍らざりければ。

あしのやは波を枕にしきたへの床には夢のたちもかへらて

これより箱根三嶋などへ參詣せんとて。風祭の里といへる所にて渡し舟さしよせけるとき。

舟出せむみなと江ちかき里の名もけに白波のかさまつり哉

はこね山に行くれて。今夜は社參にをよばず。翌朝まうでて落葉を見て。

こからしの錦をたゝむ箱根山あけて見るにそもみち成ける

嵐ふくおのへの紅葉散みたれ錦をたゝむ箱根山かな

かくてみしまにまうでて。

波たゝぬみよにと祈る三嶋江のあしてふことをはらへ神風

矢たての杉とて大木あり。軍陣へ出る武士ども。この木に矢を射たてて吉凶を見侍るよし傳ければ。

ものゝふのためしにひける梓弓やたての杉やしるし成らん

あしたか山をながめて。

浮雲のあしたか山ははやけれとなつめる駒そ進むともなき

かつら山を越侍れば。いづれの木ずゑも落葉して。物さびわたり見えければ。

冬枯に名のみ残てかつら山まさきもつたも色そ稀なる

すはま口といふよりふじのふもとにいたりて。雪をかきわけて。

よそにみしふじのしら雪けふ分ぬ心のみちを神にまかせて

富士のむら山とて大嶽の麓に侍り。所々にもみぢの殘れるをながめて。

高ねには秋なき雪の色さえて紅葉ぞ深きふじの村山

田子のうらをはる〴〵とながめやりてよめる。

千里よりちさとにつゝくふじのねの雪の麓や田子の浦浪

ふじのなる澤をよめる。

久かたの天の川せの聲なれや雲まにむせぶふじの鳴澤

みほの入うみをながめ侍りて。

浮雲のみほの入うみ見渡は松のうへこす沖つしら浪

うき嶋が原をながめ侍れば。松原遠く暮かゝりて。やう〳〵月すみのぼりければ。

たちつゝく松のはこしの波分て月のみ舟も浮嶋か原

あしがら山をこゆとてよめる。

足柄のやへ山越てなかむれは心とめよとせきやもるらん

やまひこ山にて。

こたへする人こそなけれあし曳の山びこ山は嵐ふく也

さきのたび渡りける鞠子川を又とをるとて。誹諧。

まりこ川又わたる瀬やかへり足

やはたといへる里に神社侍り。法施のついでに。

あつさ弓やはたをこゝにぬかつきぬ春は南の山に待みん

つるぎ澤といへる所にてこほりを見てよめる。

此ころは水さびわたれるつるぎ澤氷しよりぞ名は光ける

簑笠の森とて社頭まし〳〵けり。しばらく法施侍りて。

天か下まもらん神のちかひとや笈にきやとるみのかさの杜

ふたつはしといへる所を過侍るとて。

おほつかな流もわけぬ川水にかけならへたるふたつ橋哉

宿二相州大山寺一。寒夜無レ眠。而閑寂之餘。和漢兩篇口號。

莫レ管何堪雪後峰　山隈無レ舍倚二孤松一
可レ憐半夜還レ郷夢　一杵安驚古寺鐘

わかかたなしきしのへとも夢路さへ通ひかれたる雪のさ筵

北山を立出て靈山といふ寺にいたる。本尊は藥師如來にてまします。誹諧歌をよみて同行の中へつかはしける。

釋尊のすみかと思ふ靈山に藥師佛もあひやとりせり

日向寺といへる山寺に一宿してよめる。

山陰や雪氣の雲に風さえて名のみ日なたときくもたのます

熊野堂といへる所へ行けるに小野といへる里侍り。小町が出生の地にて侍るとなん。里人の語り侍れば。うたがはしけれど。

色みえて移ろふときくいにしへの言葉の露か小野の淺ちふ

半澤といへる所にやどりて。發句。

水なかは澤へなわくやうす氷

名に聞し霞の關を越て。これかれ歌よみ連歌など言捨けるに。

吾妻路の霞の關にとしこえは我も都に立そかへらん

都にといそく我なはよもとめし霞の關も春な待らむ

此關をこえ過て。戀が窪といへる所にて。

朽はてぬ名のみ殘れる戀かくほ今はたとふも契ならすや

ある人のもとにまかりてあそび侍りけるに。題を探て三十首歌よみ侍りけるに。深夜寒月。

春秋にあかしなれぬる心さし深き霜夜の月そしるらん

松雪夕深

嵐さへうつもれはてゝふる雪に松のしるへもなき夕かな

思不言戀

さすか又かくとはえこそ岩こすけ下に亂てわふとしらなん

むねをかといへる所をとをり侍けるに。夕の煙を見て。

夕けふりあらそふ暮を見せてけりわか家々のむね岡の宿

ほりかねの井見にまかりてよめる。今は高井戸といふ。

俤そかたるに殘るむさしのやほりかねの井に水はなけれと

昔たれ心つくしの名なとめて水なき野へなほりかねのゐそ

やせの里はやがて此つゞきにて侍り。

里人のやせといふ名や堀かねの井に水なきをわひて住らん

これよりいるま川にまかりてよめる。

立よりてかけをうつさは入間川わか年波もさかさまにゆけ

此河につきてさま〳〵の説有。水逆にながれ侍るといふ一義も侍り。又里人の家の門うちにて侍るとなん。水のながるゝ方角案内なきことなれば。何方をかみ下とさだめがたし。家家の口は誠におもてには侍ず。惣じて申かよはす言葉などもかへさまなることども也。異形なる風情にて侍り。佐西の觀音寺といへる山伏の坊にいたりて四五日遊覽し侍る間に。瓦礫ども詠じ侍る中に。

南歸北去一季闌　露宿風飡總不ㇾ安
贏得行唫乘㆓詩景㆒　千峯萬壑雪團々

くろす川といへる川に人の鵜つかひ侍るを見て。

岩かれにうつろふ水のくろす川うのゐる影や名に流けん

故郷のことなど思ひ出侍りて。曉まで月にむかひて。

吾郷萬里隔㆓音容㆒　一別同遊夢不ㇾ逢
客裡斷腸何時是　西山月落曉樓鐘

さゝいをたちて武州大塚の十玉が所へまかりけるに。江山いくたびかうつりかはり侍りけん。其夜のとまりにて。

山攀㆓峻險㆒海波瀾　到處多其行路難
疎屋終宵風雪底　凍雞喚ㇾ夢月西寒

あるとき大石信濃守といへる武士の館にゆかり侍りてまかりてあそび侍るに。庭前に高閣あり。矢倉などを相かねて侍りけるにや遠景すぐれて。數千里の江山眼の前に盡ぬとおもほゆ。あるじ盃を取出して。暮過るまで遊覽しけるに。

一閑乘ㇾ興屢登ㇾ樓　遠近江山分幾劃
落鴈叫ㇾ霜風颯々　白沙翠竹斜陽幽

十玉が坊にて人々に二十首歌よませ侍るに。

閑庭雪

跡いとふ庭とて人のつれなくはとはぬ心の道もうらみし

霞妨夢

ふしわふる笹のしのやの玉霞たまさかにたにみる夢もなし

年内待梅

春かまつ心よりさく初花をいつか冬木の梅にうつさん

別後切戀

消にけるたまの行ゑとけさはみよ別し君か道芝のつゆ

河越といへる所にいたり。最勝院寺といふ山伏の所に一兩夜やどりて。

かきりあれはけふ分つくす武藏のの境もしるき河越の里

この所に常樂寺といへる時宗の道場侍る。日中の勤聽聞のためにまかりける道に。大井川といへる所にて。

打渡す大井河原の水上に山やあらしの名をやとすらん

此さとに月よしといへる武士の侍り。いさゝか連歌などたしなみけるとなん。雪の發句を所望し侍りければ。言つかはしける。

庭の雪月よしとみる光かな

これにて百韻興行し侍りけるとなむ。これより武士の舘へまかりける道に。うとふ坂といへる所にてよめる。

うとふ坂こえて苦しき行末をやすかたとなく鳥の音もかな

すぐろといへる所にいたりて名に聞し薄など尋てよめる。

旅ならぬ袖もやつれて武藏野やすくろの薄霜に朽にき

又野寺といへる所爰にも侍り。これも鐘の名所也といふ。このかねいにしへ國の亂れによりて土のそこにうづみけるとなん。そのまゝほり出さゞりければ。

音にきく野寺をとへは跡ふりてこたふる鐘もなき夕哉

此あたりに野火とめのつかといふ塚あり。けふはなやきそと詠せしによりて。烽火たちまちにやけとまりけるとなむ。それより此塚をのびとめと名づけ侍るよし。國の人申侍けれ

ば。

わか草の妻もこもらぬ冬されに聽てもかるゝのひとめの塚

これを過てひざおりといへる里に市侍り。しばらくかりやに休て。例の誹諧を詠じて同行にかたり侍る。

商人はいかて立らん膝折の市に脚氣をうるにそ有ける

ある所に一宿し侍けるにたて侍ける屛風扇盡しにて侍り。そのうちにほねばかり書たる扇侍りけり。そのうへに書て置侍る。

破扇本來非₂破扇₁　銀錢工有ㇾ飾₂丹青₁
今何零落只殘ㇾ骨　見此人間生滅形

ある僧和韻とて後日に人の見せ侍りける。

取₂破扇₁猶ㇾ見₂玉扇₁　從來正色又非ㇾ青
雖₂今茲殘骨零落₁　豈比₂人間八苦形₁

或時旅宿にて二十首の歌みな〳〵よませけるに。曉更雪。

草も木もわかまたしらぬ種なから花に明行しのゝめの雪

雪中鷹狩

ふりまかふ雪のの原にたつ鳥はしらふの鷹に身をや捨なん

池水鳥

池水につかはぬなしや友とみてかたわれ月の影に鳴らん

契二世戀

沈むへき後をもしらてみつせ川水もらさしと契るはかなさ

ある夜故郷の人を夢に見侍りて。さめてのちなごりおほかりければ。

客牀夢覺故人歸　空夜悽然獨濕ㇾ衣
不ㇾ識何期共底日　洛陽千里信音稀

十玉が坊にて三十首の歌詠侍りけるに。冬地儀。

をしなへて草木にかはる色もなし誰かは六の花とみるらん

月前雪

すむ月のみふれしつかによわたるや千里晴行雪の白濱

浪上千鳥

網人のうけのつなてをよそにみて千鳥も友をひく波路哉

初尋緣戀

たよりふく風になひかは初尾花ほのめかしつゝいさ心みん

おなし宿坊にてよもすがら爐邊に嘯吟して。

寒燈挑盡夜沈々　獨臥二空牀一思不レ禁
爲レ我詩神如レ有レ感　松風生レ砌助二愁吟一

雪のあした。ある所の高閣にのぼりて偶作。

危樓獨上百花鮮　交友無レ憐詩酒筵
此地逍遙似二何處一　亂山疊嶂雪嬋娟

十玉が同宿十仙といへるもの。連歌に數寄侍りて。切々に興行し侍りけるとなん。ある時發句所望しければ。

待日のみ山につもりて雪をそし

人々十五首のうたよみ侍りけるに。河千鳥。

はまな川や風さえぬらん行かへり氷をつくるさよ千鳥かな

懸樋氷

柴の戸ははや出かての冬されにかけひの水も氷とちけり

爐火似レ春

うつみ火のはいかきわけて向ふよは春の光を手に任せつゝ

依レ涙顯戀

せきかぬる我衣手の涙ゆへ人のうきなも流やはせむ

山海眺望

わたつ海の波の千里を隔てきて山にもみるめからぬ日はなし

旅天歳暮。いつしか引かへたる式にて。雪月の夜。寒梅に對して偶作。

歳云晩急若レ吾何　白髪蒼顔愁又加
風雪還如レ慰二旅懐一　野梅興レ月影横斜

ところ澤といへる所へ遊覽にまかりけるに。福泉といふ山伏。觀音寺にてさゝえをとり出しけるに。薯蕷といへる物さかなに有けるを見て。誹諧。

野遊のさかなに山のいもそへてほりもとめたる野老澤かな

この所を過てくめ／＼川といふ所侍り。里の家々には井なども侍らで。たゞこの河をくみて朝夕もちひ侍となん申ければ。

里人のくめ／＼川とゆふくれに成たは水はこほりもそする

ある夜。ちご若しゆなど隣國よりしるよしありてとぶらひ來侍りて。酒宴のひまに二十首の歌すゝめ侍る中に。

樵路雪
おりたかむ心を賤かたのますは拾ふにたへし雪のした柴

深夜寒月
更行はなかれぬよはもなき月のこほれる影そ人たのめなる

惜二歳暮一
老のかすそはて春まつ身なりせはなにかは年の暮を慕はん

祈不レ逢戀
つれなしと人をはなとかゆふしての我に靡かぬ神や恨みむ

述懐涙
うき身にはともなふ人もうとき世に忘れす袖をとふ涙かな

ある江山を過行けるに。遠村に鐘のひゞきて。つとめの聲かすかに聞えければ。

西泊東漂分二幾州一　天涯流落履吟遊
疎鐘遙度野村晩　淸梵聲殘江寺秋

閑緒を慰んがために夜坐して十五首の歌よみ侍けるに。

宿鳥驚レ雪
月にたにおとろく杜の村からすれくらの雪に聲さはくらし

澤畔水鳥
あしかもの靑羽は霜につれなくて澤へのみくさ枯も殘らす

契不レ來戀
契しも今はかひなく更過て鐘より後は我それなく

社頭松
すみよしの神代も遠きことのはの盡せぬ種や松となるらん

ある人旅天の鄙懐を一絶吟じ侍るべきよし所望しければ。扇に書てつかはしける。

一別長天西又東　殘生蹤跡轉飄蓬
傍二山臨一レ水勞二吟歩一　詩肺辛酸難レ得レ工

これかれ爐下にあつまりて閑吟のついでに。

野徑乾草。
かけろふのをのの冬枯見渡はあるかなきかの雪のした草

從レ門歸戀
うしつらし眞葛にとつる松の門跡吹おくる袖のなひかせ

鶴翔レ天
澤へより雲ゐにのほるあしたつの聲もしられて高き空かな

舊里の音信もなきことを述懐して。つれ〴〵

のあまりに。寒梅をたづねにまかりて。ある夕暮月に乘じて。

冷衣步レ月出ニ寒村ー　幽處探レ梅風雪昏
縞信不レ臻春信到　朧前惆悵憶ニ中原ー

武州大つかといへる所に住侍りける時。近衞前関白殿下より初て御書到來し侍り。これをひらきて一度はよろこび。一たびは戀慕のうれへにしづみて。

從ニ東レ君別ニ始看レ書　異國天涯千里餘
忽憶ニ歸期ー涙先落　待ニ春遊子數ニ居諸ー

連日雪いたくふり侍りければ。野遊の興さへかなひ侍らで。いとゞ都のことゞもおもひやりて。

向來投レ錫掩ニ幽扉ー　平野險崖片雪飛
想見舊庭殘臘底　記レ春草木記レ吾非

越年の式。右にいへるごとくためしなき有さまども也。さるからいとなむこと侍らぬのみ心やすく侍りけり。早梅をもてあそびて。春のいたれることをおぼえ侍るばかり也。

歲晏無レ營旅客情　在ニ身寒餓ー憶ニ華京ー
柴扃半掩夜來雪　一點梅開使ニ我驚ー

たき火のもとにて十五首の歌よみ侍けるに。

跡屋聞レ霰。

ぬる玉は又もかよはで終夜れやもるあられ枕もるなり

寄レ琴戀

ひく琴にわかれをそへてたくへやる風は心の松よりそ吹

寄レ夢戀

人しれぬ枕のしたの海河にかけてかひなき夢のうき橋

濱邊旅泊

夢そなきもしほの草の枕より跡より波のあらき濱へは

老後懷舊

見し人のなきは、もりのうらめしく殘るかひなき老の波哉

ある時故鄕にあまた侍る連枝のことなどおもひやりて。

雲路隔レ蹤鴻鴈行　他鄕何耐レ想ニ家鄕ー
暗香吹斷故園雪　唯有ニ梅花似ニ洛陽ー

春色漸く搖ぎ。いづくも風まつをくれる日。その興多く侍れども。更に詩人墨客の是を賞する類ひ侍らぬことのみ念なくて。

邊塞曾無二風騷人一　窓梅牆柳獨其春
爲レ誰黃鳥出二幽谷一　淑氣迎レ晴一曲新

これも骨肉のことゞもゆかしくおもひやりて。

野水海漂鴻鴈影　天風頻動脊令枝
春來共會知歸路　舊里山花落後時

正月朔日試筆の歌。

あつまよりけふたつ春は都にて花さく比そ我をまちえん

今朝雪太降。祝二豐年之嘉瑞一。裁二短篇一章一矣。

靑陽朔旦日　瑞雪示二豐年一
料識萬邦土　歡娛正泆然

おなじき六日。雪いさゝか融し侍りければ。むさし野に出て。わかなをもとめて。

むさしのにけふつむわかな行末の限しられぬよの例かも

此野よりかへるとて馬上にてある同行に申かけける。

のる駒に武藏鐙をかけぬれはさすかに名ある野にゝなつます

ある所にまかりて一兩日すみ侍けるに。山ふかき所なれば。鶯も花もいまだ春をしらざりければ。

寒鶯幽谷棲二吾家一　一曲朝來出二靄霞一
簷外厭梅半離雪　何時乘レ月見二横科一

武藏野に出て酒など飮て遊びけるに。はじめて雲雀のあがるをみて。

若草の一もとならぬむさしのにおつる雲雀も床まよふらん

あさましげなる田夫の屋に一兩日とまり侍りけるに。野壤草席などいひしすがたなりければ。感緒に堪ず口にまかせける。

吾此幽棲似二謫居一　從二渭城別一絕二音書一
淡雲流水隨二行處一　白髮二黃粱一手煮レ蔬

旅宿に梅の咲たりけるを一枝手をりてよめる。

むめかゝをやとすのみかは春風の都をうつす袖とこそなれ

餘寒ことのほかに侍りけるあした。鶯のなけるを聞て。

花ゆへに谷の戸いでし鶯も梅も雪にや冬こもるらん

武州に山家の勝地侍り。まかりて十日ばかり逍遙し侍りけるに。ある夜筆にまかせ侍りし。

一句此地上㆓遊軿㆒　雲水森然山有㆑靈
殘夜無㆑眠聽㆓春雨㆒　蕭々深院短檠青

次の夜雨散じて月いとおもしろきに。軒ちかく梅のかほりければ。和漢第三まで獨吟。

まくらとふ梅に旅ねの床もなし
月引古綿春
山となくかすむかたより雪消て

翌日雨にふりこめられて。野遊の興もかなひ侍らざりければ。つれ〴〵となかめくらし。花鶯を友として口ずさみける。

旅亭春雨日如㆑年　埛野逍遙絕㆓往還㆒
贏得嘯吟職間緒　黃鸝交㆑語間㆓詩筵㆒

又の日雨はれて雪になりければ。霞たち消て

餘寒はなはだしく侍りければ。

淡雪のふりさけみれは天の原消て跡なき朝霞かな

十玉が方より紅梅の色こきをはじめて見せければ。

こゝろさし深くそめつゝ眺むれは猶くれなゐの梅そ色そふ

かの老僧扇の贊を所望し侍りき。かの繪に。山路に雲霧を分侍る行人橋に行かゝりたる所。

同遊相引歩徐々　雲霧阻㆓山前路㆒虛
獨木橋邊人不㆑見　松間鐘動夕陽初

おなじ心を和にて書そへ侍ける。

山もとの村の夕暮こととへはまた程遠し入あひの聲（かね）

野遊のついでに大石信濃守が館へ招引し侍りて。鞠など興行（しい）にて。夜に入ければ。二十首の歌をすゝめけるに。

初春霞

かさならぬ春の日數を見せてけりまた一重なる四方の霞は

歸雁幽

霞つゝしはし姿はほのみえて聲より消る雁の一つら

浦春月

もしほやく浦はの煙つらき名を霞てかくせ春のよの月

夢中戀

さめて社思ひのたれと成にけれかりそめふしの夢のうき橋

後朝戀

かきやりし涙の床の朝れかみ思ひのすちは我そまされる

大石信濃守父の三十三回忌とてさま〲の追修をいたしけるに。聞をよび侍りければ。小經を花の枝につけてをくり侍とて。

散にしはみそちみとせの花の春けふこのもとにとふを待覽

むさしの末に濱さきといへる里侍り。かしこにまかりて。

武藏野を分つゝゆけは濱さきの里とはきけと立波もなし

此ほどなが〲住なれ侍りける旅宿をたちて甲州へおもむき侍りけるに。坊主のことのほかになごりをおしみ侍りければ。しばらく馬をひかへてよみつかはしける。

旅立てすゝむる駒のおしなみもなれぬる宿にひく心かな

かくて甲州にいたりぬ。岩殿の明神と申て靈社まし〲けり。參詣して歌よみて奉りける。

あひかたき此岩との〻神やしろ世々に朽せぬ契ありとは

猿橋とて川の底千尋にをよび侍るうへに。三十餘丈の橋をわたして侍りけり。此橋に種々の說有。昔猿のわたしけるなど。里人の申侍りき。さることありけるにや信用しがたし。此橋の朽損の時はいづれに國中の猿飼どもあつまりて勸進などして渡し侍るとなん。しかあらばその由緒も侍ることあり。所がら奇妙なる境地なり。

名のみしてさけふもきかぬ猿橋のしたにこたふる山川の聲（をとイ）

おなじ心をあまた詠じ侍りけるに。

谷深きそはの岩ほのさる橋は人も猶なわたるとそみる

水の月猶手にうときさるはしや谷は千ひろのかけの川せに

此所の風景さらに凡景にあらず。すこぶる神仙逍遥の地とおぼえ侍る。

雲霞淡々渡㆓長梯㆒　四顧山川眼易迷

吟歩讒令疑入峽　溪隈殘月斷猿啼

おなじ國はつかりの里といへる所を過侍りける。折ふし歸鴈の鳴けるを聞て。

今はとて霞を分てかへるさにおほつかなしやはつかりの里

かし尾といへる山寺に一宿し侍りければ。かの住持のいはく。後の世のため二首を殘し侍るべきよし。頻に申侍ければ。立ながら口にまかせて申つかはしける。かし尾と俗語に申ならはし侍れども。柏尾山にて侍るとなん。

かけたのむ岩もと柏をのつから一よかりれに手折てそしく

花藏坊といへる山伏の所に十日ばかりとゞまりけるに。武田刑部大輔禮に來り侍りき。さかづきとり出てしばらく遊覽し侍りければ愚詠を所望しければ。翌日使をつかはすついでに。

消のこる雪のしられを花とみてかひある山の春の色哉

又此國のしほの山。さしでの磯とてならびたる名所侍りければ。

春の色も今一しほの山みれは日かけさしての磯そかすめる

此二首をつかはし侍りき。其後さしでの磯にて鶯を聞てよめる。

はる日影さしていそくかしほの山たるひとけてや鶯のなく

宿坊の軒に梅いとおもしろく咲かほりて。月かげおぼろなる夜もすがら。かりねの夢も忘はてゝ。

梅かほり月かすむ夜の旅まくら夢に都をなにか忍ん

武田が舘に梅あまた侍り。宿所へのことははばかり有とて。祖母の比丘尼の寺へ招引し侍りて。さまぐの風情をこらし侍りき。此あたりに菊嶋といへる名所侍り。一首所望し侍しかば。

咲匂ふ花の春風うらやみて秋をよそにもきくかしま哉

けふのみちに笛吹川といへる川侍り。馬上にてよめる。

春風に岸なる竹も音そへぬふえふき川の波のしらへに

おなじつゞきに花鳥の里といへる所を過侍るとて。

色にそみ聲にめてつゝやすらひてなかき日くらす花鳥の里

是より七覺山といへる靈地に登山す。衆徒山伏兩庭歴々とすめる所也。曉更にいたる迄管絃詩宴興をつくし侍りき。宿坊の花やう〳〵咲そめけるを見て。

つほみ枝の花も折しるこの山に七のさとりひらきてし哉

翌日此山を出て同じ國吉田といふ所にいたる。ふじのふもとにて侍りけり。今夜は二月十五日。いとかすみてふじのねさだかならざりければ。

きさらきやこよひの月の影なからふしも霞に雲隱して

かた柳といへる所をとをるとて。

一しほのみとりになひく糸はけに春のくるてふかた柳かな

道すがら古郷の花を思ひやりて。

あつまちの春をしたはゝ故郷の花は我をや恨はてまし

すくものわたりといへる所を行侍ける。朝がすみいとふかくなびきあへるを見て。

里人の夜はにたく火の煙かとすくものわたりけさ霞つゝ

三月二日。とね川。青柳。さぬきの庄。舘林。ちづか。うへのの宿などうち過て。佐野にてよめる。

いにしへの跡をはとをくへたてきて霞かゝれるさのの舟橋

宇津宮慈心院といへる聖道所に。花あまた侍り。人々さそひ侍りければ。社參のついでに門外まで見やり侍けり。いと尋常なるすまゐにて侍り。児などのはづれみえければ。ゆかしくおぼえて。かへりていひつかはしける。

立よりてみる程もなき木のもとの心にかゝる花のしら雪

このあたりの人百韻興行して社頭に奉納すべき宿願ありて。發句をこひ侍りければ。

ちらぬまはあらしやの花の宮木もり

うつのみやをたちて行みちにしほのやといへ

る所侍り。暮行まゝに里々のけぶりたつを見て。

旅衣うらぶれて行しほのやに煙さひしき夕かすみかな

きつね川といへるさとに行暮てよめる。

里人のともす火かけもくろゝ夜によそめあやしき狐川哉

朽木の柳といへる所にいたる。いにしへの柳はくちはてゝ。その跡にうへつぎたるさへ叉苔にむもれて朽にければ。

みちのくの朽木の柳糸たえて苔の衣にみとりをそかる

是よりいな澤の里。くろ川。よさゝ川などうち過て。白河二所の關にいたりければ。いく木ともなく山櫻さきみちて。心も詞もをよび侍らず。しばらく花の陰にやすみて。

春はたゝ花にもらせよ白川のせきとめすとも過んものかは

おなじ心をあまたよみ侍りける中に。

とめすともかへらん物か音にのみ聞しにこゆる白川の關

しら川の關のなみ木の山櫻花にゆるすな風のかよひち

白川入道妻にをくれて。なげきの中に侍るとて。禮にも來侍らず。孫をもてさま〴〵禮義をいたし侍りき。かの入道歌道數奇のよし傳へきゝ侍りければ。いひつかはしける。

立よるも一樹の陰の契とて散にし花の跡もなつかし

こゝをたちて矢つぎといへる所へおもむき侍りける道に。うたゝねの森といひていと木深き林侍り。やう〳〵花の散すぎけるをみて。

ちる花をたゝ一ときの夢とみて風に驚くうたゝねの杜

かくて人わすれずの山といへる所にて。矢つぎの別當坊に一兩夜とまりて。

梓弓矢つきの里の櫻かり花にひかれてをくる春かな

是より田村といへる所にまかりける。道すがらさま〴〵の名所ども多かりけり。いひすてし歌など記すにをよばず。あさかの沼にて。

はなかつみかつそうつろふ下水の淺かの沼は春深くして

あさか山にてよめる。

ちりつもる花にせかれて淺か山淺くはみえぬ山の井の水

拾遺抄春
題よみ人しらず
櫻かり雨はふりきぬおなしくはぬるとも花のかけにかくれん

あぶくま川を過侍るとて。

かくしつゝ故郷人にいつかさてあふくま川の逢瀬にはせむ

しほの山といふ所は山中にて侍る。是より海邊へは十里計侍となん。

浦遠き山は霞の色はかりみちてくもれるしほの山かな

衣の關にてよめる。

みちのくの衣の關をきてみれは霞もいくへたちかされけん

たけくまの松陰にしばらくたちよりて。ふりぬる身のたぐひなりとおもひよそへてよみ侍りける。

いたつらに我も齢はたけくまのまつ事なしに身はふりにけり

すゑの松山はるかにながめやりて。さてもはるばると來にけることなど思ひつゞけて。いつのまに春も末に成ぬらんと思ひわびて。

春ははや末の松山ほともなくこゆるそ旅の日なみ成ける

又おなじ所にて。

人なみに思ひ立にしかひあれやわかあらましの末の松山

けふのみちに實方朝臣の墳墓とてしるしのかたち侍る。雨はふりきぬと詠じけるふるごとなど思ひいでてよめる。

櫻かり雨のふること思ひいてゝけふしもぬらすたひ衣かな

關の清水といへる所を過けるに杉むらの侍りければ。かた〴〵相坂の山ぢおもひ出られて。

あふ坂の山にはあらぬ杉村に立より關のしみつをそくむ

かくてみやぎ野にいたりぬ。一むらさめし侍りければ。しばらく木陰にたちよりて。過るをまち侍りけるあいだに。

木の下に雨やとりせむ宮城野やみかさと申す人しなければ

おくのほそ道。松本。もろをか。あかぬま。西行がへりなどいふ所々をうち過て松嶋にいたりぬ。浦々嶋々の風景ことばも及がたし。かねて聞侍しは。ものの數にても侍らず。みな〳〵歸かね侍りければ。

此うらのみるめにあかて松嶋やおしまぬ人もなき名殘哉

まがきが嶋を見渡ば。藤つゝじなど咲あひて

見え。風景おほかりければ。

まがきしまたがゆひそめし岩つゝし巖にかゝる礒の藤なみ

これよりしほがまの浦へわたり侍るとて舟のうちにて。

松嶋やまつのうはかせ吹くれてけふの舟路はちかの鹽がま

つゝじが岡を越行けるに。わらびをみて。

名にしおふつゝしが岡の下わらひともに折しる春の暮かな

とゞろきの橋を過侍るとて。

かち人も駒もなへめる程なれやふみもさためぬ轟の橋

名とり川にてよめる二首。

人しれぬ埋木ならは名とり川流れての世になと聞ゆらん

いつの世に顯れそめて名取川みかくれはてぬせゝの埋木

右廻國雜記以印本挍合聊注今案畢

群書類従巻第三百三十八

紀行部十二

高野参詣日記

逍遙院内府実隆公

四月の頃。住吉天王寺にまうづべきこゝろざしありて。十九日伏見へまかりて。般舟院にしばらくやすみて。船のことなどもよほしおほせて。この津より船出して。爰かしこ逍遙し侍るに。鵜殿三嶋江などいふ所などいとおかしく見え侍り。えなみとかやいふわたりにて。夕立一とをりして。かいの雫もいとたえがたくなん。船のうちかくはるかなるべしとおぼえず。なにのまうけもなくさう〴〵しかりしに。天照庵とかやいふ所よりさかづき求出てもてきたれる。興あることになむ。かくてふしまちの月さしあがりて。みじか夜ものこりなきほどに。おさかといふところにいたりて。かねてたのめをきし人たづね侍りしにいとかひ〴〵しくしるべして。よしあるやどりにみちびきいれて。とかくいたはり侍りしに。をの〳〵舟のうちのくるしさをも忘れはてぬ。つとめてこのところの本堂みるべきよし申せしかば。こゝかしこみめぐらすに。心ことばもをよばざる荘厳美麗のさまになむ侍りし。かくて和泉の堺南庄の光明院よりむかへの輿などをくられしかば。やどりを出てまかりたちしに。堺のものとて人々光明院檀那。あまたむかへにきたれ

り。まづ天王寺にまうでたりしに。石のとりゐのもとに光明院阿彌陀寺などむかへにとて出きたれり。すなはちあひともなひて金堂にのぼれり。御舍利を頂戴し。おなじく日本にはじめてわたりし大般若經一卷。夢殿より持來の法華經など拜見し奉る。緣起住僧よみ申す。しづかに聽聞して隨喜の涙をさへがたし。法華經をおがみて。心の中におもひつゞけ侍りし。

むば玉の夢殿よりやみぬ世をもこゝにつたへし法の言葉

諸堂巡禮。寶藏にて靈寶どもことごとく拜見。宿緣あさからずありがたくおぼえ侍り。聖靈院にて御影どもおがみたてまつりて。おくのかたみめぐらし侍れば。淨土曼陀羅くち損じてかたばかりなり。これなむ西山上人不斷念佛勤行ありし所なるべきと。往事を感じてなみだをながし侍りぬ。龜井の水を掬て。

まれにきて結ぶ龜ゐのみつからやうききにあへる類なる覽

一和尙みちに出あひて。五首歌奉納し侍りしことをよろこび申され侍り。かくてなにがしとゝやの坊にてさかづきすゝめて。人々すこしうちやすみて。これより住吉社にまうでて御神樂まいらする。十首歌奉納せしめ。ところどころふしおがみて。神宮寺にまうでて。さらに御前の橋より松原に出て。濱のわたり逍遙して。

このまゝに住よしといひて故鄕は忘れ貝をもいさや拾はむ

和泉の堺にまかりこゆとて。みちすがらの名ある所どもいひつくすべくもあらぬ見ものなり。霰松原といふ所をすぐとてみれば世のつねの松のはにも似ず。吹からしたるやうにみえ侍れば。

木枯の吹しほる色とみるばかりなにあらはるゝあられ松原

南庄光明院にいたりて。さまざまのいたはりもてなされ侍り。夢庵にをとづれしかば。やが

て尋ねきたり。夕つけてまたかの寄宿の寺へもまかり侍り。明る日は光明院より夢庵をも招請して齋をまうけらる。

廿二日。高野に參詣のことおもひ立て。宗珀といふものをしるべとたのみてまかりたち侍り。さのといふ處に輿かきすへたるほど。市人さはぎたつをみて。

いつみなるさののいち人たち騒きこの渡りには家も有けり

大鳥の社信田杜などいふところどもうち過て。いづくの程にか。やしろのあるまへに輿かきすへたる所へ。根來よりのむかへとて。馬二疋ひかせて。人あまたはしりきたりて。食籠錫のものなどもたせたり。おもひがけずなむおぼえ侍し。かの寺の十輪院といふは。當寺一山の學頭。碩學の聞えありとなむ。坊にはきのふ灌頂を行ひて後朝のいとなみさはがしければ。弟子の實相院といふがもとにとゞむべきよしの案内となむ。とかくして根來にいたりたりしに。衆徒十人あまりたちつらなりて。むかへ入べきのよしなり。たびのやつれ思ひがけぬことに侍れば。さま〴〵に色代しかへして。輿ながら大門のうちまでのたりし。後にきけば。をるべかりける所に侍りとなむ。かくてすぐに諸堂巡禮し侍り。山中みるもののごとくにて。かたはらいたさいふばかりなし。本堂傳法院にておもひつゞけ侍し。

高野山わかれてこしもことさらに法を傳へむよゝの爲かも

錐もみ不動を拜見して。

うこきなき身を分てける姿そと血の涙をもなかしてそみる

覺鑁上人の詠歌に。夢のうちはゆめも現も夢なれはさめなはゆめもうつゝとをしれといへる。續後拾遺集に入るにや。思ひいでられて。

いつさめむうつゝもしらす七十（大永三）のけふたにおなし夢の世中

實相院といふ所につきて。これかれうちやす

みゐたる程に。初夜のかねをきゝて。

明は又いそきて出むかりまくらねよとねころの鐘聞ゆ也

廿三日。雨氣ありと人々申せしかども。いそぎたちて。粉川の施音寺にまうでておがみ侍りければ。堂のさまなど莊嚴巍々として殊勝きはまりなくなむ。本尊は十一面の千手觀音となむ。額の文字施音の二字は常の文字にて。寺といふ一字なん古文に侍り。誰人の筆にか侍る。すぐれたる見物に侍り。御前に念誦のほどおもひつゞけ侍りき。

法のためこのみはほれをくたきても粉川の水の心にこすな

しるへせし紅葉の洞の月もありとたのむ光ややみを照さむ

これは玉葉にこのてらの觀音の御歌とていれることとあるをおもひいでてよめる。

紀伊川をわたるとて。

水上はよしのと聞はきの川のなみの花まてあかぬ色かな

河を過てむかひの河原にこしかきすへて。をのをのあまづつみなどする程。

こゝよりそ雨つゝみするかり衣きの川上のあさわたりして

ほとゝぎすのこゑをこゝにてはじめてきゝ侍りしに。輿は雨皮してつゝみめぐらして。いづかたもみえざりし。ねむなく。

いく聲もたゝこゝになけ郭公いつれの山とさしてみましを

此道ことのほかとをくて。十八町の坂は四十八町よりも一里のとをき所どもありて。俗に結解なしとかやいふとて。周桂法師がたはぶれに。

雨けとはみつゝも出てぬれにけり結解なしなるけふの道哉

かくて山中にいたりて。雨はなはだしく風はげしくて。えゆきやらず谷より吹のぼるかぜ身をくだきて。さらに一あしもすゝみがたきよしを申て。山のうへに輿かきすへてありしかば。

老の坂くるしきをこそしのきしになと雨風の身をくたくらん

からうじて風すこしやみしかば。高野の御山にのぼりつきて。一心院の奥坊といふにいたりて。人々やすみぬるほど。郭公のしきりに聞えしかば。

高野山佛法僧のこゑをこそ待へき空に鳴ほとゝきす

廿四日。草鞋をつけて諸堂順禮し侍れば。大塔は柱ども立。心柱などきりて。造作のあらましどもなり。金堂はかたのごとくとりたてたるさまなるに。三鈷の松もむかしのは燒て。その種おひとていがきしめぐらしたるをみて。

今はそのまつ曉やちかからむ千とせふるきも生かはりけり

奥院へまうづるみちすがら。きゝをきしにもおもひやりしにも過たるあはれさ。ありがたさになむ。

ふりそふや天津空なき雨もたゝ袖の上なるけふの山ちに

御廟の前の堂。今度供養の堂なり。燈明そのかずなくひかりかゞやきてえもいはず。住僧いであひて大師御所持の鈴杵。水精の御念珠など頂戴せさせられ侍りき。

あふきつゝみるにいよ〳〵高野山光出へきむろのとほそか

内よりたまはりし御爪のきれをおさめたてまつる。裹紙に書付し。

爪の上の土よりまれの身をうけて佛の道は手にとりつへし

この御ため別に卒都婆たてさせ侍り。そのほかはかなき卒都婆あまたたてさせ侍りき。八人髮をおさむる裹紙に。

むは玉のその黒髮の一すちにやみちをなかく昔はるけてよ

みづからのとしごろおちたる齒ども。とりをかせたる。二は觀音の像あたらしく造りたてさせ侍るに。腹身にし奉りて。のこり廿あまり侍るをおさむとて。

いかはかり法を譲りし報とかおち盡しけるはつかしのみや
よしあしの萬をかけしくちのはの果は我身を捨てさりつる

還向の道空はれて日のひかりあきらかなりしかば。

雲きりのまよひも消て出る日やけふの新な空にうく覽。

廿五日。有明の月の出たるをみて。

高野山この曉の月たにも待いつる程そひさしかりける

宿坊をいづとてかきつけ侍し。

思ひいりし一心のおくをゝきて歸らん塵の世をいかにせん

かくて根來の十輪寺につきて侍りしに。夜に入て講問をこなふを聽聞して。

くるしくも岩ね松かねこし道を忘れはてぬる法の庭かな

廿六日。いましばしもとゞまりて。これより和歌吹上も見侍れかし。そのしるべ侍れば。人をはしらせて申侍るべし。又連歌も一座などさまざまとゞめ申せしかども。えざらぬこととて立出侍るほどに。發句とてしきりにこひ侍しかば。筆にまかせて。

ほとゝきすなくねころなるみ山かな

かくてさ野といふところのすこしみちよりは入たるかたへ。宗珀しるべして。ひるのやすみにかいつものなどとゝのへたるもめづらかになむ。高師濱の松原の下。天神の社の前に輿をたてて。

袖のうへに松吹風やあたなみのたかしの濱のなをも立らん

くれにせまりて堺にかへりつきぬ。

廿七日はすこしうちやすみぬれば。宗仲が寮にて一盞など侍りき。

廿八日は阿彌陀寺へ招請ありしかば。まかり向て大師の御作の辨才天など拜見。たうとくなん。近き寺の風呂に入て。夕つけて歸るほど。堺の濱見めぐりて。光明院にかへりしかば。宗碩京よりまうできて。歸京の道のことども申とゝのへぬるよし申侍る。いとうれしくなむ。

廿九日。高野參詣の前より廿首題をくばりたりしを。けふ夢庵にてとりかさぬべきよしありしかば。かしこにまかりて侍りしに。歌舞にをよびてその興あさからず。

旅宿郭公

いさといひて都のつとに草枕さそはまほしき子規かな

江上眺望

漕かへり入江の船の夕波にさかひしらるゝをのかうら〳〵

寄柚木戀但この歌宗碩に遣會書之了。

みや木引聲に答ふる山ひこも我うちわひてなくはしらすや

五月朔日。光璸といふもの連歌興行すべきよししきりに申侍しかば。光明院にて一座ありしに。

河路

濱松の名にやこたへしほとゝきす　牡丹花

みしか夜おしき浦なみのこゑ　宗碩

すゝしきを光に月は秋立て

二日。堺をたちてすみよしにまうでて。御神樂まいらせておもひつゞけし。

神も又まつとしそ思ふすみのえや立返るけふの浪の白ゆふ

天王寺にまうでて。いさゝか心ざしの御あかしなど又たてまつらせ侍りし龜井の水にて。

後前の契りもしるしむすひあくる龜井の水の深き心は

西門の念佛堂にて。武庫山出現の彌陀三尊。太子の御筆いまに儼然たり。もろこしよりわたせる善導大師等身の御影もこのところに眼精誠生身にむかへるがごとし。此堂になむ西行法師が座もありけるとかや。一とせの地震にくだけうせぬるよしこたへ侍り。あはれなる事也。此本尊しづかに拜見して。

うつしとめてやみをそ照す玉はやすむこの山より出し光は

爰にて堺よりの衆みないとまごひし侍りしを。なをかう津といふところまでをの〳〵したひまうでて。かしこにて光明院ひるのかれいひなどまうけて。これよりかへられ侍りき。渡邊より能勢源五郎與馬などむかへにをこせてこゝより船にのりうつりて漕出るほど。能因法しが雲ゐにみゆる伊駒山もおもひいでられ侍り。樓の岸などいふもこゝといふ所なり。大江殿のあととて今も松のみどりにみえ侍

り。

名にたてるその世のまゝか尋はや大江の松のしる人も哉

ながらの わたりすぎぬる程。心地わびしくてたづねもみず。過てのちなむかし。そこと申せしかば。

橋柱ふりぬる跡もとふへきを過しなからにそれと見さりき

暮かゝるほど芥川の善住寺といふ所の塔頭につきて。明る日出たちしに。雨ふりていとわびし。水無瀬にまかり御影堂に参りて。しばらく念誦して。それより都へをもむきて。さるのをはりばかりにこの蓬屋にかへりつきぬ。

吉野詣記

稱名院右府公條公

いにし年の秋。はからずとしごろふしなれたるところはなれて。いくべき心ちもなくて。あはれ修行にも出たちなばやとおもひつゝとかくまぎれしに。紹巴とてつくばの道に心ざしふかくて。このごろみやこのすまゐし侍りて。よるひるきとぶらひけり。しかも敷嶋のやまとの國まで。みちたど／＼しからず。芳野のはなみるべきよしいざなひけり。さらばとて人々にいひふるゝこともなくて。むげにかほしらぬ人宗見といふ人ひとりをめしつれ。ことし天文廿二年二月廿三日のあした。ひそかに都を出侍るとておもひつゞけゝる。

名殘おもふ妹背にあへる道やあると吉野の奥を尋てそとふ

鳥羽よりみつのみまきにまかりけるに。近きとし／＼水のうれへにたへかね。堤塘をきづくとて。はる／＼としわたしたる。けふもいと

なみけり。この所ぞ領しけるところたるに。あはれことしは秋もゆたかにて。おもふまゝに水の害をもさりぬべしと。夏禹の神助を心にあふぎて。

はひこりし水の堤にしゐてかのうかりし年の秋も忘む

岩田の小野などいふところをすぎて。天神の森にいたる。薪などいふ所みやり。杜の陰なる里にて。駒に水かひ。をの〳〵うちやすみて。泉川のあたりうち過。柞のもりにいたりて。

春にたに柞のもりはよそよりも分て霞もうすき色哉

なら坂こえて。般若寺の文殊堂にたちよりしに。ほどなく日くれ。たびのやどりに夜をあかしけり。

廿四日。春日の社にひそかにまうでけり。さま（天文十三）をかへてのちは。けふなむはじめなりけり。

なれ〳〵し袖は霞にそのかみをあらす隔る神かきのうち　紹巴

立かへりそのかみならぬ袖の色もまたさらめやは春の藤浪

賽後默禱道中風雨難。

雨後餘寒春色微　白櫻未ㇾ發野梅飛
天共一笠山三笠　爲ㇾ我龍神莫ㇾ濕ㇾ衣

これより高圓のかたはら。羽買の山の下に客養寺とて心ざしふかき人住けり。さま〴〵の興をつくせることかぎりなし。けふは地藏菩薩の緣日なれば。弘法大師建立の寺十輪院にいたれり。石にきりつけられたる佛菩薩。歷々として殊勝の靈地なり。やがて興福寺諸堂結緣し。東大寺大佛殿をはじめ。八幡宮に參り。念佛堂の舍利頂戴し。二月堂にまいりたるに。雨すこしふりて。笠などとりよせて。知足院など見て。やどりにかへりにけり。

廿五日。けふはことさらの日にあたれり。聖廟御法樂としど〳〵内裏に參りしも。けふは御いとまたまはりてさぶらはざりければ。

梅にまつ匂ひをこせよ八重さくら

霞にふかき庭のはるかせ　紹巴

かくて一二句づゝ申あひ。道中にて百韻をはりける。これよりさ保姫のやしろに参りしに。空ことの外にさえかへりて。風ふきあれたり。

行袖に川かせさむしさほ姫のかすみの衣我にかさなむ　紹巴

とよめりける返事に。

さほ姫はよしかさすとも雲霞絶まの日影衣にはきん

眉間寺に参りしに糸櫻さかりなり。

ぬきとめぬ露のにほひも春風の花は櫻の糸に亂れて　紹巴

とありしかば。

いとによるなをくりかへし花櫻うちちる露もぬきて留めん

遙にのぼりてみるに。

あさみとり遠山眉のひま〳〵に霞をわくる春風ぞ吹

不退寺にいたりて。業平自筆の影あり。おぼろげにはひらかざるよし申せしを。宗二とて。かのあたりのしる人にて。よくいひより拜見せしに。容顏の美麗端正なる。うつゝの人にむかふがごとし。

春やむかし我身ひとつはとはかりにいひしやけふもむかふ俤

これより法華寺。海龍王寺。超勝寺。西大寺にまいりて。かの僧正遍昭のいとよりかけてとよめる柳むら〳〵みえたり。永き日は暮やらで。菅原の伏見にいたれり。菅丞相降誕の跡とてちいさき梅の木などありて。みしめひきわたしたる跡あり。招提寺。藥師寺。大安寺。元興寺など結縁し。また宿所にかへりにけり。やつれたるすがたもはゞかり忍びたりしに。大乘院よりうち〳〵聞つけてをとづれたる人ありければ。ひそかに夜にまぎれてあひたてまつりてかへりぬ。このやどりたるいへあるじのよしある人にて。二階をあたらしくつくり。すだれあをやかにかけわたし。むかひてみれば伊駒山手にとるばかりむかへり。かのかべに

書つけける。

春さむみすたれをしはる梓弓いこまは雪の花も有けり

紹巴

玉すたれあくるいこまの山のはを宿にふしみの春のよの月

廿六日は在原寺。柿本寺。人丸塚と號。木像の人丸おはしけり。

けふそみることはは筆にかきのもともとより朽す殘る姿を

道すこし行て。ある女わらべにとひければ。むかしのつゝ井つゝゐつゝにかけしとよみし井のもとなどをしへける。かたのごとくのこれり。磯上ふる野の田づらを行て。布留の社をおがみて。

咲花にけふこそわくれ七十に（六十七）ちかきもあはれふるの中道

とありしかば。

紹巴

分なれしこかけなからもまとふ哉跡はふるのの花の中道

内山にてしばらく足をやすめ。長岳寺す。釜口と號　愛染（イ外）明王。にをもむき二夜をあかしけり。この寺の護柳本（イ優）とてやさしくなさけふかし。凡浮屠は桑下の三宿をだにいましめられしに。此柳本こそ千夜をも明すべきやどりとはおぼえ侍れ。夜のしらなみをとせず。二六時中愛染明王の不退の供養護持のちからもたのもし。

里人のとかなくてしも修むらん蒲のくちぬるなさへ聞えて

廿七日。本堂にまいりて。

愛染堂前花繞レ松　方池龜出水濟々
忽除二業障一洗二煩惱一　十二時中不退鐘

又寺にかへりて。夜に入て。柳本範堯といふさかづきさしいであそびけり。

廿八日。柳本太神にまいりて。あなし川を渡り。檜原大御輪寺にまいりたりしに。寺のさまうるはしく。よのつねのつくりざまにあらず。くさびなどいふものももちゐずつくれるさまものがたりせり。かたはらにみわ明神の王子の入定のところあり。王子寶殿にとぢいらせ

給ひしときの雨足の跡顯然として有。錦にて覆あり。ひらきて見るにそのあといさゝかふみちがへたり。顯當を表し給ひしよし神祕などかたりり(マヽ)。殊勝のことゞもなり。是より三輪にまうでけるに。神前のさまことさら神さびたるに。苔むしろ草むしろ敷て。かの範堯さかづきさし出。このところのはしづかとて。名あるものなるよし申て。寒食のあめ。端午の粽とりぐしたるものさしいでて。酒しゐずして。おもひつゞけけるよし申けり。

年ふとも又や待みん三輪の山はなの都の袖のにほひた

とりあへず。

うちとくる心もあやしみわの山尋る我なしろ人にして

ふかくたれとなくて過ぬるを。みあらはしけるにやとて。

紹巴

花の香はとかむはかりもみわの山しかもかくるゝ人の袂を

是より範堯はかへりにけり。さののわたり過る程。風いたく吹て。あまかせてやなど申けれど。空は一點の雲もなし。

俄かにもふりこむ雨の雲もなし駒うちわたすさのの夕かせ

かくてつば市より泊瀬にまいりぬ。所のさま源氏物語にかけるさながらにして。しばし花のかげにたちよれば。まことになみだにむかふこゝちせしかば。

漕よせよ花のしらなみあまた舟はつせの山の春のゆふ風

本尊の御前にまいり。おりしもうたうたへる女二人。法樂とおぼしくて歌うたへるあり。そのこと葉に。はなのみやこ人うたよませ給へ、やと云をうちきくより。まことに花のみやこ人はまぎれなけれど。歌よみなむことはむねつぶれて。いよ〳〵口をぞとぢける。しばらく念誦して本尊にむかひたてまつれり。寺はいまだ周備のすがたも見えず。造畢せしめば閑

帳あるべきを。まのあたりおがみ奉るも有がたくなむ。かくてやしほの岡二もとの杉より川をわたり。多武峯ある坊につきぬ。

廿九日。ふくろうのこゑ近くきこえけるは。いまだ夜もふかきにやと思ひつゝおき出ければ。はやあけゆく明ぼのの色も。外には似ず物あざやかにして。かの東坡先生が草木かぞへつべしといひける山もかくやとみえて。空もなをさえかへりけり。

さえかへり猶春風にふくろうの聲もかすまぬ明ほのの山

あしたのほど社頭にまいりければ。莊嚴巍々として感涙をさへがたし。

我身世なすてゝもあふくみれの寺たけき(かイ)は老のなみた數々

松杉戢々晩霞間　鳥語鯨聲寺更閑
武是元來止戈事　談峯可誶此談山

坊にかへりあしたのいとなみなどして。ねつぎと云社に參り。往(逝イ)來(向イ)の岡の觀音に參れり。三十三所の中にてまことに人のゆきゝもしげくみえたり。橘寺にて太子の尊容おがみ奉れり。あまたのうちにすぐれさせおはしましけり。橘の木あり。その實さへのこりてかぐはし。山を佛頂山と號して石碑有。その文佛頂山の三字あざやかなり。今も常にこの山には花ふりぬるよし申けり。おりしも堂前の櫻さかりなり。花の下にてをの〳〵さけのみけり。

法の花空にふらせし天津かせさくらかうへはいま心せよ

ふる寺の名に立花やそのはさへ實さへ花には櫻さへさく

これよりあすか川をわたり。安部の文殊堂にまいりけり。岩やありておくものふかし。耳なしの山かげうちすぎ。そが川うちわたりけるに。板橋はるかにみえたり。

うち渡しゆく〳〵とへはそか川のそかひにみえて霞む板橋

程なくいはれ野にいたりぬ。萩などあるよしきけど。今はみちもなきのべなり。おもひめぐ

らすに。蘇我と書ては。いはれとよめるにやと
おぼえ侍りし。

しるへせむ眞萩や何れいはれの謂れを問む古枝たになし

かくてこよひは高田泊瀬の寺に とまりぬ。この寺の僧又山世とて心やさしき人あり。舊識のごとく心をはこび。こゝかしこ道しるべし。有がたき心ざしにて有ける。

卅日。この寺をたち出ぬるに。曲川まで。わかき人。をくりに馬などひかせてきたり。酒すゝめてたちわかれけり。きさらぎもけふのみなるに桃花こゝかしこ咲て。川のまがり。曲水の興をもよほすべき所のさまなるよし申て。

きかつきに千とせもめくれもゝの花川は曲りの水に浮へて

くれてむろべといふところにつきぬ。

三月一日。けふはをの／＼こゝにてあしをやすめけり。十五首の當座あり。此むろべのあるじ。文道に心ざしふかくて。歌の道にも心かけたる人也。さやうの物がたりなどしてくれぬ。

明ぬれば。これより吉野にをもむくべきよし申けり。廿五日の雨吟道中にてをはりぬ。よしのの花はいまださかりさかりならざるよし申せしかば。先高野山にまいるべきよし申て。道のことなど申つかはせる。あかつきかた逍遙院夢にみえ給へり。

二日。とまりを出たちて。戸だて山。まつちたうげをこえ。櫻井の水を過て高野山にのぼりぬ。かぶろ坂。不動坂などききしよりもさかしく。このあたりは乘物もかなはざれば。かろうじてのぼりつきぬ。ひそかにやどりにつきけり。ともなひし宗見といへるも。たびのよそひをろそかにして。あしもともたへがたきよし申てともなはざりけり。かの宗二又ならにての家あるじなどともなふべきよし申てきけり。

三日。けふは逍遙院忌日(天文六十三)にあたれり。うれしく

てかゆこはいゐなどもとりあへず。朝霧をはらひて奥院にまいれり。節日のしるしにや。衆徒袖をつらね。みちもさりあへずぞ有ける。參りておがみたてまつるに。しろきいぬいがきのあたりにふしたり。利生のよし人々申けり。よろこびながら御前をたちて灯籠堂にまいり。大師の念珠五鈷など頂戴し。大塔諸堂結緣してやどりにかへれり。この十とせばかりに成ぬるにや。參詣せしことおもひ出て。一度參二詣高野山一。無數罪障（佛イ）道中滅の記文も有がたきに。二度までの參詣宿緣あさからず。

横嶺縱峯不レ耐レ登　友人携レ手又支レ藤
再來尤喜桃花節　前度劉郎一箇僧

たちちれもまたたちちめのはゝこ草罪失はむけふ爰にきて

をの／＼旅のよそひして下山す。昨日も山中野火所々見えし。今日は又大きなる木やけて。折かへりたる中よりほのほあがれり。右は山左はふかき谷。あしもとにも火もえける木の下をとをれる。まことに避雨の陵をすぐる心地もかくとみえたり。くだりつゝみれば。麓なるかね川きのふはわたりしに。けふは橋うちわたりてきつきけり。水村山郭酒旗風の姿。杏艷桃嬌奪二晩霞一。空のうらゝかさもこゝちよげなり。節日のさかづきよび出してをの／＼いはひけり。この行さき清水と云川は。よしの川のすゑなれば。いつしかこのころは花のおもかげもうかびていそぎわたり。日くれぬれば繪堂にとまり。後夜の念佛など聽聞してあかしけり。

四日。高天寺にいたりぬ。初陽毎朝來の梅の木。近きころの風におれたるよしを申て。一丈ばかりの數圍枯朽したるあり。かたはらに小枝あり。

くちてたに梅もたかまの花の色に八雲を聲にのこす鶯

櫻花あり。いまさかりなり。

きてみれは山のかひよりみし雲のうへに高天の花に咲けり

これよりうへは乘物かなはざるよし申せしかば。まことに山ぶしのすがたにて。かつらぎのみね金剛山へと心ざしけり。この山の名だかき。於二南海中一有二一淨土一。常在說法。法喜菩薩。名二金剛山一の名文も。この世の外の心ちして。道すがらのけはしき。鳥のこゑもたえたる所に雪のこり。み山木(しきみイ)など冬のさかりのすがたにてたてる。まことに鳥のかよひもなき故と人々申けり。哺時にからうじてのぼりつきぬ。ほたと云ものたきすさびたる爐火のもとによりて。みちすがらのさむさつくろふ程もなく。點心などいふものとりまかなへ備へたり。ながく道たえたる山のうへに。かゝるたくはへのとりあへざりしもふしぎにておもひつゞけける。

衆峯絕頂金剛窟　行者高蹤路轉迷
今日初嘗禪悅食　相盟法喜法身妻

かくて法喜菩薩役行者おがみ奉り。かつらぎの神岩橋わたし給ひしところなどおがみて。

すゑとけぬ思ひはかけし岩橋もかくこそ有けれ葛城の神

紹巴

春の日もはやにしなるや葛城の花にとよらのかね響くなり

やがて下山すべきとて。麓までむかへ馬などよびてまたせけるに。みちをふみちがへ。木くだしの道とて。なをけはしきかたにくだりける程に。むかへの乘物からうじてくるゝ程に行あひて。またむろへぞかへりける。

五日。よしのにをもむきけり。これより宗見もともなひけり。六田の淀橋のありけるか。中絕て修理せし折ふしにて。けふは船にてわたりぬ。おほきなる樹をつくりこめたる旅店あり。あるじのいふやう。この木はいはれある木な

るよし申せしかば。六田の淀の柳にてはなきかと申かけければ。そのごとにてあるよし申。みれば又あまた柳ども。いまださむくて。めもはらざる木どもなり。こゝにて人々水あみなどしけり。

やといてゝ五のかひをふくからにこゝは六田のかすむ青柳

行々てよしのに入ぬれば。關屋の花はちりて。所々のこりちりおつる花を。谷風の吹あげたる。世ばなれたるさまなり。こもりかつての兩社に參り。かねの鳥ゐ目おどろかれたり。鳥形の額あり。字形わきまへがたし。人にとひければ發心門とぞ申ける。入もて行まゝに。一里ばかりはいまをさかりなる花の木どももかずもしらず。おもひやりしにもきゝしにもこえたる壯觀とぞ覺えし。愛染寶塔までのぼりてみれば。此あたりはいまだ木ずゑどももさきあへざりしかば。又さかりの木のもとにかへりて酒すゝめ。醉のこゝちにいよ〳〵花もいろをましたり。いかなる歌もよみぬべきよし兼ておもひしも。なか〳〵ことざましたるやうにて。歌ごころもうせはてぬ。

心たゞ花にちりつゝよくみむとおもふに逢ふみよしの山

とありしかば。

紹巴

咲はちりちれはさくらの陰ふかき芳野は花のときは山哉

あたりをみれば立願にて花の木どもうへてまいらせけるよし申せしに。百本の内と札つけたる木。そのたけ一尺あまりなる木ども。いまみとせ四とせのうちに盛の花の木たるべきよしおもひやりて。

咲散はけふみつくしつこゝろなゝ若きに殘す花のみよしの

やどにかへりて。

紹巴

もろこしのよしのかはなにおくもなし

とありしかば。

おなしかさしのさくらいくもと

雨吟百韻をはりぬ。かくて一夜をあかしけり。

六日。芳野を出ける。六田川けふ橋をわたしければ。むまなどむかへにきたりて。たやすくわたりて。又高田。泊瀬寺。極樂寺につきぬ。

七日。けふはしづかにうちやすみて廿首當座よみけり。

八日。たいま寺にまいり開帳し。瑠璃だむなどめぐりなどして をがみたてまつる。淨土九品のさまものあざやかなり。

さほ姫のなれる衣は八重櫻こゝのしなには手やのこしけむ

染殿へまいるみちにあだの 大野あり。むまにむちうちて行けるに。萩など生ぬ べきさまにもなし。兎葵燕麥春風に動搖すべきさまなり。

あたなれやあたのおほのたけふみれは麥はむ鳥（馬イ）の跡計にて

染殿に參りてみ侍るに。本尊も大佛なり。雪霜雨露にをかされ。糸をそめ給へる 池とても水もみえず。糸をかけほし給ひしさくらとてくちてのこれり。はなみなちりはて たるもとにて。酒などもたせて。しばらくありて片岡清水明王院にいたりて夜をあかしけり。

九日。朝に出たちぬるに。明王院のあるじ。あしたの原まで 壺をたづさへてきたれり。むかひのみねなどいふみね うちかすみて。まことに名あるところのさまなり。人々歌あり。

かすみけりあしたの原は明ほのの春をむかひの峯に殘して

紹巴

おき出るあしたの原の名殘あれや春の一夜なふせる旅人

今朝しも餘寒けしからざるに。あたゝめ ざけにあらざるさかづきをひかへて。

春乍ら身にしみけりなのみこたもあしたのはらは冷酒にして

紹巴

あしたの出たち。常よりもとりつくろひ たるに。朝のはらとよめるはいかゞとて。かの人に

かはりて申かけけり。

しなてるや片岡程の飯なくひてあしたの原といかていふ覧

をの〳〵頤をときて　たちわかれぬ。これより達摩寺にまいりぬ。達摩太子の像ならびおはしけるかたはらに二の大石あり。一はふしたる石にて達摩の姿をのこし。一はたちたる石太子の御かたちと申ける。是よりむかひに一のいしあり。春日大明神の影向石といへり。さて法隆寺にと心ざしけり。南無佛の御舍利出給ふ時刻さだまれり。をそくもやとてこまうちはやめ參りけるに。舍利講式上段よませたる時分にて聽聞隨喜せしに。ことのをはりに舍利出おはしましけり。この寺の脇坊とて。年老ことおかしき人内陣へ參るべきよし申せしかば。參りて靈寳どもおがみ奉る。さま〴〵のもの有中にも。梵網經。御身の皮を外題の紙に用之。御血にて銘をあそばしたる御經。たゞひなくおぼえ侍り。かくて龍田に行てとまりぬ。日ぐれがたに立出て社頭にまいり。このあたりの名所どもをしへられけり。ならしの岡。神なび。龍田川。いはせ。小倉山など見わたしけり。此處のあるじなる人廿あまりなる出きてものがたりしたり。おやある人なり。父は慈あり子は孝ありて。今の世にはたぐひすくなきよしきこえけり。歌のみちに心ざしあるよしきこえしかば。二首の題をいだして人々よめり。

落花隨レ風

枝にまたかへらぬ花な吹かへし風さへさすか惜むとそみる

名所春曙

なこりあれや明ほの霞む立田山夜半にも越て見るへき者な

あかつきにいたりて。木綿付どりのころ〴〵聞え。ところのさま身にしみけり。

十日。信貴山にまいるべきとていでたちぬ。か

のあるじの父なる人。さきだちて龍田山にて松のえだをひきたはめて茶甕をつくり。やがて松の古葉松かさなどいふあたりにおちたる薪にひろひたき。茶具など興あるものども。酒肴さま〲もたせてまちゐたり。あまたゝびさかづきめぐり。茶などすゝめてたちぬ。信貴山にいたりて福生院といふともなひきけり。毘沙門につきてそのなもたよりありとて本堂にあがりぬ。かけつくり三方のこる所なくみえて勝境たぐひなし。是より河内國八尾木の金剛蓮華寺といふ寺をさして行つきにけり。

十一日。けふは住吉へとぞおもひたちける。ここなる人のいふやう。この八尾といふ所は鶯の名處なり。よのつねのは尾十二枚かさなれり。この所のは尾を八かさね。すぐれたるよし申けり。

契りなきてこゝにそきかむ鶯の八尾のつはき八千とせの聲

とかきをきて。これより神廟むくの木のある寺にまいりて。かの木のもとをおがみ。本堂へまいり太子の御影開帳はなきよしかたりしかど案内しれる人。ひそかに申てひらきけり。

へたてなくとはり掲けて椋の木のむくつけき迄むかふ面影

紹巴

古へのあともこふかきなかとてもこまひきむくろ春の若草

かくてすみよしにまうでけり。日よく晴て參詣の人々袖をつらね。松原こゝかしこ。酒もり歌うたひこゝちよげなり。爰のさまをみれば。しほはる〲とひて。男女貝ひろふとて出たり。あかずながめ入て。

なかゐすなとはかりいひしあま人をうらみて歸る住吉の涙

袖の色にふかく染けり住の江のきしかたのみはみた忘草

紹巴

よりくるも誰かは聞む住のえやふかき霞にしつむ夕なみ

浦のけしきたちうきを。かへる波にひかれて天王寺にをもむき。しるたよりもなくばいか

がとおぼえしに。たゞいまの別當なる大覺寺の御うちなる野路井といふ人に行あひてければ。藥師寺といふ所にやどしてさま〴〵のもてなしあり。まことに太子の出むかひ給るかとぞ覺えし。かつは別當の御こゝろざしの行ゑとぞおぼえ侍る。やがてところ〴〵おがみてかへりぬ。龜井の水のもとにて神佛亡者などに水まいらせなどして。

あしき道六をかくせる龜のみつ五のにごりこゝにすまさむ

曉難波寺の鐘とて心もすますべきを。ひごろのつかれにやきかざりしを。紹巴おどろかしけり。いぎたなき慚愧のおもひをなせり。

かへるへき道しるへしてかり枕夢殿ちかきかれのこゑ〳〵

十二日。けふは水無瀨までまかるべき程とをしとていそぎけるに。この寺の舍利每日巳の刻に出させ給へども。かの別當の御使たる人ことはり申て朝の程に出し奉る。頂戴隨喜かぎりなし。寺僧ものがたりしていふやう。この舍利は七佛の毘婆尸佛の双眼なり。普廣院(義教)の御時都へのぼられしかば。その間龜井の水とまりて御かへりのほどよりもとのごとく出けること。また本尊近きみだれにくだけ給ひしを續たてまつるに御あしいさゝかふみちがへてつきしを。一夜のまにゐなをらせ給ふこと。近き世にもかやうのふしぎあるよしかたりけり。秋野といふ人道までをくりにとて樓の岸わたなべの大江まで酒もたせきたりける。川のほとりにて數盃をかたぶけ。こゝをたちて夕つかた山ざきみなせにつきにけり。いまだ日ものこれり。和漢一折すべきとありしかば。

雲やいつれ山さきかくる花さくら　　水無瀨二位

迎レ客燕談レ春

あめの日や夕の空もなそからむ

十三日。早朝に御影堂にまいれり。男山八幡に

まいり。かへるさ釋迦のおはします堂にまかれり。ある人酒すゝめてかへりぬ。このほどのたびのつかれゆへ。こゝちあしくてけふはふしくらしけり。

十四日。みなせより久我までかへりにけり。はづかしのもりのほとりにて。こしをたてたるところにて。そのあたりの名所も大かたこゝをかぎりなりとて。

旅衣たちかくれはややつれこし身をはつかしの杜の木影に　紹巴

かへし。

假初とおもふ日數もつもりつゝ早はつかしの影にきてけり

みやこ出しひかず廿日になりにけり。かくて東寺の南大門まで都よりむかへに人々きたり。これよりのりものをかへし。うちつれ歸りにけり。道すがら障礙なくかへりしことなど中て。野宮の寺より立いでしかば。こゝにかへりつきて。いつしかなごりおしげにて みなわかれにけり。やがて立かへりても。ひとりずみの床もあれて。みちすがらのものがたりすべきたよりもなければ。

語るべきことは數々なみたのみ古きのきはのつまなしの花ぞかひなきや。

老の坂のほりくたるもこのたひをかきりと思ふに深き山道

今生の宿望來世の結緣。滿足するものなり。

天文廿二年三月十四日

九州道の記

玄旨法印

ことし天正十五三月の初。博陸殿下九州大友嶋津わたくしの鉾楯をとゞめらるべきために御進發の事あり。息與一郎同玄番允參陣の上。家をのがれ入道せし身なれば。供奉の事にてもなかりしを。はるかなる御陣の程を。いたづらに在國も空おそろしき心地して。四月十九日に舟をば熊野郡まで廻して。廿一日田邊を出て。其日は宮津にとゞまり。廿二日松井の城松倉に着て。明なば出立べきたびよそひせしに雨降出て終日晴まなかりしかば。松井子禪門と云出て抑留し。盃たび／＼出して慰みくらし。其夜はとゞまりて。廿四日いとよく晴て風も追手になるといへば。出立とて。足占山ちかければ。

かならすの旅の行ゑはよしあしもとはてふみみる足占の山

軍書に欲レ必則莫レ令三卜問二軍吉凶一とあれば思ひよれり。かやうにして湊と云所より辰時ばかりに出船して。其日の暮ほどに但馬因幡のさかひ居ぐみといふ所に舟どまりしける。旅宿いと所せくて。上なか下らうがはしきかり枕し侍りて。

主從は旅にしあれは里のなの居くみにしたるかりの宿哉

廿六日。伯耆國みくりやより船を出して出雲國仁保の關に上り。見物し侍りて。それより礒づたひを行に。にしきの浦といへば暫船をとどめて。

船よするにしきの浦の夕波のたゝむやかへる名殘なるらん

かやうに口ずさびて。其わたりちかきかゝと云所漁人のいへにとゞまりぬ。

哀にも未た乳なのむ蛋の子のかゝのあたりやはなれさる覽

廿七日。雨風あらき故に。かゝより船出成難かるべきよしを船人申侍れば。さらばいたづらにくらさんも物うしとて。船をば浪間をまち

まはし侍べきよし申て。杵築宮見物のため。かちにてたどり行。道のほど三里ばかりへて。木ふかくて。山のたゝずまゐたゞならぬ社有をみめぐりて。神人と覺えたるに尋侍りしに。これなむ佐陀の大社なり。神躰いざなぎいざなみのみことゝをしへけるに。しかく物語し侍るに。日もたけ雨もいたくふれば。衣あぶらむほどのやどりもとめてとゞまりぬ。

千早振神のやしろや天地とわかち初つる國の御柱

廿八日。佐陀を出て秋鹿といふ所にて湖水の小船に乘て平田まで行に。生浦なりと船人のいふをきゝて。

儀衲うらみやおふのうら千鳥見はてぬ夢のさむるなごりに

かやうにして。暮かゝるほどにきづきのやしろに至て。寶前をはじめ末社等。こなたかなた見めぐりて尋るに。當社兩神官千家北嶋。何れも國造となんいひける。其家々見物して。其後旅宿をかりいでて。椎葉ばかりにもりたる飯などくひてやすみ居たる處に。若州の葛西といふ者たづね來りて對面しける。太鼓うつ人にてわかぎ衆おほく同道有て。一番きくべきよしあれば。さらばとて催しけるに。兩國造より所につきたる肴樽など使にて送られける程に。笛鼓の役者共きこみて夜更まで亂舞有けり。思ひがけぬ事なりき。

廿九日。朝なぎの程にまはしつるもの共順りきて。いそぎ舟にのれ。日もたけにけりといへば。こゝろあはたゞしくて。

この神の初てよめることの葉なかそふろうたや手向なる覽

逮三于素盞烏尊到二出雲國一。初有三三十一字詠一とあれば。やうく字のかずをあはするばかりを手向にしたりといふ心ざし計になむ。此短册を千家方へつかはしけるに。兩司なれば。一方へはいかゞとあるじのいひけるに。俄な

れば同歌を書てやりける。又當社本願より發句所望なれば。

卯のはなや神のいかきのゆふかつら

かやうに書やりけるに。千家がたより今の發句は北嶋にて連歌たるべし。吾方にては百韻興行すべしとて。船に乗所に追付て發句所望なり。いそがはしきになりがたきよしたびたび申せしかども。所のならひにやわりなく申されける程に。人の心をやぶらじとて思めぐらすに。おりふしほとゝぎすのなのりければ。

ほとゝぎす聲の行ゑやうらのなみ

廿九日。石見の大うらと云所にとまりて。明るあした。仁間といふ津まで行に。石見のうみあらきといふ古事にもたがはず。白波かゝる磯山のいはほそばだちたるあたりをこぎ行とて。

これやこのうき世なめくる舟の道石見の海のあらき浪風

それよりやがて銀山へこえてみるに。やまぶきと云城在所の上に有をみて。

城の名もことはりなれやまふよりもほる白銀な山吹にして

やどりける慈恩寺發句所望。庭前に楓の有をみて。

深山木の中に夏をやわかかへて

温泉の津まで出て。寶塔院にやどりけるに。先年連歌の一巻見せられし事などかたみに百韻をつらね侍りぬ。

浪の露にさゝしましける磯邊かな

五日。出船するに跡にても一おり張行すべきよしにて發句所望なれば。當座に。

うき草のれにひかれ行あやめ哉

七日。濱田を出て行に高角といふ所なりと云を舟より見やりて。石見かたたかつの松の木間よりうき世の月をみはてぬるかなと人丸の詠ぜしこともおもひ出て。

移り行世々をへぬれと朽もせぬ名こそ高つの松のことのは

とかくして長門國にいたり。礒の上嶋とをみわたして行に。かり嶋と云所有と聞。誰も世の無常なる事を思ひ出て。

皆人の命なかととたのめとも世はかり嶋の浪のうたかた

おなじき國浦小畑と云湊に唐船の着て有よしを船人のうちにかたりければ。さらば見物せむとて遙に舟をよせしばしとゞめて。

我もまた浦つたひして漕とめぬもろこし船のよりし湊に

あこのうら波のたかくきこえければ。

小つゝみのとうにしらへやあはす覽うつ音高しあこの浦浪

十日。瀬戸崎といふ所を出船せしに。風あらくて高波は船をもこし侍るばかりなり。召具したるもの共。ゑひごこちたゞならで。色をうしなへる躰なれば。さらば漕かへすべきよしを云て。山かけて舟の入ほど廿町ばかりには過ず。されども千里をも行こゝちなんしける。からうじてやどりける在所に歸けるに。なをかぜあらくなりて草木をも吹しぼりて。うみのおもてはふすまをはりたるやうなり。何人の乘たるはしらねども。先へ出たる舟は波に沈みたるなどいへば。命ひとつをひろひたるこゝちして。そのよはねてのあさけも。昨日の名殘にやなを雨風やまず。波の音たかしほにきほひて見ゆれば。船の出べきやうもなしなど船人わびあへり。さらばかちにて關の渡まで行べきよしいひ合て。馬などかり出して。十一日せとざきを出て。大寧寺 大内義隆のはてられし所と聞し程に。立寄て一見し。それより深山をわけこえて。同國妙榮寺といふにとまりぬ。住持の和尚出られて。終夜佛法の物語など有てつとめてのあした出て行とて。

かたちなき夢てふものを心とも法の筵にふしてこそしれ

心法無形通貫十方とやらんいへば。おもひよ

れりき。きこえがたくや。

豐浦宮を行過るとて。

水もらぬ池の心のふかきをもとよらの宮のつゝみにそしる

たらひと云在所にてかれいひくひ侍らんとて。かりのやどりにあがるとて。下々あしをあらふに。まめのいできていたきなどいふをきき侍りて。

さし入てあらへる足の豆おほみ馬たらひとや人のみるらん

關の渡に着て阿彌陀寺に參り侍るに。其かたはらに寺有。所の人は內裏となん云つたへ侍る。寺僧に案內して安德天皇御影。其外平家一門の像ども見侍ける。彼僧昔今の短册などみせられしに。知たる人の歌どもありしほどに。

もしほ草かく袂をもぬらす哉硯の海の波のなごりに

豐前國門司の關にて。

古郷にことつてやらん一ふてもかきや絕なんもしのせき守

兵粮船おほくつどひて有を見て。くらなしの濱當國なれば。

米舟は國々よりもつきにけりあけてもつまむくらなしの濱

豐前の柳浦の名主とて發句所望せしに。

豐國の山くちしるき早苗かな

同月廿三日。赤間關を出て行けるに。雨の名殘にや。波風のあらき故に小倉にとまりて。明る夜をこめて舟よそひして。筑州箱崎をさして行に。船人のこれなむ金が御崎といふ。むかし鐘を求めふねにのせてきたり。汀ちかく成て取おとして今に有と云。日和のよきときは龍頭などみゆるよしをかたる。勅撰名寄には金と云字を書たりと覺えけるが。鐘にて有べきなどと友だちなどに語りける次に。万葉に我はわすれすしかのすへ神と哉覽讀たる事など思ひいでて。

暮渡るかれの御崎を行舟に我は忘れす古鄕の夢

かやうに云たはぶれこぎ行ほどに。夕浪あら

くなりて。やう〳〵志賀の嶋に着て。金剛山の宮司の坊にやどりて。當社大明神の由來など尋けるに。春日鹿嶋當社おなじ御ちかひの神なりと物語有。縁起（イ本ミカサ山ノ峠コヽニ入是）などとり出してみせらるゝ次に。波あらき鹽干の松のかつらかた嶋よりつゝくうみの中道。これ當社の御歌のよし社僧のかたられける。又香椎の神詠には山よりつゝくと一句かはりたるなどと有。立出見侍りけるに。砂の遠さ三里ばかりも海の中をわけて嶋につゞき侍り。とりわきてほそき所は十町ばかり。ひろさは十四五間ばかりも有と見えたり。文殊などもおはしませば。橋立の事など思ひくらべられき。當社は安曇磯良丸と云て。神功皇后異國退治の時。龍宮より出て。兵船の楫（らくイ）とりして海上のしるべせし神なり。しば〳〵うちながめて。

みかさ山さしてやかよふしかのしま神の惠みの隔なけれは

名にしおふ龍の宮この跡とめて波をわけ行うみの中道

此兩首をかきて奉納して。廿五日朝なぎの程に箱崎にわたりて見るに。松原はる〴〵つゞきて。八幡宮は北面にむかひて立たり。戒定惠の三學の箱をむかしうづまれたる所に。しるしの松とて古木あり。たちよりて。

そのかみに納めおきつる箱崎の松こそ千代のしるし也けれ

日たかく侍ければ。博多見にまかりけるに。爰を袖の湊と里人のをしへければ。

いささらはともにぬらさむ旅衣袖の湊の涙のまくらに

日も暮ぬいさ船よせてねもしなんひしきものには袖の湊を

廿六日。宰府は天神の住給ひし所と聞及しまゝ。見物のためまかりける。彼宮寺は七とせばかりさきに炎上してかたばかりなるかり殿あり。舊跡の有様。松杉のおほくきられたるに。さすがに所々にのこり。うしろは青山そびえて。右の方七八町ばかりも有らむとみえて觀

昔寺あり。寔に西都とも云べき所なり。飛梅も古木は燒てきりけるに。若ばえの生出て有を見て。

鶯のはれをやとひて飛梅のかこにはいかてのらて來にけん

夫より染川を里人にたづねて見に行侍るに。思ひしにはかはりたる小河のあさきながれなり。うちわたりて。

老の波むかしにかへれ染川や色になるてふ心はかりも

思ひ川にて。

暮る夜のほたるやしるへおもひ川

こゝかしこみめぐりて歸りける道に。かるかやの關の跡有とてをしへけるに。今度の陣衆名のらせてかへさるゝ事有よしをつたへ聞て。

名のらせてやう〳〵通す陣かへり兵粮米やかるかやのせき

此次にかまど山はいづくぞと案内者にたづねしに。かへるさの右にたかき山有。是なんそれといふ。昔は竈門山寶重寺とて山伏の住ける所に有けるを。ちかきとし比より高橋と云者城郭にこしらへて有けるが。去年嶋津出て。あたりちかき岩屋の城せめ落せし時分あけにけるが。此比山伏の歸住と申せしに。五月雨の名殘雲のかゝりて見えければ。

立つゝく雲を千里の烟にてにきはふ民のかまと山かな

可也山にて。

茂り行かやの山へに入しかは秋より露にぬれてふすらん

姪濱より人の安吉の脇指をこせて。目利し。銘なども能侍ならば。主に成べきとて文あり。その返事に。

わきさしの代をしとへは安吉のなかこたゝしきぬいの濱哉

廿八日。姪濱と云所にいたり。それより生松原見にまかりて。

涼しさを風の便にこととはむ今いくかあらはいきの松はら

姪濱にて有人宗養執筆せられし連歌の懐紙を

みせて與書所望せしに。

是も又なかれて末の水くきの跡のかたみと書そくはふる

六月三日。姪濱興德寺住持耳峯玄熊和尙和漢興行有べきとて發句所望有しに。公儀此所まで御成の沙汰有ば。張行はなりがたかるべしとて。發句を書つかはして入韻所望せしに。

風かほる南なまつのとほそかな

社司六月梅

同八日。利休居士へ關白殿渡御ありて。しばし御物語ありて後。一折と催されて。發句つかうまつるべきよしあれば。筥崎八幡の心を。

神代にもこえつゝすゝし松のかせ　松

雲まにとなき夏のよの月

ほのかにも明行空の雨はれて　日野新大納言

箱崎の八幡のうち關白殿おまし所になりて各參上せしに。しるしのまつによせて祝言のこころを各によませられけるに。

つるきなはこゝにおさめよ箱崎の松の千とせも君か代の友

關白殿箱崎の松原にてすゞまるべきよし有て各召具せられ。しばし御遊興の事有。おほみきまいり謠ども有て。御當座ありしに。

立出る袖の湊の夕すゝみかたしく程の浦風そ吹

暮はててかへらせ給ふおりに松原に名殘思ふ歌人々つかうまつるべきよしあれば。

松原にとまりからすの聲なさへ羨まれぬるかへるさの道

六月十日あまりのほどに。香椎の浦見にまかりて。

うなはらや鹽路はるかに吹かせの香椎の渡り浪たつらしも

歸るさには。船をば遙なるひがたのさきへまはしてたゝら濱にかちにて行て。

古へはこゝにゐもしの跡とめて今もふみみるたゝら濱かな

對馬の守護宗對州より此歌一首をくられて歌發句所望あり。すでにはや出船のよし使のいへば。當座に書つけてやりける。

敷嶋の道すなほなる御代に逢て惠み久しき箱崎の松

卒因和歌韻。

始識逢レ君情所レ鍾　向來相約對二間窓一
帝都門外莫レ言レ遠　千里同風一樹松

發句

しら波のうつかた山のしほかぜに涼しさそふる夕たちの雨

となしまに立くはゝるや雲のみね

六月廿五日。一折張行すべしとて。溝口大炊允所望に。

涙の音も秋かせちかし西の海

天さかる鄙の住ゐと思ふなよとつこもおなし浮世ならすや

と千宗易よりいひをこせける返事に。

天さかる鄙には猶そゐたむなきとつこもおなし浮世なれ共

廿七日。關白殿花瓶あまたとり出されて。草花をいけられたる御座鋪にて俄に一折催されて發句つかうまつるべきよしあれば。

夏草にはなのかならすたもとかな
すゝしき夜半のさころもの月　松
しら露の簾のひまを傳ひきて　由己

七月四日。關白殿せきの渡より御歸陣なり。船にて參陣せしほどに馬などもなし。船にて南の海をみめぐりて上らむと定め侍るに。秋かぜ日々にあらくなり出船ならで。六日まで逗留し侍りておもひつゞけ侍りける。

あきとふく風やせきの渡とまり舟

六日にもいまだ船の出がたき風なれば。周防山口見物のため。在所の荷をおふ馬かり出して。船來と云在所まで行て。七日に山口にいたりぬ。今夜は七夕のあふよなりと思ひ出て。曉がたの寢覺に。

七夕の別の袖にくらへみよ露なからかす旅のころも手

八日。所々寺社見めぐりて。同國こふの天神まで立出べき用意せしに。當所本國寺住持一會興行すべしとてしきりにとめられ侍れば。ちからなく其日は逗留して。九日に。

もろ月もいま一しほの木間かな

十日。山口をいで國府天神へ着て。まりふの浦ちかき田じみまで船のまはるを待てやすみ居たるに。當社の供僧圓樂坊。發句所望有て。一面なりともつらぬべしとて興行あり。入あひの時分より初りて。夜半過ほどに百韵まんじける。其とき船着たる由注進あり。天神の御はからひとて。衆徒よろこばれける。

色わけよまつこそ風のたむけ草

田じみの湊にてまりふのうらをみるに。網のおほくかけほしてあれば。

眞砂地に網はり渡しもてあそぶまりふの浦の風もたえつゝ

十一日曉。田じみを出て其日は上の關と云所に船をかけて。明行空をもまたで。鹽にひかれて船出をもよほし行に。岩くに山といへば。みやりて。

あらきその道なりとても歸るさは岩くに山も踏ならしてん

それより。嚴嶋ちかくなりて。社頭を見るに。鳥居は海の面二町ばかりとおぼしくて立たり。廻廊も柱はみな鹽につかりて有。船よりみて。

遠嶋の下津岩ねの宮はしら波の上より立かとぞみる

此歌を書て當社宮司棚守左近將監がたへつかはしける。とかく有て月に成侍れば。立出て更るまでみるに。鹽干鹽滿目の前にかはりて。汀二三町ばかりも遠近になりぬ。みつしほはたた大海の泉かなと宗祇賢作なり。理なる哉。又大聖院良政發句所望有て十三日一會あり。當社にかゞみの池と云あれば。

影うつす月やかゝみのいけの水

十四日にも棚守連歌興行すべきよしあれども。玉まつる日にあたれり。心づきなきやうにや有べきとて辭退しけるに。さらば發句ばかりをと所望なり。思ひがけぬにほとゝぎすの鳴ければ。

秋やまたは山しけやまほとゝきす

かやうに申つかはしけるに。(イ无)さらば晩にあるじすべきよしあれば行けるに。色々の肴もとめて盃いだされて。子息少輔三郎出座ありて亂舞あり。脇指を出して罷歸しなり。やどりける所は奥坊と云ける。こよひの玉祭の手向などかまへをかれけるに。又時鳥の二こゑ三聲なけるを爰にはいつもかやうに有かと尋しに。めづらしき事なりと云。一首をよみてつかはしける。

しての山をくりやきつる郭公玉まつる夜の空に鳴なり

十五日。宮嶋神前にて延年と云事ありといへば。見物して夜半ばかりに船を出し。たゞのうみにとまり侍りて。それより備後の津公儀御座所に參上して。十八日あさ鞆までこし侍るに。竹田法印。かりそめの宿なれど亭など有て涼しきよしあれば立寄て。簟に終日有て。暮がたに船を出すべきよしを云ば。發句所望なり。

名殘ある月やともつなみなとふれ

それより終夜舟をいそぎて行に。明方のほどに備中國にありと云彌高山。たしかにはなけれども。嶺つゞきのうちなりといへば。

曙やふもとをめくる雲きりにいや高山のすかたをそみる

十九日。備前のうちひらどと云所にとまり。それよりくれほどに宇嶋門に着て。船をかけてもやがて出すべきよしをいへば。あがりもせで。かぢ枕の月をみるに。物うき旅ねなれば。

船にれて何を頼まむ月にさへなをうしまとの泊りなりせは

其より月のよふねに乘て行に。虫明のせとといへば。

秋風の身にしむ夜ははなく音をも聞はかりなる虫明のせと

風あらく成て。たてのうらと云所に上り。人ざともなき所に旅ねし侍り。

夕波のたてのうらよりゆみはりの月も光をはなつとそみる

とかくありて。波間に船を出して。播磨の室まで行道に。坂を越。しやくしと云在所あり。其近きあたりに鍋の嶋といふあれば。

鹽は唯よき程なれや鍋のしましやくしを中へ入てみつれは

廿一日。明方をまちて舟を出し。家嶋をこぎめぐるとて。

いかはかり船よそひして漕よせむ我いへ島と思はましかは

ひめぢと云城をふねに見て過行ほどに。しかま川ちかきわたり。海の面にごりたるを船人に尋けるに。水上に大雨ふり侍ればかやうに有と云。

水上にいくむら雨かしかま川濁は海に出てきにけり

かやうにうちながめ。ひゞきのなだをこぎ過て。高砂の浦に船をかけて。其夜はとまり侍り（にけりイ）ぬ。

高砂の尾上のかれも松風もひゝきのなたの波にたゝへて

是より松帆のうら見物せむとて。廿二日の曉。夜舟こがせて行に。あかしの渡り。追かぜをかたほにかけて。はる〴〵とあはぢ嶋によりて。

行船の追風きおふあかしかた片帆に月をそむけてそみる

さてまつほの浦ちかくなれば。船をよせてみるに。明がたの月浪にうかびて見えける（侍りイ）に。

あらしふく松ほの浦の霧晴て浪よりしらむ有明の月

又繪じまといふ磯を見るに。山のかさなりてしまのあれば。

いく重とも波ちはるかにたゝみなす山や誠のゑしまなる覽

須磨の浦にて。

すまのうら里のうしろの山柴やあまのしほやく煙成らむ

暮かゝるほど波のあらくなるに。わだの御崎を漕めぐり。生田の森を船より見わたして。

こく舟の夕波あらく成にけりさそな生田の杜の秋風

去四月丹後を出船して。九州をへ。歸陣のときは南の海をまはりて。七月廿三日と云に難波

に着ぬ。思ひやればかぎりなき日の本をもなかばばかりをめぐり來にけることとおどろきて。

なにはえの道にひかれて遙なる豐あし原も廻りきにけり

九州のみちの記

豐臣勝俊朝臣

大相國もろこしかたむけさせたまはむとて。天正のするつかた筑紫に御出有べきよし事さだまりにければ。日の本の兵のこらず供奉す。みづからも。む月の中の五日頃に京をおもひ立なむとしはべりけるに。人のもとより おむぞ調じて給ふとて此二首をなむくはへられたりける。

玉鉾のみちの山かぜ寒からはかたみかてらにきなむとぞ思

あまたにはぬひかされゝと唐衣思ふ心はちへにそ有ける

彼おむぞ。えならぬものがたりのこゝろを筆のかぎりうつくしくかきて。とる手もくゆるばかりにほひたきしめられたり。かへし。

きみならて道の山風さむしとも誰かいとはむ旅の空まて

心さし深きいろかのから衣かへすくもかたみとやみむ

かゝる情のありがたさよと。あるはなみだのふるきわざまで おもひよせられ侍る。さて須

磨明石の月をながめつゝ。はりまの國にしるよもしてまかりて。廿日あまりとゞまりぬ。そこにしたしかりける人のもとへ。おもしろかりけるさくらにさして。

いてゝ行あとなくさめよ櫻花われこそ旅に思ひ立とも

かくよみをきて。日かずをへつゝゆくまゝに。備中のくにきびの中山につきぬ。つれ〴〵さのあまり。こゝかしこ見ありきはべりて。彼ほそ谷川の邊にいたりて。

けふぞみるほそ谷川のをとにのみ聞わたりにしきびの中山

その水上にのぼりてみれば。ちいさき池のなかよりたえ〴〵出る清水なりけり。かのしみづみな月のころほひもたゆることなしとなむいへり。その谷川のひろさ篳篥といふもののながさばかりなむ有ける。其夜は神主のいへにとまりぬ。翌日は雨そぼふりければゆきもやらず。其所に宮づくりし給ふはすなはちきびつ大明神と申奉る。火たき屋に釜ふたつをならべすへをきたりける。其かまひとつ神供をとゝのふる毎におびたゞしくなりどよむよしをきゝてのぞみはべりける。まことにいかづちなどのやうにしばしとゞろきてきこえけり。これぞ此神祕となむいひつたへし。それより備後のともといふ浦ちかきわたりに十日あまりとゞまりぬ。そのほどかのうら見にまかりぬ。そこに一夜侍りて。明方の浦の景氣をみやれば。近きわたりの嶋どもうすがすみ。こぎくるふねもよしあるさまなり。

忘れめや霞のひまの磯つたひ漕出る舟のとものうら波

さる歌よみたるよし主にかたりければ。感じてこれをかきとめける。さてみしとものうらのむろの木はとこよにあれととよめるはいづこぞとたづねはべりければ。むかしはこの浦に有つといひつたへたれど。今はあとかたも

はべらねばさだかにしる人もさぶらはず。されどあの磯にありしなどふるき人は申をきたりける。いざさせたまへをしへたてまつらんといふ程にまかりたれど。ことなるみどころもなく。たゞ波のよせくるのみにてぞ有ける。かく名ある木もあとかたなく。何事もむかしにかはりゆくこそもの毎に悲しくははべれ。其かへさにしる人ありければ。かしまとゞふ所にたちよりけり。主さま〴〵にもてはやし。いざ此あたりにしかるべきかゝりあり。鞠なむつかうまつれとしゐて申けるほどにさりがたくおぼえて。裝束などとりよせ。日暮るまでまりけりなどしてあそびける。其あたりなる男女どもみなあつまりきゐて見けり。田舍にはがゝることもめづらかにやおぼえけむ。さて月の山のはを澄のぼりてさやかなるに。故鄕人もかくやながむらんとおもひいでて歸にけり。玉ぼこのみちもはるかならねば。いくばくもあらぬに來つきぬれど。內に入べくもおぼえで。笈のまへなりける辻堂のこぼれかゝりたるいたじきのうへに夜ふくるまでたちて。月やあらぬはるやむかしとひとりごち居て侍りけり。あくればふるさとへ文つかはす。したしかりけるともたちのもとに。かくなむ。

思ひきや同し此世にありなからまた返りこぬ分れせむとは

おなじ國おのみちといふ所より船にのりて。おもしろき浦々にこゝろをなぐさめて。すこしふるさともわすれぬべきこゝちしてなむくだりけるに。春の物とて雨そゝぎしけるに。日もやう〳〵暮なむとすれば。人住所にもあらぬわづかなる沖の小嶋に舟よせて一夜寢にけり。たぐひなくものこゝろぼそう。うきねのあはれも身にしられて。まどろむとしもなくなみだのおりしりがほなるに。ときしもあれ。蓬

もる雫のたもとにくはゝりけるをみて。

夜もすから篷もりおかす春雨にうきねの袂なたしほるなり
見もはてぬうきねの夢の行末なさそひてかへる波の音かな

なみぢはるかに分過つゝ。いかゞ有けむ。此ほどのつかれにや。眉のうへおもくなり。心むすぼほれ。たゆたふ舟のうちもいぶせくうるさかりければ。すこしこゝろやすめむと。童ひとりぐしあたりの嶋にあがりて。こなたかなたみありきけれど。稀にも人のゆきかよひける跡さへなかりけり。波のをとのみすごう聞えて。いとゞ袖のうへもしほれがちなるに。むかしいかなるものゝわざにか有けむ。五丈ばかりありける石の面に。哀（月清下）なり雲路（に流）つらなる浪のうへにしらぬ舟路を風にまかせてといふ歌をぞかきつけける。また人もまどひきて。かゝる所のあはれを身にしりけるよといとかなしうをしはかられぬ。其はまにおりゐて手ずさみながらちいさくうつくしき貝どものおほくあるをひろひもちて。やう／＼もとの船にきけり。下（隣イ）の國安藝のいつくしまに詣で。一とせ筑紫にくだりしときやどりける坊の主をたづね侍りければ。をとゝし身まかりぬと弟子なりける法しのかたりける。今おもへば其頃七そぢばかりになむみえつる。うらむべきよはひならねど。またかへりこぬ道はいと悲しうなむ。あひみてものがたりなどせし程は六とせにぞなりにける。なに事もはかなき夢とのみ成はてゝ。みなかへらぬむかしと成にけり。彼坊の泉水こゝろをつくし。草木などうへをきたり。

なき人の手つから植し草木ゆへ庭もまかきもむつましき哉

とよみければ。みな人袖をなむぬらしける。其庭の内にをのづからいと大きなる石あり。こけむし物ふりたるうへにいとおもしろき松ひ

とりたてり。つくりなさば此外のことはさもありなむ。是にはいかならむたくみの人もえをよぶまじかりける。程しあれば岩にもやとながめられし。それよりまた舟にのりてくだりけるに。あさがすみふかくたちこもりて。わが友舟もありやなしやとおぼつかなきまでたどるに。霞のうちより鴈の聲かと聞えて。から櫓のをとしたるもおかしきに。船人のこゑたかくひきながめて。何事とえもきゝわかぬうたうたひつゝ漕くるもめざむるこゝちす。霞やう〳〵晴渡りて。詠やれば。遙なる沖にうかぶ船も。かもめ千鳥などのやうにちいさくみえて。よそめ計やといへるさることぞかし。その日暮にければ。ある浦に舟をよせて。今夜は月のいでしほに湊こぎいでむと艤ひしけるほどに。自は濱にあがりて。淸き礒まにたゞずみければ。ほどちかく海士のいさりする火みえたり。さてはあのわたりや浦人の里ならんと尋まかりけるに。家もはか〴〵しき柱は立作らず。から櫓かぢなどいふ物をうちわたし。たゞひとへにまばらなる篷をひきかけ。岩のかどを耳にあて。身をも眞砂につけてぞふしにける。かれが身に生れたらましかばいかゞせむ。をのれは住家とおもへば。さまでうからぬにこそ。やう〳〵月もすみのぼりて。渺々たる眞砂にひかりあひぬれば。玉をしきたらむやうにみえける。ある人海邊の月といふ事をよめと云。

なく網の中にしつめる月影をなのかものとやあまの引らむ

とよみて。あまたたびの波まくら梶枕。しほれこし袂ほすまも覺えで。あくがれ行に。もじの關にもなりぬ。さのみ船のうち波の上もたへがたくて。あかまが關にあがりにけり。ある寺に先帝のみかたち幷一門の公卿殿上人。局内

侍以下まで。はかなき筆のあとにのみうつしをきたり。世へだたりたる事とおもへど。其時のこゝろうさ。しづみ給しありさままで。かずかずに思ひ出られて。かなしくおぼえければ。

所せく袖そぬれけるこの海のむかしをかけし波の名殘に

それより陸路を駒の足にまかせていそぎける程に。豐前の國きくの高はまにとまり侍りしに海ちかき所なれば。おりふし波風はげしう。よもすがらうちもふされず侍しかば。

夢にだに宮古のつてはさもあらで波の音のみきくの高はま

幷の國筑前はこざきの松原。きゝしより見るはなを景氣ことなり。彼社頭は西おもて海邊に向はせ給ふ。戒定惠の箱うづまれてしるしに植られけむ松神さび。申もをろかにぞ侍る。愚詠一首つゞけまほしく覺えはべりしかど。所のありさまにけをされて。本意なくやみにけり。それより程ちかき博多といふ所に四五日ありけるうちに。そでの湊とこと〴〵しくいはれたるはいづくぞ尋見ばやと申ければ。あるじこゝろある人にてしるべしけるに。あるじのいはく。今こそしほのさしきて水も少はべれ。常は無下にいふがひなくさぶらふものをとぞ申ける。まことにもろこし舟よせつべき浦ともおぼえず。又菅原のおとゞ住給ひし宰府といふ所やちかくさぶらふと問はべりければ。これより三里あまりやあるらむと申す。さらばよき程なりおがみ奉らむと詣でて。こなたかなた名所どもみありきしに。なりひらの色になるてふとよみし染川も其かたなく。水さへかれはてゝ。むかしのあとといふばかり也。思ひ川これもきゝしばかりにはあらねど見所おほかり。彼いせが。おもひ川とよみたりしも。水なくあせなばくちおしかるべきを。絶ずながるゝこそ人の言葉のまこともあ

らはれてゆうにははべれ。さてかへりくるみちに。朝倉山のほとりにて。

むかしをや忘れはてけむ郭公きけとなのらぬあさくらの山

道の行てにひとりかく思ひつゞけける。一日二日ありて名護屋にまかりけるに。みちすがらの名所どもたづねとはせければ。是ぞいきの松ばらと申すといふ。さる事あり。太宰帥隆家筑紫にくだりける時。扇たまはせ給ふとて。枇杷大后宮。涼しさはいきの松ばらとよみしところにぞあなるか。まことに歌人はゆかずして名所をしるとことわざにいへるがごとく。松原の景氣海にちかく。ちとさしあがり。たかきところなれば。すゞしかるべき境地なり。玉嶋川。松浦川。何もやがて海にながれいでてぞ侍る。松浦川は七瀬の淀とよめるにたがはずいと大きなる川にてぞありける。彼松浦さよひめがひれふりしより名にいはれけむ山も。けぢかき程にみえていとおかしきさまなり。鏡の神にといへるも。都にておもひおこせしほどは。いとはるかにて。いかなりけむ宮居ぞなどこゝろあてにせしことも。おもかげうかびたるやうに覺えて。いとすぐれたりける。其日なごやにいたりて。草まくらむすびさだむるほどもはべらぬに。ほとゝぎす一こゑをとづれて過ければ。

郭公はつ音きくにはなぐさまで出し故郷をぞ忘れぬ

なれもかへらむにはしかじとなけば成べし。ふるさとのたよりもとめてかくなむいひつかはしける。

あまさかる　ひなのなかちに　おとろへて　心つくしの
旅のそら　草葉を分る　たもとより　をくるゝ跡の
なみたのみ　かゝる袖こそ　わびしけれ　けふてをゝりて
かぞふれは　をのかふる里　立いてし　日數の程も
いまははや　とをとてむつに　なりにけり　たのむことゝは
むはたまの　夜の衣も　かへしつゝ　夢のたゝちの

あふことを　玉のをにして　すくれとも　それさへうとく
なりゆけは　何によりてか　さゝかにの　命をしはし
かけもせむ　なをもみまくの　ほしかるは　また二葉なる

たてしこの　花のうへなる　ゆふつゆの　思ひをくにち
いとゝしく　こゝろの闇の　はれやらぬかな
別れつゝ幾としふとも命たにあらはふたゝひ歸らさらめや

群書類從卷第三百三十九

紀行部十三

あつまの道の記

仁和寺僧正尊海

天文二の年神無月後の四日にあづまのかたへことのようありて下り侍るに。はるかに都をかへりみて。

すみなれし都の空をわかれては遠くなるまでかへりみる哉

逢坂の山をこゆるとて。

いつかへりいつあふ坂の關(山イ)ならんしられすしらぬ旅の行末

からさきの松をみて。矩をこえざる年ばかりなる法の師。あとに獨いまさん事を思ひて。

今日よりや思ひを志賀の浦みても松はひとりの古郷の空

ひえの山の東坂本にて。雨ふりて。旅人も出ざりければ。空もつれ〴〵と心うくて。

旅衣しほれそそむる神無月しぐるとはなきたゝ春の雨

舟のうへより大ひえの雪をみて。富士の山を思ひ出て。

涙のうへのおひえの雪の面影にまたみぬ山を思ひやるかな

木の葉の船のうちにて。同道の人いひすての發句所望しければとりあへず。

さゝなみやたゝむ木のはの沖津舟　盛親

浦半の山をしくれゆく雲

たちかたの空に鷹たつ聲さえて　五郎四郎

しまの里といへる所にとまりて。

都出て新嶋もりのかりまくら夢はかりこそ行かへるらめ

つくまといへる里にて道にくたびれぬれば。餉いそげども。宿のあるじその事なければ。

とゝせなんつゝまい里のはたこいひ難面人はなへもたかすや

朝妻の浦にとまりて。その朝おき侍りて。

みし夢のあさつま船や立かへる涙はかりな袖に殘して

醒井の里にて濁醪といへるをのみて。

あしけれとのみてなさん二日ゑひけふ醒か井の水臭き酒

日はてりながら伊吹が嶽を見れば。うち〳〵もり。さながら雪のふるけしきをみて。

寒さゆる空は日影のさしなから伊吹おろしや雪と降覽

不破の關屋のあれけるをみて。

板庇まはらになれは山風の不破のせきもる月そさやけき

垂井の宿にとまりて。その夜の嵐はげしくて。朝氷はじめてむすぶを見て。

小夜風のつもる木のはの下くゝる水のたる井のうす氷かな

いなばの山の麓井の口といへる所に一日逗留し侍れば。伴ひし人の世にはかなくなりしよしいひ侍れども。まことしからねばまかりてとはんとおもふに。しか〴〵ことのよしをかたれば。

世中なひとは稻葉の峯にあふるまつやなか〳〵はかなかる覽

尾張の國やなといへる所に一夜をあかし侍れば。その里にいとうつくしき若衆ありけり。酒などたうべて。そのあした起わかれければ。

あつさ弓やなのさとひと一すちに思ひわかるゝ横雲の空

てんがくがくぼといへる野をゆけば。山だち出るよし申て。いぶせくおどされて。

あふれたる山たちともかいてあひて串刺やせん田樂かくほ

もり山といへる所にとまりて。旅寢いと寒ければ。

もり山の里の名にあふ宿かれはさよもすからに袖そしくるゝ

矢作の里岡崎といふ所にとまり侍りて。よしあることとあれば。さやうの事おもひ出て。

もののふのやはきの里の跡とへは昔に成てしるよしもなし

今橋といへる所にとまりて。うき世の事どもおもひつらねて。

人なみにたゆたふことはいにしへも浮世渡りのかゝるいま橋

遠江の國濱名の橋のあたりになりて。

行末はさそな心もつくはれのみれとはまなの橋にかけはや

引間にといへる所にとまりて。

しろへして袖なひくまの野な行は萩やおはなの雪（すゝきイ）の降（霜イ）えに

あまがたにしる人あれば。そこに落着てしば

し足などやすめ侍れば。道芝居士發句所望あ

れば。彼竹翁に應じて。霜月廿一日に。

いろ見えてにほはぬ花か木々の雪　道芝

さえて風なきまつの朝あけ　文爪

打むかふなちのやまの端のとかにて

山内刑部少輔舘にて一座興行。

つきてふれゆきやみやこなわすれ草　道芝

冬にいろあるやとの梅か枝　等悅

春さむき月にうくひすなき初て　通直

都にて馴し人。この所にくだり身まかり侍れ

ば。彼廟所（前イ）にいたりて松風さびしく吹ければ。

なれ〳〵し人よいかにとことゝへは答ふる計松風そふく

彼庵主返し。

都よりしほれこしてもしほるらんなきか跡とふ今日の袂は

庵主侍れば。山家さびしからんとて。常々とひ

給ふ人に。

都よりすみよかりけり奥山の心なしれはさひしさもなし

また庵主かへし。

都いてし心のまゝの心かはまたやまさとなうしとおもはぬ

是より不盡見むとて立出ける道に。原といへ

る所に。庵主に手ならふ人の里あれば。そこに

いたりて。夜もすがらわかき人たちとかたり

侍りて。

夢うつゝ何と定めんかりまくらかはす言葉のうちに別れて

おなじ家のあるじ。ゐかけなどいひつけ侍れ

ば。何となく心のおくゆかしくて。

おもひきや濁らぬものな我心今朝しも何のいもゐせよとは

これより懸川といへる所にゆきて。しる人を

たづねけれどあはぬをうらみて。

（う歟）泪らみこしくすてふぬのなかけ川のかくろもほさぬ涙也亀

又この所にて夕暮淋しくて。はるかに都のか

たをみ送りて。

こゝにきて日のいるかたを詠やる山よりにしや都なるらし
小夜の山をこゆるとて。
立歸りいつかこえなんとはかりも頼めをきける佐世の中山
菊川の宿をとをるとて。
冬かれの山ちのくさもうつろへる霜のした行菊川の水
岡部の里越ゆくに。かたるべき友もなければ。
置霜のをかへの里に友もなくひとり過行(かてのイ)すきの下道(いにイ)
うつの山をこゆるとて。
いかなれはうつの山とはむは玉の夢より云し名にや有けん
大井川をわたるに都のあたりにおなじ名あれ
ば。それさへゆかしくて。
都にしかよふこゝろの大井川名にたつ涙はかへりもやする
木がらしの森のあたりくすみといふ所に寺あ
り。そこにとまりて月の影さむきをみて。
川なみのさえゆくまゝにやまのはの月にさはらぬ木枯の森
しづはた山に淺間大菩薩の宮あれば。それへ
まうでて。かへるさのみち雪うすくちるをみ
て。
から衣しつはた山になりかくる時雨や雪の下染ならん
遠江にてみしよりも今駿河にて富士をみれば
なをまさりて。
朝夕にいくたび詠こしよりもちかまさりする雪のふしのね
三河國八橋のむかしをとふに。から衣の歌あ
はれに思ひ出て。
言葉のたれしとそなるかきつはたかけし衣のゆかり戀しも
鳴海の浦に出て月をみて。
山のはのかすみの出るほとみえて月になるみの浦靜かなり
星崎のうらをはるかにみわたして。
春のよの海にいてたる星崎のほのかにみゆる浦のともし火
都へかへる事うれしくて。
都へとひなのなかちをたちかへる霞のころも錦なりせは
春雪といへる題にて。
ふるとみてつもりもそせぬ春の雪の庭の木草にあまる露哉
十四日立春なれば。
山はまた霞ともなきあしたより人の心の春や立らむ
是よりのぼりぬれば。道芝離別の短册を路次

までをくり給ふ。

人そあろえやは又とも契りたかん老の行ゑのけふの分れは

やがて使にかへし。

老のなみ立わかれても出舟のあふせをまたとたのめぬる哉

此返歌にそへて。たちなれし人々の方へ。

おもひ立し旅よりもうきかり枕あまたなれにし宿の別は

浦づたひして歸るとて。富士のけしきの面白をみて。

たひならてみまくほしきは富士のねのはれ行波の月雪の空

是よりのぼり侍るに。藤枝長閑寺といふ所に善德寺いますほどに。立よりぬれば。和漢の一折興行。發句所望あれば。

ゆきやらてはなや春まつ宿の梅　喜卜

友三話歳寒　九英

扣氷茶煎月　善德寺　承芳

又是より遠江天芳道芝菴へかへりて年をこし侍るに。明年の二日子の日なれば。

今日といへは野への小松のうら若みねの日に千世を引例哉

同七日に若菜の題にて會興行。

なへて世のけふのわかなに言のはの慰め草や積りそふらん

十二月十八日の夜。於二中御門一一座御興行の發句申せと仰ければ。

あけほのの雪のうへみむ山もなし　中

月に色そふまつの寒けさ　藏

颪かれもこほろあらしのさよ更て

同廿三日の夜月待に。又一折。

ふるゆきのつもるやとしの末の松　中

山風さむみ峯のあさあけ　藏

いろ雲をわするゝ月の影すみて　喜卜

清見が關にいたりてこれより奥へはゆかざりければ。

心よりこゝにさそはれ淸みかた關とめらるゝなみのあらかき

是より三保の松原をはるかにみをくりて。

朝なきに蜑のをふねもほの〳〵とみほの松原波やこゆると

ふる里に歸る心をとかむなよ錦にまさる墨の衣は

しらしかし水の上行かつをむしわかあしふみにならふ心は

右寧海僧正紀行以太田覃本挍合了

むさし野の記行

北條氏康

天文十五年仲秋の比。むさしのをみんとて。此とし月おもひたちぬる事なれば。人々あまたうちつれて。小鷹がりしてあそばむとて。みなみなかりの裝束して馬にうち乘。まづかまくらにまうでける。あなたこなたの古跡をながめ。八幡山より四方のけしきをながめ。小礒大礒をみわたせば。をしやかもめの波にたちさはぐをみれば。

なし鴨のたつ白波の礒へよりあまのみるめを袖にうけはや

大礒の波うつ分て行舟はうき世を渡るたつき成らん

すぎにし庚子のとし。宿願の事ありて。此宮にまうでけるが。やう〳〵八とせあまりにや成ぬらむとおぼえはべる。わか宮の御前にまいりて。

たのみこし身はもの〻ふの八幡山いのる契りは万代までに

さてこ〻かしこの谷々山々。由比のはま。大鳥居。古寺古跡を詠め。あくれば藤澤の北松井の庄に。三田彈正忠氏宗が宿所に。一夜をあかして行に。これなむこよろぎの磯といふ。

きのふたちけふこゆろぎの磯の波いそいで行む夕暮の道

比は八月上旬。あさ霧ふかくわけ入て行に山あり。いは山といふ。此山のうしろは甲斐の山。北はちゝぶなど申はべる。それよりむさしのくに勝沼と云所につきぬ。齋藤加賀守安元此所の領主なり。つね〴〵みち〳〵の事申かよはしければ。山海の珍物數をつくし饗應しける。此所に二日逗留して。それよりむさし野をかりゆくに。まことに行どもはてのあらばこそ。はぎすゝき女郎花の露にやどれるむしのこゑ〴〵。あはれをもよほすばかりなり。

むさし野といづくをさして分いらん行も歸るも果しなければ

いにしへの草のゆかりもなつかしければなり。これもむらさきの一もとゆへなるべし。

隔つなよ我世のなかの人なれはしるもしらぬも草の一もと

あくれば八月十三日。あさ霧いよ〳〵ふかくして。道もさだかにみえわかず。馬にまかせて行。長井の庄にもつきぬ。まことやわかむらさきの卷に。かゝるあさ霧をわけいらんとあるもこれなるべし。大澤の庄などを行に。やうやうすみ田川にもつきぬ。河づらをみれば。まことにしろき鳥のはしとあしとあかき鳥のむれゐて。魚をくふありさま。むかしをおもひいでて。

都鳥隅田かはらに船はあれとたゝその人は名のみありはら

むかひは安房上總のあたりに見わたさる。こゝに葛西の庄淨興寺の長老。とし八十餘にをよべるが迎にいでられ。寺内に立より一宿すべきよし申されければ。河をわたり。かの寺に行て一宿するに。夜に入。風ひやゝかに吹たり。松風入レ琴といふ事を思ひいでゝ。

松風の吹聲きけはよもすからしらへことなるねこそかはらね

あくれば。駒をはやめかへらんとて。もとの道にさしかゝり。いつこよろぎの磯づたひ。日數つもりてけふは八月中旬にも成ぬ。小田原にこそつきにけれ。

右武藏野記行以扶桑拾葉集挍合了

東國陣道記

玄旨法印

二月廿九日。尾州熱田に居陣。社務惣撿校の家にとまりけるに。あるじまた社僧寶藏坊出られて雜談の次。當社の內。八劔宮は日本武尊たるのよし物語ありて後。發句望ありければ。

かぞへ見んいく夜かれぬる花の宿

晦日。參州にわたりて。細川の谷の流と聞て。

細川のなかれの末をくみゝれはまたいにしへに歸るなみ哉

三月朔日。矢はぎ川をわたるとて。

ときてをけにかはのくにの矢はき川まくいと水をつくる計に

四日。遠州みかたが原を行に。是よりも富士のみゆると人のいひけれども。あま雲はれず。五日みつけのごふといふ所にいたりてみるに。おなじくもりにてみえず。

方角もいさ白雲にめそくはるふしをみつけのこふのいられは

六日。さよの中山ちかき山口といふ所にとまりて。月まち出る雲の雨に見わづらひて。ふせるとて。

袖にしもかたしく月の影きえて春雨くらきさよの中山

八日。うつの山にて。

ゆめならて思ひかけきやうつの山うつゝにこゆる蔦の下道

此山をこえて行にまりこ川と人のいふをきゝて。

入數には誰をするかのまりこ川けわたる波の音はかりして

猶ゆき〳〵て駿府につきぬ。富士をはじめてみ侍りて。

なか〳〵にかすまぬふしの高根かな

府中に逗留の中に。

あまの原明かたしらむ雲間よりかすみてあまる富士の雪哉

小田原居陣の時。民法より書狀の次。扇子をくられける返事に。

時をえているゝ扇のはこれ山日のもと迄もなをしつめおり

一如院より山中にて一柳討死のことを。

あはれなりひとつ柳のめも春にもえ出にたる野への烟は

かへし。

いと毛なる具足なかけて鐵炮の玉にもぬけゐ一つ栁か

同一如院よりにら山居陣のうちに。

陣衆のこまかなふみはいつの國みしまこよみと開きてそ見るかへし。

やろ文の月日をえらへ大小のあるをみしまのこよみにはしておなじ所より。

山の名の呪みあひたるせめ衆よ忍辱慈悲にひかせてもたへかへし。

五月十一日。鎌倉見物のためまかりける道に。

ひかせえすもみ落すへき韮山は手をすりこきの音のみそする

大磯といふ所にしば〳〵とゞまりて。こよろぎの磯を立所の人に尋けるに。この所のよしこたへ侍るに。釣舟のおほくうかみて見えければ。

みるかうちに磯のなみ分こよろきの沖に出たる海士の釣舟

十二日。かまくらを見侍りしに。かねておもひやりしにもこえてあれたるところなれば。

いにしへのあととひ行は山人のたき木こるてふ鎌倉の里

上總國昨夢齋陣中切々訪來。付興行。六月廿二日。

まつによゝは千くさのはまやあきの涙

古織より角田川見物の時歌など讀たるよし文を送られける返事に。

都より心に人のかけすゝりうたよみてする角田川かな

水無月晦日。御祓する日と人々申せしかば。早川陣取の山の麓なり。名寄に名所のよしあり。

みそきせし袖こそぬるれ老のなみうつる月日も早川のせに

七月十五日。相わづらふにつきて御いとま也。歸陣には甲州どをりと思ひ侍りて。あしがら山をこえて。竹の下といふ里にとまり侍りぬ。

あしからの關吹こゆるあき風のやとりしらるゝ竹の下道

十六日。甲斐の內河口といふ所にとまりて。曉ふかく御坂をこえて甲府につく。その道に黑駒と云所あり。

ときのときき出へきさいなまっ一首あへてふるまふかいの黑駒

しほのやま。さしでの磯を見やりて。

秋のよの月もさしてのいそ千鳥しほの山をやかけて鳴覧

甲府にて雪齋宗壽所望ありしに。

雲霧に月の山こす風もかな

夢の山宗壽さしきより見えければ。

頼む其名とはしらすや旅まくらさそひてかへる夢の山風

廿一日。諏訪の社ちかき上原といふ所にとまりて。あかつき旅たつとて。湖水に月のうつりたる影をみて。

すはの海や秋のよわたる月影に氷のはしもみる心地して

廿二日。木曾の内福嶋といふ所に日たかくつきて所々見物せしに。よしある山寺の門に入てみれば。額に萬松山とあり。寺内に行て尋るに。住持とおぼしき僧の出られて。しか〳〵物がたり有。寺號は興禪寺となんいひける。江州黄門草津湯治の刻。甯化和尙一宿。又越後直江城州やどられける時。聯句などありたるよしありて。主の句などかたられける。次にね覺の床といふ所。おもしろき景氣などいはれければ。さらばとて卽座發句をして。入韵所望せしに。

月のみかね覺のとこのあきの月

旅亭砧響冷　短李

この明がたに木曾のかけはしを渡りてのぼりけるに。月の河上にうつりてすさまじきに。霧わたりて。夜のさまいへばさら也。

世中のあやうき道も雲水のなかはにいつる木そのかけはし

濃州を のぼりけるに。みのの お山。信長公御代。公方御入洛の 御使にたび〳〵見なれし所なれば。

幾かへりみののお山の一つ松ひとつしも身の爲ならなくに

鎌倉へまかりて。それよりむさしの國むつらかな澤見物に行侍しに。田邊のいそといふ所あるよしきゝて。

名にきゝて歸る心やさそふらむおなし田邊のいその夕波

霞山。同國なれば。見やりて。

あけぼのや風の上なるうす霧に霞の山の面影ぞ立

公事根元抄。菊亭右府へ尋申事ありてわたり侍りけるに。折ふし雪ふりけるに。歸宅以後被レ送侍し短冊。

言葉の道をもとめてとひ行はけさ初雪のあとやつけまし

廿七日の夜。壽命院私宅へたづねられし時。約束せし東大寺の香とり出し。えりてつかはし侍るに。つとめての朝。木色うすし。なを灯下のあやまりにとり侍れば。殘たるを所望のよしありて消息ありけるに。返しつかはすとて。

えりつゝも人の手にとる東大寺もとくらきよの誤りにして

鷹狩ありて尾州より關白殿歸洛のきざみ。鳥どもおほくもたせられければ。

聖門主

鵜のあし山鳥の尾にさきのあしなが〳〵しくも通るたか人

かへし。

短きも歩み出つゝ鴨の足のしたやすからぬけんぶつにして

右東國陣道記以詞林意行集挍合了

蒲生氏郷紀行

天つ正しき二十の年。前關白おほいまうちぎみ入唐したまひ侍らんとものしたまふに。日のもとの武士のこりなく御供しはべるに陸奥よりも立侍りけるに。白河の關をこゆるとて。

陸奥も宮古もおなし名ところの白河の關いまそこえゆく

とよみて出てゆくほどに。下野の國にいたりぬ。いときよくながるゝ川の上に柳の有けるを。いかにと尋侍るに。これなん遊行の上人に道しるべせし柳よといふを聞て。げにや新古今に。道のへに淸水なかるゝ柳かげと侍りしをおもひいでて。

今もまた流れはおなし柳陰行まよひなは道しるへせよ

とうちながめて行けるほどに。こゝは那須野の原といふ所なりければ。あまりに人氣もなく物さびしかりつるまゝ。ふと思ひつらねて。

世中に我は何なか那須の原なすわさもなく年やへぬへき

などいひ〳〵て打過けるに。佐野の舟橋につきぬ。里人の出侍りしにてたづねとひければ。此はしにて。昔人を戀ける人のむなしく成し有樣かうやうの事とかたるをきゝて。あはれにおもほえぬれば。

これや此さのの舟橋渡るにそいにしへ人のことあはれなる

とよみてうちわたりつゝゆくに。上野をもすぎて信濃國に入ぬ。淺間のたけにけぶりのたつをみて。我心におもふ人の事をおもひてよみける。

しなのなる淺間の嶽も何を思ふ我のみ胸をこかすと思へは

とものし侍るに。おなじ國の木曾といふ所を行ほどに。さびしげなる家ひとつふたつ有けるを。いかなる所ととひ侍れば。こゝなんみかへりの里といふ。跡に思ふ人なきにしもあらざりければ。おもしろき里の名なりけるものかなとおもひて。

限なくとなくもこゝに木そのちや雲ゐの跡をみかへりの里

猶ゆき〳〵てみのの國たる井といふ所にかりねして。

かりねする宿の軒端のあれはてゝ露もたる井の明かたの空

とよみて。はや夜も明行程にたび立つゝゆきければ。近江の國にいたりぬ。爰は我生國なりければ。故鄕いとなつかしう思ひける。

おもひきや人の行ゑそ定めなき我ふる鄕をよそにみんとは

とよみつゝのぼりけるほどに。はや程なく京に付て。

はる〳〵と思ひし我そけふははや心のまゝの都いりして

右氏鄕紀行以加賀美遠清本挍合畢

東路の津登

宗長

白川の關のあらまし。霞とともにおもひつゝなん。幾春をか過しけん。此秋をだにとて。永正六年文月十六日とさだめておもひたちぬ。その日は艸庵の隣家齋藤加賀守安元一折と有しかば。辭しがたくて。發句。

風にみよいま歸りこん葛葉哉

わかれ路におふるといふ古言をおもひ出たるなるべし。此程は丸子と云山里にぞ有し。十九日にするがの國府より出たち。沖津の舘にたちより侍り。亭主左衞門の宿所このごろ新造して。わざどもなどある折ふしとて。興行に。

月の秋の宿とやみかく玉椿

あたらしき宿を賀し侍るばかり也。沼津といふ處。長徳庵にて。庵新造に。

松に見ん年に眞砂の秋の庭

浮嶋が原をすぎ。箱根路を凌て。相摸の國小田原の宿に一日逗留して。藤澤にやすらふこと有。發句所望に。

朝きりのいつくこゆるぎ礒の松

此礒ちかき眺望なるべし。八月十一日。むさしの國かつぬまといふ處に至りぬ。三田彈正忠氏宗此處の領主たり。兼てしも白川の道々のこと申かよはし侍しかば。こゝのやすらひ十五日に及り。連歌たび〳〵有。

きりはたゝ（けさイ）わけ入八重の外山かな

此山家。うしろは甲斐の國の山。北はちゝぶといふ山につゞきて。まことの深山とはこゝをや申べからん。此山ふかきこゝろなるべし。おなじ處に山寺あり。前はむさし野なり。杉本坊といふにして。

露をふく野風か花に朝くもり

むさし野の景氣はかり也。
同十五日。氏宗おなしく息政定これかれ駒うちならべ。むさし野の萩薄の中を過行がてに。長尾孫太郎顯方の舘はちがたといふ處につきぬ。政定馬上ながらくちずさびに。

むさし野の露のかぎりは分もみつ秋の風をはしら川の關

この比。越後の國鉾楯により。武藏上野の侍進發のこと有て。いづこもしづかならざりしかは。ひと夜有て。翌日日たけて。長井の誰やらんの宿所へと送らる。夜に入ておちつきぬ。明る朝。利根川の舟渡りをして。上野の國新田の庄に禮部尚純隱遁ありて。今は靜喜かの閑居に五六日。連歌たび／＼におよべり。

露分て袖にみるへき野山かな

かれよりたび／＼のたよりにつきて。しら川のあらましもおもひ立ぬるこゝろばかりなるべし。又靜喜の發句に。

朝きりもしらてまたぬる小萩かな

萩の發句にはかばかりの風情耳なれ侍らず。若紫の卷にや。かゝる朝ぎりをしらではぬるものかなと。小萩にとりなされぬる。其興あさからずぞ。二日ばかり終日閑談わすれがたき事のみ成べし。岩松の道場にして所望。

花そくまもとあらの萩の月の庭

祖光とて知音の隱者その艸庵に一宿して一折催しありしかど白川よりの歸路にとて。發句ばかり。

風にみよ葉にしたかへる萩の露

小庵のさま成べし。靜喜より若殿原相そへられて。下野の國佐野といふ所へ出たち。足利の學校にたちより侍れば。孔子子路顏回。この肖像をかけて。諸國の學徒かうべを傾け日ぐらし居たる躰は。かしこくかつはあはれに見侍り。御當家舊跡鑁阿寺一見して。千手院といふ

坊にして茶などの次に。こよひはこゝにとしゐてありしかば。此院主もと見し人なり。かたがた辭しがたくて。三日ばかり有て連歌あり。

ふけあらしちりやは盡す柳かな

てにをはいかにとぞ覺え侍る。日を隔て東光院威德院にして興行。

風はわかし松にふく音荻の聲

杉の葉に月も木高き軒は哉

佐野の舘に又五日ばかり有て會あり。小兒音丸連歌器量なるあり。宿のあるじ山上筑前守興行。

けさよりは葉さへ色付萩か花

たゞ下葉移ふとや申べけん。佐野小太郎泰綱亭にして。

あさ露はさりけなき夜の野分哉

その夜野分しての朝なるべし。同越前守見參して。はへ〴〵しかりし事どもなり。此所は萬葉に。さの田のいねとよめり。舟橋もこのあたり成べし。兼載は坂東道五十里計隔て。下總國古河といふ所に。所勞のこと有て。江春庵とて關東の名醫。そのかたにて療治あり。ふみなどしてたび〳〵申かはし侍り。中風にて手ふるひやすからずと返事は有し。是よりみぶといふ所に行。横手刑部少輔繁世あひともなはれ連歌あり。こちごの執筆する有。

こすゑのみむら立霧の朝かな

此朝の眺望計也。室八嶋ちかきほどなれば。亭主中務少輔綱房。かれこれ伴ひ見にまかりたり。まことにうちみるよりさびしくあはれ也。折しも秋なり。いふばかりなくて。發句と所望せしに。

朝きりや室のやしまの夕けふり

ゆふべのけぶりけさの朝霧にやとおぼえ侍るばかり也。猶あはれにたへずして。

東路の空のやしまの秋の色は夫ともわかぬ夕烟哉

人々のもあまた有し也。此八嶋より日光山へ各うちつれ。かぬまといふ所に綱房父筑後守綱重の舘あり。一宿して。念此のいたはり筆にも盡しがたし。その朝日光へ相伴はんとて。たちのいそぎのまに。

わかえみんくろ髪山の秋の霜

所望はなかりしかども。あまりにこゝろざし謝しがたきばかり也。黒髪山のふもとなればれを貸し侍る也。鹿沼より寺までは五十里の道。此ごろの雨に人馬の行かよひとをるべくもあらざりしにや。寺の坂もとまで所々よりいでくる過分なりしこと也。坂本の人家は数をわかず續きて福地とみゆ。坂本より京鎌倉の町有て市の如し。こゝよりつゞらおりなる岩にもつたひてよぢのぼれば。寺のさまあはれに。松杉雲霧まじはり。檜原の峯幾重ともなし。左右の谷より大なる川流出たり。おち合所の岩のさきより橋あり。長さ四十丈にも餘りたらん。中をそらして。柱もたてず見えたり。山菅の橋と昔よりいひわたりたるとなん。此山に小菅生ると萬葉にあり。ゆへある名と見えたり。その日の入相のほどに宿坊鏡泉坊につきぬ。やがて翌日座禪院にして連歌あり。

世は秋もときはかきはのみ山かな

當山常住不退の地なる事をのべ侍る計也。夜に入て果ぬ。執筆は兒の十六七にやとおぼゆるにぞ。一座終日の興も淺からず侍りし。宮増源三などいふ猿樂のぼりあひて。夜ふくるまで盃あまたたびに成て。うたひ舞などして。ころおもしろき夜のさま。誰か千世もとおもはざりけん。あくる日本堂權現拜して。瀧の尾といふ別所あり。瀧のもとに不動堂あり。瀧の

上に樓門有。廻廊あり。右にみなぎり落たる河あり。まつふく風岩うつ波。いづれとわきがたし。寺より廿餘町のほど大石をたゝめる。なべての寺の道。石をしきて滑なり。これより谷谷を見おろせば。院々僧坊およそ五百坊にも餘りぬらん。むかし中善寺とて四十里のうへに湖有とかや。此寺よりうつの宮のほど六十里なれば。横くらといふ所半分の道とて。綱重又同道して連歌あり。

遠くみし立枝か宿の薄紅葉

もすの啼櫨の立枝の薄もみちたかやとのものと我やみるらんとおもひ出られてのこと成べし。うつの宮へ行折ふし。雨風吹出て。ぬれぬれ日くれてぞ落つきぬ。あくるあしたの晴まに當宮めぐり侍る。まことにかうだ〳〵しき神館也。此邊より白川の間纔に二日路の程なれど此ごろ那須と鉾楯する事出きて。合戰度々におよべりとなん。一向に人の行かひ絶て。那須のしのはらいとゞ高かやのみ。となり常陸ざかひをめぐれば。日數十五日ばかりに行歸りなんといふ。日比の雨も猶かしらさし出べくもあらず降そひて。きぬ川中川などいふ大河ども洪水のよしいへば。こゝにいつとなくやすらんはんも益なし。草津湯治おそく成ぬべし。さらばたち歸りねとさだまる。あまりに無下にも遺恨にもおぼえて。

かつ越て行かたにもときゝし名のなこそやこなた白川の關

折しも古河の江春庵所勞の人につきて同日此所への事にて。長阿脉などこゝろみらる。餘命おほからぬことながら。名醫の面談。かつ快然のおもひなきにもあらず。十三日宇都宮より又壬生へ歸りくる道雨風にみのも笠もたまらずして。日暮におちつきぬ。其夜神なりさはぎ。あめは夜ひとよ車軸のごとし。十四日午の

刻ばかりに晴たり。あたりの川ども洪水ちかき年には覺えずとぞいふ。名月とて連歌を催し行。こよひ發句古來趣向ことつきぬらんかし。いかゞとおぼゆれど。しゐての事なれば。

月こよひちりはかげたに雲もなし

たゞ晴天のこゝろ計也。比興々々。十六日に佐野へ歸り行間に太平とて山寺あり。般若寺と云。一宿して連歌あり。

鹿の音やそめは紅葉の峯の松

松杉のふかきさま成べし。十八日に綱重こゝよりかたみに別おしみて。又いつかはなどといひ。袖をひかへて。

六十あまり同しふたつの行末は君か爲にそ身をもおしまん

綱重長阿同年のよしといへば。たのまぬ身にしも又行末をおもふ心なるべし。けふも雨風やゝまずして佐野へ歸りつきぬ。館より來べきよし使あり。朝飯終日風呂など有て。此程雨風洪水のおそろしかりしをも又忘ぬるなるべし。そのあくる朝。舟橋を見にとて。安星珠易などいふこれかれうちつれてまかりたりし。まことに舟橋かけわたしけん跡見えて。遙々の山もと也。そのあたりの里の名。ふる戀路といふあり。中絶けんことも哀にぞ覺え侍る。伴ふ人々一首づつなどいふに。

おも影はけふもむかしの名もしろく聞渡りこしさのの舟橋

むかしの舟橋さらにめのまへの樣なれば成べし。舟橋の有けんといふ里に。小兒のいとうつくしき。これも馬にてふと出あふにぞ。目心もおどろかれぬるさまなりし。その里ちかく。梶原五郎景政の舘有。これも同じくうち出て。歸路にかの宿所にて朝めしのありし。丁寧のことどもにて。日たけてこそ歸り侍りしか。又越前守亭にして連歌あり。

山松や秋のはやしのふかみとり

この館の山もと。ふかき林つゞきの秋興計成べし。片見上野入道明見。宗祇多年の知音なりし人也。四十里ばかりへだてたる所よりこゝもと逗留のよしとてきたれり。此一座の第三などして。めづらしくおもしろかりしこと也。音凡小兒の里竹澤山城守宿所にて興行。

しくるとも心の色の木すゑ哉

兒の心あさからぬ色をよそへ侍るばかり也。又鑁阿寺にして。

ひとしほやかつしくるへき下もみち

横手の繁世。此一座にも出合て。かならず駿河にも詩ねきたるべきよし侍りしかば。

我庵はうつの山への松にはふ蔦のはとつる谷の細道

とぞをしへし。新田の庄に大澤下總守宿所にして。草津湯治のまかなひなどに六七日になりぬ。静喜にて又連歌あり。

かり衣きりやふきほす伊香保風

かり衣いかほといふ枕詞に旅のこゝろをそへ侍るばかり也。越州發向の心あてのよし有しかば。彼國靜謐の心も有べし。又さしむかひ。ふたりして五十句づつ百韻あり。

植てみぬ秋も有きや花すゝき　静喜
風も露けき庭の虫の音　宗長

醫光寺とて。高野にも院家有て。上下には駿河の國にてあひ見し人興行。門前めぐり深山のやうに植木しわたして此ごろ新造なり。

雲霧も世をへん横の林かな

草津二日路計隔て。大胡上總介館有。一宿して連歌あり。

霜の後つむ日を菊に宿の松

長月四日なれば。つむ日を待こゝろによそへ侍る計也。こゝより野山をすぎて青柳といふ里有。春ならましかばとぞ覺えし。此あたりにていかほのあらし時雨きて。よきかたもなか

りしに。荒蒔和泉入道宿所よりとて立よるべきよしあり。しばし有て。夕日はれやかにさしきたりしに。ふとおかびえ侍りしかば。

やとれとて時雨し秋の夕日かな

同行の衆。あるじ七八人して。夜に入て懐紙を折て。おもて計のこと成べし。宗祇周防の國より太宰府へ相伴ひて。長門の國の山路を越侍し。神無月のはじめ也。けふのごとくにうち時雨しに。ある人の宿所に雨やどりして侍し會に。

宗祇
たぐりきてとふ宿すぐる時雨かな

此折のことまでおもひ出られておもしろかりし夕ぞかし。はま河と云所に松田加賀守法躰して宗繁。この十年あまりこのかたいひかはし侍り。八九年のさきのとし。宗祇此道に相伴ひしに。信濃路より例ならざりしに。此宿所にて廿日あまり逗留。懇切のみ忘がたきことなるべし。一兩日有て重陽興行。

けさ幾重にみわた白き宿の菊

折ふし家新造也。かつは此たび立よるべきなど。兼て音信けるにやと見え侍る。いさゝかそのこゝろも有べし。大戸といふ所。海野三河守宿所に一宿して。九月十二日に草津へつきぬ。同行あまたありしまで。馬人數おほく懇切の送りども成べし。廿一日。草津より大戸へ歸り出侍りぬ。兼約とて一座興行。

時雨かは紅葉の中の山めぐり

きのふけふわけ出侍る山中。前後左右の紅葉の秋の興計なるべし。可諄九月廿五日大守佳例の法樂連歌。依田中務少輔光幸宿にして。

菊さきてあらそふ秋の花もなし

則懐紙を越後の陣へとなん。はま川並松別當にして。

色かへぬ松はくれ行秋もなし

その日九月盡なるべし。神無月朔日になりぬ。
又發句。
神無月里やふりにし花の春
此別當。俗長野。姓石上也。並松上野國多胡郡
弁官府碑文銘曰。太政官二品穗積親王。左大臣
正二位石上尊。此文系圖有。布留社あり。
布留今道
ひの光やふしわかれは石上ふりにし里に花咲にけり
當月異名小春によそへて。過にし花の春にや
と申計也。武州成田下總守顯泰亭にして。
あしかものみきはは雁の常世かな
水鄕也。館のめぐり四方沼水幾重ともなく蘆
の霜がれ。廿餘町四方へかけて。水鳥おほく見
えわたりたるさまなるべし。同千句興行。第一
發句に。
あさくもりけふもや雪のはつ時雨
おなじ千句に人にかはりて。
かさゝきやさえわたる橋の夜半の月

杉本伊豆守所にて。
年のうちの雨はしくれに殘りけり
又人の所望せしに。
木からしのこさは雪の下葉哉
鉢形のたちにして。
霜をへん生さきしろし松の千代
馬庭豐前守重直興行せし也。顯方いまだ少年
の行末はるかなることを賀し侍る計也。又一
座興行。發句。顯方にかはりて。
さえし夜なかされてけさや薄氷
連歌はてゝ酒など有て夜更侍りし也。當城逗
留の旅宿隨意軒といふにして。
神無月くれさりし秋か宿の菊
庭の菊秋を殘せるさま成べし。鉢形をたちて。
須賀谷といふ所に小泉掃部助の宿所に一日休
らふ。人數はなくて。懷紙表八句。
冬かれや萱か下葉の秋の風
むさし野の東野中のほどなるべし。霜枯の景

氣ばかり也。あたりの平澤寺にして。

こほりけり松にうこかぬ岩根水

本尊は不動尊。池にふりたる松有。又かつぬまにつきぬ。建長寺天源庵は。横山嶽の開山大應國師遷化の舊跡也。いぬる五とせばかりのさきのとし回祿す。庵領なども久しく知行して。およそなきが如くなり。紫野大德寺衆中。たびたび申くださるといへども。とかくことゆかず。此折ふしに堅眞と云人多年の知人にて。うちうちに申つたふること有て。江戸の館に六七日におよべり。連歌三百韻あり。

雪寒き松ゆく田鶴の朝日かな

遠山にこゝろはゆきの朝戸かな　上杉 建芳

雪はけさ水につもれるみそれ哉

こゝろは雪のといへるあたりふるめかしくて。しかも又めづらしげ也。一日づつ隔て。おもしろかりし會席也。すなはち天源庵領二箇所かへしつけらるべきよし。嚴重の事也。都部いまの折ふしには。まことに希有の事なるべし。品川といふ津にしる人あり。和泉堺よりきて。此六七年すめりとかや。長途窮屈。五六日休息して。ある夕なぎに海の邊にありきて歸りて。

夕なきか冬に入江の春かすみ

江春入二舊年一といふ句をおもひ出て。なぎたる夕のおぼろ／＼と見えわたるさまにや。安房上總下總めのまへの處なるべし。ある人安房のきよすを一見せよかしとさそひしに。いづこかさしてとおもふ世なれば。たち歸り江戸のたてのふもとに一宿して。すみだ川の河舟にて。下總國葛西の庄の河内を半日計よしあしをしのぐおりしも。霜枯は難波の浦にかよひて。かくれて住し里々見えたり。おしかも都鳥堀江こぐこゝちして。今井といふ津より

おりて。浄土門の寺浄興寺にて。むかへ馬人待ほど。住持出てものがたりの序に。發句所望有しに。とかくすれば程ふるにたちながら。

ふしのねは遠からぬ雪の千里哉

方丈の西にさしむかひ。ふじの雪くもりなく見え渡るばかり也。まゝの繼橋のわたり。中山の法華堂の本妙寺に一宿して翌日一折など有しかど。發句計を所望にまかせて。

杉の葉やあらしの後の夜はの雪

その夜の嵐のはげしかりしことまで也。けふはことに日も長閑にて。かつしかの浦春の如し。原宮内少輔胤隆小弓の舘のまへに濱の村の法華堂本行寺旅宿なり。十四日十五日。千葉の祟神妙見の祭禮とて。三百疋の早馬を見物也。十六日は延年の猿樂夜に入てことしはてぬ。十七日連歌有。

梓弓いそへに幾代霜の松

梓弓いそへの小まつ誰よにか萬世かけて種をまきけん。此本歌に小弓といふ名をくはへて祝し侍る計也。この舘は。南は安房上總の山たちめぐり。西北は海はるぐと入て。鎌倉山横たはり。不二の白雪半天にさしおほひてみゆ。駿河國にてみるよりは猶ほどちかげなり。遠くてみるはちかき山なるべし。十九日に又連歌あり。發句。胤隆。

さえし夜の嵐やふくむけさの霜

こゝろあたらしく風情至極せり。脇。

庭にかつちれ雪のはつ花

發句に景氣ことつきぬれば。たゞけさのさま計也。けふは一座もするぐとして日のうちに終りぬ。夜に入て延年の若き衆聲よきが廿餘人。ふきはやししらべまひうたひ。優におもしろく。さかづきの數そひ。百たびこゝち狂するばかりにて。曉ちかくなりぬ。のこりおほか

ることとなるべし。又濱の村本行寺にして。

聲遠し月やしほひの濱千とり

嵐降此第三。終日こゝろゆきし一座也。小弓にて盃のたび〳〵ざれごとなどいひしはたち計なる。その行ゑにや。あすたちなんとする夜更てきたりて。月まち出るほどもなく立歸りし名殘。ねられぬ老のすさびに。

おもひやれ礒のね覺のもしほ草敷捨てうし老の白波

伴ひきたりし人のかたへ。あしたに申つかはし侍る也。はまの村をたちて。けみ川といふ所に浦風あまり烈しかりしかば。一宿して。いまだ日もたかかりしに。人々物語の序に一折などのことにて。

玉かしは藻にうつもれぬあられ哉

可睡軒こゝまでうち送て。旅宿のなぐさめとりどりにして。翌日市川といふわたりの折ふし雪風ふきてしばし休らふ間に。むかひの里にいひあはする人有て。馬どものりもてきて。やがて舟渡りして。あしの枯葉の雪うちはらひ。善養寺といふに落つきぬ。おもしろかりし朝なるべし。此處は炭薪などもまれにして。蘆を折たき豆腐をやきて一盃をすゝめしは。都の柳もいかでをよぶべからんとぞ興に入侍し。けふの暮程に會田彈正忠定祐の宿所にして。夕めしの後も色々のことにて夜更ぬ。明日廿五日とて連歌の催しに。

堤行野は冬かれの山路かな

市川隅田川ふたつの中の庄也。大堤四方にめぐりて。おりしも雪ふりて。山路を行こゝち侍りし也。江戸に歸りつきて又の日館にして。

月や江による波たゝむ朝こほり

廿八日。品川へとての間に旅宿の古梅軒一折のよし有しかど。發句ばかりにて。

さきてかつ春なまちとれ梅の花

此軒號によそへて侍る計也。品川に兩日あしをやすめ。きつきといふ里あり。諸西隼人佐宿所一宿して。鎌倉ちかきあたり齋藤新左衞門光吉宿所に。一日めを煩ひて逗留。

梅に春たゝ蘆垣のちかさかな

門まで汐干しほみち有て。あしがきめぐり。梅さけるさま計なるべし。今月五日天源庵にたちよりて侍りし。修理のこと申あはせなどするほどに。淨光明寺の中慈恩院にして。

風やけさ枝にとをゝの松の雪

臘八。建長寺永明軒にして。和漢一折あり。

かさゝきのわたせる橋かあまつ霜

當寺天津橋などのことよせ計なるべし。

對雪水仙王　永明

其日。明月院參拜の次。漢和あり。その席。

客若花兄弟

脇數篇辭退すといへども。應二貴命一許。

行年ふかき松の木高さ

蘇谷宮内少輔仲次一會興行に。

霜雪なうは毛か鶴か岡の松

當社星霜の事なるべし。去秋七月中旬比よりおなじ十二月はじめ鎌倉までのことをかたのやうにかきしるし侍るものならし。

右東路の津登以藤野章甫本挍合了

紹巴富士見道記

今年永祿の春も十かへりの初。久舖あらましの富士見るべき事を頻に思ひ立日より記付ものならし。此度の心ざしは。都にあり詫て出るにも不レ有。行末にて頼める所もなし。奈良の京を離れて。一昔のあなたより思ひ渡れる橋立。玉津嶋。いづれか先にと定かねながら。先遠所よりとこゝろ内成比。江村堯次與行。

春草のうへはつれなし野邊の雪

席に連る曾谷康敬。張行すべきよしありしを。秋までなど申けるをあやしみあへるに。闕の東などいふ事になりて。賢くも聖護院殿聞しめされて。

大ひえの春さへいかに富士の雪

と被二遊付一候て。二百韻可レ被レ遊。愚句をもと仰有ければ。

春來てやしろ人をまつ山櫻

御入峯を祝たてまつる計也。廿六日。歡喜光寺にて。

朝な〳〵風の色そふやなぎかな

廿九日。從二殿下一發句可レ申の御氣色あれば。辭しがたくて。

春の日の下草もろゝ色もなし

夜に入。かさね土器數添て。殿下新鄕王樣我さへもなくなど御詞の匂ひも不レ淺に源氏物語の宇治のまきに。かゝづらひけるとがめられしも思ひ出て。月にかつき出たらば。聊歌ならましとか云あへる。朝日には小野內言上。歷日のため万句執行。

梅か香やそふもろこしの峯嵐

四日には玄哉いさゝか口決の事傳授。喜にとて。

色も香もしろにおしまし花の枝

花やかなる席。味も極なき會ぞとなり。六日に

餞別とて興行に盃可レ進の色めかしさ。しるすに不レ有レ暇。

霞にもさはらぬ月の天路かな

七日には故三條西殿稱名院殿御影前。昌休の印古道分て。夜に入ては忍び〳〵の名殘惜中にも。馬場康清とて若人有。三年のあなたより風雅執心とて。獨臥をも慰らるゝこゝろのほどは。過にし秋の比の會に。

松に蘿契は秋のいろもなし

かの人に偕老のそひねも憂東路のものほし草なり。十日には朝曇も無ニ覺束一を。皆々誘れて出る袂のこと〴〵鋪も空をそろしうて。黄老には立ながら櫻の御馬場にて盃とりかはし。弱冠は關山までなどと有しかば。かたへはをくらかし。先にたてゝ。祇園まで笠もとりあへず行玉ひぬ。今日しも中の日也。富士涌出も此日也但舊事記不レ詳。傳聞之。など云て。神前にて。觀世宗節同太夫もをくりなれば。こゑ〴〵の手向行末を祝して。ある坊にてまた酔のあまり。けふはくらして。月の桂のはしに出てなど云て。心敬舊跡。また桂の枝橋とて。宗祇在京のはじめ住る所こそよき所とて酒呑けるに。大津馬早めて。迎數多來りければ。何となく行けるに。若き人々は粟田口をさへ行過て。我を松坂と云ける。後よりの事は夢計りも覺えず。策馬の走非過て。相坂と云名を聞て。醉少し醒て。日光院の僧正の室に入なり。十一日の夜。曉待和尚名もしるく。鐘の音にね覺せし朝の然。善法坊とて情深きこゝろを盡し。花光坊圓藏坊など誘ひ。關の清水のあたり迄行。道すがら會も數多有べきの約諾もかひなし。責て發句せよと有し故。

關山やたゞさくら戸のかためかな

進藤城州より船よそひて來るよし告ければ。

打出の濱傳ひに行むかふ處に。粟津久昌院。冬こゝ立なづむ駒も斷るを。野路の篠原へといひあへるに。石山世尊院。一首歌に肴そへてめて來り向ひ給へるに。會なども兼てはと有しに。思はぬ方の船出ならばとて物語しける次。わが寺にて十三年の昔。全蒼。宗養。予。同吟千句有しに。獨殘れるに別なばと。あぢきなげなるに。思ひ出せば。秋の名高き月御覽の事も昨今のやうに覺えて。

秋の月みし影消るかすみかな

又秋にはと いひて三井寺衆にも 行別れ けるに。光淨院とて園城寺外の逆徒をもはからへるのみならず。近き頃は歌道をも心にかけけるとて酒もたせ出むかへり。勢田山岡孫太郎。よそ目さへたゞならぬ 若人なるに。小鷹すへ馬はやめなどして。柳が崎まで又したへり。世尊院道九近きゆかりなりければ。歸り入て張

行あるべしとて。光淨院の發句所望。

枝分てうごくやなかれ川柳

舟をば渚こがせ。日も入方に 坂本の北浦より城州の構に差上りぬ。二日計有て。水ぐきの岡の屋形の霜の降はも。いもとねしだになどかこちて。津田の細江。登蓮法師、薄の朽せぬ古事に心移せるに。威德院さほさし向ひて。城州の舟にも盃ありけるよと、乘うつり。日をくらしぬ。佛涅槃の日より 光岳和尚七回に千句すべしとて。第一發句とありしかば。

花を今日つみてしほれぬ袖もなし

孝子平井加州。同威德院。布施新藏人。平井駿州。己々心を合ての事をろそかならず。嫡孫満座の已後出席有て。若衆を集め。舞臺など假初ながら構て。肉身の歌舞のぼさち出現。宗和往生の庭かと思へり。十九日には心前一人伴ひ。昌叱は都の 留守にといひて。めぐりあはん玉

の緒。山の裾野を別れゆくに。威徳院能せし若衆を持來り給へり。取々の盃杯に。一里餘りの道に日を暮らし。布施山の城の麓にて。賢友いろいろのいたはり有て。廿一日。阿育王石塔寺勝藏坊にて興行す。

朝霜は時雨に庭の木の芽哉

十年のあなた。山まで権一見せし歸るさに。觀道坊のあたりにて。

ぬれ／＼ぬ松や一木のむら時雨

とせし事を思ひ出て。觀道坊の墓所に詣て日野に付ぬ。蒲生兵衞大夫殿智閑宗祇へ傳受古今の箱などの事を語りて。興行あるべきなれば。

めぐりあひぬ種まき置し花盛

嫡男鶴千代殿。深夜まで御長座ありて。酌とり酌とりうたひ給へり。翌朝宗祇仁聖寺といふ所にて。

春半冬の梅さく深山かな

ありし木の本一見に行て。

春半冬の梅さく山里の蹤に殘れる人の俤

と口ずさびて歸けるに。買秀河原まで送り給へり。布施賢友河井利康に立別。甲賀頓宮を過る比にぞ齋宮の昔を思ひ出ける。三躍の峠より三町計くだりて。鈴鹿の御前神さびたるを拜して。はらへしける假屋の柱に書付ける。

ふりはへて急かさりせは鈴鹿山花に幾夜のやとりからまし

一里ばかり過て。辨才天川を隔て有俊成卿の丸木橋。妙音に故有事思合せらる。同程過て。關の地藏とて行基菩薩の作。堂の後に櫻木といふ古木有。是や鈴鹿の關ならむ。定家卿の歌故に名ると云々。廿五日。鷲山正法寺。關民部大輔何齋開山本願の地也。清庵和尚前大德寺大穎和尚御閑居に滯留せしに。廿六日に門前柳色寺前花見せらるべしとて。後の山へ登る

程。十町に傺り。岩屋にこそあれ。羽黒影向の跡と讃給ひて。和尙。

年々に巣かへる鷲の山とてやおとす羽黒の餘波成らん

と書付て。拜殿よりくだるに。靈雲見桃花悟道もかゝる所からとや。暮て夜語の席に。寺外の乗一折すべきよし和尙所望。

花の枝たおれに香もなし色もなし

有梅軒とて故有後亂なれば中々不記。予入寺の日。伊賀へ行給へるに。留主より告ければ。夜をかけて歸り給へり。彼山莊にて。廿九日朝の鶯有。龜山麓を過て行けるに。和尙より峯の鶯谷の所せきまでもたせて。同宿東岡と云所にてまたせ給へるをとりちらし。稻生藏人殿武舘に入し晦日一折有。

輿津船庭にかすみの海邊かな

潮上巳成に。白子觀音寺に不斷櫻とて名木あり。貿輔句あり。彼寺にて興行。

後そ見ん春は外にもさくらかな

滿座の後。淸渚の玉藻拾んと門外に出けるに。綱引舟より何よけなんと求て歸りぬ。桃花節には。神戸藏人殿御城に入ぬ。御興行。

末いく世はやし始の園の桃

五日に神宮にして。東靈五折 西川淸右衛門。兩三人して興行。河曲郡。

山川のめぐり田返す裾輪かな

六日。雨に留りて。明日朝渡りの八十瀨の末まで。高田孫左衛門盃さしかはして別れゆく。袖濡して大福田寺に早々着ぬ。桑名は近鄕喧嘩有て。むかひをまちて。月に道喜の宿に入つるには。舟あまたして尾州へ渡りぬ。茨江といふ所にて。淸須より小牧へ付侍るに。明院かねてより乗物など國堺にいひをかれたるに。先へも飛脚有しとて。義元など麓まで迎に

院出給へり。舊議智の故都の内より心安して。旅の宿ともさらにおもはず。風雅にこゝろ染ぬ人さへ。しのび〴〵は。春の日秋の夜に思ひ出るとも盡ざらまし。張行などは發句にてみえなんかし。於二妙覺寺一。
咲ちるもしらぬは花のこゝろかな
於二善光寺如來別當可休一。
庭や海春雨の露のたまり水
於二蜂屋兵庫助頼隆一。
待おしむうさや半天春の月
於二瀧川右京進秀景一。
こゝろなきも色ある荻の若葉かな
賀島順親興行。
ふけあらし木隱に朽は花もおし
松田直張行。
木々なかりて己か枝なし藤の花
於二大野木義元一。
春草のはなもて水をつゝみかな
於二神松寺一天神社僧。二十五日。
春深き若葉もむめは南かな
大野俊秀張行。
山人の手をとり出るわらひかな
三月盡に坂井貴除にて。
明は夏とおもひけんさへ春の暮
卯月二日。
於二天王坊一。白山社僧。
佛は誰たちかへん花ころも
卯の花の雪は白根の木間哉
於二誓願寺一。
一こゝろやこゝろのうちの郭公
於二大寺新作庭一御所望。
しけれ猶松にあひおひの花の庭
於二木下助兵衞付亭一。
くれなひや葉さへ花さへ深美草
富士一見急故。發足とて張行不レ成。加藤貞政所望。

なかしとてうちもねん夜か時鳥

森嶋貞仍所望同前。

春秋の花や夏野の草の露

廿二日。今春太夫勸進能芝居より九坪松元院に趣けり。春送り夏を向へたるなどといひて。聊送の衆有中にも。妙國寺宗直にさへ別れ。日を暮したるに。簗田出羽守息酒爲レ持給へるに。酔を重て。明日の一折に。

蜀魂霏うへわたす門田かな

廿四日。くらかけといふ城をも出羽守知れる所なればゞ。十里に少し不レ足道。こゝろの儘にて。因葉がくぼとて。おだしからぬ山の峠などに。迎鞍多待せけるをもかへして。三河の堺川を前なる社福寺に入て。廿五日所化あまた有。

丈室西由案。御輿行。

風の戰ゝ光か岩に飛ほたる

廿六日長樹院にて。

杉むらの木からしは茂る端山かな

廿七日。八橋までは尾州休存玄以などもをくりがてらと行つれたるに。あたりには花もなし。すこし求に洲杜若抽心長とやらむもて來つゝ。杜若といふ發句せよと云ければ。

杜若おり居てくらす木陰かな

茢屋より迎の馬はやめて。午時に無仁齋に至りぬ。今日の發句にて興行有。又尾州に三非寺玉林齋徘徊の故ありて。山崎といふ城にて興行有べしとて。所望に。

時鳥いさむるなさけ旅の宿

筆に任せ畢。廿九日岡崎へとおもひ立に。八橋の杜若斷絕遺恨を歎けるを。代官齋藤吉十郎聞傳へて。八橋面馬場といふ在所へも。使に擣添。鄉人の古老の名主に下知して。可ニ植置ニよしありけるに。諸國の旅人根を引て行故。跡も無由と云々。實もと思へるは。橋柱さへ削りと

れると見えてあり。西に下馬堂と云跡には松一むら。澤の半に時雨の松と云一本有。餉食ひける木陰可レ成。東に少岡あるに石塔あるは業平の印といへり。在所の人に杜若になはせて植けるに。因になせる地を業平と名たる田を則今よりして杜若寺にあてをこなふよし。無仁齋永代の折紙書て。早苗を引すてゝ。手づから植渡して。石塔のもとへあがり。兩郷の樽に露ばかり。予小牧より爲レ持たるを諸ともに酌かはし。餉を心前とり出て。昔語に成て。長坂彌左衛門へ一甫など矢はぎの宿まで。しこり橋より川上の左方五六十町を隔て。しかすがの渡り也。詠渡りて。仙庵を道しれる人にして。帝都誓願寺一年のこなた御在國。新地の室に入。端午前日石川日向守興行。

くす玉に菖蒲も分ぬ袂かな

六日。又鳥井伊賀入道亭にて。

藤かほるたそかれにまたあふちかな

孝精出席。先達の作意名殘有ながら。五月雨に成行ば。小川さへ洪水なるべければとて。歸さの再會を契て朝立に。御三人さへ送りに出給へり。同國吉田と云城守酒井左衛門同臨川風呂に入山海景二階にして詠。釣竿を寄せ來る。湊なれば味一しほなり。八日に門外の清壽一折興行。

水こもりもすゝ若苗の緑かな

九日に仙庵にも二村山近野中にて行別。鹽見坂をいさゝかくだりて。白菅濱名橋のあといまぎれの渡りして。富士見初る日より駒にまかせて道も覺えず。口つぎのつなはへなり。引間に着て。曉より雨降出て。天龍の瀨音夥鋪。見付の里を過てより。淤泥深き事。夏禹のたすけなかりしむかしの唐に渡れるかと覺て。かけ川の里にくらして。夜も明方の清大しのゝ

めに行て日坂に至りぬ。商山の古蔵をもちゐ。やゝ小夜の長山に上りぬ。雪齋大原和尚開基一字。影前立寄て燭酌。盃面に狂句のうかべるを壁に書付ける。

けゝらなき山もうらみし越て猶早斐かれみえぬ五月雨の空

麓に菊川と云名も匂ひ不レ淺を過て。かなやといふ宿にて。大井川わたす人をかたらひてかへりけるに。小夜の中山長山とかけるも。さもこそは。二三里がほど山のいたゞき一文字にして。さほ山の傍さら也。貫之土佐記によこほりふせると。男山を川尻より見てかけるも理也。嶋田といふ所に。まだ暮そらぬ空ながら。宗長出世の地ときゝてとまり。宇津山にいたりぬ。我いらんとする道といへるは。右の谷に見おろして。今は峯に付て登りぬ。誠に蔦楓は茂り。木の下くらき五月雨の餘波に袖もすゞろにしほれ。心細して里につきぬ。關の戸近き鳥の子を十づつ重ねあぐる術よりもあやしき名物なり。俗言に團子と云々。忘がたきまゝ。口内に吟じつゝ行ほどもなく。丸子といふ里に着ぬ。むかしはこゝにや有けん。團子を和して此所の名とやしけんとぞ獨ごとにおもひける。また宗長山庄の記。都に所持せし一冊。筆跡芳く。良分入るに。道のほど一町餘り小川を渡り別墅を訪に。此寺は誓願寺と云とて。小僧を案内者に出されしを友なひ行。道の半に柴屋ゆかり妙心寺派嗣法陽叔にあひ奉りて。谷を三町餘り左のかたへ入て。庵室を見めぐるに。一休和尚墨跡に。柴屋と古文字。宗長像掛れり。影をうつす事。命のうちは戒められしか。但無跡にもとゞめば。もえぎの衣服に墨染をうへにして。水卷のたびに扇子をそばにしと云りとて。さながら也。賛には逍遙院殿御詠二首。御自筆鮮にして。庭上には廿六年をかさねたる石上

緣若宗長の印塔は破壞して古木梅生たり。一年國の亂に同祿せりと云々。東に天挂と號せる山あり。此僧周挂宗牧の古をも語り給へり。かくても一夜はあらまほしけれど。歸に長公畑をひらき庵を結べるかた岡をゝしへ。今かたのごとくすまゐける二時の營の園などに行伴ひて。くれ〳〵に府中に入。十三日先富士淺間の社頭詣已後。長善寺一花堂山號。御住持。御在京の時より尊友故。閑談しばらくして召つれられて。三條西殿于時大納言殿。稱名院殿御方。候都の事。稱名院殿五年のむかし。今はとならせ給へる事までとはせ給て。退出の折節被レ遊かけらる。

大ひえも夏やはみてし富士の雪

十四日に一折御興行。夜に入て旅店に歸ぬ。江村榮札とて。都にての隣單友人。本寺參りとてくだりつる東路より上りがけに相舍りせり。故郷の心地して。十八日三穗の松原へ舟にてをし移り。明神御酒の殘り滴を。京衆數多いざなへるに。池の天人の衣かけの松の陰より。礒傳ひに村松といふ所へ行に。原にあまた馬あり。神の牧といへり。少里中をば放れたる院内にて。當妙心寺東谷和尙仰下されたるとて。歷々非時あり。珍味にとゞめられたるに。淸見寺月航和尙より御使にて。まつち山越急げとあれば。雨聊降ぬるを打拂つゝ。袖しの浦を過けるに。所から海士人の墨田河原庵はらより丈室に入。小夜更て。花やかなる盃の臺。和尙手づから持出給ひ。漢和一折有てねぬる。曉のかねに起。急礒のかたへ行けるに。普光院殿の御座石といふ有。こゝろよく夜雨晴て。富士の南に朝日も伊豆三嶋の北。雲の足高山浮嶋原より此方。田子の浦をしへられて詠やりぬ。礒傳ひにこぬみの濱と海士人のいふらんも。實わがこゝろは岩木の山ならむかしなどいひて寺

に入る。日たけて門外に出けるに。聽呼を先につかはされて。干潟の岩間に少魚殘りたるかたつかたに盃うかべ。波に寄れたるみるめなど拾はせ。すゝめ給へるに。別かねて。府中に暮してぞ歸ける。廿日に大守へ御禮申。廿一日於二三條西殿一御張行。

淺からぬ道は殘れる夏野かな

廿三日。三條殿へ大守渡御有て。俄に發句つかふまつれと有ければ。我さへ忘ければ不レ記。廿五日名號百韵。三條殿にて御興行。大守出席。晦日。朝比奈下野守興行大守御出席。

絶やらぬ根や年をふる石の竹

五日に一花堂御興行。

風觸て蓮は花の車かな

七日。富士淺間社司新宮殿にして。

夏の日と陰をやめくる富士の雪

八日。清見寺より佳詩一章度々ありて。今一度は三穗松など仰あれば趣むける。興津入道牧雲といふ人は清見のあたり知人なりしかば。宗長の昔てうあひにて。艶書など今は懷にせるとて。墨染の袖の香も身に入る物語ありつゝ。此爲御張行有べしとて。發句。和尙御所望。

月涼しなけや清見か礒千とり

夜に入てあくる日四十四句。午時にはてゝ。船數多よせて。海士人かづきあげたるは。こよろぎの礒のそこにもや通ひけん。あはびさたおか都にて目馴れぬさま也。盃に富士の雪を傾けて詠やるに。裾野かけて隱れなき沖中にて。口ずさびを。牧雲齋墟の下にて。十日興行有。

夏草は雪に生たる裾野かな

山深きかたつかたなれば。鯛聲して後も殘る日に。宗長牧雲の古。同じ枕ことの歌など。朝の文の筆の便りの注釋の卷物をしらする媒とも

なれる。宗仙といふ世捨人などの物語に。長公の席に陪するこゝちせり。十一日。興津河原のくぬき原打過て佐田といふかたへゆく。函谷關も是にはしかじとぞ覺えし。近き國々海山殘らず見て。清見寺に入。御齋を行ひ。狂歌あまたよめり。心前口ずさびにせし發句。

夕立やしたゝる雪の富士颪

和尙御脇。

披レ軒掃二暑埃一　　識鷗

一折過て。江川とて近國の名酒。今日までは府中にても聞しばかりなるを味て立けるに。旅の衣に裁かゆべき色々をさへをくり給へり。寺より里ならんかし。別かね奉る胸臆。ことの葉にかづ〳〵顯れば。などか筆に殘さん。都の孝甫とて。宗長舊跡に住ける遺弟。十二日に興行の事なれば。府内に入る。

跡までも風かうはしき扇かな

上下こゝろを合せ給へる席と見えたり。十三日には西殿へ召されて。相州の大守より嘉肴。江川魚たりとて。御前にして身のほどを忘るる計被レ下。翌朝また被レ爲レ持。大黑天子足もとの寶さへ也。頃會席ならぬ日に祇候して。いぶせき旅の倉りを忘れ侍りぬ。逍遙院殿の御嫡孫として。御作意池の波をくませ給ひ。稱名院殿より和漢有職の家をつがせ給へる物から。などしもかゝるゐ中わたらひには。年を送らせ給ふ。剩源氏の理不レ淺事を。又世に類ひあらむなどおもふもの近く國にあるよし傳聞に。不レ窺二玉淵一とはまことなる哉。かくいふとて。わがたまへる所を知にはあらず。稽古の二字のこゝろを尋ば。記錄を見てもなどかまどひ侍らん。抑享祿の末。宗祇の名計の人なきにしもあらず。予に稱名院殿。古今集殊染二御筆一。文字をゆるさせ給ひて後。やがて甍せ給ひ

しかば。傳受をば惠雲院殿近衛殿大閤御所。よりいさゝかうけ給りながら。自らになずらへておもふにやしりがたし。富士の嶽はよとともに不レ盡名もしるし。三條殿名高きはかぎりあるはいかゞはせん。ひえの山をはたち計重ねてあけたらんほどにてもなぐさみなまし。今都に誰かはとたとへんも。思ひ侘たる草枕の獨ごとをしるし付るも。淋しさのあまり也。十七日神尾以山とて。旅宿隣草の酒屋にて。

汲よるに中垣もなき泉かな

十八日には御屋形御興行。

涼しさを招く代しるし玉の庭

御滿座以後。二十首御當座あり。御席の作法。冷泉殿予時中納言爲益卿。御傳受とて執行せらるゝ事どもなり。十九日和漢御興行。廿日於二淺間一やぶさめあり。長善寺へ歸るさに參りぬ。なにくれと舊儀の餘り在府事任奉りし首尾なれば。廿一日歸京の事申に瀨名尾州の被レ仰ければ。旅宿へしのび爲レ入給ひ。秋懸て在府申せとの御屋形より帷などの御まかなひをさへ被二仰出一とて。私にも種々被レ爲レ持。此尾州は大原和尚の床下に臥なれ給ひしも理と見えて。二毛の行末さへ思ひやらる。形より心なん増りける。大原和尚魂もとまりけるにや。今の代に有がたし。則御屋形へ御暇申捨。木枯の森へ以山同子岡を伴ふて。ある川を渡りて下草踏分て。建穗心藏坊へ行ける。情不レ淺して。一折の有増。人にいひつたゆる間もはやむなしきと。殘りおほければ。殘し置ける。

夏の日の森に凩の風もかな

夜に入て歸りぬ。さまざまの催し草もはかなきにつけても。御屋形樣にて宗祇香爐宗長松木盃。翌日御會席半に御手づからもて出させ給ひ。千鳥といふ香爐銘物拜見。難レ忘して。丸

子にいたりぬ。蒿品祥英西殿へ日々に參上ゆへ。思ふかければ一身したひ給へり。其日は藤枝といふ所へ以山丈人をつかはして。心を述べる寺中に明しぬ。旅宿ならんにたがひて。掛川にても寺に明して。まだくれぬ程に。引間近き頭陀寺に趣けり。爲雲とて十年あなた永く在洛の舊友あり。嫡子部筑宗左衛門舍弟千手院。頭陀寺へ在府よりいひこされしかば。昨今天龍迄歷々馬迎など數多せるとて。けふ打つれてより都のこゝちせり。行水などより初て艶なる事むべなるや。爲雲と老人は宗長聟の弟として。十四歳より二十二まで宗長のふところにそだてるよし聞侍りしもしるし。一折とて。

又そ見ん古枝も茂る萩の露

舊友ながら此一組近年本意のむかしに立歸るを祝したる計也。廿七日。いなさ細江見るべきとてみな〳〵いざなひ行けるに。本坂越は道とまれるとて。氣賀西光寺に宿しける。曉おき出て。

秋近き窓をひらけは木の間より西に光りの有明の月

廿八日に山村修理亮わりなくとゞめて一會。

夏なとへはいなさ細江や秋の聲

くれかけて爲雲千手院にも立別れ。小伊那佐の峠に行登りて。あまつみなど詠て。鷄鳴濱名のかたへ航して。曙に修理にいひかけける。

遠江を朝わたりする舟人に問へは濱名の橋もしら浪

三河堺川近き所までをくられし名殘を形見に願て。また吉田に入て。朝より岡崎に足をやすめ侍るに。誓願寺五日に一折とて。

風は秋西にむかはぬ袖もなし

七夕の手向を苅屋無甚齋にして。

哀しるや星に手向もかり衣

御城内にして野州鹽石をたかせ。御門前に湛たる潮を汲せ給へり。川がりの里魚など手づ

からといふ計もてなさせ給ひぬ。八日に緒川清水左京亮一會に。

昨日あひし星崎しるし泊舟

翌日に長坂彌左衞門。去夏八橋にて東へ急ぐ時。登りにと約諾せしとて。一折に。

花なをもみ萩に水行野末かな

十日に苅屋野州御嫡子緒川の御城へ参宮して歸るさに。清水權之助へ立寄日をくらし。定宿長坂彌左衞門へ歸て。更行に御城より躍入給ひ。十一日仙庵にて興行。

萩のこゑ山下道や濱つたひ

美肴餘殘とて。十二日一箸鱸魚鱠とこそいひし數々用ゐて。濱邊の月に彳。盂蘭盆の手向をば又かりやにてせり。緒川より苅屋へ。舟十二艘に灯籠をともし。風流をかけ給へり。海上の逸興都にては見馴ぬ事共也。十六日曉の鹽にひかれて。龜崎といふ所へ網おろさせ。みるめかづかすべしとあれば行けるに。めづらしげなる盃さし出したる女にいひかける。

宿りせは萬代もへん龜崎やみるめかひあるうらのとまやに

又二里計南のかた。熊野崎とて三熊野にむかへる洲崎へ漕出て。大濱稱名寺納涼せし折節。衆僧の御所望に。

三熊野の浦風涼し秋の海

十七日には於苅屋水野野州と興行。

流れ來て一葉も末は千船かな

十八日。齋藤助十郎亭にて。

聲やいかに秋にかはらぬ松の色

十九日。從岡崎竹田法印よき酒を求出て。色色を加齋慶忠にそへ給へり。醉にまぎれて船をし出て。を川御城にて御會にて。

咲そふやいく百草の花さかり

大野へと趣むくにあふ坂といふ山本まで緒川同名など送りにと有て。迎の掠原といふ人侍

ほど。掛樽取出て立別れぬ。翌日石川參州御輿行。

浦風をまちとる岡の葛葉かな

廿四日。御城御輿行あるべきを。出陣の前日なれば。種々海中珍鋪物を集られて。酔臥計也。此地は人の志あると覺ゆるは。閑窓老人に便有て。宗牧度々とゞまれる後。歌をくられし上句を。鳫くゞひ湯風呂。其外何哉らん〳〵は。夜のまぎれなるべし。むべなるかな。廿六日於二御隱居一野州。

嶋々もなひく霧間の朝戸かな

遠景唐信などには見をよばぬ。廿七日。小倉導場來相輿行。

身に入や夕汐風の朝涼み

満座普くことに添へ出て。舟歌に聲を添たり。廿八日には閑窓にてくらし。まはしといふ所迄は馬にて行けるに。圓淨坊連衆たかしにおもむかひ。茶の湯などさへ汀にかまへられたるを取ぐして。船まで廿町餘り有けるに。本田城よりも濱庇苫を鋪て待れしに。大野近所慈光寺隣松院も携しとて。遠干潟をもをし出されて。來相ばかりいざなひて熱田に入て。急げるは。加藤全朔駿河へ下りけるを。延引しての會とて。度々むかひのあれば也。

露わけは分しをおもへ宇津の山

二日には宗長已來宿をせしに。瀧坊にて。

宿かるもおはなか本の名殘かな

先師は伊勢千句聽聞せしに。雇しほどの人となん。四日には加藤圖書助の新地の搆まで。海堀上たる松陰ちかく有て。出入汐はやき所なれば。

みつ汐の入江や谷の秋の聲

半日にはてゝより。亭主の嫡孫六歳にして。あや敷大鼓の音を打鳴せり。去間成事。記にいと

まなし。五日には座主御坊にして御輿行。海藏門にむかへり。海をかくすといふより。五六町へだてゝ人家となれると也。

朝霧の入海かくす木間かな

七日に法花堂本遠寺にして張行。

わたつ海の玉やうかへる空の月

八日は放生會と號して神事有。於₌社頭₋御神供以後。神宮寺藥師堂に神輿行幸なる。先伶人樂を奏し。社家人々御寶物を持て御供たり。堂内には社僧四ヶ法用。後に大師護摩壇。いさゝかにしの方に楊貴妃のしるしとて五輪石塔苔に傾て立たり。九日には竹田小兵衛とて去年昌叱かりの宿をもせし人なり。庭に葛茂らせ。山ざとびたる所にて。

眞葛はふ庭に松虫聲もかな

十日になるみがた近き所。道家與三兵衛興行。祖父も宗長道記に入たる行衛とて。いそがはしき身ながら執心淺からず。加藤圖書助馳走なれば。したしき人々を將てすゝめられし。酔の後。舟に乘て圖書助庭に舞入。足本亂がはしくて。夜更てぞ宿にかへりける。十一日には休息の有增をね覺里の上山崎にて。玉林齋昔は三井寺住侶。頻に張行の事迄望なれば。俄にて初一念を。

里遠きやまもね覺のきぬた哉

夜に入て鳴瀨をたどるほど。手をとりゞゝ讃歎橋にあがり。此名は當宮本地焔魔王宮にておはしますとて。三途川祖母丈六像あり。十二日。嘉祐とて。日破明院近き社僧興行。日本武尊東にて向火の時燧を祟たる社也。七社一也。神祕略レ之。

いなつまは空にうち出す光かな

持寶坊とて行者興行。

鬩々て曉月や墨の袖

嘉祐と緣者ゆへ。夜をかけ二百韵也。十三日に

阿波手の森門前の妙勝寺興行。森の東に反魂香焼跡。又森下に社あり。其下藪に香のもの入し瓶あり。

野分にやあはての森の初梅

名月には津しま一見に行けるを。坂井助兵衛田中に榛木を折かけ。色々を被レ爲レ持に。程移りて宗牧を尋入に。息孝行の人にて。社頭へ引して夜更行ば。橋のうへにて月にうそぶきて。醉中に狂句。

月をこそ都さそなの今夜哉

宗牧に因淺からぬ人にて。都の住居年をへぬ。桑名へとおもへるを。長嶋一向念佛坊主。城敗に尾州大守出陣なれば。甚目寺以玉かへり行に。時雨さへあはたゞしき中舍りのまめやかさ。馬などかひ〴〵しくて。あつたに入て。行末いかにとおもひわづらひ。草鞋解など。仙庵の川より無二覺束一とて智多郡の人のしるべの文有。又山崎城より玉林齋來り給へり。力をえて安堵せり。淺井四郎左衛門など酒もたせて夜を深しぬ。十八日。大高城より水野坊州迎舟を加藤庭にをし入たり。圖書助の舟二艘ならべたるに。嘉祐道家亭主盃とりみだしいそぎけるに。思ふかたの風吹て。舡をたゝきてうたひかはし。大高に入。銘城にて。唐人傳詩ををくりし所也。城は松風の里。麓は呼續の濱なり。仙庵を川より來迎給へば。

呼つきの濱邊や霧に渡し舟

夜半過。西を見れば。長嶋をひおとされ。放火の光夥しく。白日のごとくなれば。起出て。

旅枕夢ちたのむに秋の夜の月にあかさん松風の里

明れば防川など馬にて來りぬ。寺中に行着ぬ。廿日。夜半より橋に出て。わらなど一把づつ鋪て。水をまちなど。楓橋夜泊もかゝらじとおもふ。閑窓老人聟の石川三州重阿來相は楠まで

送ると也。曙の湊を出。楠に着たるに。尾州の先勢暮かけてといひつたへ。さはがしさは中中也。春とをりしに引かへ。ゆき山といふに舎りけるに。廿二日辰刻には河曲郡家々は烟にのぼりぬ。儀俄と云は。甲賀にての大野知行なればとゞまり。尾州まで連歌執心にて迎に下りける。祐運馳走にて。送など心安くして永原へ行ける。前越前守道芥墓に詣んが爲也。

廿六日。三井寺にをし寄たり。花光坊相坂まで春をくり給へるにはをしげ也。卯月計りに遠行なれば。彼□前に手向種などに。髪剃をそへけるも。徐君思ひ出して也。

旅の空おほつかなけに送りてし人はむなしき相坂の山

不定世界おどろきながら。廿七日如意嵩越に都に入て。人界はかなさよ。さても〳〵目出たや目出たやといひ酔くらしぬ。心前両僕片時のわづらひなく。いさゝかの災難にあはずして。留主吕叱緣者の者とおとがひをとき。かりの衣をぬぎてもかたはら淋し。行末いかならん。

永祿第十八月廿八日終記之　紹巴

右紹巴不盡見記以一本挍合

群書類從卷第三百四十

紀行部十四

東國紀行

宗牧

往年宗長老人にいざなはれて。富士見に下り侍りしついで。東國歷覽の望ありしを。難レ去事に就て歸京したり。其後每年の有增にて。結句つくしへはふたゝび下りけむ。不定なる旅の世おもひしられき。ことに四五ヶ年已來中風氣に成て。あづまのしほ湯どもしるしあるやうに語る人あれば。すでに去春（天文十二）おもひたち侍りしを。近衞殿（稙家）御所源氏物語新調の御本出來て。夏の日のつれ〴〵にとて。校合の事仰いだされたれば。このあらまし事をもかねたるおりふし。京都例のおさまりがたく。和泉河內の敵出張の風說しきり。公方京兆（細川晴元）の御あひだももののいひひそめくやうなり。六角殿（佐々木定頼）參洛有。御存分ども出入おほせなだめられてや有けむやう〳〵初秋の末つかたしづまるやうなり。此御所の御事は公私ともに御意をえらるゝ事なれば。御取亂最中。源氏校合の御さたはなかなか。御月次などさへ懈怠のやうなり。よき折ふしにやと御いとまの事申あげたればおどろきたまへり。禪閤（尙通）さま去年夏より御中風を煩はれて御平臥の式なり。この一兩日御再發にがにがしきやうにて。醫師評議執々。御養生ながら。遂日おもり給へり。いますこし得やうだ

いども見たてまつれかしなど尊意なり。其上道の義につけて。かたじけなき子細もはべり。平生參上のおり／＼御言葉をそへられし事ども忘れがたく。思ひたつかたもまどふこゝちしてやすらひはべる程に。八月廿六日早朝より大事にならせ給ひて。初夜已前に薨じたまひぬ。此ほどはいかにもたしかにまし／＼て。御歳も兩度。右京兆毎日しこう。御門跡御所にあつまりたまひ。いろ／＼の御遺言。こしかたゆくすゑの御物がたりこまやかなりとぞ。天下もかたのごとく泰平の樣なれば。佐々木霜臺下國せられ。この御所の御隙もあきたる折ふしなれば。さらぬ別れのなごりは千年もおなじかるべし。御年も七十三。古來まれなる御威光。洛中上下このさたなり。御葬禮は東福寺海藏院。其作法いへばさらなり。前日大雨。當日空はれて。御をくりのさま。御はうぶり見る貴賤の袖。霧まの紅葉こきうすきいろ／＼にまがへり。夜にいりて時雨うちして。春ならぬ木のめも。ふるはなみだかとおぼめく氣色なり。御中陰も御所にてなれば。公武の御品山々寺々の衆。法花八軸淨土三部。其外こゝろごころの捧物。懷舊の詩歌などはゞかりを忘れたる躰也。心ざしの色も見え參らせがたくて。黄金をうちのべたる短冊。藤澤の上人よりめぐみたまへる。このおりのためにやとおぼえて。

風に散あきの葉よりもうすけれと染る心の色しみえれは

とかきつけて。智惠光院して申上たれば。御まぎれのうち。やがて。

墨染の袖につゝめとあはれてふことの葉深き秋の色哉

とあそばされたる短冊。したゑのさまにて。御心じらひみえたり。翌日。法花懺法聽聞にまいりはべれば。昨夜思しめしつゞけられたりとなん。

去來生滅本難レ常　愁涙難レ期幾夕陽
七十三年時八月　梅花薫徹返魂香

かけて身を思ひそしほる大かたの秋の空たに露の夕くれ

まことにみるめもかはきがたく露けき樣成べし。此金玉の和韻。五山の僧達家々いや／＼まで。參扣の人々は。のこらずこゝろざしのゆく所にまかせたり。

おもかけはとまるもあやな秋風の夢吹かへす春の梅かか

と申て尊意を得たり。又聖護院の准后後法成寺殿いまはの御詠に。

遠く行人とてさのみ歎くなよ獨も殘るためしなき世に

是を句の上にをかれて。三十一首句ごとにこもる玉のこゑ／＼みゝおどろかれたり。御贈答申べきよし尊意の趣。兵部少輔内議申されしたり。發足のこゝろあはたゞしさ。句頭一首のやうに申上たり。

ときしもあれをくれし秋の草木まて夕露ふかきくれなゐのひかたき袖にとゝめえぬとしを十とて手をおれはさきのためしものちもまたみつとはきかし難波かた煙もとなき雲のうへなきさゝはなる世の人もひとし忍ふのとこのうちりちのしらへもりいつや法の光のこすの色瑠璃の空にそたくふなるめさましかほに時雨つゝならの下葉にきゝあへす夜ふかき月はにしにそありける

かけまくはいかにととはゝ只今の空もこたへむ袖の露哉

と申て入たり。この忌中をだにと。日夜しこうの樣なれば。餞別の興行あらましなどもうちをかせ侍り。慶順とくよりの懇望去がたくて。草庵にして。

別れ路は松をたよりの蔦葉かな

佐々野與三衞門。これも先年尾州まで下りし時興行。佳例なればとて。

やとの菊山路もこえしさかり哉

三條西殿へ御いとまごひに參上したれば。これもおどろかれて。いづくまでなど御たづねの事也。宗長遠行已後。彼息誰庵に吊ひなどを

こたへ侍れば。するがまでと申なしたり。いまは御法躰受持讀誦の御ひまもなげなり。五部大乘經逍遙院殿いさゝかあそばしかけられたるをかきつがれて。去年此ごろ御七回嵯峨一尊院にして千句巳後。毘沙門堂御導師にて供養。當時まれなる御事なるべし。すこしも見えまいらせばやとはおもひながら。在京の不弁にうち過けるに。このほどあづまよりふみのみとてこゝろざしけるかねのかたはらに。

とく法のきくの露たに深き身に染しやいかに水莖のあと

と申あげたれば。態がましき御使謝せられがたきよしおほせせられて。

けふそしる心に染しかれことの思ひもかけぬ菊の下露

ときは重陽後日にや有けむ。御詠身にあまれるよし。則參上して御禮申たり。青蓮院殿色々御筆を染られたる御禮。御いとまごひがてらに申上。三條殿但馬御下國明日のよし仰られて。かの知人一兩所がたへ書狀どもしたゝめて持參申たれば。かたみに又いつかはなど過分の事也。西殿より御扇子を下されて。御詠。

富士の根の雪みてもまつ思ひ出よ馴し都の袖の月影

袖の月影は扇の事にや。先年九州下向のとき。逍遙院殿野の宮のかたをかゝせられて。さらぬだに秋の別はかなしきにと。彼物語の歌をあそばしつけられたる。長月十日あまりの事にて。昨日のたゞこゝちし侍り。

あつまちの思ひ出なれや行袖のことの葉そふる月の光は

と申入たり。あすとての暮つかた近衞殿へ參上つかうまつりたれば。御忌中も一兩日の樣なり。其砌はかへりてあはたゞしく。秋の木葉の散々なるのこりおほさも一入なるべければなど。御さかづき出されて。一乘院殿。聖護院殿。大覺寺殿。初夜の御つとめはじまるまで。御物語ども。富士清見の浦山しさなど仰られ

て。餞別の當座なども有けむ。其おりのまぎれにおぼえもをかず。無念の事にてまかり歸たれば。やがて御使。ぬさとり〴〵下されて。

此秋そ思ひしらるゝ二みちに行方わかぬむかしかたりも

御使のふけゆくほどもおそれある樣なれば。なにとさま關のあなたよりなど申のべたり。

天文十三年の秋。長月廿日あまり。都を別れたり。かれこれ若衆などいざなひて。又相坂の關をくりをだにとて行まゝに。をとは山もかへりみがちなれば。

歸るさの名にこそあらめ駒とめて誰もすゝまぬはしり井の水

など吟味するほどに。杉村の木末みえて。いはの下葉もめとまる色なり。さらば是よりかへりねといなびければ。先人つかはして。清水のもとの塵はらはせ。苔を莚にこゝろ〴〵の銀瓶紅葉をたくも其興なきにしもあらねば。やすらふ折ふし。石山より世尊院。寶藏院。迎の舟よせておりたまへり。これも若衆さそはれなどして。盃のかずもつもれば。ゆくもかへるも暮がたに成ぬ。

ゆくとくとあかぬ心の色々や紅葉にましる名殘成らん

といひて別れはべり。關やより發句所望。

秋もやはすきまの月の下もみち

此月紅葉には秋もすぎがたきにかへるべしとおもへるなり。日然上下のついでには過役の所望あり。さすがなにおふ關守成べし。さて打出のはまより舟に乘ぬ。又京衆ひきわかれて。石山までとしたたひくるあり。うたひのゝしり漕行波夕なぎして。ほどなくをしよせたり。倉坊出あはれて。行水洗足など手づからの樣也。のこりのあまたは世尊院ひきぐせられたり。翌朝入堂參詣のおり。ことに山かげの眺望めづらしゝ。しりへの山はやしむら〳〵色づき。月は南の空にのこりて。寺前のながれひやゝ

かにすみ渡れり。本尊は二臂の如意輪蓮臺をもちたまへり。先年御開帳の時拜したてまつりし尊容。面かげにうかぶ心ちして。發露涕泣せり。常灯の光不斷の名香かほりきて。無垢清淨のよそほひ。補陀洛界もさながら眼前の靈地なり。とかく念誦のほどに十穀きたりて。源氏の修迎のため十万句勸進興行。兼々申侍りしやうに。此下向の次。まづ百韻はじめ侍らむ。いかゞあるべからんなど。辭しがたき樣に申侍り。まことに立よりみれば。かなたこなたあれはてゝ。清岩(正徹)和尚。こゝよりもなかれ出けるみなもとをわつかに汲る末をしそおもふと書つけられたるも。わかれず古はてたり。そうじて此本尊は和歌の人を守りたまふべき御誓約有とぞ。さてぞ紫式部も。和國の至寶をつくり出けむことも。此利生ほとけの言葉をくはへ給へるものならし。寺僧も代々執心ありとぞ。とり分等持院殿(尊氏)の御頃にや。座主杲守僧正能書歌口にておはしけむ。法印守遍僧學。しかも詩歌の達者。選にいり給へる作者也。彼詠歌草いまにあまたのこり侍り。しからば此佛前にてけふ俄に興行すべしといへば。當座の樣なり。

秋ふかし言葉のはやし筆の海

五十四帖の面かげ。湖水にうかびたるなどいひつたふる事を思ひよれるばかりなり。この會已後。やがて寺僧達をはじめ。發句の題ども京までも言傳侍り。はるゞ下國の事なれば。所々執心の御かたへは。發句の事申つたへよなど。十穀懇望ながら。大かたに申なし侍り。あすは罷出べきよし申せば。世尊院これもかねがねの事にて。ことに送の衆もたまくのつゐでなればとて。

秋や月なし明かたのとまり舟

廿八日の月さやかにのこりて。勝地の暮秋をおしむ舟かと見なし侍り。廿九日。又舟にて。せたの渡りさかまく水につなでうちはへ。陸地よりひきのぼるほど。笛尺八の聲。敵地のおそれもわすられたり。月は山風ぞ時雨の御發句も。杲守座主の御坊にての事なれば。沈醉の所殘うたひもとゞめがたし。昔の橋柱二三くちのこりたるあたりにさしとめてみれば。長良の山つゞき時雨て。はれ行木末汀とをくうつれば。げにはたばりひろき錦なるべし。せたの城よりつかひあり。永原まで送りの馬人申つけ侍れど。けふは天氣おぼつかなければ。逗留すべしなど有て。さらば京の人々はこれよりとて別れたり。

漕別れ秋の湊のみな〳〵に人のあふみの舟をしそ思ふ

言傳などしつゝかへしたり。かたみに見をくりつゝかくれゆく。はた物あはれなり。蘆間に船とめて。山岡方使案内者して城へをとづれ侍れば。盃いだされて。しきりに抑留ながら。あさげもなをか様なれば。むりに立侍り。石山の僧達にもこれより別れたり。永原へ付たれば暮はてたり。松雲軒旅宿例の事なり。あすは九月盡なればとて。

秋はけふいとゝあつまの雲ゐかな

秋はにしにかへる物なれば。けふの別れのほど遠き樣におもひなし侍り。神無月一日又すぎしやうに永原越前守（重秀）申されて。

けふは世に空もくもらぬ時雨かな

はれたる空におりしりがほなる時雨過ぬめり。あはづより發句所望忘れて。便宜にとかきをきたり。

下草のかれ葉にもりの夕日かな

又出雲の人所望の發句。是も京へ便宜にとて。

有明や月も浦つたふさよ千鳥

此人住所、湖水など有といへばなり。二日。西座に着たれば。あす慈恩寺の月次。觀音寺衆下山參會しかるべきよしにて誘引。この次平井加賀守種村參河守など來臨あるべければとて竹内七郎左衛門興行。

散にきや染つくす山の村紅葉

紅葉のさかりながら。冬季事かけたる五文字成べし。觀音寺登城。去夏御參詣。毎日御氣もつくされし名殘。去年の御不例。并發蘭軒めし下されて。祈療のこる所なくて。この比いさゝか御快氣とて。澄玄さへくださるべき。おりよくまかりくだりたるよし。進藤山城寺御内議きかせられたり。宿老面々にさへ御對面なきころなれば。御禮もはゞかりおほくて。さたにもをよばざるに過分の事なり。まことに御相伴とてゝ。左京大夫殿。中務大輔殿。永田備中守、碁打丁本。猿樂一兩輩。次の間にしこうしたるばかりなり、座敷は二階。尤眺望をいはゞ老曾森。麓の松原につゞきて。板倉の山田。蒲生野の玉のをやま。さながらみがける砌なるべし。遠くは大和河内伊賀伊勢の山ものこるくまなし。ちかき海づらかけたる津田の細江。登蓮法師がすみけむ阿彌陀寺の西川うつり行水莖岡の湊。空飛鴈に蘆間の小舟もけぢめわかれぬ風景。西湖の十境は繪にもかきけむかし、數寄の御茶湯。名物かずをつくされ。獻々はいふに及ばず。御菓子のかざり。花むすび。葉のゑようなどめもあやなり。盞はたびかさなれど。御養性堅固の事にて。各のみ酩酊無二正躰一ほどなり。澄玄長々在城故にや。三雲新三郎に岡ゑひ海よりもふかうあひまひかすしらず。はてはもしらず。いかゞ御らんじけむ。夜半已後退出。澄玄に和韵の一軸。左京兆より弟子宮内卿に尊圓親王の御筆詩歌一卷拜領さ

せられたり。ことに御手跡比類なきうへ。所々よりあつめられ。ひとくだりをも御祕藏有ける比。面目のいたりこれに過べからず。十五日は永田備州。例年日まちの興行とて使有。餘醉もめいわくの事ながら。夕かけての會なれば。

ふむゐともあらしは月のふゝき哉

今夜清光當山の岩ふむ苔にみちたる樣なり。

進藤山城守新造の一座。

秋をきてときはの花や宿のきく

會席のかざり大酒のしたて。先夜太守の儀式にをとらずや有けむ。平井加賀守亭にして。

神無月はるにゝほてる海邊かな

可レ憐冬景似ニ春花一をとあるこゝろにや。亭主知行豊良の里の眺望成べし。

染かへて太山や宿の初もみち

神無月廿日。俄に初雪ふれり。兼日の有增なれば。なにやらん心ありて侍れど。此雪をばいかがなどおほせての事也。建部左馬允といひしは。多年の知音ことなる事にて侍りしを。四五ケ年此方中風散々。去年も養性のためとて上洛。ことさら草庵にこゝろやすくなど申あひて。療治も油斷なかりしかど。其しるしもなくて身まかりぬ。京より態も弔になど思ひしをさはる事ありて。此下國つゐでの樣ながら。妙園寺までをとづれ侍れば。やがて源八對顏。老淚もとゞめがたく。言葉もむすぼほれたり。せめてのこゝろざしとおぼえて。阿彌陀經つかはすとて。うらに書つけ侍りつる。

蓮葉に結ひかへてや別にし恨もきえむ秋のゆふ露

うちしきりたる病中にも。此金典手づから書寫讀誦せしとて。一卷とり出て見せられたり。こゝろざしつうせるならし。在京の時は妙心寺の長老相看申て。ちと參禪のこゝろも有けむ。おはりの事契約申をきしを。下國して念佛

一三昧になれり。先祖より淨土一宗におもむきたる家なれば。つねのいとつよきによれるにや。追善の一座源八のぞみのよし尤におぼえて。この經の肝文。是人終時の四句を一順の句の頭にをきて。

せめてつめ忍ふはかれぬかたみ哉

其名をだに忍ぶべきのよしなり。別は欲によらぬ心なるべし。手跡をはじめ。なにの道にもこゝろとゞめて。氣分も侍なりし人也けむ。ことに左京兆御幼年のほど御手習も後見をも申たりしかば。御兩とも おり／＼おしみめすとなり。源八又あひかはらぬ樣なり。この會已後早々まかりたつべきに さだめたれば。下内太郎左衛門して。池田宮内卿。平井右兵衛尉其外若衆達。連歌の抄一卷。なににても講釋懇望有。宗祇詠草のうち下草のうち。耳どをなる句もありなどいふ人有て。又四五日逗留。やうやう高宮へつきたり。高宮父子無二内外一在京の里ともおもふ人なれば。伊勢までをくりの事などいふにをよばず。まづ興行。參河守。

朝しもの下草あをき日影かな

又右京兆所にて。

ひろふまで色こき庭の落葉哉

落葉の中にとり分いろこきを自愛し侍るばかりなり。一兩日遊覽。京ふみかきて。こむすめなどみやげつかはしてなぐさめたり。多賀豊後守を御社。このつゐで法樂の事。觀音寺在城の時分より申をくられしかば。東路のをのが法樂にもやなど同心したり。

杉の葉の夕はないゝ八今朝の霜

此會に北都碧洞齋來りてあひたり。近年越前へ下國の事絶たれば。彼京極殿へも不二申上一例井備前遠行已後のをこたりなど。よき便宜にてことづてなどしつゝ。十月晦日比。伊勢し

ろせといふ里までくだりし。田熊村兵部少輔一宿の事申つけられしとて。飛那井彈正方より坂口まで迎來り。高宮より兼日申されたる事は。しかしながら嚴重の事なり。朔日はたかねおろしはげしくて出立がたければ。沼田松雲軒明日一座議定のよし使有。あまりきふき興行にやと覺えたれど。ほども近ければ。はれまに馬にてつきけり。

あとや雪しまきよこきる笠やどり

まことに笠もとりあへぬものなり。田熊村殿むかひがてらとて。限阿同道してわたり給へり。亭主親着。さらば又明日沼田六郎左衞門尉一座のよしあれば。

木からしの中にいくむらみれの松

この城山の木末のさまなり。四日。大泉まで。これもほどちかく。あつらの道もおもしろくて着たり。やがて興行。

しら糸をむすふやいくせあさこほり

淸瀧川の心ちしはべり。鳳瑞軒にして。

むら雲にはなれてさむし夕月夜

瑞雲院。院主竹を愛せらるゝよし。內者申たるを。かご

くれ竹の園もてはやすあられかな

とばかりのあられなり。木唐齋。

あられふる庵や春みし花の露

本歌の心をとりかへたるばかりなり。寒風の發行かたもはるかなれば一座をさへ故障し侍りしに。四百韻連續。兵部少輔近年一段執心なれば。その〳〵此ときを待えたるふるまひにてなどあればなり。是より參河渡海と定め侍りしを其年織田彈正禁裏御修理の儀依ㇾ被ㇾ仰下。平手中務丞まかりのぼり。御料物進納。其後叡感の趣をおほせくだされたくは覺しめしながら。所々出陣など聞しめしをよばれ。旁と

かくをこたられしを。態勅使をなど下さるべき事は國の造作なれば。我等下國に女房奉書などことづてらるべきよし廣橋殿より仰聞せられたり。便路とは申ながらはゞかりおほくて。しんさくの趣再三申あげたれども。しゐて仰なれば御請を申たり。この次參河へまかり可二仰下一とて。是は典侍殿の御局より三條右（公條）府へ仰のむね傳へ上られて。御局さま御盃御服など頂戴の事なり。面目身にあまれる事なり。友軌平手かたまでつかはして內議申たれば。今度於二濃州一不慮の合戰勝利をうしなひて。彈正忠一人やう〳〵無事に歸宅。無興散々の折ふしながら早々まかり下るべきのよし返事あり。宗丹伊勢までむかひにきたれば。桑名より川舟にて津嶋に着たり。翌日やがて那古野に下着。平手出むかひて。けふの寒さこそなど。づなにやらむ手をあたゝめよ。口をあたゝめよ。湯風呂石風呂よなど金比に人をもてなす事。生得の數寄の樣なれば。さまで禮にも及ばず。まことにおほかたなる所へ落つきたらば。發病もすべきあらしにてぞ有ける。岸宗玖賢桃知春などたづね來られ。夕食のしたて手づからの爲レ躰。息三郎次郎菊千代盃とりどり。けふのてい身をもわすれたり。翌日霜臺に見參。朝食已前女房奉書古今集など拜領。今度不慮の存命もこのためにとてぞ有ける。家の面目不レ可レ過レ之など。敗軍無興の氣色も見えず。濃州之儀一度達二本意一事も侍らば。重ねて御修理の儀ども仰下され候やうにない〳〵可二申上一云々。武勇の心さはみえたる申されやう。御言傳めいわくも忘れて。老後滿足也。御書の御返事もよほして罷立べきのよし申たり。一座興行の事。この砌など一かう其さたも有まじくおぼえしを。於二愚亭一は難レ去故障の

事有。平手に興行すべきよし內議にて。發句の事申されて。はや連衆の事方々へ人遣しつゝ。瀧坊織田丹波守。喜多野右京亮。はる〴〵來り。今度殘命高名虎口をのがれし物語。まことに不慮の再會なり。發句せめられて。

色かへぬ世や雪の竹霜の松

王荊公がむかしを思ひよせたり。わが興行の外聞に脇をば霜臺作名にと內議有けん。つよきせい成べし。この會巳後熱田の宮へまうでたり。當宮は日本武尊にておはしけるこそ。日本紀の趣。御幼年の御時西夷をたひらげられ。其後神勅あらたにして。東夷もほどなくしづめおはしまして。御歸洛の御時。甲斐國酒折宮にて。

にゐはりつくはを過ていく夜かねぬる

火ともすわらは。

かゝなへて夜にはこゝのよ日には十日を

とつけ侍となん。是を連歌のはじめとは申傳へり。軍陣の祈誓にも第一神感あるはか樣の所謂にや。唐の代おこりて我國をかたぶけんとせしにも。貴妃に生れたまひて彼世をみだれしもこの御神の力とぞ。方士がたづね來れる蓬萊も此勝地を申となり。長恨歌の大眞院此宮の春敲門思ひよそへられたり。はる〴〵いりたる海づら。宮中の木末神代おぼえたる氣色。霜がれをもしらぬみどり。常住不滅の表相うたがふべきにあらず。瀧坊興行のこゝろざしはありながら。大宮司於濃州うち死。かたがた今度は遠慮しかるべきのよし申たるに。結句霜臺より興行の事內議もよほさるとなん。亭主祝着のよし申されて。發句の事は下國每度なれば。辭退たび〳〵なれど。

霜がれやほなみにかへる荻の聲

庭の荻など下國をきゝて苅のこさせたるなど

院主物かたりの首尾なり。されど旅人の奔走には成がたきひとむら成べし。この會巳後。大宮司の吊申。座主撿挍などへをとづれて。津嶋まで歸りたり。祇園神主兵部少輔清待活計。殊源氏物語一部。東國のみやげとて取出られたり。かやうの事は我々こそなど申けれど。しゐての事に成ぬ。太陽軒下國。ことに最例興行とてさりがたければ。

江のこゑも今朝うくひすの汀かな

これも千五百番[illegible]の古本など思ひもかけぬ事也。牧運軒。

遠山のゆきにまたれし朝戸哉

安樂坊。

神松の木のま霜ふる御はしかな

本覺坊ある人千句興行。卷頭の發句とて所望。

ときは木にふるや幾代の峯の雪

平野源助ことに旅宿の亭主なれば。一座の事色々申けれど。こゝろやすくて。上洛の次でになど申やぶりて又桑名に渡海。あたり意足軒一運など出むかひたり。寶泉坊あつたまできて。宿坊の事申はべればつきたり。まづ意足興行。

浦副てすむ世やいつれ友千鳥

新造のこゝろばへなり。大泉院。

月雪のあはひにあつゐ海邊哉

伊勢尾張のあはひの海づらとはおほくは此所成べし。此會の翌日。伊藤新八郎。朝飯すぎて。友軌をば彈正忠御返事もたせてつかはし侍り。那古野より參河へは日のうちに下着の所ながら。當津まで立かへる事は。彼奉書ども相達し侍る禮儀までなり。栗原へはほどちかければ。しづかに用意して。眼阿さきにまかりて。旅宿等の事申侍り。意足是かれをくりにとて。馬上物語のうちに着たり。參宮のたより。

ことに興行さだまれるやうにて。かりそめのやどもほど遠ければとて。牧月齋の城へぢきにとて。道まで使有。例の一順のためとて。

雪に雁空にもみたれあしま哉

此邊の樣ばかりなり。山田より檜墻右馬允。例年所務の事に近邊逗留とてやがてたづね來て一兩年のをこたりなどいひかはしはべり。此會に濱田出羽守光義。明日又興行懇望。難レ去事なり。けふは十一月晦日。この家は俵藤太秀鄕の末孫にて。彼龍宮より褒美の太刀所持せられたり。每月朔日には同名衆出仕。三日潔齋して。供具をそなへ。三獻の儀式嚴重なり。此太刀拜見のため。昨日は逗留の事なれば。未明におきて行水看經などし侍りし。勢田橋再興勸進十穀これもけふをまちえて早天よりたづね來れり。奇特の事なり。當城難儀のおり〳〵神變の事どもかくれなきものなり。太刀箱のしめ七重の袋。こまもろこしの錦色々なり。再拜してさやぬかれたる。二尺七寸ばかりぞあらん。ともづか。白がねのつばいづくよりいけむともみえず。朱雀院の御宇の事にや。いかばかり物古侍らむ。每朝ほこりをはらひぬぐはれ侍れば。ひかりさやかに。見るから身の毛もよだつやうなり。一年强敵にあひてつばをわられ。すでにぬかむとせしかば。敵たち所にめくれてうたれぬ。その疵つばぎはに侍りしが。年々いへあひて。今は針のさきほどみえ侍り。老眼には慥ならず。この太刀のゆへにや今朝大ふゞきして。濱田迄は七八町のほどゆきもやられず。

降わたす雪は山鳥の尾上かな

八峯千草岸つゞき。この躰にてありけむ。夜ふけて走て侍りしに。息孫太郎去年わたり元服とぞ。せいは見あぐるばかりなれば。盃もをよ

びなきよし申たれば。猶以しゐられてやうやう歸りぬ。是より浦まで五十町ばかりなれば。ひるすぎに。羽州其外駒なべて。はるかなるひがたのなかに松原あり。神明ますゐがきのあたり。みかはらけ出されて。立かさねたるほどに。下浦兵部少輔よりむかひきたるをかどにて立たり。藏春軒旅宿にてこま〴〵なり。やがて少輔殿光義御非時有。更にさしむかはれず。今夜は一盃やう〳〵申遁たり。ひとひは休息すべしとて。後十一月四日輿行。

わたつ海のかさしの花か雪もなし

海上の雪たまらぬさまをかやうにとりなし侍り。おぼつかなし。いま一座懇望とて。圓福にして。

水鳥のなりはへあやのうき藻かな

見えたるまゝなり。これより智多の大野のわたり七里となむ。舟の事かね〴〵いひつけられて。天氣も大切の事にて急ぎ侍り。息彦次郎殿をはじめ。湊ちかき小庵にまちかまへられ。餞別の盃。又ほどふれば一運たちて。ざれ舞などしつゝたゝせたり。祝着とはいひながら。我も桑名へといそげばなど。のこりおほく。舟にのりうつれば。送の衆は駒なべて。たがひのかへりみ行かくれぬ。この海にもふたがりとて賊難有とか。警固の侍あまた。同名左馬允をのせたれば。おぼつかなからず。夕なぎして暮はてぬほどにをしつけたり。かりのやどりして。本庄一竹齋へ人つかはしたれば。おどろきながらにて出むかはれたり。今夜は此濱の苫屋にと申たれど。火事などしげきころなり。ほどもちかければとあれば登城したり。やがて松波閑宗服田治部卿音信。いづれも舊友なれば。都の物語しつゝふかし侍り。翌日左馬允息八郎殿を使として朝食のよし有。まづ城のあた

り見めぐらして侍るに。段々坂々の石だたみ。塵をもすへず。なかばのほどにさゞ波よするばかりの出水見えたり。天然の境地なり。食已後自身同道して。奥までのこされず。あすは數寄の衆もよほして。むかひの慈覺寺にして。

月や霜あらしのうへになかの松

此分なり。石川左衛門尉は京都より便書など通じけむ事なれば。このたび不弁の一座をもと切なれば。

しほ風の雪やあさみつ遠ひかた

このひがたのさまばかりなり。此會已後常滑までと急侍るに。やがて水野監物丞より使有。先年在京の比は連歌のさたもなかりしを。一兩年すぎにて。大野の衆同道あるべしなど契約の所に。參河より尾州へ手遣あるべしの使昨日きたれば無念のよしかず〳〵の事なり。本より急侍ればよき事にて。何樣にも歸京の頃になど申あひたり。大野より一里ばかりなれば。はまづたひ逍遥ども種々奔走。日もおどろくばかりなり。けふは十二日精進ながら。懇切も難レ謝やうなれば。衆議にまかせたり。大野衆いまはこれよりなどいひて。

出てこし都に似たる名殘哉昔の友の今の別れは

と。馬上より見別れたり。なゝの渡りまで下はほどなければ。敵地ちかく從衆歷々なり。舟の事昨日よりいひつけられたれば。てまもいらず。暮はてゝ參河大濱までをしつけたり。稱名寺の住持濱までわたらせたまひをり侍る。數年亂後。ことに敵城ほどなくて。毎日足輕など不慮に打よせる比なれば。たゝみさへなき不辨さなり。一會の事あまり聊爾にやなどあれど。心ざしのほども見えければ。

かきくつしうつみ火つくすむかし哉

そのかみ當國にやすらふ事ありけむ。當寺時

衆相阿覺阿などいひて。連歌執心せし人々の物語しつゝ。爐邊懷舊なるべし。十三日。岡崎までといそぎ侍れば。住持も馬にて鷲塚までわたりたまへり。道のほどもおもしろし。

君なくるけふの別れに駒なへて打出の濱の心地こそすれ

と申かけたれば。

君にけふ逢坂山は遠けれど此別路に關守もがな

大津の莊嚴寺に住たまひしを。藤澤よりの仰にて。去年この道場に入院ありけむ。其身花山院殿の御息。嶋の公方様の御猶子として。花頂殿にならせたまふべき人にてありしを。おもはざる亂出來に時衆に成たまへり。哀なる世なり。八橋のわたりはいづかたぞなど事とひ過るにはるかなる野あり。東の雲まに雪かあらぬかなどおもふほどに。富士成けりといふ人あり。おどろきあへり。

八橋や思ひわたりし富士のねを雲のはつかにけふみつる哉

といひつゝ。わしづかの寺内一見してわかれたり。むかひは吉良大家御里成べし。こゝの眺望えもいはぬ入江の礒なり。船より馬ひきおろさせ。うちはへ行ほど。むさしの國まで思ひやられたる野徑うち過て岡崎につきたり。安部大藏など知人。をはりざかひまで出陣の事ありていまだ不レ歸。大濱よりは申遣たれど不レ屆や有けん。留守にもいひをかず。途中のさまよひもめいわくの樣にて孝順このわたりにあるらん。たづねよといふ程にふとあひたり。まづさらばとて大林寺金剛軒と云所へ同道したり。こゝのたびね不辨又其興なり。軒主馳走おもひもかけぬ煩どもなり。翌日大藏も歸陣したれど。猶旅宿はもとのまゝなり。石河右近茶湯用意とてずいぶんのふるまひどもなり。松平三郎かたへ 去年三條西殿御下向。當國御料所の事など仰られて。いさゝか進納の事あ

りけむ。其御禮として女房奉書相達し侍り。明日深溝まで送の事申たれば。西郡より孝清きむかはれたり。金剛軒にて一夜閑談しつゝ。みなみな同心して岡崎を立たり。松平又八舍弟（伊忠）路次までむかひ。うちつれて深溝に着たり。むかひの小寺に旅宿いひつけられ。小野田雅樂入道所。石風呂よしとて。休息して。又八見參數年のをこたりなど申侍り。父大炊助（好景）時より無二等閑一事なれば。心やすく兩日遊覽して。

花かともいふまで雪のまかきかな

柴垣新敷しわたして。なにとかなおもへる氣色を謝したる樣なり。此會へは鵜殿光義。そのほか見翁坊藤介元心など。更行ほども忘たり。西郡へはほども近ければとて。又中酒事過ぬ程に立侍り。藤太郎道までむかひ。うちはへて先常顯院へつきたり。長持より使同道して。しづかに城の山々里々見し世にかはらぬ年をへて。繁昌所がらにや年がらにや。當國數度の忩劇をものがれし城なり。去々年尾州まで下りし時も。此次音信すべしとて。千句の用意。旅宿ことしことあたらしくかまへられけるとなん。難レ去子細ありて上洛。今度の下國もおほくは左樣の禮をもなど存よる事なり。先應寺興行あるべしとて。

鐘の音も半はゆきのみやまかな

雪山童子半偈と思ひよれるばかりなり。此會已後於レ城千句有增あり。俄なる事にて一向無調法ながら。先年の無念ばかりをとあれば。不レ及レ辭。駿河まで年内にとおもへば。長々逗留はめいわくの樣なればと。越年をもおなじくはこゝほどにてとのこゝろざしなれば。いなびがたき成べし。毎日潮をくませて。孝行湯養生第一なり。東國の湯治も此分にやと思ひつつ。過行日數も忘たり。廿五日。千句始行。巻

頭。朝雪。

雲水も雪にはれたるあしたかな

當城の遠景。雪のあしたのさまなり。廿九日。藤介旅宿にて。

春風のさかひた雪のやなき哉

春風の柳よりは猶雪の亂をあいしたるこゝろにや。玄長一座。

降もつゐ雪こそいその草葉かな

雪を見ることにとりなし侍り。この會夜更たり。ちとほども遠くてとまりたり。又翌日。色色造作ともなりけむ。是を卷軸にて發足とさだめたれば。菅沼織部入道より。山家の爲レ躰をこの次に見よかしなど書信有。先年安城居住。若衆のころより知人なれば。態もまかりくだるべき程の舊好なり。上洛の次を期して。こなたよりは無音の所に。おもひよられし深切いなとも申がたし。殊更難レ去子細あれば。十日比にと内議あり。遠州路次の事。粂々濱ゝのわたりをと。鷲津の寺まで人つかはし申あはせたれど。取かへし山中になせり。今五六日いたづらの逗留なり。常顯院餞別の御齋をとやくそくなれど。さらば連歌にせらるべしとをのをの異見にて。六日には宗長月忌もつゐでよくて。

冬は梅こゝろをとむるにほひかな

寒梅のかすかなるこゝろにや。□七八日は郡文書て。宗丹これより歸庵なれば。道すがらの書狀無斷。水野監物丞發句所望ありけむもわすれて。この便宜にとあれば。

たつ跡をなし鳴ゆきの友ねかな

已前の殘おほさを筆にまかせたり。十二月十日西郡を立侍るに。百人ばかりうちをくり。みやこしこえといふおもしろき海づらより別れたり。

さする人なくて別れし旅寢にも名殘はさそなおいのこし越
ほしこえを。こしこえときゝたがへて。若衆たちへのざれ事なり。又申なをして。

立歸り又も逢まくほしこえやかす〳〵あかぬ老のさか哉

うしくぼよりむかひの人に逢までと藤太郎又三郎以下駒なべてゆくに。大塚といふ里あり。この所にむかしとうりうせし事など思ひ出て。岩瀬式部方へ案内しつゝ行ば。ほどなしうしくぼのむかひ來り。さらば是よりとて西郡の衆はかへしつ。又牧野平四郎已下きむかはれて。田三郎豊河の寺にてまたれけるよしなり。長老も出座有て盃たび〳〵。歴々のしたて過分なり。酒半無理にまかり立たれば。道まで色々持せられて。平四郎平三郎其外同名中。富長ちかくまでをくられて。織部入道息達。今泉猪四郎已下。早々よりあひまちたるよしなり。去年以來山家國中とりあひ出來て。この道は一向不通にて侍るを敵味方をくりむかひ參會して行別たり。そのかみ鳳來寺參詣して見しわたりなり。織部新城目をおどろかしたり。年經て出頭。息新八郎をはじめ。子どもあまたいづれも器量に見えたり。旅宿とても別のかまへもなく。數寄の座敷へむざ〳〵なる旅の具どもはこばせ。やがて風呂。夕食くゞる鴈が音のりやうり。尾州遠の名酒。路次不通の時分奇特の事なり。難レ去事とて。十日頃まで延引とありしは此用意にやとみえたり。豊川の餘醉散々ながら。又大酒に成て夜ふけたり。四五日は逗留すべきよし。しきりの事なれば。すでに月迫。一座の儀もあすとて。發句のもよほしもなかりしを。書付てきたり。

あはてたにかへるさいかにゆきの友

河邊月雪の時分なれば。事古たることをおもひよれるばかりなり。十二日。無理に立かへ

り。同名親類の連衆までこゝろ〳〵の餞ども難レ謝事なり。行末は所用もあるよしにやなど。都の留守不弁もいかにと。孝清孝順とりもちて西郡へつかはしたり。鵜殿邊懇志のものどもひとつになど申あはせたり。在々所々の芳志。都の便宜にと申をき侍り。おもひもよらぬ事どもなり。是より遠州までの迯自身の様なり。前なる大河うちわたして。むかひのきし野のほとり豊しき。をさへのもの。色々梅のつくりえだ。春まちえたるこゝちし侍り。楠千代殿盃過し。夜の峯の雪かげは。盃中におちたるさま。たゞにはとて。

詠めつゝ別れむかたもなかりけり汀のこほり峯の白雪

楠千代。

立別れ行らんかたの峯の雪汀のこほり思ひこそやれ

など有けむ。不春軒西江山中まで物語しつゝ。すぎがてにわかれたり。今泉彌四郎又五十町ばかりをくりて。名もしらぬ山ぎはの里。神さびたるやしろのかたはら。その大まつだけなど。ともの人々かはらけ取出たり。こゝもとまでの故實。定て父慶芳のしわざならんかし。このさかづきも數々のこりおほけれど。主ある神の木のもとなれば別つ。非伊次郎殿へは孝順知人にて。昨日申つかはしたり。このわたりまでむかひくるらんなど申もあへず。深山をこえて。侍の四五人。非伊殿同名彦三郎迎とてさきへ案内あり。いそぎ行ほどに。かた岡かけたる小城あり。これも非伊一家の人。今日谷まで下着あひさだめたれば。抑留にをよばずとて。使僧して樽さかなをくらる。馬上盞の躰なり。初夜の過に和泉守所へ落着たり。次郎殿やがて光儀。明日一座の懇望。又。

太山にもやとやさくらの雪の庭

かゝる山中にて。執心大切なるこゝろをいさ

さか風したるばかりなり。十四日。引間までいそぎはべり。次郎殿自身。其外同名中。都田といふ所まで送ゆく。又さかづき。かりそめのやどりにて。歸京の次。又かならずなどあれば。

歸りこむ秋なまたなん都田のあぜの細水（みち歟）ゆき別るとも

といひつゝゆき別れたり。又廿四五町。引間までをくり有。この野は歌枕にも當國にいりたり。萩女郎花などよめるにや。秋の花ざかり思ひやられたり。孝清。富士見つけたりやとおどろかされて。みれば手にとるばかりなり。馬上より。

昔みし富士や雲ゐになしはてむ君引まののしるへならすは

といひかけたれば。

めつらしとさそな心も引まのや馴しゆきゝも山は富士のね

などいひかはして行まゝに。引間の迎きたり。飯尾豊前守へは。參河より下國の事申遣たれば。駿豆再亂によりて。蒲原城當番なり。されども留守の旅宿。駿府まで送の事。嚴重にいひをかれし事にて。江間彌四郎殿馳走。今日の寒さいかゞなど。炭薪などとりくはへ。風呂入湯などむづかしきばかりなり。夕食已後若衆などあつめて大酒。更はてたり。孝清は關東までとかねて懇望なりしかど。近年わづらふ事あれば。三河人おほかたかきてこれとかくしつ。駿府へは當所より三日路。慶順とて入道あり。こうの入たる事はあぶらぎりたり。これにいひつけられたり。送の馬人はいふに及ばず。とまりどまりのしたゝめ。ひるのやすみまでのこる所なし。今日は掛川のわたりまでと急ぎ侍りしを。天龍の舟渡河風ふきて。池田の宿遊屋が跡まで事とふほどに。見つけのこうの傳馬いひつくるあひだに暮たり。さらば今夜の旅宿はこの家になどさだめたり。鬼やらふ夜とて。まめうちさはぐほど。十五日の月さし出

て。いとゞ都おもひ出られたり。此所は今川貞世の住たまひしとなん。むかしゆかしくて古城のあたり立いでて見めぐらす。袖の山風吹たてばかへりたり。あすはさやの山大井川ゆき過ぬべしとて。未明よりおきたりければ。立春達君をむかふるとて。

年の内の明ほのかすむ山端を見つけのこうに春はきにけり

やふ梅ほのかに咲たるを見て。

咲きにけり旅寝の宿の垣ねにも春はきたのの梅のはつ花

北野の御やしろにて越年。瓦礫など手向馴しことをおもひ出しなり。急ぎゆくまゝ。佐夜の山もちかし。日坂とかいふ茶屋にやすみて。跡なる荷物などまつほど。この山の名物なりとて。蕨もちゐといふ物しすましていだしたり。一年もさ有けむなど賞翫も一入。たゞにはいかゞとて。

年たけて又くふへしと思ひきや蕨もちゐも命成けり

この歌にめでて皆かずもしらずまちつれてこえ行ほどかひがねのかたにこゝろつけよなど宮内卿友軌などにいへども蕨のかねにめとゞめしほどはあらず。よこなる雲はれやらで。さやかにも見えず。こよひすぐさず大井川をわたるべしとてあなたの麓にて駒かはせたる。いくせしらなみとか見わたされしにかはりて水もあさし。數日雨にもあはぬしるし成べし。暮はてゝ嶋田といふ所につきたり。山下風吹て疎屋の板戸たまらぬはげしさながらいざよひの月さよの中山より出て。ふきゆくまゝにうす雪散きつゝ。さらに忘がたきたびねにぞ。

年たけてふたゝび越し思ひ出や雪と月とのさ夜の中山

とこゝろのうちに吟じて。すこしはまどろみたり。けふは府中まで。やうもいるまじきなどいひて。明はてゝ〔つ歟〕おきたり。藤枝とかいふ里過て岡邊に着たり。うへの山口入て行に。蔦かへ

で霜がれていと心ぼそし。ひとゝせ宗長老人同道してこの山を越けるに。府中よりむかひにこし人々も。きけばおほからず。丸子山家までくるほど。其世の事おもひつけられて。

うつの山こととふ人は夢とのみみしよながらの峯の松風

とこゝろのうちにおもひつゝ。府中も近し。旅宿のくらしもとみし人有ながら。一花堂佐藤澤二寮越前より去八月入院のよしつたへきゝて。參河より便事にて申ければ。草の莚をも先この寺にこそはなど。兼々の事なれば案内したり。待わびにけりなど。やがて相看。越路の物語しつゝ。風呂非時など例の事なり。誰庵想印軒竹軒などへ住持より人つかはされたり。誰庵おどろきながらとてきたられたり。これも參河より下國の事申たれば。なにとて此方へはなどあれど。在府中里坊にと申さだめたり。まづ引間の送かへしつかはし。慶順が蒲原へ着府の趣申べしとて急待り。今日はやすみてといへど。豐前まちかねらるべしといふも尤の事にて。今度はる〴〵のをくりしうちやくのよしかず〳〵書て。筆の次に。

忘れめやさよの中山なか〳〵にあひみしよりもふかき心を

と申はべり。まことに懇切の事なり。一座の事住持より使有。太守へ御禮の後しかるべきか。廿四日よりは別時なれば。其前にこそはとて。想印に談合。則披露せられたり。先年御在洛のおりふし。別而御懇意の事ども有つる行ゑなれば。明日此方しだいに參上すべきよしなり。そと申入てやがて退出。廿一日興行。

一花もことしやさかり宿の梅

餘花早梅の發句は。つかうまつりにくき様に先達もいへるが。げにも春を待えて冬ごもる木末などいはぬは。季に成がたき故なり。こと葉にはそれともなくて。季をつなぐ事は。思案

おちつきたるうへの事成べし。この心も先年內立春を心にこめて。しかも一花ひらくればなどいへる古語をおもへり。一輪咲たれどもこの風雪のうちには盛なりけりとおもひなしたる心なり。後に人の語りしは。此發句春にやならむかなどいひしもの有とや。連歌は歲にもよらぬものなり。唯性ある心にむづかしき作意を領解する。此道にかぎらず。無作意のこころにはめのこ算とやらむ。うちひらめなる句よりほかは。みゝにおちぬにやあらん。若輩のためついでにしるし侍り。一日もまかりすぎしとき。丸子山家とぶらひ侍らばやと思ひつれど。同者誰庵誘引してとおぼえて。けふは天氣も長閑なりと申つかはしたれば。馬ども用意させてきたれけり。柴屋よしみの人々さそはれたれど。薄暮なればさはる事ありて。一兩人ばかり。なを其興ありけむ。今年は十三回なれば。於近衛殿和漢百韻詩歌一續興行つかうまつりたり。懷紙影前にをかれて其世の物語。老涙とゞめがたし。水石かはらず。手づからうへられし梅楊かつめぐみて。けふをまちがほなる庭のけしきなり。蔦のかれ葉ふみわけて。はかにまいりたれば。

柴屋の苔の下道つくる也けふを我世の吉日にして

と。そとばの樣なる板にかきつけられたる跡も見えず。この歌は先年下かうのとき。ざれの事のやうにかたりたまへりし。其後又はか所をかへられしとて。

又つくる苔の下道柴屋やなからのはしのむかしなりけん

と書つけられたるあとは。いまにほのかにのこれる。やり水の石ばしふみかへりて。

うつの山谷ゆく水に殘りけりむかしなからの夢のうき橋

などいふほどに。一盃すゝめられて。誰庵もゑいなきのやうなり。發句あらば。府中の庵に

て。年のをはりの手向許にもとあれど。馬の口つきども暮にけりなどいへば立歸りたり。府中にきて。

見れはみし跡とふ雪の山路かな

とおもひつゞけ侍り。彼物語のこの山の段に。かゝる道はいかでかいますするといふを見れば。見し人なりとか有ける詞をとりたるばかりなり。是を誰庵につかはしたらば。かならず興行せらるべし。あまり月迫なれば。わづらはしさもいかゞにて。獨吟につかうまつりたり。歳暮皆々とりみだしにて。いふ一座も侍らぬも尤の事なればとて。竹軒興行のあらまし申きたれり。この立春をむかへて滿八十なり。上洛のついでまでいのちも期がたしとて。しきりなれば。

細石にかぞふるとしは暮もなし

と祝し侍り。顯甫此ごろは小河に難レ去事有て着府。一兩日開つけたりといひて。越年の料などこゝろざし侍り。晦日には太守より想印御使として。馬人さりあへぬほどなり。都にも但ぬ年の暮成べし。冷泉（爲和）大納言殿御在國の事にて。御檜たまはりたる。過分の事なり。これより炭薪など進上次。爲尹卿眞筆千載集正本にやと。備二御覽一之。

しろへせよ小野の山柴分まよふ跡ふりまさる雪の道芝

と申たれば此間十行闕

と仰られて。近衞殿御息事なれば。不レ及レ申事なり。彼千首も京にをかれたり。こゝにも手跡あまた侍れども。他所にあつめをかれたれば。上洛の時猶見あはせられてなど御懇書あり。住持より元日の小袖餅かゞみなど。めしつかふまで過分なり。ことさら絹綿禁斷のしたてとも見えず。御喝食のついでにもやとみえたり。元日は客殿三獻のいはひ。なにやらん試筆

心に申つかはしたり。乘阿宗旨にはかはりて。唐物數寄にぞおはしける。詩をつくり給へり。例年の事にて。

朝日影匂へる空をしるへにて四方にあまねき春は來にけり

發句。

さそへけふみやこにかはる花の春

三日月を拜して。

春はまつほの三日月の雲る哉

と申すてたれば。乘阿聞をよばれて。

雪にかすみにのこる山のは

とつけられて。第三をば宮内卿にぞ。

かへる鴈そこともなみに聲きゝて

など。四五人してよひ〳〵百韻にや成ぬらん。七日は誰庵にて和漢興行。

けふつむやいくふることの初わかな

例年柴屋在世にも人々の興行ありけん事などおもひよれるばかりなり。十三日は太守和歌の會はじめ。年々歳々斷絶なき恒例。珍重の事なり。出題冷泉大納言殿。竹爲レ師。

すくなるを道としなさは竹とりの翁も君になひかさらめや

此物語當國に由緒ある事と云々。

當座　寄レ川戀。

年も經ぬなかに隔て佛はたつ川きりのうき身ながらに

十八日想印軒。

たちなはといさめし雪かあさ霞

又も降しけといさめしゆきにや。西方寺とて。縫物上手にする時衆。一座のよし望なれば。不弁もをしはかりて故障。發句をだにとて。

梅柳をりぬひものゝみたれかな

江州進藤山城。年頭の會はじめにて去年所望。

鶯のむめか枝うたふあさ戸かな

寶樹院。

梅は世にふしのけふりの匂ひかな

當住三條亭御息なれば。燕の心なるべし。太守にも御輿行有たくおぼしめしながら。年頭每日の佳例など寸隙も御座なきうへ。下國の御いとまむりに申侍れば。一夕めして冷泉殿中御門殿出座。大御酒過分の御したて酩酊。やうやう退出にて熱海湯治可レ然時分に成侍れば。いそぎまかり立べきとて。駿豆さかひ不通なれば。吉原城主かののすけ 松田彌次郎方へ朝比奈三郎兵衛尉飛脚。密々つたひ／＼つかはされたり。定別義あるべからずとて。正月廿六日出行に相さだめたり。乘阿今一度のあらまし侍りしかど。京文參河文など。二三日書侍れば。寸暇もなくて。餞別の一續をとて。題の事冷泉殿へ申されて。二首の懷紙。

行路梅

玉鉾の行手にとまる梅かかを袖の別れそ立空もなき

神祇

立歸りしつはた山のあや杉な秋のにしきの手向にそみむ

當座　朝鶯

朝ほらけ花と散てや深き夜の鶯さそふ春のあは雪

廿六日。送りの事。早々にと申さだめたれば。昨夕朝比奈左京亮召請。獻々深更に及び。無ニ正躰ニておきもあがられず。やう／＼ひるほど發足。知人たちいとまごひとてきたられしもうはの空なり。想印馬ども申つけたりとて。ぬさの物とりそへて。

別路におれる柳の糸よりもほそき心の色はみゆらん

なにさまに上洛にはとたのもしければ。

東路のゆく手におれる柳にも都のつとそ思ひやらるゝ

又珠易。

旅衣うらやましさはおいつるのとひたちぬへき心となしれ

返し。

旅衣うらやましくはとひもたてあしも心もわかの浦鶴

など申つかはして出たつに。一花堂の 喝食各其外一里ばかり歩行にて 物語りしつゝ。田中

の杜の陰に土器取出つゝ。又いつかはなどのこりおほくて別れたり。誰庵は蒲原までと兼兼の事にて。駒うちはへ清見が崎も見わたるほど。江尻といふ里の小庵に立よりてやすむべしとておろされたり。餘醉もやう〳〵さめて。今朝は露ばかりも口ふれず。いかゞなどおもふほどに湯づけ出たり。同宿殿原などとくはしらせての事にぞ。さすが作者のこゝろづかひにてこそと。ほめ〳〵しやうぐわん心地よし。清見が磯くるほど。むかし宗長のしるべにて。一夜とまりしよこ雲のまぎれ。夢の心ちし侍り。今日又誰庵同道。契かはらぬ渚づたひ。岩の氣色もいかゞ事あさかるべし。關の梅さきて。みほの松原みどり紅なり。

さらでたに心とゝめてゆく袖に梅匂ひくる關の春風

などこゝろに吟じ行程に。馬より誰庵。

鷗眠濱潤二三磯間一　雪晴洛客對二山顏一
秋來期約催二歸思一　此景莫レ忘清見關

宮内卿にいひかけられたり。和韻おもひめぐらせなど申侍れば。蒲原より豐前守同名衆あまた迎にきたれり。誰庵はさらば是よりとあれば。

歸りこむ月の秋まで忘れめや清見か關の春の浦波

といひつゝ別れたり。蒲原につきたれば。まづ休息すべしとて。おりゆなど用意させられたり。吉原の返事もたゞいま到來とてみせられたり。ことなる事なければ安堵したり。夜にいりて本城へまかりて。まづ舊冬のをくり懇切申侍り。原六郎二俣近江など相伴に出られて。又こうたまじりに成て。近江守一さしまはれたれば。さながらうちおろしの大明神の出現のやうなり。これを興にして立たり。吉原へふねの事は二三日以前より用意させられたり。ことにあさなぎしつくし。したゝめの事膳部

かたへ早々と申つかはしたれば。ほどなくつかひあり。食過て豊前守そのほか濱まで送。田子浦とは此邊にやなどたづねたれば。清見が關のこなた六里ばかりのほど。みな田子のうらとなむ。舟にのるとて。

打出て思ひもなくれかへりみる山は富士のね田子の浦なみ

昨日より風はなぎたれど。まことにたゝぬ日もなき浦波に。こぎいづるほどもめづらし。敵地への送なれば。警固船兵具いれて。人數あまた乘たり。一里ばかり過たれば。吉原の城もまぢかくみえたり。この舟を見つけて。足輕うち出。事あやまちもしつべきけしきなれば。十四五町此方の礒にをしよせ。荷物おろさせ。松田彌四郎申陣所へ人つかはしたれば。案內者をこせ。みなと川のわたりし船さしよせて待たり。やがて出むかはれ誘引あり。かりそめの陣所ながら。こゝろ有さまなるしつらひなり。窓ひらかせ。富士みせられたり。けふはあやにくにくもりなどのこりおほげなり。三嶋まで送の事申侍れば。しきりに抑留なり。今春八郎三谷など。昨日小田原よりとて時宜ども申つたへたり。むりにまかり立べきよし申はべれば。こゝろなくとゞむべき事もけうなる樣なればとて。さかづき出されて。湯づけのしたていつのまにとみえたり。相伴とてひたいはいしあせのこる處なげなる若衆出たまへり。誰ならんと目とまるほどおもひわびて。彌八に事とへば舍弟源五郎殿となむ。三嶋のとまり後悔せり。盃たび〳〵。小田原邊にてはみつみつあるべしなどざれ事まじりのうたひになして行方も忘れたり。送の衆あまた。乘しづかなる馬ども出されたり。はるかに門送り。色々申てかへられたり。堺目不通難儀なれば。まかりとをる事さへおぼつかなく覺えたるに。思ひ

もよらぬ念比さ。ことに三嶋まで。吉原といふ侍。馬にて途の事いひつけられたり。一かう若年とみえたるに。きどくのこゝろづかひどもなり。かののすけもおなじく三嶋までなにがしをそへられて懇切なり。ことに一昨日不慮の事有て。愁腸前後忘却とやらむきゝしに。たびたび使かへりてめいわくのやうなり。浮嶋が原うち出てゆくほど。たかねのゆきはれみくもりみ。雨に成ぬべしといへば。駒かけらせ急げば。千本の松原といふ木末みえたり。北野のわたりおもひ出られたり。三嶋に着たれば。雨降出て暮ぬめり。伊藤とやらんいふもの有。途の人案内したれど。客ありとて不思議なる旅宿したり。翌日もはれやらねば。參社も申がてらとて。けふは逗留。ひる以後神前にまうでたり。ゐがきの梅ちり亂れ。御橋の柳なびきわたり。えもいはぬ水のながれ。神の御心もくみしられたるいさぎよさなり。八ケ國の鎮守とておはしますよし申せば。行すゑ事なくなど祈念し。小神樂まいらせて歸たれば。三齋とやらむきて下かうのよし只今うけ給はり及びたるとて。物語などして。あまりに不辨なるやどにて侍る。笠原玄蕃助といふ人有。楚忽ながら同道すべしとなり。はゞかりながらけふのまもくらしがたき所なれば。しるべにまかせたり。亭主やがて出られて色々念比なり。養父の時も。宗長上下の旅宿にて。有けんむかし語どもして暮はてたり。あす俄に興行のこゝろあるよし。三齋して懇望なり。宗祇。宗長。獨吟千句も。當社にての事にて。其時分は執心の人連衆などもかたのごとくありしをなど。法樂の發句つとめずは。神慮もいかゞにやといはれて。

ちる梅やみしまゆふはな春の水

社頭の春の興成べし。此會已後熱海湯治。折ふし幻庵老母養生とていらせ給へり。幸の事にて。近藤殿御ふみつたへ參らせたれば。おどろかれて。旅宿等の事懇切なり。ことに幼年のころ三井寺在寺のおりふしぞと。向顏の事など物語ゝられて。小田原歸府迄はほど遠き樣なればとて。發句の事いなびがたくて。

梅がかもわくや出湯の春の風

自然風流なる袖のにほひもまじるらむとをしはかる心ばかりなり。二月十四日あたみを出て赤湯山一見。ことにあすは御神事にて。御社頭のあたりにぎはしく。遠近人もかつまじれり。湯瀧。水瀧。濟度の海におちあひたるさま。煩惱のあかもすゝぐ心地したり。眞乘坊といふに立よりたれば。わりなく發句所望。

まなくよる山や春雨たきの糸

見えたるまゝにや。大庭の石上など。同道して行まゝに。どひのうらちかくなれば。杉山の城ふりさけ見つゝ。まな鶴がさき。石上しる所にて。さきに人つかはし。船あそびのまうけしつゝ。しとゝの岩屋みせ侍り。此岩屋は杉山の合戰にうちまけたまひて。賴朝かくれおはしけるを。梶原平三見つけてたすけ參らせし。此忠節によりて。無二比類一近習になれるよし東鑑にみえたりなど人のかたりし。さもあるにや。大庭千世に。

蜑小舟さほのとり〳〵みつゝ哉しとゝの岩やまな鶴がさき

などいひつゝさしよせて。小庵におりたり。さかないろ〳〵手づからとりくひつゝ數盃。興に乘じて駒なべつゝ。小田原もみえわたるほど。幻庵より迎たまはり。永田源左衞門所の風呂たかせられ。夕食のしたて歷々の樣ながら。手だにふれられず。太守へ御禮の後。春庵院いて長老館のはな見にわたらせたまひて。

數樹繁櫻開更佳　一觴一詠興無涯
生來知是遠方客　併見長安陌上花
今日參扣のこゝろばへなればとて拜見させられしかば。韻を和しまいらせて。

さかつきの春幾めぐりけふのまも千世たうかふる雨櫻はな

太守。發句つかうまつるべきよし再往の御懇望なれば。

庭つゝき雲たのきはの山櫻

庭前繁櫻のさまを成べし。伊勢備中入道清辰長長在國。今度下國再會。殘命のしるしたゞにはいかゞなど。不弁の興行ながら。同心もあれかしなど。こまぐの事に成て。

暮られは花もみやこのうらみ哉

月花の興にはしぜん都をわするゝおりも有べし。されどもひとへにむかしこひしきこゝろには。この風景もうらめしかるべしと察し侍り。會以後大酒。兵庫頭。息八郎殿。舍弟又三郎殿。大和信濃。いづれも好の事なれば。さながら都の心地して沈醉。えひなきもとめがたくて深更に歸り侍り。此會。翌日まかりたつべきにおひ定めたれば。太守より館花いまださかりなれば明夕參上すべきよし御内議あり。君卓のかざられ庭籠の鳥。かずかずのおもしろさ。やり水のかけひ雨にまがはず。水上は箱根の水海よりなどきゝ侍りて驚ばかりなり。例の發句又當座。

はなの色も鳥の音おしむ夕哉

たゞ今の景氣成べし。この發句にて一折獨吟にすべきよししきりの御事にて。然ば御脇をなど申侍れば。作者にとて。

かすみにもるゝこすのとのやま

今日は二月廿五日。北野御神事。右京兆一日千句万代不体の吉日なれば。御稽古のはじめには。尤珍重のよし申なして退出。廿六日。幻庵

より朝風呂にいるべきよし使あり。すぎし夜の雨あかつきがたより、さえ歸てや有けむ。おき出てみれば。箱根つゞきの峯々。雪いとしろうふれり。おどろかされて。

箱根山かすみこめたる明方の春に驚く峯の白雪

幻庵後園の山家見すべしとて。竹の枯葉を踏分てしるべせられたり。あはかづさの浦々まどうつこゝちして。鎌倉山は茶屋の木末にかかれり。ちかき眺望はいふにたらざるべし。太守へ御いとまの事申侍れば。兩度花見。猶以のこりおほきよし仰せられて。明日廿七日。一續被レ遊べしとて。當座。花初開。

匂ひ來る風もまたなん朝露の結へはとくる花の下紐

雲端鴈

明ぬやと夜渡る雲のはしかきに先みえそむる雁の玉章

一座已後大酒。新度の小うたども口々ならさせられ。あかつきがた退出。廿八日發足の砌。

色々重寶拜領。宮内卿まで御小袖きやもじなる御したて。みるめもにほひもあやしきばかりなり。又幻庵おなじく小袖。重疊。あづまのみやげなどまでおもひよられて。

花ちれは別れを急く言のはの蔑りあふ日をいつとまちみむ

返し

花の春あかて別れし心をは葉の秋にこそ色もみえ南

又これより小袖のしうちやくを申て。

めも春に色こき袖の浦波をかけてもいはむことのはそなき

袖の浦小田原の近邊に有とや。宮内卿方へ小そでにそへられて。

身をかへて慕ふともしれ人からに猶なつかしき袖の別れ路

おもひめぐらすほどもなければ。かはりて書つけはべりし。

さらてたにけふの別れは空蟬の身にしめあかぬ袖の移り香

と申て。彼是駒なべつゝ。歸みがちに打いづるほどに。曾我の古郷みやりて行まゝに。こゆる

ぎの礒もちかく見ゆ。今夜旅泊は此礒まくら思ひ出なるべしなど兼々の事にて。笠原玄蕃助しる所なれば。さきに人つかはしてまうけしたり。たゞにはとて一折の懇望尤のよしにて。

若草に波もとをよる礒邊かな

おきにをれ波とよめる心をおもへるばかりなり。夜半巳後百韻はてたり。旅宿は山陰の小庵。はなの木うへてこゝろあるさま。ことさらに咲みだれて興をそへたり。

又やみむ花の波さへこゆるきの礒の枕の春の明ほの

まことに忘れがたきたぐひなるべし。あさ飯のしたてなにをがなと。あるじさかなもとめて。こよろぎのいそぎありくさま。なか川のやどおもひ出られたり。又うちいでて。虎が舊跡など事とひつゝゆけば川あり。花水川となむ。風流なる名もきゝすてがたくて。

駒とめてしはしとりかふかけもなし花水川の波の下草

かくいひつゝ。さがみ川の船わたりしてゆけば大なる原あり。とかみが原とぞ。これは當國の歌にいれりとなむ。此はらのあたりにみえたる神社あり。とへば八幡勸請の一なりとぞ。花のこずゑ一木二木神さびたり。

おゐ人やとかみか原の八幡山神のもろてふ花のさかりは

といひつゝゆけば江嶋もほどなし。天女すみたまふ勝地。ことさらあすはゐの日なれば。結緣すべしとて駒なべていそぐに。鹽どきさへほどよくまうでたり。胎金兩部の石窟凡見すまじく。社壇ちかく荒浪うちよせて。岩の雫糸竹をこらす音なひ。長夜の眠もさめぬべし。御緣起の趣。天神あまくだり地神あらはれてつくりいだせる嶋とぞ。社僧松火ともししるべしてみせられたるに。天上の岩つみ上。細工のさしあはせたる樣なり。身の毛もよだつこゝ

ちすれば。おほかたふしおがみて立かへり侍り。三切殿發句一法樂せよかしと。しきりの事にて。

たか箏もえやはゐしまかうす霞

此嶋のこゆるぎのわたりよりみしおもかげ成べし。とかくやすらふほどにしほみちくれば。渡し舟坊よりいひつけられておりたり。かたせ川こしごえすぎゆけば。ゆゐの濱みなせ河も見えわたるほどなり。愛阿彌鎌倉よりむかひにきたれり。しるべしてむかしの跡など問きくほど。暮がたに成てつきたり。旅宿は太守より後藤がたへおほせつけられ。清閑をそへられ。幻庵より多田など案内者とてくはへられたれば。いづかたもおぼつかなからず。舊跡のたびね其感有。けふは三月一日。早朝先鶴岡八幡宮參詣。松の木のまのさくらさかりにて。石清水臨時の祭舞人のかざしにおもひまがへられたり。近年御遷宮。あけの玉がきよりはじめ。見るめもかゞやく春の光。わづかにむかしおぼえたり。まづ金澤一見すべしとていそぎ侍れば。後藤案内いたしてうちいづるほど。めにちかき谷々。右大將家の御跡。山がつもこゝろあるにや。はたにもなさず芝しげらせ。はなち飼駒所えがほなり。するすみいけずきひやされしながれ水。さびいてかげもみえず。こゝかしこ過がてにするほど。暮ぬべしといへばいそぎつきたり。はるかなるひがた。山ふかくいりぬゐ礒みるめもをよばず。金岡筆なげすてたるとぞ。うへなる山にあり。稱名寺にいたりてみれば。青葉の紅葉事問べき人だになし。しばらく有て。一室とやらんいふ老僧出て。爲相卿詠歌物がたりして。紅葉も老木に成てうへかへられし庭の跡などをしへられ。我坊のはなけふをまちいでたるやうなればと

て。こゝろ有けにさかづき出されて。このはなをばいかゞなどあれば。

けふそ思ふみぬ昔の秋の色までもこの一本の花の匂ひに

など申たれば。又かたはらより發句ひとつせよかし。この老僧興行の心ざしあるべけれどこゝほどの見苦しさ。はゞかりなきにしもあらねばなど。わりなきやうにて。

秋もいさ青葉に匂ふ花の露

花の露かゝりたるあをばは。紅にも染ました（とて歟）るやうに申侍り。さらば暮はてぬほどにぞ。うちはへかまくらへくれば。妙法寺住持たるなどたづさへられ。迎にとてきたられしかば。又ゑひをかさねて。暮すぎたるほど旅宿につきたり。陸山藤太郎來りて一座の望のよし内議申たり。ことに一向若年の執心もさりがたきことにて。例の發句。

ことゝとはゝ花やしらむ雲代々の春

三代將軍九代の春もはなはかくこそは圓覺寺の木末さかりにみえたる會席なればなり。連歌以前建長寺開山大覺禪師の御影拜見の事申つかはしたり。ことに小田原より祐藏主方へおほせられたれば寺中馬宿たちへ昨日より披露ありければ御影堂鑰のあづかりよびて。老僧四五人出仕せられ。灯明かゝげ燒香し。三禮參らせ。みづしの符をとるほど。なにごとかあらんとおぼえたるに。鏡の面くもりたるに。十一面の尊容さだかにおがませられたり。殊勝にも有難もきどくにも涙落ばかり也。御手には團扇をもちたまへりとみたる人も有。老眼さやかならず。又ほつすをもたせたまへるときもあり。夏冬にかはれりと云々。鏡記にくはしくみえたるよしあれど會席より使たび〳〵なれば。懸望にをよばず。此開山光かくれたまひなむとするとき。最明寺殿歎おはしけるを。

なぐさめまいらせられて。我すがたをば此かがみにとむべし。形見と御覧じて。佛法興隆の守護とならせたまへなど有とや。あまりに有がたくおぼえて。翌日祐藏主方へ申侍りし。

照す世の面かけとめて身を分るちかひくもらぬます鏡かな

まことに正身の觀音にて おはしましけん事。まのあたりにおもひしられたり。藏主より。

當臺明鏡淨無レ雲　照破三千世界群
得ニ此佳篇一猶増レ色　分身百億爲レ君分

雲　心　拜　和

今日は桃花宴。庭鳥よもぎの餅をみるにも。みやこおもひ出られたり。かな川まで道のほども遠ければ。早くよりおもひたつに。あま雲有とて陰山逗留すべきよし。さま〴〵の事ながら。むりにたつべしとて馬どもの事申たり。庭の櫻雪とちりきて。のこりおほさを そふるさまなれば。亭主のかたへ。

思ひなく心もしらて別れ路の露よりもろく散櫻かな

鎌倉よりかれこれをくりにとて駒なべ。さきになり跡にむれつゝ。さらばや などゆきわかれたり。西脇清九郎はこゆるぎまで といひしを。所々の案内者して。やう〳〵けふわかるとて。發句へいづかたよりもと所望。彼使もだしがたく。鎌倉にてあらましもありしと急ぐにつけて。節日をもわすれたればおもひ出て。

花なかす水上いくせけふの春

と。馬上よりいひつゝかへしたり。ほどなくかな川につきたり。此所へ もこづくへの城衆へいひつけられて。旅宿慶雲寺にかまへたり。長老出たまひて。今日の宴をたゞにはなど あれば。

はからすに是もみしかな河つらの桃咲けふの春のやとりは

と。桃源の古事をおもひ出るばかりなり。四日天氣よくて 江戸の城につきたり。遠山甲斐守

に入つかはしたれば。おどろきながらまづ旅宿の事いひつけられたり。ことに亭主宗三とて和泉堺衆なれば。時宜心やすし。城よりつかひ。明後日上總國へ出陣のこと侍ども。むりに一座懇望のよし有。色々故障めいわくのよし。再往なれども不レ及二了簡一。しかればせめてひるつかたよりはじめられよかしなど申て。一順のためとて筆もとりあへず。

玉すだれはなにあけゆく千里哉

この城の遠望。したには運二籌帷幄中一決二勝千里外一。このこゝろをいさゝか祝したるばかりなり。又六日。太田越前守興行の事申來れり。これは小田原にての兼約と申ながら。すでに明日息彌太郎出陣なれば。取亂させ侍らむ。されども斟酌同心あるまじき執心なれば。發句のもよほしにをよばず。

はなにみぬ朝露ふくむ色香かな

見えたるまゝなるべし。一座はとくはてたるに盃色々。彌太郎出陣をもいはず。連歌の心だてみえたり。立かねて舍弟西堂のえさりがたく例の酩酊。このかへさに富士見の亭一見すべしと申たれば。富長もとへ會席よりたゝれてまたれたるほどなり。これ又小田原より兼兼仰られたる事にて。掃除などの□迎の岡松いくむらとなく。入江かけたる□もひとつにながれみちたるひろへさ忍び。用心こゝろやすげなり。暮はてたれば富士もみえず。おもかげさながら中空なりけむ。武藏野の眺望こゝにつくしたるべし。東の矢ぐら又苑玖波山の亭とや。遠浦歸帆むさし野をはしるかとみえたるに。さしのぼる夕月夜盃にうつりたれば。

國々も君がなびかす白雲のはた手にかすむ山はふしのね

明日出陣。又太守へ詠進しかるべきよし。各異

見の事にて。はゞかりを忘れたり。七日にはわたらきの軍勢あとさきに立侍り。角田川もみえわたるに森のやうなる木末あり。とへば關東順禮觀音淺草といふ所となむ。立よりて緣をすべしなどいへば。

秋ならぬ木すゑの花も淺草の露流れそふ角田川哉

清閑多田。こゝまで數日のをくりも懇切なれば。

又太守へ御ことづてのやうありて。

角田川送りしほとの日數たに思へはとなき本ノマヽ

すみた河こととふ鳥はありなから君かしるへ□本ノマヽされる

長尾孫五郎出陣の道具□ひをくれるこゝろざし。又は□たちも袖ぬれがほなる氣色なきにしもあらねば。涙もろなる心よはさをまぎらはさむとて。

角田川舟こそりはの長刀にあひしらひてそふりはなれつる

といひつゝ。みやこのかたのみおもひやられて。岸いかきなるもおぼえず。わたし守におどろかされておりたり。普藏主とて常陸國法雲寺より湯本の長老へ使に參られし僧小田原にても參會のことなれば。このわたりをもろともにしつゝかたらひ行ば。馬上より宮内卿にいひかけられし。

漠々武野水雲邊　不意逢君棹小船
無限愁情難話盡　客中送客落花天

と聞もなをもよほされたり。

大和田五月
藤倉喜代丸
尾崎明憲
西島義太郎　挍

昭和三年四月二十日印刷
昭和三年四月廿日發行
昭和十二年十月十五日再版發行
昭和十六年六月二十日三版發行

發行者　東京市豊島區池袋二丁目一〇〇八
續群書類從完成會代表者　太田藤四郎

印刷者　東京市淀橋區戸塚町一丁目一〇九
永島喜代次郎

印刷所　東京市淀橋區戸塚町一丁目一〇九
新英社印刷所

發行所　東京市豊島區池袋二丁目一〇〇八
續群書類從完成會
振替東京六二六〇七　電話大塚七一八